
魔法少女リリカルなのはStrikerS ~ 異端の焰達 ~

黒雨 蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 異端の焰達

【Nコード】

N3890V

【作者名】

黒雨 蓮

【あらすじ】

ルーク・フォン・ファブレはローレライを解放し、その命と引き換えに世界を救った。しかし、それでもまだ生きたいと強く願ったルークはローレライの手により完結していない世界へと送られる。歴史から抹消された剣、ソーディアン・ベルセリオス。そして歴史から追放された聖女のレンズと共に、ルークは生きる意味を再び探し始めた。

一周年記念小説として三年前に書いたものを修正して投稿しています。駄文ですが見てくださると光栄です。

剣と剣が音を立ててぶつかり合う。

「その程度か！」

亜麻色の髪の男性の咆哮と共に力は増し、朱髪の少年は吹き飛ばされた。

床を転がりながら彼は体制を立て直し、追撃に備える。

しかし、それが訪れることはなかった。

「業火よ！焔の檻にて焼き尽くせ！イグニートプリズン！」

男性の足元に燃えるような色の巨大な魔法陣が展開する。彼はそれを一瞥してから咄嗟に後退したが、遅すぎた。

彼がその範囲から脱出する前に譜術は完成し、凄まじい業炎がその体を包み込んだ。

そこで金色の風が、戦場に吹き込まれる。

金髪の青年は恐るべきスピードで男性へと接近していた。

「秋沙雨！」

刃が閃き、高速の突きが男性の体に傷をつくっていく。

その隙に朱髪の少年は男性に接近し、剣を振り上げていた。

「空破絶風撃！」

斬り下ろしが男性の体を正確に捉え、疾風を纏った突きがその体を貫いた。

すぐに少年は後ろへと視線を向けた。目が合った男性と同じ色の亜麻色の髪の少女はしっかりと頷いた。

すう、と息を吸う。次の瞬間には戦場に聖女のごとき歌声が響き渡った。

男性が、目を見開く。

「……………うおおおおおお！」

突然発せられた耳を劈くような叫びは朱髪の少年と金髪の青年を後退させるには十分すぎた。

その声は二人を後退させただけでなく少女の歌もかき消した。

歌が聞こえなくなったことを悟り、男性は唇の端を吊り上げた。

「譜歌か。確かにその旋律はローレライを目覚めさせる。だが、お前は譜歌に込められた本当の願いを知らない。私には……………効かぬぞ」

自信を持って発せられたその言葉に、亜麻色の髪の少女は静かに首を横に振った。

「いいえ……………兄さん、私にはわかるの。ユリアがこの譜歌に込めた思いがわかるような気がするの」

「それが事実なら……………」

男性は歯を剥いた。

「見事歌いきつてみせよ！」

亜麻色の髪の少女が再び歌をくちずさむ。朱髪の少年は彼女を護る

ように男性に突進した。

一撃、二撃と、渾身の一撃一撃がいずれも防がれる。

「遅い！………忘れたか。お前に剣を教えたのは、私だ！」

二人は同時に剣を叩き付けた。近すぎるその位置では仲間も手を出すことは出来なかった。

数回剣を打ち付けた後、男性がよろめいたのを朱髪の少年は見過ごさなかった。

「ローレライを解放しろ！」

打ち込まれた懇親の一撃に男性は対応できず、それを腕で受けるはめとなった。

普段なら腕を切り落とす様な強力な斬撃は、しかし、止められていた。

啞然とする朱髪の少年の隙を、男性が見逃すはずはなかった。

「ぬん！」

腕で少年は押しやられ、床に転がった。

男性は先程の斬撃を受け止めた腕を白日の下にさらすと、ゆっくりと微笑んだ。

「強く………なつたな………」

その腕は全体が赤黒く輝いており、溶岩のようでもあった。

「結局、この疎ましい力を解放しなくてはならないようだな！」

男性の目が見開き、それと同時に見につけていた法衣が吹き飛ぶ。腕は溶岩の如く変質し、肩からは黒い羽が生えていた。髪留めが切れて、少女と同じ亜麻色の髪が背中に広がった。

「これが……ローレライの力だ」

男性はそう呟いた。次の瞬間には彼は朱髪の少年の懐に入り込んでいた。

変質した腕が少年の首を掴む。まずい、と彼は思ったが、完全に手遅れだった。

「お前は……遅い！エンシエント、レクイエム！」

腕が輝き、青白い破壊の閃光が発せられる。朱髪の少年はそれを力で振りほどき、範囲から逃げた。

それでも、掠っただけで腕を抉られた。捨てるつもりで出した手のひらは真っ赤に火傷している。

「ヒール！」

金髪の少女の声が響き、傷が回復していくのが分かる。

それでも先程の一撃は凄まじかったらしく、痺れが消えることは無かった。

腕に走る痛みに顔をしかめていると、笑い声が耳に届いた。

「ふはははは！貴様らはもう終わりだ！フォニムキャンセラー！」

男性の体が眩く輝き、光の波が朱髪の少年達を飲み込む。

彼らは力を吸い取られたように床に膝をついた。力が……出ない。

「まずい……このままでは私達の生命力が吸い上げられてしまいます！」

眼鏡をかけた軍人の言葉に、亜麻色の髪の少女は叫ぶ。

「第二超振動よ！それしか手はないわ！」

彼女の言葉に朱髪の少年は頷くと、力を解放した。この瞬間、男性の生命力吸収の力は無力化される。

少女が再び歌を紡ぐ。それを横目に少年は突進した。そしてその途中で少女は歌を歌い終わらせた。

あとは朱髪の少年が全力で男性を叩くだけである。

「行くぞ！ヴァン！」

叫び、ヴァンに近づいた朱髪の少年は忌み嫌っていた力を解放する。全身から力が噴出し、それを両手に集め、球体をつくる。

眩い光の波の中で、ヴァンの生命力が消えていくのが分かる。

あとはこれを爆発させれば、全ては終わる。

しかしあと少しのところで彼の放出する力は弱まっていく。

（待ってくれ！あともう少しなんだ！）

必死で力を搾り出す少年の言葉をあざ笑うように、光は消えていく。もうためだ。そう思ったときに、手を暖かい何かが包んだ。

誰かが手を握ったわけではない。今近くには自分とヴァンしか居ないのだから。

しかし朱髪の少年は確かに見た。透明の細い手が自分の手を握っているのを。

後ろで見えない女性が、何故か自分に微笑んだような気がした。力

が、溢れ出す。

「これで……………終わりだああ！」

少年の手が輝き、球体は爆発した。ヴァンは力を失い、膝を床に着く。

「見事だ……………ルーク・フォン・ファブレよ」

その言葉を最期に、彼は床に倒れ、起き上がることは無かった。朱髪の少年……………ルーク・フォン・ファブレは倒れて息を引き取ったヴァンを悲しげに見下ろしていた。

消えていく。傷が、思い出が、そして自分が。

怖かったはずの死も、今となつては避けることは出来ない。

それに、覚悟は決めた。ヴァンを討ち、自分は世界の為の贄となることを、俺は受け入れていた。

それでも、消えなくなかった。覚悟していても、頭では理解していても、心はそれを拒絶していた。

死にたくない。なにより、まだティアに気持ちを伝えていない。

悲痛な面持ちで俺が俯いていると、頭にローレライの声が響いた。

「…………… ルークよ。お前は死なぬ」

ローレライの言葉に俺は顔を上げた。死なない？また、皆に会える？

「だが、元居た世界は無理だ」

ローレライの言葉に、俺の笑顔は凍った。

帰れ…………… ない？

「な、なんで!？」

「あの世界はアッシュが戻ったことで完結した」

容赦なく告げられた言葉に全身の血が冷たくなった。

もう、会えない。

ガイにもナタリアにもアニスにもジェイドにも。

そして、ティアにも。

「だが、別の世界なら可能だ」

ローレイの言葉に俺は再び顔を上げた。

別の……………世界？

このとき俺は本当に間抜けな顔をしていただろう。

ローレイが何を言ってるのか、俺にはよく分からなかった。

「まずはこれを受けとれ」

訳も分からず啞然としている俺の目の前に、それは現れた。

それは一振りの剣とネックレスだった。

「なんだ……………これ？」

俺はゆっくりと剣の柄を握った。

っ！！

剣に触れた瞬間に、本能が訴えた。これは普通の剣ではないと。

その剣は刃の部分は炎の揺らめきのようなようであった。刃は黒く、柄は怪物のように禍々しかった。

しかし、漆黒の剣はその風貌とは対照的に邪な感じはまったくしなかった。

そして、驚いたことがもう一つ。

この剣には重さがない。

まるで自分の手が伸びた感覚だった。

俺は視界の隅にネックレスを捉え、空いている手を伸ばした。

ネックレスと言っても、それは半球体状のガラスの飾りに紐を着けただけのように思えた。

「それらは、歴史から抹消された物質」

ローレライの声が響く。どういうことだ？

そのような俺の疑問が聞こえたのか、ローレライはゆっくりと説明を始めた。

「その剣はソーディアン最後の一振り、ソーディアン・ベルセリオス。正規の歴史では敵の手に落ち、歴史から抹消された剣だ」

再び手に持った漆黒の剣を見た。やはり、普通の剣ではなさそうだ。次に俺の目がネックレスに向かったときに、ローレライは再び口を開いた。

「それはレンズという。とある歴史で聖女と呼ばれていた少女が身に付けていたものだ。少女は人間となり、レンズは歴史から追放された」

俺はその言葉に僅かに笑った。歴史から抹消された剣と、歴史から追放された装飾品。

どちらも俺にぴったりじゃないか。

「世界の時空や空間はそのレンズで移動出来る。私の力をレンズに込めた。世界を移動できるのは一回だけだ。だが忘れるな…界……

……ルが………」

ローレライの声に少しずつノイズがかかっていく。

「ローレライ!?!」

「どつ……間の……だ」

次第に遠くなっていくローレイの声。俺はどうすればいいか分からなかった。

「生きるルーク！！生きて生きて生き延びろ！！」

一際大きなローレイの声が響いた。最後の力を振り絞ったのか、それを最後にローレイは消えた。

しばらくしてから俺は剣を鞘に入れ、レンズを身につける。そして、ゆっくりと思い出す。

旅の思い出を。もう会えない仲間を。それでも、俺は進むしか選択肢はないんだ。

レンズを手に、俺は目を瞑る。

これから行く世界のことを、俺は何一つ知らないだろう。それでも俺は行くしかない。

それが二度目の生を受け入れた俺の覚悟だった。

「任せたぞ」

指でさすったレンズは答えるかのように淡く光り輝き、俺はその空間から、世界から消えた。

ここは、どこだろう？

俺は気づくと壁に寄りかかっていた。別に体が痛むわけではない。掌を見てみても、乖離が進行している様子はない。どうやらローレライは俺の乖離の進行を無くしてくれたようだ。

とはいえ、体が重い。まるで海の中に居るような………そんな感覚だ。

もしもこんな状況で魔物に襲われればひとたまりもない。

そんなことを思いながら俺は小さく笑った。自分はどこまで卑屈なのだろう、そう思った。

機械音が、響いた。視界の隅で壁だと思っていたものが横にスライドしたのが見えた。

その壁の向こうには人が立っているのだろう。

俯いているのでその人の顔は見えず、脚しか見えない。

靴を見る限り女性のようにも思える。その女性と思しき人は何も言わない。

俺が目の前に現れたことで驚いているようだ。

「……………あの、大丈夫ですか？」

鈴のような声が、俺の耳に響いた。ゆっくりと頭を上げる。俺は言葉を失った。

視界に入ってきたのは、とても綺麗な人だった。細く、すらっと伸びた足はまるで陶芸のようであった。

軍の制服かなにかに包まれた体は、彼女が女性としてとても魅力的であることを物語っている。

俺のことを覗き込むように見下ろしていたその顔はとても白く、百合の花のようでもあった。

そこから伸びた茶色い美しい髪は白いリボンで束ねられ、それが彼女が活発で明るい少女を表しているように思えた。

年齢は俺と同じぐらいかもしれない。しかし可憐な容姿に対して、目には強い意志が垣間見えた。

今まで見たあらゆる女性を束にしても敵わないような、そんな圧倒的な美。

それを所持し、余すことなく体现する彼女に、俺は見下ろされていた。

「あ、あの…… 大丈夫ですか？どこか痛みますか？」

心配そうに歪められたその顔に俺は正気に戻った。見とれていたなんてものじゃない。

目の前の少女は、俺を放心させるには十分に魅力的すぎた。

「だ、大丈夫です……」

返事をしてから様々な懸念が俺の頭を過ぎった。ちゃんと言えただろうか？

声は上ずったりしていなかっただろうか？目の前に居る女神のような彼女を前にして、俺は完全に混乱していた。

彼女を直視できない。それでもそのまま目を背けていては何も進展しないし、なにより彼女に失礼だ。

そう思った俺は勇気を振り絞って言葉を発した。

「あ、あの……ここはどこですか？」

俺の言葉に目の前の少女は首を傾げた。

その仕草一つ一つが俺を、しいては世の中の男を魅了することに彼女は気づいているのだろうか？

「ここは時空管理局、機動六課の隊舎ですよ」

につこりと微笑んだ彼女に俺の顔の温度が上がっていくのが分かる。動揺しながらも、俺は彼女が口にした聞き覚えのない単語をしつかりと捉えていた。

しかし、捉えることと理解することは別物である。

「え？じ、時空？」

「時空管理局、機動六課。主にロストログアを取り扱う機関のことをそう言っんです。えっと……名前を聞いてもいいかな？」

「あ、る、ルーク・フォン・ファブレ……です」

俺は照れながら自分の名前を口にした。

一瞬この名前を口にしていいか迷ったが、アッシュは俺をルークだと認めてくれた。

そう名乗らなければ、あいつは怒るだろう。

「ルーク君ね。多分君は次元漂流者じゃないかと思うんだ。危害を加えるような人じゃないと思うけど、一応調べさせてもらってもいいかな？」

彼女は俺の正面まで近づいてしゃがみこんだ。彼女との距離が異様に近くなる。

俺はそのことにどぎまぎしながらも彼女の視線が俺の腰元に向いているのを感じた。

よく考えてみれば、俺の今の立場は会社に剣を持って突然入ってきたようなものだ。

いくら俺に危害を加える意志がなくても、相手からしたら警戒するのは当然のことだろう。

「あ、ああ、分かりました。すいません。なんか迷惑掛けちゃったみたいで」

慌てて俺が謝ると目の前の少女はクスクスと笑った。

その笑い方が更に俺の心を揺さぶり、しばらく俺は顔を上げたくなかった。

「そんなにかしこまらなくてもいいよ。初めての場所に来て不安なのは分かるから。あ、私の名前はなのは。高町なのはだよ。よろしくルーク君」

俺の視界の隅に白魚のような手が現れた。俺はゆつくりと顔を上げる。

このときの俺の顔は赤かったに違いない。俺はゆつくりとその手を握った。

「よ、よろしくおねがいします。な、なのはさん」

俺はしっかりと彼女に笑いかけた。しかし次の瞬間にはなのはさんは険しい表情になった。

「え？あ、あの……………」

「ルーク君」

俺の戸惑った声はなのはさんの少し大きい声にかき消された。

意志の強い目がしっかりと俺を見据えていた。別にやましいことが

あるわけではない。

しかし、俺はそれに耐えられなくなって視線を少しずらした。

「……………間違ってたらごめんね。どうしてそんなに悲しい顔で笑うの？」

彼女の言葉に俺は全身の血が凍るような錯覚に陥った。

ゆっくりと彼女に視線を戻すと、なのはさんは依然として俺を見つめていた。

「別に……………無理に笑わなくてもいいんだよ？確かにルーク君にとってここは知らない場所で、だから不安かもしれない。でもここにはルーク君を傷つける人なんて居ない。それに私がそんなこと絶対にさせない」

なのはさんの言葉に俺は肩を揺らした。彼女は俺に微笑んでいた。

「だから、無理に笑わなくていいよ。ルーク君が笑いたいときに笑えばいい。泣きたいときに泣けばいい。ルーク君の好きにしていいいんだよ？」

なのはさんの言葉に俺は目頭が熱くなった。

その言葉の一言一言に彼女の優しさが詰まっているように思えた。

「……………ありがとう」

俺は泣きそうになるのを堪えて笑顔でそう告げた。それは自分では分からなかったけど、なのはさんからすれば及第点だったらしい。彼女は先程とは違い、満足そうに笑うと、どういたしましてと呟いた。

その微笑に俺が心を奪われたのは言うまでもない。

「ルーク君は剣士なの？」

六課の部隊長であるはやてという人の下に行く途中で、俺の腰に刺さっている剣を見ながらなのはさんはそう聞いてきた。

「あ、はい。そうです」

俺の言葉になのはさんは何かをうなりながら考え事を始めた。かと思うと不意に俺の剣を指差した。

「それ、待機状態に出来ないかな？」

「待機状態？」

聞きなれない単語にまたしても俺は聞き返してしまう。何かに気づ

いたようになのはさんは苦笑いした。

「あ、そうだよ。ルーク君この世界の人じゃないから分らないよね。えっとね、小さくしたり、隠したりできないかな？ 剣の形じやなければ平気なんだけど……………」

その言葉に歩きながら俺は鞘ごと剣を腰から外した。

この鞘の中には炎のようにゆらめく刀身を持つ異形の剣が収められている。

その形といい感触といい、この剣が普通ではないことは確かだが、俺はこの剣のことを何も知らない。

知っているのはソーディアン・ベルセリオスという名前だけだ。そのため俺はそのまま剣を腰に戻し、困ったように笑うしかなかった。

「ごめんなさい。無理みたいです」

「だよ……………」

なのはさんはがっかりしたように肩を落とした。

「あの……………剣を持つてるのってやっぱり危ないですかね？」

俺の言葉になのはさんは一瞬きよとした顔をした。しかし次の瞬間にはクスクスと笑い始めた。

「違うよ。うちの部隊に物凄く戦闘が好きな人が居てね。その人が剣士だから同じ剣士のルーク君は多分模擬戦……………あ、なんていうか、武術の試合みたいな感じのやつなんだけど、とにかくそれを申し込まれると思うの。だからなんとかして隠せないかなって」

「そ、そんなに戦闘が好きな方なんですか？」

「うん。私達の部隊の前衛では多分最強じゃないかな」

「さ、最強で戦闘大好き……………」

俺の頭の中で様々な考えがめぐる。どんな人だろうか。壮年のおじさんで顔に傷とかがありそうだ。

俺の渴きをいやせえええええ！！とか言いながら突進してきそうだ。そう思うとぞつとした。

「あ、あの……………怖いおじさんなんですか？」

「え？」

俺の言葉になのはさんは立ち止まって俺を見つめた。

「え？いや、その剣士さんは怖いおじさんなのかな……………」と

俺の言葉になのはさんは大笑いし始めた。何が起こっているのか分からず、俺は戸惑った。

しばらくしてからお腹を押さえたままなのはさんは涙目で俺を見上げてきた。

息が……………詰まる。

「もうルーク君、笑わせないですよ。私がさっき話した剣士はシグナムさんって言って、女の人だよ」

「お、女の人？」

それはそれで恐ろしい。どんな女の人なのだろう。高笑いしながら突進してくるのだから？

そんなことを考えていると俺の表情から何を考えているのか読み取ったのか、なのはさんは苦笑いした。

「多分勘違いしているけど、別に叫び声を上げながら敵に突っ込んでくような人じゃないからね」

苦笑い半分、大笑い半分でなのはさんはそう言つと涙を指で拭いた。

「あの、なのはさんも戦うんですか？」

「うん。私は剣じゃなくて魔法、それも砲撃魔法なんだけどね。あ、それと私のことはなのはでいいよ。皆そう呼ぶから」

「はあ……………え！？」

なのはさんの言葉を理解して俺は素つ頓狂な声を上げた。

「え、な、名前ですか？」

「うん。私もルーク君って呼んでるし、そう呼んでくれると嬉しいな」

穢れのない純粋な笑みが俺の心を締め付ける。

「あ……………う……………な、なのは……………」

「うんうん」

「……………さん」

「……………ルーク君？」

俺が後から付け足したことではさんの笑顔は苦笑いに変わった。

「うーん。あんまり女の子を呼びなれていないのかな？」

首を傾げるなのはさんを尻目にそれはないと俺は思った。

前の世界では仲間の半分は女性だったし。普通に名前で呼べたはずだ。

ただ……………仲間どこるか出会ったどの女性よりもなのはさんは美しいわけで……………

「名前で呼べるように頑張ります……………」

うな垂れながら呟いた俺になのはさんは無理しなくてもいいんだけどねと苦笑いした。

「つと、着いたよ。ここが部隊長のはやてちゃんの部屋だね」

「ここが……………」

部隊長室と書かれたプレートを掲げた部屋の扉を見つめて俺は呟いた。

どんな人なんだろう？部隊の長というぐらいだからかなり冷静な威厳の有る人ではないだろうか。

少なくとも自分が前の世界で知っている軍の上官というのは仲間の一人も含めて皆威厳のある人間だった。

これから出会うはやてという人物に様々な想像を働かせながら、俺は部屋の中へと入った。

その部屋の主は俺が部屋に入ったときには窓から外を見下ろしていた。

後ろ姿だけでは顔は分らないが、艶やかな、なのはよりも濃い短い茶色の髪がさらさらと揺れていた。

「はやてちゃん。ルーク君連れてきたよ」

「お疲れさん」

聞きなれない言葉使いでそう告げると、彼女は振り向いた。

途端に、その場の時間が彼女を除いて止まった気がした。

ゆっくりと振り向いた彼女は、俺を一目見ると微笑んだ。華が、咲いたように思えた。

「はじめましてやなルーク君。私はここ、機動六課の部隊長をやつとる八神はやてや。よろしくな」

人懐っこい笑みを浮かべた彼女は、小動物のようだった。

なのはを始めてみたとき、俺は彼女に凛々しさを感じた。透き通るような美に、目を奪われた。

しかし目の前の彼女、八神はやてさんはなのはとは違った意味の美女だった。

なのはを凛々しいと表現するなら、はやてさんは可憐と表現すべきだろうか。

短く切りそろえた濃い茶色の髪は、仕事ができるキャリアウーマンを想像させる。

しかし表情はあどけなく、その目には優しさがこもっている。

なのはほど圧倒的ではないが、女性から見れば十分魅力的なシルエツトを兼ね備えた彼女は、俺には眩しすぎた。

なのはとここまで違うのに、同じように鼓動が速くなっていくのを感じる。

「えっと……… ルーク君は次元漂流者なんやな？前居た世界がどんな所か覚えとる？」

はやてさんの言葉に俺は我を取り戻す。

「えっと……… なんて言ったらいいか………」

困る俺の手を、誰かが握り締めた。ふと横を見ると、なのはが笑いかけていた。

「大丈夫だよ。はやてちゃんはルーク君の敵じゃない。ひどいことはしないよ？」

なのはの言葉とぬくもりに後押しされて、俺は少し話してみようと思った。

「……… 俺はこことは違う世界から来ました。その世界は二つの国、キムラスカとマルクトが治める世界です。俺は、その世界から来ました」

俺の言葉にはやてさんは顎に指を当てて何かを考えるそぶりをした。

「キムラスカ……… マルクト……… うーん、聞いたことない国名やな。管理世界じゃないのかもしれない………」

はやてさんの言葉でここ以外にもた沢山の世界があることを俺は悟った。

だが、その世界の中に俺の、ティア達の世界はないだろう。ローレライは世界がアッシュが戻ったことで完結したと言った。だから俺が戻れないとも。

なら世界は俺が絶対に行けないような場所にあるのだろう。それは距離的なものではなく、恐らくは時空的な遠さだ。

「……………多分、俺の世界はその管理世界にはないと思います。多分、それ以外にも」

俺の言葉にはやてさんは手を下ろした。

「……………君がそう言うなら……………そうなのかもしれんね」

はやてさんは微笑んだ。深いことは何も聞いてこない。俺が話すのを待っていてくれる。

「でも、突然変な世界に来てびっくりしたやろ？どうや？ルーク君さえよければうちで引き取るで？」

その言葉になのは俺の前に出た。まるで俺を護るように。

「どっとうつもり、はやてちゃん」

彼女ははやてさんを睨みつけている。対してはやてさんはその視線を笑顔で受け流している。

険悪な雰囲気には俺は居心地が悪くなった。

「ルーク君を囑託魔導士にするってこと？」

「そうは言っとらんよ。ただ保護するだけや。まあ戦力になるなら欲しいっちゅうのは本心やけど」

「ルーク君はこっちに来たばかりで戸惑ってるんだよ？そんな子に戦闘をさせるの？」

「なにも今すぐやってくれってわけやない」

あまりにも険悪な雰囲気、俺は耐え切れなくなった。

「あ、あの、はやてさん」

はやてさんはなのはから視線を俺に向ける。

「どした？」

屈託のない、純粋な笑み。俺は彼女を信じていいんだろうか？

「あの、囑託魔導士って戦ったりするんですよね？俺、戦うことは出来るし……」

「ルーク君……！」

なのはの大きな声に俺の言葉はかき消された。なのはが泣きそうな顔で俺を見つめていた。

ガラスのように綺麗な瞳が、俺を見つめている。

「本当に……本当にそれでいいの？怪我だっけするかもしれない

んだよ？」

なのは目が心配そうに揺らいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・なのはだってやってるんですよね？」

「それは・・・・・・・・・・そうだけど・・・・・・・・・・」

腰につけた剣の鞘に触れる。ローレライはこの世界に送るかは告げなかった。

だが、ローレライ自身は知っていたはずだ。ここがどんな世界か。そして、俺にこの剣を与えた。戦うための、武器を。

だったら俺はこの世界で戦う必要があるということだ。

「はやてさん。いいですよ。俺、囑託魔導士になります」

俺の言葉にはやてさんでさえも驚いた。

「え、ちょ、ちょっと待ってな。私が言ったのはあくまで保護であって、囑託魔導士はまだ……………」

「それでも、いつかは話を持ちかけられていました。だったら今やっても同じことです。俺にはそのための力がある。それにはやてさん困ってるんですよね？ だったら協力しますよ」

俺の言葉にはやてさんはすまなそうに視線を伏せ、なのはさんは悔しそうに唇をかみ締めた。

「う、ごめんな……………そ、そんなつもりはなかったんや。本当やで？」

「大丈夫ですよ。俺はなのはの友達であるはやてさんを信じていますから」

「ルーク君……………」

俺の言葉にはやてはぼーっとしたような顔をして俺の名前を呼んだ。少し頬が赤い気がする。体調でも悪いのだろうか？
しばらくしてからはやてさんははっとして首を横に振った。

「えつとな、囑託魔導士になるには試験が必要なんや。筆記試験と実技試験があるんやけど、筆記試験とか出来る？」

はやてさんの言葉に俺は考えをめぐらす。

ここは前に居た世界とは違う。言葉は聞き取れるが、文字まで同じとは考えにくい。

なにより前の世界でもあまり常識を知らなかった俺が試験を通過できるとは思えない。

「その……………あんまり自信ないです……………」

頭をかきながら俯きつつ呟いた俺に、はやてさんは苦笑いをした。

「まあそうやよね。というわけで裏から手は回しとくから、ルーク君は健康診断と、実技試験をしてくれればええよ」

はやてさんの言葉に俺は耳を疑った。
裏から手を……………回す？

何故だか分からないが今はやてさんのセリフに前の仲間の一人が頭を過ぎった。

当のはやてさんはなんでもないようにここにこしている。しかし、その笑顔は確実に何かを企んでいる笑顔だ。

「実技は、模擬戦でええな。剣士みたいやからシグナムに……………」

「はやてちゃん!!」

はやてさんの言葉を遮ったのはなのはだった。先程と同じくはやてさんを睨みつけている。

「え?ど、どないしたん?」

「どうしたじゃないよ!!何もシグナムさんにしなくても!!」

先程とは違い、はやてさんはなのはの剣幕にたじろいでいる。

「で、でもなあ。同じ剣士やし……………」

「でも……………」

尚も食い下がないのは。

心配してくれるのは嬉しいが、実を言うとシグナムという人物に俺は興味があった。

ここ、六課で最強の前衛。そして俺と同じ剣士。全身の血が騒ぐのを感じる。

戦ってみたい。そんなわけで俺はおずおずと手を上げた。

「あ、あの、俺シグナムさんと戦ってみたいんですけど……………ダメ

ですか？」

俺の言葉になのはは目を見開いた。はやては俺の言葉にほっと胸を撫で下ろした。

「俺、戦ってみたいです。自分の力がどこまで通じるのか、試してみたいんです!!」

「なら決定やな」

はやてさんが微笑みながらなのはを見る。なのはは頭を押さえた。

「ルーク君のバカ……………」

「ほんなら取り敢えず健康診断と行こか。連絡は入れとくから、なのはちゃんに連れてってもらってな」

はやての言葉になのはは頷くと俺の手を引いて部屋を出た。

「ルーク君、なんで模擬戦を受けることにしたの？」

歩きながら、振り向くことなくなのは聞いてきた。

俺は迷った。本当のことを、ローレライが俺にこの剣を渡した意味の憶測を語ろうかと思った。

だがそれはなのは心配させる要因にしかない。

心配してくれるのは嬉しいが、俺はこの世界でなくてはならないことがあるように思える。

そのために立ち止まるわけにはいかない。それを見つけないといけないから。

「さっき話したとおりですよ。俺の力がどこまで通用するのか試してみたいんです」

俺の言葉になのは立ち止まり、振り返った。

またあの目だ。俺の苦手な、あの全てを見通すかのような目が俺をさしている。

「ルーク君、普段はそんな口調じゃないでしょ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

なのはの言葉に俺は咄嗟に聞き返してしまった。

彼女は拗ねたように唇を尖らせながら再び言葉を口にする。

「だから、その敬語。普段から使い慣れてるものじゃないよね？普

通に話していいんだよ?」

なのはの言葉を理解し、俺は苦笑いした。
どうやら彼女は全てお見通しらしい。

「ごめん。なかなか直すタイミングがわからなくてさ」

普段の口調へと戻った俺の言葉で、なのはは華のような笑顔を浮かべた。

「うん。それでよし。じゃあ行こうか」

「ああ」

なのはの言葉に俺はしっかりと頷き、再び歩き出した。心が軽くなった気がした。

はやてside

なのはが出て行った後に、はやては再び窓から外を見ていた。
見下ろせば六課の施設が見える。

なのは達は今頃ルークの能力を測定しているはずだ。

そしてそれはおそらく高い数値を示すとはやては予感していた。
通信が入る。送り主の欄には、高町なのはの文字

『ルーク君の魔導士ランクは推定E、レアスキル等はないみたい。

このままルーク君に六課の施設を案内して、それからフォワード陣
のところに戻るね』

書かれているのはたった二行。そこにははやての予想と異なった結
果が示されていた。

ランクEということは最低ランクである。

とはいえルークは異世界の人間なので、こちらの世界の基準が当て
はまるとは限らない。

なにより、はやてはルークが兵だと感じていた。

そして、はやてはその二行で様々なことを感じ取ってしまった。

「保護者みたいやなあ」

画面を見ながら、はやては呟いた。たった二行の中には、なのはの
ルークを心配する気持ちが込められている。

それだけではない。先程のなのははまるで子供を護る保護者のよう
だった。

「一番の強敵やな。なのはちゃんは」

はやての弦きは誰にも聞かれること無く、部屋の間で消えていった。

ルークside

健康診断をして、魔力測定を行った後、俺たちは六課を歩いていた。健康面での問題はまったくなかったが、魔力の値はEランクと最低レベルだったらしい。

それを聞いたときに、なのは俺のことを慰めてくれた。

その後、なのはの提案で、俺は彼女に六課を案内してもらうことになった。

「ここが食堂だね。普段お昼はここで食べてるよ。フォワード陣も一緒にね」

「フォワード陣？」

「あ、そういえばルーク君にはまだ話してなかったね。六課の期待の新人、彼らをフォワードって言うの。全部で四人居て、だからフォワード陣。多分そのうち会えると思うよ？」

「へえー」

まだ見ぬ四人の新人に期待を募らせながら俺達は奥へと進んでいく。

「ルーク君、シグナムさんと模擬戦するときは気をつけてね。シグナムさん結構本気になっちゃうことあるから……」

なのはは余程明日の模擬戦が心配なのか、何回もこういったことを俺に言ってくる。

そのたびに大丈夫だと答えるのだが、それでも納得できないらしい。

「大丈夫だよ。怪我には気をつけるし、そんなに危ないことはしないよ」

「うん・・・・・・・・・・」

それでもなのは心配そうな表情をうかべた。

彼女はそのままモニターを開き、何かを打つと、歩き始めた。しばらく歩いて、俺たちは分かれ道にたどり着いた。

「施設見学は一旦終わり。私はこれからフォワード達の訓練を見なきゃいけないんだよね・・・・ごめんね？」

すまなそうに謝るなのはに俺は首を横に振った。

「いや、もう十分だよ」

なのはは微笑むと紙を取り出して何かを書き始めた。

「はい。ここに記したのがルーク君の部屋。間違えないと思うけどもし分からなかったら適当な人に、高町なのはの部屋の隣の部屋なんですけどって言えば連れてってくれるよ」

「ありがとう・・・・・・・・・・え？」

紙を受け取りながら俺は聞き返した。

しかしなのはは急いでいるのかそのまま手を振って走っていった。まった。

「・・・・・・・・・・なのは隣の部屋？」

俺の言葉は虚しく響き渡るだけだった。

「三階か・・・・・・・・・・」

なのはから貰った紙を貰いながら俺は歩いていった。とりあえず三階に行かなくてはならないらしい。

階段を探しながら俺は歩き続ける。

曲がり角を曲がったところで俺は勢いよく走ってきた誰かと衝突した。

「うわっ！」

「きゃっ！」

二人とも倒れることはなかったが、衝撃で女性の持っていた書類が床に散らばった。

「す、すいません！」

「いえ、こちらこそごめんなさい！」

二人して急いで書類を集める。半分ほど書類を集めて俺は彼女に書類を渡そうと顔を上げた。

差し出そうとした書類は、しかし、十分な距離まで届かずに停止した。

俺は、何を見ている？

不意に俺は自分に問いかけた。

俺は目の前で必死に書類を集めている彼女から目を離せなかった。金の長く、美しい髪が書類を拾うたびに揺れる。

女神。まさしく彼女はそうだった。

いや、むしろ女神という言葉が彼女のために作られたようなものだった。

その綺麗な髪も、整った顔立ちも、隠し切れない豊満なラインも、全てが完璧だった。

そして何よりも優しさに満ちたその赤い目が、俺には魅力的に映った。

「手伝っていたたぎ、ありがとうございます」

彼女は頭を下げてそのまま走り出してしまった。

「……………ここに勤務している女の人は何で皆綺麗な人ばかりなんだろう……………」

俺はそう呟くと、再び部屋を目指して歩き始めた。

部屋に向かっていている途中で、人気のない場所に出た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ここなら、いいか」

壁に背中を預けると、周りに誰もいないことを確認する。
俺はその後、ソーディアン・ベルセリオスを抜き放った。
異形の刀身が俺の前に晒される。

「・・・・・・・・・・本当になんなんだ？この剣・・・・・・・・」

その形もさることながら、何よりも俺が不思議に思ったのは、重みが無いと言う事だった。

まるで自分の腕が伸びたような感覚。

それだけでなく様々な要因がこの剣が普通ではないことを物語っていた。

『知りたい？』

突然聞こえた声に俺は飛び上がりそうになった。慌てて周りを見回す。しかし、人影は無い。

『どこ見てんのよ。ここよ、ここ』

キョロキョロあたりを見回していた俺に再び誰かが話しかけてきた。そして今度ははっきりと分かった。その声の下から、しかも自分の手から聞こえていることに。

恐る恐る剣を持ち上げる。よく見るとさっきとは違いがあった。

閉じていた目のようなものが開き、綺麗な結晶が俺を覗いていた。

『ようやく気づいたみたいね』

はつきりとその剣から聞こえた声に俺はぱっと剣から遠ざかった。剣を手放さなかっただけでも褒めてやりたいくらいだ。

『なに驚いてんのよ。喋る剣が珍しい？いや、珍しいか』

一人で話し始めた剣を再びまじまじと見つめる。

『ちょっと、見すぎよ』

「…………お前、このガラスか？」

『それはガラスじゃなくてクリスタルコアよ。ガラスよりも遥かに硬いわよ？紹介が遅れたわね。私はソーディアン・ベルセリオスの管理人格、ハロルド・ベルセリオスよ』

次々と出てくる知らない言葉に俺の頭はショート寸前だった。

『あんたが今持ってるのがソーディアン・ベルセリオスであることは知ってるわよね？ソーディアンには規制人格ってのがあって。このソーディアンのは規制人格は私なのよ』

「規制……人格？」

『そう。つまりこの剣は生きていて、私という人格が宿っているわけ』

「それが、ハロルドなのか？」

見えるわけではないが、なぜかこの剣の中に居る彼女が微笑んだ気がした。

『そうよ。私の名前はハロルド。よろしくね。ルーク』

「あ、ああ。よろしく」

しかしどうも剣と会話するのは変な感覚だと思う。

『さて、まずはこの剣について説明しようかしら。この剣はソーディアン六本の内の一つ、ソーディアン・ベルセリオスよ。私の名前がベルセリオスだからそういう名前ね。で、ここからが本題なんだけど、この剣は光と闇の晶術が放てるわ』

「シヨウジュツ？」

聞いた事のない単語に俺は眉をひそめた。

『そう。結晶の晶に、術式の術で晶術。魔法みたなものよ。私は単体でそれを撃つことが出来るわ』

「お前凄いな。重みもないし……」

『そりゃあそうよ。作ったのは天才の私だもの』

ハロルドの言葉に俺は目を見開いた。

「お前が作ったのか!？」

『そうよ。私、前の世界では天才って言われてたからね。大体のこととは分かるわよ。知らない知識でなければね』

「なるほど……」

俺はローレライの意図を理解した。戦闘能力だけじゃ抜けた俺に天才であるハロルドを渡したのだ。

『さて、とりあえず剣については説明したわね。他に聞きたいことは?』

俺は首に掛かっていたレンズを持ち上げる。

「これは?」

『それはリアラ……前の世界で聖女と呼ばれていた娘のものよ。彼女はそれをレンズと呼んでいたわね。そのレンズは本来様々な奇跡が起こせるんだけど、ここではそれは無理ね。でもルークの体力を用いて空間ぐらいは移動できるはずよ。ちょっと無理すれば時間跳躍も出来そうね。だけどお勧めはしないわよ』

「つまり、瞬間移動みたいなことが出来るってことか?」

『そうよ』

ハロルドの言葉に俺は内心歓喜した。ハロルドとこのレンズがあれば俺は最強に近い。

だがその心を見抜いたかのように、ハロルドはふっと笑った。

『自分が最強だと思ってる所悪いけれどレンズの力はそう何回も使えないし、魔法もいくらでも撃てるわけじゃないわ。それに私やレンズが凄くてもその力を発揮するのはルークの役目よ。他にもない人であるルークのね』

ハロルドの言葉に俺の笑顔は凍りつく。そうだ。俺は何を考えているんだ。

確かにハロルドやレンズは凄い。だが、俺はどうだ？俺は剣で斬られればすぐに死ぬんだぞ？

俺は俺自身を叱責させた。

「ハロルド。力を貸してくれ。この先、何が起こるか分からない」

『そうね。ローレイがあたしやレンズをルークにあげたってことはこの世界で戦いが必要ってことね。でも悪いけどただでは協力出来ないわ』

「……………俺に出来ることなら何でもする」

俺の言葉にハロルドは息を呑んだ。

『……………よく分かんないけど、代償は後で貰うとするわ。それまでは協力するわよ』

「ありがとう」

俺はハロルドを鞘に入れて、再び歩き出した。

「確か・・・・・・・・この辺なんだけどな・・・・・・・・」

紙を片手に俺は三階を徘徊していた。地図に書かれたとおりなら、この辺のはずだ。

「あ、あそこだな・・・・・・・・あれ？」

俺は部屋を見つけると同時に声をあげた。視界の先に、見知った顔を見つけたからだ。

「あ・・・・・・・・」

向こうも俺に気づいて声をあげる。

俺を確認すると彼女は微笑んだ。

「また会いましたね。どうかしたのですか？」

「あ……いや、俺の部屋そこなんで……」

指で俺の部屋を指差す。俺の指を辿って扉を見ると、彼女は首を傾げた。

「あれ？……あそこは確か……」

首を傾げて何かを考え始めた。その仕草の一つ一つに、俺はどぎまぎした。

「あ、俺、今日ここに来たルークって言います。ルーク・フォン・ファブレです」

「……ルークさん。誰にこの部屋に来るように言われました？」

「え？なのは……じゃなかった、なのはさんですけど」

俺の言葉に彼女は何かを納得したように頷いた。

「なのはの紹介か……」

「あ……なのはとお知り合いなんですか？」

「私の名前はフェイト・テストロツサ・ハラオウン。貴方の隣の部屋に住んでいるなのはのルームメイトで、親友だよ」

微笑んでそう言ったフェイトさんに俺の胸は高鳴るが、さらに気になる単語が会話に紛れ込んでいたことに気づく。

「え？……ルームメイトって……フェイトさんもその部屋に？……」

「うん」

困った。隣の部屋がなのはただだけでも緊張するのにフェイトさんまでとは……頭を抱える俺を不思議に思いながらフェイトさんは微笑んだ。

「立ち話もなんだし、私の部屋に入らない？お茶くらいなら出せるよ？」

微笑みながら言ったフェイトさんの言葉を、俺が断れるはずはなかった。

部屋に入ってから俺は落ち着きがなかった。フェイトさんのような人と部屋で二人きりなのだ。緊張しないわけではない。

しかしフェイトさんはまったくきにしていないようで、お茶を俺の前に置くと、前の席に座って話し始めた。

「まずは自己紹介だね。さっきも言ったけど私はフェイト・テスト・ロッサ・ハラウン。時空管理局の執務官だよ」

「俺はルークって言います。ルーク・フォン・ファブレです。俺は次元漂流者？らしくて囑託魔導士になるための試験を受けてました」

俺の言葉にフェイトさんは眉をひそめた。

「囑託魔導士？ルーク君は今日管理局に保護されたんだよね？」

「はい」

「なのに囑託魔導士？……………ちよつとはやてに文句言ってくるね」

「ま、待ってください！！」

怒りの表情で席を立ち上がったフェイトさんを急いで止める。

「俺が囑託魔導士になることは俺自身が決めたんです！！俺、少し腕に覚えがあつて……………それで……………」

その言葉にフェイトさんは俺の腰に刺さっているハオルドを一瞥した。

「・・・・・・・・ルーク君って剣士なの？」

再び席に座って、フェイトさんはゆつくりと話し始めた。
どうやらはやてさんの命は助かったようだ。

「はい。健康診断は終わって、あとは文字が読めないんで実技試験だけらしいです。シグナムさんと模擬戦するとか」

「やつぱり・・・・・・・・」

がつくりと肩を落としてフェイトさんはうなだれた。

「剣士って聞いたときからそんな気はしてたんだよね・・・・・・・・」
「」

「あの・・・・・・・・そんなにシグナムさんと戦うのは嫌なことなんですか？」

「初回はいいんだけど、一回戦うと何回も模擬戦を申し込まれるんだよね」

苦笑いしながら呟くフェイトさんに納得した。
しかし、それなら俺も剣を振るうのは好きだし、何とかなりそうだった。

「でも不安じゃなかった？急に何も知らないところにきて」

「確かに不安だったです。でも、なのはが助けてくれました。はやてさんも優しい人だったし、フェイトさんだって優しいです。だから大丈夫ですよ」

フェイトさんの問いに俺は満面の笑みで答えた。フェイトさんは真つ赤になり、顔を背けた。

あれ？俺失礼なこと言ったかな？

そう思っていると急に扉が開いた。

「ふう、疲れた」

入ってきたのはなのはだった。なのはは俺の姿を確認するなり、一瞬驚いたがすぐに微笑んだ。

「いつの間にかフェイトちゃんとお友達になってたんだね」

「さっきそこで会ってたな」

「ふーん。フェイトちゃんも凄くいい子だから、色々教えてもらうつといいよ。私はシャワー浴びてくるね」

そう告げてなのはは一人シャワー室へと入って行ってしまった。

「じゃあ俺はそろそろ戻りますね。そろそろ遅くなってきましたし」

時計を見ると、時間は6時を指していた。まだ早いが、正直言つて俺は眠かった。

「あ、うん。じゃあね」

フエイトさんはぎこちなく呟いて俺に手を振った。
俺はそのことを不思議に思ったが気にせずに部屋を出た。

部屋に戻ってから、俺はベッドに横になってハロルドを鞘から取り出していた。

「明日は大事な一戦だな。頼むぜ、ハロルド」

『任せときなさい。あんたはそのため寝なさい。いいわね？』

「ああ」

俺は微笑んでハロルドを鞘に入れると彼女を壁に立てかけて眠りについた。

明日を楽しみにしながら。

フエイトside

なのは、フエイトの部屋

フエイトはルークの出て行った扉をただ見つめていた。
彼を思い出すと自分の頬が熱くなっていくことがわかる。

「優しそうな……笑顔だったな……」

先ほどの彼の笑顔を見て、自分はその笑顔を直視できなかった。
これが、一目ぼれというやつだろうか。

だが、フエイトは次に視線を親友が入っていたシャワールームに
向けた。

彼女はルークに親しげに話しかけ、ルークは彼女に笑顔で答えてい
た。

自分に使った口調ではない口調で。
そして彼の言い方から、彼の普段使っている口調がどっちなど月
を見るより明らかだった。

「なのはが一番強敵だなあ……………」

こうしてはやてに引き続き、二人目の陥落者が出たわけである。

ルークside

「ルーク・・・・・・・・・・」

声が、聞こえる。誰だ？・・・・・・・・ティアか？

いや、違う・・・・・・・・この優しい声は・・・・・・・・

俺はゆつくりと目を開いた。視界に入ってきたのは、金だった。

「フェイト・・・・・・・・さん？」

俺の問いに彼女は微笑んだ。

「うん。ルーク君、もう朝だよ。起きて」

「ああ・・・・・・・・・・」

フェイトさんの言葉に俺は軽く返事をすると思えばベッドから起こした。

「ねえルーク君、朝ごはん一緒に食べない？あ、無理にとは言わないよ？一人がいいなら邪魔しないし・・・・・・・・」

「本当か！？」

目を輝かせた俺にフェイトさんは言葉を失っていた。

「え・・・・・・・・・・う、うん」

「そつかあ、よかった。俺料理あんまり得意じゃなくて……
・助かったよ」

そう独り言を言ってから俺はあることに気づいた。
俺は今なんと言った？

「す、すいません。なんか急に生意気な口利いちゃって……
・起きたばかりなので……」

「い、いいの!!」

俺の言葉を遮ってフェイトさんは叫んだ。顔を上げると、俺は言葉を失った。

彼女は今にも泣きそうな目で俺を見つめていた。

「昨日、なのはにはさっきの口調で話していたよね？私にもルークの口調で話してほしい。フェイトさんなんて他人行儀じゃなくてなのはみたいに名前だけで呼んでほしい……」

「い、いいのか？フェイトさ……フェイトは執務官で俺は囑託魔導士だぞ？いくらなんでもそれは……」

「階級なんて関係ないよ。私だって最初は囑託魔導士だった。だから……ね？」

「わ、分かった……」

彼女の泣きそうな目に見つめられて断れるわけはなかった。

「うん！！じゃあ朝食食べに行こう！！」

フェイトは微笑み、俺の手を引く。

「ま、待つて！！」

そのまま部屋を出て行こうとするフェイトを制止した。

俺はさっきまで寝ていて着ているのも寝巻きだ。着替えなくてはならない。

「あのさ……俺着替えるからさ……その……先に部屋に行つててくれないか？」

当たり前のことを言っているのに顔が熱くなつていくのが分かる。そしてそれはフェイトも同じようだった。

「あ……そ、そうだよね！！ごめんね私ったら焦っちゃつて！！じゃあ後でね！！」

彼女は早口でそうまくりたてると、嵐のように部屋から出て行った。後に残るのは彼女が出て行った扉を見つめる俺だけだった。

『朝からモテモテじゃない。羨ましいわ』

壁に立てかけてある剣のレンズが光った気がした。

「勘弁してくれ……」

顔を真っ赤にしながら、俺は着替えに取り掛かった。

「いつも思っただがこれはどうなっているんだ？」

俺はこの世界に来たときに着ていた服に再び身を包んでいた。

昨日着ただけなので汚れてはいないが、それも時間の問題だろう。

今日帰ってきたら洗濯したいところだ。だが、それをするにしても問題がある。

「・・・・・・・・洗濯している間、他の服がないんだよねあ・・・・・・・・」

これは早いうちに買いに行く必要があるそうだ。時間があるならなのはに見繕ってもらおう。

『にしてもルークの服装って本当に暑そうよね・・・・・・・・・・』

俺の腰に刺したハロルドが呆れたような声を出す。

俺は今、白を基調とした長袖の上に黒のズボンを履いて黒いマントを羽織っている。

マントはマフラーのように首を覆っていて、見るだけで暑そうだろう。

「いや、そうでもないんだよな。これ実は全然暑くないんだ。なん
でかは知らないけど」

実を言うところの服、通気性が抜群なのだ。

いや、もちろんあくまで例えである。だが実際にこの服を着ていて
もまったく暑さを感じないのだ。

勿論衣服を身に着けているという感覚はあるし、俺が暑さを感じな
いわけではない。

つまり、ローレライが俺にくれたものは、すべて不思議なものだっ
たということである。

『ローレライあんに鼻屑しすぎじゃない？』

「ほんとにな」

ハロルドの呆れた声に俺は軽く返事をしながらも、心の中では不安
が渦巻いていた。

ローレライがここまでの装備をくれたということは、そうまでしな
いとこの世界ではやっていけないからだろう。

「はいどうぞ。口に合うといいんだけど……」

不安そうにそう言いながらフェイトは恐る恐るといった感じで料理を俺の前に出した。

例えば口に合わなかったとしても、俺は美味しいと言っただろう。フェイトを悲しませるようなことなんて、到底できないと思ったからだ。

ゆっくりとスクランブルエッグをフォークで掬い上げて、口に運ぶ。口に入れると甘い味のあとにとろとろとした食感が来て、とても美味しかった。

「美味しい……すごく美味しいよフェイト」

「本当！？よかったあ……」

心底安心したようにフェイトはトレーを胸に抱いて椅子に座った。

「フェイトちゃんおはよう……あれ？」

別の部屋から出てきたのはフェイトの前に俺がいる事を見つけて声を上げた。

「あ、なのは。部屋勝手に上がらせてもらってるぜ」

「あ、それは別にいいんだけど……ふーん……」

「

なのは何か面白くないものを見るように俺が食べている食事を見た。

「美味しい？」

「え？あ、ああ。美味しいよ」

「そっか。よかったね。フェイトちゃんの料理は優しい味がするから」

本心からそういつてるのだろうが、なぜか俺には彼女の機嫌が悪いように思えた。

しかし、それを確認する前に彼女は洗面所に向かってしまった。髪を整えるのだろう。

ふと前を見ると、フェイトが複雑な表情でなのはが入っていった扉を見つめていた。

「どうかしたのか？」

「え？な、なんでもないよ」

フェイトは俺の言葉にあわてて手を横に振った。

「ふーん」

俺はそう呟いて再び食事に取り掛かる。そして食事が終わるまでなのはが洗面所から出てくることはなかった。

「さて、じゃあそろそろ時間だしルーク君、模擬戦に行こうか。フ
エイトちゃんも来るよね？」

しばらくしてから部屋から出てきたのは俺とフェイトにそう言
った。

しかし彼女は俺とフェイトが共同で食器を洗ってるのを見るなり意
地悪な笑みを浮かべた。

「新婚さんみたいだね」

「なっ・・・・・・・・」

「っ・・・・・・・・」

俺とフェイトの顔が一気に赤くなった。確かにこんなに綺麗な奥さ
んを貰ったら毎日が楽しいだろう。

家事万能で、優しく人のことを気遣ってくれる。って何をいつてる
んだ俺は。

勝手に俺の頭から出てきたフェイトの妻案を頭を振ってかき消す。
フェイトはフェイトで無言だったが、手は動いていなかった。

「ふふ。さて、じゃあそろそろ食器洗いも終わりそうだし、皆で一緒に行こうか」

フェイトの妻案よりもその後のなのはの笑顔にどぎまぎしたのは俺だけの秘密である。

様々な建物の残骸が残っている場所で俺は一人の女性を見つめていた。

彼女は桃色の髪を紐で結び、腰に剣をさしている。

美しい風貌とは裏腹に目は険しく、鋭く俺を貫いていた。

彼女の姿では女性恐怖症の俺の親友は満足に戦えないだろう。

動きやすさを重視したためか、彼女の戦闘服は俺には刺激的過ぎた。だが、それもすべて含めて、彼女が強敵であることを物語っていた。

『そんじゃあ始めよか。ルーク君はシグナムと本気で戦ってくればええで。うちとなのはちゃん、フェイトちゃんがルーク君の動きを見て合格かどうかを判断するから、頑張ってな』

モニターは消えて、静寂が辺りを支配する。

俺の後ろでは、なのはやフェイト、その他フォワード陣がこの勝負の行方を見守っていた。

「烈火の将シグナム」

シグナムが静かに呟き、剣を抜く。その瞬間に彼女の纏う雰囲気さらに鋭いものへと変わった。だが、俺も負けてはいられない。

「ルーク・フォン・ファブレ。生憎と二つ名とかはなくてな」

今思えばそれはアッシュの専売特許だった。鮮血は、正直言ってかっこいいと思う。

だが俺にはそんなかっこいい二つ名などないし、付ける暇もなかった。

いや、必要もなかった。俺は誰なのか。何のために生まれてきたのか。

俺はその問いを今でも探しているのだから。

剣を抜き、構える。姿を現したソーディアン・ベルセリオスの風貌にシグナムは目を見開いた。

無理もないだろう。魔剣と呼ばれても問題無さそうな姿をしているのだから。

だが彼女はすぐに表情を元に戻した。

「行くぞ!!」

その叫びとともに桃色の風が吹いた。シグナムは素早く俺に接近し、間合いに引きずり込んだ。

「斬る!」

彼女の剣が音を立てて俺に迫る。俺は左手を即座に動かして彼女の剣を防いだ。

「っ!?!」

俺は驚愕した。剣が、重い。

今まで数多くの敵と戦った。その中でもかなり重い………アッシユと同じ、いやそれ以上だ。

それを女性の身で放つのか。俺は鳥肌が立った。強い。

「おらあ!」

シグナムの剣を弾き、嵐のような攻撃を開始する。

手加減は無用だ。力なら俺も負けない!!

「くっ!」

俺の怒涛の攻撃にシグナムは後退させられていく。

だが攻めているのは俺でも、少しでも気を抜けばやられそうな雰囲気があるそこにはあった。

「攻撃一方では、勝てんぞ!!」

シグナムの剣筋が鋭くなり、次第に俺が押され始める。

ル（シグナムの野郎、手抜いてやがったな！！）

心の中で悪態をつくも、次第にシグナムが有利になっていく。本気になったシグナムは段違いに強かった。

『見てらんないわね』

不意に、声が響いた。視線を剣に下ろすと、ハロルドのコアが光っているのが見えた。

『サポートはしてあげるから、後は自分でやりなさいよ？』

ハロルドの言葉に俺は笑う。そうだ、俺は一人じゃない。

「行くぞ！！」

『了解！！シャドウエッジ！！』

俺の言葉に呼応するように地面から影の刃が伸びる。

シグナムはそれを咄嗟に避けたが、避けきれずにわき腹を切られた。急に現れた攻撃に目を丸くしているシグナムに俺は一気に肉薄する。重さのないハロルドを用いるなら、前よりもずっと速く動けるのも確信していた。

シグナムが舌打ちする。すぐに彼女は剣を振り上げたが、遅い。

「穿衝破！！」

一撃目でシグナムに突きを繰り出す。しかしシグナムは読んでいた

のかそれを剣で防いだ。

だが、このアルバート流のほとんどの技は二段構成であることを彼女は知らない。

体を滑り込ませるように前に移動する。そしてそのまま空いている手で彼女を殴り上げた。

「閃光墜迅牙！！」

反撃する隙を与えずに、俺は剣を振るう。

剣圧から生じた風がシグナムを持ち上げ、そしてとどめの突きがシグナムに向かう。

捉えた。そう俺は確信した。空中で今の攻撃を避けることは不可能に近い。

防いでも空中では地の利がある俺に軍配が上がるのは一目瞭然だった。

だがしかし、彼女は見事に俺の懇親の突きを防いだ。しかも吹き飛ばされることなく。

「なっ！？」

俺は驚きながらも素早く距離をとった。

不測の事態が起きたときの対処法として自然に身についたものだがシグナムは空中に浮かびながら俺をすまなそうに見ていた。

『驚いたわね。まさかあんな技術があるなんて。悪いけどあたしの力では無理よ？』

空を飛べる人間に会うのはハロルドも初めてなのか、驚いたように呟いていた。

「すまない」

不意に、シグナムが謝ってきた。

「お前が浮遊魔法を使えないであろうことは検討がついていた。だが、先程の一撃は見事だった。もう十分合か――」

「待った!!」

シグナムの言葉を俺は遮る。彼女の提案を受け入れれば、俺は合格し、この模擬戦は終わってしまう。

やっと何かを掴みかけたんだ。俺は諦めたくない。

「やっとここまで来たんだ。まだやろうぜ。俺はまだ戦いたい!! シグナムと戦っていたい!!」

「なっ!?!」

俺の言葉にシグナムは何故か急に赤くなった。だがすぐに真剣な表情になり、俺を見据える。

「言っていることが分かっているのか? 私は飛べるんだぞ?」

「ああ、分かってるさ。それでも、続けようぜ」

俺の言葉にシグナムはふつと笑い、再び剣を構えた。

「ハロルド、試してみたいことがあるんだ」

『何よ?』

「お前、光と闇の晶術が使えるんだろ？だったらさ……」

『別に構わないけど……』

「よし、じゃあ任せた！！行くぜシグナム！！」

俺は剣を空に掲げてシグナムに向かって叫んだ。

ルークside

『ホーリーランス!!』

天に掲げた剣が、俺にしか聞こえない声で叫ぶ。

シグナムの足元に魔法陣が展開し、空中に光の槍が現れる。
それは全てシグナムを狙っていた。

「甘い!!」

しかしシグナムは慌てることなく魔法陣から脱出する。

それでいい。気づいたときには俺は、自分の念じた場所、シグナムの懷に潜り込んでいた。

この試合が始まって初めてシグナムが顔を強張らせた。

「雷神剣!!」

俺の突きが、シグナムの剣に防がれる。だが狙いはそこではない。
真の狙いは、晴れているのに落ちてくる雷撃にある。

「なるほど.....」

ふと、シグナムがそう呟いた。彼女は剣を上段に構えた。
そしてその剣で落ちてきた落雷を受けた。

「な.....」

俺は驚いていた。ありえない。一瞬で雷神剣の性質を見抜き、それを利用するなど。

だが、そんな暇はなかった。シグナムの剣には電撃が走っており、それは攻撃のために転換されていた。

頭の中で警報が鳴る。まずいまずい！！

「ハロルドおおおおお！！」

俺は全力でハロルドの名前を呼び、空中で体を一回転させる。

もうこれしか手はない。俺の予想が正しければ、出るはずだ。頼む。俺は一縷の望みをソーディアン・ベルセリオスに託して、上に向けて突きを放った。

それと同時にシグナムが剣を振り下ろす。

「紫電・・・・・・・・一閃！！」

「翔破烈光閃！！」

やった。俺はそう心の中で呟いた。

翔破烈光閃は普通、フィールド上の音素フォニムを用いて繰り出す技だ。

だが普通に閃光墜迅牙を用いても翔破烈光閃に変化はしない。

そこで俺はハロルドの力を借りた。ハロルドが司るのは、光と闇。

そして光は火と風の、闇は地と水の属性を持っている。

さっき俺はハロルドに剣の周りに絶えず微量の光と闇の晶術を撃ち続けるように言った。

晶術フォニムと音素は別物だが、属性が宿っていればそんなことは関係ない。俺の予想通り、繰り出した突きに風が纏われ、それは槍のように長くなった。

雷と炎を纏ったシグナムの剣と俺の風を纏った剣が激突する。それらは激しく暴れ回り、衝突を繰り返しながら敵を殲滅しようと

意気込んでいるように思えた。

だが、それが終わるまで待ってられるほど俺は悠長なことはいられなかった。

もしもこれで押し負けるか、あるいは相殺したとしても俺は敗北する。

シグナムは剣士として俺よりも圧倒的に上だった。だが、俺は一人じゃない。

「ハロルドおおおおおおお！！」

耳を劈くような俺の叫びにシグナムは目を見開く。

『ネガティブゲイト！！』

次の瞬間にはシグナムを黒の球体が捉え、喰らい始めた。声にならない叫び声をあげて悶え苦しむシグナム。そして操作を失った炎と風は爆発を起こした。

なのはside

「ルーク!!」

なのはの横でフェイトが叫んだのが聞こえた。

なのは自身、啞然とした表情で爆発が起きた場所を見つめている。

爆風が舞い、それによって二人の姿は見えなかった。

胸が、痛い。あの中にルークがいる事を思うと心配で胸が張り裂けそうだった。

ふと、爆風の中から流れ星のように何かが落ちた。

「ルーク君!？」

なのはが声を上げると同時に金の閃光が隣を通過した。

その閃光は落ちてきたシグナムを抱えたルークを見事にキャッチした。

「っ・・・・・・・・」

しかし二人分の重さに耐え切れずにフェイトは彼らをゆっくりと地面に降ろした。

なのははほっと胸をなでおろした。しかしルークを見るや否や、言いようのないもやもやが胸の中に広がった。

ルークはシグナムを抱えて自身を下にしていた。

あのまま落ちててもルークはシグナムのクッションになるつもりだったのだ。

「まったく・・・・・・・・」

なのはルークの無茶な行動に怒りを覚えた。

だが彼女は知らない、羨ましそうな顔でシグナムを見つめていたことを。

そしてそれは彼らを助けたフェイトも同じだった。

即座にシグナムをルークの上からどかしたのが何よりの証拠だろう。

「ん・・・・・・・・・・」

「ルーク君!!」

目をうつすらと開けて、唸ったルークなのははすぐに近づいた。そのまま抱き上げる。体には痛々しい傷がいくつもできていた。

「・・・・・・・・・・勝ったのか？」

「・・・・・・・・・・うん」

ルークの問いになのははそう呟いた。だが表情は厳しかった。

「よかった」

「よかったじゃないよ!!」

なのはの叫びが模擬戦場にこだました。

ルーク side

シグナムとの激しい戦いを終えて俺が目覚ますと、そこには心配そうに自分を見つめるなのはが居た。

彼女に試合の結果を聞いて俺が勝ったと聞いたとき、俺は嬉しかった。

勝ったのだ。明らかに自分よりも格上のシグナムに。

だが俺がよかったと小さく声を上げるとなのは声を張り上げてそれを否定した。

俺は悲しかった。なのはも俺が勝ったことを喜んでくれているとばかり思っていた。

勝たないほうがよかったのかと、内心わずかながら怒りも抱いた。

しかし、そんな感情はなのはの顔を見てすべて吹き飛んだ。彼女はなきそうな顔で俺を見つめていた。

「なんで……………」

なのはが苦しそうに声を発する。

その一言一言に彼女の思いがこめられているように感じて俺は言葉に集中した。

「なんであんな無茶をしたの！？こんなにボロボロになって……」

「……………」

このときの俺の顔は困ったように笑っていただろう。
俺自身、どうするのがベストなのかは分からなかった。

「分かってる。ルーク君が戦って勝ちたいって、全力で勝負したいって！！それでも…………ルーク君が傷つくのは嫌だよ」

そう言ってからなのははっとして目をこすった。

「ダ、ダメだよな。もうルーク君も子供じゃないんだよな。心配しすぎちゃいけないんだよな」

俺にはなのはの気持ちが届くほど分かる。

多分なのはは俺の保護者的な立ち位置に居ると思っているのだ。
最初に発見され、様々なことをしてもらった。一番お世話になったのはなのはだろう。

だからこそ彼女は今回の模擬戦に反対だったのだ。母親が子供が傷つくのを見たくないように。

「なのは……………心配してくれてありがとな」

「ルーク君……………もう無茶しないでね？」

「ああ……………約束する」

俺はそう言って微笑むと体を起こした。所々傷むが歩くのに問題は

ない。

「フェイトちゃん、ルークは私が連れてくからシグナムさんをお願い」

「え？う、うん」

なのはの言葉にフェイトは頷き、シグナムを背負うとその場から消えた。

フェイトにそんな腕力があつたことと、目の前から消えたことに俺は目を白黒させていたことだろう。

「さて、私達も行こうか」

「あ……大丈夫だよなのは。一人で歩ける」

「本当に大丈夫？」

「ああ」

「じゃあ気をつけてね。なにかあつたら通信で呼ぶんだよ？」

「ああ、分かった」

思わず吹き出しそうになってしまった。今のなのはは子供を心配する母親そのものだ。

名残惜しそうになのは俺を見ていたが、やがて踵を返してフォワードの訓練に向かってしまった。

俺は彼女の後姿を見ながら振り返り、シャルムさんの下へと向かった。

『とりあえず初勝利ってところね』

不意にハロルドが話しかけてきた。

「ああ、ありがとな。お前のおかげだよ」

『よく言っわ』

何故だか剣の中の彼女はふてくされているようだった。

『レンズの力の発動のタイミング、さらには移動した場所、そして極めつけは私の能力の最大発揮、これを全て戦闘の中で初めてやる人なんかいないわよ』

「……………そうか？」

『そうよ。確かに剣の腕はそこまで高くないみたいだけど、それでもここまで出来るってことは、あんたのことを戦闘における天才って言ってもなんら問題はないわよ』

ハロルドの言葉に俺は苦笑いした。

「言い過ぎだって」

『ここで謙遜されると結構むかつくわね……………』

俺がなんと言っても彼女の機嫌は直りそうにない。

『……………兄さんを見ているようで余計にむかつくわ……………』

・・・』

「え？なんか言ったか？」

ハロルドが小さく呟いた言葉を俺は完全に聞き取ることは出来なかった。

『なんでもないわ』

しかし彼女はそう一蹴し、黙り込んでしまった。
この様子では聞いても教えてはくれないだろう。

『にしても、今回でシャドウエッジにホーリーランス、そしてネガティブゲイト。高くつくわよ？』

「お手柔らかに頼むな」

ハロルドのことだ、何を要求してくるのか分かったものではない。
そんな感じで話をしているうちに、俺はシャルさんの部屋のすぐ傍に来ていた。

不意に扉が開き、中から金の髪を靡かせた女性が出てくる。

「あ、ルーク。大丈夫？」

金髪の女性、フェイトは俺の姿を見るなり心配そうな表情で近づいてきた。

「ああ、大丈夫だよ。少し痛むけど、歩けるし問題はないと思う」

「そっか・・・よかった」

フェイトは心底安心したようだった。

俺はそのままフェイトに別れを告げてシャルマルさんの部屋に入った。

「あら？早かったわね。フェイトちゃんがすぐにルーク君が来るはずだからとは言ってたけど……あら？そんなに傷は深くなさそうね」

「俺は競り勝ったほうなんで……シグナムさんは？」

苦笑いしながら言った俺の言葉にシャルマルさんは後ろのカーテンが引かれたベッドを指差した。

「今はぐつぐつと寝ているわ。とはいっても命に別状はないから大丈夫よ。明日には動けるようになるわ」

シャルマルさんの言葉に俺はほっと胸を撫で下ろした。

シグナムさんのことだけが心配だったのだ。

「にしてもあのシグナムに勝っちゃうなんてルーク君はすごいわね」

彼女はそう言いながら、俺の傷を治療していく。ものすごい手際だ。

「いや、偶々競り勝っただけですよ」

それに勝因は俺の首にかかっているレンズとハロルドだ。

俺一人では勝てなかっただろう。剣の技も鋭さも、シグナムのほうが上だったのだから。

だがシャルマルさんはそんなこと気にもしない様子で手早く俺の治療を終わらせた。

「はい。これでよし」

俺は立ち上がる。

「もう行くの？」

「はい。なのはの訓練を見たいので」

異世界での訓練。しかもなのはは一流の教官らしい。それを見ない手はない。

「そう。行つてらっしゃい」

そのことを悟ったのか、シャルさんは笑顔で見送ってくれた。俺は彼女に礼を告げて部屋をあとにした。

病室は静寂に包まれていた。

時折聞こえる音は、シャマルがペンを走らせる音のみだった。ふとそこで、扉が開く音が聞こえた。

視線をドアのほうに向けると、見知った顔が立っていた。

「はやてちゃん？どうかしたの？」

「いや、シグナムに今回の模擬戦のことを聞こう思ってたな」

はやてはシャマルに笑いかけると、一直線にベッドに進んでいき、カーテンを静かに開けた。

ベッドの上に横たわっているシグナムは目を開けて天井を見つめていた。

「お、目が覚めてたんか。ほなちょうどよかった」

「主……………」

「ああ、そのままであえて、辛いやる？」

主の登場に、シグナムは体を起こそうとしたが、当の本人に見咎められ、しぶしぶ体をベッドに沈めた。

ベッドの横に置いてある椅子にはやては腰掛け、カーテンの向こうからシャマルも現れた。

「模擬戦が終わったばかりで悪いんやけど、詳しく教えてくれんかな？今回のこと」

シグナムはしっかりと頷いて話し始めた。

「まず、始めは主に言われたとおり地上戦のみで戦っていました。ですが、彼は予想以上に強かった」

「と、言うത്？」

はやてからすればシグナムが負けるということは考えられないことなのだ。

彼女は日々の訓練を怠ることなく、誠実にこなしている。前衛としてなら右に出るものは居ない。

「彼の攻撃は、例えるなら嵐です。全てを飲み込む強力な攻撃。おそらく剣の技でも速さでも、私のほうが上でしょう。ですが・・・・彼の剣は捉えられない。気がつけば飲み込まれていました。そして咄嗟に浮遊魔法を使ってしまうました。申し訳ございません」

「ええよ。あの状況で使わんのは無理やろっし・・・」

戦闘の場面を思い出しながらはやては呟いた。空中に打ち上げられた時点で、シグナムにはああするしかなかった。

「ですが、彼が真の力を発揮したのはその後です。彼は私に向けて光属性の魔法を放ちました。あれがなんという魔法なのかは知りませんが・・・」

シグナムの言葉にははやては首を横に振った。

あの魔法を見たはやてもすぐに調べたのだ。だがどのような文献を検索してみても、誰に聞いてみても、答えは得られなかった。

「そして彼は気づいたときには私の懷にいました。・・・あれはおそらく転移魔法の一種かと」

「そんな……私達でも転移魔法は出来るけど、それをあんな短時間で……」

シヤマルは信じられないといったふうに見開いていた。

当たり前だ。もしそんなことが可能ならなのはのような砲弾使いや、はやてのような広域魔法使いは一気にやられてしまう。六課の半分が相手にならないと言っても過言ではない。

「そしてそのあとに彼は二回叫びました。ハロルドと」

「ハロルド？男の名前やな。なんでそんな……」

考え込むはやてにシグナムはゆっくりと話し始めた。

「主、聞いてください。おそらくハロルドとはあの変わった風貌の剣ではないでしょうか？そしてルークの行動を見る限り、魔法らしきものはその剣が使っているのではないかと……」

「意思を持った剣？そんなあほな……」

「ですが、そう考えれば辻褄が合います。転移を含めた斬撃以外の行動は全てあの剣の力ではないかと。加えるならば私の紫電一閃と渡り合ったあの風の技もその剣の仕業でしょう。動きがその前の攻撃とまったく同じでしたから」

「……仮にそうやしたら、ルーク君は二人で戦ってたよ
うなものやな。なんかせこいなあ……」

苦笑いしながらそう呟いたはやてにシグナムは首を横に振った。

「・・・・・・・・・・ルークが戦闘中にハロルドに指示して魔法を使わせたということは、それだけ彼に余裕があったということですよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグナムの言葉にはやても、そしてシャルも閉口せざるを得なかった。

彼女の言っていることを、否定することは出来なかったからだ。

ルークside

ルークは医務室を飛び出した後になのはのもとに向かっていた。
今から訓練をするというのだ。これを見逃す手はない。

扉を開けて訓練場に駆け込む、そこではフォワード陣四人と白い服を着たなのはが対峙していた。

（あれが・・・・・・・・なのはのバリアジャケット・・・・・・・・）

ルークは空中に浮かび、じっと四人を見据える彼女の姿を見て、見とれていた。

青と白を基調にしたドレスのような服に、槍のような形状の杖。そして風になびく亜麻色の髪が、とても綺麗だった。

「行きます!!」

青髪の少女――スバル・ナカジマが叫び、なのはに突進する。
なのははスバルの繰り出した強力な拳を杖を使って受け止めた。
杖と拳の間には青い魔法陣が描かれており、それがシルドの役割をしていた。

フォワードの三人は別々に行動し始める。統制の取れた綺麗な動きに俺は言葉を失っていた。

ここまで高度な動きが出来るのか。まだ幼いエリオやキャラが、未熟なティアナが。

その事実にも、俺は閉口した。やがてその模擬戦はティアナの作戦とスバルの奇襲によって幕を下ろした。

フォワード陣の動きもそうだが、何よりも四人を相手に一撃しか許

さないなのは強さをしつかりと俺は感じていた。

ふと、フォワード陣と何かを話していたのはがこちらに気づいた。彼女はぶんぶんと手を振ってこちらに来るように合図する。

俺は首を傾げながらもなのはもとへと走っていった。

「皆紹介するね。知ってると思うけど彼はルーク君。まだ囑託魔導士だけど、実力はあるから、分からないことがあったら色々聞くように。じゃあしばらく話していいよ」

なのははそうフォワード陣に呟くと少し離れたところに立ってモニターを弄り始めた。

「あの・・・・・・・・・・」

なにかをし始めたなのはを見ていると後ろから声をかけられた。振り返ると青髪の少女――スバル・ナカジマがこちらを見ていた。

「さっきの模擬戦見ました！！凄かったです！！どうしたらそんなに強くなれるんですか？」

「え、あ、ああ・・・・・・・・・・」

興奮気味に言う彼女に俺は困った。

あの戦いは俺一人のものじゃない。ハロルドとレンズの力があって成り立つものだ。

「まあ、俺前にいた世界でも結構戦ってたから、経験かな・・・・・・・・・・」

俺の言葉にスバルは納得したようにうんうん頷いた。

俺としてはその横で厳しい視線を送り続けるティアナの視線が痛かったのだが。

「でもルークさん。武器は剣ですよ？ってことはエリオ君の戦い方に近いのかな？」

ピンク色の髪をした小さな女の子であるキャラにそう言われ、俺は考え込む。

槍といえば、仲間の一人を思い出す。だが見る限りでは俺が教えられるのはエリオ位な気がした。

だが、魔法に関しては、どうなのだろうか。

（ハロルド、お前魔法を教えられるか？）

『木にでも刺してくれば勝手に教えるわよ？』

どこの高機能教導装置だよ、と俺は内心苦笑いした。

「そうだな。俺が教えるとしたらエリオだな。あとはキャラか」

「あの……先程の模擬戦での魔法は見たことがないのですが、特別なものですか？」

ふと、今まで輪の外にいたオレンジの髪の少女、ティアナが話しかけてきた。

整った顔立ちをしているが、突き刺さる視線は痛い。

「あ、ああ。ちょっとこことは違う魔法だな」

「そうですか……」

ティアナはそう呟くと再び輪の外に戻ってしまった。
視線が痛いのは相変わらずだ。

「ルーク君、はやてちゃんが呼んでるんだけど、一緒に来てもらってもいいかな？」

「え？あ、ああ……………」

モニターを切って小走りで寄ってきたのはに俺は返事をして共に歩き始めた。

背中にティアナの視線が突き刺さっているのを感じた。

はやての部屋に入ってみると、オールスターが揃っていた。
フェイトにヴィータ、はやてに、そしてシグナム。
俺はシグナムの姿を捉えると小走りで彼女の元に駆け寄った。

「シグナム、怪我は大丈夫か？ごめんな．．．俺手加減出来なくてさ．．．．．」

すまなそうに謝る俺にシグナムは微笑んだ。

「大丈夫だ。問題はない。それに模擬戦は本気だ。手を抜いたら怒るぞ？」

その言葉を聞いて俺は安心した。どうやら大丈夫みたいだ。

「またよろしく頼む」

「ああ．．．．．」

差し出されたシグナムの手を握り、俺たちはお互いに微笑みあった。しかし次の瞬間には二つの刺すような視線を感じた。

悪寒のようなものを感じて振り返ると、フェイトとはやてがじっとこちらを見ていた。

「なんやあ？やけに親しそうに話すなあ、うちにはそんな言葉使ってくれへんくせに」

「ううゝ．．．．．」

はやてはニコニコと笑顔だが目は笑っていない。フェイトに関しては何故か羨ましそうにシグナムを見つめていた。

「いや、やっぱりはやてさんは上司ですし．．．．．」

「そんなの関係あらへん！！」

「ええ！？」

声高に叫んだはやてさんに俺は思わず声を上げた。

「い、いやでも……………」

「いややない！！ルーク君は今日から副隊長に就任してもらうんや！！私のことははやてでええ！！呼び捨てでええ！！つか部隊長命令！！」

ビシッと指差され、俺はたじろぐしかなかった。

「ほら、呼んでみい！！」

「えっと……………はやて……………」

「うんうん」

「……………さん」

俺が最後に小声で付け足すと彼女はズルツという効果音を口にして肩を落とした。

後ろではなのはが苦笑いしている。

「私も最初はそうだったなあ」

「ならそのうち慣れること！！ええな！！」

「は、はい！！いや、うん！！」

「よし、okやー！さっきも言ったけどルーク君には副隊長をやってもらおう。で、どっちの部隊に入るかなんやけど……………」

「確か、スターズとライトニングでしたよね？」

高町なのはが隊長を務めるチームスターズとフェイト・テストロツサ・ハラウンが隊長を務めるチームライトニング。

そのどちらに入っても真面目に教えるつもりだが、個人的にはエリオとキャロがいるライトニングの方が都合がよかった。しかし、

「……………私的にはスターズがいいな」

「え？ダ、ダメだよ！！ルークにはライトニングに入ってもらわないとー！！」

隊長の二人が俺の所属について口論を始めてしまった。

はやては面白そうにニコニコしながらその様子を見つめている。というか彼女からすればこうなることは分かっていたのではないだろうか。

「まだティアナやスバルも未熟だし、ティアナは私が見れるけど、スバルは……………」

「そ、そんなこと言ったらこっちだってエリオを見てほしいよ！！それにライトニングは私は忙しくて出れないし……………」

「でもそっちには同じ剣士のシグナムさんがいるよ？」

「ち、違うの！！やっぱりエリオとキャラのお兄さんの位置にな
って欲しいし……それに……」

なおも口論を続ける二人に、俺は困ったようにヴィータを見た。
俺の視線にヴィータはため息をつく、壁から体を離れた。

「ルークに決めさせればいいんじゃないのか？所属するのはルーク
なんだしょ」

ヴィータの言葉で二人が同時に俺を見た。
その視線におれはたじたじになってしまう。だが、俺はしっかりと
自分の意見を話した。

「さっきなのは模擬戦を見たけど、俺が向いてるのはあの四人の
中ではエリオとキャラだと思う」

その言葉にフェイトは飛び上がり、なのはは残念そうにため息をつ
いた。

（ハロルド、キャラに魔法を教えてもらってもいいか？）

『私が？構わないけれど高くつくわよ？』

（……………分かったよ）

ハロルドと言葉を交わして顔を上げると、はやて、なのは、フェイ
トの三人が首を傾げていた。

「どうかしたのか？」

「ん？なんでもあらへんよ」

俺の言葉にはやては首を横に振った。
他の二人も気のせいかと呟いている。

「ほんならルーク君はライトニング所属で決定やな」

はやての言葉になのはは前に出た。

「シグナムさん、フェイトちゃん、ちょっと来て」

なのはは二人の手を取ると、無理やり部屋の外に連れ出した。
その様子にはやても目を丸くしている。

しばらくしてから三人は帰ってきたが、フェイトとシグナムは顔面
蒼白だった。

「ルーク君。フェイトちゃんとシグナムさんにはルーク君に無理させないようにお話しといたから、安心してね」

「あ、ああ・・・・・・・・・・」

清しい笑顔でそう言い張ったなのはに俺は頷くしかなかった。

部屋の外で何があったのか聞きたかったが、顔面蒼白の二人を見て
俺は止めた。

「ほんなら話はここまでや。もう時間も遅いし、今日は解散でええ
で」

はやての言葉に、俺達は外に出た。

帰りになのはとフェイトと共に食堂に寄って食事を取ったが、なの

はは終始、俺のライトニング所属について愚痴をこぼしていた。

部屋に戻ってから俺はハロルドと会話をしていた。

「にしても訓練か・・・・・・・・・・大変だな・・・・・・・・・・」

『人にものを教えるって思った以上に大変なことなのよ？今からそんな弱気じゃ絶対に無理ね』

ハロルドの厳しい言葉が胸に突き刺さる。

だが、俺は気づいていた。ハロルドは俺のことを思ってそう言ってくれていると。

「ああ、分かってるさ。ありがとう」

俺の言葉に、ハロルドが笑った気がした。

「ルーク、居る？」

不意に、扉の向こうからフェイトの声が聞こえた。

「ああ、入ってもいいぞ」

「入るね」

入ってきたフェイトを見て俺は目を見開いた。

彼女が黒い寝巻きを身に着けていたからだ。

俺の視線に気づいたのか、彼女は恥ずかしげにうつむいた。

「う、ごめんね。こんな格好で……………」

「い、いや……………」

俺も思わず彼女から視線を外してしまった。じろじろ見るのは失礼に当たると感じたからだ。

「隣……………いいかな？……………」

「あ、ああ、いいぞ」

小さな振動が俺の体を揺らした。

フェイトが隣に居ることを考えると、手汗が止まらなかった。

「実はね……………聞きたいことがあって来たの」

「聞きたいこと？」

フェイトは頷いて、俺の手の中にあるハロルドをじっと見た。

「さつきね。はやての部屋で声が聞こえたんだ。あそこの部屋に居る誰の声でもない、女の人の声」

フェイトの言葉に、ハロルドが息を呑むのを感じた。

「それでね、思ったんだ。模擬戦のときにルークが使用したあの魔法は．．．．．その剣の力じゃないかって．．．．．」

「いや、違．．．．．」

俺は続きを言うことができなかった。射抜くような目で、フェイトが俺を見つめていた。

『．．．．．もう無理よルーク。彼女は確信してるんだもの。それにここをごまかしたとしてもソーディアンマスターとしての素質のある彼女にはいつか絶対にバレるわ』

ハロルドの言葉にフェイトは剣に視線を向けた。

「やつぱり．．．．．あのと時の声は貴方だったんだね」

『そうよ。初めまして。私はハロルド・ベルセリオス。この剣、ソーディアン・ベルセリオスの管理人格よ』

「私はフェイト。フェイト・テストロッサ・ハラウン。よろしくねハロルド」

『よろしく』

俺は鞘からハロルドを取り出してフェイトに渡した。
それを恐る恐る受け取った彼女は素っ頓狂な声を上げた。

「重く・・・・・・・・・・ない？」

「ああ。ハロルドは特別製で重さがないんだ」

「凄い・・・・・・・・まるで手が伸びたみたい・・・・・・・・」

『感激してるところ悪いけれど、私のマスターはルークだから貴女の武器にはなれないわよ？』

ハロルドの言葉でフェイトは慌てて剣を置いて弁解し始めた。

「ち、違うよ？ちょっといいなあって思っただけで・・・・・・・・別に貰おうなんて・・・・・・・・」

ああ・・・・・・・・。俺はしみじみとした。

彼女はとても素直なんだろう。冗談としか思えないハロルドのセリフにここまで慌てるのだから。

俺が孫を見るような笑顔でフェイトに笑いかけていると、彼女は落ち着きを取り戻した。

「えっと・・・・・・・・そうだ。どうして話してくれなかったの？」

「いや・・・・・・・・いきなり剣が喋るって言うても信じないだろうし」

「あ、そうだよね・・・・・・・・」

俺の答えにフェイトは納得したように頷いた。

「というか、所々抜けている気がするの俺だけだろうか。」

「でも……私が聞こえるんだから信じてもらえるよ。明日皆に言おう？ ルークも隠し事してるみたいで嫌でしょ？」

「あ、ああ、そうだな。分かった明日話してみるよ。協力してくれるか？」

フェイトはニツコリと笑った。

「うん！！じゃあ私はもう戻るね。ハロルドと話が出来てよかったよ。また明日。おやすみ」

「ああ。おやすみ」

別れの挨拶を告げて、フェイトは部屋から出て行った。

「……さて、俺も寝るかな」

ハロルドを鞘に収めて、壁に立てかけるとベッドに横になった。ずいぶん疲れていたからか、すぐに眠りについてしまった。

そこは海に面した公園だった。俺はそこで、一人空を見上げていた。どうして空を見上げているのか、どうしてこの公園に居るのか、それは分からない。

だが俺は上空の――金髪の長い髪を風に靡かせる黒の少女と、亜麻色の髪を風に靡かせる白の少女の戦いから目を離せなかった。

これは・・・・・・・・・・なんだ？

俺は俺自身に尋ねた。そんなことをしても答えが返ってこないことなど分かりきっていた。

だが、尋ねなければならぬ気がした。

なぜなら上空で戦っているのは間違いなく幼いのはとフェイトなのだから。

視界に、もやがかかっていく。

気づいたときには、目の前に先ほどとは違った光景が広がっていた。

それは、なにかのブリッジだった。

かつて居た世界で見た、タルタロスのブリッジに似たそれは、確実に一点だけが違っていた。

前方のガラスから見える景色は、宇宙だった。

ふと、そこでモニターに一人の黒髪の女性が映った。

彼女は俺の目の前に居る幼いフェイトであろう少女にこう吐き捨てた。

『人形』と

全身が震えるのを感じる。それは、かつて俺が言われたのとまったく同じ意味の言葉。

そしてモニターの女が幼いフェイトに向けるのは、レプリカと蔑んだ人間と同じ視線だった。

再び場所が変わって、その女性と、幼いフェイトそっくりの少女が入ったカプセルが共に落ちていくときも、女性は同じ視線をフェイトに向けていた。

「やめろ。・・・」

その視線が俺を射抜いているようで、俺は恐ろしくなった。

頭が……痛い。頭だけでない、腕が、足が、己の細胞が、悲鳴を上げている。

「やめてくれええええええええええ！！！」

頭を抱える俺に、再び光が射した。

顔を上げると、幼いなのはとフェイトが互いに手を取り合って和解していた。

よかった。そう思った。フェイトはなのはに救われた。本当に良かった。

「じゃあ俺は？」

俺の中の俺じゃない俺、俺が問いかける。

俺はどうだ？救われたか？レプリカと罵られ、世界のために死ぬことを強制され、殺された。

俺は・・・・・・・・・・なんのために生まれてきた？
なんのために・・・・・・・・・・生きている？

『残念だったなあ、俺。お前は救われない。レプリカだからなあ』

‘俺’の言葉が俺を壊していく。レプリカという言葉が俺の心を砕いていく。

そして、気づけば、足元に手がかかっていた。

『よくも・・・・・・・・・・殺したな・・・・・・・・・・レプリカの方で！！』

周りを見渡せば、沢山の亡骸が転がっていた。

アッシュが、ヴァンが、リグレットが、シンクが、ラルゴが、アリエッタが、アグゼリウスで俺が殺した何千という人が、俺を殺そうと迫ってくる。

「やめてくれ・・・・・・・・・・」

俺は泣きそうな顔で頭を横に振る。しかし、亡骸達はそれを無視して俺を引きずり込んでくる。

「やめろおおおおおおおおお！！」

「ルーク！！」

急に、亡骸が消えた。啞然としている俺の目に飛び込んできたのは、心配そうに見つめるフェイトだった。

「大丈夫！？凄くうなされてたよ？」

「あ、ああ・・・・・・・・大丈夫だ」

そう言つて俺はベッドから起き上がった。外が明るい。もう朝のようだ。

フェイトが俺の背中を摩ってくる。

「だ、大丈夫だから・・・・・・・・」

「大丈夫じゃないよ!!」

俺の言葉をフェイトははっきりと否定した。

「こんなに震えてる・・・・・・・・大丈夫なんかじゃないよ・・・・・・・・」

フェイトの言葉で初めて、俺は自分が震えていることに気づいた。手を見つめる。この手には、取れない血がこびりついている。

なんて夢だと思った。いつもなら夢などすぐ忘れるのに、二度と忘れられそうにない。

それでもフェイトの手前、震えたままで居るわけには行かない。

「あ、ありがとう。もう大丈夫だよ」

「本当？本当にもう大丈夫？」

尚も心配そうにフェイトは俺を見つめてくる。それはそうだろう。部屋に入ったらいきなり俺が夢にうなされていたのだから。

これ以上詮索されるわけにも行かず、俺はフェイトに夢のことについて聞いてみることにした。

確信は無いが、あれはフェイトだったのではないかと俺は考えてい

た。

「ああ、大丈夫だ。ところでさ……その……フ
ェイトって妹かお姉さん居るか？」

「え？……」

俺の質問にフェイトは目に見えて動揺し始めた。
それに追撃をかけるように、俺は再び言葉を紡ぐ。

「ごめんな……もう一つ聞かせてくれ。昔……なの
はとフェイトは本気で戦ったことがあるのか？」

「な、なんでそれを……」

「実は……」

俺はすべて事細かに話した。夢で見たことを。俺の過去の話はすべ
て抜きにしてください。

「そっか……全部知っちゃったんだね」

そしてフェイトは語りだした。自身のことを。

「私はね……人間じゃないの。私のオリジナル、ルーク
が夢で見たカプセルの中に居たアリシアのクローンなんだ。ごめん
ね……隠してたわけじゃないんだけどね」

フェイトは感情を隠すように苦笑いした。

その笑顔があまりにも悲痛すぎて、見てられなくて、俺はフェイト

の手をゆつくりと握った。

「そんな顔で・・・・・・・・笑うなよ」

「え？・・・・・・・・」

「泣きたいときは、泣けばいいよ。笑いたいときに、笑えばいい。フェイトにはそうする権利があるんだから」

この世界に来たときになのはに言われた言葉。

その言葉の受け売りだが、それでも俺はこの言葉が一番フェイトの心に響くと思った。

「ルーク・・・・・・・・」

そしてその言葉は、フェイトの心に届いた。

「ありがとう・・・・・・・・」

フェイトは涙を流しながら、俺にそう告げる。だが、俺も言わなくちゃいけないことがある。

このままじゃただの同情だ。そんなの嫌だから。

だから、多分俺にしか分からないフェイトの気持ちを理解して、慰めようと思った。

傷の舐め合いじゃなくて、ちゃんと前を向いて歩いていけるように。

「フェイト、聞いてくれ。俺も・・・・・・・・俺もフェイトと同じ、クローンなんだ」

「え？・・・・・・・・」

俺の言葉に、フェイトは顔を上げる。そして信じられないといった表情で俺を見つめた。

そして俺は話し始めた。自分の出生の秘密を、その旅を。ただどアグゼリユスのことだけは伏せた。自信がなかったから。不安だったから。フェイトに軽蔑されないかと。全てを話し終えたそのとき、フェイトは俺を抱きしめた。

「え？・・・・・・・・・・フェイト・・・・」

「辛かったね・・・・・・・・・・」

突然の彼女の言葉に俺は言葉を飲み込んだ。

「私は・・・・・・・・偉そうな言いえないけど、ルークの気持ち分かるよ。ルークが私の気持ちを分かってくれるように、私はルークの気持ち分かる。辛かったよね。寂しかったよね。私も・・・・・・・・そうだったから・・・・・・・・」

「フェイト・・・・・・・・・・」

フェイトは俺を放して、見つめてきた。

「行こうか。朝ご飯食べに。私達は大丈夫。私も、ルークも、前を向いて歩けるから」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ああ！！」

俺とフェイトは互いに微笑みあった。

その後、なのはの部屋に行った俺とフェイトになのはが遅いと怒っ

たのは当然のことだろう。

剣と槍が音を立てて衝突する。

「動きが鈍いぞエリオ！！もっと速く動けるだろ！！」

「はい！！」

俺は朝食を取った後、訓練場でエリオと訓練をしていた。
用いているのはハロルドではなく、はやてから借りた上質の剣である。

「エリオ！！俺はお前に言葉で何かを教えることは出来ない！！俺は馬鹿だからな。だから・・・全部戦いの中で盗め！！盗んで盗んで！！俺を超えるんだ！！師匠と思うな！！宿敵だと思え！！」

「はい！！」

ますますエリオの動きがよくなる。

さつきも叫んだが、俺は馬鹿だ。ティアやなのはみたいに上手く言葉で言い表すなんて出来ない。

俺に出来るのは、ただ戦うことだけ。だからエリオには頼んだ。俺の技術を盗めと。

剣と槍が奏でる音が、次第に大きくなる。発生源も所々移動し、その戦いはどんどん進化していった。

エリオは戦いが進むたびに、目を見開いていく。

「凄い………どんどん強くなれる………どこまででも行ける!!」

「今は俺が合わせてるからだ!!俺に引っ張られるな!!自分で羽ばたけ!!」

「はい!!」

直後、俺は目を見開いた。エリオの一撃一撃が重くなり、速さが増したのだ。

篠突く雨のような鋭い攻撃が、俺を吞み込む。そしてその槍は俺の頬を掠った。

（これは………化けるかもしれない!!）

俺は期待に胸を躍らせ、負けじと剣を振るい始めた。

そこから少しはなれたところではハロルドとキャラが訓練をしていた。

『いい？魔法を使うことで重視すべきなのはタイミングよ。どこにどのタイミングで魔法を放つかでその効果は何倍にも膨れ上がる。ただがむしゃらに打つんじゃダメ、冷静になるのよ』

「はい！！」

木に突き刺したハロルドがキャラに話しかける。

キャラにもソーディアンマスターの素質が微弱ながらあった。

だがそれは話が出来る程度のことであって、持ってみても普通の剣と変わらなかったという。

しかし、それで十分だった。声が聞こえるのなら、指導は出来る。素質が無ければ私の声が聞こえる装置を作るとハロルドは意気込んでいたが、必要なくなつた。

『じゃあ行きなさい！！』

「はい!!」

キャラがモニターを弄るとガジェットが出現した。
全て1型だが、数は4体と、ひとりで相手をするには多い数だ。

『よく考えなさい。どうすれば一番いいか。それを見つかるの』

「はい!!フリード!!ブラストフレア!!」

キャラの横に浮かんでいた小さな白い竜が口を空けて炎を飛ばす。
しかし、ガジェットはすばやい動きでフリードの攻撃をかわした。

「は、速い!？」

『何を驚いてるのよ!!こんなの当たり前よ!!』

「は、はい!!」

キャラは考えた。ガジェット本体に直接打ち込むのでは話にならない。

どのような攻撃も着弾しないだろう。なら、直接打ち込まなければいいのではないか？

キャラはまだ幼い。経験も、知識も無い。だが、幼い故に、型に嵌らない独特な思考が出来た。

キャラは目でフリードに合図した。フリードは頷き、キャラは詠唱に入る。

フリードの口が再び開き、先ほどよりも大きな炎が集積していく。

「行つて!!」

キャロの掛け声とともに、炎の球体はフリードの口から離れ、地面に着弾した。

球体は爆発し、炎がガジェット達を包む。

だが、炎それ自体にはあまり威力がないように思えた。

それでいい。キャロの狙いは、次にあるのだから。

「我が求めるは、戒める物、捕らえる物。言の葉に答えよ、鋼鉄の縛鎖。錬鉄召喚、アルケミックチェーン！」

地面に魔法陣が展開し、そこから鎖が伸びる。鎖は素早く正確に全てのガジェットを捕らえた。

キャロは、やり遂げたのだ。

『無機物操作を組み合わせた捕獲………なかなか器用なことをするわね。でも、それで正解よ』

「あ、ありがとうございます!!」

キャロはハロルドの言葉に喜び、フリードと微笑みあった。

そして二人はルークとハロルドの手により、急激に成長していくこととなった。

ルークside

エリオ達との模擬戦を終えた後に俺ははやてに呼び出されていた。部隊長室の前に行き、ブザーを押す。しばらくすると、中から入ってもいいという許可の声が聞こえた。

「失礼します」

俺は一言そう言ってから部屋の中に入った。

部屋の中にははやてと、先日は居なかった小さな女の子が机に座っていた。

ふと、俺の視線に気づいたはやてが小さな女の子を手で示した。

「この子はリインフォース？（ツヴァイ）。リインって呼んでやってな。こう見えて曹長なんやで？」

「はやてちゃんの融合騎でリインといいます。よろしくなのです！」

「ああ、よろしく」

俺はリインにそう微笑みかけると、はやてに促されてソファアに腰掛けた。

対面にははやてが座る。

「模擬戦お疲れ様。どうやったフォワード陣は？」

「俺はエリオとキャラシしか見てませんけど、どちらも凄いです。エリオはまだまだ幼いから力がありませんが、なによりも速さがあります。キャラシも魔法にまだ慣れていないようですが、それでもあの年であそこまで器用なことは出来ませんよ」

「ふふ。そらよかった。でもルーク君？いつも通りに話してええつて言つとるやんか」

「あ、わ、悪い」

「ふふ、気にしとらんで」

「でな、今日ルーク君を呼んだのは他でもない文字のことなんや」

「文字？」

はやての言葉に俺は首をかしげた。

「そや、ルーク君文字が読めないやろ？そこで私が教えようつつうことや」

「え？で、でもいいのか？」

はやての提案は俺にとってはありがたいが、快諾は出来なかった。

「はやては部隊長なわけだから仕事が沢山あるだろ？なのに俺に教えるなんて……」

「大丈夫や。……それにルーク君に教えるためなら仕事なんか片付けるわ」

「え？・・・・・・・・・・」

最後のほうが聞き取れなくて俺ははやくに聞き返した。しかしはやくては手を横に振ってなんでもないと言った。

「それにルーク君に勉強を教えて事務作業を教えたほうがいいと思ったんや」

「あ、なるほど・・・・・・・・・・」

確かに文字が読めない俺に机上事務は無理だ。だからこそ、はやくは俺に勉強を教えようと思ったのだろう。だったら断ることはない。

「じゃ、じゃお願いします」

「はい」

俺の言葉にはやては笑顔で頷くと、立ち上がって紙とペンを何本か持ってきた。

そして驚いたことにそのまま俺の隣に座ったのだ。

「え？え？・・・・・・・・・・」

「ん？どうしたんや？こうしなきゃ教えられんやろ？」

「あ、いや、そうだけどさ・・・・・・・・・・」

『しっかりしなさいよルーク』

ハロルドのからかうような声が聞こえた。ふと隣を見ると、はやてが首をかしげていた。

もしかという考えが俺の頭をよぎり、はやてに聞いてみることにした。

「あ、あのさ。ひょっとして今の声聞こえた？」

「え？あ、うん。ルーク君もなんか？前も聞こえてな。気のせいかとおもったんやけど……」

はやてのことばに俺は頭を押さえた。どうやら彼女もハロルドの声が聞こえるらしい。

「実ははやてが聞いたのはこの剣の声なんだ」

俺は鞘から剣を抜いて机の上に置いた。はやてはそれをまじまじと見つめている。

『にしてもどういうことよ。ここには何人マスターの素質を持つてる奴がいるのよ……』

「っ！？」

突然聞こえた声と同時にハロルドのコアが輝き、はやては声にならない悲鳴を上げた。

『ちょっと、いくらなんでもその反応は傷つくわよ？』

「す、すまんすまん。分かってはいたけどまさか本当に喋るなんて・

「……………」

『まあいいわ。私はハロルド。この剣の規制人格よ』

ハロルドの規制人格という言葉に一瞬だがはやての表情が曇った。

『どうかしたの？』

「な、なんでもないで」

『そう？……………でも、貴女は私の存在に気づいてたんじやないの？』

「はは、流石やなあ……………」

はやては観念したようにため息をついた。

「シグナムから聞いたんよ。ルーク君がハロルドと言葉にすることが何回かあったって。それで考えたんや。ルーク君の魔力素質はE。要するに皆無ってことや。そのルーク君があんな魔法をバンバン撃てるわけない。なら……………考えづらいけど剣の方に秘密があるんかなって……………」

流石だと思った。伊達に部隊長を名乗っていない。その観察眼には目を見張るものがある。

「……………正解だよ。魔法は……………いや、晶術は全部ハロルドが使った……………」

「ほんならあの瞬間移動も？」

はやては晶術のことに關しては聞いてこなかった。
理解したのдарう。晶術が魔法のようなものと。

「いや、あれはハロルドの力じゃない。これの力だ」

そう言つて俺は服の中からレンズのネックレスを取り出した。

「なんやこれ？ ガラス？」

『正確にはレンズよ。聖女のレンズ。空間内を自由に移動できる、
言わばテレポートみたいなものね』

「・・・・・・・・・・それ、何回も出来るん？」

「いや、回数には限度があるよ」

「・・・・・・・・・・それでも反則やな・・・・・・・・・・」

そう言つてはやては肩を落とした。無理もないだらう。
瞬間移動で不意打ちが出来る上に、独立で魔法を發動する剣を持つ
ているのだから。

だがしばらくしてからはやては何かを考え始めた。

「さてよ・・・・・・・・・・魔力素質Eでシグナムより上・・・・・・・・・・
つてことは六課最強クラス・・・・・・・・・・これは使える・・・・・・・・・・」

「

何か不穩なことを考えているようだが、大丈夫だらうか？
俺の心配そんな視線に気づいたのか、はやては俺に微笑みかけてき

た。

「聞いてやルーク君。部隊には所持できる最低のランク数が決まってるんや。だから私らはそれを超えないように裏技としてリミッターをかけてる。私がSSランクからAランクまで落としてるようにな」

「え？はやってってそんなに凄かったんだな……………」

初めて会ったときから聡明な人だとは思っていたけど、なのは以上に強い人だったなんて思いもしなかった。

だけど考えれば当然なのかもしれない。はやてはこの部隊長なのだから。

「けどルーク君はEランク。つまり魔力ランクは最低だから、仮にルーク君が100人居ても制限にはひっかからないんや。でもってルーク君はシグナムと対等に戦える力を持つとる」

はやての言いたいことが何か分かった。

「つまり、俺は都合がいいってわけか」

「うん、そういうことや……………って違うで？悪い意味じゃないで？」

目に見えてあわてだしたはやてに俺は苦笑いした。

「分かってるよ」

「ルーク君は変なところで意地が悪いな……………そや、前

から気になってたんやけど、ハロルドって男の名前じゃ……」

頬を膨らませ俺のことを睨んでいたはやては、次にハロルドを持ち上げてそう聞いた。

「って、これめっちゃ軽いやん!？」

そしてはやてはハロルドの軽さに目を丸くした。驚きながらもハロルドをブンブン振っている。

ハロルドは止めなさいよと言っているが、はやてはどこ吹く風だ。

「ま、まあそれがソーディアンだからな。ちよっとハロルドが嫌がつてるからやめてやってくれ」

俺の言葉にはやてはハロルドの言葉に気づいたようで、謝りながら剣をテーブルに置いた。

「でも、俺も聞きたいな。どうして名前をハロルドってしたんだ？」

『簡単よ。私の行動原理は面白いかなかの。この名前にしとけば、未来の人たちが勘違いするかもしれないでしょ?』

ハロルドの言葉に、はやては口をあけて言葉を失っていた。

「じゃ、じゃあハロルドがルーク君と一緒にいるのって……」

『一緒に居ると面白そうだからよ』

ハロルドの言葉で俺は頭を抱えた。分かってはいたが、とんでもない女だと思う。

それでも力を貸してくれるのだから、文句は言えないわけだけど。

『あ、それとソーディアンを作ろうとしても無駄よ。確かにあんた達の世界の技術は目を見張るレベルだけど、それを使う人間がいなきゃ無理よ。そうねえ、有史以降最も優れた知識を持った科学者が仲間に居るなら可能かもね』

ハロルドの言葉にはやては絶句していた。そんなことは不可能だ。いや、もし仮に居たとしても、その人物でもソーディアンは作れない気がする。重さのない、そして魔法を独自で発動する剣を作るなど夢のまた夢だ。

「諦めるしかあらへんなあ……………」

はやては名残惜しそうにがつくりと肩を落とした。

「はやてちゃん、ルーク君ここに居る？」

そんなときだった。なのはが部屋に入ってくるのは。

「あれ？なのはちゃんどうしたん？」

「どうしたもこうしたもないよ。時間」

なのはの言葉に時計を見ると、もう夕食の時間を迎えていた。結構長い間はやてとハロルドと会話をしていたようだった。

「そつだ。はやてちゃんも一緒に食べようよ」

「ああ、ええよ。ごめんなルーク君。勉強会はまた明日な」

「あ、ああ。大丈夫だよ。ありがとな」

俺ははやてにそう言うとハロルドを手にとって立ち上がった。

剣を腰につけると、扉の方を向く。そうすると必然的になのはと向き合う形になった。

結論から言うとなのはは不機嫌だった。だが俺にはなんでなのはが不機嫌なのか思い当たる節が無かった。

「さて、ほな行こうな。三人で」

やたら三人ということを強調し、ニヤニヤ笑いながらはやては俺の背中を叩いた。

それに少しよろけたのは、俺が油断していたからではなく、はやての手に力が籠ってたからだろう。

だがその理由も俺には分からなかった。

夕食に関しては思いのほか盛り上がった。

はやてとなのは、そしてフェイトは同じ中学だったらしく、様々な話のはやてとなのはの口から話されていた。

その中にはフェイトに関する話もあって、本人の居ないところでそのような話をするのはどうかと思ったが、止めさせることなど出来るはずもなかった。

「なのは？はやて？何を話してるのかな？」

俺は二人を止めなかったことを心底後悔した。後ろから声がして、俺は振り向いた。

振り向いた先には、黒い笑みでなのははやてを睨みつけるフェイトが立っていた。

「ご、ごめん！！本当は俺が止めるべきだったんだけど・・・」

「

直ぐに立ち上がって俺は謝罪の言葉を口にした。

先程まで罪悪感を感じていただけあって、心の底から謝った。

しかし、次に聞こえてきたのは慌てた声だった。

「あ、ち、違うんだよ？ルークは悪くないんだよ？悪いのははやてとなのはの二人で・・・」

「え？・・・」

俺は唖然としながら姿勢を正した。目の前ではあたふたと焦るフェ

イトが居た。

その姿に可愛いと思ったのは俺だけの秘密である。

「ごめんね……フェイトちゃん……」

なのはが苦笑いしながら謝る。

その隣でははやてが笑っていたが、俺にリズムを狂わされたことで怒りが消えてしまったのだろう。

フェイトは恥ずかしげに俺の隣に座った。

「今度からは勝手に昔の恥ずかしい話を話さないでね？」

「はい」

二人が揃って言葉を発すると、フェイトは思い出したように俺を見してきた。

「あ、あのね。明日エリオ達の訓練が終わってからでいいから、私と模擬戦をしてほしいの」

模擬戦という単語になのはが眉をひそめた。

「えつとね……この前のシグナムとの戦いで、ルーク、瞬間移動みたいな魔法を使ったでしょ？それで戦ってみたいなんて……」

「で、でもあの瞬間移動は俺の力じゃ……」

「でもやってほしいの……ダメかな？」

泣きそうな顔で上目遣いをされ、俺は泣きたくなった。
どう断れというのか。しかもわざとじゃない分余計に太刀が悪い。
はやてに関しては、終わったなと呟いていた。事実そのとおりなの
だが。

「わ、分かったよ……………」

そう言った俺の顔は間違いなく赤かっただろう。

「ほんと！？ありがとう！！」

だが、フェイトがこんなにも喜んでくれるなら、それもいいかなと
思った。

「フェイトちゃんは強いぞ？本気でやらんとな……………」

目の前に座るはやてがプレッシャーをかけてくる。

俺はその言葉に苦笑いするしかなかった。

夕食後、俺は部屋に戻ってきていた。

いつものようにベッドに腰掛け、ハロルドを抜き放っていた。

『明日はフェイトと模擬戦ね。楽しそうじゃない』

「でもはやても相当強いって言ってたからなあ……………」

ハロルドの言葉に俺は自信無さげに返した。先日戦ったシグナムはライトニングの副隊長であった。

対して明日戦うフェイトはライトニングの隊長である。

副隊長と隊長の差がどのくらいあるかは分からないが、フェイトはなのはと単純に考えて同程度の力を持つことになる。

そして訓練を見る限り俺はなのはかなりの実力者として見ている。それになによりもシグナムのときは初見だったが、今回はフェイトは俺の戦い方を知っている。

ハロルドとレンズの力をフルに使っても、勝てるという保証はない。

『……………そうね。勝てるかどうかなんて分からないわ。だからこそ今は寝るべきだと私は思うけど？』

ハロルドの言葉に俺は笑った。実に彼女らしいセリフだと思ったから。

「そうだな」

俺は彼女に微笑み、剣を壁に立てかけると、眠りについた。不思議とその日は夢を見なかった。

「・・・・・・・・・・ならいい。フェイトちゃんは今日の模擬戦のために早く仕事を片付けるんだって。だから今日は居ないから朝食食べに行こう」

「あ、ああ、分かった」

俺はなのはにベッドから引きずり出された。

「じゃあ私は外で待ってるから」

そう言っとなのはは部屋の外に出て行ってしまった。
なのはを長い間待たせるわけには行かないので俺はすぐに着替えた。
最後に壁に立てかけてあったハロルドを腰に刺すと、俺は部屋を後にした。

「す、凄いですね・・・・・・・・・・」

「やっぱりこの時間帯は人が凄いね……」

沢山の人がテーブルを占領している光景を見て俺たちは言葉を失っていた。

料理を手に入れるまではよかったが、席が見つからず、トレイを持ったまま辺りを見回すことになった。

ふと、奥のほうで腕が揺れているのが見えた。

「なのはさ〜ん！！ルークさ〜ん！！こっちあいてますよ〜！！」

奥で手を振っていたスバルが叫ぶ。俺たちはトレイを手に、スバル達の居るテーブルへと向かった。

そのテーブルにはスバルを含めてフォワード陣が勢ぞろいしていた。

「ルークさん！！今日はフェイト隊長と模擬戦するんですよね！？頑張ってください！！」

「こらスバル。ルークさん困ってるわよ」

トレイを置いて座ろうとした俺に、スバルがそう話しかけてきた。俺が返答に困って苦笑いしていると、ティアナがフォローしてくれたので助かったが。

「でもエリオやキャラからしたらちよつと困るんじゃない？今回の模擬戦は」

同じくルークの隣に座ったのはが二人を見ながらトレイを置いた。エリオは困ったように頭をかく。

「そうなんですよね。ルークさんは師匠ですし、フェイトさんは保

護者ですから。正直どっちを応援したらいいか分からなくて」

『まあ何が起ころうとも勝つのは私だけだね』

「まあハロルドさんならそう言うと思いましたよ」

キャラの言葉に、エリオ達は困惑した。キャラはしまったと口を押さえている。

どうやら隠し通せないようだ。

「みんな聞いてくれ」

俺は鞘からハロルドを取り出すと、皆に見せた。

その剣の風貌にフォワード陣だけでなく周りに居た人も啞然としている。

キャラはすまなそうにこちらを見ていたが、俺は気にするなと微笑みかけた。

「この剣はソーディアン・ベルセリオスって言って中にハロルドって言う規制人格があるんだ。こいつの声は一部の人にしか聞こえないんだけど、ちゃんと存在してる。シグナムとの模擬戦で見せた魔法もハロルドのお陰なんだ」

俺の言葉に皆は困惑していたが、やがてなのはが小さく声を上げた。

「あ、あのさルーク君。その声私も聞こえると思うんだけど……」

「え？……」

なのはの言葉に俺は心底驚いた。ハロルドも息を呑んでいるのが分かる。

『あんたまで私の声が聞こえるの!?!』

「あ、うん。今聞こえたのがハロルドさんだね。よろしく」

『え、ええよろしく』

「た、確かに聞こえていますね……………」

『嘘でしょ……………」』

ハロルドは愕然としていた。前にハロルドから聞いたがソーディアンの素質を持ったものはそう多くはないらしい。

それなのにこんなに早く、ましてや狭い六課で四人も素質がある人間に出会うとは思わなかったのだろう。

「キャラも聞こえるの?」

「うん。といっても私は聞こえるだけで使ったりは出来ないんだけどね」

キャラとエリオがハロルドのことについて話し始める。

「そのハロルドさんっていうのは私達のデバイスよりも優秀なんですか?」

『当たり前よ。そんなポンコツなんかより私のほうが100倍上よ』

ティアナの声にハロルドはきつく返したが、そもそも声が聞こえない彼女は俺となのはをじっと見つめている。

「えっと、やっぱりデバイスよりかは優秀みたいだね。独立で魔法が使えるみたいだし」

なのはは苦笑いしながらそう答えた。ハロルドが当然のように得意げでいるのを感じているのだろう。

「だからシグナムとの戦いで勝てたのもハロルドのお陰みたいなものなんだよな」

「へえ」………

四人はしばらくハロルドを見つめていたが、俺が鞆に剣をしまうと再び食事に取り掛かった。

しかし、ハロルドのことに関する話はまだまだ続いた。

「気をつけてねルーク君。知ってると思うけど、フェイトちゃんは強いから」

不安げな瞳が、俺を捉える。俺はしっかりと頷いた。

エリオとキャロの訓練終了後、時間通りにフェイトは訓練場にやってきた。

急いで仕事を片付けたからなのか疲れた様子だったが、模擬戦はやる気満々だった。

俺は歩いて廃屋の影から出てくる。見上げれば、フェイトがバリアジャケットを展開して佇んでいた。

初めて俺はフェイトのバリアジャケットを見た。

なのはが白を基調としていたのに対して、フェイトは黒を基調としていた。

今回の試合では、フォワード陣だけでなく、シグナムの時と同じように全員がモニター越しに見ているらしい。

だが、例え見られていようが見られてなかるうがやることは変わらなかった。

全力でフェイトと戦う。ただそれだけである。

『ほな始めるで』

前回と同じくはやてがモニター上に現れる。俺はハロルドを、フェイトはバルディッシュを構えた。

『試合、開始！！』

試合開始と同時に俺は目を疑った。先程まで目の前にいたはずのフ

エイトが突然視界から消えたのだ。
慌てる俺は、その直後何かを感じ取った。来る！！

「っ！？マジかよ！！」

俺は反射的に後ろに剣を向けていた。フェイトのバルディッシュと俺の剣がぶつかり合う。

もしも持っている剣が重みの無いハロルドでなければ俺はやられていただろう。

速い。目では捉え切れないほどの、圧倒的な速さ。

『これは凄いわね』

あのハロルドですら舌を巻いている。

次の瞬間、俺は視覚を捨てた。全身の神経を集中させてただ己の直感のみを信じた。

そして、わずかに違和感のあるところに打ち込み始めた。

一振り、二振りと剣を振るたびに、金属音が響く。そしてそれが繰り返されることに、フェイトは驚きを増していった。

「凄い……………凄いよルーク！！」

「何言ってるんだよ！！俺からすればフェイトのほうが全然凄いつて！！」

俺は本心からそう叫んだ。この速さ、反応するだけでも大変だ。少しでも気を抜いたら、持ってかれる。

とはいえすぐに状況は変わらない。なによりもフェイトは飛んでいるのだ。

そもそも防御しなくてはならない範囲が広い時点で俺に軍配が上がる。

るはずは無かった。

「ちっ！！ハロルド！！」

『デープミスト！！』

俺を中心に黒い霧が発生する。しかしフェイトは直ぐにその霧の範囲から逃げた。

無理だと俺は思った。広域魔法はフェイトのように速すぎると当たらない。

なら、剣で勝負するしかない。

俺はフェイトをじっと見つめた。フェイト自身も俺が何かをしようとしていることを悟り、警戒心を強める。

「行くぞ！！フェイト！！」

その言葉と同時に俺は時空を越える。時を刻むことなく、俺はフェイトの後ろへと回り込んだ。

「崩襲脚！！」

飛び上がったあとの蹴り下しがフェイトを襲う。

とっさに反応したフェイトは持ち前のスピードで直ぐに向きを変えて俺の蹴りを防いだ。

「っ！？……………」

攻撃の重さにフェイトの顔が歪むのが見えた。思ったとおりだ。フェイトは速い。おそらく俺が今まで見た誰よりもダントツだ。だからこそ、防御は薄いのではないかと思っていた。そして、それ

は正しかった。
空いている右手が剣とバルディッシュを越えてフェイトのジャケットを掴む。

「ごめんな、フェイト。烈破掌！！」

掌に力を収束させ、それを爆発させる。分散した力は無防備状態のフェイトを襲い、吹き飛ばした。

音を立てて吹き飛び、彼女は瓦礫の山に衝突した。とっさに俺はやりすぎたと思った。

零距离で烈破掌を繰り出すのは、威力が強すぎた。だが、次の瞬間にその考えが甘かったことを知る。

「リミッター、解除」

ふと、声が響いた。そして背後に違和感を感じたときには俺は吹き飛ばされていた。

先程フェイトが突っ込んだはずの瓦礫に、今度は俺が音を立てて突っ込む。

何が起ったのかまだ理解しきれていない。しかし、煙があげた視界に映ったのは掌に電撃を収束させているフェイトだった。

「ごめんね。プラスマスマッシャー！！」

雷撃が俺に迫る。俺はそれを横に回転して避ける。しかし次の瞬間にはフェイトが俺の懐に入り込んでいた。

バルディッシュから伸びた鎌のような魔力刃が、煌いた。俺は咄嗟にレンズの力を使用した。

本日二回目の使用。もう、そう何回も使えるものではない。だが、今のフェイトは強い。

それこそレンズの上限を気にしてられないくらいに。

（リミッター解除、つまり先日シグナムは本気じゃなかったってことかよ！！）

俺は内心で悪態をつく。あれがフェイトの本気なのだろう。そしてもしそうなら、俺に勝ち目は無い。それでも、やるしかない。

「ハロルドおおおおおおおおおお！！本気だ！！」

『行くわよ！！スプラッシュー！！』

ハロルドのコアが煌き、それと同時に水が空から落ちてくる。

だが、ハロルドの声が聞こえるフェイトからすれば避けるのは当然のことだった。

だから、こそ、俺はもう一度フェイトの後ろに跳ぶ。

「うおおおおおおおお！！守護方陣！！」

剣で空中に布陣を描き、フェイトに攻撃すると同時に俺は体力を回復した。

もちろんそれもフェイトは見切って避けて見せた。本当ならここで終わる。

そう、普通なら。だからこそ、ハロルドの力が生きてくる。

『さらに！！クラッシュュガスト！！』

直後にハロルドが発した声にフェイトは目を見開いた。

次の瞬間には氷のつぶてがフェイトを傷つける。衝撃と痛みの中で、

フェイトはバルディッシュを後ろに構えた。そして、吹き荒れる氷のつぶての中で、フェイトはバルディッシュを振るった。風圧で俺の構えが崩される。そして一瞬だが俺は見た。痛み顔に顔をしかめながらも俺をしっかりと見据えた強い目を。

「はあああああああああー！」

< j e t z a m b e r >

直後俺は目を見開いた。剣へと姿を変えたバルディッシュの刀身が、伸びた。

「嘘だろ！？」

俺は咄嗟にハロルドでその刃を受け止めたが、力負けして地面に叩きつけられた。

俺の体によって土ぼこりが舞う。しばらくしてからモニターが上空に現れた。

『やりすぎやでフェイトちゃん！！』

目に怒りのこもったはやてがフェイトを咎めていた。しかし、フェイトははやてに目を向けることすらしない。

「まだだよ」

フェイトは土埃が舞った地点をひたすら見つめていた。そうだ。ただだ。

『キュアー！！！！』

土埃が、晴れていく。俺は晴れた視界の先でしつかりとフェイトを捉えていた。

そのままハロルドをフェイトに向けて声高に叫んだ。

「フェイト！！本気でやれ！！それが礼儀ってやつだろ！！」

先程からフェイトは手を抜いている。俺にはそれがはっきりと伝わっていた。

だからこそ、その言葉にフェイトはうろたえた。

「俺は確かに弱い！！だけど、だからって甘えてちゃダメなんだ！！戦って強くないとダメなんだよ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ルーク」

俺の言葉にフェイトは目を伏せた。しかし次の瞬間には強い目で俺を見つめていた。

「・・・・・・・・バルディッシュ。プラズマザンバー、行くよ」

<Yes , sir>

「ちょ、フェイトちゃん！？」

プラズマザンバーと発言したフェイトにはやては慌てた声を上げる。しかしフェイトは尚も彼女を見ようとはしなかった。

「ここで本気にならなかつたら失礼に当たる。それに・・・・・・・・もしルークが大怪我したら私が責任取るから・・・・・・・・」

フェイトの言葉にはやては黙らざるを得なかった。もう誰にも止められない。

俺たち二人を。この戦いを。

「ルーク……私の本気、見せてあげる!!」

「来い!!」

フェイトの足元に魔方阵が展開し、剣と化したバルディッシュに雷撃が収束されていく。

俺はその状況を見ながらハロルドを下ろして右手をフェイトに向けた。

ルークside

髪が逆立つのがわかる。フェイトを中心に雷が集束し、その力を示す。

その光景を見て、俺は震えていた。恐怖からではない。喜びからだ。こんなに強い人間と戦える。俺はまだまだ強くなれる。

「雷光一閃!!」

フェイトの掛け声とともにバルディッシュがカートリッジを何本も消費する。

来る。フェイトの最大の技が。

「はあああああああああ!!」

フェイトの前方に、黄色い魔法陣が展開する。

そしてバルディッシュを斬りつけた瞬間に、そこから雷を集束させた砲撃が俺に向けて発射された。

凄、俺は心底そう思っていた。あの雷撃を防ぐ手段は今の俺にはない。

ハロルドなら持つてるかもしれないが、今はまだ協力してくれないだろう。

なら、奥の手を出すしかない。

「うおおおおおおおお!!」

俺は右手を迫る雷撃に翳し、意識を集中させる。手のひらを蒼い光が包んだ。
次の瞬間、俺の手のひらから破壊の光線が打ち出される。
それはフェイトが放った全力の雷撃を尽く分解していく。

「嘘っ……………」

フェイトの表情が驚きに染まる。しかし俺はそれに構っている暇はなかった。
もし俺が集中を切らせば超振動は暴走し、フェイト達を巻き込むかもしれない。
しかし俺は伸びていく光線を見ながらあることに気づいた。
俺から離れるにつれて超振動のコントロールが弱まっていくことに。
このままではフェイトに当たる。

「ちっ!!」

俺は舌打ちをして手を引っ込めた。蒼い光の光線が、消えた。
勿論フェイトの雷撃は全て消していないので、俺はそれに飲まれる羽目となった。

なのはside

「ルーク君!!」

なのはは思わず叫んでいた。やりすぎだと思う。

横で見ているフォワード陣も啞然としていた。本気のフェイトを相手にするなどまだ無理があったのだ。

なのはははやてが試合終了と言う前に飛び出した。

土埃が舞う場所に飛び込み、手探りでルークを探す。

思ったとおり、ルークは中心で倒れていた。

「ルーク君!!」

慌てて駆け寄ったなのははルークを抱き上げた。傷は酷いが、命に別状はなさそうだ。

『ただ気絶してるだけよ。直撃の瞬間とその後には治療術を掛けたわ』

ハロルドの言葉になのはは安心した。しばらくすると土煙は風で消えた。

なのははルークを抱きかかえたままフェイトを睨みつける。

『なのは』

「分かってる。フェイトちゃんは悪くないって。ルーク君が望んだことだって」

ハロルドの言葉になのはは悲しげに俯いてそう呟いた。しかし、頭

では分かっているでも納得はしてないのだろう。

「皆!!運ぶの手伝って!!」

「「「はい!!」「」」

後ろを振り返ってなのは叫ぶ。するとすぐにフォワード陣が駆け寄ってきてルークを医務室に運び始めた。

「シグナム、ヴィータ、あとはやて。ちょっと来て」

フェイトはモニターで三人にそう連絡を入れると地上に降りて駆け足でなのは達を追った。

「大丈夫よ。命に別状は無いわ。彼は頑丈だから。といってもリミッター解除でプラズマザンバーはやりすぎね」

「う、ごめんなさい……………」

シャルの診断を受けてルークの命に別状は無いことが分かった。

だが、模擬戦の内容を聞いたシャルはフェイトを咎めた。

「まあまあ。リミッターの解除の許可出したのは私なんやし。そう怒らんといてや」

はやてが仲介役に入り、その場は丸く収まった。
その後しばらくしてからフェイトはゆつくりと話し始めた。

「多分私達の中で一番強いのはルークだよ。もし本気で戦ったら、多分誰も勝てない」

突然話し始めたフェイトに隊長、副隊長たちは訝しげな視線を向けた。

「さっきプラズマザンパーを分解した能力。あれがもし私まで届いていたら、私は消えていた。だからこそルークは途中で手を引つ込めたんだと思う」

フェイトの消えるという言葉にははやて達は息を呑んだ。

「嘘………やる？」

様々なものを分解する力。もしそれが本当ならルークは、はやて以上のロストログアとなる。

「で、でもよ。直線的にしか出せないんだろ？だったら……」

「それは私達が一回それを見たからだよ。初見で避けられるとは思わない。事実私はあの時術に集中していて動けなかったから」

ヴィータの意見をばつさり切り捨てたフェイトに一同は言葉を失った。

「重さが無く、魔法を独立で唱える剣、そして瞬間移動できる装飾品。さらには全てを分解する能力。ここまで揃っていると管理局の上層部が黙つたらん。皆、このことは内密にな」

はやての言葉になのは達は目を見開いた。もちろんルークのことを言うわけではない。

なのは達が驚いたのは、はやてが今までに見たこと無いような黒い笑みを浮かべていたからであつた。

「ほな皆は持ち場に戻り。ここは私が引き受けるから」

「はやてちゃんは？」

「私はほら、仕事は終わったし、もしルークが目覚めたら勉強教えるあかんからな」

はやての言葉に、隊長陣はしぶしぶ病室を後にした。

部屋に沈黙が流れる。はやてはじつと眠るルークの顔を眺めていた。

「ふふっ・・・・・・・・」

はやては嬉しそうに笑った。ルークの寝顔を見ているだけで、仕事で疲れた心が癒された。

「ん・・・・・・・・」

「ルーク君？」

ルークが唸る。はやてが声をかけると、ルークはゆっくりと目を開けた。

「はやて?・・・・・・・・ここは?」

「病室や」

「・・・・・・・・・・・・そうか、負けたのか」

はやての言葉を聞いたルークはしみじみとそう呟いた。

「そんなことないで。フェイトちゃんは言ってた。もし最後、ルーク君が手を引つ込めてなかったら負けてたって」

その言葉にルークは苦笑いするしかなかった。あそこでは手を引つ込める以外の選択肢は無いのだ。

あのまま続けていればフェイトは光となり、消えてしまっていたのだから。

それを考えると、やはり敗北だとルークは考えた。超振動はルール違反に等しい。

使わずに勝たなければ勝ったとは言えない。

「・・・・・・・・・・勉強しよっか」

沈んだルークの表情を見て、はやてはその手を握った。

はやてにとつては、模擬戦の結果などどうでもよかったのだ。

ただルークが悲しまなければ、それでよかった。

「ああ」

はやての心遣いを感じて、ルークは頷いた。
はやては微笑むと、鞆から教材を取り出して、勉強を教え始めた。
時折感じるはやてとの近い距離と彼女の表情に、ルークは顔を赤くしていた。

ルーク side

勉強が終わった後、俺は食堂によってパンをいくつか買い、部屋で食べた。

昼に多く食べて夜を少なくする。力に頼る俺向きではないが、昔テ
ィアに教わったことだ。

その後、俺はいつものようにベッドに腰掛けていた。

「負けちゃったな」

『よくやったほうだと思うわ。フェイトは本気だったし。それに、強くなればいいだけのことでしょ』

ハロルドのいつもの調子に俺は苦笑いするしかなかった。

俺は、彼女が羨ましい。どんな逆境にあっても前を向いていられるであろうその勇敢さに嫉妬する。

ハロルドはいつもそうだ。前しか見てないのだ。対して俺は後ろばかり見ている。

昔、仲間に卑屈と言われたことが、今ならよく分かる。

でも、俺は今更そうそう簡単にこの性格を変えることはできなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうだな」

俺はそう呟くと、ハロルドを壁に立てかけて眠りについた。
自分が自分で嫌になる。そう思いながら。

俺が居たのは図書館だった。だが俺はその図書館がどこかは知らない。

しかし、俺の間の前にいる幼い少女だけは誰だか分かる。間違いない。先程まで一緒に居たはやてだ。彼女は車椅子に座って本を探しているようだった。

（また・・・・・・・・夢か）

俺はここが夢の中であることに既に気づいていた。だが、止めさせようとしても目は覚めない。

腕をつねっても、止めると念じてても、目の前の光景が消えることは無かった。

写真のスライドのように目の前の光景が変わる。

次に出てきたのは、病院のベッドで眠っているはやてだった。

目の前の光景は、俺を無視して変わり続ける。

病院のベッドで絶望し、力を解放するはやて。

先日夢に出てきた幼いフェイトとなのはと戦闘する、綺麗な銀髪の女性。

そして、二人と共に化け物を倒すはやて。

その全てが、はやての過去だった。

俺は、勝手に見ているんだ。はやての過去を、辛い過去を。

「やめろ・・・・・・・・もうこんなの見せないでくれ!!」

俺は叫ぶ。それでも映像は止まることは無い。頭が・・・・・・・・割れそうだ。

「・・・・・・・・ク!!」

ふと、声が聞こえた。だが、周りを見ても誰も居ない。俺は笑った。どうやら俺はおかしくなってしまうたらしい。幻聴が聞こえるなんて。

「ルークー!」

「・・・・・・・・・・へ? フェイト?」

気づいたとき、目の前にはフェイトが居た。先日なのはの様に、俺を心配そうに見つめている。

「大丈夫? 凄くうなされてたよ?」

「あ、ああ。大丈夫だ。変な夢を見てな・・・・・・・・・・」

「また? 私?」

「いや、違う。今回はフェイトのことじゃない」

フェイトも夢には出てきたが、あれははやてを中心とした夢なのだろう。

でもそうだとしたらおかしい。はやては今は普通に歩けるのだ。病院に居たはやては動けなかったのに。治ったのだろうか?

「ルーク? 大丈夫? 大丈夫なら私の部屋でなのはが待ってるから行く?」

「あ、分かった」

「じゃあ先に行ってるね」

フェイトが部屋を後にしてから俺は着替えに取り掛かった。
着替えはなのはに頼んだところ、暇があった局員に頼んで買ってきてもらうことになった。

といつても俺が外に出るときの格好はもう決まっているのだが。

「なんでこんなに高性能なんだろうな」

俺は自身がずっと身に着けている服を見て呟いた。

白を基調とした服は、これまでの戦いで幾度もボロボロになり、汚れた。

だが、そのたびにこの服は自身で破れたところなどを修復した。

驚くのはそれだけでない。洗濯すれば汚れはすぐに消え、恐ろしいスピードで乾くのだ。

お陰で俺は局員が買ってきてくれた服を殆ど身に着けてない。

ハロルドを腰に刺して、部屋を出る。そのまま隣にあるなのはの部屋をノックして、入った。

中では既に二人が朝食を取っていた。その横には俺の分もある。

「いつも悪いな………」

「気にしないでいいよ。ここの食材は六課のお金で買ってるようなものだから」

すまなそうに席に着く俺になのはは微笑んだ。

目の前に座るフェイトを見る。夢の中で幼い彼女は先日俺が受けたプラズマザンバーを放っていた。

「なあ、フェイト」

「ん？どうしたの？」

「この前フェイトが出したプラズマザンバーって小さいときも出せたか？」

「え？うん。出せたよ？」

フェイトの言葉に俺は考え込む。そうするとやはりあの夢は現実なのだろうか？

「ルーク君？早く食べないと訓練遅刻しちゃうよ？」

「あ、悪い」

考え事をしていることをなのはに咎められ、俺は再び食事に取り掛かった。

食事をしながらも、俺は夢のことが気になって頭から離れなかった。

「あ、ルーク君、はやてちゃんが後で部屋に来て欲しいってさ」

「え？俺？」

「うん。なんでもハロルドさんのことについて聞きたいことがあるらしいよ？」

「そうか。分かったよ」

俺は、はやてに聞いてみようと思った。夢のことを。

そしてそれが本当にはやての過去なら、正直に謝ろう。俺はそう決心した。

3・5（前書き）

明日から三日間友達の家泊まりに行くので、感想に返信出来ないかもしれません。

携帯で頑張ってはみますが、返信来ない場合は日曜日の夜まで待つてください。

あ、この話の感想は返信できます。

ルーク side

はやての部屋のブザーを押す。すると中から入っていいと許可を得られた。

中には、はやての他に、シグナムとヴィータが居た。はやては立ち上がると俺の傍に寄ってきた。

「なのはちゃんから聞いてると思うけど、ハロルドを調べさせて欲しいんや。、ええかな？」

「ハロルド？どうだ？」

この剣は確かに俺の剣だが中にはハロルドという規制人格が入っている。

俺だけの意志で決めるわけにはいかないのだ。

『別に構わないわよ？調べても何かが分かるとは思えないけど』

相変わらずなハロルドの口調に俺は苦笑いした。そのままハロルドを腰から外してはやてに手渡す。

はやてはそれをシグナムに手渡した。

その際に俺ははやての足のこと気がなってじっと見てしまった。

「あ、あのルーク君？そんなに見られると恥ずかしいんやけど・・・」

「え？」

顔を上げると赤くなりながら目をそらすはやてが目に入った。
その後ろではシグナムが険しい目で俺を見ている。

「ルーク。気持ちは分かるがそうじろじろと見るものではないぞ」

「な！？ち、違う！！」

「認めろつて。まあ、はやては確かに魅力的だからしょうがないけどな」

尚も冷やかしてくるシグナムとヴィータに俺は口が滑った。

「だから違うつて！！はやてが歩けるようになったんだなあって思っただけなんだつて！！」

その言葉で、三人の表情が変わった。

「あ……………」、「ごめん」

「……………」シグナム、ヴィータ。ちょっと外してもらってもええか？」

シグナムとヴィータはしぶしぶ頷き、部屋を後にした。
部屋の中に沈黙が満ちる。

「聞かせてもらおうか。どうしてルーク君が私の過去を知ってるのか。闇の書事件は調べても簡単には分からん筈やで？」

「ごめん・・・・・・・・その、夢で見たんだ」

「夢？」

はやての声に不機嫌さが滲み出た。俺は必死で弁解する。

「う、嘘じゃないんだ！！確かに夢で見たんだよ。図書館に居るはやてや病院に居るはやて、小さなフェイトとなのはと戦う銀髪の女性を・・・・・・・・」

俺の言葉にはやては絶句していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・夢見かいな」

はやては呆れたように俺を見た。

「全部正解や。ルーク君が見たのは確かに私の過去やよ」

「う、ごめん！！」

「ちょ、なんでルーク君が謝るん！？」

はやての過去を見てしまったということで俺は頭を下げた。しかしはやては慌ててそれを止めさせる。

「だって俺は、勝手にはやての過去を・・・・・・・・」

「夢やったんやろ？しょうがないって。ルーク君が罪悪感を感じる必要なんかないんや。いつか話そう思ってたから」

そう言っではやては自身の過去を話し始めた。夢の内容に補足するように。

しかしその表情は悲愴に満ちてはいなかった。むしろ、良い思い出のように話していた。

でも、俺が見た銀髪の女性、リインフォースに関する話のときだけは、悲しそうに俯いていた。

「じゃあ六課を建設したのって……」

「そや、リインフォースの願いのためでもあつたんよ」

俺ははやての六課への思いをより深く知った気がした。

彼女がどんな思いでこの六課を設立したのか、それを教えてくれた。はやては顔を上げると俺に微笑み掛けてきた。

「ほな次はルーク君の番やな。話してもらうで。ルーク君の過去を」

分かっていったことだ。こうなることは。それにはやての過去だけを知っているのは不公平だ。

俺はゆつくりと過去を話し始めた。前にフェイトに話したのと同じ。自分がレプリカであること。世界のために死んだこと。

俺がアグゼリユスの話をしなかったことも含めて、フェイトに話した内容とまったく同じだった。

「なんや……なんやそれ……」

はやての言葉に俺は彼女を見た。はやては泣いていた。スカートを握り締めて、必死に何かに堪えるように、涙を流していた。

「そんな酷すぎる！！いくらレプリカやからって、そんな理由で死ななきゃあかんなんて……間違つとるよ！！」

俺はゆっくりとはやての手を握った。

「はやて。お前が泣かなくてもいいんだ。俺はここに居る。生きてる」

「違う……違うんや……」

はやては顔を上げずに呟いた。そのまま俺を優しい暖かさが包む。

「ルーク君の代わりに泣いてるんやよ……」

はやての言葉に俺は何も言えなかった。視界が………渗む。

「ずっとここに居ればええ。私も、皆も、誰もルーク君のことを拒絶なんかせえへん。私が絶対にそんなことさせん………だから………」

「はやて………」

俺はゆっくりとはやてを抱きしめた。涙が、はやての髪を濡らす。

「ありがとう………」

俺は、怖かった。否定されることが、拒絶されることが、とても怖かったんだ。

でも、今俺を暖めてくれている彼女は、とても優しくった。

あのあと、はやては時間になり、聖王教会に向かう時間になり、俺ははやての部屋を後にした。

結局ハロルドの事に関しては何もわからなかったらしい。

異世界の剣なので当然といえば当然の結果だとハロルドは愚痴をこぼしていた。

俺はあの後訓練場に向かい、なのはとスバル達の訓練を見ていた。フォワード陣四人は先日と同じようになのはに一撃を入れることで成功となっている。

しかし、現在四人は疲労困憊であり、先日よりも条件が厳しいように思えた。

「それじゃあ行くよ、レディー………ゴー!」

なのはの掛け声とともに魔力弾が飛来する。

「二分以内で決めるわよ!!」

ティアナの掛け声と共に四人は散り散りになる。どうやら短期決戦で行くつもりらしい。
青い帯が、空中に張り巡らされる。

「うおおおおおおおー！」

その上をを使って高速で接近するスバル。そしてなのはは後ろにティアナが銃を構えていることに気づいた。
挟まれた。しかしなのはは慌てずに魔力弾を加速させて二人目掛けて飛ばした。

そしてなのはの弾が二人に命中すると同時に、二人は光となって消えた。

「シルエツト……やるねティアナ」

そう呟いたなのはの後ろに再び青い帯が出現する。その上から不意にスバルが現れた。

なのはは手を伸ばし、シールドを展開する。スバルとなのはの拳が、激突する。

その途中で、なのはは意識を変えた。飛来していた魔力弾が、突然軌道を突然変える。

「っ！？」

スバルはそのことに瞬時に気づき、後ろに後退した。
先程までスバルがいた場所を、二発の魔力弾が通過していく。

「うん、いい反応」

なのは満足げに頷いた。スバルはそのままウイングロードに着地したが、バランスを崩して倒れそうになる。

「うわつと・・・・・・・・」

後退するスバルを、高速の二つの弾丸が追跡する。

（こらスバル危ないでしょ！！）

（ごめん！！）

（待ってなさい、今打ち落とすから！！）

ティアナはスバルに念話でそう話すと、銃を構えた。しかし、引き金を引いた途端に、それは不発に終わった。

「ええ！？」

「ティア！！援護！！」

「くつ、この肝心なときに！！」

ティアナは再びカートリッジを銃に詰めて、構える。四発の橙色の魔力弾が打ち出された。

「来た！！」

スバルは待つてましたと言わんばかりにウイングロードから飛び上がる。

それを見つめるのはの後ろで、エリオとキャロが攻撃の機会を伺

っていた。

「我が乞うは、疾風の翼。若き槍騎士に、駆け抜ける力を」

>>Boost Up Acceleration<<

キャロのケリユケイオンが桃色に輝き、そこから生じた光がエリオの槍を包む。

エリオの足元の魔法陣が煌き、ストラダのブーストが火を噴く。

「あの！かなり加速が付いちゃうから気をつけて！」

「大丈夫！スピードだけが取り柄だから！」

エリオはキャロに微笑みかけると、なのはを見上げた。
なのははティアナの二つの弾丸とフリードの炎を避けるので必死だ。
そしてそのなのはが、エリオの存在に気づいた。

「エリオ、今！！」

「いつけええええええええええ！！」

槍を構え、ストラダが煌く。打ち出すと同時に、エリオは物凄いスピードでなのはに突進した。

二人が激突し、爆風が舞う。エリオはそこから弾き飛ばされた。
そのままビルに着地するも、勢いを殺しきれずに止まることはなかった。

「エリオ！！」

「外した!？」

スバルとティアナが声を上げる。爆風が晴れた後には、なのはが立っていた。

>>mission complete<<

レイジングハートが、不意に呟いた。

「お見事。ミッションコンプリート」

「本当ですか？」

信じられないといった風に叫ぶエリオになのはは自身のジャケットを指差した。

「ほら、防御を突き抜けてジャケットまで通ったよ」

その言葉に、エリオが、キャロが、全員が笑顔になる。

「じゃあ、今日はここまで。いったん集合しよ」

なのははそう言うと、遠くに俺の姿を見つけて、手招きした。レンズの力を使用し、俺は跳ぶ。そしてなのはの横に着地した。

「「「うわあああああああ!」「」「」

急に現れた俺にフォワード陣は腰を抜かした。

「え?あ、あれ?」

「ふふ、この程度で驚いちゃだめだよ。奇襲はいつあるか分からないから」

戸惑う俺とは対照的に、なのはは終始微笑んでいた。

ふと、フリードが辺りをきよろきよろしているのが目に入った。

「・・・・・・・・・・なんか焦げ臭くないか？」

突然感じた臭いに、俺はふと口にした。

「スバル！！あんたのローラー！！」

「え？うわあ！！・・・・・・・・・・あちゃあ・・・・・・・・・・無理させちゃったかな・・・・・・・・・・」

スバルがローラを脱いで眺める。所々から煙が出て電気が走っている。

「オーバーヒートかな？」

「見てて思ったけどティアナの銃も厳しいんじゃないか？」

俺の言葉にティアナは自身の銃を持ち上げて苦笑いする。

「正直騙し騙しです・・・・・・・・・・」

「うーん・・・・・・・・訓練にも慣れてきたし、そろそろかな？」

なのはは四人を見渡しながら、最後に俺を見た。

「ルーク君はどう思う?。」

「うーん。まあ四人とはいえないのはに一撃食らわせたんだ。相当だと思っぜ」

俺の言葉になのはは満足げに頷いた。

「じゃあそろそろ新デバイスに変更だね」

「じゃあ一旦シャワー浴びて、着替えてロビーに集まるつか」

六課へ向かう途中で、なのははフォワードメンバーにそう言う。すると遠くから一台の黒い車が向かってくるのが目に入った。

「あれ?あの車って……………」

俺の言葉に全員が立ち止まる。

俺たちの前に止まった車に乗っていたのは予想通りフェイトとはやてだった。

「これフェイトの車なのか？」

「うん、地上での移動手段だよ」

俺の質問にフェイトは嬉しそうに答えた。その横に座るはやては何故だか急に不機嫌になった気がする。

「訓練はどんな感じや？」

「四人ともいい感じに成長してるよ」

なのはの言葉にフェイトはすまなそうにエリオとキャロを見た。

「ごめんね二人とも、私はライティングの隊長なのに……」

「いえ、大丈夫です！！ルークさんが教えてくれますから！！」

エリオの言葉にフェイトは俺を見て、ごめんねと謝った。

「気にするなよ。俺が好きでやってるだけだからさ」

俺の言葉にフェイトはありがとと呟いた。さらにはやての不機嫌が悪くなった気がした。

「二人はどこかにお出かけ？」

「うん、ちょっと本部に行く際にはやてを聖王教会まで連れてこ
うかなって」

「夕方には戻るよ」

「私は昼前には戻るから、お昼は一緒に食べようか」

「」「」「はい！」「」「」

そのまま他愛の無い会話をかわして二人は目的地へと旅立った。

はやて side

聖王教会の騎士カリムの部屋。その部屋で二人は向かい合って話を
していた。

ガジェットの新機、そしてレリックについての情報が流れたあとに、

はやてはカーテンを開いた。

「気にすることあらへん。カリムのお陰で六課はいつでも動かせる。即戦力の隊長たちは勿論、新人たちも実行可能、予想外の事態でも、しつかり対応できる」

「ふふ、頼もしいわね」

「それに……六課には切り札がある。これはまだ言えんけど、それでも何があっても大丈夫や」

はやては何か裏のある笑みを浮かべた。

ルークside

六課、メンテナンスルーム。

俺はフォワード陣となのはと一緒に新しいデバイスを見に来ていた。四人の前にはそれぞれ真新しいデバイスが浮かんでいる。

「それが皆の新しいデバイスなのです。でもそれはまだ真っ白な状態。だからデバイスと一緒に皆さんも成長していつてくださいね」

「……はい……」

リンの言葉に四人は頷いた。

「それぞれのデバイスにはリミッターが掛かってて、なのはさんやはやてさん、その他隊長、副隊長陣の許可を得ると解除できますよ」

「そういえばリミッターってなのはさん達もつけてますよね？」

シャーリーの言葉にティアナはなのはを見た。

「うん。私達はデバイスだけじゃなくて本人にもなんだけどね」

「まあ部隊ごとに決まってる制限を切り抜けるための裏技だな」

俺の言葉に、なのははしっかりと頷いた。

「うん。はやてちゃんとかは4ランクダウンだね」

その言葉にフォワード陣は何かを考え始めた。

「えっと、はやてさんはSSランクだから……」

「Aランクですか!？」

「なのはさんは？」

「私は元々S＋だから2.5ランクダウンでAAだね」

「大変なんですネ……」

フオワード達がしみじみと口にする中で、エリオは俺を見た。

「ルークさんは？」

「俺か？俺は魔力素質Eランクだから制限かける必要なんかないんだ」

俺の言葉になのはとリン以外の全員が啞然とした。

「ル、ルークさんEランクなんですか？」

「え？うん。魔法なんか使えないよ」

苦笑いしながら俺は呟いた。実際にやってみたが、からっきしダメだった。

やはり俺は魔法とかそういう類に向いてない気がする。

「ルーク君は六課の切り札。外部の誰にも話していないEランクで私達と並ぶ実力の持ち主。このことは他言無用だよ？」

「……はい！！」「……」

なのはの言葉に四人はしっかりと頷いた。

「それにしても切り札は言い過ぎだって……………」

俺の言葉になのはため息をついた。

「ルーク君は自分がどれだけ反則か理解すべきだと思っよ……………」

なのはのしみじみとした言葉に俺は反論しようとしたが、その前にアラーム音が部屋に響き渡った。

「な、何だ!？」

「第一級警戒態勢!？」

部屋を染める赤色の光が、俺たちを染め上げた。

ルークside

けたたましいアラーム音が、室内に響き渡る。モニターには、ALERTの文字。

「グリフィス君!!」

なのはの声に呼応するようにモニターが開く。そこにはグリフィスが映っていた。

「はい。教会からの出動要請です」

「なのは隊長、フェイト隊長、ルーク副隊長、グリフィス君。こちらはやて」

その後すぐに別窓でモニターが開き、今度ははやてがそこに映し出された。

「教会騎士団の調査部で追っていたレリックらしきものが見つかった。対象は山麓のリニアで移動中や」

「移動中!?!」

はやての言葉に俺は声を張り上げた。はやては頷き、説明を続ける。

「その通りや。内部にガジェットが侵入して制御が奪われてる。内部には30体以上のガジェット、未確認タイプも出てるかもしれない。」

いきなりハードな初出勤やけど、皆やってくれるか？」

はやての言葉に俺は一步前に出た。

「はやて。俺達はどういうときの為に居るんだ。お前がただ一言、やってくれと命じればいい。そうすれば、俺やなのは達は動く。そうだよな？皆」

「「「はい！」「」「」

俺の言葉にフォワード陣は元気良く返事をした。なのはも微笑んでいる。

「そか……なら機動六課、出勤や！」

「「「はい！」「」「」

その掛け声とともに、フォワード陣は部屋から飛び出した。俺はモニターに映るはやてをじっと見つめる。

「へえ、彼が切り札……………ね」

ふと、その横から金髪の綺麗な女性が映し出された。

「ちょ、ちょっとカリム……………」

「初めまして。私は騎士カリム。本当はゆつくりと話をしたいんだけど、状況が状況だからまた今度にするわね。頑張ってね、朱色の騎士さん」

「任せてください。必ずこの任務、成功させます」

カリムさんの言葉に俺はしっかりとそう言って部屋を出た。

「なかなかいい男じゃない。はやてが惚れるのも無理は無いわ」

「力、カリム！！何を言っとるんや！！」

俺が居なくなった部屋でモニター越しにそういった会話があったことを俺は知らない。

あの後俺たちはへりに乗り込んだ。

「危ないときは私やフェイトちゃん、ルーク君が助けるから、思いっきりやってみよう」

「……はい！！」「……」

四人は同時に返事をした。しかし俺はそのうちの一人、キャロの表情が優れないことに気づいていた。

「キャロ」

「は、はい!」

俺はしゃがんで目線をキャロに合わせた。

「大丈夫だ。自分の力を信じる。もし何が起こっても、俺が、俺達
が何とかするから」

「ルークさん……………」

俺は微笑んでゆつくりとキャロの頭を撫でた。そのまま横に座るエ
リオに視線を向ける。

「エリオ、守ってやってくれ。キャロを」

「はい!」

エリオの強い目に、俺は満足げに頷いた。

「シャーリーです!!空に多数のガジェット反応!!」

モニターに現れたシャーリーの言葉に俺はなのはのもとに行くと、
彼女に耳打ちした。

彼女はそれを聞くと頷き、行こうと頷いた。

「ヴァイス君、私も出るよ。フェイトちゃんと一緒に空を抑える！
ヘリはルーク君に任せるね!」

「なのはさん、お願いします！」

へりの投下口が開き、強い風が流れ込んでくる。
しかしなのはは暴風をもとめせずに、悠然と立っていた。

「じゃあ行ってくるけど、皆も頑張つてね。すぐに終わらせちゃう」

「「「はい！！」「」」

「なにかあったらルーク君に聞いてね。ルーク君、任せたよ」

「ああ」

俺の言葉になのはは頷き、空に身を投げた。空中で変身し、高速で空を駆ける。

その様子を見ながら、俺は振り返った。

「任務は二つだ。ガジェットの殲滅とレリックの確保。何かあったら通信してくれ」

そこで言葉を一旦区切り、俺は全員を見渡した。

「それじゃあ、死ぬなよ」

俺の言葉に四人はしっかりと頷いた。
言葉で返事はしなかったが、心に響いたことは表情を見れば一目瞭然だった。

「さて新人共、隊長さん達が空を抑えてくれているおかげで安全に

降下ポイントに到着だ。準備はいいか！！」

「……はい！」「……」

ティアナとスバルがコールサインを叫び、ヘリから飛び降りる。その後ろで、エリオとキャロは佇んでいた。

「エリオ、キャロ、一緒に降りろ」

俺の言葉に二人は頷き、互いに手を握った。そしてそのまま二人一緒に降下した。

「ルークの兄貴も大変ですね」

その様子を見てみると、不意に後ろから声をかけられた。

「そんなことない。これが、俺の使命だ。ヴァイス、俺も出る。このまま高度を保っててくれ」

「え？は、はい……………」

俺の言葉にヴァイスは戸惑いつつも返事をした。首にかけたレンズを指でなぞる。

「頼むぞ」

俺の呟きに、レンズは光り、俺はヘリの内部から消えた。

俺が移動した先はヘリの上だった。
頭上でプロペラが回っているが、ジャンプしない限り届くことは無いだろう。

「さてハロルド、初仕事だ。大きい頼む」

『高くつくわよ?』

「ああ」

俺の言葉にハロルドはつまらなそうにため息を吐くと詠唱を開始した。

不意に、俺の目の前でモニターが展開した。

「ルークの兄貴!どこにいるんですか?」

「ああ、今ヘリの……」

『ネガティブゲイト!!』

俺の言葉をハロルドの叫びがかき消し、闇の球体が高速で放たれる。それは正確に飛行型ガジェットを追尾し、貫いた。さらにベルセリオスのコアが煌く。

『さらに、イービルスファイア!!』

変則型のネガティブゲイトが消えた後にさらに大きな闇の球体がガジェットを飲み込み、破壊した。

「い、今のつてルークの兄貴の!?!」

「え? あ、ああ………」

正確には俺の力ではないが、そう答えておいた。ヴァイスは呆れたように俺を見つめた。

「ルークの兄貴、反則ですね………」

俺ではなくハロルドが反則なのだが、何故か反論できなかった。そのハロルドは波に乗っているようで次々と詠唱を繰り返していく。しかもかなりの大技のようで、詠唱が長い。

『ルーク!! 大技行くわよ!! 一応味方識別はつけてるけど、爆風に巻き込まれないように二人には警告しなさい!!』

ハロルドの言葉に俺は急いで二人と通信を繋いだ。

そしてモニターに二人の顔が映るや否や、早口でまくし立てた。

「二人共気をつけてくれ!! 今からハロルドが大技………」

『落ちよ！！メテオスオーム！！』

言葉の途中で俺は見た。上空から多数の隕石が飛来するのを。このとき俺も含めてフェイトもなのはも、そしてヴァイスも目を丸くした。

「な、なんなのこれー！！」

なのはがモニタ越しに叫びながらガジェットから離れる。

フェイトもすぐにその場から離れた。多数の隕石が、ガジェットを押しつぶしていく。

しかしハロルドの大技を持ってしても、殲滅は出来なかった。

「よしハロルド、このまま……」

ハロルドに引き続き魔法の使用を命じようとしたときに俺は見た。気を失ったエリオがリニアから投げ出されるのを。

「……………なのは、フェイト、悪いけどガジェットの殲滅は頼む。俺は……………用事が出来た！！」

「ルーク！？」

焦るフェイトを無視して俺はレンズに命じる。一言、跳べと。次の瞬間には俺はエリオと共に崖から落ちていた。

「吹き飛べ！！烈破掌！！」

右手がエリオの体を捉え、彼をリニアの方に吹き飛ばした。

威力は十分だった。エリオは正確にリニアへと打ち上げられた。

「よし、このまま……………」

俺は再びレンズに命じる。リニアまで跳べと。

しかし移動した俺が見たのは目を見開いたキヤロだった。

「しまつ……………」

俺はリニアまで届かなかった。レンズによる移動を普段から使いすぎた。

ここぞというときに、力が足りなかった。俺はかつてないほど頭を回転させる。

ハロルドを壁に突き刺すとしても、すでに遠く離れてしまっている。なのはもフェイトも急にこちらまでは来られないだろう。万事休すか。

そう思ったとき、太陽に雲がさした気がした。

「……………え？」

俺は思わず呟いていた。視界に桃色の髪が映った。雲だと思っていたものは、キヤロだった。

「馬鹿！！お前何して……………」

「こっちのセリフです！！」

キヤロが、俺の胸に飛び込んでくる。

「決めたんです！！私に笑いかけてくれる人を自分の力で守るって

「!!」

>> Drive Ignition <<

キャロのケリユケイオンが光を放ち、手袋全体に桃色の筋が通る。そしてケリユケイオンが眩く光つたと同時に俺とキャロを大きな桃色の球が包んだ。

重力が無くなったかのように、俺たちはゆっくりと浮かぶ。

「蒼穹を走る白き閃光。我が翼となり、天を駆けよ。来よ、我が竜フリードリヒ。竜魂召喚!」

キャロの手袋がさらに煌く。

まぶしいほどの光が辺りを包み、小さな白い竜が、巨大な竜へと姿を変える。

純白の白い翼を羽ばたかせ、鋭い牙を覗かせる口から叫び声が轟く。その姿はまさに竜と呼ぶにふさわしかった。

「フリード!!! ブラストレイ!!!」

キャロの言葉にフリードが口を開く。炎が収束し、先程よりも遥かに強力な炎がガジェットを包んだ。

しかしガジェットは炎が命中する直前でバリアを展開し、その攻撃を防いだ。

「キャロ。俺がやる。出来るなハロルド」

『勿論!!!』

俺の言葉にキャロは頷き、フリードを急上昇させた。

「ルークさん」

振り返るとキャラが俺を心配そうに見つめていた。

「大丈夫だ。すぐに終わらせる。それに俺にはキャラがついてる」

俺はそう言つと踵を返してガジェットを見下ろした。

風が、俺の長い髪を弄ぶ。その気持ちよさを感じながら、俺はフリードから飛び降りた。

ハロルドのコアが、白く輝く。

「行くぞ！！吹き飛びな！！紅蓮襲撃！！」

炎を纏った俺の蹴りはリニアの天井を捉え、噴火のように噴出した炎がガジェットを飲み込む。

衝撃で痛む足を無視して俺は剣を振るった。この位置なら、届く。

「守護氷槍陣！！」

今度はハロルドのコアが紫色に煌いた。俺の足元に巨大な蒼い魔法陣が展開する。

そして俺を中心にして氷槍が魔法陣から放射状に飛び出した。

そののいくつかがガジェットの巨体を貫く。貫かれたガジェットは機能を停止させ、爆発した。

「終わったな」

『ええ』

俺と、一部の人間にしか聞こえないハロルドの声が、風に流された。

様々なモニターがリニアの状況を映し出す対策本部では、全員が啞然としていた。

その中には先程着いたばかりのはやても居た。

「な、なんやメテオスオームって・・・・・・・・・・」

誰もが言葉にしたかったことをはやてが代わりに口にした。

確かに新型のガジェットを破壊したルークの剣技も目を見張るものがあった。

だが彼はシグナム、そしてフェイト戦でその剣技を惜しみなく披露しているのだから驚きは小さい方だった。

むしろヘリの上から隕石を多数降らせた魔法の方がはやて達には衝撃的だった。

「測定結果出ました！！魔法ランクにしてSです！！」

シャーリーの言葉に一同が息を呑む。

部隊長、はやての使う最強の魔法ラグナロクがSランク魔法として登録されていることは周知の事実だ。

そのラグナロクと同威力の魔法。加えて範囲はラグナロクより広いのだ。普通ではない。

「シャーリー、詠唱時間は？」

「約30秒ですー!!」

30秒。少々長すぎる。確かにあの威力なら納得の行く時間だが、使い勝手が良い訳ではない。

「あくまでなのはちゃんとフェイトちゃんが居て成り立った晶術つてことやな」

ここに来て、はやてはルークの本質に気づいていた。

確かにルークは強い。六課最強と言っても過言ではないだろう。だが剣の腕ではシグナムに劣り、ハロルドの強力な魔法は詠唱に時間がかかる。

さらにはやての一番頭を悩ませる瞬間移動はそれほど多く使えるわけではない。

「切り札であることは変わらんけど………無敵ってわけやないんやなあ………」

呟いてからはやては自分が当然のことを言っていることに気づき、苦笑いした。

だからこそ、ルークのことを隠す必要がある。

もし初めてルークと戦うなら、勝てる人間は居ないだろう。

勿論、そのただけではない。ルークを危険な目にあわせないためにそうしようとしていることに、はやては既に気づいていた。

「これはそのうちカリムの言ったことが否定出来なくなるかもしれないな……」

はやての小さな呟きは、部屋の誰にも聞こえることなく闇に消えた。

モニターが多数展開した一室。王宮を思わせる大きな部屋に、男は立っていた。

その表情は驚きに染まっている。

「ウーノ、彼はなんだい？」

「分かりません、調べましたがどのデータにも該当しませんでした」

その言葉に男は笑った。

「なるほど・・・・・・・・言つなれば六課のジョーカーというわけか・・・・・・・・」

いつのまにかモニターは漆黒の剣を所持した朱髪の少年の画像のみとなっていた。

「レリックもプロジェクトFの残滓も無視しろ。私達の脅威は彼一人だ。彼を調べ上げろ！」

「はい」

男はじつとモニターを見つめる。その唇は愉快そうにつり上がっている。

「素晴らしい、素晴らしいぞ六課の名も知らぬジョーカーよ！私をもっと楽しませてくれ！！」

狂ったような男の笑い声が部屋に響いた。

ルークside

「なんであんな無茶したの!？」

リニアでのレリック事件の後、無事に六課に帰還した俺を待っていたのはなのはからの説教だった。

とはいえ覚悟していたことである。俺は能力を多用し、死にかけたのだから。

俺に弁解の余地はないので黙って聞いていたが、心配してくれるなのはの存在に少しだけ心が暖かくなっただのは俺だけの秘密だ。

「レンズでの移動もそうだし、折角助けてくれたキャラとフリードから飛び降りるなんて……」

ただ、長いのだ。保護者が子供を心配しているようになのは俺のことを心配してくれている。

それはとても嬉しいが、説教の長さに俺は若干くたびれていた。だがもしそんなことを態度に出したらどうなることは目に見えているので俺は必死に耐えていた。

「まあまあ、なのはちゃんもルーク君を心配する気持ちは分かるけど、結果的にルーク君の活躍でエリオはリニアから投げ出されること無く、キャラもフリードを使いこなせたんや。それぐらいにしていればあげなきゃそろそろルーク君が可哀想やで」

そんな俺に、救いが訪れた。偶々ロビーを通りかかったはやてが俺に助け舟を出してくれたのだ。

「ま、まあそうだけど……………」

なのはははてに言われて渋々説教を終わらせた。

「それにルーク君も疲れてるやろうし。もう部屋に戻ってええよ」

「ありがとうはて！」

俺ははてにお礼を言っていると、部屋に向かって走った。態度には出さなかったが、正直かなり疲れていた。

微笑んで手を振るはての横では、納得のいかない表情をしたなのはが心配そうにこちらを見ていた。

心の中でなのはに謝ると、俺は部屋に向かった。

ハロルドを床に立てかけると、俺はベッドに座り込んだ。ベッドに足が体重で沈み、疲れを癒してくれる。

『まあ初任務にしてはかなり良い出来だったと思うわよ?』

不意にベルセリオスのコアが光った。ハロルドからすれば上出来だったらしい。

だが、俺としては反省すべき点も多い気がした。

「しかし、まいったな。レンズの力を使いすぎた」

何よりもリニアでのレンズ使用である。力が足りなかったのだ。

『まあ、しばらくは使わないほうがいいわね。いざって時に使えなかったら困るし』

「そうだな」

この先、何が起こるか分からない。今はなのは達と幸せな生活を送っているが、いつ戦いが起きるかも分からない。

そのために、力は温存しておくべきだ。

「うーん。何とかしてレンズの残り使用回数とかが分かんないかな?」

『流石にそれに関しては分からないわね。そもそもワープする仕組みが分からないんだから』

ハロルドの言葉は尤もだった。それに彼女に分からないのなら俺に分かるはずも無いだろう。

せめてワープ回数を増やせる方法があればいいなとは思ったが、それは流石に欲張りなきがする。

俺は窓から外を見た。沢山の星が輝いている。俺は不意に窓を開けて空を見上げた。

「……………なあハロルド、この星空は、どこまで繋がってると思う？」

『変なこと聞くのね。私の意見ではどこまでもよ。時空が違ってても、人が夜空を見上げてる限り、見ているのは星空だわ。偽者も本物もない、ただの星空』

その言葉に、俺は目を細めた。俺は、本物になりたかった。偽者じゃない、本物のルークに。
でも、そう願えば願うほど、偽者である現実を冷酷に突きつけられた。

それ以来、俺は偽者として生きた。
ローレライの解放も、瘴気の中和も、全部本物の代わりに俺がやろうと決心した。
それが、あの世界での俺だった。

でも、この世界は違う。この世界には偽者も本物も存在しない。
俺と似た存在のフェイトは皆に受け入れられている。そしてレプリカである俺も。

俺はいつしか夢で見たフェイトの過去を思い出していた。
クローンと言われ、母親から存在を否定されたフェイトを助けたのは、なのはだった。

この世界で最初に俺を救ってくれたのも、なのはだった。
俺はしっかりと感じていた。この、機動六課の皆の暖かさを。

空を見上げるのを止めて窓を閉めようとしたとき、俺の目に一人の女性の姿が映った。

その女性は芝生に座り込んで先程の俺と同じように星空を見上げていた。

「フェイト？・・・・・・・・・・・・・・・・」

芝生に座っていたのは、金の髪を風に靡かせる、フェイトだった。

俺は六課の出口に向かって歩いていた。フェイトと話をするためである。

何故か分からない。俺は、彼女と話をしたと思った。

そしてそこに向かう途中で、見慣れた桃色の髪を見つけた。

「あれ？キャロ？」

俺の言葉に、桃色の髪の少女・・・・キャロは振り返った。
そして俺の姿を見つけるなり、嬉しそうに微笑んだ。

「キャラも眠れないのか？」

「はい。疲れてるはずなんですけど、初めての出勤で頑張りすぎちゃって、まだ緊張してるんです」

キャラは俺の言葉に恥ずかしそうに笑った。実に彼女らしい理由だなど、笑みがこぼれた。

「ルークさんも眠れないんですか？」

「まあそんなところかな、外にフェイトの姿を見つけたから、ちょっと話でもしてこようかと思ってさ」

急に、キャラが悲しげに俯いた。俺は慌てて彼女に声をかける。

「ど、どうかしたか？」

「いえ・・・・・・・・・・・・・・・・ルークさんはフェイトさんのことが・・・・・・・・」

顔を上げたキャラは俺に何かを聞きかけて、その途中で口を止めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ごめんなさい。なんでもないです。そろそろ戻りますね。もう遅いですから」

「え？あ、ああ・・・・・・・・・・」

キャラはスタスタと俺の横を通り抜けて部屋に戻ってしまった。その背中が、一人にしてくれと語っているように思えて、俺は引き止めることなど出来なかった。

キャラロside

部屋に戻ったキャラロは無言でベッドに飛び込んだ。すぐに自身の親友である竜が駆けつける。

「フリード………なんでもないよ」

キャラロの言葉にフリードは納得がいていないようだったが、渋々彼女から離れた。

そのまま仰向けになり、キャラロは天井を見つめた。

キャラロは幼いながらも、自分の感情に気づいていた。

ルークが崖から落ちるとき、キャラロはとてつもない喪失感を感じた。それを拭うために、キャラロは崖に飛び込み、ルークを助けた。

いくら幼いキャラロでも、その気持ちが何なのか気づいていた。

キャラロは、いつの間にかルークに惹かれていたのである。

ルークは、まさしくリーダーの器だった。どんなときでも仲間を想っていた。

時には自分のことを蔑ろにして冷や冷やする場面も有ったが、それも全て含めてルークだった。

だが、自身を救ってくれた保護者であるフェイトもまたルークに惹かれていた。

そしてルーク自身、キャロには分からない何かでフェイトに興味を持っている。

諦めたくはない。だがなにより、キャロはまだ幼すぎた。

「・・・・・・・・ひよつとしたら・・・・・・・・励ましてくれたことに感謝してるだけかもしれないよね」

キャロは自身の恋慕を無理やり憧れへと変えた。それが、キャロが選んだ道だった。

ルークを想っていても、彼女にはそれを成し遂げるための経験も、知識もなかったのである。

ルーク side

六課を出てからすぐにフェイトは見つかった。彼女は六課近くの芝生で腰を下ろしていた。

「フェイト」

俺は静かに声をかけた。フェイトは振り返り、俺の姿を確認すると、一瞬驚いた顔をしたが、すぐに笑顔になった。

「どうしてここに？」

「窓から星を見てたらフェイトの姿が見えたんだ。それで、話をしたいなと思ってさ」

「ふふ、嬉しい」

俺の言葉にフェイトは心底嬉しそうに笑ってくれた。その笑顔があまりにも綺麗で、俺は一瞬だが言葉を失った。

彼女はそのまま夜空を見上げた。その姿に俺は何か幻想的なものを感じて、つい見入ってしまった。

絵になるなんてものじゃない。夜空に栄える金髪を持った彼女は、とても綺麗だった。

「私ね、今まで夜が好きだったんだ。特に雲の無い星空は大好きだった」

不意にフェイトが俺に話し始めた。その視線は夜空から離すことは

い。

「前に話したよね？なのはが助けてくれたって。夜空に浮かぶ星がなのはを表しているみたいで、心が休まるんだ」

その言葉に俺は納得した。なのはは確かに星をイメージさせる。星を冠した技も、優しく輝くような性格も。しかし次の瞬間にはフエイトは俺を見て微笑んだ。

「でもね、今では昼も好きだよ。私達を照らしてくれる太陽は、私を一人の人間として認めてくれた、ルークの朱髪を表しているようだから」

屈託のない笑顔に、胸を締め付けられるような痛みを覚えた。

この苦しさは、何だ？確かに苦しいが、嫌な痛みではない。むしろ――

そこまで考えたところで、俺の頭にある人物がよぎった。それは、俺のことを悲しそうに見つめるティアだった。その瞬間に、胸の痛みは消えた。ふとフエイトを見ると、悲しそうな顔でこちらを見ていた。

「どうかしたの？なんか嫌なこと言っちゃったかな？」

「え？……………な、なんで？」

「だって……………辛そうな顔をしていたから」

その言葉に俺は初めて感情が表情に出ていることに気づいた。その原因も分かっている。間違はなく、さっき出てきたティアだ。

「だ、大丈夫だよ！！ちょっと変なこと思い出しちゃってさ」

俺は慌ててそれを誤魔化した。フェイトは俺を見つめていたが、やがて夜の寒さに体を震わせた。

「寒いね。もう戻るね。ルークもあんまり長く外に出てたらダメだよ？」

「ああ、分かってる」

フェイトは立ち上がるとそう俺に言って踵を返した。

「じゃあ、また明日ね」

「ああ」

俺の言葉にフェイトは微笑み、六課へと戻っていった。

俺は彼女の姿が見えなくなってから再び夜空を見上げた。

先程の胸の痛みの理由が分からない。何故あそこでティアの表情が過ぎったのかも。

ここ最近、ティアのことを思い出すことはそうそうなかったはずだが、はつきりと頭を過ぎった。泣きそうな彼女が。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・なんなんだ」

俺の呟きは誰にも聞かれることなく消えた。星が、煌いていた。

ルークside

夢を見ていた。今まではなのは達の過去を見ていたが、今回はまったく違った。

見ているのは、俺達がヴァンと戦っている夢だった。俺の剣が、ヴァンを傷つけていく。

それと同じようにヴァンの譜術が、剣が、俺や仲間を傷つけている。俺はこの戦いの結末を知っている。だが、この戦いから目が離せなかった。

これがあのとときの再現なら、見れるはずだ。最後の瞬間、俺に何が起きたのか。

前と同じように、俺が第二超振動を発動させて、世界を蒼く染める。そしてティアの譜歌が響く中、俺はヴァンに突進した。

超振動を発動させ、ヴァンを呑み込む。

そしてその力が弱まっていったとき、俺はみた。青色の光が俺を包むのを。

夢の中の俺は目を見開き、力を爆発させる。そして、戦いが終結した。

次に俺が見たのは自室の天井だった。時計を見ると、いつもフェイトやなのはが起こしてくれる時間よりも早い。

珍しく自分で目が覚めたようだ。

俺はベッドから体を起こし、考えた。最後に俺を助けてくれたあの光はいったい何だったのか？

勿論、考えたところで何も分からないのは目に見えている。

だが、無視するわけにもいかなかった。

扉が、音を立ててスライドする。扉の向こうにいたのは、フェイトだった。

彼女は俺がベッドから起き上がっているのを見ると、驚いたように目を丸くした。

「珍しいね。ルークが起きてるなんて。悪い夢でも見た？」

「いや、偶々目が覚めちゃっただけだよ」

俺はそう答えたが、フェイトは真相を見抜くためにじっと俺を見つめている。

「大丈夫だつて。確かに夢は見たけど、嫌な夢じゃないんだ。ただ不思議な夢っただけで……」

「どんな夢なの？……あ、またなのはに怒られちゃうね。朝食のときに聞かせてね」

フェイトは一旦俺のベッドに腰掛けて夢について聞いてきた。

しかし次の瞬間には前になのはに怒られたことが頭をよぎったのか、部屋から出て行ってしまった。

俺は布団を押しつけてベッドから出ると、着替えはじめた。

着替えながらも俺は無意識にあの世界でのヴァンとの戦いを思い出していた。

「最後に戦ったときの夢？」

俺の斜め前に座るなのはが不思議そうな顔をしながらそう聞いてきた。

「ああ、世界を救うための最後の戦いで、よく分からない力が俺を助けてくれたんだ。それがなんなのかって……」

俺はなのはの部屋に行った後に、フェイトに促されて夢のことを二人に話した。

といっても夢の内容は謎だらけで、二人は首を傾げてしまっている。

「誰かが助けたのかな？」

「でも誰が？それにルーク君の手を誰かが掴んだんでしょ？仲間の人は何も見てないの？」

なのはの言葉に、俺はあのときのことを思い出した。

ヴァンを倒した後に、皆と別れの挨拶はした。ティアとも別れを告げた。

だが、皆普通であつたし、何かがあつたというわけでもなさそうだ

った。

ただ唯一気になったのは、ジェイドがヴァンとの戦いが終わってから何かを考えていたことだ。

ひよとしたらあいつは気づいていたのかもしれない。俺を、俺達を助けた力について。

「皆はそんなことは言わなかったな。それにあの場に俺とヴァンしか居ないのは確実だったし……」

確かに手を暖かい何かが包んだとき、目を動かしてその元を探したのだ。

だが、何も、誰もいなかった。不思議なことだらけである。

「まあ、終わっちゃったことを考えてても仕方が無いし、気にしないでいいんじゃないかな？ そのうち分かるかもしれないし」

「そうだね。私もそう思うよ？」

二人はよく俺が夢を見たかどうか聞く。夢を見たならその内容を細かく聞いて、見てなければ安心したように息を吐く。

二人とも俺のことを心配してくれているのだ。夢でうなされていたあの日から。

その心遣いが嬉しくて、暖かくて、俺は微笑んだ。

「ありがとう。二人共」

俺のお礼にフェイトは少し赤くなりながら小さな声で返事をして、なのはは微笑んでいた。

青い槍が、音を立てて地面をなぞる。コンクリートの地面に切り傷を残しながら、槍は高速で持ち上がり、俺に迫る。

俺は左手に持つ剣を素早く右側に回してそれを防いだ。衝撃が、俺の左手を伝わって体の芯まで響く。右足を力強く踏み込む。

回転の力を利用して、俺は全力でエリオを弾いた。小柄なエリオは吹き飛ばされたが、難なく着地した。

「さっきのフェイントは良かった！！でももう少し速く撃ち込めるはずだ！！」

「はい！！」

叫び、エリオは突進した。らしくない直線的な軌道。何かがある。剣を後ろに構えて、俺は待った。エリオが俺の間合いに入るのを。しかし彼が足を踏み入れた瞬間に、エリオは俺の目の前から急に消えた。

全身の毛が逆立つのを感じる。俺は咄嗟にレンズの力を使おうとし

た。

そこで思い出す。力に頼ってばかりではダメだと言う事を。

後ろに構えた剣の向きを変えて、そのまま縦に回転するように体を無理やり回す。

その過程において、確かな手ごたえが俺の手を伝わった。

驚いたエリオの顔が見えると同時に俺は全力で地面を蹴った。

槍と剣が、激突する。これでいい。俺の技はもうすでに始まっているのだから。

刹那、俺はエリオを通り抜けた。そのまま振り返りつつ剣を振り上げた。

エリオはその攻撃に反応し槍で防ぐ。しかし力負けし、防御を崩された。

そこに二発の蹴りが入る。そして止めとばかりにもう一度剣を振り上げた。

「飛燕瞬連斬！！」

しかし、エリオは咄嗟に槍の持ち手で俺の剣を防いだ。反応した事に驚きながらも、俺は攻撃の手を緩めない。

「崩襲脚！！」

強力な蹴りがエリオの腹にめり込み、吹き飛ばす。

そのまま地面に衝突した。砂埃が舞うが、やがて槍を杖にしたエリオが現れた。

「そこまでだ！！大丈夫か！！」

俺は急いでエリオに駆け寄った。飛燕瞬連斬までは予想の範囲内だった。

だが、最後の一太刀を防がれた瞬間に俺は本気になった。やりすぎたかもしれない。

しかしエリオは地面に座り込むと俺に微笑みかけてきた。

「大丈夫です！！でも悔しいです。今度こそ入れられると思ったのに……………」

「初めのころに比べればかなり成長してるさ。楽に防げなくなったしな。技を使い始めてるのが証拠だ。このままだとそのうちくらうかもしれない……………」

俺はエリオの頭を撫でながら彼を慰める。嘘は言っていない。確かに初めのころは相手にならなかった。

しかし最近ではエリオの動きにキレが出てきて、結構危ない場面がある。

羨ましいくらいの成長率だ。やはり子供は飲み込みが速い。

離れたところに視線を飛ばすと、ハロルドとキャロも訓練を終えていた。

俺の視線に気づいたキャロは木からハロルドを引き抜いて俺のところに駆け寄ってくる。

キャロからハロルドを受け取ると俺は鞘から解き放った。

太陽の光で、黒い刀身が煌く。闇夜では不気味さを感じる風貌は、日輪の元では何故か神秘さを醸し出していた。

「どうだった訓練は？」

『上出来ね。彼女、将来が楽しみだわ』

キャラの成長が嬉しいのか、ハロルドは心底楽しそうだった。

「よし、それじゃあ戻るか」

「はい!!」

俺の言葉に二人は元気良く返事をした。俺は頷いて六課に戻ろうとした。

そんなときだった。

「ルーク!!」

ふと響いた大声に俺は振り向いた。隊舎のほうからシグナムが歩いてきていた。

「訓練は終わったのだろうか？なら私と模擬戦をしてくれないか？」

「え?.....」

シグナムの言葉に俺は押し黙った。シグナムとの模擬戦は、確かに色々な物が得られる。

だが、お互いに本気でやるので相当疲れるのだ。倒れるまではいかなくても、ぐったりとするのは目に見えている。

そんなわけで、俺は返事を渋っていた。しかしシグナムは今か今かとまるで子供のように俺の返事を待っている。

その子供のような目に俺が負けそうになったとき、誰かが俺の手を掴んだ。

「すみませんシグナムさん。ルークにちょっと用事があるんで借り

ていきますね」

「え？あ、ああ・・・・・・・・・・・・・・・・」

声の主、なのはは俺の腕を取ると六課の隊舎へと無理やり連れて行った。

そしてシグナムと十分に離れてから、俺のことをため息混じりで見つめてきた。

「もう。今ルーク君シグナムとの模擬戦を受けようとしてたでしょ？そんなんじゃこれから何回も模擬戦させられちゃうよ？嫌なときは嫌って言わないと」

その言葉で俺は理解した。なのはは俺のことを助けてくれたのだ。困っている、俺を。

「わ、悪い。ありがとな。助けてくれて」

「面倒を見るって決めたから当然だよ」

なのはは満面の笑みでそう返事をした。しかし何故だか分からないが俺は気持ちが悪んでいくのを感じた。

それが何故かなど俺にはまったく分からないが。

その後、俺は六課の隊舎に着くまでなのはと会話をした。それでも何故かあまり楽しくはなかった。

エリオ side

訓練を終えたエリオとキャロは共に足を進めていた。スバルとティアナは既に戻っている。

二人は適当なところに腰を下ろした。エリオがキャロに話があると言って誘い出したのだ。

「どうかしたの？エリオ君」

「うん。ルークさんのことなんだ」

エリオの言葉にキャロは胸が高鳴るのを感じた。

顔が熱くなっていくのが分かる。幸いにも外は暗く、そのおかげでエリオに気づかれることは無かった。

「僕は、ルークさんと戦って分かった。あの人は強い。まだ本気のあの人と戦ってないけど、いつかは戦って勝ちたいんだ」

エリオはルークと模擬戦をしたあたりから自分の気持ちに気づいていた。

勝ちたい。他でもないルークに。自分よりも圧倒的に格上の彼に。

何年かかってもいい。それでも勝ちたいと。

だが、キヤロにはその気持ちは分からなかった。

確かにエリオにとってのルークの位置にいるハロルドは凄い。

魔法のレベルも、教える上手さも、尊敬に値する。

だが、それでもエリオのように彼女に勝ちたいという気持ちにはならなかった。

（これが……男の子……なのかな……）

キヤロは寂しさを感じていた。共にゆつくりと歩んでいた戦友が、突然遠くに行ってしまう。

そんな感覚。それでも、キヤロは力になりたいと思った。

脳裏に、ルークの模擬戦の光景がよみがえる。

「本気つてことは、ハロルドさんの力も、レンズによる瞬間移動も、……全てを消し去る力もだね？」

キヤロは自分で話していて声が震えていることに気づいた。

キヤロ自身、竜召喚という能力を所持している。そしてその力で彼女は部族から追放されたのだ。

それよりも遥かに強大な力を持つ彼は、どうしてあんなに笑顔でいられるのだろうか？

「うん。それら全てを含めて、僕はルークさんに勝ちたい。フェイトさんのように、結果的に勝つんじゃないくて、ちゃんと勝ちたいんだ」

それはつまり、ルークの超振動をかわし、彼に勝利するということである。

それがいかに難しいことか、キヤロも、そしてエリオ自身も気づい

ていた。

「・・・・・・・・もし戦うなら、ルークさんはエリオ君よりも速く剣を振れると思う」

「うん。ハロルドさんには重さが無い。だから僕が模擬戦で相手にしているときより、速く動くはずだ」

言葉を交わせば交わすほど、彼がいかに強いかが身に染みて分かってくる。

それでもキャラは気づいていた。エリオの目に強い意志があることを。

「それでも、勝ちたいんだ。なんでかなんて分からない。でも、僕はルークさんに勝ちたい」

キャラは分かってしまった。どうしてエリオが勝ちたいのか。

「それは・・・・・・・・ルークさんに宿敵と思えって言われたから？」

「え？・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

キャラの言葉にエリオは素っ頓狂な声を上げた。そしてしばらくしてから、考え始めた。

「そうかもしれない。今まで、教えてくれる人は沢山居たんだ。でもルークさんは違うんだ。僕にとってルークさんは師匠じゃなくて、なんて言うか、ライバルって感じなんだ」

そう呟くとエリオは苦笑いした。

「こんなこと言ったら怒られちゃうかもしれないけどね」

エリオはルークが7歳であることを知らない。だが、戦いの中で感じとっていた。

自分に似た何かを。エリオの言葉に、キャロは考えた。

エリオにとってのルークがライバルなら自分にとってのルークはなんなのだろうか。

ルークの顔を思い出すだけで心が温くなる。だが、キャロにとってはそれだけで十分な気がした。

「一緒にがんばろう」

「え？・・・・・・・・・・・・・・・・」

キャロの言葉にエリオは彼女を見た。彼女は微笑んでいた。

「どのくらい時間がかかるかわからない。でも、長い時間をかけてでも、一緒に頑張ろう。そうすれば、ルークさんに勝てる日が来るよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうだね。よし、頑張ろう！」

月明かりが二人を照らす。その光の下で、二人は微笑んでいた。頭に同じ人物を思い浮かべながら。

ルークside

静かな部屋に、ペンが走る音が響く。部屋には沈黙が満ちており、ペンを走らせている張本人である俺は必死に頭を働かせていた。そんな俺の隣では、濃い茶髪の女性、八神はやてがじっと俺の手元を見つめていた。

俺は一通り紙に様々な単語を記すと、ゆっくりとペンを机に置いた。緊張しながら、はやての言葉を待つ。しばらくしてからはやてはため息をついた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あかん。間違えてるで」

「・・・・・・・・・・・・・・・・まじか」

はやての言葉に俺はがっくりとうなだれた。はやての部屋以外でそんなに勉強しているわけではないが、今回に関しては自信があったのだ。

「もうこの単語間違えるの三回目やで？」

はやてが困ったように笑いながら呟いた。実は、そうなのだ。今回実施した単語テストは初見ではなく、既に三回目なのである。それでも俺は相変わらず同じような単語を間違えていた。

「読むのは完璧なんやけどなあ・・・・・・・・・・・・・・・・」

はやての言うとおり、読みに関しては結構出来るようになった。

これもはやての指導の賜物である。だが対照的に、書きに関しては苦戦していた。

というのも、俺が元にした世界とこの世界では文字がまったく違う。似ている共通点など全く無いと見なしていいくらいだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・今回はいけると思っただけだなあ・・・・・・・・」

俺はしみじみと口にした。自信が有った分。出来なかった際のショックは大きい。

「まあ次回やな」

はやての言葉に俺はため息をついた。もう何回目だろうか。次回に持ち越されたのは。

自分で自分が嫌になる。俺がもっと早く覚えてしまえば、はやての負担だつて減らせるのに。

はやては自身の時間のうち二時間ほどを俺との勉強時間に裂いてくれている。

一方でなのはから聞いた話だが、はやての仕事量はかなり多いらしい。

顔には出さないが、はやては少し疲れているように思えた。その事実が、俺の心を更に追い詰める。

「ああ！もう！！」

俺は自分の頭を掻き毟った。そんなことをしてもどうにもならないことは目に見えている。

しかし、こうする以外にこのイライラを解消する手段は存在しなかった。

その勢いで机を殴りつける。鈍い音が、部屋に響いた。手が、衝撃で痛む。

その手を、ゆっくりと暖かい何かが包んだ。

「焦ったらアカンよルーク君。一緒に頑張ろ?」

顔を上げてみると、優しくそんな笑みではやてはこちらを見つめていた。

その笑顔に、鼓動が速くなっていくのが分かる。それと同時に、顔が熱くなっていくのも。

それは、先日のフェイトの時とまったく同じだった。そう、まったく同じだったのだ。

(・・・・・・・・・・・・・・・・ティア)

ティアの泣きそうな顔が頭を過ぎるのさえ、まったく同じだった。そして俺の表情が曇ることも。

「ルーク君?ど、どうしたんや?泣きそうな顔してるで?」

はやては俺の表情の変化に気づき、慌てて聞いていた。

何から何まで、先日と同じだった。俺は前と同じように微笑んだ。

「大丈夫だよ。ちょっと変なこと思い出しちゃっただけだからさ。さ、勉強続けようぜ」

「え?あ・・・・・・・・・・うん」

はやては釈然としない顔だったが、勉強を始めた俺を見て仕方なくプリントに視線を落とした。

何も聞かれそうにないことに、安心しながらもどこか残念と
思っている俺が居た。

はやての勉強会は予定通り二時間で終了し、俺はなのは達と食堂で
食事をしていた。

「それではやてちゃん、ルーク君は勉強どうなの？」

「うーん。まだあかなあ、読むのは出来るんやけど、書くほうが
ね……………」

会話内容は、俺のことについてである。というかこのところ俺に
関する話しかしていないような気がする。

今回も、俺の勉強のことについて三人は話していた。

「でももう読めるようになったんだ。凄いね」

「そんなことねえよ。読みは結構簡単だったけど、逆に書きはまったくだしな」

「まあどの語学も読むより書くほうが難しいからね」

それは、いつもの光景だった。他愛の無い話をしながら、食事を食べる。ただそれだけだった。

ふと、フェイトがじっとこちらを見ていることに気がついた。

そちらに視線を向けると、彼女は真剣な表情で言葉をつむぎ始めた。

「ルーク、前から聞きたかったんだけど、ルークが持つてる能力はハロルドの魔法、レンズの瞬間移動、超振動による破壊で全部だよね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

突然のフェイトの言葉に俺は変な声を上げてしまった。

そのくらい急な話題変更だった。俺が隣の席に置いたベルセリオスのコアが輝く。

『フェイトは探ってるのよ。次回はルークに確実に勝つために。そのためには前回の超振動のような隠し玉がまだあったら困るでしょ？まあ流石にもうないと・・・・』

「ああ、そういうことか。一応あることにはあるよ」

『あるんかい！！』

ハロルドの言葉を途中で遮って真実を告げると、彼女は大声でツツコミをかました。

剣の中にいる彼女が唖然としている気がした。そして彼女だけでなく目の前の三人も驚いている。

「まだ・・・・・・・・あるんかい」

はやては呆れたようにそう言つと頭を押さえた。その横に座るフェイトも苦笑いしている。

「と言っても、超振動の延長にあるもので、第二超振動フオニムつていうんだ。超振動は物質を分解するんだけど、第二超振動は音素フオニム、俺の元居た世界で術を構成しているものを打ち消すんだ」

俺の説明に、はやては目を丸くした。

「つまり魔法は通用せんってことかいな・・・・・・・・」

「いや、この世界の魔法は音素フオニムで出来てないから打ち消せないよ。それと同様にハロルドの使う晶術も無理だ。まあハロルドが使う技のいくつかは前に仲間が使ってたから出来ないかなと思ってたんだけどな・・・・・・・・」

俺の説明に目の前の三人は納得したように頷いた。

「ってことはこの世界では第二超振動は使えないってことかな？」

「まあそうだな。でも、色々考えれば使えるかもしれないけど・・・・・・・・」

「でも逆にもし第二超振動がこっちの世界の魔法にまで適応されたら・・・・・・・・」

「その瞬間誰もルーク君を止められん……ルーク君、お願いやから裏切らないでや？」

はやてとフェイトに上目遣いでそう言われて俺は戸惑った。この二人、態とやっているのではないだろうか。

「大丈夫だよ。俺は、俺とハロルドは裏切らない。皆には良くしてもらってるしな」

『あら？私は分からないわよ？ひょっとしたら後ろからエクセキューションかも』

相変わらずのハロルドのテンションに、俺は苦笑いした。完全に遊んでいる。

ふと、なのはが微笑んでいるのが見えた。彼女は手を伸ばし、ハロルドを持ち上げる。

「本当にそういうことをする人はそんなこと言わない。それに私は知ってるよ。ハロルドさんは実はとっても優しい人だって」

『……私、今気づいたけどあんたのこと嫌いよ』

剣の中で、ハロルドが頬を膨らませている姿が思い浮かんだ。

その光景に、俺は笑みをこぼしてしまう。ふと見ると、真っ赤な顔でフェイトとはやてがこちらを見ていた。

『ちよっとルーク、あんた何笑ってるのよ？』

「ルーク君もハロルドさんが本当は優しいって知ってるからだよ」

『もしも私がソーディアンじゃなかったらあんた達のことを研究材料として分解しているところよ……』

ハロルドが不吉なことを言っていたが、やがて諦めたようだ。

「なんだ？面白いことをやっているではないか」

ふと後ろを振り返ると、すぐ傍にヴィータとシャル、そしてシグナムが立っていた。

俺は笑顔でシグナムを見つめる。

「もう仕事は終わったのか？」

「え？……あ、ああ」

俺の言葉にシグナムは少し視線をそらせてそう答えた。隣ではヴィータがため息をついている。

その後ろではなぜかシャルが微笑んでいた。

その光景が気になりはしたが、俺はとりあえずハロルドを床に降ろして椅子を空けた。

「座れよ。いつまでも立ってるわけにもいかないだろ？」

「……失礼する」

シグナムは短く礼を言うとトレーを置いて俺の隣に座った。ヴィータとシャルも近い場所に腰を下ろした。

「あのさ・・・・・・・・二人ともどうしたんだ？」

俺は恐る恐る前に座る二人に尋ねた。その二人、はやてとフェイトはむくれた顔でじつとこちらを見ていたからだ。

「二人はあれだ・・・・・・・・お前のことが・・・・」

何かを言いかけたヴィータはその続きを言うことが出来なかった。急に目の前から消えたはやてとフェイトが、その口を塞いでいたからだ。

正直言わせてもらうと、今の二人の動きはまったく見えなかった。それはなのはやヴィータも同様のようで、目を丸くしている。

「ヴィータ？ちょっとお話しような」

「口は災いの元なんだよ？」

怖い。二人が黒いオーラを出しながらヴィータを見つめている。何よりも怖いのはその微笑で、顔は笑っているが、目は笑っていないかった。

「な、ま、待つてはやて、悪かったっ、だから・・・・・・・・ルーク！！助けてくれ！！」

「さあさあ、ここじゃ食事の邪魔しちゃうから別のところこうな」

「ど、どこに連れてくつもりだ！！別にここでも・・・・・・・・」

「食事中に血はダメでしょ？」

「ひい!!」

ヴィータはフェイトの言葉に涙目になって悲鳴を上げた。流石に可哀想に思えてきた。

そう思った俺はため息をつきながら立ち上がり、二人に近づく。

「はやて、フェイト、そのぐらいにしといてやれ。ヴィータも反省してるし。だろ?」

俺の言葉にヴィータは物凄い速度で首を縦に振った。余程怖かったのか震えている。

「よしよし、怖かったな」

俺はしゃがみこんでヴィータの頭を撫でた。するとヴィータの涙腺は崩壊し、俺の胸に飛び込んできた。

「ル、ルーク………あ、ありがとう………」

泣きながら礼を述べるヴィータに俺は大丈夫だと背中を擦ってやる。

「流石に今回は主が悪いかと………」

「それ以上は言わんといてや………私もわかつとる………」

後ろでははやてが何故かシグナムに慰められていた。

暫くすると、ヴィータは泣き止み、椅子に座って食事を始めた。すぐにはやてとフェイトは謝ったが、ヴィータは笑顔で許した。

というか、ここに来たときよりもヴィータが上機嫌に見えるのは見

間違いだろっか。

俺はそう思いながら、食事を再開した。

「あ、そういえばシグナム、今日は悪かったな模擬戦付き合えなくて。今度余裕があるときでもいいか？」

「え？・・・・・・・・・・・・・・・・あ、ああ」

「悪いな。どうもシグナムと本気でやりあうと疲れるんだ。それに、やるなら全力でやったほうがいいだろ？俺も全力で気持ちよく戦うの好きだからさ」

俺の言葉に、シグナムは静かにフォークを食器に置いた。

「わ、私との模擬戦は好きか？」

「え？・・・・・・・・・・・・・・・・」

突然言われた言葉に俺は戸惑った。しかし、その言葉の意味を理解し、俺は笑顔で告げた。

「ああ、好きだよ」

「そ、そうか・・・・・・・・・・・・・・・・」

そうシグナムは呟くと、黙り込んでしまった。視線を感じてそちらを見ると、はやてとフェイト、ヴィータがこちらを睨んでいた。

「え・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の言葉に三人はなんでもないといい風に視線を外した。

表情から怒ってるのは間違いないのだが、その理由がまったく思いつかない。

シヤマルはニコニコ微笑んでいるだけだし、なのはも黙々と食事を続けていた。

まるで干渉したくないかのように。

そんな感じで、楽しいはずの夕食は実を言つとかなり居心地が悪かったわけである。

部屋に戻ってから、俺はハロルドと会話していた。とはいっても話を振ってきたのはハロルドのほうで、俺はそれに答えているだけであつた。

そのどれもが他愛の無い質問で、俺は退屈していた。しかし最後の最後で、ハロルドは真面目な声になり、聞いてきた。

『あんたがさつき説明した超振動と第二超振動。あれに関してはあまり口外しないほうがいいわ。あの三人が誰かに言うとは考えられないけど、一応明日黙っててもらえるようにしとくべきね』

「なんでだ？」

俺の言葉に、ハロルドは呆れたようにため息をついた。

『あんたは今まで何をしてきたのよ……いい？あんたは最強じゃないの。確かに強いけど、無敵じゃない。忘れたの？フェイトに一回シグナムとの模擬戦を見られただけで圧倒されたのを。多分もう一度フェイトと戦ったらあんたは負けるわよ』

ハロルドの言葉に、俺は黙るしかなかった。事実だからだ。俺は先日の戦いでフェイトに圧倒され、敗北寸前まで追い込まれた。もし次に戦ったら、惨敗するだろう。

『でも、あんたは始めて戦う相手になら絶対に負けない。絶対によ。勝てるわけが無い。魔法のオート使用に瞬間移動、そして全てを消し去る超振動。分かるわね？だから、隠すのよ。情報は力よ。これから先も生き残りたいなら、自身のことをぺらぺらと人に話すのはやめなさい。それで殺されても文句言えないわよ』

「……………そう、だな」

ハロルドの言葉で俺は思い知った。俺がどんな世界にいるのか。そして俺がどれだけ弱いのかを。

ヴィータ side

自室でヴィータはベッドに腰掛けていた。何かをしてるわけでもなく、ただぼーっとしている。

今日の食堂でのことは、自分が悪い。はやての気持ちを知りながら咄嗟に口が滑ってしまったのだ。

だが、ヴィータは今そんなことよりもっと別のことを考えていた。

フェイトとはやてに迫られたあのとき、ヴィータは地獄を見た。泣き出してしまっほどの悪夢。

しかし、ルークは自分を助けてくれた。抱きしめて背中を擦ってくれた。

他でもない、犯罪者の自分を。

いまでも思い出せる。あの温もりを。優しい目を。鮮やかな朱色を。思い出すたびに、鼓動が速くなる。ダメだ、はやての気持ちを知ってるのに。

そう思ったところで鼓動は戻らない。心と体は別物なのだから。

「やべーな」

腕を目に押し当てて、ヴィータはベッドに倒れこんだ。
冷たい感触が、背中を冷やした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・忘れられそうにねえよ・・・・・・・・」
「・・・・・・・・」

真っ赤な顔で、朱髪の彼のことを脳裏に描きながら、彼女は呟いた。

ルークside

「ルーク、起きてルーク」

体が、揺れる。それによって心地よい眠りから俺は引きずり出された。

体を起こし、閉じた目を開くと、目の前には微笑んでいるフェイトが居た。

「おはようルーク。じゃあいつも通り部屋で待ってるね」

フェイトはそう告げるとそそくさと部屋を出て行ってしまった。
最近の彼女はいつもこんな感じだ。なんというか、急いでいる感がある。

その理由までは分からないが。とにかくそんなことを気にしていても仕方が無いので、俺は着替えることにした。

いつもの服に着替えて、俺は部屋を飛び出す。勿論ハロルドを持っていくことも忘れない。

『・・・・・・・・・・・・・・・・なんか最近変よね？』

腰にベルセリオスをさすと、ハロルドが話しかけてきた。

「ああ、なにかあったのかな？」

『そうね・・・・・・・・・・・・・・・・』

二人して首を傾げていたが、考えていても仕方が無いので、俺は思考を放棄し、部屋を出た。
そしてその答えはすぐに分かることとなる。

「ホテル・アグスタ？」

俺は朝食のスクランブルエッグを飲み込んでそう口にした。
相変わらずフェイトのスクランブルエッグは絶品で、何度食べても飽きない味だ。

「うん。今日はその警護が仕事なんだ。なんでも骨董品のオークションがあるってことで、そこに出品されるロストロギアをレリックと間違えてガジェットが襲ってくるかもしれないからだって」

なのはの言葉に俺は納得の声を漏らした。その横でフェイトがフォークを食器に置いた。

「あのね、ルークとなのはには知っていてほしいの。先日分かったこと」

フェイトはそう言うとモニターを展開した。そこには様々な資料が映っている。

莫大な量の文章は読む気が失せたが、写真に関しては見逃さなかった。

「これ、この前のリニアで戦ったガジェットか？」

俺の言葉にフェイトは頷き、モニターを切り替える。今度は青い長髪の男が映し出された。

「ガジェット製作者、及びレリックを狙う人物の名前が分かったの。名前はジェイル・スカリエッティ。違法研究で広域次元犯罪者に指定されている人物だよ」

「あ！」

そのモニターを見ていたなのはが、驚いた声をあげた。ゆっくりと画面に触れると、画像が出てくる。

それは、青い宝石のようなものだった。だが仮にサファイアという宝石だったとしても、その形は異常だった。

「うん。このジュエルシードにもスカリエッティが関わってる。多分、私となのはを挑発してるんだと思う」

フェイトの言葉に俺はそれが何なのか思い出した。それはフェイトの夢で出てきたロストログア。

ジュエルシード。フェイトとなのははそれをめぐって何度も争った。フェイトは母の為に、なのははユーノの為に。そのために不毛な争いを繰り返した。

二人は戦いたくなかったのに。俺の中で、怒りが溜まっていく。

「なんだよ・・・・・・・・・・それ」

そんなジュエルシードを使ってフェイトとなのはを挑発するなんて許せない。

「ルーク。何もルークが怒らなくても・・・」

「怒るに決まってるだろ！！フェイトもなのはも俺の大事な仲間だ！！仲間を傷つけられて黙ってられるか！！」

フェイトの言葉を遮って叫んだ俺の言葉に、二人は目を丸くした。しかし、なのははすぐに笑顔になり、俺にありがとうと告げてきた。俺は大声を出したことに謝罪し、再び食事の手をつけ始めた。

スカリエッティに対する恨みも勿論あったが、フェイトとなのはの感謝の視線が、俺を暖かくしてくれた。

『なるほど・・・・・・・・・・天才科学者・・・・・・・・・・ね』

その横で、椅子に置いていたハロルドがふと言葉を発した。

「どうかしたのか？」

『いえ？彼は本当に世紀の天才科学者なのかなって思っただけよ』

ハロルドの言葉に俺は首を傾げた。資料を見て言っているのだろうか、何を言っているのだろうか。

『別に、ただ絶対的な天才と周り比べた場合の天才は違っってことよ』

ハロルドの言葉に俺も、フェイトやなのはも首を傾げるだけであった。

「ほんなら改めて、ここまでの流れと今日の任務のおさらいや」

ヘリの天井の取っ手に掴まったはやてが、モニターを展開する。そこには朝見た青い長髪の男、ジェイル・スカリエッティが映し出された。

「今まで分からなかったガジェット製作者、およびリック収集者は現段階ではこの男、ジェイル・スカリエッティの線を中心に捜査を進めてる」

「こっちの捜査は主に私が進めるんだけど、皆も一応覚えておいてね」

「……はい!!」「……」

フェイトの言葉にフォワード陣は返事をした。その横で、俺ははやて達と同じく天井の取っ手に掴まりながら考え事をしていた。

もしも彼がフェイトとなのはを挑発しているのなら、俺はそのうち彼と戦うはずだ。

戦うのはもう躊躇しない。人を殺すのも慣れたわけではないが、覚悟は決まっている。

だが、俺はどこまで戦えるだろうか？この不安定な力で。

「私達は中に居るから、もしガジェットが襲撃してきたときは副隊長達の言うことを聞いてね」

なのはとはやてが一通り説明を終えると、キャロはゆっくりと手を上げた。

「あのシャル先生。さっきから気になっているんですが、それは何ですか？」

俺の思考はキャロの言葉でかき消された。

「これ？これは隊長さん達のお仕事着よ」

微笑みながらそう告げたシャルを見て、俺はその足元に置かれた4つのケースを見つめた。

何故か知らないが嫌な予感がした。

ホテル・アグスタ。その入り口で、俺達は列に並んでいた。

並んでいるのはただ単に身分証を見せるためであって、大したことではない。

しかし俺はこれまでに無いほど緊張していた。俺の今の姿は黒のタキシードだ。

似合っているとは思えないが、それは別にいい。問題は別にある。

俺は前に並び、六課の身分証を見せた濃い茶髪の女性を見つめながらため息を吐いた。

途端に入り口で確認する人が驚いた声を上げる。

「こんにちは。機動六課です」

濃い茶髪をアップにして束ね、金の十字架のイヤリングを付けたはやてはそう説明した。

もう分かると思うが、俺を含むはやて、フェイト、なのはの四人は礼装している。

俺は服が変わるだけで大して変わらないが、この三人は別だ。

他の客が羨望の眼差しを向けるくらい、輝いている。

無事に入れた俺達は、内部の点検を始めた。勿論それは隠れて

こそそとやるわけではない。
なので俺は周りの、特に男性客の嫉妬の視線にさらされてぐったり
としていた。

「会場内の警備は流石に厳重つと」

「一般的なトラブルには十分対処出来るだろうね」

「まあ外はフォワード陣や副隊長が固めてるから安心やな」

その原因である三人のうちの二人は目の前で会場内の施設について
色々と話している。

なのはもはやても礼装しているが、基本的に目が行ってしまっ
てしょうがないのは、なのはのほうである。

彼女はいつも束ねている髪を解いてロングヘアーにし、白のネッ
クスを付けている。

いつもと違うなのはの雰囲気、俺はなるべく彼女を見ないよう心
掛けていた。

「ん？どうかしたのルーク君？」

しかし、逆に意識しすぎたのがいけなかったのか、なのはは俺の様
子がおかしいことに気づいてしまった。

「いや、なんでもないんだ」

俺は慌てて手を横に振ってなのはから離れた。近くにいるとまたボ
ロが出そうだった。

廊下に出て、人目のつかないところに隠れると、俺はため息をつい
た。

さつきからずっとなのは、フェイト、はやてと共にいるが、正直言
って疲れる。

男性達からの視線もそうだが、なによりこのままでは俺の心臓が持
たない。

しばらくの間深呼吸をしてから、俺は漆黒の剣の柄に触れた。

「今回の件、どう思う？」

『正直言わせてもらうと、間違いなくガジェットは出現するわね。
それがレリック狙いだろが何だろうがね』

ハロルドの言葉を聞いて俺は思考をめぐらす。

俺達は何かがあったときのための、いわば切り札だ。

特になのは曰く俺が出るのは本当に最悪の場合だけにしたいらしい。
その理由は分かってはいるものの、どうも自分だけが何もしないとい
うのは釈然としない。

出来るのなら今すぐに外の警備と合流したいくらいだ。

『男達の視線と、あの三人が目中毒すぎて、でしょ？』

ハロルドの的確な指摘に俺は苦笑いした。がつくりと肩を落として、
なのはの元に戻る。

だが、戻ったときにはなのはもはやてもその場に居なかった。

あれ？と思い手すりに手をかけて下を覗き込む。下に見知った金髪
が居ることを確認して俺は安堵した。

彼女が居るなら残りの二人も居るはずだ。そう思い、辺りを見渡す
と、一つ上のフロアの壁に隠れるようにして寄り掛かっているなの
はを見つけた。

大ホールから出て、階段を上がり、一つ上のフロアの扉を開いた。

なのはさつき見たときと同じ場所に立っていて、扉を開けると同時に至近距離になった。

その距離に、俺となのはお互いのことに気づくと、顔をわずかに赤くした。

「う、ごめん、驚かせたな」

「ううん。大丈夫だよ」

なのはの呟きを聞きながら俺は彼女の隣の壁に寄り掛かった。男性からの嫉妬の視線が一層強くなるが、無視した。

「フエイトちゃんから聞いた話だと、オークションを中止するのは無理みたい。でも開始時間を遅らせてるってさ」

「そうか・・・・・・・・・・・・・・・・」

二人の間に沈黙が走る。それを破ったのは、なのはの方だった。

「ルーク君の世界では剣で戦うのが当然だったの？」

突然の問いに俺は眉をひそめた。しかしなのははじっと俺の答えを待ち望んでいる。

「いや、そんなことないよ。他にも武器は沢山あったし、剣じゃないって槍を使う奴も居たからな」

そう口にしながら俺は昔のことを思い出していた。かつて居た世界では、俺の仲間の半分以上が剣ではない武器を扱っていた。

それは槍であり、杖であり、弓であり、様々であるが、敵サイドに

行けば銃に鎌、はたまた素手等、限りがない。

最後に戦ったヴァンや俺のオリジナルのアッシュは剣を使用していたが、そもそも彼ら自体が数少ない俺が出会った剣を用いる相手であった。

「じゃあルーク君はどうして剣を取ったの？」

なのはの続いての問いに、俺は考えた。この場合の剣とは真剣のことだろう。

木刀なら軟禁状態の下でヴァンとの稽古で使ったが、真剣を使ったのは外に出てからだ。

安全に警備された屋敷の中では絶対に会わないもの、それは魔物だ。屋敷を出てからの俺の前には沢山の魔物が立ち塞がった。

やらなければやられる、そんな世界。その世界で俺はティアの助言の下、剣を手にした。

なら、俺が剣を手にした理由なんて限られてくる。

「………生きるためと、大切なものを護るため、かな」

俺の言葉に、なのはは目を見開いて俯いた。

あの世界で、生きるためには殺さねばならなかった。

それは魔物だろうが人だろうが変わらなかった。斬らなければ自分が、あるいは仲間が傷つく。

最悪の場合、死ぬことだってあるだろう。だからこそ俺は剣を振るい続けるしか無かった。

「怖くなかった？生きるために、護るために剣を振るって、怖いことは………なかった？」

「あつたよ」

なのはの言葉に俺ははつきりと答えた。

怖かったに決まってる。相手が剣を振りかぶったとき、傷つけられたとき、魔術がこの身を焦がしたとき、そのいずれにおいても、俺は人生で最大の恐怖を味わった。

でも、一番怖かったのはそんなことじゃない。

「なによりも俺が殺したっていう事実が一番怖かった。この人には俺みたいに家族や仲間が居たのになって思うと、心が締め付けられた……」

言ってから俺は気づいた。何を言っているんだと。俺には家族なんか居ないじゃないか。

俺に居るのは奪った家族だけだ。あいつから、アッシュから奪った、家族。

「私がこの力を手にしたのはね、九歳のときなんだ」

不意になのはの言葉が俺の負の思考を打ち消した。

「私は九歳のときから既に飛ぶことが出来たんだ。それではやてちゃんやフェイトちゃん、皆と空を飛ぶことが出来るのが私の幸せだった」

そのことは知っている。フェイトとはやての過去に関する夢の中で、なのははその小さな体を風に乗せて飛んでいた。

それもとて嬉しそうに。彼女の言うとおり、飛ぶことが幸せなのだろう。

それは昔も今も、そしてこれからも。

「まだフォワードの皆には話してないんだけど、ルーク君には話すね。実はね、私十一歳のときに正体不明のガジェットに襲われて瀕死の重傷を負ったの。それこそもう空を飛べなくなるくらいのこと」

なのはの言葉に俺は啞然とした。俺はこっちの世界に来てからなのはの訓練を何度も見ている。

だからこそ知っている。なのはがどれだけ強いのか。

砲撃を主に使うので俺とは相性が良いが、それでも楽には勝てないだろう。

いや、そもそも勝利すること自体難しいかもしれない。そんななのはが、何故。

俺の考えを読んだかのように、なのはは悲しげに笑った。

「私ね、九歳のときに魔法に出会ってから色々が無茶な訓練ばかり続けてたんだ。何回も戦ったし、体に負荷をかけるレイジングハートの力も沢山使った」

俺は拳を強く握り締めた。なぜローレライはそれが起きる前に俺をこの世界に連れてこなかった。

そうすれば、護れたかもしれないのに。俺の中でやるせない気持ちが渦巻く。

今更俺が何かを思ったところで過去が変わらないのは分かっている。だけど、目の前で悲しげに俯いている彼女を、見たくなかった。

なのはにこんな顔をさせる出来事なんて、無くなってしまう方がいい。

「墜落してからは辛いリハビリ生活だった。それでももう一度、フイトちゃん達と空を飛びたいと思って私は耐えた。最終的に力は取り戻したよ。でも、弱体化は免れなかった」

俺は目を見開いた。あれで、弱体化？到底信じられないが、なのは嘘を言っている気配は無い。

「だからね．．．．．新人達には、無理してほしくないんだ。私みたいになつてほしくない．．．．．」

なのはの泣きそうな顔を見て、俺は悲しい気持ちになった。

はつきりとなのはの思いを感じた。なのはがどんな思いで新人達を鍛えているのか、よく分かる。

「大丈夫だよ。四人ともいい子達だ。ちゃんと分かってくれるよ」

俺にはそう言うしかなかった。なのはを励ます事しか俺には出来ない。

「．．．．．そうだね。そうだよね」

なのはは俺の言葉に微笑んでくれた。

その笑顔を見て安心しながらも、不安は拭えなかった。

何故だか分からないが、オレンジの髪の少女が脳裏を過ぎった。

ルークside

「それではオークション開催です!!」

二つのスポットライトに照らされたオークションの司会の言葉で、会場が拍手で包まれる。

俺となのは、フェイトは目立たない位置からその様子を眺めていた。もちろん警備は怠っていない。

「それでは品物の鑑定を行っていただく若き考古者を紹介したいと思います!!」

司会が手で幕を指し示すと、その後ろから金の長髪の男性が現れた。礼装をしていてきちんとした身なりだが、その姿は考古者というよりも優男に近い。

その顔や雰囲気には優しさが滲み出ている。といってもオークションの内容そのものに興味はないので、俺はただ見ているだけだった。

「紹介しましょう!ミッドチルダの考古者でもあり、無限書庫長でもある、ユーノ・スクライア先生です!」

「「え?」」

しかし、俺の目の前で何かを話していた二人は司会の言葉で一斉にステージの方を見た。
知り合いか何かだろうか?

「あ、ユーノ君」

嬉しそうに呟いたなのは見て、俺は言いよつの無いモヤモヤが心に広がるのを感じた。

オークションでの警備が終わった後、俺達はフォワードを集めて状況を聞いていた。
襲撃してきたガジェットは全て撃退、オークションも無事に成功させた。

にもかかわらず、なぜかティアナの表情は晴れなかった。
その原因も、何もかもなのは知っている。だからこそ、なのはは彼女を気遣うように声をかけた。

「ティアナ、ちょっと私とお散歩しようか」

なのははティアナを連れて、散歩に出かけてしまった。
それを見て俺も誰にも見つからないようにその場から離れた。

「？、ルーク？」

俺は知る由も無い。その場を離れてすぐにフェイトが俺が居ないことに気づいたことなど。

「シグナム」

遠くに佇む桃色の髪を見つけて、俺は手を振りながら彼女の名を呼んだ。

その言葉に反応して彼女はゆっくりと振り返る。綺麗な青い目が、見開かれた。

「どうしたのだルーク。私に何か用か？」

微笑んだシグナムはなぜか嬉しそうに見えた。その様子を見ながら、俺は今日の警備について聞くことにした。

「教えてほしいんだ。今日の警備で何があつたのか」

シグナムの眉がひそめられる。俺はティアナやなのはに直接聞くよ
うなことはしなかった。

ティアナに聞くのはまるで俺が彼女を咎めているみたいだし、なの
はに聞いても詳しい情報までは分からないだろう。

だからこそ、その場にいたシグナムに聞くことにした。本当はヴィ
ータに聞きたかったが、ティアナの一件でとても聞けたものではな
かった。

シグナムはため息をつくど、俺を呆れた表情で見てきた。

「お前も難儀な性格だな。内部に居たお前がそこまで気にすること
はないというのに」

「それでも、俺は副隊長だ。ライティングに所属しているけど、テ
ィアナの仲間なんだ」

俺のまつすぐな言葉に、シグナムは笑みをこぼすと、周りに誰も居
ないことを確認した。

「ガジェットの襲撃に関してははじめの方は問題なかった。私とヴ
ィータ二人で事足りるくらいな」

「初めは？」

俺の言葉にシグナムは頷き、表情を変えた。戦士の厳しいそれに。

「途中から恐らく何者かがガジェットを操作し始めた。動きの良く
なったガジェットに私たちはフォワードのラインまで進行すること

を許してしまつた」

俯きながら話すシグナムの拳は、震えていた。
悔しかったのだろう。フォワードのラインまで進行されたのが。

「そして多数のガジェット相手にティアナは全力を超えて力を発動し、その結果一発が暴走してスバルを襲つたというわけだ。それはヴィータが防いだが、何はともあれ私の責任だ。私が突破されなければ、こんなことにはならなかったのだからな……………」

シグナムは悲しげに微笑んだ。その笑顔が見ていられなくて、俺は大声を張り上げた。

「そんなことない!!」

シグナムの肩が揺れ、目が見開かれる。俺は抑えきれずに言葉を続けた。

「シグナムは一人で戦ってるんじゃないんだろ!? だったら別にミスをしてもいいじゃないか!! それをフォローするのが俺達仲間だろ!? 確かにシグナムは強いさ、剣の腕だつて、俺よりも上だ。でも、完璧じゃないんだ!! フォワードを頼って何が悪いんだよ!!」

「し、しかし……………」

シグナムはうつろたえた。それでも、俺は続けた。

「しかしじゃねえよ!! 確かにティアナがまったく悪くないわけじゃないさ!! でもティアナに全部の責任が無いようにお前にだって

今回の責任の全部は無いんだ！！だったらこの教訓を生かして次回からはミスしないようにすればいいだろ！？俺達は仲間なんだから！！」

俺は優しげに微笑んで、手を差し出した。

「頼れよシグナム。俺じゃあ頼りないかもしれないけど、それでも出来るだけ助けるからさ」

「ルーク・・・・・・・・・・」

シグナムはゆつくりと俺の手を握った。
俺は微笑み、手を離す。

「じゃあ俺は戻るな。シグナムもキリがいいところで戻れよ」

「あ、ああ・・・・・・・・・・」

俺はそう告げると踵を返し、手を振ってシグナムから離れた。
後には一人、シグナムだけが残された。

シグナム side

「何が、剣の腕だって俺より上……だ」

走り去るルークの後姿を見ながら、シグナムは呟いた。

彼は気づいているのだろうか？シグナムがルークと模擬戦をしたい理由が別にあることを。

その理由がルークの表情が変わったからだということも。

ルークは知る由も無いだろう。こちらの世界に来てからのルークは、苦しそうに剣を振るっていた。

シグナムとの模擬戦では、何回も顔が歪んだ。まるで強制的に戦わせられているように。

しかし、最近は違う。エリオの模擬戦の時には晴れ晴れとした笑顔を浮かべ、フェイトとの模擬戦ではその闘志を燃やしていた。

ルークはまぎれもなく戦士だった。戦いを好み、その中で自らの真価を発揮する。そんな戦士だった。

「分かっているのか？お前は今や全力の私と同じ、いや、それ以上の剣技を身に着けていることを」

しみじみと、シグナムは呟いた。その応えるように、朱色の髪は風に揺れた。

戦いを楽しみ、闘志を燃やす、そんなルークが初めのころより実力が上がったのは間違いない。

いや、正確には羽を伸ばし始めたと言ったところか。

シグナムの言葉は大げさであれ、事実は間違いないと捉えていた。

ルークが全力を出せるようになりつつある、その一点に関しては。

「ルーク、楽しみにしているぞ。お前と本気で戦える日を。それまでに、強くなれ。本当のお前を超えるくらいにな」

シグナムは悪戯に微笑むと、晴れ晴れしい笑顔で見えなくなったルークを追った。

日差しが、彼女を優しく照らしていた。

ルーク side

雑木林の中で、足音が響く。その音と心地よい風に吹かれながら、俺は皆のもとに戻っていた。

「ガジェットが操作されたって、そんなこと出来るのか？」

『さあ、私はこの世界に詳しくないからよく分からないけれど、出

来るんじゃないかしら。シグナムは特に驚いた様子は無かったし』

腰元から聞こえてきた声に、俺は首を傾げた。

俺が気にしてもしょうがないのだが、この世界ではこういったことが普通なのだろうか。

「相変わらずこの世界は分からないことだらけだな。文字も魔法も何もかも……………」

そう呟いたところで、俺は遠くに見知った亜麻色の髪を見つけた。

「あ、なの……………」

彼女に声をかけようと思って走り出した俺は、途中で止まった。

なのはの隣にオークションで見た考古学者が居たからだ。

何を話しているかは分からないが、なのはは楽しそうに微笑んでいる。

その顔を見るたびに、俺の胸に言い知れない痛みが走った。

「……………そうだよな。そう……………なんだよな」

なのはとフェイトはオークション会場で彼のことを見て声をあげていた。

つまり、彼はなのはとフェイト、いやひょっとしたらはやても知り合いなのだろう。

俺がここに来る、ずっと前から……………友人。

考えてみれば当たり前のことだった。なのはは俺よりも長く生きているのだ。

最近知り合ったばかりの俺が知らないことなんて沢山あるに決まっ

てる。

でも、頭では分かっているけど、俺は辛そうに顔を顰めることしか出来なかった。

『辛いのか？』

ふと、後ろから声が聞こえた。

小さく聞こえたその声に振り返ることなく、俺はこぶしを握った。

「分からない……辛い……のかな？」

『……』

ハロルドは答えなかった。いや、あえて答えなかったのだろう。

一人にしてくれるということか。彼女のこういう優しさが、胸に染みた気がした。

ゆっくりと重心を移動させ、木の陰に隠れる。なぜそうしたかは分からない。

でも、今の俺の表情をなのはに見てほしくはなかった。

彼女に見つかりたくなかった。なにより、あの二人に気づかれたいなかった。

俺は、何をやっているのだろうか……

あの優しいなのはの友人なのだ。きっといい人に決まっている。

その風貌も、雰囲気だって、優しさを物語っている。けれど、俺は木の陰から出ることを選びはしなかった。

「俺は……どうしたって言うんだ……」

俺の呟きは、木々の葉っぱを揺らす風にかき消された。

冷たい風が、俺のこの正体不明の胸の痛みに拍車をかけた。

『はい、機動六課の皆さん、準備が整いました。集合してください』

陽気な声が、モニターを介して俺の耳に響いた。
気づいたときには、俺は木の陰から出ていた。

「なのはー！戻ろうぜー！」

「あ、うん！！今行くね！！」

考古学者に別れを告げ、こちらに走ってくるなのは俺は全身の血が凍る思いで見つめていた。

俺は、今何をした？別に急がなくてもなのは戻ってきただろう。
適当に話の折り合いをつけて、キリのいいところで、戻ってきたはずだ。

それなのに俺は、自分の勝手な都合でなのはを呼び、無理やり話をやめさせたのだ。

なのはを笑顔にしていた、楽しいはずの会話を、俺のエゴで、碎いた。

「おまたせ！じゃあ行こうか！！」

無邪気に微笑むなのはの笑顔が、俺の心を容赦なく抉っていく。

二人並んで歩きながらも、俺は拳を握り締めていた。

俺は、最低だ。二つの影が夕日によって伸びている。

しかしそのうちの一つはとても眩しくて、もう一つは今にも消えそうでもとても醜く見えた。

ユーノ side

なのはが走っていった方向を見ながらユーノはただただ佇んでいた。

「あれが・・・・・・・・・・なのはの言っていたルークか・・・・・・・・・・」

一瞬だけ見えた朱色の男性を思い出し、彼はしみじみと呟いた。
たった今ユーノを照らしている夕日を連想させる彼の表情は沈んでいたが、ユーノの表情はそれ以上に沈んでいた。

「ふられちゃったなあ・・・・・・・・・・」

悲しげに俯きながら、ユーノは呟いた。

彼自身、この日を楽しみにしていた。ひょっとしたらなのはに会えるのではないか、そんな期待を募らせていた。

だが、実際に会ってみると彼女はルークのことばかり話していた。

まだ出会って間もないというのに、あらゆる話にルークが出てきて、その表情はとても楽しげだった。

もうユーノは確信していた。長い間、彼女に惹かれ続けた。

出会ってすぐの自分を助けてもらい、共に戦った彼女が、もう自分の手の届かない場所に居ると。

そしてなによりその横には自分じゃない別の人間が居ることも。

それでもユーノはなのはを恨むことも、ルークに嫉妬することもなかった。

もう気づいていたのかもしれない。なのはの心は自身に向かっていないと。

そして今、はつきりとその心はルークに向かっていることを、ユーノは悟った。

「……………頑張ってね、ルーク・フォン・ファブレ。

彼女はとても鈍感だから」

苦笑いしながら呟いた彼の笑みは、途中で止まった。

頬に、冷たい何かが流れた。口ではそう言ったが、ルークなら大丈夫ではないだろうか。

なのはは既に彼から目を離していないのだから。

「……………悔しいなあ……………」

夕焼けに染まる空を、ユーノは見つめた。

人々を限りなく照らす太陽は、無常にも彼を思い出させた。朱髪の彼を。

「でも、幸せになってよ……………なのは」

ユーノは振り返ると、ゆっくりと歩き始めた。

誰も見ていないところで、今、長年の片思いが静かに幕を下ろした。

ルークside

「暇だなあ……………」

六課の自室に戻ってからすぐに俺は暇を持て余した。
時刻としてはまだ6時、夕食には少し早い時間だ。
だがそもそも元居た世界でも剣術しかすることがなかった俺が部屋
ですることなど皆無である。

「はあ……………」

俺はため息をつき、ベッドに寝転んだ。ひんやりとした感触が体を
冷やしていく。

心地よさに俺は段々と瞼を落として…………

『ちよつと、今寝たら生活リズム狂うわよ?』

眠ることは出来なかった。

体を何とか起こすと、壁に立てかけたソーディアン・ベルセリオス
のコアレンズが忙しく煌いているのが見えた。

「……………なんか飲み物でも買いに行くか」

未だに眠気の残る頭を振ると、ハロルドを手に持ち、腰にさした。
どんな状況でも剣を手放さないのはここに来てからずっとである。
というのもどうやら一人で暇なのはハロルドも同じらしく、部屋に
放置しようとするのと連れて行きなさいと駄々をこねるのだ。

子供か！と内心では思うのだが、解決策など見つかるはずも無く、毎回毎回持ち出している。

「そんじゃあ適当にコーヒーでも買いに行くか」

『あ、じゃあ私も飲む』

「了解・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

ハロルドの声を聞いて返事をし、扉を操作しようとした俺の手は途中で停止した。

ハロルドは、俺の持つ武器である剣、ソーディアン・ベルセリオスの中に居る規制人格である。

確かに彼女は人間として意思を持っているし、会話も出来るが、体は存在しない。

故に、コーヒーを飲む口も存在しないのだ。

「・・・・・・・・・・一応聞くけどどうやってだよ。無理だろ。剣にかければいいのか？」

『なに言ってるのよ。ルークが口に含んで私のコアにキスしてくれればいいのよ。キッス！』

相変わらずのハロルドのテンションにあきれ果てた俺は鞘から異形の刀身を引き抜いた。

普段なら無視するところだが、今の俺は眠くて機嫌が悪い。

人間、最低限の欲求である食や睡眠が不足すると苛々するものである。

それはレプリカである俺も同じであって。

「なら熱々のコーヒーを思いっきりお前のコアにぶちまけてやろうか？」

間違はなく今の俺の笑顔の隅には青筋が立っていることだろう。剣の中に居る流石の彼女が苦笑いしている気がした。

『や、やあね。ルークも冗談が上手いわね……………』

「エスプレッソがいいか？それともカフェオレか？」

『う、ごめんなさい……………』

尚もふざけるハロルドに俺は満面の笑みで警告。

流石にまずいと思ったのか、ハロルドは謝るとそれっきり何も話さなくなった。

少し言い過ぎたかと思ったが、今のはどう考えてもハロルドが悪いと思い、無視した。

「えっと・・・・・・・・カフェオレでいいか」

俺の指が自販機の青いライトに触れる。

俺が触れたボタン以外のライトが消滅し、ガタンという音と共に下方の入り口に暖かいコーヒーが落下してきた。

透明の蓋を持ち上げ、開いている手で缶を掴む。

その熱さに、俺はカフェオレの缶を右手、左手と交互に投げながら備え付けのソファーに重心を静めた。

ブルトップと缶の間に指を入り込ませて力を込めると、特有の音と共に良い香りが鼻を刺激した。

一口飲んでから、その甘さと暖かさに俺はほっと息をついた。

実を言うと、エスプレッソなどは飲んだことはあるがあまり好きではない。

体が19歳でも精神は9歳である。やはり苦いものは苦手なのだろう。

飲むことについては問題ないが、進んで飲もうとは思わない。

やはりカフェオレに限る。そんなことを一人で黙々と考えていると、遠慮気味に肩をつつかれた。

「ん？」

首だけを動かして後ろを見ると、笑顔のスバルが立っていた。

隣いいですかと聞かれ構わないと答えると彼女は自販でジュースを購入して俺の隣に腰を下ろした。

彼女はそれを一口飲むと黙り込んでいたが、やがてぽつりと一言呟いた。

「今日のティアは・・・・・・・・・・なにかおかしかったんです・・・・・・・・」

首だけを動かして彼女を見ると、スバルは泣きそうな顔でこちらを見た。

「普段のティアはあんなミスしないんです。ティアはすごく優秀で、頭も良くて……だから……」

必死で言葉を紡ぐスバルの頭に、俺は優しく手を置いた。

「スバル……俺は別にティアナのことを怒ってはいないよ」

俺の言葉にスバルの目が見開かれる。

シグナムから聞いたときもそうだったが、俺はティアナのことを責めてはいない。

人間、誰にでも間違いはある。今回のティアナは、確かに失敗した。でも、それは取り返せる失敗だ。俺の、取り返しのつかない失敗とは違う。

俺のように、人生を掛けて償わなくてはならないような、そんな過ちではないのだから。

俺はゆっくりと手をスバルの頭から離すと、カフェオレを一口口にした。

そのまま背もたれに寄りかかる。

「知ってるよ。ティアナが人一倍優秀なことも、頭が回ることも……でも、ティアナは確かに優秀だけど、一人じゃ何も出来ないんだ。ティアナだけじゃない。なのはだって、フェイトだって、はやてだって、他の皆だって、それに俺だって一人じゃ何も出来ない。俺はどうしてティアナがミスをしたのかまだ分からない。でも、スバルなら、ペアを組んでるお前になら、ティアナは心を開

いてくれるんじゃないかな？」

ティアナは、俺と同じだ。

力を求め、傲慢になり、英雄という肩書きを追い続けた、あの頃の愚かな俺と同じだ。

そして、そんな生き方を貫き通した俺がどうなったのか、思い出したくもないことだ。

だからこそ、俺はティアナに何があったのかを聞きたい。

他でもない、彼女の口から。そしてそれはスバルにとっても同じことだと思っから。

「だからさ、スバル、色々聞いてみなきゃだめなんだ。俺もお前も、ティアナの為に。な？」

そう言っ俺は彼女に笑いかけた。

彼女は赤い顔をしていたが、すぐに微笑むと、はっきりと頷いた。

「はい!!」

気づけば、彼女はいつものスバルに戻っていた。

スバルと別れた後、俺ははやての部屋に足を進めていた。
もはや恒例となった、勉強会に關してである。

読みは完璧になったが、書きに關してはもう少しといったところだ。
はやてから聞いた話だが、仕事に關しては文字が読めれば俺とハロルドのコンビで対処できるらしい。

勿論文字が書けるようになって、暫くははやてにお世話になる予定だ。

「なあルーク君、今日のホテル・アグスタでの事件の後、なんか変わったことはあったかいな？」

はやてが不意にそのようなことを聞いてきたのは、始めてから少したったときだった。

俺は首を傾げながらペンをテーブルにゆっくりと置いて、彼女を見た。

「どうしたんだ？何もなかったと思うけど……………」

「そつか……………」

俺の言葉にも、はやては曖昧な返事を返した。

何かを考えているようだが、俺には教えてくれないのだろうか。

子供ではないが、まるで俺だけが干渉できないことに不快感を感じて、俺ははやてに聞くことにしてみた。

「どうかしたのか？なんかあったのか？」

はやては首を横に振った。

「何かがあったってわけじゃないんや。ただ、ホテルでの事件が終わってからなんかこう、胸騒ぎがするんや……. そんな予感が……. ．．．」

はやては全てを俺に話してくれた。ホテルでの事件の後に変わったことといえばティアナのこともくらいである。

とすれば、その些細な変化が何か六課に亀裂を走らせるのかもしれない。

完全には信用するわけではないが、はやての嫌な予感をほつとくわけにはいかない。

動けるなら動けるうちに確かめるべきだ。

俺は机に置いたペンを手に持つと、指でくるくると回し始めた。

「まあこんなこと言ってもしょうがないんやけどな。ほな続けよか」

はやての言葉に俺は頷くと上手い具合にシャーペンを元の位置に戻し、書き始めた。

一回詳しく話してみるか、そう心に決めた瞬間だった。

はやてとの勉強が終わった後、俺は彼女と共に食堂に来ていた。着いてみれば既にテーブルにはなのはやフェイト達が夕食を取っており、そこに入れてもらった。

「それで？ ルーク君の勉強はどんな感じなのかな？」

特製のソースで味付けされた鶏肉を頬張り、飲み込んだ後、なのはははやてを見て急に話を振った。

同じ鶏肉をナイフで切っていたははやてはその手を一旦止めてそれらをテーブルに置くと、微笑んだ。

「書きは結構苦労したけど、もうすぐやな。書くことさえ出来るようになればあとはハロルドさんの力を借りれば仕事は何とかなるやろうしな」

ベーコンとほうれん草のソテーをフォークで刺して食べていた俺はその手を止めてじとめではやてを見つめる。

それではまるで俺が使えないみたいではないか。確かにハロルドの方が優秀だが、俺だって少しは頑張れるのに。

それにずっと前から思っていたことだが最近俺に関することしか話していない気がする。

そのため、どこかむず痒いのだ。出来ることならなのは達の会話も

して欲しい所だ。

そのような気持ちに気づいたのか、はたまた俺が不快そうに顔を顰めていたからなのかは定かではないが、フェイトが苦笑いで俺を見ていた。

「そういえば訓練のほうはどうなの？ ルークの話はよく聞くけど、ヴィータとなのはあんまり聞かないからさ」

フェイトの言葉にアイスを頬張っていたヴィータはそれを飲み込むと、スプーンを淵に立てかけた。

ヴィータ、シグナム、シャマル、ザフィーラの四人は早めに来ていたらしく、既に食事は終了している。

ヴィータは好物のアイスをデザートとして食し、三人は各々寛ぎながら俺達の話聞いている。

「ティアナは見えてないからよく分かんねえけど、スバルは結構筋がいいな。まあそれはフォワード陣全員に言える事なんだけどな。将来が楽しみだぜ」

ヴィータの言葉にはやてはニコニコ笑いながら爆弾を落とす。

「そやなあ、将来的には師匠であるヴィータやなのはちゃん負けれるかもしれんなあ……………」

「な……………ふん、そんなのはまだまだ先の話だぜ！！」

はやてとヴィータはそのことについて暫く話していたが、俺の頭には入らなかった。

フォークを食器に置き、空いた皿を見つめる。

そうだ。いつかは弟子は師匠を越えるものだ。かつての世界での俺がそうだったように。

俺の教えているエリオもそうなのだろうか？

いや、そうに決まっている。事実エリオの成長は凄まじい。

この勢いなら俺と並ぶのも時間の問題だ。だが、そうなったとき、俺は何を以ってエリオと戦うのだろうか？

今のエリオに戦う目的は明確には存在しない。だが、俺と肉体的に同じ年になった彼は違っだろう。

そうなったときに、俺は何を信念として剣を振るえば良いのだろうか？

「ルーク」

ふと、聞こえた声に、俺は咄嗟に顔を上げた。

フェイトが、強い目で俺を見つめていた。

「え、ど、どうしたんだフェイト？」

その目が俺を咎めているように何故か思えて、俺はうろたえた。そんなはずは無いのに。フェイトは視線を伏せると、再び顔を上げた。

「あのね、私に剣の稽古をつけて欲しいんだ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・は？」

フェイトの言葉に俺は情けない声を上げた。

何を言っているんだ？フェイトは。そういった考えが頭を巡る。その答えが出る前に、桃色の髪が視界の隅で揺れるのが見えた。

「ずるいぞテストロッサ！！私だってルークと模擬戦をしたいというのに！！」

立ち上がり、叫んだシグナムに俺はさらに混乱した。

俺達はさっきまで和気藹々と食事を楽しんでいたはずだ。

なのになぜ急に模擬戦の話が出てきたのだろうか？

視線をぶつけるのはフェイト、シグナムの二人だけで他のメンバーは目を白黒させているので俺が異常なわけではないのだろう。

「違います！！模擬戦じゃありません！！剣術の稽古です！！」

「模擬戦と何が違うというんだ！！」

「全然違いますよ！！」

こうしている内にも二人はエスカレートしていく。

とはいえ話の話題に上がっている俺が下手なことを言えば何が起くるか分からない。

俺は一縷の望みを掛けてなのはに視線をやった。

なのはは困ったように肩を落とすと横に座るフェイトの肩を叩いた。

「ちょっとフェイトちゃん、シグナムさんも、喧嘩してるだけじゃ何も解決しないよ？」

「なのはは黙ってて（ろ）」

あ、まずい。俺は本能的に感じ取った。背筋が冷たくなるのが分かる。

それはその場に居た誰もが感じたようで、はやても微笑んではいるが、どこことなく顔が青ざめている。

怒鳴った二人に関してはまるで機械のようにギギギと首を動かした。

「ルーク君が困ってるんだ。分かるよね？」

「は、はい……………」

なのはの絶対零度の言葉に、二人はなすすべも無く席に座らされた。小さく見えるのは見間違いではないだろう。

「で、フェイトちゃんは詳しくルーク君に説明しなきゃダメだよ」

「あ」

フェイトは俺の存在に気づいたかのようにばつと俺のほうを向いた。

「あのね、つけてほしいのは剣術の稽古なんだ。木刀を使う、剣の稽古」

「……………俺よりシグナムのほうがいいと思うけど……………」

正直剣の腕ならシグナムのほうが上だ。

教わるなら彼女のほうがいいと思うのだが……………

「ほら、シグナムとは結構やってるんだけど、ルークとはあまりやったことなかったから」

「ああ……………」

俺はそう呟いてから頭の中でスケジュールをめくる。

はやての勉強が終わったのでこの後はフリーだ。そこまで疲れていないわけでもないの、大丈夫だろう。

「いいよ。やろう」

「ありがとう」

俺の返事に、フェイトは花が咲くような笑顔で微笑んだ。

ルークside

六課の中にある剣道訓練場。

懐かしい木の香りがする道場に見立てたその部屋で、俺とフェイトは木刀を片手に対峙していた。

離れたところには、六課の隊長、副隊長、フォワードをはじめとしてかなりの数の野次馬が集まっている。

「アンタどっちに賭ける？」

「やっぱりルークさんかな。うん、ルークさんに食堂のランチ一つ！！」

「じゃあ私はフェイト隊長に食堂のパフェを賭けるわ」

試合を見てくれるのは嬉しい。

人が見ていることで神経を磨ぎ澄ませられるし、見ている側も得られるものは多いだろう。

だが、正直賭けは止めて欲しい。見世物ではないのだが………

だが、俺と対峙しているフェイトはそんなことを気にしないくらい集中している。

というか、ひよっとしたら周りの声も入ってないのではないだろうか。

隊長、副隊長達も小声で何か話しているが、小さすぎて聞き取ることは出来ない。

だが、どうせろくなことではない。大したことないなら小声で話す

必要などないのだから。

周りを見回してみても、どれも同じようなものだ。ため息をついて木刀を構える。それに呼応するかのように、はやてが前に進み出た。

二人の間、つまり、審判の位置に立っている。

はやてがそこに立つと同時に、今まで喧しかったギャラリーが、一人残らず口を塞いだ。

「ほな始めるで！！試合はどちらかが膝を付くか、倒れるまでや！
！それでは、用意・・・・・・」

全神経を研ぎ澄ませて、俺は木刀を構えた。

その切っ先まで、動きを制御するように、俺は集中する。

それはフェイトも同じだろう。先程から瞬き一つしていない。

「始め！！」

声が響くと同時に、二つの陣風が互いに激突した。

それぞれの刃は激突し、拮抗し、動きを止める。

足に、力が入る。脚力を限界まで使い、それと同時に一瞬だけ爆発させる。

強力な力を得た木刀は威力を増し、フェイトの木刀を弾いた。

そのまま足の力を抜くことなく、俺は体ごとフェイトに突っ込む。

近すぎて読めなくなった軌道に、フェイトは目を見開き、一瞬で後退した。

先程まで胴体があった部分を、渾身の突きが、空を切る。

出来た隙に合わせるようにフェイトは俺以上の速さで前進した。

斜めに降ってくる木刀を俺は左に重心をずらして避ける。

フェイトのように後退したのでは隙を突けない。

多少のダメージを覚悟しても、俺は突っ込む。

「うおおおおおおおおおおお！！」

がら空きになったフェイトの左肩に、逆さに回した木刀が襲い掛かる。

咄嗟に反応したフェイトは俺の攻撃を防ぐが、遅すぎた。

左手に右手を回し、木刀を掴むと、それを斜めに全力で振り下ろした。

「魔王、絶炎煌！！」

炎を点した俺の一撃が木刀に命中し彼女をよろけさせる。

魔王絶炎煌。普通なら右手で相手を殴った後に左手に持った剣を振り落とす強力な技である。

だが、訓練、模擬戦を含め何回も見せたこの技がフェイトに通用するはずは無かった。

フェイト自身、それが分かっていたはずである。だからこそ、対応できなかった。

右手始動のところを左手始動に変更し、リーチを長くして確実に相手を捉える。

そして瞬時に右手をまわして木刀を受け取り、斜めに切り裂く。

どうしてもとどめの一撃が弱くなるので威力は下がるが、その分始動が速い。

何より、普段の斬り合いに何気なく混ぜてもバレないのがこの技の特徴だ。

そして、この技術には最大の利点がある。

「行くぜ！！」

俺は床を蹴り、フェイトに肉薄した。剣を横なぎに払う。

「魔王絶炎煌！！」

俺の叫びに、フェイトは咄嗟に右側のガードを固めた。そうだ、それでいい。

俺の右手が伸び、彼女の胴を殴り飛ばす。

そしてそのまま天井に掲げた左腕が、勢いよく振り下ろされた。

フェイトは完全に対応できず、振り下ろした木刀は力強くフェイトの右肩に入った。

つまり、この技の利点は俺の技が今まで見たからといって見切れるわけではなくなるという点だ。

魔王絶炎煌。この技にバリエーションを持たせることで相手にどちらのバリエーションが来るのか判断させないのである。

始動の型を同じにしてフェイントをかける。さらに仕上げて技名を叫べば、それに反応して相手は行動を取るというわけだ。

人間は窮地に立たされると勝手に直前の行動を頭の中でシュミレートして判断する。

その穴を狙って考えたのだが、どうやら効果は適面だったようだ。俺の異なる型の魔王絶炎煌は見事にフェイトを捉えた。

そこまで考えたところで、俺はフェイトの体がぐらつくのが目に入った。

木刀を投げ捨て、フェイトの体を受け止める。

周りから様々な声上がるが、無視した。フェイトを床に寝かせ、腰にさしていたハロルドを抜き放つ。

「ハロルド、キュアだ」

『了解。キュア』

フェイトの体を暖かい光が包み、苦痛に歪んでいた顔が、安らかな

もの変わる。

彼女はゆっくりと目を開けた。

「大丈夫かフェイト。ごめんな、痛かったろ？」

フェイトは俺の言葉に微笑むと首を横に振った。

「ううん。少し痛かったけど、すぐにルークが治してくれたから大丈夫だよ。ありがとう、ルーク、ハロルド」

「とはいっても、一応医務室に行きましょうか。ルーク君、フェイトちゃんのこと運んでもらってもいいかな？」

「え？あ、はい！！」

いつの間にか後ろに立っていたシャマル先生に言われ、俺はフェイトを横抱きのまま持ち上げた。

一斉に周りがうるさくなる。その様子に、俺は苛々した。

「おい、フェイトは一応怪我人だ。静かにしてくれ」

俺の言葉に周りが一気に静かになる。よく見ると女性局員の顔が赤い気がする。

ふと視線を横に向けるとフェイトも赤い顔で俺を見つめていた。なぜだか急に恥ずかしくなってきた俺は急いでその場を後にすることを選んだ。

シグナム side

ルークが出て行った後の道場は喧しかった。フェイトを横抱きにしたのもそうだが、なにより最後のルークの叱責がかなり効いている。あるものは気持ち悪く体をくねくねさせ、あるものはぼつと顔を赤く染めてまんざらでもない顔をしている。

普段から優しい人間が怒ると怖いというのは聞いたことがあるが、この光景は異常だった。

保護者であるのはも目を丸くして辺りを見回している。

今現在、ここで正常を保っているのはごく僅かである。そのうちの一人、シグナムはルークが出て行った扉をただただ見つめていた。

「シグナム、どう思う？今の」

隣へと歩いてきたはやてがシグナムにしか聞こえない小さな声で聞いてきた。

シグナムはその言葉に視線を先程までルークが戦っていた場所に戻すため息をついた。

「間違いなく彼は天才です。剣の神童とでも言うべきでしょうか。」

模擬戦ならばまだ負けはしません。けれど純粋な剣の勝負なら、私の方が劣るでしょう」

先程の一戦、シグナムはフェイトを自分だと思って観戦していた。もし自分ならどう動き、どうかわし、どう反撃するか、それを置き換えて戦いを見ていた。

出た結論は、見切れないというものである。始動がまったく同じ。しかも叫び声で態とこちらの気を逸らしているのだ。反応できるはずが無い。

「・・・・・・・・・・・・・・・・面白い」

しかし思わぬ成長を遂げたルークにシグナムが抱いた感情は恐れではなくさらなる興味だった。

ルークは、どこまで強くなるのか。どこまで自分が戦えるのか。シグナムは燃えていた。かつて無い強敵を相手にする喜び、この場でそれを実感しているのはシグナムだけだった。

ふと横を見るとはやては居なくなっていた。燃え始めたシグナムに痺れを切らせて立ち去ったのだろう。

だがそんなことはどうでもいい。今、シグナムは最高に気分が良かったからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・その前に・・・・・・・・・・あの凜々しい雰囲気は反則だろう・・・・・・・・」

フェイトを横抱きにし、去るときのルークの表情を思い出しながら、シグナムは呟いた。

その顔が僅かに赤かったことを、彼女は知らない。

ルークside

「フェイト、大丈夫か？」

「もう、心配しすぎだよ。私は大丈夫だってば」

俺はフェイトを医務室に連れてきてからもフェイトの傍を離れなかった。

フェイトを傷つけたのは自分なのだ。その張本人の俺がすぐに帰る訳にはいかなかった。

だが、フェイトはもういいと何回も言ってくる。そのたびに俺は否定するのだが、フェイトも中々諦めてはくれなかった。

やがてため息をついたフェイトはじゃあ、と言葉を紡ぎ始めた。

「教えてくれないかな？あの魔王絶炎煌の変形バージョンは戦闘中に思いついたの？」

俺はしっかりと首を横に振った。

「いや、あれは部屋でハロルドと話して考えたものだよ」

『よく言うわよ。私と会話してるだけで勝手に思いついて勝手に試ただけのくせに』

俺の言葉にハロルドは拗ねたように呟いた。

ハロルドはいつもそうだった。戦闘面、特に何か新しいことを見つけるたびに、俺に厳しく当たってくる。

その原因を知りたくて一度聞いてみたのだが、はぐらかされて答えはくれなかった。

そういうわけで今回も何故か分からないが彼女はご機嫌斜めである。

「ありがとう。それを教えてくれただけで十分だよ」

「本当に大丈夫か？」

「うん」

俺の言葉にフェイトは微笑んだ。その笑顔に何も裏が無いことを悟り、俺は渋々椅子から立ち上がった。

じゃあなと声をかけて静かにカーテンを引く。しばらくしたらフェイトは部屋に戻るだろう。

ハロルドのキュアの効き目が良かったらしく、シャマル先生は何の問題もないと言っていた。

なら、何か一人で考えたいのだろうか？俺はそんなことを考えながら、医務室を後にした。

フエイトside

「考えた・・・・・・・・・・か」

誰も居なくなつた病室で、フエイトは一人ポツリと呟いた。
ルークの才能が凄まじいのは今に始まつたことではない。

だが、そのあまりの才能に、フエイトは尊敬を通り越して嫉妬すら
していた。

「私も頑張らなくちゃ」

それは剣術か、模擬戦か、定かではない。

だがフエイトは確実に何かを決心した。自分を強くするための何か
を。

ルーク side

医務室から戻った俺はいつものように星空を見上げていた。

最近はこの日課になりつつある。フェイトのように星空になのはを強く感じる、というわけではない。

ただ、この星空が、別の世界のどこか、ティア達の居る世界まで繋がってると考えると勇気が出た。

勿論、根拠なんてものはない。でも、俺がそう思っているだけよかったんだ。

ふと、離れたところの雑木林でオレンジ色の髪が動いているのが見えた。

「ティアナ？……………」

俺は不意にそう呟いていた。

離れた雑木林から俺が見ていたのは、精密射撃の訓練をするティアナだった。

疲れているのか、動きはあまりよくないようにも思える。

「ルークの兄貴」

ふと聞こえた声に振り返ると、ヴァイスがしゃがみながら俺の近くまで来ていた。

彼はそのまま俺の隣まで来ると、親指でティアナを指差した。

「もう五時間もやってますぜ。ありゃいくらなんでもやりすぎだ。体が持たない」

「五時間・・・・・・・・・・・・・・・・」

その長さに俺は絶句した。明らかにやりすぎだ。

ジェイドから聞いた話だが、そもそも人間が極限まで集中できるのは50分までで、あまり長時間やっても効果は出ないそうだ。

その分負荷がかかり、体がダメになっていく。

「・・・・・・・・・・そんなにミスショットがショックだったのか・

俺の笑い声に、ティアナは啞然としていた。

しかし、彼女のほうを向いて微笑むと、ティアナは嬉しそうに、小さくだが微笑んだ。

「ルークさんは……………怒ってないんですね。
昼間のこと」

「ああ、ミスは誰にでもある。だから、一回のミスなんかで落ち込むな。ティアナのミスはいくらでも取り返しが聞くんだからな」

俺の言葉にティアナは首を傾げた。

立ち上がり、彼女に手を差し出す。ティアナはそれを取ると、立ち上がった。

「俺はもう行くよ。でも、ティアナはもう少しやっていくんだろ？」

「あ、は、はい……………」

「なら、早く寝ろよ。なのはの訓練は甘くないぞ」

俺はそう言い残すとその場から離れた。あとはティアナの気持ち次第である。

ティアナ side

ルークの後姿を見ながら、ティアナはただ立っていた。
他の上官が怒る中で、ルークは自分の視線で物を言ってくれた。
慰めてくれた。まだ、次があると。

「見捨てられないようにしなきゃね」

そして、ティアナはそれを歪めて捉えてしまった。
彼女は、大きなミスをしてルークに失望されないように、訓練に拍車をかけていく。

誰も悪くないのだ。ティアナを励ましたルークも、ルークに失望されないように努力するティアナも。
ただ、言葉の理解の食い違いが発生しているだけであつた。

ルーク side

部屋に戻つた俺はいつものようにハロルドと会話をしていた。

「大丈夫かな・・・・・・・・・・ティアナ・・・・・・・・・・」

『どうかしらね。ルークの想いは届いてたみたいだけど、本当に態度を変えるかはあの子次第ね』

「そう・・・・・・・・・・だな」

ハロルドの言葉は尤もだつた。俺に出来ることはティアナを信じて待つことだけだつたのだから。

ルーク side

体が、揺すられる。心地よい場所から一気に落とされるように、俺は目を開けた。

「あ、ルーク、起きた？」

目の前ではフェイトが笑顔で微笑んでいた。俺はおはようと彼女に告げると体を起こした。

十分な睡眠時間を取ったので眠くはないが、腕を潰して寝たからなのか、痺れている。

暫く左手で右の腕をぶらぶらと動かしていると、フェイトが首を傾げているのが目に入った。

「どうしたの？」

「ああ、昨日どうやら右手を体で潰しちゃったらしくてさ。痺れているんだ」

「大丈夫？」

「しばらくすれば大丈夫だよ。じゃあ先に部屋に行つててくれ」

「あ、うん、分かった」

俺の言葉にフェイトは頷くと部屋から出ていった。

右腕の痺れは俺の予想通りしばらくしたら引いてくれた。

「さて、今日も頑張るか」

大きく伸びをして、俺は呟いた。揺らぐ視界が止まるまで待ち、治まると俺は部屋を後にした。

なのはとフェイトの部屋に来て気づいたことは、珍しくなのはが席についていないことだった。

いつもは朝早くから起きているなのはが席にいないのは珍しい。

ただ席を立っているというわけではなく、朝食が置かれていないことから、居ないのだろう。

だが、ふと視線をベッドにやると、すやすやと眠るなのはの姿が目に入った。

その姿が俺の心臓を刺激する。首を横に振って、そこからなんとか目を離し、俺は席に座った。

「なのはは昨日結構夜遅くまで起きてたみたいなんだ。それで疲れて

るみたいなの」

なのは起こさないように小声で話すフェイトを見て、俺はため息をついた。

どうやら今日の訓練は苦勞しそうだ。

「最近結構ハードスケジュールみたいなんだ。昨日もずっとティアナの動きを見てたし、その前だって……」

フェイトが心配そうになのはを見る。はやての嫌な予感が現実になつてきていることに、俺は不安を覚えた。

ティアナだけじゃない。なのはも、いや、六課そのものがどこおかしい、そんな気がする。

「……………なんなんだ……………」

俺の呟きはフェイトの耳に入ることには無かった。

その後、小声で他愛ない話をして、食器を片付けると、俺はなのはのベットの横に立った。

ずれている布団を直してやると、なのはは気持ち良さそうに寝返りをうった。

あどけない表情で眠るそんな彼女を見ながら、少しでも休んでくれと俺は呟いた。

その様子を、フェイトが離れたところで悲しげに見ていたことを俺は知らない。

「行きますよ！！ルークさん！！」

黄色い閃光を飛び散らせながら、エリオは高速で俺に接近する。

振り下ろされた蒼の槍を漆黒の剣を勢い良く振り上げることによって弾き、そのまま素早く手首を捻って斬り下ろす。

持ち前のスピードで俺の斬撃を難なく避けたエリオはそのまま後退した。

入れ替わるように橙色の軌跡が飛来する。それを最低限の動きで避けると、俺はエリオに肉薄した。

瞬時に加速して一気にエリオを突き抜ける。飛燕瞬連斬。

それを最初の加速でキャンセルさせた俺は一気にティアナに近づいた。

間合いに入ると同時に異形の刀身が普通ではありえないほどのスピードで持ち上がる。

それは正確に彼女を捉え、光となって消滅させた。

「フェイクか！！」

俺は叫び、すぐにその場から転がって離れた。先程まで自分がいた場所に、二発の弾丸が撃ち込まれる。

強い。エリオの攻撃もそうだが、何よりティアナとのコンビという

のが余計に太刀が悪い。

重さの無いハロルドを用いていなかったら結構厳しかったかもしれない。

「流石に才能の塊っただけはあるな………」

俺は今エリオ、ティアナの二人と模擬戦をしていた。

なのはが来ないので、スバルはヴィータに、キャロはハロルドに任せて俺はティアナ、エリオと模擬戦を行っていた。

といってもただでさえ強いエリオにティアナを加えての模擬戦はハロルド無しでは辛いので今回ばかりは使用している。

かなり無理をしているが、キャロは遠くからハロルドの指示を聞いてもらい、俺はハロルドに晶術を使わせないようにしている。

だが、重さの無いハロルドを用いて怒涛の攻撃を繰り返しても、そこまで楽に圧倒出来る相手ではなかった。

「やるか………」

俺はベルセリオスを下段に構え、脚に全神経を集中させた。

持てる限りの脚力を全開放し、エリオに急接近する。

後ろに構えた剣を見て、エリオは防御を固めた。

その瞬間に、俺は急に進行方向を変えて、後ろへと後退した。

エリオの目が、見開かれる。

「岩斬滅碎陣!!」

飛び上がった俺は、全体重をかけて剣を振り下ろした。

衝撃とともにベルセリオスが地盤を砕き、粉々になった岩の礫が舞い上がる。

エリオが怯んだところで、俺は飛び上がった。

「崩襲脚！！」

浮き上がった岩の礫を、俺の脚が捉える。

衝突によって加速した礫は、雨のようにするどくエリオに襲い掛かった。

「タービュランス！！」

とどめとばかりに俺はエリオめがけて剣を振り下ろす。

刃ではないほうで斬り裂いたので、怪我をすることは無かったが、衝撃でエリオは気絶した。

息をつく間もなく俺は加速する。視界の先に見据えたティアナは目を見開いていた。

幻覚だろうが本物だろうが関係ない。ただ俺は目の前にいるティアナを倒すことだけを目標とした。

弾けるようにティアナの両手が上がり、二丁の銃が俺に向けられる。そんなら火を噴くと同時に俺は身を動かしてそれを避けた。

ティアナの弾丸は確かに速い。だが、反応できない速さではない。

「行くぞ」

俺は静かに呟き、一気に間合いを詰める。ティアナの目がはつきりと見開かれた。

「くっ！！」

左の銃を横にして下段に、右の銃を上段に構える。二つの銃から弾が解き放たれると同時に俺は体を沈めた。

地面すれすれをスライディングするように滑り、漆黒の炎のような

切っ先をティアナの喉元に突きつけた。

ティアナは先程のように消滅することは無く、冷や汗を流しながら俺を見つめている。

俺は息を吐いてベルセリオスを下ろすと立ち上がって振り向いた。気絶しているエリオオを見つけて、苦笑いする。かなり本気でベルセリオスを打ち付けてしまった。

大丈夫だろうか？そう思っているといくとエリオオの指がピクリと動き、ゆっくりとその目が開かれた。

起き上がり、俺のほうを見て、模擬戦の結果を悟ったエリオオはがっくりとうな垂れた。

「よし、二人とも集まってくれ」

パンパンと手を叩くと、二人は俺の下へと集まってきた。

「前にも言ったけど俺は理論を用いて何かを説明することは出来ない。でも、模擬戦なら出来る。その中で、力にしてくれ」

「はい！！」

俺の言葉に二人はしっかりと頷いた。特にティアナは真剣な表情で俺の言葉を聞いている。

そのことはとても嬉しいが、俺は何故か嫌な予感がした。

「ルーク君！！」

ふと後ろから大きな声が聞こえた。振り返るとなのはが走ってきていた。

俺の元まで来たなのはは息を整えながら謝った。

「ごめんね!! 私すっかり眠ってて………」

「大丈夫だよ。疲れてたんだから。それに、俺がそうしたかったんだ。二人と戦ってみたかったからな」

俺はエリオ、ティアナの二人を見て微笑んだ。

二人は嬉しそうに微笑むと、とてもためになりました、と声を揃えて言った。

「そっか、ティアナ、ごめんね。じゃあ訓練しようか」

「大丈夫です。気にしてません。お願いします!!」

二人は一言二言会話を交わすと、共に離れたところへと向かってしまった。

その様子を見ながら、俺は振り返る。

「じゃあ俺達も訓練するか」

「はい!!」

俺の言葉にエリオははっきりと頷いた。そして俺達は再び訓練に取り掛かった。

エリオとの訓練が終了し、部屋に戻った俺は汗を流して、食堂に行き、なのは達と少し早めの夕食を取った。

その後、俺は部屋でゆっくりと寛いでいた。

そとは暗くなっており、星空がよく見える。

ベッドから立ち上がると、俺は窓のほうに歩いていき、開けた。見上げた視界を覆うように、星空が目に入った。

こちらの世界に来てから星空を見上げるのも習慣となっていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

俺は窓から下を見下ろして、絶句した。まさに昨日注意したばかりのティアナが、自主練をしていたからだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんで・・・・・・・・」

俺は小さく呟くと、壁に立てかけたハロルドを手にとって部屋を飛び出した。

すっかり日が暮れた雑木林。その草むらで俺はティアナの自主訓練を観察していた。
動きと息の乱れから、もうかなり長い間やっているのだろう。

「ルークの旦那。一体あいつはどうしちゃったんですかい？昨日から何も変わっちゃいない」

俺は隣に来たヴァイスの言葉に答えなかった。確かに俺は昨日注意したはずだ。

とはいえまったく態度を変えないとは、どうということなのだろうか？

「ルーク」

後ろで小さく聞こえた声に、俺は肩を震わせた。

ヴァイスが近くに居ることは知っていたが、もう一人居るとは気づかなかった。

恐る恐る振り向くと、俺達と同じようにしゃがみこんだフェイトがそこには居た。

「フェイト・・・・・・・・・・」

「今日もティアナやってるんだね・・・・・・・・・・」

その言葉で俺は理解した。フェイトもティアナの訓練を見ていたのだ。

「なあ、フェイト、どうしてティアナはあんなに頑張るんだ？」

俺の言葉にフェイトは悲しげに俯いた。

「そういえば、ルークにはまだ話してなかったね」

モニターが開き、そこに一人の男性が映される。ティアナよりも濃いオレンジの髪の彼の下には、ティード・ランスターと表示されていた。

そしてその横には、享年21歳という文字。フェイトは悲しげに俯くとポツリポツリと話し始めた。

「実はね、ティアナのお兄さんは凄く優秀な魔導士だったんだ。でも任務中に犯人を取り逃がしちゃって、それで当時の上司が心無い発言をして問題になったんだ。当時ティアナは9歳。だから、ティアナは証明したいんだと思う。兄が教えてくれた技術が優れていることを」

フェイトからティアナの努力の事情を聞いて俺は決心した。

もう一度、ティアナを説得してみることを。

「……………俺、もう一度ティアナと話してくるよ」

「ルークの兄貴……………」

振り返り、そう言った俺の言葉にヴァイスは呟き、フェイトはゆっ

くりと頷いた。

「ティアナ」

俺の言葉にゆっくりとティアナは振り返った。
その表情はきよんとしている。まるでどうして俺がここに居るのが分からないように。

「俺、昨日言っただよな？無理はするなって。聞いてたよな？」

「はい。聞いてました。大丈夫ですよ。このくらい無理には入りませんから」

ティアナの言葉が強がりであることなど俺はとくに気づいていた。肩で息をしている人間のセリフじゃない。とはいえティアナの気持ちも十分に分かる。

力は、必要だ。勿論それが全てではないが、力が無くては護れるも

のも護れないのだ。

だからこそ、ティアナの考えは正しい。だが、それで体を壊したら意味が無い。

「聞いたよ。ティアナが努力するのはお兄さんの教えてくれた技が役立たずじゃないことを証明するためだって。でもだからこそティアナは無理をしちゃいけないんじゃないか？」

俺の言葉に、ティアナは俯いた。その表情は暗闇で読み取れない。

「何も急がなくてもいいじゃないか。ゆっくりと頑張って……」

「なんで……」

ティアナの言葉に俺の黙るしかなかった。ティアナの声は、震えていた。

次の瞬間、俺は絶句した。ティアナが涙を流しながら俺を睨んでいたからだ。

「なんでそんなこと言んですか……私は、凡人なんです。努力しなきゃ、追いつけないんです……」

「ティアナ……」

今のティアナの心情を、俺はうつすらとだが理解出来る。屋敷を出てすぐに、俺は世界の広さを知った。

その中で生き抜くために、仲間の足手まといにならないために、必死で戦った。強くなった。

だが、強くなることと、がむしゃらに努力することは違う。

「気持ちは分かるよ。でも……」

「分かるわけない!!」

しかし、俺の気持ちは完全にティアナに否定された。その言葉が、俺の心を抉っていく。

「そんな強い力を持つて!!すごい魔法だって使つて!!シグナム副隊長やフェイト隊長と互角に戦えるルークさんに私の気持ちが分かるわけないんです!!」

その一言一言が、俺の心を壊していく。その言葉は俺に訴えているようであつた。

自分が何人も人を殺したことを、俺が血に汚れていることを。

俺は震える声で静かに呟いた。

「あれは……ハロルドやレンズの力で……俺の力じゃ……」

「それでも!!使つてるのはルークさんでしょ!?私は、羨ましい。そんな力を持った皆が、ルークさんが、心底羨ましい……」

その言葉で俺は気づいてしまった。ティアナは俺とは違つと。

彼女が求めているのは認められる力なんだ。俺の持つ、殺すための力ではない。

俺を睨み付けるティアナの目が、あの世界での俺を咎めているようで、俺は体が震えるのを感じた。

怖い。純粹に力だけを求めるティアナが、とても純粹に、そしてひどく怖く俺の目には映つた。

「訓練に戻りますね」

小さくそう呟いたティアナの声をはっきりと俺の耳が認識したのか、定かではない。

だが俺は踵を返してフェイト達の待つ草むらへとほとほと引き返した。

草むらに戻った俺は、力なく座り込んだ。フェイトが心配そうに見つめてくる。

「どうしたの？ルーク」

フェイトの言葉に俺は力なく笑った。

「俺は……前に居た世界で何人も殺した。何人も殺したんだ。生きるために、そんな大義名分を立てても、殺したことに変わりはない。ティアナは俺が羨ましいって言ったんだ。強い力を持つてる俺が羨ましいってさ……俺とは大違いだな。俺は、自分の力が嫌いだ。何人も斬ったこの剣技が、大嫌いだ」

「ルーク……」

俺の言葉にヴァイスも、フェイトも視線を伏せた。

「でも、ただ生きるために殺したわけじゃないんでしょ？誰かを護るために剣を振るった。そう考えれば……どうかな？……ごめんね、私、上手いこと言えないや……」

「

フエイトがはつきりと俺のことを慰めてくれているのが分かった。
それでも、俺は顔を上げることが出来なかった。

「ルーク・・・・・・・・・・・・・・・・」

ゆつくりとフエイトの手が俺の手の甲に触れた。

その瞬間に、自分の手が血で汚れているように見えて、俺はその手を振りほどいた。

フエイトの顔が、悲しげに歪む。

「フエイトは・・・・・・・・・・・・・・・・綺麗過ぎるよ・・・・・・・・・・」
「」

俺はそう小さく呟くと、その場から逃げるように立ち去った。

俺は怖かった、俺がフエイトに触れることでフエイトまで血で汚れてしまいそうな気がして。

俺は、こんなに臆病だっただろうか？そんなことを思いながら、俺は自室へと急いだ。

誰にも会わないように願いながら。

フエイトside

フエイトはルークが立ち去った後、啞然としていた。

手を弾かれたこともそうだが、何よりルークの悩みに自分が何一つ貢献できなかったことが、胸を締め付ける。

ルークは自分を救ってくれたというのに。

「私は・・・・・・・・・・ルークを支えられないのかな・・・・・・・・・・」

「フエイトさん・・・・・・・・・・」

涙が混じったフエイトの眩きと、ヴァイスの悲壮な声が、夜の雑木林にこだました。

ルークside

部屋に戻ってから、俺はベッドで横になっていた。

だいぶ気持ちは落ち着いてきた。だが、それでもフェイトやティアナには会いたくなかった。

「フェイトに・・・・・・・・・・謝らなきゃ・・・・・・・・・・」

ベッドに横たわったまま、俺は呟いた。フェイトの手を弾いたそのとき、彼女の顔は悲しげなものに変わった。それを思つと心が締め付けられる。

不意に、扉をノックする音が響いた。だるい体を起こして扉に近づく。

それをあけると、そこには見知った顔が立っていた。

「ルーク君、ちょっと散歩でもせえへん？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

華の咲くような笑顔で言われた言葉に、俺は素っ頓狂な声を上げた。

六課のロビーまで来た俺達は自販で適当に飲み物を購入し、ソファに腰掛けた。

俺もはやても、何も話さなかった。

俺は先程のフェイトとの件を心配しているからなのだが、はやてはどうしたのだろうか？

沈黙に耐えかねて何か話題を出そうと思った矢先、はやては突然言葉を発した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・実を言うとな、私後悔してるんよ。六課を設立して」

それは、たった一言の短い言葉だった。だがその言葉にはやての様々な想いが隠されているようだった。

「本人達が了解しとるとはいえ、まだ子供のエリオやキャロを危険な目に合わせようとしてるんや。将来、ひょっとしたらあの二人は人を殺すかもしれない。そんなことをさせてしまうかもしれない六課を、設立して良かったんかなって・・・・・・・・・・私はときどきそう思ってしまうんや」

はやての手に握られたスチールの缶に力が加えられる。

悲しげに伏せられた目は、真剣に、はやてが悩んでいることを表し

ていた。

エリオやキャロ、フォワード陣は今はまだリニア事件とホテルの事件に出撃しただけである。

勿論破壊したのはガジェットという言わば機械であるし、任務も成功させている。

だが、今の状態ならいつエリオやキャロが人を殺めてもおかしくはないのだ。

そのとき二人は耐えられるだろうか。人の命を奪ったという事実。沢山の命を奪った俺でさえ受け入れられないその事実。

それだけではない。

先程はやては言わなかったが、六課に在籍するとはすなわち二人が危険に晒されるということである。

戦場はいつも危険と隣りあわせだ。子供であるエリオやキャロがいつ死んでもおかしくはない。

いや、はやてはそれを分かっていてあえて言わなかったのかもしれない。

言葉にしたら、それが現実になってしまうような気がしたのだろう。スチールのコーヒーの缶を見つめていたはやては、やがてゆっくりと俺のほうを見た。

その目は不安で揺らいでいる。

「でもな、何よりも後悔しているのはルーク君のことなんや」

「俺？」

はやてはしっかりと頷いた。泣きそうな顔が、じつと俺を見据えている。

「ルーク君はただの一般人や。それに次元漂流者。つまり私が、私

達が保護しなきゃならない対象や。それなのに、私はルーク君に戦いを強制してしまった。例えルーク君が自発的にそれを行ったとしても、それでも許可したのは私や・・・・・・・・・・私はそのことを後悔しとる」

「はやて・・・・・・・・・・」

俺ははやてを慰めることが出来なかった。

何を言ってもはやてが自分を責められる、そんな完璧な言葉だった。俺が否定する余地の無い、残酷な、言葉。

それを告げたはやてはゆっくりと微笑んだ。

だが、その微笑が泣いているようで、とても悲しげに見えて、俺は見てられなかった。

「私な・・・・・・・・自分が後ろから魔法で攻撃するのが嫌なんや。勿論私の魔法の性質からそうなるのは仕方が無いことや。でも・・・・・・・・前で戦うルーク君を初めとするフェイトちゃんやシグナムが傷つくのを見ながら安全なところから魔法で攻撃するなんて・・・・・・・・私には耐えられない・・・・・・・・」

一筋の涙が、はやての目から零れた。

とても綺麗に輝くその涙は、はやての無限の悲しみを象徴しているようだった。

俺はそれが零れてしまう前に、指でそれを拭った。

涙が落ちると、はやての悲しみがもう消えてしまわないような気がして、俺は不意にその行為をしていた。

「はやて、聞いてくれ」

俺ははやての目をじっと見据えながらそう呟いた。

俺の真剣なまなざしに、はやては言葉を失っていた。涙は、いつの間にか止まっていた。

「俺の元居た世界は、それなりに平和だったんだ。キムラスカ、マルクト、その二つの大国がそれぞれの領土を治めて、それなりの治安を維持していたんだ」

俺は、俺が元居た世界のことをゆっくりと話し始めた。

「でも、そんな世界でも争いはあった。キムラスカの中で、マルクトの中で、そしてなにより二国間の間で、争いは必ずあった。一旦町を離れれば魔物から身を守るために武装しなくちゃいけない。戦争になれば敵兵を倒すために戦わなくちゃならない。そんな世界だったんだ」

それを考えるとこのミッドチルダはとても平和だ。戦争が起こることも、二つの強大な国家がいがみあうこともないのだから。

「俺は、そんな世界をついこの間まで知らなかった。初めて外に出たとき、色んなことを知った。それは嬉しいことばかりじゃないんだ。勿論、見たことも無い綺麗な景色とか、とても優しい人とかにも出会った。でも、それと同じくらいに戦争で荒廃した場所や、人間の汚さも、俺は見てきた」

俺の言葉を、はやてはただ黙って聞いていた。更に俺は続ける。

「そんな世界で、俺は、俺達は戦ったんだ。こんなこと言いたくないけど、多分、俺達がやらなかったら世界は滅んでいたんじゃないかなって思っただ」

多分ではない、絶対だ。俺達がヴァンを止めなければ人類は滅亡し、作り物のレプリカの世界が出来ていただろう。

「俺は世界の全てを知っているわけじゃない。何処に誰がいて、そもそも俺の居た世界がどんな世界なのかなんてまったく知らなかったんだ。それでも俺達は戦った。何も知らない世界のために戦って……そして世界のために死ぬことを強制された、他でもない、世界の為に」

はやてが息を呑むのが分かった。口に手を当てて、驚いているのが分かる。

涙が、再び零れ落ちた。俺は微笑んで遠くを見つめた。

「前の世界の俺達と、はやて達は似ていると思うんだ。どっちも世界の為に、誰かがやらなくちゃいけないことをやってるんだよ。世界は誰かが救わなきゃいけないかった。でも、誰も強制されていたわけじゃなかった。それでも、俺達は自発的にやったんだ。はやて達だってそうだろう？ 危ないロストロギアを管理するのは誰かがやらなくちゃいけないことだ。でも、それは誰も強制されちゃいない。それでも、はやてはそれを選択したんだ」

だからってやったこと全てが許されるわけではない。

でも、その一点だけは、「誰かがやればいいからやらない」のではなく「誰かがやらなくてはならないからやる」の精神を選択したことに關しては、誇りを持ってもいいのではないだろうか。

「俺はさ、元居た世界では何も知らない世界の為に戦った。でも、今は違う。俺ははやて達の為に戦いたい。はやて達の、その選択のために戦いたいんだ。それはエリオもキャロも同じはずだ。だから二人とも弱音一つ吐かずに頑張っているんだ。自分がそれをするこ

とを選択したから、他でもない、自分が」

「ル、ルーク君はそれでええんか？ 私達の為に、選択して、それでええんか？」

慌てるはやてに俺は彼女の方を再び向いて、微笑んだ。

「いいよ。それに、俺が元居た世界で救おうと思った世界は何もしてくれないけど、今俺が救おうとしているはやて達は笑ってくれるだろ？ それだけで前より幾分まだよ」

「ルーク君・・・・・・・・・・・・・・・・」

まるでダムが崩壊するかのように、はやての目からどつと涙がこぼれた。

それを必死で拭いながら、彼女はゆっくりと、そしてはつきりと言葉を紡いだ。

「ありがとう・・・・・・・・・・ありがとう・・・・・・・・・・ルーク君」

俺ははやての背中に手を回し、胸を貸した。

俺のぬくもりに包まれて、はやては泣き続けた。

周りの局員の目も、好奇の目も、関係なかった。そんなこと、どうでもいいのだから。

「っ!？」

咄嗟に俺はぐぐもった声を上げてしまった。しかし近くに居たはやては泣いていて気づかない。

なんだ？俺は自分に問いかけた。今までこういったことは幾度となくあった。

不意にティアの寂しそうな顔が頭を過ぎることは。しかし、今頭を過ぎったのはティアではなかった。

脳裏を一瞬だけ過ぎった女性、それは確かに悲しげに俺を見つめるなのはだった。

なんだ？なんでなのは顔が？そう思ったところで、答えが出るはずは無い。

しかし、はやてが泣き止むまで、俺はずっとそのことが気になって仕方が無かった。

「あ、ありがとう。なんか情けない姿を見せちゃったな」

「そんなことないよ」

俺ははやてに微笑んだが、頭の片隅では先程の光景について考えていた。

ついさつき過ぎった光景が頭から離れない。

「それじゃあ私はもう行くな。ルーク君も夜更かしせんように気を付けるんやよ？」

「ああ、分かったよ」

俺の言葉にはやては満足そうに頷くと、部屋に戻っていった。

その様子を見ながら、俺も振り返り、自室を目指す。その途中で、俺は様々なことを考えていた。

さつき、頭を過ぎったのはなんだったのか？今までティアが脳裏を過ぎることは多々あった。

それはフェイトやはやての会話の際である。だが、なのはが過ぎることはなかった。

「あれ？」

俺は、あることに気づいた。なのはと会話しているときはティアの顔が過ぎることはなかったのである。

そこまで考えてから、俺は益々混乱した。なのはは俺の保護者のようなものである。

保護者、そこまで考えたときに胸がチクリと痛むのを感じた。それを否定しているような、そんな感覚。

俺は馬鹿馬鹿しくなつてため息をついた。

なのはが保護者でなければなんだというのだろうか？

そこまで考えてから俺は首を横に振った。やめよう。考えても分かるわけがない。

俺は思考を入れ替えて部屋へと向かう。

このとき俺は知らなかった。答えが出る瞬間が、すぐそこまで来ていることに。

ルークside

「ん・・・・・・・・・・・・・・・・」

目を開けると、朝の日差しが目に入ってくる。眩しいくらいの日光に目を細めながら、布団が取り払われるのを感じた。

「ルーク。おはよう」

手のひらで日光を遮りながら、視線を横にやると、フェイトが微笑んでいた。

ああ、もう朝か、俺はそう思いベッドから体を起こす。

朝フェイトに起こしてもらうのもこれで何回目になるか分からない。初めのうちはわざわざ隣の部屋に起しに来るのが悪いと思い、断っていたのだが、フェイトは頑なにその案を拒否していた。

その内、起してくれることに妥協した俺は、毎度こうして朝一番の時間を彼女とともに過ごしているわけであった。

「じゃあ部屋に行ってるね」

俺が着替えるために、フェイトが先に部屋を出て行くのもいつものことだ。

扉が閉まった後に俺が少しベッドの上でぼーっとするのだった日常茶飯事だ。

こんな風に一日は始まった。俺はこのとき、今日がいつもどおり過ぎていくと思ってたんだ。

ベッドから降りて伸びをすると、ポキポキと背中がなった。

それに伴い軽い眩暈を感じたが、いつものことなので俺は無視し、クローゼットを開ける。

そうこうしているうちに眩暈は治まった。一番近くに掛かっている服に手をかける。

この服ももう長い間お世話になっている。

昨日の夜に洗濯して日の光の当たらないクローゼットに入れていたというのに、もう乾いていた。

いったいどんな構造なんだか……。俺は内心で悪態をつきながら、それに着替え始めた。

最後に掛かっている黒いマントを首に巻きつけて、壁に立てかけていたハロルドを持ち上げる。

それを腰にさして、俺は部屋を後にした。今日も頑張ろう、自分自身にそう言い聞かせて、俺は扉をくぐった。

フェイトの後を追って部屋に入ると、そこには昨日と同じ光景が広がっていた。

なのはの席の前には何も置かれておらず、今日もなのはが席に居な

いことを物語っていた。

だが、その一方で違いもあった。昨日はなのはが寝ていたはずのベツドは、布団が綺麗に畳まれていた。

「なのはは？」

「なのは、早朝から訓練場に行っちゃった。多分今日の模擬戦の準備だと思っただけど……」

座りながらフェイトになのはの事を聞くと、心配そうに彼女は呟いた。

その言葉を聞いて、俺は聞き返した。

「訓練場？こんなに早く行く意味があるのか？」

「うん、多分またティアナやスバルの動きを見てるんだと思う。なのは、昨日私が寝るときもまだ起きててティアナ達の動きをチェックしてたんだ。それに朝は私よりも早く起きてたし……多分、全然寝てないんじゃないかな……」

泣きそうな顔でそう言ったフェイトを見ながら俺は目を伏せて、考える。

明らかにやりすぎだ。いつ倒れてもおかしくはない。だが、それと同時に色々なことを思った。

目の前のフェイトにはとても言えない様な、そんなことを。

俺はナイフとフォークを手に食事に取り掛かる。

楽しいはずの食事の間、俺達二人はあまり会話を交わさなかった。

朝食が終わった後、フェイトは仕事が残ってるらしく、モニターを叩いている。

俺は朝の訓練に関しては今日はなのはに任せているので、フェイトが仕事をしている間、食器の片づけをしていた。

流れる冷たい水に手を冷やしながら、俺は様々なことを考えていた。何か、嫌な予感がする。はやてが前に話してくれた悪い予感が、現実になるような、そんな感覚。

もし何かが起こるなら、それを起動させるのは間違いなくティアナかなのはだ。

だが、俺は何をすればいいのだろうか？ティアナは俺を拒否した。

なのはに対して俺が出来ることなんて、何も無い。

そう考えてから、俺は食器を洗う手を止めた。そうだ、俺は何も出来ない。

自分を面倒見てくれたなのはに、俺は何も出来ないのだ。そのことが、重く俺にのしかかってくる。

「ルーク・・・・・・・・・・・・・・・・」

ふと、俺は横を見た。フェイトが悲しそうな顔で壁に手を置いて俺

を見つめていた。

「お仕事、終わったよ？」

「え・・・・・・・・あ、ああ・・・・・・・・」

俺は自分の手が止まっていることに気づき、急いで残り僅かな食器を洗った。

その時間は短い間だったのだろうが、俺にとってはとても長く感じられた。

最後の食器を洗い終わると、俺は手を拭いてキッチンを後にした。部屋の扉のところには、フェイトが待っていた。

「行こうか」

「うん」

軽く返事をして、俺達は部屋を出た。訓練場に向かう間も、俺達の間には会話は無かった。

訓練場に着いた俺達の前では、すでになのは、ティアナ、スバルの三人の模擬戦が行われようとしているところだった。

「もう始まっちゃってるね」

「今はスターズの番だな」

フェイトの言葉に、三人を見ていたヴィータが顔だけ振り向かせた。

「本当は俺がやりたかったんだけどな……………」

俺の言葉に、フェイトが隣で悲しげに俯くのが見えた。

「ああ、なのはも最近訓練密度濃いからな、少し休ませねえと」

「なのはさん、私達が訓練している間もずっと私達のこと見てくれてるんですね」

「本当に……………ずっと……………」

キャロとエリオの言葉に、俺はなのはを見上げた。

俺が担当しているはずのエリオやキャロまでなのはは時折観察している。

俺が頼りないから、というわけではないだろう。だけど、そこまでするのはがする必要はないのだ。

人間が一人で出来ることなんて限られているのだから。

「クロスシフトだな・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヴィータの言葉に、俺は下を見る。ティアナはいくつもの魔力弾を形成し、なのはに向けて放ったところだった。

「ん？キレがねえな」

「コントロールはいいみたいだけどね」

ヴィータの言うとおり、ティアナの放った弾丸はコントロールはいいがキレがない。

スピードも遅く、避けるのも容易い弾丸だった。

なのはは体を翻しながら、空を駆け回り、それを避けていく。

それでもかなりの数を避け、あるいは撃ち落す必要性があったためか、そちらに気をとられた。

その隙を見逃さず、スバルは特攻する。ウイングロードの上を高速で疾走し、彼女はなのはに迫った。

「え？本物？」

俺は思わず呟いてしまっていた。確かに、スピードも、コースもいい。

だが、相手はあのなのはだ。彼女相手にこんなに短期で決着をつけようとするのは無理がある。

攻撃の要であるスバルをここで投じる意味が、俺には分からなかった。

スバルが本物であることに気づいたなのは戸惑いながらも魔力弾を飛ばす。

スバルはそれを体を最大限使ってなんとか避けると、拳を繰り出した。

スバルの拳となのはのバリアが音を立てて衝突する。やっぱり変だ。俺はその様子を見ながら思った。

優秀なティアナが居ながらスバルを危険な目にあわせてまで特攻させる意味が分からない。

スバル一人で戦っているならともかく、二人居るならそれぞれの力を最大限発揮したほうが勝率は上がるに決まっている。

スバルはなのはに弾き飛ばされ、一つ下のウイングロードの上に着地した。

「スバル、ダメだよ！！そんな危ない機動！！」

「すみません！！次はちゃんと防ぎますから！！」

その声で、俺は気づいた。ティアナは、何処だ？

なのはもティアナが見当たらないことに気づき、辺りを見回す。遠く離れたビルの上で、銃を構えるティアナを見つけたとき、俺は言葉を失った。

それと同時に再びスバルが特攻をかける。俺はこの作戦が分かってしまった。

だが、それはあまりにも無茶な作戦。ティアナが光のように消える。

「あのティアナさんはフェイク！？」

エリオの叫び声に、俺の中の悪い予感が大きくなっていく気がした。何だ？何が起ころうとしている？そう自問自答したとき、ティアナがウイングロードを駆け上がっていくのが見えた。

この作戦は別にいい、こうなることは分かっていた。でもこの胸騒ぎは一体……

ティアナが足をウイングロードから離し、なのはめがけて特攻した。次の瞬間、俺は目を疑った。爆風が、三人を包んだからだ。

「な、なんで爆発が・・・・・・・・・・なのは!？」

俺の声に呼応するように煙が晴れていく。そこには、左手でスバルの拳を受け止め、右手でティアナの魔力刃を受け止めているのがいた。

その光景に、俺は安堵した。右手から血が流れてはいるが、大したことはないだろう。

そう思った俺の考えがどこまでも浅かったことを、俺はすぐに思い知らされることになる。

「おかしいな、二人とも、どうしちゃったのかな・・・・・・・・・・」

その声に、俺は震え上がった。普段の明るい彼女とはあまりにもか
け離れた、地を這うような、低い声。

そして、氷のように冷たい、その瞳。それら全てが威圧感を持ってそこに君臨していた。

「頑張ってるのは分かるけど、模擬戦は、喧嘩じゃないんだよ?」

言いたいことはよく分かる。よく分かる・・・・・・・・・・けれど。

俺はなのはの言葉に易々と賛成することは出来なかった。

「練習のときだけ言うこと聞いているフリして、本番でこんな無茶するなら、練習の意味ないじゃない・・・・・・・・・・」

彼女が、怒りを顔にしていたからだ。言いたいことはよく分かる。
だが今の彼女は、正常ではない。

「ねえ、私の言ったこと、私の訓練、そんなに間違ってる?」

なのはの言葉にティアナは辛そうに視線をそらした。
ブレードモードを解除し、一つ上のウィングロードに着地する。
そのまま銃を上下に構えた。

「私は！！もう誰も傷つけないから！！だから！！・・・..
強くなりたいんです！！」

なのははその言葉をあざ笑うように指を彼女に向ける。

「少し、頭冷やそうか・・・・・・」

「うああああああああ！！ファントムブレイ・・・」

ティアナは続きを言うことが出来なかった。
それよりも速く、なのはのクロスファイアがティアナに命中した。
俺は、俺達はその状況に何も言えなかった。
スバルの体に、バインドが巻きつけられる。

「じつとして、よく見てなさい」

その声が、風に乗せられてより大きく聞こえた気がした。
指が、レンズに触れる。俺は念じた。跳べと。制限なんて気にして
いる場合ではない。

今跳ばなければいつ跳ぶというんだ。視界が歪み、次の瞬間には、
俺はティアナの目の前に立っていた。
腰のベルセリオスを抜き、構える。飛来する魔力弾に合わせて、俺
は剣を振るった。

「オニキスフレア！！」

剣から生じた巨大な炎はなのはの砲撃を包み、相殺した。爆風が生じ、吹き飛ばされそうになるのを何とか堪えた。

ティアナは気力で立っている状態だ。こんな状態で俺がここから離れたら、彼女は落ちる。

やがて爆風が止んだ。晴れていく煙の先には、なのはが冷たい目で俺を見つめていた。

同時に俺は啞然とした。オニクスフレアは俺の使う技の中でもかなり強力なものだ。

それでやっとな相殺できるレベルのものを、なのははティアナに撃とうとしていたのだ。

全く無防備の、ティアナに。

「ルーク君……どうして邪魔するの？」

なのはの地を這うような低い声が、俺を震え上がらせる。

怖い、心の底からそう思った。だが、ここで引くわけには行かなかった。

「やりすぎだよなのは。一撃で十分だ。そうだろう？」

なんとか搾り出した声は、震えていた。

しかし、なのはは少しも反応しなかった。

「私の邪魔をしないで……………」

「なのはは疲れてるんだよ！！フェイトから聞いた！！ずっとずっとフォワードの動きをチェックしてまともに寝てないって！！よく考えてみるよ！！こんなやりすぎだ！！」

「違う、私は疲れてなんかない」

嘘だ。短い睡眠時間で疲れが堪らないはずはない。人間は欲望に従順だ。

その欲望の頂点に存在する三大欲求が満たされなければ、人の心は不安定になる。

現に今、なのはの思考は正常ではなかった。

なのはの指が、俺を指し示す。その光景に、俺は我が目を疑った。戦うのか？なのはと、俺が？頭がついていかない。

戦えるのか？技術的なものではない。精神的にだ。

今まで何回も助けてくれたなのはに剣を向け、しかも傷つける。そんなこと、出来るはずがない。

「ルーク君も、少し頭冷やそうか……」

それでも、なのはの指先に桃色の光が集まっていく。

「くっ……」

嫌だった。なのはとこうした形で戦う日なんて、来なければよかった。

俺はそう思いながら剣を構えた。

恐怖ではなく、なのはを傷つけるかもしれないということに、俺の手が震えているのが分かった。

『来るわよ!!』

ハロルドの言葉に、俺ははっとした。気づけば、目の前なのはのクロスファエアが飛来していた。

6 - 2 (前書き)

気づいたら10万アクセス突破しました。

これも皆さんのおかげです。ありがとうございます！！

ルークside

桃色の閃光が、俺に迫る。その様子を見つめながら、俺は本能的に剣を構えた。

それは、長年の戦いから体が覚えた動き。自分の意思とは無関係の、戦うという意志表示。

俺は、覚悟を決めた。やるしかない。

「オニキスフレア!!」

先程と同じように、炎が閃光を食らい、爆風が起きる。

だが、さっきとは違い、それが晴れる前に、俺の視界に亜麻色の髪と杖が飛び込んできた。

槍のような形状の杖は風を切り裂き、俺に迫る。

横薙ぎに振るわれたそれは下から脇腹を正確に捉えた。

痛み息が詰まると同時に体が持ち上がるのを感じる。気づいたときには俺は吹き飛ばされていた。

空中で体勢を立て直し、ウイングロードの上になんとか着地する。

顔を上げると目の前のティアナを無表情で見つめるのはが目に入った。

まずい。俺はそう思い、剣を天に掲げ、叫ぶ。先程強打された脇腹が痛んだが、無視した。

「ハロルド!! アンビバレンス!!」

『了解!! アンビバレンス!!』

ハロルドの声に呼応してなのはの足元に魔法陣が展開する。

白い雷撃が彼女の逃げ場を奪い、続く黒の巨大な雷がその体を貫いた。

俺は、蒼い道を駆けた。素早く彼女に接近し、右の掌を繰り出す。

「ごめん・・・・・・・・・・烈破掌！！」

俺の掌に収束した赤い球体は爆発し、なのはを吹き飛ばした。

彼女の体はそのまま勢い良く瓦礫の山に突っ込んだ。

もう、嫌だ。これ以上戦いたくない。そんな俺の思いとは裏腹に、なのはは瓦礫の山から立ち上がった。

バリアジャケットがボロボロになっている。その傷を俺がつけたかと思うと、心が痛んだ。

それでも、杖は俺に向けられる。

「ディバイン・・・・・・・・・・バスター！！」

飛来する桃色の魔力弾を見ながら、俺は空間を飛び越えた。

これで二回目の使用になる。それでも、温存して何とかなる相手ではなかった。

なのはの少し上に移動した俺は、剣を振りかぶる。

顔をしかめているのが、自分でも分かる。それでも戦うしか選択肢が無いこの状況では俺は無力だった。

「岩斬滅碎陣！！」

全体重をかけて振りかぶった渾身の剣は、なのはの青いバリアに防がれた。

それと同時にバリアから鎖が伸びて、ハロルドに巻きつけられる。複雑な形をしたベルセリオスの刀身に鎖は見事に巻きついた。そう

簡単には取れそうにない。

目の前に居るなのは、杖を構えるのが見えた。まずい。この状態では、避けられない。

「デイベイン………バスター!!」

再び放たれたのはの全力の砲撃は俺を丸ごと飲み込み、吹き飛ばした。

宙を舞った俺はウイングロードの上に叩きつけられた。

背中に走った実感したことのない痛み、息が詰まる。咳をしながらも、俺はなんとか立ち上がった。

体中が痛い。立っているのさえやっとだ。あれが、なのはの砲撃。もしももう一回食らったら終わりだ。彼女の攻撃は威力が高すぎる。

「やるぞハロルド」

『了解!』

ハロルドを天に掲げ、俺は呟いた。その言葉に呼応するように、コアレンズが煌く。

『レイ!!』

切っ先に光が集中し、白い球体を完成させる。

そこから弾けるように、細い光線がなのは目掛けて飛んでいく。

それぞれが追尾機能を持っているらしく、それらは全て正確になのはを狙っていた。

だが、この程度の攻撃を避けるのはのにとって赤子の手をひねるより簡単だろう。

だからこそ、さらに繋げる必要性がある。頼む。俺の思いに、レン

ズが光った気がした。

次の瞬間には、俺はなのはの後ろに居た。

そのまま手を交差させ、全脚力を開放して突っ込む。

気配を感じたなのはは咄嗟に振り向いて俺の初撃を杖で防いだ。

しかし俺はそのまま後ろに回りこみ、彼女を空中に持ち上げる。飛燕、瞬連斬。

その技の一太刀一太刀に俺は全力を込めた。

止めとばかりに斬り上げるのと、レイが彼女に命中するのはほぼ同時だった。

光の光線に吹き飛ばされ、なのはは地面を転がった。俺もその場から離れて彼女から距離を取る。

それでも、なのはは立ち上がった。ボロボロの状態で、右手を押さえながらも、彼女は立ち上がった。

もう、見てられなかった。これ以上なのはが俺の手で傷つくのに、耐えられなかった。

「もういいだろ!!」

力任せに叫ぶ。なのはは俺の声の音量に体を震わせた。

それでも、彼女は杖を構えた。なんで、どうしてこんなことになった。

どうして。そういった考えを俺は首を横に振ることにかき消して前に出る。

風のように、俺は戦場を駆けた。もう頭は正確に機能していない。ただ、体が勝手に動いているようなものだった。

なのはに向かうところで、彼女はチャージを終えて、杖を俺に向ける。

通常よりも速いチャージ時間に、嫌な予感がした。

「ショートバスター!!」

光が、迫る。

「うおおおおおおお!! 牙連崩蹴脚!!」

最初の斬り下ろしが先端を捉え、斬り上げで威力を弱める。

砲撃を一瞬だが受けた腕に痛みが走るが、気にしている暇は無かった。

忘れる、そう念じ、無理やり痛みを封じ込めた。止めとばかりに蹴り下ろし、砲撃をかき消した。

蹴り飛ばした足が、受けた腕が、ひりひりと痛む。

着地したときに足に走った痛みで俺は倒れそうになったが、なんとか堪えた。

なのはは、完全に俺の圏内に入っていた。砲撃を放った、隙だらけの彼女には、俺の攻撃を防ぐ手段は無い。

「瞬……」

そこまで言葉を発してから、俺は気づいた。ここで瞬迅剣を繰り出せば、俺はなのはに勝つだろう。

もうなのはに防ぐ手段など残ってないのだから。だが、それでいいのか？

自分の手でここまでなのはを傷つけて、まだ俺は彼女を刺そうとしている。

そんなこと……出来るのか?……出来るのか?……出来るのか?……出るわけない。

だからって、どうするのがベストなのかなんて分からなかった。

それでも、彼女を止めることだけを考えて。

俺は剣を途中で止めた。なのはの目が、見開かれる。剣を落とし、

そのまま倒れこむように彼女を抱きしめた。

「もう、嫌だよ……………」

耐えられなかった。なのはが自分の手で傷ついていくことを。ボロボロになつていくことを。血を流すことを。そんなことに耐えられるはずがなかった。

「もう、やめよう。俺、こんなことしたくない。自分の手でなのはを傷つけるなんて、嫌だよ……………」

俺はそう呟くと、体の感覚が消えていくのを感じた。意識を失いながら感じたのは、なのはの温もりだった。

なのはside

「……………え？」

倒れたルークの重さになのはは屍餅をついていた。

自分の腰元には、ルークが倒れている。その体はボロボロで、とても痛々しい。

「ルーク君？………」

なのは手で、ルークを揺する。しかし彼はピクリとも反応しなかった。

「ル、ルーク君！？」

なのは更に強くルークを揺すった。しかし、それでも結果は同じだった。

なのはは、ゆっくりと思い出す。どうしてルークがボロボロなのか、どうして目を覚まさないのか。

その答えに行き着いたとき、なのはは体勢を変えてルークを抱えた。

「ルーク君！！ルーク君！！しっかりしてルーク君！！」

なのはの脳裏には傷ついていくルークが映っていた。自分は、なんてことをしたのだろうか。

強くさすっても、ルークは目をあけようとしない。その事実には、なのは焦っていく。

やがて、目から大きな雫を落とした彼女はモニターを展開し、声を限りに叫んだ。

「はやてちゃん！！お願い、ルーク君を助けて！！」

急に呼び出されたはやては目を見開いていたが、やがてなのはに指示を出した。

慌てながらなのははルークを抱きかかえて、シャマルの医務室に向

かった。

ルークを医務室に運んでシャルに言われたのは、部屋から出るようにだった。

ルークは怪我が酷く、安静にしていないとまずいらしい。

なのははその言葉に従って外で立ち尽くしていた。

自分がルークをあんな姿にしたかたと思うと、恐怖で体が震えるのが分かった。

足音が、響く。振り返ると、はやてが走ってきていた。

はやてはなのはの前で立ち止まると彼女の頬を全力で叩いた。

乾いた音が、廊下にこだまする。なのはは叩かれた頬を押さえながらはやてを見た。

彼女は、怒りの表情でなのはを見つめていた。

「なにやってるんや!！」

大きな声に、なのはは肩を震わせた。初めて見たのだ。

親友がここまで怒りを顕にしているのを。

「模擬戦のやつ、見せてもらったで。なんであんなに本気でやったんや！！ルーク君を殺すつもりかいな！！」

その言葉が、なのはの中で反復される。それを否定するようになるのは力なく首を横に振った。

目は既に潤んでいる。違う、そんなつもりはまったく無かったのだ。

「ち、違う……そんなつもりじゃ……」

「でも結果的にそうなってるやる！！」

はやての言葉で、なのはの目からついに涙が零れた。

分かっている、自分がルークをあそこまで傷つけたことなど。

たとえ傷つける意志が無かったとしても、結果は同じだ。

いくら吼えたところで、なのはの言葉は言い訳にしか聞こえない。

それをはつきりと理解したなのはは俯いた。床を涙が濡らしていく。その様子を、ただはやては見ているだけだった。

「部隊長命令や、スターズ隊長高町なのはを謹慎処分に処す。部屋に戻り」

それは、かつてないほど冷めた声だった。

冷めた声の背後に、熱い怒りが渦巻くような、そんな声だった。

なのはは俯いたまま振り返り、とぼとぼと自室に戻っていく。

その背中にかける言葉など、はやての中には存在しなかった。

はやて side

「嫌われ役だね」

不意に後ろから声がした。振り向くと、フェイトが歩み寄っていた。はやては力なく笑った。

「こういうのは私の仕事やからなあ、それに・・・・・・・・・・本当にそう思ったんよ」

はやての言葉に、フェイトは黙った。

フェイトは、知っていた。自分と同じようにはやてもルークに惹かれていないと。

想い人が瀕死の状態なのだ。怒りを抱かないわけがない。

それはフェイトも同じだった。フェイトだって今なのはに会ったら何を言うか分かったものではない。

勿論、頭の中では理解している。なのは行動原理も、気持ちも。

だが、理解していても心はそれを受け入れなかった。

不意に、扉が開いた。中からシャルマルが出てきて、二人は慌てて駆

け寄った。

「シャマル！！ルーク君の容態は！？」

「大丈夫よ。ハロルドさんがキュアをかけてくれたから大事には至ってないわ。それでも、かなりダメージが酷いことに変わりはないわ」

「ちよつと入るで！！」

はやてはシャマルを押しつけて医務室に入った。フェイトもそれに続く。

入ってから、はやては辛そうな声を漏らした。ルークは、安らかな顔で眠っていた。

だがその体はボロボロで、ところどころに傷が見受けられる。ぎゅっと、はやての掌が強く握り締められた。

「私は・・・・・・・・・・なのはちゃんが許せん。ルーク君をこんなにしたなのはちゃんを、許すことなんて出来ない」

その声に、はやてを見たフェイトは言葉を失った。

はやては今までフェイトが見たこともないような怒りの表情で言葉を紡いでいたからだ。

扉が開く、そこには、シグナムが立っていた。

「主、ライトニングの模擬戦はヴィータに任せました。本当はルークが良かったようですが、その様子では・・・・・・・・・・」

事細かにその後の詳細を告げたシグナムはルークを見て悲しげに目を伏せた。

はやては彼女を見ると微笑んでありがとうなと呟いた。
微笑んでいても、その目には怒りが宿っていた。

「なのはちゃんは謹慎処分にした。ティアナはどうなっとる？」

「彼女は高町のクロスファイアが直撃しましたが、普段どおりに活動は出来るようです。今はスバルとともに部屋に戻しました」

「そっか・・・・・・・・・・」

はやては呟き、ルークの手を握る。

その目には、未だに確かな怒りの炎が渦巻いていた。

夜になるまで、はやて、フェイトの二人はルークのもとを離れなかった。

シグナムは途中で一回抜けたが、その後戻ってきてずっと傍に居る。ヴィータもライトニングの模擬戦が終了してからすぐにルークの元

に来ていた。

エリオ、キャロもベッドに手を置いて心配そうにルークを見つめている。

「ルークは、幸せものだね。こんなに沢山の人に心配されて」

「そうだな・・・・・・・・・・」

フェイトの言葉に、ヴィータは微笑んだ。

これだけの人数が集まるのも、ルークの人徳といったところだろう。皆で微笑んでいると、アラームの音が響いた。赤いランプが、視界を染める。

はやては急いでモニターを展開した。

「どうしたんシャーリー!?」

「はやて部隊長!!海上にガジェットドローンが出現しました!!」

シャーリーの言葉と映し出された情報に、はやては様々なことを考え始めた。

そしてある結論に行き着いたとき、隣に座るフェイトに視線を向けた。

「フェイトちゃん、どう思う?」

「多分、こっちの戦力が知りたいんだと思う」

フェイトの言葉に、はやては頷くと、シグナムとヴィータを見た。

「二人とも、悪いけどフェイトちゃんと一緒に撃ち落してもらって

もええかな？今は動けそうな戦力が少なくなてな」

はやての言葉に、二人はしっかりと頷いた。
その反応に彼女は満足そうに頷いた。

「向こうの狙いがこつちの戦力調査なら態々奥の手を見せる必要はあらへん。今までの技で頼むわ」

「了解しました」

はやての言葉にシグナムはルークの顔を見る。
暫く見た後に、彼女は部屋を出た。それはヴィータも同じだった。
そしてフェイトも。

「ほんなら私とフォワード陣は見送りや。いくで」

「「はい!!」」

はやての言葉にエリオとキャロはしっかりと頷いた。
はやてはルークの寝顔を見て、行って来るなと呟いて部屋を出た。

はやてside

夜のヘリポート。風が吹き荒れるそこに集まったのはフォワード、隊長、副隊長だった。

しかしそこには本来居るはずのルークとなのは居ない。

逆に本来なら居るはずの無いはやてが、そこには立っていた。

「今回は空戦やからフォワード陣はロビーで待機。出るのはフェイト隊長、グイータ副隊長、シグナム副隊長や。ここでの指揮は私が取る。ええな？」

「はい！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい」

はやての言葉に、三人ははつきりと答えたが、ティアナだけは力の無い返事をした。

その様子に、はやてが彼女をじっと見つめる。

「それとティアナ。ティアナは出勤待機から外しとくで」

その言葉に、ティアナは目を見開いた。

同意するようにグイータ、フェイトがうんうんと頷く。

他のフォワードは動揺したが、上の命令は絶対である。逆らうことはできなかった。

ティアナは俯き、唇を悔しそうにかみ締める。

「・・・・・・・・・・言うことが聞けないやつは・・・・・・・・・・使えな
いってことですか？」

絞り出したその声は、恐ろしいほど低い声だった。

だがそれでもはやては態度を一切変えない。ただ冷たい目でティア
ナを見下ろしている。

小さくため息をついて、彼女はティアナを睨み付けた。

「そんなん、当たり前のことやる」

はやての言葉に、ティアナはぱつと頭を上げた。

その目には、怒りが宿っている。理不尽な待遇に対する、怒りが。

「現場での指示や命令はちゃんと守ってます。教導だつてちゃんと
サボらずやってます。それ以外の場所での努力まで、教えられたと
おりじゃないとダメなんですか？」

その言葉に、ヴィータが、フェイトが、シグナムが、怒りを抱き始
める。

前に出ようとしたシグナムをはやては手で制止した。

「私ははやてさん達みたいにエリートじゃないし、スバルやエリオ
みたいな才能も、キャラみたいなレアスキルもない、死ぬ気でやら
なきゃ、強くなんて・・・・・・」

ティアナは続きを言うことができなかった。

屋上に、乾いた音が響く。気づいたときにはティアナははやてに頬
を叩かれていた。

頬を押さえて、ティアナは俯いた。はやてはヴァイスを呼び、出る
ように告げる。

隊長達に有無を言わずに、はやてはへりを空に飛ばせた。

へりが小さくなっていく様子を見ながら、彼女はゆっくりと振り返った。

怒りの表情で。

「目障りや、さっさと部屋に戻りい」

はやての尋常ではない怒りを目の当たりにしてエリオは控えめに声をかけた。

「あ、あの、はやて部隊長、その辺に……………」

「スバルさん、とりあえずロビーに……………」

キヤロの言葉を見無視して、スバルは立ち上がった。

「はやて部隊長」

その目には、強い意志が宿っている。

彼女はまっすぐに見据えるはやてから目を逸らすと、ゆっくりと話し始めた。

「命令違反は……………確かにダメですし、さっきのティアの物言いも、それを止められなかった私達もダメだと思います。でも……………」

そこで彼女は目をつぶり、顔をあげた。

「自分なりに強くなろうとするのとか、キツイ状況でもなんとかしようと思うのはそんなにいけない事なんでしょうか!?自分なりの

努力とか、やつちやいけないんでしょうか!？」

スバルの言葉に、はやては何も言わなかった。
だが、エリオは感じていた。彼女はとても怒っていると。

「ならこつちから聞くで、スバル、ティアナ。今二人が言った中に、結果として無関係なルーク君が傷ついていい理由があるんか？」

その言葉で、二人は目を見開いた。

その様子が、さらにはやてをイラつかせる。

「あるなら言ってみ!！」

その音量と迫力に、ティアナとスバルは肩を震わせた。

言い返せるわけが無い。そんな理由など、初めから存在しないのだから。

「私は二人の教官やない。だから自分なりの努力がどうか、そんなこと上手く言えるわけない。けどな、私が怒ってるのはそんなことやないんや。ルーク君が傷ついた。ただその一点だけや」

はやては早口でそうまくし立てると、頭を押さえた。

「もう行くで?このままじゃなに言い出すか分からんからな……」

はやてはそう告げるとスバルの横を通り過ぎていつてしまった。
後に残った四人は、誰も、何も言えなかった。

自室に戻ったはやては椅子に座ってぼーっとしていた。

分かっているのだ。部隊長として先程の対応は褒められたものではないし、このままではいけないことも。

だが、はやては聡明だった。どうすれば良いのか、もう答えが頭の中では出ていたのだ。

「話させるしかないな……………」

はやては呟き、ため息をついた。

広い部隊長室。そこには全員が集まっていた。

今まで出動していたフェイト、シグナム、ヴィータ、ロビーで待機していたフォワード四人、そしてなのはもである。

ここまでの人数が部隊長室に集まることは今までなかった。そうせざるを得ない状況が、起こっているということである。

「フェイトちゃん、シグナム、ヴィータ、撃墜任務、ありがとうなほな、話そうか。なのはちゃん」

はやては三人をねぎらうとなのはにそう声をかけた。相変わらず視線は厳しい。なのはは頷くと、モニターを展開させた。

「聞いてティアナ。私は元々ただの一般人だったの。魔法学校に通ってるわけでもないし、戦闘なんてしたこと無い、ただの九歳の女の子だった」

モニターに、幼いころのなのはが映し出される。

それは学校で友達と触れ合ったり、家族と笑顔で会話する、普通の女の子の映像だった。

「でもね、ある事件がきっかけで、私は魔法少女になった。その過程で、フェイトちゃんとも戦った」

モニターの映像が切り替わり、白の魔法少女が空に飛び上がる映像が映し出される。

フェイトと戦うなのは、謎の生物と戦うのはと、シーンは次々と変わっていく。

そのモニターを見ながら、フェイトは視線を伏せた。

始まりの事件は、フェイトが深く関わった。それはフェイトにとっても悲しい事件。

そして、きっかけを作ってしまった事件でもある。

シーンが切り替わる。そこには収束砲、スターライトブレイカーでフェイトを撃墜するなのは姿があった。

「収束砲!？」

「ただでさえ大きい収束砲は負担がかかるのにあんなに小さな子供が!？」

映し出された光景に、エリオとキャロは声を張り上げた。

その光景は二人にとって衝撃的だった。たった九歳の女の子が収束砲を使いこなし、しかもそこまで大きいものを出せるとは思ってもみなかったのだろう。

「そして、私らが深く関わった、闇の書事件」

はやての言葉で、さらにモニターが切り替わる。

そこにはヴィータと激戦を繰り広げるなのは姿があった。

「私はヴィータちゃんと戦って、敗北した。その結果選択したのが、当時は安全性に問題があったカートリッジシステム」

「限界を超えて無理やり力を放出させるカートリッジシステムが幼いなのはちゃんの体を蝕まないわけはなかったんや」

映し出されたのは、雪の中、真っ赤な鮮血で体を染め上げたのはだった。

傍で慌てたようになのはの名前を呼ぶヴィータとその血の量が、怪我がどれだけ酷いかを物語っていた。

「入局二年後の冬、無理がたたった私は反応が遅れたの。そして、撃墜された。待っていたのは、過酷なりハビリ生活・・・・・・・・・・」

その言葉と映像に、フォワードの四人は息を呑んだ。

それは、あまりにも痛々しかった。僅か11歳の少女が、顔を苦痛に歪めながら、必死で努力する。

目をそらしたくなるような光景を、フォワード四人はただ見ているしかなかった。

「だからね・・・・・・・・嫌なんだよ。皆が私みたいになるのは、ティアナにも、スバルにも、キャロにも、エリオにも、こんな経験してほしくないんだ・・・・・・・・」

なのはの願いは、切実だった。そしてそれは確かに、四人に届いた。四人は何も言わなかったが、それでも、確かに伝わった。

扉が、不意に開く。そこには、全員が見知った緋色が立っていた。

「ルーク君・・・・・・・・アカンやか！！立ち歩いたりしたら！！」

ルークの姿を認識したはやては椅子から飛び上がるように立ち上がり、彼をソファーに座らせた。

ルークは立ち去ろうとするはやての袖を掴み、引きとめた。

「はやて、聞いてくれ。なのはは疲れてるだけだったんだ。俺はもう大丈夫だから。だから、なのはを許してやってくれないか？」

ルークの言葉ではやては悲しげに目を伏せた。

ルークが倒れたとき、はやては全身の血が凍るような思いをした。模擬戦の映像を見たとき、ルークをそんな風にしたなのはに怒りを抱いた。

それでも、そのルークに許してやってくれと言われれば、許す以外の選択肢なんて存在しなかった。

彼は今自分のことをとても悲しげに見つめているのだから。

はやてはため息をつくとなのはを見た。もうその目には怒りは宿ってなかった。

「分かった。今回は許すで。でも条件がある」

はやてはなのはを指差し、告げた。

「もう二度と無理をしないことや。フェイトちゃんから聞いたで、頑張りすぎてろくに休んでないって。その結果が今回の事件を引き起こしたんや。絶対に無理しちゃアカンで？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・分かった。ありがとうはやてちゃん」

はやての言葉になのははっきりと頷いた。

なのはの返事を聞いて、はやては満足そうに笑顔で頷いた。

ルーク side

はやてとなのは、二人が仲直りをした後、俺は話すことにした。
俺の過去を、全てを。なのはの過去も、フェイトの過去も、はやての過去も聞いた。
なら、今度は俺の番だ。

「皆、聞いてくれないか？俺が元の世界で何をしたのか。何があったのかを」

俺の言葉になのは、フェイト、はやての三人は目を丸くした。
三人は俺の過去を知っている。全てというわけではないが、それでも知っている。

俺は三人を順番に見ると、決意を固めた。

「なのは、はやて、フェイトの三人はもう知ってると思うけど、実は話していないこともあるんだ。だから、聞いてほしい」

三人は表情を引き締めた。
それでも、その目には優しさが宿っていた。どんなことを話されて

も、俺を受け入れてくれる、そんな優しさが。

三人に背中を押され、俺はゆっくりと語り始めた。

俺の、今までの、たった九年間の全てを。

「まず、俺は普通の一般的な人間じゃない。フェイトと同じ、クロインってやつだ。まあ俺の世界では俺みたいな奴のことをレプリカって呼んでたけどな」

いきなり出てきた衝撃の発言に、フォワード陣も、そしてシグナム達も言葉を失っていた。

「知ってると思うけど、俺には超振動っていう力があつた。だからこそ、俺は軟禁されていた。……・・・・・預言スコアという定められた未来によつて」

「預言スコアつてのは遙か昔にユリアつて人が詠んだもので、人類滅亡までの未来が書き記されているんだ。だから人々はそれを絶対として、そうなるように生活していた。だから俺も、預言スコアに記されたことをするまで軟禁されてたんだ。とある街に行つて、死ぬ。その預言を達成するまで」

「なんだ。……・・・・・なんだそれは。……・・・・・」

俺の言葉にシグナムは動揺していた。当たり前だろう。

そんな世界、俺も、皆も間違っていると思つていたのだから。

「俺は、とある事件で外に出た。外に出て、色んな人に出会つて、そして、知らず知らずに俺はとある街、アグゼリウスに向かった」

「じゃあ、その街が。……・・・・・」

エリオの言葉に、俺はゆっくりと、しかししっかりと頷いた。
アグゼリウス。それは忘れる筈の無い、いや忘れられない、街の名前。

「三人には、ヴァンがアグゼリウスを崩落させたって話したけど、
実は違うんだ」

俺は、俯いた。怖い。言いたくない。

そう思ったとき、誰かが俺の手に触れた。

ふと隣を見ると、なのはが俺の手を握ってくれていた。

「大丈夫。誰も、ルーク君を責めないから。大丈夫だよ」

俺は、泣きそうになった。その優しさが、暖かさが、心に染みだ。

「本当は、崩落させたのは、俺なんだ。俺が、殺したんだ。アグゼリウスの、何千という人を。・・・俺はヴァン、俺の剣の師匠に暗示をかけられていた。それで、滅ぼしてしまった。それでも、例えば暗示をかけられていたとしても、やったのは俺だ。俺が、殺したんだ。それから、ヴァン達との戦いが始まった。その戦いの中で、何人も死んだし、何人も殺した。そして、俺は、世界を救うために消えることを強制された。ローレライをヴァンの手のから解放し、消えることが、俺の使命だった。そして俺は消えて、この世界に居るんだ」

俺はそこまで告げるとティアナを見た。彼女は泣きそうな顔で、俺を見つめていた。

「だから、俺の持つ強さは、人を殺すために身につけた力なんだよ。血に塗れた、力なんだ。こんな力を、ティアナは欲しじゃない

んだよ・・・・・・・・・・」

ティアナは口元を押さえた。涙が、流れる。

「ごめんなさい。そんなつもりは無かったです。ごめんなさい・・・・・・・・・・」

ティアナが、俯き、嗚咽を堪える。

なのはに握られた手に、力が入る。

横を見ると、なのははまっすぐと俺を見つめていた。

「ルーク君。話してくれてありがとう。私達を、信じてくれてありがとう。ルーク君の過去は、とっても辛いものだった。それでも、頑張って話してくれた。私達は、ルーク君を拒絶したりしないよ？ルーク君がどんな過去を歩んできたとしても、それは過去でしかないから」

「そうやな」

なのはの言葉に答えるように、はやては微笑んだ。

「なのはちゃんの言うとおりや。私らは人を殺したことが無い。だから、ルーク君の痛みが、全部分かるわけやない。でも、少しでも理解することは出来る。ルーク君を支えることは出来る」

「私達が、ルークの苦しみを和らげることなら、出来るんじゃないかな？」

はやての言葉に続いてフェイトがそう言った。
周りを見渡せば、全員が笑顔で俺のことを見つめていた。

かつて味わった責めるような視線ではなく、見守るような、暖かい視線で。

「気にすることはねえぞルーク。例えばルークがどんな過去を送ってきたにせよ。ルークは現在^{いま}に居るんだ。そして、そんなルークが皆大好きなんだからな」

「そうだ。案ずるな。お前はお前だ。機動六課ライトニング副隊長、ルーク・フォン・ファブレだ」

ヴィータ、シグナムが微笑みながらそう言ってくれた。

涙を堪えることが出来ない。分かっていたが、彼女達はなんて暖かいのだろうか。

俺は涙を拭くと、にっこりと微笑んだ。

「ありがとう。皆！！」

満面の笑みで答えた俺だったが、何故かその場のエリオを除く全員が顔を赤くしてしまった。

そんなことに気づかず、俺は笑顔のまま皆を見ていた。

大丈夫だ。もう、歩ける。俺には、支えてくれる皆が居るんだから。

6 - 4 (前書き)

お気に入り登録件数が100件を突破しました。

本当にありがとうございます!!

ルークside

はやての部屋。そこで俺ははやてと二人きりだった。

俺の過去を話した後、皆には部屋を出ていってもらった。

なのはティアナと話をするといって彼女を連れ出した。

だが、大丈夫だろう。ティアナはなのはの想いが分かっている筈だから。

「はやて、シャルマルから聞いたよ。なのはに怒ったって」

目を覚ましたとき、目の前にはシャルマルが座っていた。

そのシャルマル本人から、様々なことを聞いた。どうして俺が医務室に居るのか。

結局戦いはどうなったのか。

そして、はやてがなのはに怒りを顕にしたことを、俺は知った。

体を無理やり起こしてはやての部屋まで行った。体を引きずりながら、聞こえてきた彼女の声は驚くほど怒りを孕んでいた。

だから、俺ははやてに願った。なのはを許してくれと。

六課が壊れてしまう前に、それを止めるために、俺は必死に願った。結果として、はやてはなのはを許した。それでも、彼女はまだなのはを完全には許していないだろう。

「六課のために怒ったってことは分かる。はやての嫌な予感的中してしまっただけのこと。それでも、六課をまとめるはやてが怒ったら結果的に六課を壊しちゃうよ」

はやては、六課の責任者だ。そのはやてが、六課の壊滅を防ぐため

に怒ったとしても、それでは逆に六課を壊してしまう。

俺の言葉に、はやては頷き、そうやな、と呟いた。

不意に、通信が入った。なのはだ。

文章欄には短く一言、話をしたいと書いてあった。

「ごめん、なのはに呼ばれたみたいだ。行ってくる」

「うん。行っておいで」

はやては俺の言葉に頷き、笑顔で見送ってくれた。

俺は知らなかった。

その笑顔に影が差していたことも、出ていった後に、六課のためじやなくルーク君のために怒ったんやよ、という呟きが部屋にこだましたことも。

俺は、なのはと待ち合わせをした六課のロビーに急いでいた。彼女はもう着いている頃だろう。

その彼女を長い間待たせるわけにはいかない。なにより、彼女を一人にしたくはなかった。

どうしてかはよく分からないが、それでも、俺は急いだ。

ロビーに入った俺はソファに座るのを見つけ、急いで彼女に駆け寄った。

足音を聞いたなのは振り返り、俺の姿を見つけると微笑んだ。

「ごめん、遅くなった」

「ううん、待ってないよ」

俺は一言なのはに謝ってから彼女の隣に腰を下ろした。

座った方がいいが、俺もなのはも、何も話さなかった。

いや、何を話したらいいか分からなかったのかもしれない。

俺は話を持ちかけられたほうで話す内容があるわけではない。

それに、先程からなのは手を握りしめている。まるでなにかを告げる決心をしているように。

彼女は一度目を瞑ってから勢いよく俺のほうを向いて頭を下げた。

「ごめんなさい！！ルーク君は何も悪くないのに傷つけて、本当にごめんなさい！！」

なのはの声が、六課のロビーに響いた。

普段人がいれば振り返りそうなほどの音量に、俺は目を丸くしていた。

確かに、傷は酷いものだったし、痛かった。

だが、あれは俺から言わせて見ればなのはが疲れていたからであって、ここまで真剣に謝られるとは思ってもしなかったのである。

微笑み、俺はなのはに声をかけた。

「顔を上げてくれないか？」

なのははゆっくりと顔を上げた。その顔は怒られるのを待つ子犬の

ようだった。

その様子がとても可愛くて、胸が高鳴った。だが、なのはの手前、表情を崩すわけにはいかない。

「別に、傷ついたのはいいんだ。戦えば傷つくのは当たり前だし、そんなことでなのはに怒ったりしないよ。でも…….
・なのはといがみあうように戦うのはもう嫌だな」

そつと呟いた言葉に、なのはは目を見開いた。そこから涙が頬を伝って流れた。

それを指で拭いながら、彼女は笑った。

「もう…….ルーク君は優しすぎるよ…….」

それは、俺が見た中で一番綺麗な笑顔だった。涙を流していても尚、俺には彼女が美しく映った。

蒼海で生きる女神のように、彼女はとても美しかった。

手を伸ばし、なのはの涙を拭ってやる。俺の手は、血に汚れている。それでも、彼女に触れても彼女が汚れることはないように思えた。なぜなら、彼女はとても綺麗だから。多分、俺の血の汚れまで浄化してくれるだろう。

その証拠に、俺の手には意識しても血など一切映らなかった。ゆっくりと触れた指を伝って、暖かい何かが俺の中に流れ込んでくる。

何故か分からないが、俺は心地よさを感じていた。

名残惜しくもそこからゆっくりと指を離し、俺はなのはを見つめた。助けたい、彼女を。もう彼女が悲しまないように、俺がなのはを支えたい。

そう思った瞬間に、俺の頭の中を様々な情報が行き交った。何をすれば良いのか、その答えは、もう出た。

「なのは、部屋に戻っててくれ。俺、ちょっと行ってくる!!」

「え？ルーク君!？」

俺はなのはの言葉も聞かずに立ち上がり、走り出した。他でもない、なのはの助けとなるために。

俺ははやての部屋を目指して、風のように駆け抜けた。

なのは side

ルークが走っていった方向を見ながらなのはは啞然としていた。彼は今現在、絶対安静の身である。その彼は、物凄いスピードで小さくなっていく。

「……………あれだけ走れば、もう大丈夫だよな」

なのはは苦笑いしながら呟いた。それでも、その顔には笑みが残っている。

正直、怖かったのだ。自分がルークを傷つけた。
でも、謝った際にそのことを咎められるんじゃないかと思うと、体が震えるのを感じた。

だが、ルークは彼女を許した。そしてあまつさえ、辛かったのはなのはと戦ったからだと言ってくれたのだ。

自分がどれだけルークに心配をかけて、そしてどれだけ彼が自分を仲間として想ってくれているのかが、身に染みた。

そこまで考えたときに、ふと胸を刺す痛みが走った。

なのはは自分の胸を押さえると、訳が分からないといった表情をした。

まるで今口にした言葉を辛く感じるように。しかし、なのはにはその理由が分からなかった。

「まあ、いいや」

そう呟き、なのはは立ち上がった。

その理由が分かるときが来るのはもうすぐそこであることに、彼女が気づくはずも無かったのである。

ルーク side

はやての部屋を訪れた俺は机に座って作業をするはやてに詰め寄った。

あまりの迫力に、はやてはたじたじになる。

はやての正面まで来た俺はしっかりと彼女の目を見て言った。

「はやて、お願いがあるんだ。なのはがやる仕事のうち、俺でも出来そうなものを回してくれないか？それと、コールをスターライトニング0にしてほしい。頼む」

俺はしっかりと頭を下げた。俺は、なのはを助けたい。

だからこそ、俺が出来る事をしたい。出来ることは僅かしかないかもしれない、それでもやりたい。

俺の想いははやてに届いたのか、彼女は息を吐くと頭を押さえた。ゆっくりと顔をあげて、様子を見る。

「正直こうなるかなって思ってたんや。まさか本当にそうなるなんて……」

彼女が言っていることが、俺にはいまいち理解が出来なかった。だが、彼女は悪戯に微笑むと、モニターを展開した。

「昨日の段階で文字の書きは完璧になった。ハロルドさんが居れば、殆どの仕事は出来るはずや。これが、なのはちゃんの仕事の中でルーク君が出来る仕事や。約半分って所やな」

モニターに映し出された仕事量が、俺のモニターに移される。

管理局内では俺は囑託魔導士として登録されている。

俺の仕事に関してははやてが適当に片付けているが、大した量ではないという。

俺の仕事に、なのはの仕事、大変かもしれない。それでも、俺はこの選択に誇りを持っている。

はやてはモニターを消すと、背もたれに寄りかかった。

「あと、コールに関してもなんとかしとくで。ということであえんやろ？ スター、ライトニング両副隊長ルーク君？」

はやての言葉に、俺は微笑んだ。

「ほな、早く皆のところに行き」

「ああ、ありがとな！！」

俺ははやてに笑顔でそう告げると部屋を後にした。

はやてside

広い部屋、その部屋ではやては椅子にもたれ掛かって天井を見上げていた。

眠っているわけではない。だが、そうでもしないと涙が零れそうだったのである。

気づいてしまった。ルークの気持ちがもう既に自分ではなくなのは向かってしまっていることを。

そして、自分が入り込む余地など、残されてはいないことも。

「悲しいなあ……………」

背もたれから体を離し、机に突っ伏す。

涙が袖を濡らすことも、構いはしなかった。

「初恋は叶わないって言うけど……………本当かな……………」

はやては自らを嘲笑うかのようにそう呟くと、意識を闇に沈めた。悲しみと、涙の跡を残して、はやての初恋はゆっくりと幕を下ろした。

ルークside

俺は走っていた。向かっているのは六課の寮室、エリオの部屋だ。その扉の前に立ち、ブザーを押すと、中からどうぞという声が聞こえた。

中に入ってみると、エリオ以外に、本来は居ないはずのキャラが居た。

普通、男性の部屋に女性であるキャラが居るといのは褒められたことではない。

だが二人はまったく気にしてはいないし、俺もそのことに構っている暇は無かった。

「エリオ、ちょうどよかった、キャラも聞いてくれ」

俺は、彼らに話し始めた。

なのはの助けになりたいこと、コールをスターライトニングに変更したこと、それになのはの仕事の幾つかを俺が担当することになったこと。

そこまで話してから俺は二人と視線を合わせるためにしゃがみこんだ。

「だから、訓練に今みたいに力を入れることが出来なくなるかもし

れない。勿論、本気でやる。それでも、多分、そうなると思う」

彼らに話しているところで俺は段々と俯いていった。

自分勝手だっことは十分に分かっている。ただのエゴだっことも。

それでも、俺はなのはの力になりたかった。

「顔を上げてくださいルークさん」

聞こえたエリオの声に、俺は顔を上げる。

彼は微笑みながら俺を見ていた。彼だけではない、その隣に座っているキャラも、優しい微笑を浮かべていた。

「私達は大丈夫です。それに、ルークさんは一生懸命やってくれました。だから、これから大丈夫です。ルークさんはルークさんに出来ることをしてください。なのはさんの為に」

キャラの言葉に俺は目を丸くした。

分かっているのだ。エリオも、キャラも、俺の気持ちを。

「二人とも……………ありがとう」

俺はそう呟くと、踵を返して部屋を後にした。

ノックの音が、廊下に響く。開いてるぞ、という声を聞いて、俺は扉をスライドさせた。

扉の向こうでアイスク্যানディを舐めていたヴィータは俺の姿を見て目を丸くした。

「ど、どうしたんだよルーク。体はもう大丈夫なのか？」

「ああ、もう大丈夫だよ」

急いで椅子を準備しようとしたヴィータに、俺は首を横に振る。長居するつもりは無い。今日出来ることは、今日終わらせたい。

「ヴィータ、頼みがあるんだ」

俺はしゃがんで目線を彼女と合わせた。

「スバルの訓練を見てくれないか？」

「・・・・・・・・それは、なのはの為か？」

ヴィータの顔が寂しげになった。俺はゆっくりと頷く。

「ああ、なのはの負担を減らしたい。だから、頼む。仕事は俺が片

付けることになったから」

「で、出来るのか!？」

俺の言葉にヴィータは目を丸くした。無理も無いだろう。

ヴィータは俺がまだ文字を書けるようになった程度のレベルであることを知っているのだから。

俺は苦笑いをして、腰のベルセリオスを引き抜いた。

「俺じゃあ時間がかかるかもしれない。でも、頑張りたいんだ。なのはの為に。だから、ハロルドも協力してくれ」

『言う順番が間違ってるわよ。普通先に私にそう言うべきよ』

「じめん」

ハロルドの相変わらずな物言いに俺は苦笑いした。ヴィータに先程エリオとキャロにした説明をする。するとヴィータは笑顔で頷いてくれた。

「分かった。スバルはあたしに任せとけ」

「ありがとう。じゃあ俺は行くな!!」

俺はヴィータにそう告げると部屋を飛び出した。

ヴィータが一人、部屋で俺が出ていった扉を見つめる。

「どうやら、もうあたしがお前を守る必要はないみたいだな」

そう呟いて、ヴィータは微笑んだ。

6・5（前書き）

どうも白蓮です。

10万アクセス突破&お気に入り登録100件突破記念に何か書こうかなと思ってます。

そのうち勝手に入ってくると思うのでww

それでは。

ルークside

六課の廊下を走りながら、金の髪を探す。しかし、どこへ行っても彼女を見つけることは出来なかった。

「どこに居るんだ？」

足を止め、息を整えながら俺は呟いた。もうかなりの時間六課を走り回っている。

それでも、一向にフェイトは見つからなかった。

なのはの負担を減らすのに必要な人達には一通り声をかけた。

あとはライトニング隊長のフェイトだけである。

しかし、ここまで探して見つからないと、もう今日は見つからないのではないかという気持ちが出てくる。

彼女を探すのを諦めて俺は一番の目的であるなのはの部屋へと向かうことにした。

なのはの部屋が近づいてきたとき、俺は声を聞いた。

そして、フェイトが見つからない理由を悟った。見つかるわけないのだ。

彼女は最後に行こうと避けていた場所、つまりなのはの傍にいたのだから。

六課の扉は薄い。その前に立てば中での会話が聞こえるくらいだ。だからこそそれぞれの部屋は離れて配置してある。俺は中に入ろうとしたが、聞こえてきた声がそれを引きとめた。

「模擬戦で無茶しすぎちゃったね」

「うん、ルーク君を、傷つけちゃった………」

話しているのは、模擬戦の事件のことだった。

フェイトは、なのはを咎めているようだった。それに耐えかねて扉を開こうとしたとき、フェイトのため息が聞こえた。

「可能な限り私が時間を作ってエリオとキャロの訓練を見るから、だから、もう無茶しちゃダメだよ？なのはも、そこで立ち聞きしてるルークもね」

フェイトの言葉に、俺は心臓が止まるかと思った。

気づかれたことに対してすまないと思い、俺は正直に扉を開いて中に入った。

だが中に居るフェイトはニコニコと笑っているだけだった。なのはに関しては何がなんだか分からないといった顔をしている。俺が扉の外に立っていることに気づかなかったのだろう。

フェイトは椅子から立ち上がると俺をしっかりと見据えた。

「じゃあ、私は部屋を出るね。後は二人でゆっくりと話してね」

パチンと片目を可愛くウィンクさせた彼女は微笑みながら部屋を出ていってしまった。

部屋に、沈黙が走る。俺達は微妙な距離でお互いに何も言わずに立ち尽くしていた。

「あのさ、はやてに頼んでコールをスターライトニング0に変えてもらったんだ」

突然の俺の言葉になのは目を丸くしていた。

何を言っているのかよく分からないといった顔をしている。

そんななのはを無視して、俺は続けた。

「なのはの仕事も、出来る分は俺に回してほしいってはやてに頼んだ。訓練も、ヴィータ達がもっと協力してくれるって話になったよ」

そこまで話してやっとなのは俺が何を言っているのか理解した。その目が、揺らぐ。

「だからさ、ティアナのチェックも、一緒にやろう。一人より二人なら色んなことが分かるはずだ。それに、その分早く終わるはずだから」

「どうして……………」

泣きそうな声で、なのはは呟いた。

その声は普段の彼女とは似ても似つかないくらい小さくて、弱弱しかった。

俺はなのはに微笑みかけた。そんなの、決まってる。

「なのはが辛い思いをするのは嫌だから、だから少しでも負担を減らしたい。俺じゃ力不足かもしれない。けど、それでも俺はなのはを支えたいんだ」

俺の言葉に、なのはは一筋の涙を流した。

目を見開いて、両手で口を押さえる。ゆっくりと涙をぬぐった彼女は俺に微笑みかけた。

「ありがとう。ルーク君が支えてくれるなら、すごく心強いよ……………」

なのはの言葉に、俺は微笑んだ。力になれたのだ。他でもない、なのはの力に。
そのことが、その事実が俺の胸を熱くする。かつて無い満足感が、俺を満たしていた。
いつもの見慣れた部屋で、二人の心の距離は少しだけ近づいた。

フェイトside

なのはの部屋を出た後、フェイトは扉にもたれ掛かっていた。
六課の扉はスライド式である。なので寄りかかっても開くことはない。
むしろそんなことになったら一昔前のお笑いである。そんなことをフェイトが許すはずも無かった。
扉を介して、二人の声が聞こえる。フェイトにとって、大切な、二人。
一人は親友であり、もう一人は、恋焦がれた人物だった。
願っていた。そんな彼と笑いあえる日が来ればいいと。

高をくくっていた。似た存在である自分と彼なら、惹かれあうはずだと。

だが、いつからかフェイトは気づいていた。自分では彼の隣に居れないと。

彼の、ルークの隣にはなのはが居る。他でもない、親友の彼女が。自分では、ルークを支えられない。だが、彼女は違う。彼女はルークを支え、ルークに支えられている。

入り込めない。そう僅かでも思った時点で、フェイトの初恋は終わったのだ。

なのはへの嫉妬に駆られた。ルークが自分を選んでくれればいいのにと、そう思ったことだってある。

それでも、フェイトにとってはこちらも大切だった。

自分のせいで辛い傷を負わせた親友と朱髪の彼は、とても幸せそうだった。

その二人の幸せを壊すなど、出来る訳が無かった。

「ルーク・・・・・・・・・・・・・・・・」

ポツリと、彼女は思い人の名を呼んだ。勿論、その声に応えてくれる筈は無い。

涙が、その白い頬を流れた。辛い。心が張り裂けそうだ。

それでも、二人の幸せそうな声に、どことなく安堵を感じていた。

ああ、もう大丈夫だ。二人はもう大丈夫だ。なのはも、ルークも、もう大丈夫。おめでとう。なのは。

心の中で親友に祝いの言葉を告げる。ゆっくりと扉から体を離し、涙を指で拭う。

そして、とぼとぼとフェイトは歩き始めた。行く場所なんて決まっていなかった。

だが、どこかに行きたかった。ここではない、どこかへ。

六課の廊下を照らす機械的な明かりが、彼女を照らしていた。

ルーク side

なのはとの会話を終えた俺は自室に戻っていた。

ベッドに寝転がりながら、俺は様々なことを考えていた。

今日、起きたときは何気ない一日だと思っていた。しかし、今日は本当に色々なことがあった。

だが、必死で動いて、六課の壊滅を防ぐことは出来た。

俺は、俺の居場所を守ることが出来た。そのことが、心底嬉しい。

『今日はよくやったわ。正直見直したわよ?』

壁に当てかけてあるベルセリオスに視線を向けると、コアレンズが輝くのが見えた。

顔も知らないハロルドが笑っているような、そんなことを俺は確かに感じ取った。

「ありがとな。でも、これから忙しくなる。またお前の力を借りるな」

『高くつくわよ?』

「相変わらずだなあ」

ハロルドの言葉に俺は苦笑いした。

そのまま、ゆっくりと目を閉じる。

まぶたの裏に笑顔のなのはを思い浮かべて、俺は微笑みながらゆっくりと眠りについた。

なのはside

六課のベッド。ふかふかな感触を提供してくれるその上に、なのはは寝転んでいた。

もう夜も遅い時間である。いつもののはならこの時間でも起きて

いただろう。

だが、今の彼女は違う。はやてやルーク、その他全員の想いを聞いて、考えを改めたのだ。

今では体を休めること、そのことも念頭に入れていた。

無理をしないこと、それがはやてと交わした約束であり、ルークとの誓いだった。

ふと、胸に手で触れる。胸が……痛い。

だがその痛みはむしろ心地よいものだった。痛みというよりも苦しみに似た、何か。

目を瞑っただけでルークの表情が臉に浮かぶ。彼の笑顔を思い浮かべると、体が熱を持つ。

なのははそれを今まで味わったことは無かった。だが、その名前は知っていた。

恋。今まで仕事に生きていたなのはが初めて感じた、気持ち。

その気持ちを抱いた相手は、今まで自分が保護者として接していた人だった。

不器用で、怖いもの知らずで、無茶ばかりする人。それでも、誰よりも優しい心を持った人。

「……………私……………ルーク君のことが好きなんだ……………」

はつきりと悟ったその心を口にすると、顔が熱くなっていくのが感じられた。

きっかけなんて、関係ない。一体いつから彼が好きになったかなんてことも、関係ない。

それでも、なのはがルークに恋をしていることには変わらないのだから。

なのはは布団を首まで持つてきた。心地よい暖かさが体に熱を与え

る。

それでも、速まった鼓動により、今夜は眠れそうになかった。
だが、そのことさえ、なのはにとっては愛しいことだったのである。

ルーク side

「ん・・・・・・・・・・・・・・・・」

朝の日差しに、眩しさを感じて俺は唸り声を上げた。

ゆっくりと目を開けると、窓から日差しが入ってきているのが確認できた。

「朝か・・・・・・・・・・・・・・・・」

ベッドから体を起こす。体の所々が痛むが問題は無いだろう。
訓練に支障は無さそうだ。体を動かして床に立ち上がる。
いつものように眩暈が襲うが普段どおり暫くすると治まった。

時計を見る。まだフェイトが起こしにくる時間よりも30分程早い。それでも、俺は伸びをするとクローゼットを開けて服を取り出し始めた。

いつもの白の服に着替えて、壁に立てかけたハロルドを装備する。少し早い、俺は部屋を出てなのはの部屋に向かった。

なぜそうしたのはよく分からない。

普段なら早い時間からなのはの部屋に行くことは迷惑だと考えるのだが、今日に関しては問題が無いように思えた。

予想通り、なんら問題は無かった。ただ、なのはの部屋には誰も居なかった。

フェイトも、なのはも居ない。二人の普段使っているであろうベッドは布団が綺麗に畳んである。

テーブルの上には、料理がラップをして置いてある。触れてみると、まだ暖かった。

その横に紙が置いてあることに気づき、それを持ち上げる。

『ルークへ、訓練に参加してきます。朝食は作っておいたので食べてください。明日からはもっと早い時間に起きて一緒に訓練しようね。フェイトより』

「・・・・・・・・・・・・・・・・え」

書いてある文章に、俺は声を漏らした。これでは俺一人が訓練をサボっているようなものである。

俺は急いで椅子に座り、ラップを剥がして朝食に手をつけ始めた。普段よりも少し早いペースで食べた俺は同じペースで食器を洗い、急いで部屋を後にした。

訓練場に着いた俺は啞然としていた。そこでは今まで参加していなかった多数の人が参加していたからだ。

ティアナをなのはが指導し、スバルにはヴィータが、キャロにはフエイトが、エリオにはシグナムがついていた。

ヴィータやフエイトだけでなくシグナムまでもが訓練に参加していることに俺は驚いていた。

「あ、ルーク!!」

遠くで訓練していたフエイトが俺の姿に気づき笑顔で手を振った。その声に全員が俺のほうを向いた。

「遅いぞルーク!!」

そう叫んだヴィータの顔はどこか得意げだった。

エリオと戦闘していたシグナムは手を止めて俺に微笑みかける。

「ちょうど良かった。かなり長い間エリオと戦っていて疲れたところ

るだったのだ。ルーク、代わってくれ。勿論そのままエリオの相手をしてやれよ？」

シグナムの言葉に、エリオの目が輝くのが見えた。

「キャラは私が見るから、だからルークは全力でエリオと勝負してあげて」

フェイトの後押しで、俺は前に進み出た。

全員が、笑顔で俺を見ている。

スバルが、ティアナが、キャラが、エリオが、ヴィータが、シグナムが、フェイトが、そしてなのはが。

シグナムの近くまで来た俺に彼女は不敵に笑った。

「気をつけるルーク。エリオは、強いぞ」

その言葉で俺は気づいた。シグナムは疲れてなどいない。

息一つ切らせていないのだから。

要するに、彼女達はなのはの負担だけではなく俺の負担も減らそうとしているのだ。

俺は笑みを零すと剣を引き抜いた。なら、やることは決まってる。

「エリオ、始めようぜ、本気の戦いを！！」

「はい、ルークさん！！」

漆黒の刀身が、エリオに向けられる。

その一方で少年は蒼の槍を構えた。

沢山の人たちに見守られて、俺は地面を蹴った。

日差しが、俺達を照らしていた

ルークside

なのはとの壮絶な戦いから二週間。俺、なのは、フェイト、ヴィータ、シグナムの四人はフォワードを集めていた。朝の訓練は先程終了し、今はまとめの時間といったところだろうか。なのはは微笑みながら四人の顔を一つ一つ見つめた。

「はい、今朝の訓練と模擬戦も無事終了だね。お疲れ様。でね、何気に今日の模擬戦が第二段階見極めテストだったんだけど……」

「……え？」

なのはの言葉に反応したのはフォワードだけではなかった。俺も彼ら同様に素っ頓狂な声を上げていた。聞いていないのだ。そのことを。

「どうだった？」

振り向いたなのはは悪戯に微笑んだ。間違いなく態とやっている。それをジト目で見ると、苦笑いした。まあ、その笑顔も可愛いので許すしよう。

「合格」

「早！」

フェイトの素早い返しに、ティアナとスバルは思わず声を漏らしていた。

「まあ、これだけみっちり訓練して合格しなかったら逆にこっちが困るっての……」

腕を組みながら、ヴィータはうんうんと呟いた。

尤もである。事実エリオは急速に成長し、キヤロも援護魔法と竜召喚、どちらも中々のレベルになっている。

なのはとの死闘の次の日にハロルドを用いて模擬戦を行ったが、楽勝というわけにはいかなかった。

訓練をして、経験をつんだとき、彼がどう化けるのか楽しみだ。

「俺も、いいと思うぜ」

俺の言葉にエリオとキヤロは目を輝かせ、なのはは頷いた。

「そうだね、私もいいと思う」

「じゃあシャーリーに頼んでデバイスをセカンドモードに出来るようにしてね」

「明日からセカンドモードを用いた訓練だ」

ヴィータの言葉に、俺は咄嗟に彼女を見た。明日？

そう思ったのはフォワード陣も同じだったようで首を傾げている。

「明日？」

「そう、訓練は明日から」

不敵に微笑みながら呟いたヴィータの言葉に、シグナムが続く。

「お前たちはずっと訓練づけだったからな。まあ今日ぐらいは休めということだ」

「つまり、皆今日一日お休みです」

なのはの言葉に、四人は笑顔になる。流石なのは達の訓練は疲れるのか、目が輝いている。

その中に俺が入っていて、その訓練がハードだと言われると心外なのだが、エリオも目を輝かしているところを見るとそうなのだろう。そのことに俺は苦笑いするしかなかった。

フォワード達に休暇を言い渡した後、俺はなのは、フェイト、はやて達と共に昼食を口にしていた。

なのはやフェイト、はやてと食べることはほぼ毎日のようにあったが、ここまで大人数がそろうのは中々無い。

なのは、フェイトに挟まれた俺は正面に座るはやてを見ながら前から気になっていたことを聞いてみた。

「なあ、はやては髪伸ばさないのか？」

はやてだけでなく、なのは、フェイトも俺の言葉にきょんとしていた。

何の前触れも聞いたので仕方無いことだろう。俺は隣に座る二人を交互に見ながら弁解した。

「ほら、フェイトもなのはも髪長いだろ？はやては伸ばさないのになって……」

「ルーク君は髪が長いほうが好きなん？」

はやての言葉に、俺は考える。確かにティアの髪は長かった。

仲間の内彼女とアニスは髪が長かったし、そうなのかもしれない。もう一度視線をはやてに向ける。

「まあ、好きな……かな？分からないけど。でも、伸ばそうとは思えなかったのか？」

俺の言葉にはやてはうーんと唸った。

「まあ考えたことはあったんやけど、いいかな思って。でもルーク君がそういうなら伸ばしてみようかな」

「はやてならロングも似合うよ」

「うんうん」

なのは、フェイトは彼女に笑いかけた。

そのとき、映像が流れていたモニターに一人の男性が映し出される。髭の濃い、男性。威厳を持った雰囲気醸し出し、その目はとても鋭い。

彼は俺がよく分からないようなことを熱弁している。陸とか海とか、俺にはさっぱりだ。

「このオッサンはまだそんなこと言ってるのな」

隣のテーブルで食事をしていたヴィータが呆れたように呟いた。彼女の隣に座るシグナムがそれに続く。

「レジアス・ゲイズ中將は古くから武闘派だからな」

確かに、彼の言動、風格、雰囲気を見ればそれは明らかだった。何を熱心に訴えているのか俺には分からないが、その心意気だけは分かる。

確かに、彼は武闘派のようだ。

俺の隣で、なのはは何かに気づいたらしく声をあげた。

「ミゼット提督……………」

「ミゼットばーちゃん？」

なのはの言葉に反応したのはヴィータだった。

レジアス中将の後ろに三人の老人がいる。そのうちの一人の女性がミゼットなのだろう。

少し待ってみれば彼女の下に「ミゼット提督」という文字が表記された。

残りの二人にはラルゴ元帥、フィルス相談役と表記された。

「伝説の三提督揃い踏みやね」

「でも、こうしてみると普通の老人会だ」

ヴィータの言葉で話題が広がり、それぞれが三提督の話をする。そんな中で、俺はモニターをじっと見ていた。

ラルゴ元帥。それはかつての世界で俺が戦った一人と同じ名前。

それは俺が、俺達が殺した一人。彼だけでない。俺は沢山の人を殺した。

勿論、そうしなければならなかった。だから後悔はしていない。それでも、忘れられることはなかった。

「どうかしたのルーク君？」

不意に声をかけられて右を見ると、なのはが心配そうに俺を見つめていた。

気づけばはやてもフェイトも、その場に居る全員が俺を見つめていた。

俺は無理に笑顔を作ると頭をかきながら言葉を紡いだ。

「い、いや、なんでもないよ」

俺の言葉になのはため息をついて頭を押さえた。

「ルーク君？無理に笑わなくていいって言ったよね？」

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・」

咄嗟に出てしまった言葉になのははクスクスと笑うと俺を見つめてきた。

「ねえルーク君、私と一緒に街に出ない？今日は予定ないでしょ？」

「え・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は彼女が一瞬何を言ってるのか分からなかった。
だがそうしている内にもなのは目は潤んでいく。

「私とじゃ・・・・・・・・嫌・・・・・・・・かな？」

「そ、そんなことない！！いいよ！！行こう！！」

泣きそうな顔で俺を見つめるのはに瞬殺され、俺は白旗をあげた。
彼女の表情がとても明るくなる。その様子を見ながらはやてとフェイトも微笑んでいた。

彼女達だけではない。シグナムやヴィータ、その他大勢の人々が暖かい目で俺となのはを見ていた。

「なら、食事はその辺にしておけ。どうせなら街で食べたほうがいいだろう」

俺となのはがまだあまり食べてないことに気づいたシグナムは微笑みながらそう言った。

お互いに頷き、俺達はコーヒーを口に運んだ。

六課の入り口。そこで俺はスバル、ティアナを見送っていた。といっても見送りそのものが目的なわけではなく、俺もなのはと街に出るので彼女を待っているのである。

「じゃあ、行つてきます!!」

「ああ、行つておいで」

俺の言葉に二人は頷くとバイクを吹かせ、街へ乗り出した。

その後姿を見ながら、俺は足音を聞いて振り返った。

そこには、私服のエリオとキャロ、そして二人を見送りに来たのであろうフェイトが居た。

二人はまだまだ子供で、微笑ましい限りだ。

「ルーク、今日は私服なんだね」

「ルークさんとっても似合ってますよ!!」

フェイトとエリオの言葉に俺は微笑んで礼を告げた。

今の俺の格好はいつもの服装ではない。黒のズボンに白の柄のついたTシャツ。

その上に同じく白の服を羽織り、その上にさらに黒のコートを着ている。

いつも外側は白だったので逆に黒というのは新鮮なのではないかと思ひ、着てみたのだが評価はいいようだ。

ちなみにハロルドは装備していない。街に繰り出すのに剣を持ってくわけにはいかない。

しかし、彼女は連れてけと駄々をこねたので、なのはが連れて行くことになった。

どうやらなのははこういふときのために収納魔法とかいふものを習得していたらしい。

本当になのは様様である。

フェイトはエリオ、キャロ、二人の肩に手を置いて様々なことを確認している。

心配しているのは分かるが、正直過保護すぎるのではないかと思つた。

苦笑いしながら、俺はエリオとキャロの頭を撫でる。

「大丈夫だよフェイト。二人ともしっかりしてるんだし、問題ないよ」

そうだけど、とフェイトは微妙そうな顔をしていた。

やはり心配なのだろう。

二人が出かける際も、見えなくなるまでずっと手を振っていたぐら

いだ。

一通り手を振り終えたところで、はやてが入り口にやってきた。

「あれ？なのはちゃんはまだなんか？見送りに来よう思ったんやけどなあ……………」

どうやら彼女は俺達を見送りにきてくれたらしい。

二人を見送ったのに戻ろうとしないフェイトもそうなのだろう。なんだか恥ずかしくてむず痒い気分だ。

「ルーク君！！」

なのはの声が聞こえて俺は咄嗟に振り返った。その瞬間に俺は言葉を失った。

勿論なのはが私服で来ることは知っていた。だが、ここまで衝撃が大きいとは思いつかなかった。

茶色いブーツに灰色のソックス。そしてその上には健康的な白い足がすらっと伸びている。

黒のスカートは短く、それによって彼女の健康的な脚が強調されていた。

そこに目が行ってしまいそうな服装だが、上は赤のセーターに白のロングコートを羽織っている。

コートにはファーがついており、それが冬らしさを物語っていた。

髪は下ろしてあり、背中に広がっている。その明るい色と、コートの色、また中の赤と茶が絶妙にマッチしている。

普段のバリアジャケット姿とは違う凛々しさが、そこにはあった。

「ど、どう……………かな？……………」

俺に私服を見せるのが恥ずかしいのか顔を少し赤らめながら彼女は

聞いてきた。

その表情が、態度が、いや全てが可愛いと思った俺は悪くないはずだ。

事实はやてやフェイトでさえ感嘆の声を漏らしていた。

「と、とっても良く似合ってるよ」

「ほ、本当・・・・・・・・・・？」

「ああ」

「・・・・・・・・・・ありがとう」

消え入りそうな声で呟いた言葉が更に俺の鼓動を速めていく。

茶化すように、はやては微笑んだ。

「なんやなんやあ？ルーク君は黒でなのはちゃん白やないか。お似合いやな」

「うん。とっても似合ってるよ」

二人の言葉に、俺となのはは赤くなるしかなかった。

勿論、街に出るのだから中途半端な格好はできないと思い気合を入れた。

だが、なのはは圧倒的だった。俺が不釣り合いなんじゃないかと思うほどに。

それでも、二人は似合ってると言ってくれた。例えお世辞でも、それは俺の勇気変わった。

「じゃあ、行ってらっしゃい」

「気をつけてな」

二人に見送られて、俺達は街に行くべく歩き始めた。

フェイト、はやてside

街に遊びに行く、ルークとなのはを二人は見送っていた。

彼らが、段々と小さくなる。それにつれて二人も手を振るのをゆっくりと止めた。

すっかり小さくなった頃には二人はなのはとルークを寂しげな目で見つめていた。

「行ってしもうたな」

「うん」

はやての言葉に、フェイトはゆっくりと答えた。それぞれの顔には寂しげに影が差している。

二人は昨日の段階で分かっていた。もうルークの気持ちはなのはにしか向かっていないことを。

二人が入る余地など無いことを。それはなのはに関しても同じことだった。

今日、食堂でなのははルークを街に誘った。例えば口にしなくても、それはデートだ。

そして、二人がそう思っているのはそれぞれの服装を見れば明らかだった。

なのはがあんなに可愛らしい服を着ることは今まで一度も無かったのだから。

二人は、恋人だった。例え二人が否定しようとも、全員がそう答えるだろう。

だからこそ、はやてとフェイトは諦めた。それぞれの、初恋を。

「もう、諦めるしかないんやろうなあ……………」

「うん……………」

分かりきっていたことだった。それでも、諦めたくはなかった。

だが、なのはは二人の親友だ。その親友があんなに幸せそうに笑っているのに、それを壊すなんて出来なかった。

ルークに愛されたいという思いと、親友を、二人を傷つけたくないという思い。

その二つが葛藤の結果どちらに傾くかは、分かりきっていたことだった。

彼女達は、優しすぎるのだから。

「それでも・・・・・・・・・・私達はなのは、ルークの友達で居よう」

「そりゃな・・・・・・・・・・」

その笑顔が絶えないように、幸せが続くように、見守り続けよう。二人を。

それが二人が心に決めた事実だった。

街に消えていく二人を見ながら、二つの涙がゆっくりと零れ落ちた。

ルークside

街に入った俺達はとりあえず食事の続きをしようということで店を探すことにした。

とはいえ六課の食堂で少し食べてしまっているでそこまで重いものが食べれるわけではない。

ということで俺達を選んだのは街中で見つけたちよつと雰囲気の良いパスタ屋さんだった。

木漏れ日の射すテラスに、優しい木で出来た店で、その雰囲気を俺達は大いに気に入った。

中に入ると店員が案内してくれた。俺は迷わずテラス席を希望した。こんなに天気がいいのだ。外で食べたほうがいいに決まってる。

二人してテラスに出て席に座ると、周りから視線を感じた。

それと同時に、なのはは不機嫌になっていく。だが、俺も心穏やかではない。

周りの男性客がなのはを見ているからだ。気持ちは分かる、今日のなのはは綺麗だ。

そこらへんのアイドルなんかじゃ太刀打ちできないような雰囲気を持っている。

だが、なぜか分からないがもやもやしたものが俺の心に広がった。

「気に食わない……………」

ボソッと、なのはが呟いた。俺はその言葉に目を丸くした。

結構いい雰囲気だと思ってこの店にしたのだが、気に入らなかったのだろうか。

どうしようか迷っているとなのははため息をついた。

やばい。終わった。絶望し、俯いていると、心底不機嫌そうなのは声が俺の耳に届いた。

「周りの女の人皆ルーク君のこと見てるんだもん。嫌になっちゃうよ……」

「え？……」

俺はとつさに顔を上げた。視線がなのはの視線とぶつかる。

急に、なのはは顔を赤くして視線を反らした。それではまるで、嫉妬――

そこまで思ってから俺は気づいた。先程まで今のなのはと同じ感情を抱いていたことに。

嫉妬？俺が？なのはに向かう視線に対して？

そこまで考えてから俺は理解した。他にこの胸のややもやを説明することは出来ないのだ。

なら、その可能性が高い。俺は、嫉妬するくらい、なのはに惹かれているのではないだろうか？

とはいえ、俺は恋という気持ちを知らない。だから、これが本当に恋なのか、俺には分からない。

そんな風に考えていると、店員がパスタを持ってきてくれた。テーブルに置かれたパスタの放つ匂いが、さらに食欲を誘う。

俺はいただきますと呟くとフォークとスプーンを手に持ち、食べ始めた。

パスタにミートソースを絡め、スプーンの上でくるくる回す。

それを口に運ぶと何ともいえない美味しさが口の中に広がった。

その光景を満足そうに見て、なのはも白のパスタにフォークを突き刺した。

同じようにスプーンとフォークを器用に使い、口にしていく。
慣れた手つきに、俺は初めてテーブルマナーを習っていて良かった
と思った。

しばらく食事をしていると、手元に視線を感じた。顔を上げてみる
となのはがじつと俺の Pasta を見ていた。

俺が顔を上げたことに気づかないくらい、彼女は俺の Pasta に見入
っている。

やがて彼女は俺を見て、ゆっくりと言葉を紡いだ。

「ルーク君、ルーク君の Pasta 貰ってもいいかな？」

「え？ いいけど」

なのはは微笑むと身を乗り出してスプーンとフォークを使い、パス
タを絡め取っていく。

それを口に運んで咀嚼すると、おいしいと微笑んだ。

その様子を見ながら、俺はなのはの Pasta、カルボナーラを一瞥し
た。

この場合、俺にもなのはの Pasta を貰う権利があるのだろう。
そう思い、美味しそうに食べるなのはに目を遣った。

「なあなのは、俺も貰ってもいいか？」

Pasta を飲み込んだ彼女は目を丸くした。

「い、いいよ……」

彼女は顔を赤らめながらゆっくりと自分の Pasta を押し出した。
なにか赤くなる要素があっただろうか？

そんなことを頭の片隅で考えた昼過ぎだった。
俺は知らない。その行為がまさにカップルと呼ばれる人たちがするものであることを。

会計を済ませて、店を出た俺達は、後ろから遠慮気味に声をかけられた。

「あの・・・・・・・・・・時空管理局のなのはさんですよね？」

振り返ってみると、すぐ後ろに女の人が立っていた。
黒のスーツを着こなしているので、仕事をしていることは分かる。
だがこんな制服が管理局に存在していただろうか？

「はい、そうですよ」

俺がそんなことを考えているうちに発せられたのはの言葉に、女性性は目を輝かせていく。

かと思うと、急に頭を下げた。なんだか忙しい人だな。そう思っていた俺の余裕は直後崩されることになる。

「お願いします！！彼氏さんと一緒にモデルの仕事してくれませんか！？」

俺の思考は停止した。モデル？誰が？なのはだろう。では彼氏とは？そこまで考えてから俺は顔が真っ赤になるのを感じた。そう・・・・・・・・見えるのだろうか。俺たちは。うろたえている俺を尻目に女性は顔を上げる。

「担当の子がドタキャンしちゃって・・・・・・・・それで・・・・・・・・・・・・・
お願いします！！」

すまなそうに言ってくれる彼女の気持ちは伝わった。
だが、俺となのははそんな関係ではない。断ろう。

「あの、すみませんけど・・・・」

「やります！！」

断ろうと思った俺の声はなのはの大きな声に遮られた。

ぎよつとした目でそちらを見るとなのはは目をキラキラ輝かせながら手を上げていた。

嬉しいがいいのだろうか・・・・・・・・・・その・・・・・・・・俺が
彼氏で・・・・・・・・

そう思ってから顔に熱が溜まるのが分かった。これでは恋する乙女ではないか。

顔を横に振り、一旦気持ちを落ち着かせる。なのはの興奮は最高潮に達している。

それを邪魔するのは気が引ける。ということで俺は微妙な気持ちながら依頼を引き受けたのだった。

「じゃあなのはさんはこの衣装に、彼氏さんはこの衣装に着替えてください！！」

びつくりするような笑顔で差し出された衣装は、冬のものだった。新作のデザインなのか、とても綺麗で汚れなどは一つも見当たらない。

俺達はその衣装を手にとると、なのはは右の部屋へ、俺は左の部屋へと招きいれられた。

中は小さな一室で、大したものは置いてなかった。鏡付の大きな机があるくらいだ。

おそらくなのはのほうの部屋には化粧道具などが置いてあるのではないだろうか？

そう思いながら俺は机の上に無造作に置かれたハンガーを手に取り、黒のコートを掛けると、これまた無造作においてあったハンガー掛

けに掛けた。

とりあえず手に持つ服も一緒に掛けておく。渡された服の一番外側に掛かっていたのは黒のコートだった。

一瞬俺が着ていたコートでもいいのではと思ったが、こちらのほうが装飾が多い。

無駄な装飾が多いようにも思えるが、これもファッションなのだろう。

袖についている小さなベルトを見たときはこれで相手を殴打するとダメージ増大などと馬鹿なことを考えたが、そんなわけではない。

とりあえず着替えることにした。

白のカッターシャツを着て、その上から黒のカーディガン、さらにその上にPコートを前を開けて来ている。

ズボンは普通のジーパンだが、ベルトが見える丈に調整してある。まるで計ったかのようにピッタリなその服に、俺は苦笑いした。

どうやらあの女性は一目見ただけで俺のサイズが分かったようだ。流石プロと言ったところだろうか。

部屋の扉を開けて、外に出る。まだなのはは出てきてはいなかった。首に巻きつくマフラーを少し緩める。室内は暖房が効いているので少し暖かった。

扉が、音を立ててゆっくりと開く。その向こうから現れたなのはに、俺はまたしても絶句した。

今日何回彼女に見とれたかは分からない。それでも、相変わらず彼女の姿は俺を魅了した。

白のラインが入ったシャツに、チェックのネクタイ、そのうえに濃い青のジャケットのようなものを着ている。

歩きたびにフリルのスカートが舞い、茶色のブーツが音を立てる。

髪を揺らしながら俺の前で立ち止まった彼女は恥ずかしそうに目を伏せた。

「ど、どう………かな？」

真っ赤な顔でもじもじしながら呟いたのはから、俺は目が離せなかった。

可愛い。その一言に尽きる。何回そう思ったのか分からないが相変わらず俺はなのはから視線を外せなかった。

「じゃあ撮影に入りますね」

聞こえた声に俺達はぱつと振り返った。扉のところには先程の女性が悪戯に笑いながらこちらを見ていた。恥ずかしさに顔を真っ赤に染めながら、俺達は彼女の元にそそくさと足を進めた。

撮影は順調に進んだ。ソファに座った状態の撮影から始まり、次に腕を組まれた。

その後も立つて肩を抱いたり、後ろから抱きしめることも強制された。

女性やカメラマンの人は嬉しそうにしていたが、俺達はそれどころではなかった。

近いのだ。なにがってそりゃあ距離が近い。おかげで俺となのはは終始顔を真っ赤に染め上げていた。

撮影が終わるころには十分に思考が働かなかったくらいだ。俺に至っては鼓動を収めるのに四苦八苦した。

そんな感じで俺達にとっては辱めでしかない撮影会は終わりを告げた。

モデル料を貰い、着ている服を脱ぐために着替えた部屋に行こうとすると声をかけられた。

「あ、大丈夫ですよ。その服は差し上げますので」

「「え？」」

女性の言葉に俺達はほぼ同時に聞き返した。

それがピッタリ合っていたからなのかどうかは定かではないが女性にはクスクスと笑うと俺達の着ている服を指差した。

「その服を差し上げると言ったんです。いい写真が取れましたし、お二人のデートの時間を奪ったお礼ですよ」

「はぁ………ありがとうございます………」

スタッフが持ってきてくれた紙袋を手につつ。

その中には俺達が着ていた服が入っていた。

軽く会釈をして入り口に向かう。扉を開けたところで女性は微笑んだ。

「ではまた機会があったら」

惚れ惚れするくらいの笑顔でそう言った女性に俺は苦笑いした。
どんな機会だ。内心でそう悪態をつくど、俺達はもう二度と訪れないであろうスタジオを後にした。

「急に頼まれてびっくりしちゃったよ……」

「そうだな。まあでも服も貰えたんだしいんじゃないか？」

「そうだね」

俺達是他愛の無い会話をしながら街を歩いていた。時間はまだ昼過ぎである。

そんなに長い時間モデルのバイトをしていた訳ではなかったらしい。

「どこに行こうか？」

なのはの言葉で俺は考える。どこに行こうかといわれても俺はこの街に詳しいわけではない。

なのでどんな場所があるのかさえ知らない状態だった。

「俺はこの街のことよく分からないから、なのはに任せるよ」

「うーん。この時間だと・・・」

なのはが顎に指を当てて考え始める。そのまま角を曲がると彼女は向こうから来た誰かと激突した。

「きゃー！」

そういつて後ろによろける体を咄嗟に支えた。なのははぶつかったことに気づくとすぐに声を上げた。

「す、すみません、ぼーっとして・・・」

「痛えな姉ちゃん！！どこ見て歩いてんだ！！」

なのはは最後まで言葉を紡ぐことは出来なかった。その途中で乱暴な言葉が遮ったからである。

その声と迫力になのはは不安そうにしている。

言い方に不快感を感じて、なのはを支えながら俺はその男を睨みつけた。

「そんな言い方ないだろ。こっちだって謝ってるんだから」

男の目が動き、俺を捉える。その顔には間違いなく怒りが滲み出ていた。

「なんだあ、こいつ？文句でもあんのか？ぶつかってきたのはそっちだろうが！！」

男の後ろから別の男が声を張り上げた。気づかなかったがぶつかった男は他に二人の男を連れていたようだった。

人の後ろから物を言う。その態度に俺はさらに不愉快になった。なのはから手を離し、前に出る。彼女を危険な目に合わせるわけにはいかない。

「ぶつかったのは偶々だろ。それに言いたい事があるなら前に出てきて言え」

「おい兄ちゃん。彼女の前でいい所見せたいのは分かるけどあまり調子に乗るなよ？」

男の太い腕が俺の胸倉をつかむ。

いつもなら彼女といわれて顔を赤くするところだが、今の俺はそれどころではなかった。

怒りが、込み上げる。

「俺は、本当のことを言っただけだ」

「っ！てめえ！！」

空いている手を、男は振り上げた。

遅い。止まって見えるほどの動きだ。左手を動かして振りかぶられた拳を捕まえる。

拳が押しても引いても動かないことを悟り、男は慌てた。そのまま男を睨み付ける。やるなら徹底的にやるべきだ。全神経を集中させ殺気を放出した俺に男は顔を青くした。そのまま慌てて手を離し、後ずさる。

「い、行くぞ！！あの兄ちゃんただ者じゃねえ！！」

連れていた二人の男にそう叫ぶと、男達は人ごみの中に消えていった。

俺は振り返りなのはに駆け寄ると、彼女に微笑みかけた。

「大丈夫か？なのは」

「うん。大丈夫。さっきのルーク君凄くカッコ良かったよ？」

微笑みながらそう言ったなのはの言葉に俺も笑顔になる。

良かった。そう言ってくれて。やはり、なのはの前ではカッコいいところを見せたい。

彼女の前では、負けたくないから。

俺はなのはに手を差し出した。行こう、という意思表示。

それを見てなのは顔を赤くしながらゆっくりと手を伸ばした。

それらが重なった瞬間に、急にモニターが開きフェイトの顔が映し出される。

瞬時に俺達は手を引つ込めた。

「ごめんなのは、ルーク。でも大変なんだ」

視線を向けたモニターの中のフェイトの表情は真剣だった。嫌な予感が、胸の中で渦巻いた。

ルーク side

「ごめんなのは、ルーク。でも聞いて。エリオ達がボロボロの女の子を発見したの。その子は、レリックが入ってるケースを持っていた。そして、二つあったであろうそれらの内一つは見つからなかった」

早口でまくし立てるフェイトの言葉になのはは術式を展開する。

魔法陣の中から現れた鞘に収まった剣を握ると、俺に手渡してきた。

「これでいいんだよね？フェイトちゃん」

差し出しながら呟いたなのはの言葉にフェイトは頷いた。

「ガジェット反応が出るの。場所は北西部。そこに、私となのはとルークが当たることになったんだ。今から向かってもらってもいいかな？」

「了解」

俺達はフェイトに返事をするモニターを切った。

向かい合い、お互いに頷く。なのはは変身し、俺はポケットにしまっていたレンズを首にかけた。

服がいつもと違うが、気にしている場合ではない。

「なのは、先に行ってくれ。俺は後から行く!!」

「分かった。先に行ってるね。増援、待ってるよ!!」

「ああ!!」

なのはは飛び上がり、体を翻しながら高速で空中を滑走する。

それを見ながら、俺は走り出した。休暇はここまでだ。この続きは後で楽しむとしよう。

そんなことを思いながら、俺は駆け出した。

『ルーク、走りながらでいいから聞きなさい』

俺が走り出したのと、腰のハロルドが言葉を放つのは同時だった。

「なんだ？」

『レンズのことよ。そのレンズについて少し分かったから教えとくわ。そのレンズは使用量を超えても発動できる。アンタの体力を代償にしてね』

「体力？」

ハロルドの言葉に俺は聞き返していた。勿論足は遅めていない。

『そう。レンズで移動する際に一度でいいから念じるの。俺の体力を媒介に使って。そうすれば許容量を超えても使えるわ。でも、体力を奪うのだから使いすぎは厳禁よ。だから言いたくなかったんだけど、何か嫌な予感がするから教えとく』

「ありがとっ、ハロルド」

俺のお礼にハロルドは何も言わなかった。それでも、得意げに笑っている彼女が見えた気がした。

「シャーリー、教えてくれ。状況はどうなってるんだ？」

『もう既になのはさんとフェイトさんはエンゲージです。圧倒してますが、念のためルークさんも向かってください。ヴィータ副隊長は別方角の敵を殲滅中。見失ったレリックはフォワード陣とギンガさんが向かって来ています』

「ギンガ？」

『スバルさんのお姉さんです』

「そうか。なら大丈夫だ。エリオが居るなら、何の心配も無いさ」

俺の言葉に、シャーリーは首を傾げるだけだった。

『航空反応増大！！』

『なんだこの数は！！』

モニターを切ろうとした瞬間に、シャーリーの後ろから様々な声が聞こえてきた。

その声は焦りに満ちていて、状況が思わしくないことを想像させる。

「どうしたんだ？」

『ルークさん、なのはさんの増援に急いでください！急に敵ガジェット反応が増大しました』

驚く俺を尻目に、忙しく別のモニターが開く。
そこには真剣な表情のなのはが映し出されていた。

『待つて！！これは幻影と実機の構成部隊。だからシャーリーは解析を！！ルーク君、多分狙いはヘリか地下のレリックだと思う。だからそっちに行つて！！』

『こっちは私が限定解除して抑える。だからなのははルークと相談してどっちかに行つて！！』

なのはの後ろからフェイトの声も聞こえた。

モニターの後ろには大量のガジェットが映し出されており、戦いがどれだけ熾烈かを物語っていた。

答えようとしたそのとき、また別のモニターが開いた。

『こちらロングアーチ0八神はやて！限定解除の件は部隊長権限で却下します！！その代わり、私がやる！！』

『はやてちゃん！？』

なのはの方にもモニターが開いてるから叫ぶのは当然だ。

だが、正直三つもモニターを展開してるのであちらこちらから声が聞こえる。

その状況に俺は混乱していた。結局俺は何をすればいいんだ？

『ルーク君。ルーク君には悪いけどまだルーク君を出すときやないんや。その代わり、私が奥の手を出す』

はやての言葉に俺は微妙そうな顔をした。気に食わない。

俺だけ除け者にされている気分だ。勿論はやて本人にそんなつもりはないのだが、それでも思ってしまう。

そうこうしている内に、モニターは二つ切れてしまった。開いているのは、なのはのモニターのみ。

そこに映し出されたなのはは不安そうな顔をしている。

「なのは、俺、ヘリの様子見てくる。なのはにだけは伝えておくよ」

俺の言葉に、なのはは寂しそうに笑った。

「凄く心配だけど、私は止めないよ。ルーク君、気をつけてね？」

「ああ」

なのはの笑顔を最後に、俺はモニターを切った。これでいい。皆が戦ってるのに俺だけゆっくりしているわけにはいかない。

「行くぞハロルド、ヘリだ」

『地下はいいの?』

「大丈夫だ。地下にはエリオが居るからな」

俺は蒼の槍を振るう少年を思い浮かべながら微笑むと、駆け出した。

エリオside

少女を発見した場所よりも遙か地下。

そこに出来た大空洞でフォワード陣とギンガはレリックを探していた。

キャラの情報では、この近くにある筈である。思ったとおり、レリックのケースは床に落ちていた。

それを見つけたキャラは安堵のため息をつき、ケースに触れる。

「ありました！！」

その声に、後ろを探していたティアナとスバルは喜んだ。

だがその後ろから、何かが高速で近づく。聞こえる声にティアナとスバルは首を傾げた。

気づいたときにはそれはキャラに標準を合わせていた。完全に闇に溶けたその姿は、誰にも目視できない。

黒い球体が四つ出現し、それらが直線軌道を描きながら床に着弾する。

爆風に巻き込まれ、キャラは悲鳴を上げながら吹き飛ばされた。

状況が一変してからのエリオの動きは素早かった。キャラを守るように謎の影に突進する。

そしてそのまま槍を使ってそれを弾いた。伸びた白い帯を見てエリ

才はすぐにそこから離脱した。

先程の帯がなんなのか彼には分からなかった。だが間違いなく傷つけるためのものだろう。

それはゆっくりと着地した。そして次第に姿を現していく。黒い体に、六枚の羽。それは人ではなかった。

一瞬でエリオは分かった。彼は、猛者だと。

不意に誰かがレリックケースを手取るのをキャラロは気づいた。

それを追いかけるように近づくと彼女は手の平を向けた。そこに紫の球体が出現し、キャラロに襲い掛かる。

キャラロは咄嗟にシールドを展開したが、破られて吹き飛ばされた。

「キャラロー!!」

そのことに、エリオはすぐに気づいた。足に力を入れて、キャラロを受け止める。

衝撃の強さに腕や脚が悲鳴を上げるが、無視した。自らの目標とする彼なら、こんなことで根を上げないはずだ。

キャラロを完全に受け止めると、エリオは目でスバルとティアナに合図した。

後ろの女の子は任せる。でも彼は自分がやる。その気持ちが通じたのか二人は頷いた。

エリオと彼は退治していた。彼が一体何なのかエリオには分からない。

それでも、戦わなくてはならない。いや、戦いたい。エリオの想いに蒼の槍が煌いた。

どちらからでもなく、二人は床を蹴った。今エリオが出来る最速。それを持つてしても、黒の彼は完全に反応してきた。手首から出現した刃のようなものが、槍を受け止める。

数回刃を交えて、エリオは距離をとった。黒の彼もエリオの様子を伺っている。

強い。肌で感じるほどの強さ。それでも、エリオは叫んだ。

「ルークさんほど強くないのに………僕の、前に立つな！」

それは、魂の叫び。彼以外に認めないという、意思表示。全脚力を開放し、己の全力を超えた加速を見せ付ける。

振りかぶった槍は風を音を立てて斬りながら刃と激突する。

キリキリと金属音を立てながら、全ての力を乗せた槍は見事に刃を弾いた。

「そこだ！！」

振り払われた槍を腕力を使って無理やり引き戻し、突き出す。

黒の彼はそれを体を最大限使って避けた。そのまま後ろに後退する。誰も、何もその戦いを止めることは出来なかった。二人の戦いは熾烈すぎて、間に入る余地など無かった。

速い。そうエリオは思った。

だが、それがどうした。あの人はもつと速い。ノーモーションで懐に入り、嵐のような攻撃を繰り返す。

その剣筋は変幻自在で、見切ることなど叶わない。それに比べれば、大したことは無い。

槍を構え直し、黒の彼を見つめる。硬直するのは、迷っているからではない、ベストなタイミングを探すためだ。

「そこだ！！」

咆哮とともに、床を力強く蹴り、エリオは飛び出した。

それに合わせるように黒の彼も前に出る。さつきと同じように全力を超えた速さだった。

だが、彼は追いついてきた。その事実がさらにエリオの心を刺激した。

全身の血が沸騰するような興奮。それを味わいながら槍を縦に振るう。

避けられる。振るう。避けられる。それを何回か繰り返すうちに、エリオは見た。

この戦いを決める光景を、脳裏に描いた。大気を震わす轟音は、どちらの武器が発したものか分からない。

だがエリオは柄で、彼は刃でそれぞれを受け止めた。それは、今までとは違う光景。

エリオの見た光景を正確に創り出すための、布石。

エリオは一瞬だが速さを生かして懐に入り込んだ。滑るように槍を移動させ、彼の胸に突き刺す。

槍の刃は硬いものに防がれたが、そんなことエリオには関係無かった。

全脚力を開放し、腕に力をこめる。この後戦えなくなるが、関係なかった。

彼に勝つそれだけを少年は思い続けた。だが、黒の彼は見た目以上に重く、びくともしない。

こんなところで負けてたまるか。エリオは強く念じる。まだまだ非力なことも、経験が無いことも知ってる。

だが、それに甘えてはいけけない。彼に勝てないなら、目標とする緋色の彼に勝つことだって無理だ。

「あああああああああ！！！！」

脳裏に朱色の彼の背中を思い浮かべる。彼に追いつくなら、追い抜

くなら、こんなところでもたもたしてられない。

想いは強さとなり、強さは力になる。少年の全身全霊の一撃は、威力を増し、敵を吹き飛ばした。

柱に轟音を立ててぶつかり、爆風のように土煙を放出する。

その様子を見ながら、エリオは気づいていた。まだだ。まだ勝負は決まっていない。

再びエリオは槍を構えた。予想通り、土煙の中から黒の彼はゆっくりと姿を現した。

彼はじつとこちらを見つめている。好敵手に向ける目で、エリオを見つめていた。

足に力を入れて、解放しようとしたときに、それは起きた。

『お前らよくやった。後はアタシに任せろ』

聞こえた声にエリオは足を止めた。彼も怪訝そうな顔でエリオを見つめている。

邪魔をするな。エリオは初めてそのような気持ちを抱いた。

気持ちが高ぶっているのが自分でも分かる。この戦いを終わらせたくない。

ルークと模擬戦をしているときに感じた高揚感を、エリオは今黒の彼に対して感じていた。

だが、エリオのそんな願いが届くはずは無く、天井を突き抜け、何かが降ってきた。

轟く轟音にその場の全員が耳を塞ぐ。そんな中舞い降りる煙から何かが飛び出した。

「捕らえよ、凍てつく足枷！！フリーレンフェッセルン！！」

手のひらに水色の魔法陣を展開させたリインが叫ぶ。

それと同時にレリックケースを持ち逃げしようとした女の子といっ

のまにか参戦していた赤の融合騎の足元にも魔法陣が展開する。そこから円を描くように氷が波打ち、彼女たちを覆った。それは、完全な捕獲。あまりの展開の速さに追いつけなかったエリオは傍を何かが通り過ぎるのを感じた。

「あああああ！吹き飛ばええええええええ！」

気づいたときにはヴィータは鉄槌を振り下ろし、黒の彼を吹き飛ばしていた。

完全に、邪魔された。エリオは内心で舌を打つと、彼が突っ込んだ場所を見つめた。

そこは煙が起きていて何も見えない。だが、その中に居るであろう彼がじつとこちらを見ている気がした。

決着は、次回ということか。エリオは彼の目からその意思を読み取り、ゆっくりと頷いた。

彼が突っ込んだ場所を覗いたヴィータは悔しそうに舌打ちした。

「くそ、逃げられた」

「こっちもです」

リンの言葉に振り返ると、氷が消えて大きな穴が現れた。

直前で逃げたということだろう。逃亡を許したことは残念だが、エリオットの心は晴れ晴れとしていた。

これで彼と完全に決着をつけるチャンスが得られたのだから。

そう思っていると、大きな揺れを感じた。生き埋めが狙いか。

それに気づいたのはエリオだけではなかった。ヴィータははつとしたようにスバルに叫んだ。

「スバル、脱出だ!!」

「はい!! ウイングロード!!」

青い道は螺旋状に連なり、地上への出口となる。その様子を確認して、ヴィータは満足げに頷いた。

「スバル、ギンガ、先に行ってくれ。アタシは後から出る!!」

ヴィータの言葉に二人は頷き、指示に従った。

全員が動く中で、エリオだけは彼が突っ込んだ場所を見つめていた。

ルークside

俺はへりを追って走っていた。それは、完全な命令違反。

しかも知っているのはなのはだけという状況だ。それでも、俺は止めるつもりなど無かった。

何か、嫌な予感がするのだ。良くないことが起こるような、そんな予感が。

「見つけた」

俺は前方に飛んでいるへりを見つめて安堵のため息を漏らした。

どうやらまだ被害は無いみたいだ。

『どうやらそうでもないみたいよ?』

ハロルドの言葉に、俺は辺りを見回した。遠くのビルの上で光が収束していくのが見える。

眩いほどの光が、集まっていく。俺は瞬時にそれが何なのか理解した。

砲撃。

この場で光を収束するなら、それしかない。そして長いチャージ時間を必要とするということはかなりの威力があるということだ。

なら狙いは、へりの撃墜だろう。そこまで考えてから俺は拳を握り締めた。

ふざけるな。

俺は、あのへりの中に居る女の子がどんな女の子か知らない。

だが、ボロボロで心身衰弱状態の彼女に、砲撃を撃とうとしている

のだ。

許せるはずなど無かった。

ふと、上空を二つの閃光が駆けていくのが見えた。

見知った顔。だが、なのは、フェイト両名の顔は焦っているように見えた。

その目はまっすぐへりを捉えている。

次の瞬間、轟音が響き濃い赤の閃光がへりめがけて走った。

目視できるそれは速く、そして明らかな破壊力を秘めていた。

あんなものが直撃すれば、へりはただでは済まない。

だがなのはも、六課最速を誇るフェイトにしても、間に合わないのは明白だった。

へりを護れる可能性を持っているのは、この場でただ一人だけ。

俺はレンズに触れると、強く念じた。俺の体力を媒介に、跳べと。

次の瞬間、視界が歪むのを感じた。それは、今までとはまったく違う感覚。

前回まで青く歪んでいた視界は、今は赤く歪んでいく。

まるで視界が血に染まったような感覚を覚えていると、次に体に違和感を感じた。

何かが抜けていく感覚。それは力なのか、精気なのか定かではない。だが、それが止んだときには俺はへりの横に浮かんでいた。

短距離を全力疾走したかのように息が乱れているのが分かる。

それと同時に赤い閃光が俺に迫っているのも。背中に瞬時に手を回し、剣を抜くと同時に天に掲げる。

「頼むぜハロルド」

『了解』

俺の技の中では迫る凶悪な閃光に対抗する術は無い。
いや、無いことも無いのだが、俺が負傷するのは間違いない。
なら、凶悪な砲撃には凶悪な魔法で対処するだけだ。
ハロルドのコアがこれまでにないほど白く煌く。

『セラフィックフェザー！！』

切っ先に光の球体を出現させ、それを勢いよく振り落とす。
球は弾け、いくつもの閃光が赤い閃光と激突し、相殺する。
ハロルドの全力をかけた一撃は赤い閃光を破壊し、そのままそれを
撃った狙撃手の下に飛来した。

廃ビルが音を立てて爆発する。その威力に、俺は舌を巻いた。
今までに見た中でのかなりの威力だ。

勿論一番はリニアで見せてくれたあのぶっちぎりのメテオ攻撃だが、
今回のも負けてはいない。

少しは認めてくれたのかな？そんなことを考えていると急に落下す
る感覚が体を包んだ。

咄嗟に思い出す。ヘリの隣に来て砲撃を防いだのはいいが、俺は飛
べないのだ。

勿論、重力には逆らえない。落ちる感覚を味わいながら俺はレンズ
に触れた。

恐怖で指が震えるが、なんとか指で触れる。

そして移動しようとした矢先、後ろから暖かいなにかが俺に抱きつ
いた。

「ル、ルーク君！！大丈夫！？」

抱きしめられているので顔だけを後ろに向けると心配そうに見つめ
るなのはと目が合った。

そのあまりの近さに顔が赤面していくのが分かる。

「ダメだよルーク君。危ないよ。今回はなんとかあったけど……」

「いや、大丈夫だよ。レンズがあるし……」

「でも、絶対に大丈夫ってわけじゃないでしょ？」

なのはの正論に、俺はなんとも言えなかった。心配をかけたのは事実なのだ。

ごめん、と呟くと彼女はそれでよろしいと微笑みながら言った。なぜだろう。一生なのはには頭が上がらない気がした。

『ルーク君！何やってるんや！！』

急に開いたモニターと発せられた声量に心臓が飛び出しそうになった。

映し出されたはやては怒りの表情でこちらを見つめている。

無理も無いだろう。命令違反をしただけでなく、危険を犯したのだから。

「ごめん……」

正直に謝るとはやては頭を押さえた。なのはが後ろで苦笑いをして、いることが声で分かった。

『まあ命令違反やし、危険なこともした。でもルーク君はスターズとライトニングの二重役職持ちの特別階級。しかも見事にヘリまで救ってくれたんや。文句は言えん。でも、これからは言ってな？じゃないと私やフェイトちゃんやなのはちゃんも心配するんやから』

「ああ、分かった」

しっかりと答えた俺の言葉にはやては微笑んだ。

『ほな、後は任せとき。私が、一網打尽にするで！』

そう告げるとはやては強制的にモニターを閉じた。

これからはやてが敵を殲滅するのだろう。その様子を、ここで見守るとしよう。

そこまで考えてから俺は背中にぬくもりを感じてはつとした。

今、俺はなのはに抱きかかえられているのだ。ひよっとしたらもの凄く迷惑なのではないだろうか？

「な、なのは、重いだろ？どこかそこら辺に降ろしてくれれば・・・」

俺の言葉になのははきょとした顔でこちらを見ていた。

やがて彼女はクスクスと笑うと俺をより一層強く抱きしめた。

「なんで？ルーク君を降ろしたらぎゅっと出来なくなっちゃうじゃない」

耳元で呟かれた言葉に胸が張り裂けそうなほど高鳴るのが分かる。

というかそもそも彼女はこんなキャラだったのだろうか？そんなことを思いながらも俺はまんざらではなかった。

遠くでは広域殲滅魔法が発動して敵を追い詰めている。

その敵がどんな姿をしているのかは知らないが、彼らには心底同情した。

酷い追い討ちだ。そうそう簡単に逃げ切れるものではない。

やがてそれが消えたとき、そこには何も残らなかった。

圧倒的だなあ、と俺はしみじみと感じていた。そうでもしないとやってられない。

気を抜けば後ろにある温もりを意識してしまいそうなのだから。

ふと、モニターが開き、フェイトの顔が映し出される。

「ごめん、逃がしちゃったみたい………っていつまでなのはそうしてるつもりなの？」

フェイトの言葉に俺は嫌でも思い出させられた。自分が今どんな状況なのか。

たちまち顔が熱くなっていく。顔を横に振ってそれを忘れると、俺は街並みを見据えた。

はやてが放った広域魔法の中心と、モニターに映る映像からフェイトのいる場所を大体予想する。

さらにそこから敵の逃げそうな範囲を予想した。勿論、そこに逃げたという保証は無い。

それでも、賭けてみる価値はあった。

「ごめん、なのは」

俺は呟くとレンズの力を使い、なのはの元から離れた。下のビルの屋上に移動し、走る。

少し休んだことで、俺の体力は殆ど回復していた。あのぐらいの距離なら何とかなるだろう。

そう思い、俺は空間を飛び越えることになる。そしてそれが全ての始まりになるとは、俺は思いもなかったのである。

なのは s i d e

自分の腕の中から消えたルークを名残惜しそうに見つめながらなのははつとした。

今ルークが行っているのは深追いである。これは、まずい。

だがなのはが声をかけようとした瞬間にルークは消えてしまった。本当にまずい、見失った。なのははモニターを展開し、叫んだ。

「シャーリー！！ルーク君の位置は！？」

『え！？は、はい！！なのはさんの居るところから北西1kmのところですー！』

急に聞かれたシャーリーは動揺したが、しっかりと答えた。なのははそれに軽く礼を告げるとモニターを切って飛び出した。

「もう、ルーク君ってば……………」

そう呟いたなのは言葉を聞いた者など、いる筈はなかった。

ルーク side

跳んだ先に、確かに彼女たちは居た。

青い全身タイツに身を包んだ彼女たちには一瞬目のやり場に困ったが、俺は敵と割り切ることにした。

しかし、そう簡単に物陰から出て行くことは出来なかった。

疲れが酷いのである。どこまで行けるか試してみたくて憶測で約1 kmの地点を指定してみたが、相当疲れる。

シグナムとの模擬戦何回分か計りきれないほどの疲れだった。息が乱れているのが、はっきりと分かる。

つまり、最大でも1 km。それが限界だということだろう。

相変わらず難儀な力だ。そう心の中で悪態をついていると、気配に気づいたのか、彼女達の中の一人が振り返った。

「誰だ!!」

やばい!バレた!!俺は内心焦ったが隠すようなことでもないので正直に物陰から出た。
疲れはまだ残ってるが、会話で時間でも稼げばすぐに回復するだろう。

そんなことを思いながら彼女たちを見ると、全員が啞然としていた。
どうしたのだろうか?

「ジョ、ジョーカー……………」

彼女たち三人のうちの一人、青い髪をした綺麗な女性はそう呟いた。
声から考えて先程俺に気づいたのは彼女だろう。その声は震えている。

まるで見てはいけないものを見たかのように。

「な、なんでアナタがここに……………」

その横に座る眼鏡をかけた女性もうろたえている。
というか、なんだこれは?俺は敵側にどんな風に思われてるんだ?
死神か。

やるせない気持ちを隠すことなく、俺は唇を尖らせた。強さならなのはやフェイトではないのだろうか。

なんで、俺が。それに好敵手と認められるならまだいい。だが、恐れられるのは正直心外だ。

「……………なんでそんなに怯えてんの?」

俺は咄嗟にそう聞いてしまった。彼女達は必死なのだろうが、俺からすれば緊張感は無である。

「・・・・・・・・・・私達のマスターから聞いた。ジョーカーは別格だと。情報の揃っていない今なら私達12人全員でも勝てないと・・・・・・・・・・」

青髪の女性の言葉に、俺は彼女を呆れた目で見た。

どうやら六課の情報操作は予想以上に効果があったらしい。

敵にここまでの恐怖を刷り込んだだけでなく、相手の情報まで吐かせてしまうのだから。

とはいえ、いくら始めて戦う相手でもなのは12人分相手は無理があるだろう。

何故そのことに気づかないのだろうか・・・・・・・・・・。

そこまで考えたとき、俺は勝手に体が動くのを感じた。

そして、遅れて頭が反応する。来る。なにかが。俺は瞬時に後退した。

先程まで俺が居た場所に、雷が落ちる。それを見て俺は絶句した。白の四つの雷に、黒の巨大な雷。それはまさに俺が使用する晶術、アンビバレンスそのものだった。

ありえない。俺は我が目を疑った。ありえないのだ、ハロルドが使う晶術を彼女以外の誰かが使うなど。

だって、この世界の人間にそれは不可能なのだから。

混乱する視界の先で、三人の女性が逃げるのが見えた。

ということは先程の雷は彼女達が放ったものではないのだろうか。俺は逃げる彼女達に叫んだ。

「おい、待てよ!!」

レンズを使用し、彼女達のすぐ後ろに移動する。しかし直後、全身

の毛が逆立つ感覚を俺は覚えた。

地面を蹴って、後ろに転がる。先程まで居た場所に、剣が横薙ぎに振るわれた。

それは正確に俺の首があつた場所で、そのことに俺は戦慄した。

体勢を立て直しながら、顔を上げた俺の目の前にそれは静かに舞い降りた。

「なんだ・・・・・・・・お前・・・・・・・・」

俺は不意に呟いていた。黒い全身を覆うコートに、フード。それは、今まであつた誰よりも異質だった。

顔が確認できる分、今逃げている三人の女性のほうがまだいいとかそういう話ではない。

目の前に立つ男とも女とも知れない人間は、全てが異質だった。

その姿も、雰囲気も、何もかも。そもそもこれはなんだ？人間なのだろうか？

真っ黒な袖から伸びた手には普通の剣が握られている。

普通の剣な筈である。なのに、持つてる人物が違うだけでこんなに異質に見えるのか。

俺は瞬時に感じ取っていた。上だと。それもただ上だけではない。格が違う、そんな圧倒的な上位。

俺は剣を構えた。この吞まれそうな感覚はかつての世界で戦った口腔溃疡を解放したヴァンに似ている。

いや、それ以上かもしれない。勝てるのか？そんな相手に。

沈黙が流れる。相手は何も話そうとはしなかった。

それを訝しげに思いながら、俺は地面を蹴る。一気に肉薄し、斜めに切り裂く。

それを受け止められると、今度は逆方向に振り下ろした。

しかしそれも防がれ、俺はフェイントをかけて再び同じ方向に振り

下ろした。

それでも、結果は同じだった。腕に力をこめて、剣を振る速度を速める。

風を斬る音が、大きくなった。しかし、それでも相手は完全に反応してくる。

なんだ？こいつは。そう思ったときだった、

『ルーク、上よ！！』

ハロルドの言葉が頭に響いた。咄嗟に俺は後ろに後退した。今まで居た場所に、水が降ってくる。

水の晶術、スプラッシュ。それを見て俺は先程のアンビバレンスを放ったのが誰か理解した。

息をつくまもなく、俺は防ぐために剣を動かした。

その行動をとることを見切っていたように、相手は水飛沫の中を突っ走り、剣を振るってきた。

初めて受けるその一太刀は、とても重かった。それでも、恐らく本気ではない。

それは間違いなかった。先程からこいつは、俺を見極めている。

それが何でかは俺には分からない。だが、それはある一つの事柄を導き出していた。

それは相手が俺よりも圧倒的に強いということである。

不意に、相手がピクリと反応した。黒いフードが一瞬だが動いた。

次の瞬間には上空から火球が接近していた。剣を構え、それを防ぐ。その中で俺は気づいた。先程のスプラッシュと今の火球がぶつかり、蒸発して霧を作り出していることに。

逃げるつもりか。

そう思った俺は防御を解除し、飛び上がる。

「紅蓮襲撃!!」

炎を纏った蹴りが地面にぶつかり、火柱を立てる。

その圧力と温度で、霧は音も無く消えた。だが、時すでに遅く、目の前には誰も居なかった。

三人の女性は勿論、フードの男さえ居なかった。

「ルーク君!!」

振り向くと、なのはが空から俺を見下ろしていた。何故か分からないが怒っている。

「ルーク君勝手に結界張ったでしょ!? 壊させてもらったよ! ダメだよ勝手に使ったら!!」

なのはは俺の傍に降りてきて着地するとそう咎めた。だが、俺は首を傾げるばかりだった。

「結界?」

「うん。……………あれ? 違うの?」

俺の反応になのはも言葉を失っていた。

ハロルドに結界を指示した覚えは無い。そもそも彼女がそのようなことが出来るのかさえ俺は知らない。

そんな俺が結界を発動できるわけは無かった。

「私達の魔法と違ったからルーク君のかと思ったんだ。疑ってごめんね?」

「え？ああ、いいよ、気にしてないから」

なのはにはそう答えたが俺は考えていた。結界はおそらくあのフー
ドの男の仕業だろう。

結界が破られたから、あいつは逃げ出した。そう考えれば辻褄は合
う。

だが、だとしてもあいつはなんなんだ？

最初のアンビバレンスは勿論、スプラッシュに最後の火球に関して
はバーンストライクだろう。

何故、ハロルドしか使えないはずの晶術が使えるのだろうか？

そこまで考えてから俺はフードの男が去っていった方向を見つめた。
妙な胸騒ぎが俺の不安を駆り立てた。

ルークside

激戦が終わり、俺となのはは聖王教会の病院を訪れていた。

結局あの激戦は、終了時は完全に六課が敵を逃がしたという結論に至った。

敵の逃亡に、レリックの略奪。それはあまりにも痛手だった。

だが、キャロとティアナの機転によって、レリックの略奪だけは防ぐことは出来た。

中身だけを入れ替えるという知略には脱帽せざるを得ないだろう。

だがそれ以上に今俺の心を占めているのは、途中で迎撃された黒フードだった。

あれが何なのか。俺は未だに分からない。

結界は強力だったらしく、シャーリーに聞いても何も分からなかった。

戦闘の規模もそこまで大きくなかったので、詳しい情報の収集は不可能らしい。

まるでそんなことは無かったかのよう、ことは進んだ。

だが俺は覚えている。あの吐き気のするような雰囲気、圧倒的な異質感を。

気になっているのはなのは同じようで、彼女も心配そうに俺をちらちらと見ていた。

病院の曲がり角に差し掛かったとき、俺は売店の棚に兎のぬいぐるみが置かれているのに気づいた。

今日病院を訪れたのは六課が保護したというボロボロの女の子のお見舞いのためだ。

命に別状は無いらしいが、それでもかなり衰弱しているらしい。

俺はそれを一つ購入すると、手に持ち、なのはを見た。
彼女は俺が手に持ったぬいぐるみを見ながら微笑んだ。

病室に入ったとき、女の子は安らかな寝息を立てていた。

金の綺麗な髪に、あどけない寝顔。それが彼女が普通の女の子であることを物語っていた。

この女の子が一体どんな存在なのか、俺はなのはから詳しく聞いている。

人造魔導士。かつて存在した優秀な魔導士から作られた、コピー。

この子は同じだ。フェイトと、そして俺と。

枕元にゆっくりと兎のぬいぐるみを置く。ベッドが揺れたわけではないが、女の子は体を動かした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ママ・・・・・・・・・・」

その言葉に、なのは俺の表情が曇る。

この子に、両親は居ない。仮に居たとしても、それはこの子のものではない。

オリジナルの、両親だ。その事実が、俺達の心を揺さぶった。

まるで俺を見ているようだった。作られてまだ七年しか経ってない、俺を。

俺も生まれたときはこんな感じだったのだろうか？それを知る術は無い。

なのははゆっくりと手を伸ばし、女の子の頬を撫でた。

彼女はくすぐったそうに身を動かし、もう一度ママ、と呟いた。

窓から差し込む夕日に赤く染まりながら、俺達は悲しげに彼女を見守っていた。

翌日、俺達はシグナムの運転する車に乗りながら病院に向かっていった。

今日も見舞いに行くためだ。そろそろ女の子が目覚める頃らしい。車はフェイトからの借り物で、礼を言ったのはに対してシグナムはそのことを引き合いに出していた。

俺は後ろの席に座ってハロルドと小声で会話を交わし始めた。

「ハロルド、あのフード、どう思う？」

『アンビバレンスにスプラッシュ、バーンストライク。正直言ってもあれは私が使う晶術と同じものね』

驚いたことにハロルドはあまり気にしていないようだった。

不思議に思わないのだろうか？自分と同じ晶術を使う人間がこの世界に居ることに。

剣の中の彼女は一息つくつと、ゆっくりと話し始めた。

『考えられるのは三つ。まず、ルークの技をコピー出来る能力の持

ち主。これが一番有力ね。ある特定の人物を見るだけ、あるいはその特徴を目にするだけでコピー能力が使えると仮定すれば、納得はいく。事実ルークはリニアの事件の際に一度出ている。全てが分からなくても、目にするにことぐらいは出来るはずよ。まあそんな能力を持つてゐるなら果てしなく使い勝手が悪いんでしょうけど』

ハロルドの言葉に俺は納得した。その能力なら確かに可能だ。

アンビバレンスもスプラッシュもバーンストライクも使用したことはあるのだから。

だが、その能力なら様々な制限がつくのだろう。コピー出来るのは一人まで、といったように。

ならあまり脅威にはならないように思える。

『二つ目は、幻術ね。ルークを動揺させるためにそのような幻術を用意した。まあ、この場合かなり高度な幻術になるでしょうから可能性として低いけど』

同様にこちらの案も対して脅威になりそうに無い。

そう思い安堵のため息をついたとき、ハロルドの低い声が響いた。

『三つ目。これは一番ありえないけど、一番最悪な場合。つまり、あのフードはルークと同じ能力を持っている。正確には私の晶術を使うことが出来る』

その言葉に、俺は息を呑んだ。もしそうなら、それは脅威になりうる。

だが、そんな人間が居るのだろうか？

「なあハロルド、そんなこと出来る奴が居るのか？お前と同じ晶術を使えるなんて」

俺の言葉に、ハロルドはすぐには答えなかった。何かを迷っているような、そんな感覚。

やがて彼女は小さな声で言葉を紡ぎ始めた。

『居るわ。二人・・・・・・・・・・』

ハロルドの言葉に俺は啞然とした。だがハロルドはすぐにその言葉を否定する。

『でも、ありえないわ。二人ともすでに向こうの世界で死んでる。それにそのうちの一人に関しては絶対にそんなことしない。敵対するなんて・・・・・・・・・・ありえない・・・・・・・・・・』

ハロルドの言葉は悲痛だった。何かを堪えているような、そんな声だった。

『ありえない・・・・・・・・・・兄さんがこっちに居るわけない。確かにあの時死んだから・・・・』

最後に呟いたハロルドの言葉は俺でも聞き取れないくらい小さいものだった。

不意に運転するシグナムの前にモニターが開き、見たことも無い女性姿を現した。

その顔や雰囲気から彼女が慌てていることが分かる。

『すみません、検査の合間にこちらの不手際であの子が姿を消してしまいました』

女性の言葉で、俺は顔をしかめた。

病院についてから車を降りると、すぐに先程モニターに出ていた女性が走ってきた。

なのはの前で息を整えた彼女は一言謝った。

「状況はどうなってますか？」

「はい。特別病棟とその付近の封鎖と避難は済んでいます。今のところ、飛行や転移、侵入者の形跡などはありません」

その言葉で、俺は呆れた。子供一人になんて対応だ。あの女の子は兵器か何か。心の中で悪態をつくも、そのままではしょうがないので俺は言葉を発した。

「外には出られないんだな？なら手分けして探そう」

俺の言葉に三人は頷き、走り出した。

「どこに居るんだ？」

一階を殆ど回った俺は中庭に来ていた。もう一階で探していないのはここぐらいである。

不意に足音を聞いて振り返ると、そこにはなのはの姿があった。

「どう？見つかった？」

「いや、まだだ」

俺は頭をかきながら呟いた。これだけ探しても居ないとは、一体どこに隠れているんだろうか？

そんなことを思っていると、草むらが揺れる音が聞こえた。

なのはとほぼ同時に音がしたほうへ振り返る。そこには一人の女の子が怯えた表情で立っていた。

緑と赤の虹彩異色の瞳が不安そうに揺れている。俺は彼女が見つかったことに安心して近づこうとした。

そのとき、轟音が響いた。俺は咄嗟に前に出て女の子を護るように振り向く。

手で彼女を制止し、剣を引き抜いた。それを瞬時に前に向け、女の子の視界から隠す。

現れたのは、先程連絡をくれたシスターだった。確かシャツハと言っただろうか？

どちらにせよ彼女はバリアジャケットを展開しトンファーのような武器を展開していた。

俺の体がシルエットになるようにしているので女の子は何が起こったかよく分かっている。

剣を構えたまま、俺は目の前に立つ困惑したシャツハを睨み付ける。

「どういうつもりですか、こんな幼い子に武器を向けるなんて。やるなら俺が相手になりますよ？」

俺の低い声に、シャツハは体を震わせた。その光景になのはは苦笑いしながら手を叩いた。

「はいはい。シャツハさんもルーク君も武装解除して。これじゃあその子を怖がらせるだけだよ」

なのはの言葉に従い俺はハロルドを鞘に収めた。

「し、しかし………」

「しかしじゃないですよ。それとも、ルーク君相手に戦いますか？勝てないと思いますよ？」

一時は武装解除を渋ったが、なのはの言葉にシャッハは武装を解除した。

「ルーク君も力を抜いて」

なのはに見切られ、俺は渋々手を脱力させた。

先程の一瞬でシャッハが攻撃してくるなら瞬時に反応しようと思っていたのだが、どうやらなのはにはお見通しだったらしい。

とはいえそのシャッハももう武装解除しているので必要は無くなっただけだが。

改めて六課の情報操作の偉大さを知ったときであった。

そこまで考えてから俺は振り返り、しゃがみこんで女の子と視線を合わせた。

すぐになのはが隣にやってくる。

「俺はルーク。ルーク・フォン・ファブレって言うんだ。君の名前は？」

俺の言葉に、女の子はゆっくりと答えた。

「ヴィヴィオ………」

「ヴィヴィオ、いい名前だね。私はなのは、高町なのはだよ」

隣に立っていたなのはもしゃがみこんで微笑んだ。

優しく微笑んだ俺たちにヴィヴィオの目から少しずつ恐れが消えていく。

「ヴィヴォはどこか行きたかったのかい？」

「ママ・・・・・・・・居ないの」

ヴィヴィオの言葉になのはの表情が曇るのが分かった。

俺は笑顔のまま彼女に対応し続けた。

「それは大変だ。じゃあ一緒に探そうか」

俺はそう言つとゆつくりと手を伸ばしてヴィヴィオの頭を撫でた。
彼女はゆつくりと頷いた。

結局ヴィヴィオは六課で保護することになった。

俺となのはで引き取ることにしたのだ。一番の理由としては、なのはがヴィヴィオをほっとけないように見てたからである。

部屋に戻ってからのヴィヴィオは俺となのはにべったりだった。

ずっと俺の膝の上に座っていて、俺となのはに華が咲いたような笑

顔を振りまいている。

しかし、フェイトから俺となのはがどこかに行ってしまうことを聞くと、泣き始めてしまった。

面倒を見てもらおうと集まったフォワード陣は入り口で小さくなっている。

扉がスライドしてはやてとフェイトが入ってきてから、俺はある案を考えた。

「なあはやて、行くのって聖王教会だろ？ だったらなのはだけでもいいんじゃないか？ 俺は部外者みたいなものだし」

俺の言葉に、ヴィヴィオはゆっくりと顔を上げた。

その目は行かないでと切実に訴えている。

俺はヴィヴィオの頭を撫でると、視線をはやてに向けた。

彼女は苦笑いしながら、頷いた。

「そうやね。ほな行こうか。フェイトちゃん、なのはちゃん」

「ごめんねルーク君」

「ああ、大丈夫だよ。行つてきな」

なのはの言葉に俺はそう笑顔で返すとヴィヴィオに視線を向けた。

俺が居なくなると分かった彼女は嬉しそうに微笑んでいる。

そのことに俺も笑顔になった。

なのは side

なのは、フェイト、はやての三人は聖王教会の騎士カリムの部屋でクロノと共に会議をしていた。

「切り札さんは今日は来ないの？」

「連れてこよう思ったんやけど、色々あつてな……………」

「

「そうか、それは残念だな」

六課の切り札であるルークが来ないことにカリムとクロノは残念そうに肩を落とした。

一目見て彼を見極めたかったのは、二人とも同じだった。だが、来れないものはしょうがない。

はやてはひとまず咳払いをすると、話題を変えた。六課の設立の本当の理由に。

カリムが立ち上がり、前に出る。ポケットから札のようなものを取り出すと、それは輝き始めた。

それが一枚一枚空中に浮かび、カリムの周りを囲むように浮遊する。

それらはそれぞれ光を放っていた。

「六課の設立の本当の理由は私のレアスキル、プロフェーティン・シュリフテンにあります。これは最短で半年、最長で数年先の未来、それを詩文形式で書き出した預言書の作成をすることが出来ます。二つの月の魔力がうまく揃わないと、発動することが出来ませんから、ページの作成は年に一度しか出来ません。」

カリムの周りを浮遊する二つの紙が彼女の元を離れ、なのはとフェイトの前で静止した。

そこに難解な文字が浮かび上がる。それを見てもなのはにはさっぱりだった。

「これはそもそもよく当たる程度の占いだが、数年前からこの予言にある事件に発展しそうなことが書かれているんだ」

クロノの言葉にカリムは息を吸うと、ゆっくりとその予言を紡ぎ始めた。

「古い結晶と無限の欲望が集い交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は砕け落ちる

星と月は激突し、星は月の手に落ちる

太陽は星を救い、月によって消えるだろう」

告げられた予言に、なのはもフェイトも首を傾げた。
殆どの言葉がよく分からない。だがその中でも二つほど分かるものがあつた。

「大地の法の塔・・・・・・・・・・それって・・・・・・・・・・」

「地上本部ってことかな・・・・・・・・・・」

フェイトの言葉になのはが続いた。

「なら、数多の海を守る法の船っていうのは・・・・・・・・・・本局ってこと？」

「そうやるうな」

なのはの言葉に、はやては頷いた。
その横で、クロノは頭を抱える。

「そこまでならまだ分かるんだ。だが最後の二行、太陽だの月だの星だのはなんなんだ」

その言葉に、その場にいる全員が思考をめぐらす。それでも、答えは出なかった。

「スケールが大きすぎるよね。太陽とか、月とか。考えてもさっぱりだよ」

フェイトの言葉に、誰もが同意だった。

「とりあえず、分からないことを考えていても仕方が無いわ。用事はこれだけね」

カリムの言葉にその場にいる全員が思考を止めた。

ただその中でたった一人、なのはだけは違った。

なにか、嫌な予感がする。

この予感そのものではなく、最後の二行だけ、どこか不気味なのはには映った。

まるでそこだけが黒く輝いているような、そんな感覚。

その違和感を感じながら、なのははゆっくりと目を離した。

ルークside

なのはが出てから帰ってくるまでの間。俺はヴィヴィオと遊んでいた。

つみきをしたり、絵を描いたり、それらは全て新鮮だった。

俺は、そんなことをしなかったから。いや、出来なかったと言った方が正しいかもしれない。

あの頃は必死だったのだ。両親や使用人の名前を覚えることに、時間を割いていたのだから。

それでも、よく出来が悪いと叱られたものだ。記憶を失う前はもっと優秀だったと罵られた。

そのたびに記憶を失ったことを憎んだ。だが、それすら間違いだったのだ。

俺はそもそも失う記憶なんて無い、真っ白な人間だったのだから。真っ白な、何も無い、しかも人間ですらない存在。

「パパ？」

そこまで考えたところで、下から声が聞こえた。

そちらを見ると、ヴィヴィオが心配そうにこちらを見ていた。

ヴィヴィオの呼び方は遊び始めてからすぐに変わった。

俺にパパと呼んでいいかと聞いてそれを承諾されてからは、しきりにそう呼んでくる。

それは、偽りの関係。それこそ偽者の俺達にはぴったりの偽者の、親子。

それでも、ヴィヴィオは満面の笑みを俺に向けてくれる。

俺のことを気遣い、心配そうに見上げてくれる。それだけで、そん

なことはどうでもよくなった。

偽者が偽者の関係を気づいて何が悪いというのだろうか。

大切なのは心だ。俺がヴィヴィオと共に居たいという、意志だ。

俺はヴィヴィオに微笑みかけると、なんでもないよと呟いた。

その言葉にヴィヴィオは首を傾げていたが、やがてお絵かきに帰っていった。

そのすぐ後だった。扉が横にスライドする電子音が響くのは。

ヴィヴィオはぱつと顔を上げる。視界になのはが見えた途端に、彼女は立ち上がった。

そのまま走って彼女の元に行くと、ヴィヴィオは抱きついた。

そしてそのまま手を引いて俺の横になのはを座らせる。

間に入って俺となのはの両方の腕を抱えると、ヴィヴィオは嬉しそうに微笑んだ。

「ルークパパとなのはママ」

その弾んだ声に、なのはは目をぱちくりさせた。

「私が・・・・・・・・・・・・・・・・ママ？」

その言葉にヴィヴィオはなのはを見上げると、微笑んでうん、と言った。

なのはは彼女の言っていることを理解してヴィヴィオの頭を撫でた。

「そうだよ。なのはママだよ」

なのはの言葉に、ヴィヴィオは満足そうに微笑むと、なのはの腕に頬を押し付けた。

事件は、俺が部屋に戻ろうとしたときに起こった。
もう夜も遅い時間になってきたので、帰ろうとしたとき、ヴィヴィ
オは俺の袖を掴んで離さなかった。

「パパ、行っちゃやだ。ヴィヴィオと寝る……」

泣きそうな瞳が俺の心を揺さぶる。とはいえヴィヴィオはなのはの
部屋に居るのだ。

そこにはフェイトも居て、一緒に寝ることは出来ない。

そもそもベッドがそんなに大きくないのだから。

だが、なのはは大丈夫だという風に微笑んでいる。

俺の手を取り、なのははベッドへと連行した。俺は仕方なくそれに
従い、ヴィヴィオと共にベッドに横になる。

そのままなのはは布団をかけると、反対側に移動して布団に入った。
ヴィヴィオを挟んで俺たちは横になる。

一緒に寝てくれることを知ったヴィヴィオは嬉しそうに微笑んでい
たが、そのうち安心したのか眠りについてしまった。

俺はヴィヴィオの安らかな寝息を聞きながら頭を働かせていた。
昨日今日で様々なことがあった。ヴィヴィオの件もそうだし、襲っ

てきたフードもそうだった。

あれが誰なのか、未だに俺には分からない。だがそんなことより、俺は気にしていることがあった。

俺のなのには対する気持ちである。

デートをしたとき、俺はなのとは共に居たいと思った。

いや、ひょっとしたらずつと前からそう思っていたのかもしれない。ただ気づかなかっただけで、確かに惹かれていたのかもしれない。

かつての世界で、俺はティアと約束をした。必ず帰ってくるという約束。

それは、もう守れないかもしれない。

でもだからってティアの気持ちを蔑ろにしたわけじゃない。

ティアとなのは、言い方は悪いが天秤にかけたとき、どっちが重かったかという、ただそれだけの話。

おそらくティアがこの世界に居たとしても、俺はなのを選んでだろう。

たとえその選択でティアが泣いたとしても、なのを選んでだろう。例えそれが叶わないと分かっているとしても、そんなことは関係ない。

どれだけのもしもがあったとしても、この気持ちはもしもじゃないのだから。

(ごめん・・・・・・・・ティア・・・・・・・・俺はもう・・・・・・
・・帰れないよ・・・・・・・・)

護る者を見つけたから、生きる意味を見出したから。俺はもう戻ることは出来ない。

例え戻る技術があったとしても、俺はそれを選択できない。

だって俺はもう選んでしまったから。ここに居ることを。

ヴィヴィオが寝ていることを確認してから俺は小声でなのには話しかけた。

「なあなのは、ちょっといいか？」

俺の言葉にまだ起きていたなのは首を傾げた。

ベランダに出た俺はなのはを待っていた。その彼女は何かを探している。

やがて彼女は何かを見つけたのか一枚の紙を片手にベランダの窓を開けた。

「ごめんね遅くなっちゃって。はい、これのことでしょう？」

なのはが差し出したのは一枚の紙だった。そこに何か書かれている。まるでユリアの予言のような、なにかが。

「今日はやてちゃんが連れてってくれたのは聖王教会なんだ。そこで騎士カリムさんやクロノ君と一緒に六課の設立の理由を聞いたん

だ。それが理由」

なのはの言葉に俺は紙に書かれたことにぎっと目を通した。何が書いてあるのかはよく分からない。

やがてなのははクスクスと笑うと、俺に意味を説明してくれた。

「私も詳しい意味は分からないけど、地上本部と本局が壊滅するかもしれないって言うのがその予言みたい……………」

急に真剣な表情になったのはに俺は表情を引き締めた。

それが本当なら由々しき事態だ。六課を作ったのも頷ける。

そう思いながら紙に書かれたことを読み降ろしていると、下のほうによく分からないことが書かれていた。

「星に月に太陽？」

それは、急に出てきた単語だった。それまでに出てきた単語とは違う、あまりにもスケールの大きい単語。

例えばそれが本物の月や太陽を指していなかったとしても、何を指しているのかなんて分かるはずが無い。

それはなのはも同じだったようで、彼女は頷くと俺の手から紙を掠め取った。

「そうなんだよね。私も最後の部分が気になったんだ。でも……………全然分からなくて……………」

「うーん、俺も良く分からないよ……………」

抽象的過ぎるのだ。正直言わせてもらうとまったく分からない。そんなことを思っているとなのはは紙をポケットに入れてしまった。

その様子をじつと見守っていると、なのは俺の視線に気づき、あと声を上げた。

「ほら、これは一応予言だから機密なんだ。だから処分しないとさ、戻ろう?」

なのはの言葉に俺は頷き、歩き出したところで歩みを止めた。

「あ、待ってくれなのは」

「ん?」

危つく本来の目的を忘れるところだった。完全に流されていた。俺はなのはを呼び止めると彼女は振り返って首を傾げた。

「俺が話したいのはそのことじゃないんだ」

「え? そうなの?」

なのはは不思議そうな顔でそう答えた。勿論そのことも知りたかった。

だが、俺が伝えなくてはならないことはもっと重要なことだ。

「なのは、聞いてくれ」

俺の言葉になのはは目を見開いた。

急に俺が真剣な表情をしたからだろう。当たり前だ。

今から伝えるのは一世一代の告白だ。誰にもしたことの無い、初めての告白。

真剣にならない筈は無い。

「まず、ありがとう。俺を助けてくれて。こつちの世界に来たとき、右も左も分からない俺に手を差し伸べてくれて、嬉しかった」

俺は、何も知らない。どのように告白すればいいかなんて分かるはずもない。

だから、ただ俺の気持ちを正直になのはに伝えるだけだ。

例えそれが受け入れられなかったとしても、俺は伝えたい。

「最初から今まで、なのは俺のことを見守ってくれた。保護者のように心配してくれた。それでも、時が経つにつれて俺はそれが嫌になった」

それは、心配されるのが迷惑になったとかそんなことではない。ただ、保護される対象としてしか見られていないのが嫌になっただけ。

思えばそのときから俺はなのはに惹かれていたのかもしれない。

「ティアナとの事件のとき、無理をしているなのはを支えたいと思った。なのはが傷つかないように、護りたいって、そう思ったんだ」

そこまで言つと俺は気持ちを落ち着かせた。

「俺、言おうと思う。この気持ちを」

まだ早いかもしれない。まだまだ言うことがあるかもしれない。でも、俺は不器用だから、大したことは言えないんだ。だから、正直に。

「俺、ルーク・フォン・ファブレは高町なのはさんのことが好きです」

なのはの目が見開く。それに構わず、俺は続けた。

「俺と、付き合ってください」

なのはの瞳が揺らぎ、目が潤む。そこから涙が零れた。

口を覆った手は震えている。なのははゆっくりと涙を拭くと微笑んだ。

「喜んで」

その言葉に、俺は世界が停止するのを感じた。今、彼女はなんと言った？

「ご、ごめん、もう一度言ってくれないか？」

まさかこんなに早く返事がもらえるとは思わなかったのだ。

勿論嬉しいがそれでもまだ頭がついていかない。これは、現実か？俺の言葉になのはは微笑むと、俺に近づいた。

そのまま俺の背中に手を回す。俺となのはの体がぴったりとくっついていた。

「高町なのはも、ルーク・フォン・ファブレさんのことが大好きです」

下から聞こえた声は、夢にしてはあまりにもはつきりしすぎていた。違う。これは夢じゃないんだ。感じるぬくもりも、言葉も、夢じゃない。

「い、いいのか？……俺なんかで」

不意に俺はそんなことを口走っていた。

なのはにふさわしい人間なんていくらでも居るだろうと、そう思った。

自分からなのはに告白したことなどすっかり頭の中から消えていたのだ。

俺に抱きついたままのなのはクスクスとおかしそうに笑うと、力をこめて来た。

「ルーク君以外なんてお断りだよ」

その言葉を聞いて、ようやく俺の頭が正常に働いてくる。

そうか、俺の恋は叶ったんだ。俺はゆっくりと手をなのはの背中に回した。

この胸の中にある大切な彼女の存在を確かめるように、しっかりと抱きしめる。

胸が高鳴り、同時に安心感がこの体を満たした。そうか、これが恋か。

そう思い、俺は目をゆっくりと閉じた。

目を瞑っても、なのははここに居る。俺の胸の中に、居る。

「ねえルーク君」

ふと聞こえた声に俺は目を開いた。

なのはの方を見ても、彼女は顔を上げようとしない。その頬には少し赤みが射しているように見える。

その彼女が、ゆっくりと顔を上げた。思ったとおり、その顔は真っ赤だ。

「私達・・・・・・・・恋人なんだよね？」

「う、うん・・・・・・・・・・」

恋人という言葉に胸が高鳴る。それは、望んでいたなのはその関係。

「だからさ、ルークって呼んでもいいかな？」

赤くなりながら呟いたその言葉に、俺はごくごく頷いた。

嬉しい。かつてないほどの幸せを、俺は噛み締めていた。

俺の頷きに心底嬉しそうに呟いたなのは恥ずかしそうに微笑んだ。

「これからよろしくね、ルーク」

「うん、よろしく、なのは」

俺達はそう言うとお互いに微笑みあった。

俺は、生きる意味を探していた。何のために生まれてきたのか、何のために生きているのか、その答えを。

けど、今ならはっきりと言える。

その答えは、確かに今、俺の腕の中にある。

ルーク side

朝早く目覚めた俺はいつもどおり着替えるとなのはの部屋を訪れた。朝早い時間なので起きてはいないかと思っではいたが、ヴィヴィオはやはり眠っていた。

俺はそのことに安堵のため息を吐きながら椅子に座った。

起きたときに俺が居なかったらヴィヴィオは泣くかもしれない。

そのことを危惧して早く来たが、どうやら正解だったようだ。

そのことを知っているフェイトは朝食をテーブルに置いて苦笑いした。

「大変だね、ルーク」

「そうだな。まあでもヴィヴィオの笑顔を見れるからいいとするよ」

そう言っ俺は運ばれてきた料理に手をつけ始めた。

その音に気づいたのか、ヴィヴィオは小さく唸ると起き上がり、目を擦り始めた。

「・・・・・・・・・・パパ？」

「おう、ヴィヴィオおはよう」

「おはよう、パパ!!」

俺の言葉にヴィヴィオはすぐに笑顔になると元気良く挨拶をした。そのままベッドから飛び降りて俺の元に駆け寄ってくる。

俺に抱きつこうとしたところで、キッチンから出てきたのはがそれを咎めた。

「こらヴィヴィオ。まずは顔を洗ってきなさい。パパに抱きつくのはそれから」

「うう……………」

ヴィヴィオはその歩みを止め、残念そうに俯いた。その頭をゆくりと撫でてやる。

「大丈夫だよヴィヴィオ。パパはここに居るからな。行ってきな」

ヴィヴィオはぱつと顔を上げ、さっきまでの残念そうな顔が嘘のように目を輝かせた。

「うん！！行ってくる！！」

大きな声でそう叫ぶとヴィヴィオは洗面所に駆け込んだ。

その様子を見ながら、俺は微笑んだ。良かった。

最初ヴィヴィオの姿を見たとき、彼女は病院のベッドで悲しそうに眠っていた。

ママとしきりに呟き、辛そうにもがいていた。俺は、俺となのははそんなヴィヴィオに何もすることが出来なかった。

だが、今は違う。今俺達はヴィヴィオを幸せにすることが出来る。笑顔にすることが出来る。それだけで、十分だった。

「いや！！パパもママも行っちゃ嫌！！」

ヴィヴィオの大きな声が響く。彼女は俺の脚にしがみ付いており、そのせいで俺は満足に動けない状態だった。

俺が出れないのでなのは横で困った顔をしているし、フェイトもヴィヴィオの隣で苦笑いしている。

「で、でもヴィヴィオ、ルークパパもなのはママも訓練だから・・・」

「嫌！！」

フェイトの必死の説得にも耳を貸そうとしない。

昨日の段階であそこまで俺が部屋に戻ることを嫌がったのだ。仕方ないだろう。

だからって強く怒るわけにもいかなかった。俺もなのはもヴィヴィオの涙を見るのは心が痛むのだ。

出来るなら笑顔で居させてあげたい。そう思った俺はヴィヴィオの頭を撫でた。

「ヴィヴィオ、俺達が訓練から帰ってきたら三人で街に遊びに行こう。だからいい子にして待っていてくれないか？」

俺が考えたのは後で遊びに連れて行くということだった。

このままでは埒が明かないし、なにより保母のアイナさんに失礼だ。それに、ヴィヴィオと街に行つて彼女を楽しませるのもやってあげたいことだ。

俺の言葉にヴィヴィオは何かを考えていたが、やがて俺の言葉の誘惑に負けたのか、嬉しそうに頷いた。

フェイトは安堵のため息を吐き、なのはは苦笑いした。

まあ俺が蒔いた種なのだからきちんと俺が回収することにしよう。ヴィヴィオとなのは。俺の恋人と娘を今日は楽しませることにしよう。

夕焼けが俺達の体を染める中、俺となのは部屋に入った。そこには待つてましたといわんばかりに笑顔のヴィヴィオが待ち構えていた。

彼女は既に着替えていて、外に出る準備は万端のようだ。

茶色のズボンに白のセーター、さらに白の耳当てを首にぶら下げている。

アイナさんがコーディネートしたみたいだ。

そんなヴィヴィオは目で俺達に早く早くと急かしてくる。

そんなヴィヴィオに苦笑いをして俺達は着替え始めた。

俺は一旦部屋に戻り、なのははそのまま自分の部屋で、着替える。なのはの部屋の前を待ち合わせ場所に行っていると、中からヴィヴィオが出てきた。

「パパ、ママ、もう少し掛かる」

どうやらなのはは着替えに時間が掛かるらしい。

俺はしゃがんで目線をヴィヴィオと同じにする。

「ヴィヴィオ、俺となのはがパパとママで良かったのか？」

俺の言葉にヴィヴィオは首を傾げた。俺が何を言っているのか、いまいち理解できなかったのだろう。

それでもヴィヴィオは嬉しそうに微笑んで俺の手を握ってきた。

「ルークパパは、ルークパパ。なのはママは、なのはママ」

そう言っただけで彼女は嬉しそうに笑った。そうだ、俺は何を気にしていたんだろうか。

さっきまで馬鹿なことを考えていた自分を笑ってやりたい気分だった。

関係ないのだ。ヴィヴィオには。俺やなのはが両親であることなど、気にしないのだ。

ただ笑っていらればいいのだから。楽しければいいのだから。そしてそれは俺も、おそらくはなのはも同じ気持ちだった。

「そうだったな。俺はヴィヴィオのパパで、なのははヴィヴィオのママだ」

俺の言葉にヴィヴィオは満足そうに頷いた。

後から聞いた話なのだが、ヴィヴィオはなのはの養子になったようだ。

そしてフェイトが後見人の立場になったらしい。

フェイトとしては俺が後見人のほうが良かったらしいが、そもそも俺には戸籍が存在しない。

いや、一応存在はするのだが、きちんとしたものではないらしい。フェイトがはやてに確認を取ったところ、すぐに戸籍を用意するそうだ。

まあそもそも次元漂流者の俺に戸籍が存在するわけも無いので、取得は結構早く可能らしい。

はやて曰く、裏技を使うそうだ。どんな裏技だ。そうつつこんだ俺は悪くないはずだ。

ちなみに戸籍上は俺はヴィヴィオと無関係だが、彼女にとっては俺は父親らしい。

つまり、一緒の部屋で寝なくてはいけない存在なのだ。

だがなのはの相部屋の相手はフェイトであって俺ではない。

一応はやてに帰ってきたらフェイトとの入れ替えを要求してみるが、上手くいくかは分からない。

ちなみにフェイトは快く了解してくれたので、残るははやてだけとなる。

そんなことを考えていると、扉が横にスライドし、中からなのはが出てきた。

俺は立ち上がり、扉のほうを見る。そこには先日デートに行ったときと同じ格好のなのはが立っていた。

ちなみに俺も先日と同じ格好だ。

どうやらなのはもこの前中断されたデートの続きをしようと思ったらしい。

考えていることが同じだと分かり、俺は笑顔になった。

そして俺の右にヴィヴィオ、さらにその隣になのはという対置を採る。

ヴィヴィオを挟んで手を繋ぎながら、俺達は街に出ることにした。

街はもうすでに夜に入っており、外も大分暗くなってきた。ところどころから視線を感じる。そちらにちらつと視線を向けてみるとすぐに逸らされた。

どうやら先日喧嘩を吹っ掛けてきたチンピラがこっちの様子を伺っているようだ。

だが、伺っているだけで敵意は感じない。俺がそのことを不思議そうに思っているとなのはが隣で微笑んだ。

「あの人たちが襲ってこないのはルークのことを知ったからだよ」

「俺のことを？」

なのはは得意げに笑うと俺の髪を指差した。

「トレードマークはその朱髪だね。六課の切り札って言われてるんだから、そう簡単に挑む人は居ないってわけだね」

なのはの言葉に俺は心底呆れた。

あの全身タイツの女性たち、といいここのチンピラ達といい、情報に踊らされすぎな気がする。

いや、逆に六課の情報操作が凄過ぎるのかもしれない。

まあだとしてもそれに感謝だろう。その情報操作のおかげで平和に事を運べるのだから。

腕につけた腕時計に目をやる。時刻は七時。夕食を食べるにはぴったりの時間だろう。

「何か食べるか？そろそろ時間も夕食の時間だし」

俺の言葉になのはは頷き、ヴィヴィオは微笑んだ。

辺りを見回して、店を探す。今回はヴィヴィオが居るので静かなところ等には入れない気がする。

その考えを読んだのか、なのはは遠くに見える建物を指差した。

「あれなんかどうかな？」

なのはが指差したのは普通のファミリーレストランだった。なるほど、あそこならヴィヴィオも俺もなのはも皆が食べられるだろう。

外から見たただだが、まだ並んでないようだった。

素早くレストランに入り、三名という旨を店員に告げると、すぐにテーブルに案内された。

俺の対面になのはが座り、そのひざの上にヴィヴィオが腰を下ろした。

当のヴィヴィオはなのはの膝の上に居ることがよほど嬉しいのか、終始笑顔であった。

注文した料理が来るのも結構早かった。周りを見渡すと、結構な人が席に座っていた。

入り口を見れば、数人の列が出来ている。どうやらかなりタイミングが良かったらしい。

そんなことを思いながら前を見ると、なのはに食べさせてもらってるヴィヴィオが目に入った。

その腕には兎の人形を抱えている。俺が病院に最初にお見舞いに行くときに枕元に置いた物だ。

ヴィヴィオは最近はずっとそれを抱えているような気がする。

それを見ながら、俺はあることを閃いた。なのはの膝に座るヴィヴィオに笑顔を向ける。

当の本人は首を可愛らしく傾げていた。

「なあヴィヴィオ、ぬいぐるみ欲しいか？」

俺の言葉にヴィヴィオが段々と目を輝かせ始めた。

「欲しい!!」

「そうかそうか」

俺は笑顔でヴィヴィオに答える。

すると今は聞こえないはずの声、急に聞こえた。

『親馬鹿ねえ・・・・・・・・・・』

その言葉に俺はぎょつとしてなのはを見た。

当のなのも驚いている。別にハロルドが話したことは構わないのだ。

彼女はなのはが収納魔法で保持しているので、声は聞こえる。

だが俺達が何よりも驚いたのはヴィヴィオが不思議そうな顔をしてなのはを見上げたことだった。

「ヴィ、ヴィヴィオ？今の声聞こえたのか？」

「・・・・・・・・・・うん」

俺の言葉にヴィヴィオは初めは首を傾げていたが、やがて言っている意味を理解したのか、首を縦に振った。

俺は、いや、俺となのはは絶句していた。聞こえるのだ、ハロルドの声が。

ヴィヴィオにもソーディアンマスターの素質があるのだろう。

当のハロルドも驚きで言葉が出ないようだった。

「まじか・・・・・・・・・・」

そう呟きながら、俺は未来のことを考えていた。

なら、俺が前線を退いたとき、そしてヴィヴィオが立派に成長したときにはハロルドを授けよう。

この剣が、彼女を護ってくれるように。ハロルドも、反対はしないだろう。

いささか早急すぎるかもしれない。だが、それを、ハロルドをヴィヴィオに渡すということを、俺は俺自身の夢にした。

「ってことは剣士として育てないと・・・・・・・・・・いやいや、でもなのは魔法も覚えさせたいし・・・・・・・・」

「ル、ルーク？何を言ってるの？」

ふと前を見るとなのはが苦笑いしていた。ヴィヴィオに関しては不思議そうにこちらを眺めている。

どうやら思ったことが声に出てしまっていたらしい。俺は苦笑いをしながら頭をかいた。

「いや、将来ヴィヴィオが成長したらハロルドをあげようと思ってさ。そのために剣も教えようと思ったんだよ。でも父親である俺だけじゃなくて母親であるのはからも何かを伝えて欲しいからさ。そうするとやっぱり魔法だろ？この際は両方がいいかな？」

『いや、アンタ先のこと考えすぎよ。そもそも私がヴィヴィオの剣になるとは認めてないわ』

ハロルドの言葉に俺は意地になった。

いつもなら適当に流すところだが、今回はヴィヴィオが関わっている。

引くわけには行かない。

「でもヴィヴィオにハロルドを使って欲しいんだ」

『まあそれはヴィヴィオが将来私を扱えるぐらいの器量を身に付けていたらね』

「身に着けてるに決まってるんだろ!!」

俺とハロルドの言い合いがヒートアップしていく中で俺はあることに気づいた。

ヴィヴィオが何も言わないのはまだ分かる。だが、どうしてなのは何も言わないのだろうか？

不思議に思ってたのはを見ると、彼女は茹蛸のように顔を真っ赤にしていた。

「え？ど、どうしたなのは？」

俺の言葉になのははゆっくりとこちらを見た。

相変わらずその顔は赤い。

「そ、それってつまり私とルークが・・・・・・・・その・・・・・・
・・夫婦になるってことだよね？・・・・・・・・・・」

へ？

俺は目を見開いた。多分今の俺は間抜けな表情をしているだろう。

そのぐらい衝撃的だったのだ。なのはの言葉は。

夫婦？俺となのはが？どうしてそうなった？そこまで考えてから俺は理解した。

『父親である俺だけじゃなくて母親であるのはからも何かを伝えて欲しいからさ。そうするとやっぱり魔法だろ？』

先程言った言葉がゆつくりと頭の中でリピートされる。

そうだ。俺の中では父親が俺で母親がなのはだと決まってる。

そして剣と魔法両方を教えるということは一緒になのはとヴィヴィオと生活しているということだ。

それはつまり俺となのはが結婚して夫婦――――

そこまで考えてから俺の頭はショートした。顔に尋常じゃないほどの熱が溜まっていくのが分かる。

俺の視界の隅でヴィヴィオが心配そうに見つめているがそんなことを気にしている暇は無かった。

そして、ハロルドはそんな俺に止めを刺した。最大級の攻撃で。

『ルーク。真っ赤になつてるところ悪いけど、あんた滅茶苦茶注目されてるわよ?』

ハロルドの言葉に辺りを見回すと全員がこちらを見ていた。

客だけでなく店員もこちらを見ている。しかも見守るような笑みで何故だ?何故こんなに注目されている?

俺はゆつくりと思考を整理し始めた。そして、答えはすぐにでた。

ハロルドだ。俺はハロルドと言いつつ争ったのだ。他の人には声が聞けないハロルドと、大声で。

その言葉に注目した客や店員は俺達のほうを見たのだ。つまり、

「あ、あの、ひょっとして今の話全部聞いてました?」

やつのことで発した言葉は震えていた。その場に居た客も店員も、一同に頷いた。

その反応に、俺は言葉を失った。見られていたのだ。全部。はじめから最後まで。全部。

俺は真っ赤な顔のまま立ち上がると伝票を左手に持ち、右手でなのはの右腕を掴んだ。

そのまま力任せに引つ張り、立たせる。

なのはの左手にしっかりとヴィヴィオが握られていることを確認すると俺はレジまで走った。

誰も居る筈の無いレジで俺は呼び出しのベルを連打する。

するとすぐに厨房から店員がやってきた。彼は先程の俺となのはのやり取りを見ていないのだろう。

めんどくさそうに厨房の暖簾をくぐっていた。

俺は紙に書かれている金額を一瞥すると、その紙とともに紙幣を叩きつけた。

「お釣りは要らないから!!」

そう叫び、俺はかつて無いほどの速さで腕を動かして扉を開けた。扉が動いたことで、ベルが鳴り響く。その音が止む前に、俺はそこから駆け出していた。

レストランから少し離れたところ。そこで俺達は息を整えていた。ヴィヴィオは走る俺となのはによって宙に浮いていたらしく、楽しそうにはしゃいでいる。

一体どんだけのペースで走ったんだと思うほどの疲労感だった。それはなのも同じようで、彼女も俺と同様に息を整えている。いくら毎日訓練をしてもあの速度の全力疾走は辛かったのだらう。

最近知ったことなのだが、なののは元々運動音痴だったらしい。管理局に入ってから治ったそうだが、ならなおさらだろう。

息を整えてから周りを見回すと、少しはなれたところに眩い明かりを見つけた。

ヴィヴィオもそれに気づいたようで、あつと声を上げていた。走り出したヴィヴィオに声をかけたが、聞こえていないのか彼女は止まらない。

俺となのはは顔を見合わせて微笑むと、彼女を追いかけて駆け出した。

ルークside

俺、なのは、ヴィヴィオの三人は偶然見つけたゲームセンターの中に居た。

正確には入り口付近に置かれている、UFOキャッチャーの前に居る。

その台の前で、ヴィヴィオは真剣な表情でキャッチャーとにらめっこをしていた。

なぜそうなったのかは約10分前に遡る。

ゲームセンターに到着した俺となのは、ヴィヴィオの三人は初めは普通に中を遊びまわろうと思っていたのだ。

だが、ヴィヴィオは入ってから三台目のUFOキャッチャーの中に置いてあるものを見てからそこから目を離さなくなってしまったのだ。

今までのヴィヴィオの狙いから彼女が何をほしいのか、俺にはだいたい分かっていた。

先程から何回も狙っている赤の兎のぬいぐるみだろう。

淡い赤なのでまだまだだが、もう少し赤が濃かったら血に塗れているみたいになりそうだ。

そんな不吉なことを考えながら、俺はふと隣を見た。

隣に立つなのはヴィヴィオが操作するクレーンが赤い兎のぬいぐるみを捉えるたびに嬉しそうに声を上げる。

だが、やがてアームが外れてしまうと彼女はうって変わって残念な声を上げていた。

その様子を可愛いと思ったのは心の中だけにしまっておくでしょう。

そんなことを言ったらなのは頬はまた真っ赤に染まってしまうだろうから。

暫くヴィヴィオを見ていたが、赤いぬいぐるみは絶妙な位置に配置されているらしく、なかなか取ることは出来なかった。

ここはちよつといい姿でも見せるかな、そう思い俺はヴィヴィオの頭に手を乗せる。

「ヴィヴィオ、ここはパパに任せておけ」

俺の自信に満ちた言葉にヴィヴィオは期待の眼差しで俺を見つめる。彼女に代わって台の前に立つと、ヴィヴィオとなのはが応援してくれた。

その二人に微笑むと、俺はヴィヴィオが落せなかったUFOキャッチャーと対峙した。

苦戦しながらもアームの位置などを調整すること約五回。

二つのアームは正確にぬいぐるみの首に入れられる。

そのままぬいぐるみは他のぬいぐるみを押しのけながら浮上した。

その光景はあたかも首吊り自殺のようで気味が悪いが、まあ取れそうなのでよしとしよう。

「うー………」

俺の隣に立つ二人はその様子を固唾を呑んで見守っている。

その目は真剣そのものだ。その二人から視線を外してぬいぐるみに向けると同時に、アームが外れた。

赤い兎はそのままストンと穴に落ちた。ガコンという音を立ててその存在感を示す。

透明の蓋を押しつけてそれを取り出し、ヴィヴィオに差し出した。

「ほら」

俺の手の中にある赤い兎のぬいぐるみを見ながらヴィヴィオは大喜びだ。

その人形を俺の手から掠め取り、大事そうに抱きしめている。

その様子を見ながらUFOキャッチャーに目を移した俺はあることを思った。

あれで良かったのだろうか？台の上には様々な色の兎が所狭しと押し詰められている。

もう一度違うのを取るのは骨が折れるが、ヴィヴィオの笑顔を見るためならば問題は無い。

そう思い、俺はしゃがんでヴィヴィオと視線の高さを合わせた。

「でもそれで良かったのか？他にも色んな色があつたんだぞ？」

「いい」

ヴィヴィオの切り返しはとても素早かった。

その目はこれがほしかったと物語っている。

「このぬいぐるみは………パパと同じ………だからこれでいい」

大切そうに抱きしめるぬいぐるみを見ながら俺は啞然としていた。

そんな、理由だったのだ。淡い赤色が俺を連想させるから、そんな理由。

そんな嬉しくさせてくれるような、理由。

「そっか」

ヴィヴィオに微笑みかけて頭を撫でる。

取って良かった。取れてよかった。そう思っている俺の視界の隅に、
なのはが映った。

彼女は羨ましそうにヴィヴィオが抱きしめている人形を見ている。
やれやれとため息をつくど、俺は未だに視線をヴィヴィオの腕の中
に向け続けるなのはに声をかけた。

「欲しいか？ぬいぐるみ」

「え！？い、いや……………私は……………」

「いいから、どれがいい？」

俺の言葉になのはしばらく返答に躊躇っていたが、やがて離れた
ところにある台を指差した。

「あそこにある、耳の赤い猫のぬいぐるみ」

小さな声でそう呟いたなのはの頭を撫でると、俺はその台に近づい
た。

その台はあまり多くのぬいぐるみが入っているわけではなかった。

そこに無造作に置かれた二体の猫のぬいぐるみの内の一つに照準を
あわせる。

正面から、はたまた横側から覗き込み、キャッチャーの位置を合わ
せる。

そついったことを二回ほど繰り返すと、アームは正確にぬいぐるみ
を掴んだ。

そしてそのまま落ちることも無く、穴の真上でアームは開き、ぬい
ぐるみは穴にダイブした。

それを取り出して、いつの間にか横に立っていたのはに手渡す。
ヴィヴィオにあげたぬいぐるみと殆ど同じ大きさだったが、彼女はそれを大事そうに抱きしめてくれた。

「あ、ありがとう・・・・・・・・・・・・・・・・」

「いいって」

真っ赤になりながら恥ずかしげに呟いたのはに俺は笑顔で返した。

しばらくゲームセンターの中で遊ぶことになった。

シューティングのゲームではなのはが圧勝だった。

普段使う魔法が近いからだろうか？ほぼ正確に敵を撃っていた気がする。

その他にもレーシングゲームや音楽ゲームなど様々なものをプレイした。

二人は終始楽しそうで、俺はそんな二人の笑顔を見れるだけで気持ち晴れた。

「さて、そろそろ帰るか。もう遅い時間だしな」

俺の言葉になのはは自身がつけていた腕時計を見る。

時刻は既に22時を回っている。流石にヴィヴィオも眠くなってきたのかボーっとしていた。

「そうだね。じゃあそろそろ帰ろうかヴィヴィオ」

「うん！！」

もう十分に楽しんだからなのか、ヴィヴィオは笑顔でそう答えると

なのはの手を握った。

そして俺に空いている手を差し伸べてくる。握って、ということなのだろう。

微笑みながら手を伸ばす。ぎゅっとヴィヴィオの手を握ると、彼女は嬉しそうに微笑んだ。

なんだこれは……………

ゲームセンターの入り口、来たときには目も向けなかったUFOキヤッチャーの台を見て俺は絶句していた。

そこに横たわるのは、青い毛並みに金のリングをフラフープのようにして手に持つ、動物だった。

いや、そもそもそれが動物と呼べる代物なのか俺にはさっぱり分からない。

確か向こうの世界では聖獣なんていう大層な括りにされていたが、そんなものは認めない。

あいつがそんな大そうなものであるはずが無いのだ。ただ煩いだけのあいつが。

言葉を失ったままそれを見つめていると横からなのはが首だけをひよっこり出してそれを見た。

「どうしたのルーク？これが気になるの？」

ええ、そりゃあもう。心の中でそう返す。

ちなみにヴィヴィオは最初はそれを見ていたがあまり興味が無いらしく早く行こうよと言っている。

なのははその上に張られているポスターに気づき、読み上げた。

「青い聖獣だつて。私こんなの初めて知ったよ。少しだけ動くらしいね」

まあ俺が知ってるのは動くだけじゃなく火を噴いたり岩を砕いたり飛んだりするのだが……

そんなことを思いながら俺は視線を外した。

そつだ、こんなものがあるはず無いのだ。これは幻か何かで、今度来たときには消えているに違いない。

そんなことを思いながら、俺は二人の手を引いてゲームセンターを後にした。

先程見つけてしまったチーグルの人形、いやミュウのことは忘れるとしよう。

絶対に忘れよう。そう自分に言い聞かせながら。

「あ、悪い、俺ちょっとはやての部屋に用事があるから先に部屋に戻っててくれないか？」

六課への帰還後、その入り口で俺は二人にそう告げた。

二人は振り返ると不思議そうに俺を見つめている。

その視線から逃げるように、俺は走り去った。はやての部屋に向かつて。

はやての部屋に着いた俺はブザーを鳴らし、中に入れてもらう。中ではぐったりとしたはやてが机に伏せていた。

「は、はやて？どうしたんだ？」

「ああ、ルーク君か・・・・・・・・・・・・・・・・仕事が多くてなあ・・・・・・・・」

はやての言葉を聞いてから、俺は首を傾げた。

確かはやての仕事量はこの前となんら変わってないはずである。

むしろ俺との勉強時間がなくなったことで時間に余裕があるのではないだろうか？

そんなことを思っていると、後ろで扉がスライドする音が響いた。

「おまたせルーク、それで話って何かな？」

振り返ると、そこには金の髪を靡かせたフェイトが立っていた。

その本人ははやてがぐったりとしているのを見ると、目を見開いた。

「ど、どうしたのははやて？」

「仕事が多くてなあ・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺のときと同じように返事を返し、はやては顔を置く位置を変えた。どうやら姿勢を直す気は更々無いらしい。まあそこまで気にしないので構わないのだが・・・・・・・・

そのままでは埒が明かないので俺は二人に話すことにした。

「はやて、フェイト、お願いがあるんだ。まずはフェイト、俺と部屋を換わってほしい。そしてはやてにはそれを認めてほしいんだ。頼む――！」

俺はそう告げると頭を下げた。

音ではやてが起き上がったのが分かった。

「まあそうやるうな」

はやての言葉に、俺は顔を上げる。はやては苦笑いをしていた。

「ヴィヴィオのこともあるし、ええよ。なのはちゃんと仲良くやり」

「うん、前にも言ったけど私も構わないよ」

はやてもフェイトも思った以上に快く快諾してくれた。

いいのだろうか、こんなに簡単に決まってしまうて………

だが、二人はいいと言ったのだ。フェイトに関しては換わってくれるということなのだ。

それに礼を言わないわけにはいかない。

「ありがとう、はやて、フェイト」

俺の言葉に二人は構わないと微笑んでくれた。

本当にいい友達を得た。俺はそう思い、微笑んでいた。

自室に戻ってから俺は部屋の荷物を片付けていた。

話し合いの結果、フェイトと部屋を入れ替わるのは明日になった。

そのため、今日のうちに部屋の整理をする必要があるのだ。

それが部屋を譲ってくれたフェイトへのせめてもの礼儀だろう。

一通り片付け終わった段ボール箱を見ながら、俺はため息をついた。やっと終わった。そこまで量は多くなかったが、片付けというのは大変だ。

同時に部屋の掃除もやったのだから当然だろう。

そんなことを思っていると、ふと俺は窓を通して星を見た。

なぜ俺がそうしたのか俺にはまったく分からない。

しかし、しばらくしてから俺はゆっくりとそこに近づいて窓を開けた。

視界いっぱいには星空が敷き詰められる。雲ひとつ無い夜空はとても綺麗だった。

「そつえば、言ってたっけな」

前にハロルドは言っていた。この星空は続いていると。

俺の元居た世界、オールドラントにも繋がっていると、そう言ったのだ。

「ティアも……………この星空を見てるのかな……………」

もう戻れない世界で俺を待ち続けるティアのことを思うと心が痛んだ。

俺はもうオールドドラントには戻れないだろう。戻れたとしても、戻らない。

戻ろうという意志が無いのだ、戻れるわけがない。

だが、栗色の髪の彼女は待ち続けるのだろうか？俺のことを。

そう考えてから俺は馬鹿げていると首を横に振った。

そんなこと、あるわけないのだ。何年も何年も戻ってこない人を待ってるわけが無い。

何の音沙汰も無いのだ、死んだと考えるに決まってる。

『ずっと待ってるから！ずっと！……ずっと……ずっと……』

□

不意に泣きそうなティアの顔が頭をよぎった。

分かってる。待ってるに決まってる。ティアはずっと俺を待ってるだろう。

自惚れとかそんなものではないのだ。そう、感じるのだ。

俺はそこまで考えてから願った。会いたい。ティアに。

それは恋焦がれているからではない。もう戻ってこれないことを伝えるために。

俺の居場所は、生きる意味はこちらにあることを告げるために、俺はティアに会いたかった。

それは、残酷な願い。俺を諦めてくれと告げる、残酷な場面。

だがそれでも俺はそうしたかった。例え罵られても、俺はなのはと共に居たい。

なのはとヴィヴィオの隣。俺の恋人と義娘の居る場所が俺の居場所だから。

それが、それを護ることが俺の生まれた意味だから。

だから俺は、どんな侮蔑でも罵りでも受けよう。どんな恨みでも買

おう。

最低と罵られても、悪魔と罵られても、俺はこの選択を貫く。
どこまでも、貫き通してみせる。

見上げた夜空を背景にして、ふとティアが微笑んだ気がした。

それが俺の身勝手な願望から来るものなのか、それとも本当にティアが笑ったからなのかは分からない。

それを確かめることなど、俺には出来ないのだから。

眩い星たちが煌く中で、一つの星が流れて消えた。

ルークside

眩しい。俺は不快感を顕にしながら目をゆつくりと開いた。まだ慣れていないのか、強烈な光で目の奥が痛くなる。

その日光から逃げるために体を捻ると、台の上におかれた時計が目に入った。

時刻はまだ早い。だが、起きても構わない時間だ。なにより先程の日光のせいで簡単には寝られそうにない。

足を振り上げて、一気に振り下ろす。その反動で上半身はベッドから飛び上がった。

フェイトに起こしてもらえない日はこのようにして起床している。こうするといきなり移動する視界によって目が覚めるのだ。

ベッドから降りてから揺れる視界を暫く堪え、それが治まると俺はクローゼットに手をかけた。

そしてそれを開けてから一着しか掛かっていない服を見て気づいた。

「そうか、今日はフェイトと部屋を交代するんだったな」

頭を掻きながら掛けられた服を取り出す。それをベッドに放り投げると俺は着替えに取り掛かった。

向こうでは既にまとめられた荷物を邪魔だと思っているところだろうか。

そんなことを思いながら俺はいつもの服に着替えた。

正確にはそもそも荷物が出来ていなかった。

邪魔になる以前にそれはたった今作られているものだったのだ。
なのはの部屋に入った俺は絶句した。フェイトが荷物をまとめている隣でなのはが右往左往しているからだ。

一体何があったのだろうか？慌てているのはなのはだけでフェイトは微笑んでいるだけだ。

ヴィヴィオに至っては椅子に座りながら不思議そうにその様子を眺めている。

ふと、そのヴィヴィオが俺が入ってきたことに気づいた。

「パパ！！おはよう！！」

その言葉で俺の存在に気づいたのか、なのはは助けを求めるような目で俺を見てきた。

「ルーク！！どうしよう！！フェイトちゃんが出てくって……」

・わ、私何かしちゃったのかな？」

ヴィヴィオに笑顔で挨拶しながら言われた言葉に俺は目を丸くした。
ぱつとフェイトのほうを見ると、当の本人は笑いを堪えている。
どうやらなのはに俺と部屋を換えることを告げていないようだ。
その様子では荷物を纏め始めたときからなのはを無視しているのだ。

ろっ。

フェイトは俺の視線に気づくと微笑んで振り返った。
ようやく振り返ってくれた親友をなのはは恐る恐る見つめた。

「なのは、いじわるしてごめんね。でもルークが来たら言おうと思
って」

そこでフェイトは一旦黙った。その様子に、なのはは首を傾げてい
る。

「私とルークは部屋を交換することにしました!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・へ？」

満面の笑みで告げられた言葉に、なのははきょとした顔をした。
俺は苦笑いをしながらなのはに言った。

「実は昨日フェイトとはやてに頼んだんだよ。で、部屋が代わるこ
とになったってわけ」

俺の言葉になのははむくれるとフェイトを睨み付けた。

「ひどいよフェイトちゃん!! だったらそう言ってくればいいの
に!! 何回も無視するから怒らせちゃったかと思ったじゃない!!」

「ご、ごめんなのは・・・・・・・・びっくりさせようと思って・
・・・・・・・・」

なのはの剣幕にフェイトはたじたじになった。
確かに驚かせようとしたのはわかるがやりすぎな気がする。

まあなのはもそこまで怒ってはいないようなので大丈夫だろう。

そのまま四人で朝食を食べた。

ちなみに話し合いの結果フェイトが明日からなのはの部屋に朝来ることになった。

「さて、それじゃあ行くか」

朝食を食べ終え、食器を片付けると俺は二人にそう告げた。

ヴィヴィオは俺が彼女にあげたものとなのはにあげた人形を大切に抱きしめている。

「行ってらっしゃい。ルークパパ、なのはママ」

ゲームセンターで取ってあげた人形があるから、寂しくは無いようだ。

アイナさんも居ることだし、とりあえずの関門はクリアしたようだ。ヴィヴィオもいい子にしていればいいことがあると理解したということだろうか？

そんなことを思いながら俺達は訓練に向かった。

「ふう、今日も疲れたな」

『なんかおじさんくさいセリフね』

訓練終了後、俺は部屋に戻っていた。

最近のエリオは成長が凄まじく、攻撃も熾烈だ。

しかも、最近何かあったのか強い意志を持った目をしている。

まるでどうしても負けたくない敵がいるかのように。

そのため訓練もかなり激しいものになった。今のエリオならシグナムと対等に戦えるのではないかと思っただくらいだ。

そんなことを思いながら俺は部屋の前で立ち止まり、あることに気づいた。

「おっと、こっちは俺の部屋じゃなかった」

かつての俺の部屋の前で、扉のボタンに伸びた手を俺は止めた。

今日の朝の段階でこの部屋は俺の部屋じゃなくなったのだ。

そのことを再度認識して俺は歩みを進めた。

その隣にある、俺となのはの部屋へと。

ボタンを押して扉を開くと、ヴィヴィオがすぐに顔を上げるのが見えた。

みるみるうちに彼女は笑顔になり、俺のところへ走ってくる。

それを受け止めると、俺は微笑んだ。

「ただいまヴィヴィオ」

「パパおかえりなさい」

頭を撫でると、ヴィヴィオはえへへと笑った。

その様子を見ながらヴィヴィオを引き剥がすと、後で遊んでやるからなと告げて俺はシャワーに向かった。

脱衣所で服を脱いで洗濯機に放り込む。

ボタンを押すとガタンガタンと揺れる音がした。

これで今日の夜には乾くだろう。俺自身も汗をかいたのでシャワーを浴びることにした。

今日は結構暑かったので、ぬるめの湯を浴びた。汗が、流れていく。気持ちよさを感じながら、俺はフードのことを考えていた。

近いうちに、また戦うことになる。そんな確信が、俺の中にはあった。

そしてそのとき、俺は勝てるだろうか？あのフードに。

「強く・・・・・・・・・・・・・・・・ならならいとな・・・・・・・・・・・・・・・・」

「

不意に俺は呟いていた。シャワーを止めて、目をつぶる。

あのとき、あのフードはこちらの実力を探っていた。

つまり、本気ではなかった。俺の攻撃を容易くかわし、強力な晶術を放つ。

もし本気で戦えば、俺が勝つ確率は限りなくゼロに近い。

だからこそ、俺は強くならなくてはならない。

不意に、扉が開く音がした。ぎよっとしてそちらを見ると、一糸纏

わぬなのはが其処には立っていた。

そのままの状態で静止すること約5秒。

「っ！」

「う、ゴメン……」

俺が顔を背けると、なのはが横に掛かっていたバスタオルを体に巻きつけるのはほぼ同時だった。

今さっきまで俺はぬるま湯でシャワーを浴びていたのだ。ぬるま湯では湯気が立つわけは無く、つまり……。

そこまで考えてから俺は思考を停止した。これ以上考えたら卒倒しそうだ。

なのはは依然として顔を赤らめたまま目線をそらしている。

普通なら閉めるところなのに、どうして扉を閉めないのだろうか？

「……………み、見た？」

なのははごによごによと小さな声で呟いた。

かろうじて聞き取ることが出来た俺は物凄い勢いで首を横に振った。それこそ首が取れてしまうのではないかと思うくらいに。

「み、見てな……」

そこまで言いかけてから、俺は言葉を止めた。

見たのは事実だ。なのはには悪いが、完璧に見た。

目を閉じれば思い出せる自信さえある。

だが、嘘をつくのは正直気が引けた。

俺はゆっくりと深呼吸をしてから言葉を紡いだ。

「ごめん……………その……………見た……………
……………」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の言葉でなのは押し黙ってしまった。
まずいことをしただろうか？だが、嘘をつきたくないのは事実であ
ったし・・・・・・・・

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ、あのさ、私達って、付き合
ってるんだよね？」

「え？あ、ああ・・・・・・・・」

突然言われた言葉に俺はなんとか答えた。

「じゃ、じゃあ・・・・・・・・一緒に風呂入っても・・
・・・・・・・・いいよね？」

衝撃的な言葉に俺はばつとなのはを見た。

そしてなのは扇情的な姿を見て再び目をそらす。

正直刺激が俺には強すぎた。

「ダメ？」

なのはの言葉が俺の心を刺激していく。

ダメではない。ただ、俺の理性が持たないかもしれないのだ。

それでも、なのはは返事を今か今かと待ち望んでいるわけで・・
・・

「だ、ダメじゃない・・・・・・・・」

俺は小さく呟いた。

そのまま立ち上がり、あらかじめ入れていた湯船に浸かる。
なのはは先程まで俺が座っていた椅子に座り、シャワーを浴び始めた。

それを見ないように、俺は彼女に背を向ける。落ち着かない。
最愛の人がすぐ傍で裸同然でシャワーを浴びているのだ。
落ち着かないほうがおかしいだろう。

しばらくしてシャワーの音が止むと、チャプンと水の音がした。

背中にぬくもりが当てられる。すぐにそれがなのはの背中であると俺は理解した。

バスタオル越しでも、彼女の体温がしっかりと感じられる。

「ルーク・・・・・・・・その・・・・・・・・こっちを向いて・・・
・・・」

「え？・・・・・・・・ええ！？」

俺は思わず大声を上げてしまった。

顔が赤くなっていくのが分かる。鼓動が治まらない。

俺はゆっくりと、振り向いた。白い肩が、俺の視界に映った。

その肩が、やけに弱弱しく見えて、俺は泣きそうになった。

彼女は、ただの少女なのだ。どれだけ空を飛べても、どれだけ強力な攻撃が来ても、どれだけ強くても、普通の少女なのだ。

粉雪のように白い肌は、今にも消えそうだった。

いつもなら美しいと感じる亜麻色の髪さえ、俺の中の嫌な予感を増大させた。

ずっと、俺は腕をなのはの前に回した。

そのままゆっくりと彼女を抱きしめる。

消えてしまわないように、失わないように、強く強く抱きしめた。

なのは手がゆっくりと俺の腕に触れる。しかしなのは暫くしてその手を離れた。
彼女がゆっくりと目を閉じたのを、感じた。それに合わせて俺も目を閉じる。
視界が真っ暗になっても、腕の中にあるぬくもりだけが俺を安心させてくれた。
お湯の使った湯船の中で、俺達は長い間そっしていた。

シャワー室から出た俺はヴィヴィオを膝の上に乗せながら赤面していた。
ヴィヴィオはなのはを止めなかったらい。ハロルドに聞いたところ彼女が話しかける前に入ってしまったそうだ。
ヴィヴィオの話し相手としてハロルドをリビングに置いてったことが仇になったというわけだ。
そんなことを思っていると、扉がゆっくりと開き、中からなのはが出てきた。
彼女は俺を一瞥すると、顔を赤らめた。

『まったく馬鹿ね。止めたのに聞きもしないんだから』

「・・・・・・・・・・・・・・・・だって汗かいててシャワー浴びたかったんだもん・・・・・・・・・・」

ハロルドの言葉に、なのははむくれた。

剣の中にいるハロルドが、苦笑いしているように俺には思えた。

「はぁ・・・・・・・・・・・・・・・・まあいまさら何を言ってもしょうがないんだけど・・・・・・・・・・ルーク、ヴィヴィオ、食堂に行こっか」

「うん！行く！」

なのはの言葉にヴィヴィオは目を輝かせ、俺の膝の上から勢い良く立ち上がった。

俺は微笑みながら、その場から立ち上がった。

「うう……」

困ったようにそう呟いたのはヴィヴィオである。

彼女は今、皿の上に乗った緑色の固体と睨めっこをしている。その隣では、なのはがヴィヴィオを見つめていた。

「ダメだよヴィヴィオ、好き嫌いせずに食べなきゃ」

「苦いの嫌い……」

二人のやり取りに、対面に座るはやたとフェイトの二人は微笑んだ。

「でもちゃんと食べないとなのはママみたいに綺麗になれないよ？」

「そつやなあ、好き嫌いはいしちゃアカンなあ？ ルーク君？」

はやとの言葉に俺はフォークを止めた。

固まったままはやてを見上げると、彼女は意地悪な笑みを浮かべていた。

完全に油断していた。まさかここで言われるとは。

俺の態度がおかしいことに気づいたフェイトは皿を見て苦笑いした。

「ニンジン……嫌いなんだ……」

「……生まれつき合わなくて……」

隣に座るヴィヴィオ、なのはも俺のことを見てくる。

「ルーク、ヴィヴィオの前でルークが好き嫌いしちゃだめだよ。」

「・・・・・・・・・・ですよね」

俺は小さく頷くとフォークを忌々しい橙の直方体に刺し、ゆっくりと口に運んだ。

独特の、苦さともなんともいえない味が口の中に広がる。

数回咀嚼してから、俺はゆっくりとそれを飲み込んだ。

いつ食べてもまったく美味しいとは感じられない味だった。

やはりニンジンなんてこの世から無くなればいい。

「ほら、ルークパパも食べたんだからヴィヴィオも食べよ？」

「・・・・・・・・・・うん」

そんな考えもなのは笑顔が見られるならまあいいかと思った俺は悪くないはずだ。

「・・・・・・・・・・なんかルークさんが子供のように見えます」

「まあルークは精神は七歳だからな」

そんな言葉が聞こえてきたが、俺は無視した。

なのはの部屋。俺の部屋にもなったその部屋で、俺は寝巻きを着てハロルドと会話をしていた。他愛の無い会話をしていると、隣の部屋からなのはとヴィヴィオがパジャマ姿で現れた。

「パパ、今日も一緒に寝よう？」

ベッドは一つしかないのに、ヴィヴィオはそう聞いてきた。俺は微笑んでいいよと答えると、ヴィヴィオの頭を撫でた。彼女は嬉しそうに微笑むと、先にベッドに入り、真ん中まで移動した。

右からなのはが、左から俺がゆつくりと布団に入る。

先に入ったなのはヴィヴィオに近づくとゆつくりとヴィヴィオを抱きしめた。

ヴィヴィオも嬉しそうに微笑んでいる。

後から聞いた話だが、ヴィヴィオはなのはや俺を求めているらしい。少し布団を出るだけで寝ながらも俺達を探していたようだ。

そんなことを思いながら、俺は腕を伸ばした。

そのままゆつくりとなのはの背中に回した。

俺の腕の中に、ヴィヴィオとなのはがすっぽり収まった。

「・・・・・・・・・・暖かいね」

「暖かい」

不意に、なのはとヴィヴィオがそう言った。

その言葉に微笑むと、俺はゆっくりと意識を闇に沈め始めた。
暖かさを感じながら、俺は眠りについた。

このとき、俺は幸せの絶頂にいた。
だが、その幸せがすぐに崩されようとは、思いもしなかったのである。

ルークside

「・・・・・・・・・・・・・・・・公開意見陳述会か」

夕日が差し込むなのはの部屋。そのベッドに座りながら、俺は呟いていた。

同じベッドにはヴィヴィオが安らかな寝息を立てている。

今日六課に隊長、副隊長、およびフォワードは殆どいない。

居るとしてもシャルとザフィーラぐらいだ。はやてを初めとする面々は地上本部で行われる公開意見陳述会に参加していた。

正確には警備なのだが、それでも六課に人が居ないことに変わりはない。

『今攻められたら六課は壊滅ね』

「不吉なこと言うなよ・・・・・・・・・・・・・・・・」

ハロルドの言葉に、俺は苦笑いした。

確かに攻められればかなりまずい状況にあるが、それでも大丈夫だろう。

そんな俺の考えがどれだけ甘かったのか、後に俺はその身をもって実感することになる。

なのはside

時空管理局地上本部。様々なセキュリティが張り巡らされたその建物で、なのは窓から外を眺めながら物思いに耽っていた。その胸には本来ぶら下がってるはずのレイジングハートは存在していない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・太陽と月と・・・・・・・・・・星」

誰にも聞き取れないくらいの小声で、なのは呟いた。

考えているのは、予言のこと。それも最後の二行のことであった。

カリムから予言を聞いてから、頭から離れないのだ。

何か、言葉では言い表せないがとても嫌な予感がする。

何かよくないことが起こる、そんな予感が。

「おいなのは。聞いてんのか？」

「え？あ、ごめんヴィータちゃん。何？」

物思いに耽っていたために、なのはヴィータからの念話に気づかなかった。

正直に謝ると、ヴィータは呆れたようにため息をついた。

「アタシの声が聞こえなくなるくらいルークのことが好きなのは分

かるけど、せめて任務ぐらいはちゃんとこなせよ』

『ち、違うよ！！ルークのことばかり考えてたわけじゃないよ！！』

ヴィータの言葉になのは思わず大声でそう叫んだ。

勿論心の中で思ったのだが、声を出さなかっただけでも褒めてあげたいくらいだ。

一息ついてから、なのはゆっくりと深呼吸して気持ちを落ち着かせた。

『で？なにかな？』

『………何事も無かったかのように聞いてもう一度説明させてんじゃねえぞ………まあ、いいけど………要するに、狙いが分からねえ』

『地上本部が狙われる理由？』

『ああ、正直まったく分かんねえ。スカリエッティ一味だっけか？仮にそいつらが地上本部を狙ったとして何かメリットがあるのか？ないだろ』

『………兵器開発なら態々リスクが伴う地上本部じゃなくてもいいしね』

ヴィータとの会話の中で、なのはは別のことを考えていた。

はやての中では本日の公開意見陳述会にルークを参加させるつもりは元々無かったらしい。

地上本部の上層部が集まる中に態々六課の中でも異常中の異常のルークを連れて行く訳には行かないからである。

だが、それとは別の意味でなのははやてにルークを連れて行くことをやめさせた。

それは先程ヴィータと交わしたことが大いに関係してくる。

要するに不確定要素が多すぎるのだ。その中でルークを連れてくるのは気が引けたということだろう。

だが、なのはからすればそれだけではない。予言の最後、その部分が気になってからその部分がなぜかルークと結びつくのだ。

ルークを危険に晒したくないと思ってるのははやてだけではない。

むしろ一番そう思っているのは恋人であるなのではある。

だからこそ、なのははルークを予言が関係しそうな場所から極力遠ざけることを選択したのである。

『・・・・・・・・・・なのは、何か気になることでもあるのか？』

『え？な、なんでもないよ？』

しばらく黙ったなのはに違和感を感じたのか、ヴィータはそう聞いてきた。

なのははそれになんでもないと返すと別れを告げて念話を切った。

例えなのはの中で確信めいたものがあつたとしてもそれはなのはの中だけである。

それだけでルークのことをヴィータ達に相談することは出来なかった。

だが、なのははこのときヴィータ達に相談しなかったことを後悔する。

いや、だが仮に相談していたとしても、それは避けられなかったことなのかもしれない。

ルーク side

日もすっかり落ちて暗くなった頃、俺はモニターでグリフィスと会話をしていた。

「今のところ何も無いのか？」

『ええ、一応警戒はしていましたが、特に何もありません。公開意見陳述会もそろそろ終わりといったところですし……』

公開意見陳述会は何の問題もなく終了しそうだが、それでは予言は外れたということになる。勿論、今回が外れだけで次回があるかもしれないのだが。

俺はグリフィスにありがとうと告げるとモニターを切った。

「何も無い……か。ならこの妙な胸騒ぎは何なんだ？」

俺の言葉に答えるものは、誰も居なかった。

ふと振り向くと、ヴィヴィオが安らかに眠っているのが目に入った。微笑み、頬を撫でてあげると、気持ち良さそうに彼女は身じろいだ。

鈍い明かりが点灯する部屋。その部屋で一組の男女はモニターを見つめていた。

女性のほうは鍵盤のようなものを展開し、男のほうは椅子にじっと座っている。

しばらく鍵盤のキーのようなものを操作してから、女性は振り向いた。

「よろしいのですかドクター、戦力の割り方は」

「ああ、それでいい。むしろ六課のほうに裂く人数が少ないくらいだよ」

女性の言葉に、椅子に座る男は笑った。

それは、今から始まることが楽しくてしょうがないというような、
笑み。

狂ったように歪んだ、笑顔だった。

「ジョーカーは公開意見陳述会には来ないよ。六課のボスが連れて
行くわけが無い。だからこの布陣でいいのさ」

モニターを見て男は満足げに微笑んだ。

なのはside

建物が揺れ、照明が次々と落ちる。突然の出来事に、あちこちから
悲鳴が上がった。

なのはは素早くはやてとフェイトの元に移動すると、お互いに頷き
あった。

「始まったね。地上本部への攻撃」

「まさか本気でやってくとは思わなかったけどな……………」

地上本部を狙ってもスカリエッティ一味になんのメリットも無いことははやても気づいていた。
その発言になのはは考えるそぶりをする。

「じゃあ狙いは何なんだろう？本局？」

「流石にそれは無いんじゃないかな？」

外で様々な爆発音が響く中で、三人はいつものように話し合っていた。
流石に肝が据わっているといったところだろうか。貫禄すら感じさせる。

「スカリエッティの狙いはレリックの筈だから……………」

フェイトの言葉でなのはの中にある考えが生まれた。
ゆつくりと、その言葉を口にする。

「ひょっとしたら……………私達は予言を重視しすぎたんじゃないかな？」

なのはの言葉に残りの二人は意味が分からないといった表情をした。

「地上本部を制圧するのはそうだけど、それは多分過程なんじゃ……………」

「ちょ、ちょい待つてな。考えるんや。なにか、なにか見落としてる気がするんや……あとして出てきそうなんやけど……」

なのはの言葉にはやては頭を抱える。必死で頭を回転させているのか、その表情は真剣そのものだ。
ふと、フェイトが何かに気づいたようにポツリと呟いた。

「……ルークから聞いたんだけど、ヘリの護送中に追いかけた敵の一人が、ルークのことをジョーカーって呼んでたらしいよ？」

何かに気づいたように、はやては顔を上げた。
フェイトはゆつくりと頷く。

「12人相手にしても勝てる戦力を持つてるって。そう言ってた」

「つまり、スカリエッティの狙いはルーク君ってことかいな!？」

はやての言葉になのはは悔しそうに唇をかみ締めた。

無駄だったのだ。予言から遠ざけるためにルークを隔離しても、無駄だった。

予言はルークを中心に動こうとしているのだから。

なのはは顔を上げるとまっすぐな目で二人を見つめた。

「……至急、六課に戻ってもいいかな？」

なのはの言葉に、フェイトとはやては微笑む。

「当然だよ」

「旦那支えるんは妻の役目やからなあ。ほなフェイトちゃん、途中でまで同行してやってや」

「うん」

「はやてちゃん、フェイトちゃん……………ありがとう」

二人の厚意に涙ぐみながらそう告げると、はやては得意げに笑った。

「ええってええって、その代わり子供が生まれたら名付け親にしてみらうで？」

「あ！！ずるいよはやて！！」

もう子供の話をしている二人の親友に苦笑いするしかないのではあった。

轟音を立てながら、重力にしたがってなのはとフェイトは下降していた。

音は手のひらに作った魔力の膜とエレベーターの縄がこすれる音である。

「なのは」

ふと、上から声が聞こえてなのははフェイトを見上げた。轟音が響いているというのに、彼女の声はよく聞こえた。

「六課に行ったらすぐにヴィヴィオを抱きしめてあげて。ルークは戦闘に出ちゃって怖い思いをすると思うから」

「うん」

親友の言葉にしっかりとそう答え、なのはは物凄いスピードで降下して行った。

途中で出会ったフォワード陣からデバイスを貰い、それを首にかけてなのはとフェイトは本部を飛び出した。

すぐに六課に向かうためフォワード陣にはこちらを任せることにしている。

目の前に広がる海を見据えて、なのはとフェイトは一瞬だが、止まった。

ここから進めば、敵に行く手を塞がれる可能性がある。

「フェイトちゃん……………行こう」

「うん、何が待ってても関係ないよ。行こう、六課へ」

なら、それすら蹴破るだけだ。

思いを胸に二人は空へと飛び立った。

ルーク side

「ダメです。システムの殆どがダウンです!!」

六課のコントロールルームはざわついていた。一人一人に、焦りの色が見られる。

俺が見つめる先には、激戦を繰り広げるシャマルとザフィーラ。しかし、その二人をもつてしても、戦況は圧倒的だった。

俺の後ろでは、ヴィヴィオが不安げに俺の服を掴んでいる。

俺は意を決してグリフィスに話しかけた。

「グリフィス、もういい、俺が出るよ」

俺の言葉にグリフィスは顔を歪めて首を横に振った。

「ダメです。ルークさんだけは出すなと部隊長から……………」

「

「でも、どうするのが最善か、分かるよな？」

「……………」

俺の言葉に、グリフィスは辛そうに俯いた。

彼も分かっているのだ。この状態で戦況をひっくり返すには、もうこの手しかないことを。

「……………僕は、最低です。さっきから最低な考えしか頭に浮かばない」

「それでいいんだ。指揮官ってのは、そういうものなんだよ」

「ルークさん……………」

グリフィスがゆつくりと顔を上げた。その瞳は潤んでいる。

彼からすれば俺に戦ってくれと頼むのは辛いことなのだろう。

一般人である俺に戦いを強制することなど、すべきことではないのだから。

「……………お願いしますルークさん。六課のために、出てください」

ゆつくりと発せられたその言葉は、あまりにも痛々しかった。

コントロールルームに居る全員が、一斉に振り向いた。

全員が、俺を真剣な表情で見つめていた。

「任せろ」

俺は、はつきりとそう言った。

その声に、グリフィスの肩が揺れるのが分かる。拳を強く握り締め、それを机に叩きつけた。

「僕は……………無力だ。ルークさんに戦闘を強制させなければならいなんて……………」

俺はゆつくりとグリフィスの肩に手を置いた。

ゆつくりと、彼が顔を上げる。

「大丈夫だ。守ってみせる。全部……………だから、これが終わったら街に行って飯でも食いに行こう。勿論皆もな!!」

俺の言葉に、全員があっけからんとした顔をした。
俺は一人一人の顔を見つめると、微笑んだ。

「だから、行ってくるよ。帰ってくるために、戦ってくる」

俺は振り返り、アイナさんが持ってきていたハロルドを手にとると腰にさした。

後ろで、グリフィスが敬礼するのが分かった。
それに倣って、全員がそうすることも。

「行つてらっしゃい。ルークさん」

『行つてらっしゃい！！』

それは異様な光景だった。ただの囑託魔導士に、敬礼をする局員達だが、それでも、彼らはそうせざるを得なかった。

俺はヴィヴィオをアイナさんに預けると、その頭を撫でた。
ちよつと行ってくるな、そう微笑み、まっすぐに扉を見つめる。
ヴィヴィオは何も言わなかったが、瞳が物語っていた。
帰ってくるのを待っている、と。

「行ってくる」

俺はその場の全員にそう告げると扉を開けた。
俺の姿が見えなくなるまで、その場のアイナさんとヴィヴィオ以外は、ずっと敬礼をしていた。

『随分とカッコつけたじゃない』

「カッコつけたんじゃない。本当にカッコいいところを見せ付けるんだ」

俺はそうハロルドに告げるとロビーを飛び出した。

星空に夜空が広がる。そしてそれを邪魔するように浮遊する多数のガジェットも。

「邪魔だな・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺は小さく呟いた。

目の前で戦うシャマルとザフィーラが振り返った。

敵の女性は目を見開いた。

俺は剣を抜き放ち、ゆっくりと歩み始める。

「星が見えない」

ザフィーラとシャマルの前に行き、剣を向ける。

そのまま目で二人に合図した。離れていると。

二人はしぶしぶ頷くと、数歩下がった。

それが俺の攻撃があたらない範囲まで進んだことを確認してから再び視線を敵に向ける。

俺の睨みが効いてるからか、あるいは情報操作のおかげか、女性の顔色は悪い。

「随分好き勝手やってくれたな。覚悟しろよ？」

夜天いっぱい広がる一つの星が、静かに流れた。

ルークside

突きつけられた異形の刀身に女性は戦慄している。

空に浮かぶ多数のガジェットも、様子を見ているだけで襲い掛かっ
てはこない。

「ジョーカー・・・・・・・・・・」

震える体を必死で堪えながら、女性は声を絞り出した。

胸には？の数字が刻まれている。

その様子を見ながら、俺は剣を背中に回して振り上げた。

黒い異形の刀身が、紅のブレードを弾く。

そのまま地面を蹴り、俺は襲撃者に肉薄した。ありえない速度で剣
を振るう。

襲撃者はそれを何とか避けたが、僅かにダメージを負った。

「まさか私のツインブレイズを防ぐなんて」

襲撃してきたのも女性だった。先程から佇んでいる女性と同じよう
な服装をしている。

だが胸には？と刻まれていた。女性は剣を構えなおし、俺の様子
を伺う。

「オットー、援護してくれ」

「了解」

女性の言葉にオットーと呼ばれた女性が答えた。

先程から佇んでいる女性の名前だろう。彼女は手のひらを俺に向けて緑の球体を作る。

その様子を見てみると、眩い紅の光が俺に向けられているのが分かった。

「答えてください、ジョーカー。どうして先程の攻撃を防ぐことが出来たのですか？」

女性の言葉に、俺は笑った。

そんなことも分からないのに対峙するとは、まだまだ甘い。

「お前の武器は振るときに音がするんだ。だったら防ぐのは簡単だ」

俺の言葉に女性は悔しそうに唇を噛んだ。

あの様子では生じる音を消すことは出来ないのだろう。

脱力し、彼女は俺をまっすぐと見つめた。

「ナンバーズ、ナンバー12、デイド」

「時空管理局機動六課副隊長、ルーク・フォン・ファブレ」

お互いに名乗り上げをして対峙する。

暫くの間流れた沈黙が途切れたとき、俺達は殆ど同時に地面を蹴った。

素早くデイドに接近し、重心を沈める。そのまま剣を繰り出した。

「瞬迅剣!!」

剣に風が纏い付き、威力を増す。刃とブレードは激突したが、風圧

でデイドは吹き飛ばされた。

それを識別してから俺は念じた。跳べと。

次に俺が見たのはオットーと呼ばれた女性の後姿だった。

「崩蹴脚！！」

全体重を掛けて、俺はオットーを踏みつける。

突然の攻撃に予想の出来ていなかったオットーは防いだが、勢いを殺しきれずに吹き飛ばされた。

先程までオットーが立っていた魔法陣の上に立って剣を構える。

「ハロルド、ブラックホール」

『無慈悲なる超重力の深遠！消えろ！ブラックホール！！』

空間がゆがみ、漆黒の穴が世界を覗く。

そこからいくつもの光が発生し、空に佇むカジャットの大群を蹴散らした。

「エンシエント・ノヴァ！！」

『古より伝わりし浄化の炎！消えろ！エンシエント・ノヴァ！！』

火球が地上に落ち、強大な爆発を引き起こす。

それは俺が味方と識別した六課以外を飲み込み、焼き尽くした。

「……………滅茶苦茶だ……………」

地面に激突した筈のオットーはデイドを気遣いながら呟いた。
そのセリフに、俺は怒りを抱いた。

「黙れ」

俺の言葉に二人の肩が震える。

「何が滅茶苦茶だ。滅茶苦茶にしたのはそっちだろ。俺の居場所を奪って星空を隠した。俺はお前達を許さない」

剣を二人に向けて俺は激昂する。

空に置かれた魔法陣の上からなら、六課の惨状が手に取るように分かった。

これをやったのがあの二人だと思つと、怒りでおかしくなりそうだった。

「これ以上何も言つな。怒りに任せて殺しちまう」

「あ・・・・・・・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の言葉に二人は声にならない悲鳴を上げた。

それでも、俺は手を止めるつもりは無い。

不意に俺の体に影が差した。レンズの力を使ってその背中に回りこむ。

新たな襲撃者を見て俺は絶句した。それは、人間ではなかった。どちらかと言うと虫に近い、なにか。

「ガリユー、本気」

聞こえた声に俺は視線をそっちに遣した。

遠く離れた場所でヴィヴィオより少し大きいくらいの少女が目に入った。

彼女は感情の無い目で俺を見つめている。

「うおおおおおおお！！！」

声が、聞こえた。振り向くと同時に俺は剣を素早く動かして斬撃を防いだ。

紅のブレードが、眩く煌く。それを持つ女性の体は震えていた。恐怖を伴ってもなお立ち向かってくる勇氣に、俺は敬意を払った。ブレードを弾き、彼女を蹴り飛ばす。横からのガリユーと呼ばれた人か化け物が分らない相手の攻撃をかわし、剣を振るう。だが黒の刀身は同じ黒の肌に防がれた。

いや、硬いものにぶつかった音が響いたことを考えると、甲殻か何かだろう。

風の動きを感じて、俺はレンズの力を使用した。先程まで俺が立っていた場所に、緑と黒の閃光が撃ち込まれる。

その様子を見ながら俺は地面に降り立ち、それを蹴った。

飛来する緑の魔力弾をかわしながら、オートーに肉薄する。

俺が近づいた際に、彼女の顔に恐怖が映し出された。

最後に放たれた魔力弾をとびあがって避けると、俺は剣を振り下ろした。

入ると思っただけの攻撃は、デイドのブレードに防がれた。

「ちっ！」

俺は舌打ちをすると飛び上がりながら体を翻した。

空中で体を一回点させ、剣を地面に叩きつける。

「岩斬滅碎陣！！！」

地盤が砕け、岩のつぶてが中に舞う。

後ろから接近していたガリユーはそれを確認するとすぐに後退した。だが、遅い。

『デルタレイ！！』

ハロルドの声が響き、俺の後ろから光が飛来する。光は岩を捉え、それをガリユーの方向に飛ばした。ひるんだ隙に、ハロルドが叫ぶ。

『さらに！！トリニティスパーク！！』

先程よりも射程の長い電撃がガリユーを飲み込んだ。

それを見ながら、俺はその後ろに立つ少女が泣きそうな顔をしているのに気づいた。

距離は、約500。

それを確認して俺は跳んだ。

急に現れた俺に彼女は小さく悲鳴を上げた。一瞬躊躇ったが、それでも俺は彼女を蹴り飛ばした。

彼女は吹き飛ばされ夜の海に激突した。

舞い上がった水しぶきを見ながら、俺は振り返る。

『いい調子じゃない』

「ここんところ訓練以外にも練習してたからな。負けるわけにはいかない」

ハロルドの楽しそうな言葉に、俺は警戒を解かずに答えた。

かつての俺なら四人を相手にここまで善戦は出来なかっただろう。それを可能にしたのはエリオとの訓練や皆との模擬戦である。

「それに、予言を聞いたときから嫌な予感がとまらなかったんだ」
なのはから聞いた予言。俺はその内容なんてまったく分からない。
それでも用心しておくことに越したことは無かった。

剣を構え、視線を彼らに向ける。

残ってるのは三人。だが先程蹴り飛ばした少女も完全に戦闘不能ではない。

だが、ガリユーは手傷を負ったし、二人は恐怖で震えながらの戦闘だ。

まだまだこちらが有利といったところだろう。

こうして考えている間にも、体力は回復していく。

「流石はドクターが認めた男ですね。ドクターが欲しがるのも分かります」

不意に、オットーが呟いた。短い髪が、風に揺れる。

「強さ、速さ、どれをとっても私達の誰よりも上です。それでも、負けられません」

速さはレンズの力なのだが、まあ黙っていることにしよう。

そんなことを思っていると水の音が聞こえた。目だけをそちらに向けると、先程の少女が浮かび上がっていた。

俺が蹴った腹が痛むのか、手で押さえている。

「私には目的があるから、だから負けられない」

少女は強い目で俺を見つめた。あんなの、小さな子がする目じゃな

い。

そこまで考えてから俺はあることに気づいた。
目的？こいつらの目的はなんなんだ？

どうして六課を襲う必要がある？邪魔だから？
どうせ潰しても隊長陣が出払っているだけなので総合的に戦力が減
ることはない。

なのにどうしてこんな嫌がらせのようなことを彼女たちはしている
のだろうか？

俺は気になったので目の前に居る少女に聞いてみることにした。

「なあ、お前の目的はなんなんだ？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

俺の言葉に少女は答えなかった。

よく考えれば当たり前である。態々答える必要など無い。

そんなことを思っていると、少女はゆっくりと口を開いた。

「本当は教えたくないけど・・・・・・・・貴方は強いから、教え
てあげる」

「ルーお嬢様！！言う必要はありません！！」

「うるさい」

少女の言葉をデイドは遮ったが、彼女はそれを一蹴した。
なんだこいつらは？仲が悪いのか？

そんなことを思っ途中で少女はゆっくりと話し始める。

「私は・・・・・・・・お母さんを治すためにレリックを探してい

るの」

「治す？」

俺の言葉に、少女はしっかりと頷いた。

「そう。眠ったままのお母さんを起こすために」

その言葉に、俺はどこか違和感を感じた。

レリックがどういうものなのか俺はよく知らない。

だが、それで治るのだろうか？そんなことをしなくても治りそうな、そんな気がする。

ふと視線を後ろに向けた。ナンバーズ。こいつらはスカリエッティが作ったものだ。

そしてそのスカリエッティもレリックを集めている。

目的は知らないが、リニアで襲ってきたのがその証拠だろう。

母を治すためにレリックを探す少女と、何かの目的でレリックを探すスカリエッティ。

目的は確かに同じ。だが、協力する意味が分からない。

可能性を考えてみれば、利用していると思ったほうがしっくりくる。

だが後ろで警戒しているナンバーズ二人にそんな様子は無い。

「本当にお前の言う方法でお前の母親が治るのか？」

俺の言葉に少女は不思議そうに首をかしげた。

「お前じゃない。私はルーテシア。ルーテシア・アルピーノ。・・・
・・・どういうこと？」

突然の言葉に俺は唖然とした。この子実はかなりの天然ではないだろうか？

「本当にレリックを使わないと治らないのか？医療機関は全部頼ったのか？」

「貴方は何を言ってるんですか？」

「そうです。ドクターがそう言ったのだから――」

「そのスカリエッティが真実を言っている証拠は？」

途中から話に割り込んできたナンバーズ二人に俺は問う。その言葉に、二人は答えることが出来なかった。ふと前を見ると、少女は何かを考え込んでいる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・貴方、名前は？」

「え？」

少女の言葉に俺は素っ頓狂な声を上げてしまった。

「名前」

「あ、ああ、ルークだ。ルーク・フォン・ファブレ」

「ルーク・・・・・・・・・・ありがとう・・・・・・・・・・ちょっと考えてみる」

ルーテシアは数回俺の名前を呼ぶと、ガリユーを呼んだ。

そして再び、俺をまっすぐな目で見つめた。

「ルークは私のことを考えてくれた。でも……敵は敵」

どうやら引いてくれるわけではないらしい。

そんなことを考えながら俺は後ろの二人に目を向けた。

「で？お前らの目的は？」

「言つと思……」

「ナンバーズの目的は、ここに居る聖王の器と呼ばれる者の回収」

口を閉ざしたナンバーズに代わって、ルーテシアが答えた。

オットーは悔しそうに俯いている。デイドに関しては睨み付けているくらいだ。

「聖王の器？」

聞きなれない言葉に、俺はそう彼女に聞き返した。

少女は頷くと、ゆっくりと語り始めた。

「ドクターはそう言ってた。彼女を連れてくるために協力してくれ
って」

自分の目的を告げてしまったのでナンバーズの目的を告げることに躊躇がない。

どうやらそこまで仲がいいというわけではなさそうだ。

後ろで、二人が立ち上がるのが見えた。その手には武器がしっかりと握られている。

「なんで言っただんですか？ルーテシアお嬢様」

「別に私はドクターに協力してるだけで仲間じゃない。それに、ここまで攻めてれば言っても言わなくても同じ」

ルーテシアの言葉は最もだろう。

ここまで六課を攻めておいて、今更隠すことでもない気がする。その正論に文句のつけようが無いのか、オットーはそれ以上何も言わなかった。

「……………そうです。私達の目的は貴方の捕獲、及び聖王の器の確保です」

そしてついに開き直った。

俺がその様子に呆れていると、二人はため息をついた。

「本当はもつと人数をこっちに割くべきだったんです。四人では……………勝てない」

おそらくスカリエッティの中では勝てる予定だったのだろう。

情報に踊らされなかったことは驚嘆に値するが、少々過小評価しすぎたというところか。

緊張感が皆無になった戦場で、俺は心底スカリエッティに呆れていた。

稀代の天才とか言われていたが、本当にそうなのだろうか？

そんなことを思っていると、少女が何かを思い出したようにあ、と声を発した。

「そういえば……………聖王の器は私と同じくらいの女の子

だつて言つてた」

その言葉で、俺の思考が停止した。
今六課にルーテシアのような子供は殆ど居ない。
そのうちの二人は出払っている。ここに居るのは、ただ一人。
俺は頭がさえてくるのを感じた。そして俺の中で怒りの炎が燃え上がることも。

「オットー、デイド、答える。聖王の器は金髪の女の子か？」

「?.....そうですっ!？」

俺の言葉に答えたオットーは途中で言葉を止めて戦慄した。
その隣のデイドも震えているのが分かる。
目の前のルーテシアも、目を見開いていた。

「その子は.....俺の娘だ」

振り返り、剣を向ける。

殺気をこめた目で二人を見つめると、二人は恐怖に震え上がった。

「.....娘なの？」

「ああ」

俺の言葉にルーテシアはそう、と呟いた。

「だったら、私は降りるね」

ルーテシアの言葉に俺は咄嗟に振り返った。

彼女は微笑んでいた。あんな表情が出来るのかと、思ってしまうくらい綺麗な笑顔だった。

「私も、ルークと同じようなものだから。ルークから娘を奪いたくない。行こう、ガリユー」

そう告げるとガリユーを引きつれ、ルーテシアは離れていった。その背中を見ながら、俺は振り返った。俺と目が合った二人が戦慄する。

四人がかりでも勝てなかったのだ。二人では勝機が無いと思ったのだろう。

彼女たちは武器をしまうとがっくりと肩を落とした。

「分かりました。聖王の器は諦めます。だから見逃してください」

「二度とヴィヴィオを狙わないと誓え、そしてスカリエッティに告げてくれ。俺の怒りに触れるなと」

「・・・・・・・・・・・・・・・・かしこまりました」

俺の言葉に二人は悔しそうにしていたがやがて魔方陣を展開してその場を去ってしまった。

残ったのはボロボロの六課とガジェットの残骸だけだった。

魔方陣から飛び降りると、すぐにシャマルとザフィーラが駆け寄ってきた。

「ルーク君！！大丈夫！？」

「すまないルークよ。結局お前を頼ってしまった」

心配しながら駆け寄ってきたシャルに大丈夫だと告げ、すまなそうに謝るザフィーラに構わないと告げる。

その後、俺は辺りを見回した。被害は大きいが、大したことは無いだろう。

「守れたんだな。六課を」

「ああ、お前は守ったぞ」

俺の言葉に、ザフィーラとシャルが微笑むのが分かった。

その微笑みは、後ろから聞こえた足音で凍った。

ゆっくりと、ゆっくりと振り返る。冗談ではない。

まだ戦えるが、こっちは先程の戦闘で疲労しているのだ。

もしその足音が俺の予想通りなら、俺はかつて無い窮地に立たされていることになる。

頼む、間違いであってくれ。

俺の願いをあざ笑うように、黒いフードを風に靡かせながら、そいつは現れた。

8 - 3 (前書き)

今回はかなりバイオレンスな描写があります。

そついうのが苦手な方は戻るを押すことをお勧めします。

全然大丈夫という方はどうぞ!!

ルークside

体が、震える。この状況は、まずい。

まず第一に俺は確かに無傷だが、疲労が激しい。

先程の戦いでレンズを何回か使用して疲労が蓄積している。

そんな状況でこいつが出てくるとは思ってもみなかったのだ。

「お前は・・・・・・・・・・あいつらとは無関係なのか？」

俺は自分の声が震えていることに気づいた。異常なのだ。

先程戦ったオットーやルーテシアには敵意があったがなにより人間味があつた。

だが今、目の前に立つこいつはなんだ？こいつは、何を見ている？何を考えている？何のために生きている？それが分からない。

圧倒的な異質感。それでも、こいつは歩いてくる。

ふと、フードがその歩みを止めた。

俺が準備するのを待ってるということだろうか？

ならそれに甘えるでしょう。俺は後ろに居るシャルとザフィーラを確認した。

二人はフードの異質感に言葉を失っている。

「シャル、ザフィーラ、逃げろ」

俺の言葉に二人ははっとしたように俺を見た。

シャルの目は心配そうに揺れている。

「逃げるんだ。そして、仮に俺が負けても絶対に奴に立ち向かうな」

「そ、そんなルークく……」

「早く!!」

シヤマルの言葉を遮って俺は叫んだ。

彼女はザフィーラに諭され、踵を返した。

その間、フードは本当に何もしなかった。

「見逃してくれるなんて優しいじゃないか」

俺の言葉にフードは答えなかった。まるで答える必要も無いといわんばかりの態度だ。

俺はベルセリオスをフードに向ける。こいつは強い。

かなりの激戦になる。レンズとハロルドの力を最大まで使用しても勝てる確率は低い。

だがそれでも、戦うしかない。

俺も、フードも動かなかった。

その様子に俺が首を傾げたとき、それは起きた。

高速で光がフードの頭上に集結し、大きな白い球体を作り出したのだ。

それは次の瞬間には弾け、俺に向かって飛来した。

レイ。それは俺が使い慣れたハロルドしか使えないはずの晶術だった。

俺はそれを重心を低くして突進することで避けた。

『おかしい……………』

不意にハロルドが呟いた。なにがおかしいのだろうか？

『仮にルークの技をコピーしてるのだとしたら、威力が強すぎる』

ハロルドの言葉に答えることなく俺はフードに肉薄した。

「斬影烈昂刺！！」

剣をすばやく斬り下ろし、剣を移動させて高速で突きを繰り出す。だがそれも、いとも簡単に避けられた。続いての殴り上げと斬り上げすら、フードには効果が無かった。

技を打ち終わった後で俺はすぐに後退した。フードから距離を取る。さっきの一瞬で、フードが反撃できるだけの隙はあったはずだ。

だが、奴はそれをしなかった。まだこちらの出方を伺ってるのか？ そう思ったところで、俺は大気が震えているのを感じた。

違う、大気が震えているんじゃない。俺が震えているんだ。フードの発する威圧感に。

「嘘………だろ？………」

俺は思わず呟いてしまった。それは、今までとはまったく違う重圧。人を殺すために発生する、殺気。それを、フードの男は放っていた。本気だ。本気になった。力を計る必要もなくなったと判断したのだろう。

奴はゆらりゆらりと歩いてくる。フードが動くたびに、剣で斬られているような錯覚に襲われる。

『お、おかしいわよルーク。こんなの………ありえない』

啞然としながら呟くハロルドに俺も心底同意だった。

人間が出せる覇気ではない。こんな気持ちの悪い重圧を出せる奴が居てたまるか。

俺は再び剣を構える。考えるな、ただ勝つことだけを考える。そう念じて、手が震える。心が悲鳴を上げる。怖い。真剣にそう感じた。

それは、突然だった。突然視界が真っ白に染まった。その中で、黒い羽が舞っているのを、俺は見た。

『ルーク！！防いで！！』

「粹護陣！」

ハロルドの言葉に咄嗟に防御を固めると地面から黒い羽が噴出するのはほぼ同時だった。

その攻撃はとも鋭く、防御をしても俺を傷つけた。

ローレライからもらった最高の防御を誇る服すら、乗り越えてくる痛み。

俺はそんな強烈な痛みに堪えながら地面を蹴った。もう、引くわけにはいかなかった。

『さっきのは……………ブラックウイング！？これじゃあ……………』

聞こえてくるハロルドの声さえ、俺は無視した。

「双牙斬！！」

斬り下ろしからの斬り上げが、いとも簡単によけられる。

「崩蹴脚！！」

間髪を入れずに放った蹴りも、捉えるには至らない。なら、これでどうだ。

俺は体を一回転させ、剣を地面に叩きつけた。

岩斬滅碎陣。勿論攻撃が目的ではない。俺はそのまま突進した。

フードは突進を見事にかわしたが、奴は知らない。この技がどのような物なのか。

「斬魔飛影斬！！」

闇を纏ったベルセリオスが、勢い良く持ち上がる。

フードは咄嗟に反応して避けたが、俺の脚を見切ることは叶わなかった。

渾身の蹴りを二発ぶち込み、最後に斬り上げる。

その過程で、ハロルドの声が聞こえた。

『これじゃあまるで・・・・・・・・・・』

技を放った後に、俺はすぐに距離を取った。

だがフードが追撃してくる様子は無い。

ふと、ハロルドが絶句しているのを感じた。

俺は疲れた体に鞭を打って、顔を上げた。

フードは、そこに佇んでいた。だが、それはもうフードではなかった。

フードが取り除かれ、端正な顔立ちが、俺を見つめていた。

先程の風圧で取れたのだろう。だが、そんなことは関係ない。

なにがあるかと、こいつは敵なのだから。

『嘘・・・・・・・・・・・・・・・・』

不意に、ハロルドの泣きそうな声が響いた。
一体どうしたというのだろうか？彼女の声はとても悲愴に満ちている。

『兄さん・・・・・・・・・・・・・・・・』

ハロルドの言葉に、俺は絶句した。

兄さん？目の前に居るこいつが・・・・・・・・ハロルドの兄？

俺は目の前に立つ男をまじまじと見つめた。

濃い赤の長い髪に、端正な顔立ち。顔の造りは優男を思わせるが、表情は無表情だった。

身に纏う雰囲気も、限りなく冷たいものだった。

ふと、彼は剣を引き抜いた。その剣を見て、俺は絶句した。

限りなく黒い漆黒に、燃え盛る炎のような刀身、それはまさしくソーディアン・ベルセリオスだった。

『なんで・・・・・・・・・・・・・・・・』

ハロルドが搾り出すように声を発した。その声は震えている。

『なんで兄さんが!!』

ハロルドの言葉に、男は答えなかった。
ただ一言、呟いただけ。

「久しぶりだな、ハロルド」

まったく表情も変えないで、男は言い放った。
訳が分からない。兄？ならば何故、敵対する？

『答えて!!なんで兄さんがここにいるの!?!どうして剣を向けるの!?!』

「落ち着けハロルド」

『これが落ち着いてられると……』

「一つ言えることは」

男はハロルドの言葉を遮った。

そのまま剣を、もう一本のソーディアン・ベルセリオスを俺に向けた。

「俺が誰だろうと俺達は………敵同士ってことだ」

その言葉に、ハロルドが絶句しているのが分かる。
しばらくしてから、彼女はゆっくりと話し始めた。

『な、何言ってるのよ兄さん。私が相手なのよ?戦う理由なんてな

いじゃない』

ハロルドの尤もな言葉に、男は冷めた視線をハロルドに向けた。

「理由がないと・・・・・・・・・・本当に思っているのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

ハロルドの言葉で、男の表情に始めて変化が現れた。
それは、怒り。尋常じゃないほどの、怒り。

「俺がどれだけお前を羨ましがったと思ってる？才能に満ち溢れ、地上軍をたった一人で勝利に導いた。その才能に俺が少しも嫉妬しなかったと・・・・・・・・・・本当に思ってるのか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・っ」

ハロルドは何も言い返せなかった。

ハロルドは天才だ。だからその兄ということは、コンプレックスも凄いのだろう。

かつての俺がアッシュに憧れたように、この男もハロルドに憧れたのではないだろうか。

そんなことを思っていると男は俺と目が合った。

「君が現在のハロルドのマスターか。名前は？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ルークだ。ルーク・フォン・ファブレ」

「そうか、俺はカーレル。カーレル・ベルセリオスだ」

それはまるで友人の間で交わされるような簡単な会話だった。

それでも、俺もカーレルも警戒心を失っては居ない。

カーレルに関しては殺さんばかりの視線で俺の剣を見つめている。

「ルーク君。俺の目的はハロルドの破壊だ。君に用は無いんだが」

その言葉に、俺の中で怒りが渦巻いた。怒っているのは分かる。

ハロルドの才能に嫉妬するのも分かる。だが、だからといってハロルドを殺すのか？

自分のたった一人の妹を？

「・・・・・・・・・・・・・・・・どういことですか」

その答えが何なのか、俺は知っている。だが、それでも俺は尋ねた。カーレルは俺のことを見下すように、ため息をついた。

「分からないのかい？君では話にならないと言ったんだ。それは自分自身がよく分かっているはずだよ。俺が言葉を発するというだけでも最大の譲歩だよ」

なにを偉そうに。俺は内心で悪態をついた。

だが、カーレルが言っていることは事実だ。彼は、強い。

「俺が聞いているのはそんなことじゃない。どうしてハロルドを破壊する必要がある？」

『どうして・・・・・・・・・・どうしてよ兄さん！..!』

「黙ってくれないか」

その言葉は俺に向けられたものか、それともハロルドに向けられたものか、定かではない。

「地上軍に居たころはお前の力が必要だった。だから一緒に居ただけだ、正直に言ってやるよハロルド」

そこで一旦言葉を区切り、カーレルは呟いた。

「俺はお前のことが誰よりも嫌いだ。これが理由だよルーク君」

カーレルの言葉に、ハロルドは答えなかった。いや、答えられなかったというほうが正しいだろうか。

彼女はそれくらいショックを受けていたのである。カーレルはさらに続ける。

「ルーク君、ハロルドを置いて立ち去ってくれ。君に用は無いんだ」

「断る」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・なに？」

俺の言葉にカーレルは訝しげな視線を送った。

「自分の言っていることは分かっているのかい？ハロルドをかばって君に何の意味があるというんだい？命を無駄にしないことだよ」

「ハロルドは助けてくれた。俺の仲間だ」

俺の言葉を、カーレルは鼻で笑った。

「どうせ条件でもつけられたんだろう？ハロルドは昔から自分の才能に自信があつたからね。そこがまた腹が立つ所だけど……」

「だとしても、俺はハロルドを見捨てたりしない」

『ルーク……』

先程から口を慎んでいたハロルドが言葉を発した。

「無駄なことだね。そんな愚妹のために命を差し出すとは」

「勝手に俺が負けると思わないでくれ」

「その心意気だけは認めよう。けど、君じゃ俺には勝てない」

その言葉でカーレルは地面を蹴った。

速い。振られる剣を、俺はベルセリオスを使って防いだ。

だがあまりの威力に俺は吹き飛ばされる。

先程までとはまるで別人のような攻撃に、俺はまったく対処出来なかった。

速さも、剣の重さも、先程とは段違いだった。

「分かるだろうルーク君。君は俺に勝てない。おとなしくハロルドを渡してくれ」

「断るっつてんだろ！！」

ベルセリオスを杖にして俺は立ち上がる。先程受け止めた左腕がまだ痺れている。

なんて重さだ。化け物もいいところだ。

そんなことを思いながら俺は剣を再度構えた。

さつきは攻撃を当てられたんだ。なら今度も当てられる。

そう自分に言い聞かせて、俺は突進した。それは、俺が今までに見せた中での全力。

すばやい動きで、俺はカーレルに肉薄した。

「魔王絶炎煌!!」

最初の殴り付けを省略し、俺は剣を振り下ろした。

カーレルはそれを飛んでかわした。追い討ちをかけるように、俺は叫ぶ。

「ハロルド!! ネガティブゲイト!!」

『くっ………ネガティブゲイト!!』

闇の球体が出現し、カーレルを飲み込もうとする。

しかし、動揺しているのかハロルドの狙いが甘いのは誰の目にも明らかだった。

勿論カーレルはそれを難なくかわした。だが、これで終わりではない。

俺はレンズに命じた。跳べと。

だが急に視界に現れたのは、漆黒の刃だった。

それを同じ刃で受け止める。だが突然のことに驚いた俺は吹き飛ばされた。

空中で体勢を立て直し、着地する。顔を上げて、俺は啞然とした表情でカーレルを見た。

「へえ? 中々やるじゃないか。今の一撃を防ぐなんて」

そんなことはどうでもいい。どうして今カーレルはどうして俺が移動した場所が分かった？

なんで正確に攻撃ができた？

「よく分からないと言った顔をしているね？」

突然聞こえた声に、俺は戦慄した。

気がつけば目の前にはカーレルが立っていた。

「教えるわけがないだろう？」

振り下ろされる剣を、次々と防ぐ。

だが同じ素材の剣なのに、まったく同じはずの剣なのに、俺のほうが明らかに劣勢だった。

「教えてあげるよルーク君。俺はいささか不本意だけどハロルドのマスターだ。君のように偽者ではないんだよ」

偽者。その言葉に全身の血が凍る感覚を覚えた。

その隙を、カーレルが見逃すはずが無かった。

彼の蹴りは的確に俺の腹を捉え、俺は瓦礫に突っ込んだ。

なんとか立ち上がろうとするが、力が入らない。

「分かっただろルーク君。君では俺には勝てない。絶対にね」

それでも、俺は護らなきゃならない。六課を。ハロルドを。

ベルセリオスを杖にしたままで俺はレンズに触れた。

念じる。跳べと。俺の体力ももう残り少ないが、それでも俺はそれを選んだ。

移動すると同時に体を軸に剣を回す。不思議なことにカーレルは襲ってこなかったが、俺はそんなことを気にしている暇は無かった。

「守護・・・・・・・・氷槍陣!!」

魔法陣が展開し、巨大な氷の柱が発生する。

顔を上げた俺は舌打ちした。カーレルは、範囲から完全に逃げた。

やはり読まれていたのだ。レンズによる移動先を。

俺を中心に魔方阵が展開する。はっとするよりも前に、カーレルの声が響いた。

「アンビバレンス!!」

白い雷が俺の行く手を塞ぎ、黒の雷が俺の体を食らい尽くした。

それでも、俺は倒れなかった。体に走る激痛に堪え、剣をしっかりと握り締める。

その過程で、赤い髪が俺の視界に入った。

「君なら耐えると思っていたよ」

一閃。刃が閃いた。何が起こったかよく分からない。

気がつけば俺は、斜めに深く切り裂かれていた。血が噴出するのが分かる。

見ただけで、致命傷だと分かる。それは残酷にも、俺の敗北を表していた。

「・・・・・・・・ふざけんな」

体中が悲鳴を上げる。斬られた部分に激痛が走る。

それでも俺はすべてを無視した。すべてを無視して、剣を振るった。そして、それは完全に終わったと思っていたカーレルを掠った。少し離れたところに立つカーレルが、自身の流れる血を見ながら驚いているのがはつきりとみてとれた。

それを最後に、俺は地面に倒れた。血が、地面を染めていく。段々と、体が冷たくなっていく。その過程で、俺は声を聞いた。

「まさか・・・・・・・・ここまでとはね・・・・・・・・・・・・・・・・ルーク君、どうやら俺は君を見くびっていたようだよ・・・・・・・・・・・・・・・・そうだ、暫くハロルドは預けよう。次に来るときはもっと楽しませてくれ。君をここで亡くすのは惜しいからね。強くなることだ。ハロルドと共にね。そのために、俺はハロルドの代わりに君の大切なものを一つ頂くとするよ」

カーレルの言葉が聞こえたが、俺にはそれを認識する力が無かった。もう体が動かない。腕はおろか指先さえ、感覚が無かった。機動六課、俺の居場所で俺は完全な敗北を味わった。

8 - 4 (前書き)

今回も残酷描写あります。

苦手な方は回れ右をお願いします。

それと明日から何日か小説の更新を休ませてもらいます。

テイルズオブエクシリアが出たから・・・・・・・・・・やりたいんです！！ww

一日18時間プレイですぐ戻ってくるので心配は無用です。

それに伴いこの話の感想も返信できないと思うので伝えておきます。

それではどうぞ！！

ルークside

ここは……どこだ？

真っ白な空間。そこで俺は立ち尽くしていた。

自分の体を見ても、カーレルから受けたはずの傷は一切見当たらない。

痛みも、疲れも、何も無い健康な体だった。

ふと目の前に映像が展開された。

そこに映し出されたのは、俺自身だった。

初めて人を殺したときの俺、仲間に信用されない俺、アグゼリウスを滅ぼした俺。

それらをみていて、俺は気づいた。

ああ……これは走馬灯なんだ。カーレルに殺されかけた俺が見ている、走馬灯。

そう考えると馬鹿馬鹿しく思えた。こんなものを見たところで、俺は何も変わらない。

変わらないんだ。偽者は偽者のままだ。

偽者の俺がハロルドを使いこなせるわけではないし、本物のカーレルに勝てるわけ無いじゃないか。

俺とカーレルじゃ、元々から違ったんだから。

『強くなることだ。そのために、俺は君の大切なものを一つ頂くとするよ』

不意に、カーレルの最後の言葉が蘇った。

俺の……大切なもの？偽者の俺にそんなものがあるわ

け無いじゃないか。

そう思ったときに、場面が切り替わった。映し出されたのは、なのはの笑顔だった。

そうだ……。俺は何を言ってるんだ。

俺は自分を叱責した。大切な物なら、ある。

いや、大切なものなんてものじゃない。なのはは俺の生きる意味だ。カーレルはなんと言った？頂く？なのはをか？

ふざけるな

持っていかれてたまるか。俺は強く念じた。こんなところにいる場合じゃない。

早く目が覚めると、そう念じた。カーレルに勝てる手段なんて無い。だからって、大切なものが奪われるのを黙って見てるわけにはいかなかった。

俺の意思に答えるようにやがて世界は白い光に包まれて、消滅した。

六課の前。そこで俺は相変わらず地面に突っ伏したままだった。先程と違い、感覚はあるが、立ち上がるほどの力はもう残っていない。

い。

「へえ、まだ意識があるんだ。流石だねルーク君」

不意に聞こえた声に、俺は首だけを動かしてカーレルを見る。

俺がさっき戦ったときと違い、カーレルには明らかに変化があった。腕には、ヴィヴィオを抱えていた。

「さっきの話、聞かせてもらったよ。スカリエッティとかいう研究者がこの子を欲しがってるんだろ？そしてこの子は君の娘だ。なら、持っていくには十分価値がある」

「や・・・・・・・・めろ・・・・・・・・」

必死で搾り出したはずの声は、とても弱弱しかった。体が動かない。それでも、俺は命じ続けた。動けと。何度も、何度も命じた。それでも、結果は変わらなかった。

「じゃあねルーク君。また会えることを楽しみにしているよ」

カーレルが、小さくなっていく。そしてその手には、ヴィヴィオが抱えられている。

俺となのは、たった一人の大切な娘が。

「ま・・・・・・・・・・て・・・・・・・・」

引きずるように、腕を動かす。痛みが走る体を無視して、力を入れる。

上半身を起こしたところで斬られた胸から血が流れるが、無視。足を必死で動かして何とか立ち上がる。ハロルドを地面に突き刺し

て、俺はカーレルを見つめた。

もう体力も底を尽きている。気力で立っているだけだ。
俺は息を吸い込むと、力いっぱい叫んだ。

「俺の大事な娘を連れてくな！！」

俺の言葉にカーレルはゆっくりと振り返ると、目を見開いた。
次の瞬間には不敵な笑みを浮かべる。

「まだ立ち上がるとは……………驚嘆に値するね」

「当たり前……………前だ……………娘を取られて黙っ
てられるか……………」

策なんてない。どうすることも、俺には出来ない。

それでも、俺は諦めることなんて出来なかった。

例え偽者でも、父親と認めてくれたヴィヴィオを見捨てるなんて、
絶対に出来なかった。

「その気力は素晴らしいよ……………でも」

言葉の途中で、カーレルは消えた。

その姿を探す俺の耳に、驚くほど怒りに満ちた声が聞こえてきた。

「いい加減、目障りだ」

左腕に、激痛が走る。

いや、左腕だけではない、肩や胸、全身を激痛が襲った。
上から落ちてきた鋭い斬り下ろし。

カーレルが使用したタービュランスによって、俺は左腕を斬り落と

された。

支えを失った俺の体は傾き、地面に崩れ落ちる。

何かを考える暇も無く、俺は意識を闇に沈めた。

体が、凍えそうなほど冷たくなっていくのが分かる。

ああ………死ぬんだな。

薄れ行く意識の中で俺はそう思った。最後にまぶたの裏に思い浮かべたのは、なのはの笑顔だった。

なのはside

なのはは全力で空を滑走していた。六課に近づくにつれて、不安は大きくなる。

向かう途中で、なのはとフェイトは襲撃を受けた。

今はフェイトが応戦しているが、それでもそこで時間をロスした。

何か………嫌な予感がする。ルークが消えてしまいそうな、そんな予感が。

空中を高速で滑走していたなのはは六課の隊舎が見えたときに言葉

を失った。

予想はしていたが、六課は攻撃を受けていた。
所々で爆発が起こり、火の海がそれを飲み込んでいた。

「嘘・・・・・・・・・・・・・・・・」

それは、予想だにしないことだった。

今まで生活していた場所が、隊舎が、まさかこんなことになっていようとはなのはは思ってもみなかったのである。

なのははつとして高度を下げた。

六課にはなのはの大切な人が居るのだ。義娘のヴィヴィオに、最愛のルークが。

その二人は無事だろうか？なのはの不安は益々大きくなる。

そして六課全体が隈なく見えるくらい近づいたところで、なのはは自分の目を疑った。

六課の前に倒れているのはたった一人だった。

地面を明らかに致命傷といえるくらいの量で染め、うつ伏せで倒れているのは、なのはが無事であつてほしいと願ったルークだった。

「ルークー！」

なのはは思わず叫び、ルークに駆け寄った。

すぐに彼を抱きかかえて、何度も名前を呼ぶ。

白いバリアジャケットが血に染まるのも、構わなかった。

そしてなのはは気づいた。ルークの左腕の肘から先が無くなっている事に。

そこから血が流れ出ている事に。

酷いのは左腕だけではない。全身にも多数の斬り傷がつけられている。

なによりも酷いのは体につけられた大きく、なおかつ深く斬られた

であろう二つの傷だった。

なのはこれを夢だと錯覚した。こんなこと、ありえないのだ。ルークはなのはにとって最強の剣士だった。

こちらの世界に来て、シグナムと同等に戦い、フェイトにはあと一歩及ばなかったが、剣だけでは勝利した。

フェイトと戦って敗れた際も、接戦だった。

恐るべき速さで間合いに入り、嵐のような攻撃を繰り出す。

その強さゆえに、勝てる人なんて居ないだろうと思っていたぐらいだ。

だが、実際に自分の腕の中で死に掛けているルークはどうだろうか？深い二つの傷に、切り落とされた腕。それは、圧倒的な敗北だった。接戦を繰り広げていてつく傷ではない。その傷だけで、ルークの戦った相手がどれだけ強いかが分かった。

ふと、なのはの右手に生暖かい感触が当たった。

右手を上げてみると、血が目に入った。手を覆い尽くすような、多量の、血。

致死量の、血。その事実が、なのはに現実を訴えかけてくる。腕の中の彼の冷たさが、それを物語っている。

「いや・・・・・・・・・・・・・・・・」

なのはは小さく呟いた。声は驚くほど小さく、瞳は震えている。

「いやああああああああ！！ルーク！！ルーク！！死んじやダメ！！ルーク！！」

必死に呼びかけても彼は答えない。なのはは頭が真っ白になるのを感じた。

死ぬ。死んでしまう。ルークが。自分の一番大切な人が。

『しっかりしなさいなのは!!』

不意に聞こえたのはハロルドの声だった。

辺りを見回すと少しはなれたところの地面に刺さる異形の黒い刀身が目に入った。

『私を拾い上げてルークの元に近づけなさい!!早く!!』

ハロルドは叫んだが、その声はどれだけ状況が深刻かを物語っていた。

なのはは一旦ルークを地面に寝かせると、ハロルドに近づいて持ち上げた。

それをルークの隣に置いて膝をついた。

「ハロルドさん!!私……私どうすればいいの!？」

『落ち着きなさいって言うてるでしょ!？私だって焦ってるのよ!!』

ハロルドも、なのはも冷静ではなかった。

大切な人の死。なのはにとっての恋人とハロルドにとってのパートナー。

意味は違えどどちらもルークが死ぬことを望んではいなかった。

『とりあえず切り落とされた腕を繋げなさい。早く!!』

なのはは何も考えずに体を動かした。

傍に落ちていた血まみれの腕を持ち上げ、切断面とくっつける。

その過程においても、なのはは自分が何をしているのかよく分から

なかった。

ただ心の中でルークを助けてと神に祈っているだけであった。

『キュア！！キュア！！』

ハロルドが何回も治療術を唱える。

そのたびに出血は収まっていくが、傷が完全に塞がることは無かった。

何よりも予断を許さないのは切り落とされた腕である。

どれだけハロルドがキュアを唱えても、一向に繋がることは無かった。

治療術は本来持っている自然治癒力を増大させるものである。

腕が繋がるには、それなりの時間が必要だった。

それに何よりも、出血がその邪魔をしていた。

なのはの表情に更に焦りが表れる。血が止まらないのだ。

それを見ながらなのはあることに気づいた。

なら、出血を止めればいいのだ。

「ハロルドさん、氷の晶術・・・・・・・・・・」

『え？』

「氷の晶術だよ！！それなら出血が止まるよ！！」

『っ！よくやったわなのは！！私を持ち上げなさい！！絶対にルークの腕から手を離すんじゃないわよ！！』

ハロルドの言葉になのははルークの腕を地面に置くと、ハロルドを持ち上げた。

『私を切断面に当てて』

なのはは言われたとおりにハロルドを切断面に当てる。すると、ハロルドは何かを唱え始めた。かなり長い。今まででなのはが待った中で、最長だった。

『いくわよ……インブレイスエンド!!』

それは、あまりにも小さな晶術だった。

ハロルドを中心にして冷気が噴出し、切断面を凍らせていく。なのはは慌ててハロルドを持ち上げて腕の周りを一周させた。結果として綺麗に切断面は凍りついた。

『はぁ……はぁ……あとは、キュア!!』

より大きな光がルークの腕を包み、煌く。

息切れしていたハロルドは尚もキュアをかけた。

「ハロルドさん……息が……」

疲労困憊のハロルドの様子に、なのはは声をかけた。

『私はまだ完全じゃないのよ。正確には本気が出せない。だから、晶術を唱えるときもルークの力を少し借りてたの、単体じゃ、ちっぽけな晶術しか出来ないのよ……』

その言葉は、まるで自分を嘲笑うかのようなだった。なんでも出来るハロルドが始めて漏らした弱音。それを聞いてなのははハロルドに親近感を持った。

『一応ルークは大丈夫よ。あとはシャルマルにやってもらいなさい……私……少し眠るわ……力を……使いすぎたみたい……』

話している途中でコアが点滅し、その光が弱まっていくのをなのは見た。

慌てて剣を持ち上げて声をかける。

「ハ、ハロルドさん!？」

『ごめんなさい………ヴィヴィオを助けられなかった……』

その言葉を最後にコアの光は消滅した。

その後、いくら声をかけてもなのはの言葉にハロルドが答えることは無かった。

インブレイスエンド1回、キュア32回。異常なほどの晶術を行使し、ハロルドは眠りについた。

剣を地面に下ろして、なのははモニターを開いた。

どこかに避難しているであろうシャルマルの顔が映し出される。

それをみて、収まっただけの涙がまた零れた。

「シャルマルさん……ルークが……とにかく助けて……私もう……分かんないよぉ!」

シャルマルは尋常ではないなのはの様子を見て頷くとモニターを切った。

手を地面についてうな垂れる。

もうなのはは何が起きているのかよく分からなかった。

最強だと思っていたルークが重傷を負い、その剣であるハロルドは

力を使い果たして居なくなった。

六課は火の海に包まれて、ヴィヴィオも居なくなった。

ルークにハロルドにヴィヴィオ。なのはが頼りにしていたものが次々と壊されていく。

何度も願った。夢であってほしい。だがその度になのはこれが現実だと思い知らされた。

笑顔で自分を見てくれていたルークも、冗談を言って彼を困らせたハロルドも、動かない。

自分の膝の上で笑顔を振りまいていたヴィヴィオも、居ない。

シャルルの足音が響くまでなのははじっとルークを見ているだけだった。

そしてその目には何も映し出されてはいなかった。

9 - 1 (前書き)

エクシリア終了しました。

感想は・・・・・・・・・・活動報告に書いたんでよかったら見てください。

なのはside

スカリエッティによる地上本部、及び機動六課襲撃は最悪の結末で幕を下ろした。

六課のフォワードはエリオとスバルが負傷。ロングアーチや隊長、部隊長には怪我は無かった。

しかし六課の切り札ともいえるルークの意識不明の重態に、ハロルドの機能停止、さらにはヴィヴィオの略奪などかなりの痛手だった。

聖王教会所属の病院。その一室でなのはは椅子に座っていた。

ベッドには包帯が巻かれた痛々しい姿のルークが横たわっている。

そのベッドの周りにはグリフィスを初めとして数多くのロングアーチスタッフが集まっていた。

「私が・・・・・・・・・・私のせいでヴィヴィオちゃんが・・・・・・・・・・」

「アイナさんは悪くないです・・・・・・・・・・」

隣で泣きあぐアイナに、なのはは一言そう呟いた。

アイナから聞いたところヴィヴィオを攫ったのは赤髪の男だったという。

そしておそらくその男がルークを倒したのだとなのはは確信していた。

なら、アイナがその男に立ち向かえるはずはないのだ。

ルークですら手も足も出ないのだから誰もあの場ではその男を止められなかっただろう。

それでも、なのはは自分のことを責めた。
今声を張り上げているアイナよりも、誰よりもなのはは自分が悪い
と思っている。
護れなかった。ヴィヴィオを、なによりもルークを、護れなかった。
なのはは、無力だった。無力でただボロボロのルークを見ているし
かなかったのである。

スカリエッティ side

薄暗い空間。そこでナンバーズとスカリエッティはルーテシアと向
かい合っていた。

「ルーお嬢様、どうしてジョーカーに目的をばらしたんですか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どうせすぐ分かることだから」

オットーの言葉にルーテシアはそう答えた。
二人ともお互いを睨み付けている。他のナンバーズに関してはひや
ひやしながら状況を見守っているくらいだ。

「まあ待ちたまえ」

不意に、スカリエッティが言葉を発した。

二人は一旦睨み合うのをやめてそちらに視線を移す。

スカリエッティは前に出ると二人の間に入った。

「オットーの言い分も分かるがルーテシアの言い分は尤もだ。あの状況ではいずればれる事だ。まあ、どうせ聖王の器は手に入らなかったのだから意味は無かったがね」

「………聖王の器を連れてくるなら、ルークの代わりに私が許さない」

その目は、スカリエッティを信用してはいなかった。

父親としてのルークの姿に、ルーテシアは敬意を払っていた。

睨み付けるルーテシアの目を見ながらスカリエッティはため息をついた。

「随分と嫌われたものだ。そもそも、もう手は出しはしないよ。ジヨーカー、いやルーク君を怒らせるとどうなるか………」
分かったものではないからね」

スカリエッティの言葉にオットーとデイドはうんうんと頷いた。
頭の中ではあの時の光景が蘇っているのだろう。

「………でも、六課とは戦う。ガリユーが戦いた
いって言うてるから」

「そうか、それは助かるよ。ありがとう」

ルーテシアは言いたいことだけを言つと足早にその場を去つてしまつた。

後ろでは微妙な雰囲気につつまされたような表情をするナンバーズ達が残つた。

「君達はどうする？オットー、デイド」

振り返り、発したその言葉に二人は顔をしかめた。

「もしもジョーカーがまた出てくるなら、私達では話にならないでしょう……………」

デイドの言葉にオットーもうんうんと頷いた。

戦つたわけではないが会つたことがあるセイン、クアットロ、トーレも同意見のようだ。

全員の反応を見てからスカリエッティは手詰まりだと分かつてしまつた。

ゆりかごが使用できない以上、目的を完遂することは出来ない。

諦めかけたそのとき、何かが落ちる音が部屋に響いた。

何事かと辺りを見回すと、そこには大きな袋が落ちていた。

「これは……………なんでしょうか？」

一番近くに立っていたウーノは首を傾げながら袋に近づき、その口を開けた。

袋を取り除いていくにつれて、その場の全員は開いた口が塞がらなくなつた。

「聖王の……………器？」

そう呟いたのは誰だっただろうか？

そこにはスカリエッティが望んでやまなかったヴィヴィオが眠っていたのである。

「な、何故ここに？ ジョーカーが邪魔したんじゃないのかい？」

珍しく狼狽したスカリエッティの声にオットーもデイドも意味が分からないといった表情で返した。

「これは……ルーテシアとの約束を破るわけではない」

ルーテシアの約束はヴィヴィオに手を出さないということだった。現在、ヴィヴィオはスカリエッティの手にあるが、奪ったわけではない。

転がり込んできたのだ。ならこれは、約束を破ったことにはならないだろう。

スカリエッティは勝手にそう結論づけて納得した。

かくしてスカリエッティは何故か分からないが望むものを手に入れたのである。

??? side

スカリエッティのアジト。そこで一人の男が佇んでいた。その男は失望したようにスカリエッティを見つめている。纏う雰囲気は異質で、彼が普通ではないことを物語っていた。

「・・・・・・・・稀代の天才と言っても結局はこの程度か」

男はそう呟くと闇の中に溶けていった。

はやて side

時空管理局本局。その廊下をはやてとヴェロッサは歩いていた。

「六課の被害、相当なようだね。ジョーカーも」

「正直ルーク君の傷は相当や。ハロルドも機能停止やし、でもそれ以上にひどいのはなのはちゃんや。ヴィヴィオを奪われてルーク君をボロボロにさせられたんやからな。一向にルーク君の元を離れようとはせんし・・・・・・・・」

「はやては・・・・・・・・・・・・・・・・それを許してるのかい？」

ヴェロツサの言葉に、はやては黙り込んだ。

なのはは六課の隊長である、被害を被った以上、やることはあるはずだ。

だがそれをはやては強制しなかった。いや、出来なかったのだ。

「もし私がルーク君の恋人やったら・・・・・・・・・・・・・・・・自分も同じこととしてと思うから・・・・・・・・」

はやての言葉にヴェロツサは何も言わなかった。
ただ妹を見るような目ではやてを見守っているだけだった。

「そつか・・・・・・・・・・なら僕は何も言わないよ。ところで、地上本部には行ったかい？はやてなら行くと思ってたんだけどね」

「どうせ私が行ったところでも分からんよ。行くだけ無駄や」

完全に割り切っているはやての態度に、ヴェロツサは苦笑いするだけだった。

なのはside

夜、遅い時間になってもなのははルークの元を離れなかった。どれだけ遅くなると、何日経とうと、離れる気は無かったのである。

はやてには傍に居ても良いという許可をもらった。本来ならなのはは隊長のため、動かなくてはならないのだが、気持ちを汲んでくれたのだらう。

不意に、扉が横にスライドした。

夜はもう遅い、こんな時間に来る人間は、限られている。顔を上げると思ったとおりの人物が微笑んでいた。

「なのは、傍に居るのはいいけど、寝ないとだめだよ」

そう言いながらベッドに近づいてきたフェイトはルークの枕元にぬいぐるみが置いてあるのを見て言葉を失った。

淡い赤色の兎のぬいぐるみと、耳の赤い猫のぬいぐるみ。それらは新品のように新しかった。

「グリフィス君から聞いたんだ。六課はルークが護ってくれたおかげで被害が少なかったって。それを聞いたときにね、私グリフィス君を責めようとした。どうしてルークを行かせたのって、怒鳴ろうとした。でもね、気づいちゃったんだ。一番責められるのは私なんだって。ルークとヴィヴィオから離れちゃった私が一番悪いんだよ。……」

涙が流れるのを見て、フェイトなのはの背中を擦った。

「そんなことないよなのは。なのはだけが悪いわけじゃない。ロングアーチも、私だって悪いんだ。だから――」

「でも、でもルークやヴィヴィオは悪くないよ!」

フェイトの慰めの言葉は、なのはの大声に遮られた。

「どうして? どうしてなの? どうしてルークやヴィヴィオなの? 二人とも悪くないのに……どうしてルークやヴィヴィオが犠牲になるの? こんな……あんまりだよ……」

「なのは……」

なのはの言葉にフェイトは何も言えなかった。

なのはの言葉はあまりにも正確で、あまりにも残酷すぎた。

結局フェイトはなのはの背中を擦ることしか出来なかったのである。

いつか見た白い空間。そこに俺は再び立っていた。
だが、この前とは違う点が一つある。俺の前には一人の女性が立っていた。

見たことも無い、女性が。

「初めましてかしらね？ルーク」

何故かその女性は俺のことを知っているらしかった。

無造作に跳ねたピンクの髪に、奇抜な服装。

俺は彼女のことを知らないが、彼女は俺に微笑みかけていた。

「力が欲しい？ルーク」

俺は目を見開いた。女性の手には漆黒の剣が収まっていた。

気がつけば俺の手にもベルセリオスが収まっている。

「強くなりたいんでしょ？大切なものを護るために、今度こそ失わないように」

女性の言葉に、俺はしっかりと頷いた。

ヴィヴィオを取り戻せるなら、そしてなのはとヴィヴィオを護れるなら、俺は何でもしよう。

剣を女性に向ける。その光景に、女性は満足そうに笑った。

「本気で来なさいルーク。じゃないと………アタシには勝てないわよ？」

女性から放たれる威圧感に、俺は手が震えているのを感じた。

なのはside

六課襲撃から数日後、なのは達はかつて世話になった戦艦アースラの会議室に集まっていた。

襲撃で六課は確かにボロボロになったが、使えないほどではない。それでも本部をアースラに移したのははやての意図によるものだ。留まったままの本部というのは何かと条件が悪いのだろう。

襲撃されやすいという難点もある。そのせいで今回は被害が大きくなった。

それゆえの対策だろう。相変わらず手を打つのが早い、そうなのはは感心していた。

会議室に集結しているのは五人。今回から動くなのは、フェイト、ティアナ、キャロ、ヴァイスだった。

スバルとエリオは傷のため参加はしていない。他の副隊長陣も今回は不参加だ。

辺りを見回していると、不意に扉が開いた。

「集まっとるね。丁度ええ、六課の方針が決まったんで聞いてや」

はやてが空いている椅子に座り、その後ろに後から入ってきたグリフィスが立つ。

彼は眼鏡を押し上げると、現状を報告し始めた。

「地上本部の捜査は相変わらず後手に回っています。しかも地上のみでの捜査を主張し、本局の介入を拒んでいます。ゆえに本局からの戦力投入は行われていません。同様に本局所属の六課にも情報が公開されることはありません」

グリフィスの言葉になのはは悔しそうに唇をかみ締めた。

現時点で一番動きたいのはなのはである。

どうしてもスカリエッツィを捕らえてヴィヴィオを取り戻したい、そう思うのは当然だろう。

それを分かっているのか、はやては悪戯に微笑みながら言葉を続けた。

「でもそんなことは関係ないんや。私らが追うのはスカリエッツィでもテロ事件でもない。ロストログアのレリックや。その延長上にスカリエッツィが居る、ただそれだけや」

意地の悪い笑みを浮かべて、はやてはそう言い張った。

相変わらず回る頭だ。狡賢さでは右に出るものはいないだろう、となのはは思い、苦笑いした。

だが今はその頭に助けられることになるだろう。

出れるのなら、容赦はしない。スカリエッツィを叩き潰すまでだ。

「なのはちゃん」

はやての言葉になのはは顔を上げた。

「これは部隊長としての発言やあらへん。親友としての発言や。無理したらアカンで？ルーク君は死んだわけやない。ヴィヴィオだつてまだ無事なはずや。なのに、なのはちゃんが死んだら二人が悲しむ。いや、二人だけや無いな、みんな悲しむんやで」

「はやてちゃん・・・・・・・・・・」

そこまで告げてからはやては微笑んだ。

一転して何か良からぬことを考えている表情になる。

「だから、無理をしない範囲でスカリエツティー味をボコボコにするで？」

「ふふ、そうだね」

はやての言葉に、なのはは微笑んだ。

なのはだけではない。フェイトも、ティアナも、その場にいる全員が、微笑んでいる。

「あ、そういえば」

ふと何かを思い出したようにはやては声を上げてなのはを見つめた。

「ルーク君はどれくらいで意識が戻るん？」

「分かんないけど、二週間はかかるらしいよ」

「そか、ならルーク君が目覚めたときには事件が終わってるようにしないとな」

「そうだね」

そんなことを話しながら、二人は、いやその場の全員は微笑んでいた。

なのはside

はやて達との会議の後、なのははアースラの廊下を歩いていた。その横には、レイジングハートが浮遊している。

「あ」

「あ、なのはさん！！レイジングハート」

前を横切ろうとしたリインを見て、なのはは声を上げた。その声でリインもなのはの存在に気づき、同じように声を上げる。

「怪我は大丈夫なの？」

「はい！！おかげさまで完全回復です！！」

腕を上げてそう告げるリインを横目になのはは歩き出した。レイジングハート、それにリインもなのはに着いていく。二人とも、何も話さなかった。微妙な雰囲気、リインは居心地を悪くしたのか、ゆっくりとレイジングハートに触れた。

「なのはさん・・・・・・・・・・・・・・・・」

一度は声を発したが、何を話してよいのか分からなくなり、リインは黙ってしまった。

「ん？どうしたの？」

「・・・・・・・・・・心配です」

なのはの言葉に、リインは俯きながらそう答えた。

「なのはさんが無理をしないか、リインは心配なんです。ノーマルでのエクシードモードはともかく、ブラスターモードは危険です。だから――」

「使わないよ」

リインの言葉をなのはははっきりと否定した。
だがその目はまっすぐ前を向いていて、真意を察することはリインには叶わなかった。

「ブラスターは、私とレイジングハートのホントに最後の切り札だからね。それに、エクシードだけで十分威力があるんだし、それで最後まで決めて見せるよ」

なのはの言葉で、リインは分かってしまった。

なのはが何を考えているのか、何をしようとしているのか。

なのはは使っだろう。ブラスターモードを。その怒りに満ちた目が、その証拠だ。

だがそれでもリインはそれを止めることが出来なかった。

今のなのはを止めることが出来る三人は、既にここには居ないのだから。

エリオ side

アースラの模擬戦場。そこでエリオとシグナムは刃を交えていた。二人ともバリアジャケットを身に着けて、本気の戦いをしている。刃と刃がぶつかるたびに、室内に金属音が響き、火花が散る。

音による振動が、室内を揺らす。それはシグナムにとって本気の戦いだった。

勿論リミッターはついている。だがシグナムはこの状態でルークに敗北した。

つまり、エリオは着々とルークと同じステージに立ちつつあるのだ。

「はあ!!」

一閃、槍を横薙ぎにしてエリオはシグナムを弾いた。

強い。肌でそう感じる。それでも、そのシグナムでさえもルークは超えたのだ。

そのことが、さらにエリオの闘志を燃え上がらせる。

そのルークは、正体不明の敵に敗れた。

そう思ったとき、エリオの中で怒りの炎が燃え上がった。

床を蹴り、最高速度でシグナムに接近する。突然のエリオの突進を、シグナムは何とか防いだ。

だがそのあまりの威力に腕が震える。

「ちっ！！」

舌打ちをすると、シグナムは剣を力任せに振るった。

だがエリオはそれさえも予測していたのか、抗うことなく受け流し、体を一回転させる。

そのまま遠心力を使って斬り上げようとしたときにそれは起きた。

「なっ！？」

シグナムは目を疑った。斬り上げようとしていたエリオは突然回転の方向を逆にしたのだ。

飛び上がっていた槍は、当然シグナムに叩きつけられる形になる。

斬り上げを警戒していたシグナムがその攻撃に対処できるわけが無かった。

ただ彼女ができたのは、咄嗟に後ろに下がることのみ。

「っ！？」

エリオは斬り下ろしの後すぐにシグナムから離れた。

驚いて息を詰まらせたのはシグナムである。そのバリアジャケットには僅かに切り傷が入っていた。

それを見つけたシグナムは悔しそうに唇をかみ締めた。

「どうやら私の負けのようだな。エリオ、お前は十分強くなった。本気の私を抜くのも時間の問題だろう」

「ありがとうございます。ですが、僕の目標はルークさんです。彼に並ぶまで、いえ、勝つまでは全力でいきます」

エリオの言葉にシグナムは満足げに笑った。

「それでいい。そのほうがあいつも喜ぶだろう。私ではあいつに並ぶことは出来ない。だが、お前は別だ。私と違ってどこまででも行ける。ルークと……並ぶこともな」

「はい、ありがとうございます」

エリオの言葉にシグナムは頷くと部屋を後にした。

壁際にあるベンチに座り、置いてあったタオルで汗を拭く。

すると、フリードがエリオの傍に寄ってきた。頭をなでてやると彼は気持ち良さそうに身をよじり、肩に乗った。

タオルをベンチに置いて、エリオは黙り込んだ。

今回、色々なことがあった。六課の隊長陣を初めとしてフォワードにも変化が現れている。

勿論それはエリオも例外ではない。師であるルークは倒れ、その剣も機能を失った。

自身が目標と定めた人のボロボロの姿を見たとき、エリオは絶句した。

全身に巻かれた包帯に、固定された左腕。こんな時がくるなんて、エリオは思っても見なかった。

エリオの中でルークは最強で、負けることなど無いはずなのだから、だが、ルークは敗北した。あのルークが、圧倒的に負けたのだ。それを知ったときにエリオの中で怒りが沸いた。

「……………どうして負けたんですか……………」

「

誰も居ない部屋でエリオはポツリと呟いた。

負けて欲しくなかった。いや、正確には自分が最初に勝ちたかった。

そんなことを言ってもしょうがない事は分かってる。それでも、思わずにはいられなかった。

いや、本当はこの怒りは自分に対するものなのかもしれない。

ルークを助けることが出来なかった自分、ルークに最初に勝つことが出来なかった自分。

いずれにしても、この怒りはエリオ自身の弱さに向けられている。

それに気づいたとき、エリオは力なく笑った。

ルークのことを好敵手とみなしているのはエリオだけである。

ルークは自分のことを弟子としか思っていないだろう。

だからこそ、エリオは強くならなければならないと思った。

他でもない、ルークに認められるために。そのために、まずは出来ることをしよう。

ルークは赤髪の男を倒すだろう。なら自分は・・・・・・・・黒の彼を倒そう。

エリオは決意を新たに、訓練室を後にした。

なのはside

廊下を歩いていたなのは前から、ティアナとスバルが歩いてくる。その後ろには、ヴァイスも居て、彼らはなのはを見た途端に悲しげに俯いた。

彼らは分かっているのだ。この状況で一番精神的に辛いのはなのはだ。

ティアナでも、スバルでも、ヴァイスでもない。他でもない、なのはである。

だからこそ彼らはなのはに何を言っていいか分からなかったのだろう。

その様子に、なのはは苦笑いした。

「大丈夫だよ三人とも。私は平気。ルークだつてすぐに良くなるし、ヴィヴィオも取り戻す。だから、大丈夫」

「なのはさん……………」

なのはの言葉にスバルはそう小さく呟いた。

強い子だな、そうなのはは感じ取った。自分の姉を敵に捕らわれながらも、なのはのことを心配してくれるのだから。

「さて、それじゃあ一回はやてちゃんの所に……………」

言いかけた言葉は、続かなかった。

急に展開したモニターに、なのはの最も忌むべき相手であるスカリエッティが映っていたからだ。

電波ジャック。なのははすぐにそう判断し、画面の中の異端の科学者を睨み付ける。

複数の画面でも展開しているのか、スカリエッティはなのはの視線を受け止めて不気味な笑みを浮かべた。

『ふっふっふっ、いよいよ復活のときだ。私のスポンサー諸氏、それにこんな世界を創り出した管理局の諸君、偽善の平和をうたう聖王教会の諸君も、見えるかい？これこそが君たちが忌避しながらも求めていた絶対の力』

スカリエッティの言葉でモニターが切り替わる。

そこには金と蒼で出来た時空船よりも大きな船が地上から切り離されたところだった。

その纏う雰囲気や、戦闘を想定したであろう鋭利な形。

一瞬でその場の誰もがそれが聖王のゆりがごだと理解した。

『古代ベルカの悪魔………聖王のゆりがごだよ！！見えるかい？待ち望んだ主によって古代の技術と英知の結晶は今その力を発揮する』

自分が動揺しているのをなのは正確に感じ取っていた。

モニターにヴィヴィオが映し出されたからだ。椅子に手足を固定され、彼女は気を失っている。

だが、音がなると同時に彼女は弾けるように顔を上げた。

その顔は恐怖の色で染まっている。幼い子供が決してはいけない表情を、彼女はしていた。

『うつ………ああ………痛いよ………怖いよ………ママあ！！パパあ！！』

なのは今自分がどんな表情をしているのかまったく分からない。だがその表情が周りにどんな影響を与えているのかは手に取るように分かる。

なのはの方を振り向いた三人は体を震わせていた。そこにあるのは、

恐怖という感情。

果てしなく冷たい表情を浮かべているのだろう。だが、今のなのはとってそれはどうでもよかった。

今なのは頭にあるのはどうやってこのスカリエッツィを抹殺しようかということだけなのだから。

『さあ！！ここから夢の――』

「始まると・・・・・・・・・・本当にそう思ってるの？」

なのはの呟きがスカリエッツィにも聞こえたのか、彼は言葉を止めてモニターを見つめた。

今の彼は正確になのはだけを見ているのだろう。

その目が動揺で揺れなかったことが予想外なのか、彼は辟易している。

『何が言いたい？高町なのは』

「貴方の夢・・・・・・・・・・私が壊してあげる。ヴィヴィオを連れ去ってルークをボロボロにした貴方を、貴方の部下のナンバーズも、全部ボロボロにしてあげるから・・・・・・・・・・覚悟しなさい」

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・』

なのはの言葉にスカリエッツィは何も答えなかった。ただ黙り込んだまま、モニターを切っただけだった。

廊下に、沈黙が走る。それを打ち破ったのはなのはだった。

「行くよ三人とも。はやてちゃんと会議しなきゃね」

その声は驚くほど低く、恐ろしいほど怒りに満ちていた。

ルーク side

黒と黒の刃が火花を散らせながら衝突を繰り返す。

戦闘を始めてどれくらい経っただろうか。それは俺にも分からない。それだけの時間をかけても、俺は彼女に傷一つ負わせる事は出来なかった。

ピンクのぼさぼさな髪をした彼女は間違いなく前衛タイプではないのに、その攻撃は鋭く、防御は鉄壁のようだった。

強い。俺がかつて戦ったヴァンよりも、間違いなく上。

俺が知る中ではカールに匹敵する強さだろう。

「どうしたの？ 攻撃が当たらないのがそんなに気に食わないかしら？ それとも防がれるのが不思議に思えてしょうがない？」

彼女の言葉が、俺の神経を逆撫でしていく。

怒りに身を任せて剣を振るっても、彼女には届かない。

だがそれをしなくても俺の刃が彼女に届く事は無いのだ。

ここはどこなんだ？ヴィヴィオはどうなった？俺は、こんなところでもたもたしている暇は無いのに。

その考えが俺の剣をさらに鈍らせた。その様子に彼女は苛々したのか、舌打ちをしながら剣を弾き、蹴りを放った。

俺は避けきれずにそれを受けて地面を転がった。

「ねえルーク。アンタ勝つ気あるの？」

よく言う。そこまで理不尽な力を持ったお前に勝つだと？無理な話だ。

俺は内心で諦めかけていた。叶うわけが無いのだ。格が違うのだから。

「……………なんでアンタが私に勝てないか、教えてあげようか？」

彼女の言葉に俺は眉を潜めた。そんなの決まっている。力や技、全てが相手のほうが上だからだ。

だがそうした俺の考えはすぐに否定された。

「言っとくけどアンタが私よりも力とか技とかで劣ってるとか、そんなじゃないわよ。……………アンタが偽者だと思い込んでるからよ」

その言葉に、俺は目を見開いた。

「アンタは心のどこかで諦めてるのよ。自分は偽者だから、いざという時には勝てないし本物に勝てるわけが無い。そう考えることで、

自分を押し殺してるのよ」

そんな筈は・・・・・・・・・・

「無いとは言わせないわよ。事実今アンタは私との勝負を諦めた。勝負を諦めて、人生を諦めて、アンタはどれだけ諦めれば気が済むの？どこまで逃げれば気が済むの？」

彼女の言葉が俺の心を抉っていく。

彼女の言葉は留まるところを知らない。

「どこまで逃げたところで、アンタはアンタ、偽者は偽者のままよ」

その言葉で、俺の中の何かが弾けた。

「そんなこと・・・・・・・・分かってる！！俺だって本物になりたかった！！誰かに認めて欲しかった！！代用品じゃなくて本物として、偽者じゃなく本物として生きたかった！！それでも・・・・・・・・どれだけ努力しても埋まらない差ってものがあるだろ！！」

「ないわよ！！」

俺の言葉を彼女は一蹴した。

「そんなものあるわけないでしょ！！アンタが勝手に限界を決めただけでしょ！！」

分からない。彼女が何を言ってるのか、俺にはサッパリ理解できない。

「で、でも事実俺はカーレルには勝てなかったし、それは俺が偽者だから――」

「だったら――！」

俺の言葉を彼女ははつきりと遮った。
その目には確かな怒りが宿っている。

「だったら本物になりなさい――！限界だとか、偽者だとか、そんなの無視しなさい――！アンタが本物だと思う限り――！本物なのよ――！私が認めるわ――！アンタは本物よ――！本物なのに偽者になろうとしてる、ただそれだけよ――！」

俺が・・・・・・本物？

そんなこと、一度も考えた事は無かった。生まれてきたときから俺は偽者で、俺は劣化品だと思ってきたのだから。

「アンタは誰！？ルークでしょ！？なのはとヴィヴィオの家族でしょ！？その関係は本物のはずよ――！だったら・・・・・・だったらアンタはどうするの――！」

彼女の言葉が、俺の頭を刺激していく。

様々な考えは次々と消え、たった一つの言葉が、俺の頭に残った。

「俺は・・・・・・なのはとヴィヴィオの前なら、本物で居られる」

俺の言葉に、彼女は安心して微笑んだ。

「なら・・・・・・答えは一つだ」

俺は一旦言葉を切り、頭に浮かんだ言葉を告げる。

『俺は・・・・・・・・・・なのはとヴィヴィオの前では負けない』

それが、俺が出した答え。俺を本物と認めてくれる二人を護るとい
う、誓い。

俺の言葉に彼女は満足げに頷くと剣を構えた。

「なら、やることも分かってるわね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・お前を倒してここから出る。力を貸
してもらっぞ、俺の誓いのために」

「出来るかしら？」

彼女の言葉に、俺は不敵な笑みを浮かべた。

「出来るさ。覚悟しろよ、ハロルド」

その言葉と共に俺達は床を蹴った。

はやてside

アースラのブリッジ。様々なモニターが展開するその場所で、はやては思考を巡らせていた。

モニターに映っているのはカリム、クロノ、リンディの三人である。

「やっぱり良く分かんらん」

『どうしたのははやて？』

呟いたはやての言葉に、カリムは心配そうな目で聞く。

大体のことを察したはやてにはその表情が作り物のようにしか思えなかった。

「色々や。スカリエッティやヴィヴィオの事とか。まあヴィヴィオから行こうか。ヴィヴィオはフェイトちゃんと同じ人造魔導士や。それもおそらく刷り込みされた人造魔導士。ゆりかごが動いてるのがその証拠や。言い方は悪いけど、ヴィヴィオはおそらく聖王オリヴィエのクローンなんやろ？」

はやての言葉に、カリム、リンディ、クロノは押し黙った。

はやては聡明だ。それでいて考えることを止めない。

それは味方にいるなら心強いがこういった状況になると困り者だった。

「次にスカリエッティや。奴の持つ技術そのものはミッドよりも上や。でも、伝承にあるアルハザードの技術よりも上やない。なら、

その知識はどこから出したか……。……。……。おそろくやけど、スカリエッティもクロンなんや。アルハザードか、あるいはそれと同等の文明の人間のクロン。なら、それを生み出したのは誰かって事や」

カリムもクロノもリンディも何も言えなかった。

はやてはその頭脳を用いて真相に近づこうとしている。

そして今のところその推理は的確で間違いが無いように思える。

「一番辻褄が合うのは……。……。最高評議会やろうな。スカリエッティも管理局のことをあまりよく思ってた。最高評議会がスカリエッティを生み出して利用しようとした。恐らくそれはレジアス中將も同じや。どこからどこまでが誰の計画かなんて分からんけど、言えることはただ一つ。黒幕は最高評議会って事や。最高評議会がスカリエッティを生み出してゆりかごも利用しようとしたんやからな」

はやての言葉に、カリムもリンディもクロノも何も言わなかった。いや、何も言えなかったのだ。はやての推測は、正しいとしか思えないのだから。

はやてはニコリとカリムに微笑みかけた。

「そういえばカリム。お願いがあるんやけどもう少し騎士出してくれへんかな？六課だけじゃキツイ部分もあつてな？」

その微笑に、カリムは戦慄した。

諦めたように視線を伏せて、彼女は頷いた。

「頼むでカリム。確かにカリムはお姉さんのようなものやけど、遠慮しちゃうアカンからな。ヴィヴィオの事とか」

もうカリムははやての要求を呑む以外の選択肢は無かった。
クロノとリンディが証人なのだ。聖王教会の隠蔽は、もはや隠蔽で
はなくなった。

「ほんならもう一つカリムに認めてもらおうかな」

『な、何？』

はやての意地悪な笑みにカリムは狼狽する。

「なに、民間協力者を引き入れようって話だよ。私の代わりに」

このときはやての笑顔は何かよからぬことを考えている笑顔だった。

なのはside

アースラの廊下。フォワード陣を送り出した後なのははフェイト、
ヴィータと共にはやてを待っていた。

はやてが来れば、なのはは出動となる。失敗が許されない戦いでもある。

そのため、なのはの表情はいつにも増して真剣だった。

「なのは、頑張ろうね」

横で拳を握る親友に微笑みかけて、なのはは目を閉じた。

ルークやヴィヴィオの笑顔が、瞼の裏に映し出される。

彼らを思い出すものは全て置いてきた。ルークのベッドにぬいぐるみも置いてきたし、ヴィヴィオとの思い出の品も病室に置いてきた。必要ない。これからヴィヴィオを取り返してまた思い出を作るのだから。

「おお、集まってるね」

扉がスライドする音が響き、中からははやてが出てきた。

その手には金色の十字のネックレスが握られている。

「やっと出動だね。はやてちゃん」

今すぐ出陣したいという気持ちを抑えてなのはは親友にそう告げた。だが返ってきたのはやる気に満ちた返事ではなく、苦笑いだった。

「うーん、そのことなんやけどなあ、私は今回は別行動を取らせてもらうんで？ 気になることがあるんや」

はやての言葉にその場の全員が目を見開いた。

それは普通ならありえないことである。六課の部隊長であるはやてが勝手な行動を取るなど、許されない。

だがなのは達の答えは決まっていた。はやてがそれを選んだのなら、

文句は無い。

はやてははやてで何か考えるところがあるのだろう。
だからこそ、なのは達は頷いた。

「分かった。はやてちゃんの好きにしていよ。私は私でやることやるから」

「うん、頑張ろうねはやて」

二人の言葉にはやては微笑んだ。

「まあ途中までは一緒や。フェイトちゃんはスカリエッツィの確保。ヴィータとなのはちゃんはヴィヴィオの奪還や。ほな行くで。カリム、限定解除よろしく」

『了解しました。限定解除、認定します』

モニターに映し出されたカリムが頷き、はやて達の魔力が跳ね上がる。

自身の手のひらを見つめながら納得したようになのはは頷いた。

「行こう。全てを終わらせるために」

「「「うん!」「」」」

なのはの言葉に全員は頷き、アースラを飛び出した。

空中を高スピードで四つの物体が飛行する。

その速度は音速に匹敵し、宙に浮かぶゆりかごを目的地としていた。そのうちの一つ、黄色い閃光を煌かせながら進むフェイトは急下降してなのはと高度を合わせた。

「なのは、私はスカリエッティの所に行くからここでお別れ。だけど、約束して。無茶をしてもいい、戦えなくなっても、空を飛べなくなってもいい………だけど、生きて帰ってきて」

フェイトの言葉になのはは微笑んだ。
そんなことはないと言うように。

「大丈夫だよフェイトちゃん。私は帰ってくる。ヴィヴィオを連れて、ルークの所に帰ってくるよ。だから。フェイトちゃんも死なないでね」

「……………うん」

フェイトは頷くと名残惜しそうにしながらも高度を下げた。
彼女が向かう先は、地上にあるスカリエッティの研究所。

それはなのすが目指す宙に浮かぶゆりかごとはまったく別の所である。

何も言わずに離れたのはまた会えると自分を力づけるためであろう。それを感じたからこそ、なののは急降下する金の閃光に向けて微笑みかけた。

「ほな私も離脱するな。なののはちゃん、ヴィータ、言うことは一つや、帰ってくるんやよ?」

少し高い所を飛んでいたはやてを見上げながらなののははつきりと頷いた。

その隣で飛行しているヴィータも同様に頷いている。

二人を満足げに見つめた後、はやては高度を下げた。

彼女がどこに向かうのか、何をしようとしているのか、なのにはさっぱり分らない。

だがこれだけは言える。例えばはやてが何をしようとも、それは六課のことを想つてのことだと。

どんどん高度を下げ見えなくなりつつある白い閃光からなののは目を逸らした。

足に魔力を収束させ、飛び上がる。雲をも越えた先に、金と蒼の船を見据えた。

聖王のゆりかご。それを見つめながらなののはレイジングハートを強く握り締める。

「待つててねヴィヴィオ、すぐに助けてあげるからね」

そう呟き、なののはさらに加速した。

この先、様々な敵が出てくるだろう。ルークを倒した赤髪の男だつて出てくるかもしれない。

それでもなののはは退く事は出来なかった。最愛の娘を取り返す、そ

れこそがなののは一番の行動理由なのだから。

ゆりかごに到着したとき、なのはは目を疑った。

内部から数え切れないほどのガジェットが出現しているからだ。

その数は視界を覆うほどで、莫大な数が存在しているということしか分からなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・面倒だね」

宙に浮いたままなのはは呟いた。その隣に浮かぶヴィータも同意見のようでゆりかごを睨み付けている。

ガジェット一体一体は大したことは無い。戦力としても雑魚同然だ。だがここまで数が多いと時間がかかる。その間にゆりかごが軌道上に達してしまえば、敗北は必至だ。

航空部隊や騎士が多数出陣しているが、それでも数の差は圧倒的である。

なによりもこの場を指揮する者が居ないのが痛手だった。

はやてが理由があつてこれないのは分かっている。だがこれではあまりにも痛手過ぎた。

「どうするヴィータちゃん。一人はここに残つて指揮に専念する？」

「本当はルークが居ればアタシがやったんだが………無いものをねだつてもしょうがないよな。よしここはアタシが……」

「その必要は無いよ」

後ろから聞こえた懐かしい声になのはは振り返つた。

そして目を見開いた。そんな訳ない。居るはず無いのだ。彼は10年前に管理局をやめた筈なのだから。

「グレアム………さん？」

そこに立つのはかつて英雄と謳われた男だった。

10年たつてもその眼光は変わらず、鋭くゆりかごを見据えている。その横では彼のパートナーである二匹の使い魔が立ちつくしていた。

「はやてくんから連絡があつてね。力を貸してほしいということだったよ。今は民間協力者だが………私にも出来ることはあるかな？」

グレアムの言葉になのはは一瞬言葉を失つたがすぐに笑顔になった。

「あ、ありがとうございますグレアムさん!!」

その言葉にグレアムは微笑むと、ヴィータに視線を遣つた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・君は・・・・・・・・昔と変わらないね」

ヴィータはその男を見たときからずっと視線を外すことが無かった。その顔は無表情で何を考えているのか窺い知ることは出来ない。

「アタシはプログラムだからな。変わらねえよ。そんなことよりこは任せるぜ。行くぞなのは」

「あ、うん」

かつて伝説と謳われた男に対する言葉遣いにしてはそれは厳しいものだった。

だがヴィータもグレアムも気にはしていない。二人はそういう関係だからだ。

過去が、二人の間に確執をもたらしている。

ゆりかごに突進しようとするヴィータを見ながらグレアムは彼女を引き止めた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・私を罵らないのか？」

グレアムは10年前、ヴィータに恨みを買ったようなことをした。

勿論全員に謝ったし、はやてには許してもらった。

だが目の前の赤い騎士だけは、彼の謝罪を受け入れようとはしない。ヴィータはため息をつくと振り向いた。その顔はめんどくさそうだ。

「アンタを許すか許さないかははやてが決めることだ。アタシが決めることじゃない。少なくともはやての頼みでアンタがここに来てくれたのなら、一応は感謝する。ありがとうな」

ヴィータは言いたいことだけを言うすぐに飛び去ってしまった。

その場になのはとグレアム達が残される。

グレアムは俯くと袖で顔を拭った。その袖は濡れていて、彼が涙を流したことが分かる。

「ありがとう……か。ここまで嬉しい気分になったのは初めてだよ」

グレアムの言葉になのはは微笑んだ。

「それじゃあお願いします。行つてきますね」

「ああ、はやくくんから聞いたよ。娘を、助けに行くそうだね。健闘を祈る」

「グレアムさんも」

お互いに微笑みあった後、なのははその場を離れた。
高スピードでヴィータの後を追う。

その様子を見ながらグレアムは杖を構えた。

「クリスタロス、セットアップ」

>>standbyready<<

電子音が響き、グレアムの体を光が包む。

それが消えたときには彼は鎧のようなものを身に着けていた。

その手には細剣が握られている。雪を思わせる白い刀身に黄金色の柄がよく映える。

それを振るい、グレアムは目の前のゆりかごを睨み付けた。

それと同時に二体の使い魔であるリーゼロッテとリーゼアリアも戦

闘体勢に移行した。

『聞こえるか皆の者。私はギル・グレアムだ。民間協力者としてのこの戦闘に参加する。だが今回の敵はあまりにも強大だ。私一人では倒せん。君達の力を貸してくれ』

全員に行き渡った念話はその場の士気を上げるには十分すぎた。周りはすぐにざわつきだした。管理局の中でも最高とされる戦力。引退した今でもその力は健在だろう。その力が味方に着いてくれるのだ。

もう恐れるものなど何も無い。ゆりかごの戦力に気圧されていた魔導士は再び杖を握り戦場を駆け回る。

そこに居る誰もが、勝利を諦めない目をしていた。

「まさか・・・・・・・・・・・・ここまでとは」

その光景を見てグレアムは感嘆の声を上げた。

予想を遥かに上回る士気の高さに驚いているのだ。

彼が管理局にいた頃よりも、団結している。やはり管理局を彼女達に任せてよかった。

かつて悲しませた少女を脳裏に描きながら、グレアムは剣を構える。もう自分が出ることはないだろう。これが本当に最後の戦いだ。だが、彼女は自分を求めてくれた。それだけで十分だ。

「行くぞアリア、ロッテ、はやてくんのために、勝利する」

『はい！！』

それは、グレアムの初めての勝利宣言だった。だがそんな言葉が出るくらい彼は自信に満ち溢れていた。

かつて無いほど強大な敵を前にしていても、絶対に負けないという意志。

そのために、逃げ道など作る必要は無い。あるのは勝利という道のみ。

『総員に告ぐ！！勝利だけを考えろ！！恐れるな！！』

その言葉と共にグレアムは前に飛び出した。
それに続くように二人の使い魔も飛び出す。

かくして管理局の伝説と呼ばれた男の最後の一戦が幕を開けたのである。

なのはside

先遣隊の報告でゆりかごの入り口を発見したなのはとヴィータは戦場をグラムに任せ、内部へと侵入した。

だが、内部に入ったとたんに浮遊魔法が効かなくなるのが分かった。

「AMF・・・・・・ゆりかご内部に限なく発生してるみたいだね」

「めんどくせえことこの上ねえな」

ヴィータが心底嫌そうに呟くのとモニターが開くのはほぼ同時だった。

画面にルキノとゆりかごの内面図が映し出された。

『突入隊、スターズ分隊へ、玉座の間と駆動炉の場所が判明しました』

それと同時にゆりかごの内面図の二ヶ所が光る。それは全くの真逆方向だった。

「めんどくせえな、よりにもよって逆かよ・・・・・・ってことは、分かってるよなのは？」

「・・・・・・うん」

ヴィータの言葉になのはは頷いた。

本当なら別れたくはない。だが、そんなことを言っている場合でないことは明らかだった。

なによりも、そうしなければならぬとなのは自身が考えてしまっているのだから。

「気をつけて」

「お前もな。さっさとヴィヴィオを取り返しに行けよ」

「うん」

なのはの言葉にヴィータは何も言わずに踵を返すと走り出した。そのまま振り返ることなく、彼女は小さくなっていく。

本当にヴィータちゃんらしいな、となのはは苦笑いした。

ぶっくらぼうだが、それでいて自分達のことをどこまでも考えてくれている。

そんな彼女の優しさをなのはは知っていた。だからこそ、期待に答えなくてはならない。

足に魔力を集中させて、僅かに浮かび上がる。

A M Fのせいで魔力結合がしづらくなっているが、完全に出来ないというわけではない。

この状況下で正確に作用するのは収納魔法ぐらいであるが。

そこまで考えてからなのはは気づいてしまった。収納魔法。

それはルークと町に行くためになのはが覚えた魔法だった。

そこにハロルドを入れて町に遊びに行くのが彼女の幸せだった。

笑いかけてくれるルークと、姿が見えなくても声が聞こえるハロルド、そして自分の手をしっかりと握ってくれるヴィヴィオ。

その三人で居られる事、それだけでなのはは幸せだったのに。

なのに、その小さな幸せも、すぐに壊された。

息を吐いて意識を入れ換える。壊されたのなら、取り戻せばいい。作り直せばいい。

そのために、やることは一つだ。

怒りの炎を胸に宿したまま、なのはは石造りの廊下を駆けた。

目の前を、沢山の機会が塞いだ。その様子になのはは忌々しそうに舌打ちをした。

邪魔だ。所詮雑魚の癖に道を塞ぐな。なのはは内心でそう叫び、レイジングハートを構える。

「邪魔だよ、A・C・Sドライバー!!」

声高に叫び、レイジングハートに魔力を注ぎ、赤の刃を創造する。さらに速度を上昇させ、なのはは一陣の風となってガジェットを殲滅した。

攻撃特化に機能を切り替えたために防御が手薄となり、なのはは怪

我を負った。

だが、その痛みさえなのはは無視した。こんな小さな痛み、ルークやヴィヴィオの痛みに比べれば些細なことだ。

頬から流れる血を袖で拭い、なのはさらに速度を速めた。

どれだけ血を流そうが、どれだけ怪我をしようが関係ない。

ただ邪魔するものを蹴散らすのみだ。

そう思いながら曲がり角を回ったとたん、紅の閃光が迫ってきているのをなのはは確認した。

一旦立ち止まり、レイジングハートを構える。

「エクセリオン、バスター!!」

桃色の閃光が撃ちだされ、紅の閃光と衝突する。

それらはお互いを喰らい合うように拮抗した。

「っ、どいて!!」

なのはの声と声量に比例するように桃色の閃光は巨大になる。

それは紅の閃光だけでなく、それを放った砲撃者までも飲み込んだ。床を挟り、砲撃者を瀕死に追い込んだのは躊躇うことなく彼女を拘束する。

その目は既にその奥を見ていて彼女のことなど気にかけてすらいない。

なのはを見上げたデイエチは言葉を失っている。

なのはの背後に修羅を見たからだ。絶対に敵に回してはいけない。

デイエチはそう思ったことだろう。今のなのはには、手加減という言葉は適応されない。

「じつとしてなさい。これ以上怒らせないで」

喋りながらディエチのヘビィバレルを封印し、なのはは再び空を駆けた。
背後で倒れているディエチのことなど、もはや眼中にも無かったのである。

ヴィヴィオside

玉座の間。そこでヴィヴィオは椅子に拘束されていた。
目には恐怖の色が宿っているが、涙を流してはいなかった。
その横には全身タイツに白のマントを羽織ったクアットロがモニター越しになのはを見つめている。
その唇は吊り上り、歪んだ笑みを浮かべていた。

「怒りで威力を倍増させて突破…….とんだ脳筋ね。
この程度、どうやら敵でもないみたい。ねえ陛下？ 貴女ママは相
当お馬鹿さんですよ？」

クアットロの言葉にヴィヴィオは顔を上げて彼女を睨み付けた。その反応を快く思わなかったのかクアットロは眉を顰める。

「ママの悪口を言わないで!!」

ヴィヴィオの言葉にクアットロの中で何かが弾けた。

彼女をここに連れてきたときからクアットロはヴィヴィオのことが気に食わなかった。

恐怖の色を浮かべながらもまっすぐと敵を見据えるその目も、こんな状況下で泣くことさえない子供とは思えない態度も、すべてが癪に障った。

彼女は知らない。どうしてヴィヴィオがそんな態度でいられるのか。その脳裏に亜麻色の髪之母と朱髪の父親を思い浮かべていることも、彼らから勇気を貰っていることさえ、知る由も無かった。

ヴィヴィオは全て分かっていたのである。いや、信じていたというのが正しいか。

彼女はなのはやルークが助けに来てくれると確信していた。だからこそ、弱音を吐かなかったし涙を見せなかったのだ。

だがそれはクアットロ相手では逆効果だった。

逆上したクアットロはヴィヴィオの金の髪を掴み、引っ張った。

その力でヴィヴィオは無理やり上を向かせられる。

痛みでその顔は歪んでいたが、彼女は毅然としてクアットロを睨み付けていた。

絶対に弱音を見せない。子供が普通持たないような意志を見せ付けられてクアットロは手を離れた。

途端にヴィヴィオは下を向いた。痛みに顔をしかめているのが分かる。

それを見ながらクアットロは舌打ちしモニターに目をやった。母親が母親なら子も子ね、とクアットロは忌々しげに呟いた。

気分が悪い。それがクアットロがヴィヴィオに抱いた印象だった。普通とは違う態度も、その意志も、何がそうさせているかも、知ることとは出来なかったのである。

扉が轟音を立ててその形を歪に変形させる。

次の瞬間にはそれを破壊してその向こうから桃色の閃光が飛び出した。

来た。クアットロは瞬時に察し扉のほうに視線を向ける。

今この状況で、しかもこんな乱暴な侵入をする人間は一人しかない。

クアットロが思ったとおり、巻き上がった煙の中から飛び出したのは白の魔導士だった。

「いつらつしゃーい！こんなところまで無駄足ぐるうさま。とこ・ろ・で、各地で貴女のお仲間は大変なことになってますよ？」

心底苛々させる口調で、クアットロは言葉を紡ぎながらモニターを展開した。

そこには機動六課のメンバーが映し出されている。

誰も彼も苦戦しているようで、ボロボロだった。

だがなのははそれを見ても顔色一つ変えずに玉座に拘束されたヴィヴィオを見つめた。

ヴィヴィオはなのはが来たことで表情を明るくした。

だが彼女はそれだけで、何も言わなかった。信じているのだ。

なのはが助けてくれることを。

「仲間の危機と自分の子供のピンチにも表情一つ変えませんか。いいですねえ、その悪魔じみた正義感」

クアットロの腕が伸びて、ヴィヴィオを掴もうとする。

正確に髪を狙った腕に、ヴィヴィオは彼女を睨み付けた。

しかしクアットロがヴィヴィオに触れる前に、なのはの砲撃が玉座の横を吹き飛ばした。

だがクアットロは瞬時に消えた。上空にモニターが展開し、そこにクアットロが映し出される。

『あらあら怖い怖い』

人を小ばかにするような笑みで話し続けるクアットロをなのはは睨み付けた。

その目は怒りに染まっている。レイジングハートを構えたまま、なのははじつとクアットロを見つめた。

「正義感とか、そんなので動いてるわけじゃないよ。私は今怒りで動いてる。ルークをボロボロにしてヴィヴィオを誘拐した貴方達を、私は絶対に許さない」

なのはの言葉にクアットロは首を傾げた。その様子になのはは訝しげな顔をする。

『あのおー、前に聞いたときから思ってたんですけど、ジョーカー、あ、ルーク・フォン・ファブレのことですよ？……………が、ボロボロになったっていうのは本当なんですか？』

先程のふざけた雰囲気ではなく真剣に聞いてくるクアットロになのはは首を傾げた。

彼女は一体何を言っているのだろうか？なのははそう思い、言葉を発した。

「何を言ってるの？貴女達が、正確には貴女の仲間である赤髪の男

「がやっただんでしょ？」

『赤髪の男？私達ナンバーズは皆女性ですし、協力者の男性も赤髪ではありませんよ？』

「え？・・・・・・・・・・・・・・・・・・な、ならなんでヴィヴィオがここに居るの！？」

クアットロの言葉になのはは一瞬訳が分からないといった表情をした。

しかしそれは玉座に拘束されたヴィヴィオを見ることですぐに変わった。

ヴィヴィオがここに居る以上、赤髪の男とクアットロ達が関係しているのは間違いないはずだ。

だがそれでもクアットロは首を横に振った。

『そんなの私も分かりません。気づいたら陛下は袋に包まれてここに居たんですから』

なら、クアットロと赤髪の男は関係ないということだろうか？

それなら益々分からない。クアットロ達はまだいい。目的はゆりかごの起動だろう。

なら、赤髪の男の目的とは何だ？彼は、何がしたい？

そこまで考えたとき、なのはの頭の中を一つの言葉がよぎった。

『なんて言うか・・・・・・・・・・不気味な方でした。人間でないような・・・・・・・・そんな・・・・・・・・』

それは赤髪の男を見たアイナの言葉。

その気持ち悪さの欠片を目にしているみたいだった。

目的が分からないことは気持ちが悪いことでもある。
だが普通は予測できるものだ。相手が何をしたいか、それがつつすらと分かる。

だが、その男のことはまったく分からない。予想してみても、彼が何をしたいかなど見当もつかない。

『まあでもそれなら好都合ですね。ジョーカーが居ないなら、私達の勝利はぐっと近くなるわけですから』

不意に言われた言葉に、なのははクアットロを睨み付けた。

「変わらないよ。私が居る限り、変わらない」

『ふふ、強気ですねえ、でもどこまで強気で居られます？』

クアットロの声に呼応するように玉座に電流が走る。

「う．．．．．あああああ！！」

それに伴いヴィヴィオが苦痛に顔を歪める。

「ヴィヴィオ！！」

なのはは叫び、ヴィヴィオに近づこうとするが、ヴィヴィオを中心に球体が展開し、なのはを吹き飛ばす。

なんとか起き上がった顔を上げたなのはは信じられないものを見た。展開した球体の中で一糸纏わぬヴィヴィオが浮いている。

「ママ．．．．．逃げて．．．．．」

自身のうちから噴き出す強大な力を悟っているのだろう。

苦痛に顔を歪めながらもヴィヴィオはなのはにそう呟いた。

だが、なのはとしてもこんなところで逃げ出すわけにはいかない。ここで退けば、ヴィヴィオには二度と会えない。それになにより、ヴィヴィオを見捨てて逃げるなんて出来ない。

クアットロがここまで強気で出るということはヴィヴィオの中に眠る聖王の力を利用するつもりだろう。

今の自分の力がどこまでその力に対応できるかは分からない。だがそれでも退くわけにはいかなかった。

「違う………なのはママはそんなことしない!!」

内部でクアットロに何か言われているのだろう。

だがそれを否定するようにヴィヴィオは首を横に振っている。

しかし次の瞬間には目を見開き、目に見える形で苦しみ始めた。闇がヴィヴィオを包み、その姿が大きくなる。

成長したその肢体を黒のバリアジャケットが次々と包んでいく。球体が消えたとき、そこには光の無い目でなのはを見つめる成長したヴィヴィオが佇んでいた。

なのはと同じように横結びにした髪形に、これまたなのはのバリアジャケットを真似た黒のジャケット。

その姿はとても神秘的で、可憐だった。しかしその目には生気が宿っていない。

「ヴィヴィオ!? ヴィヴィオ!!」

『失敗? いえ………これは………』

「目の前の魔導士の戦力を分析。魔力素質オーバーSランク。危険人物と断定。速やかに排除に移ります」

「え？・・・・・・・・・・・・・・・・」

それは、機械的な声だった。

表情に何の感情も映すことなく、彼女はただなのはを見つめているだけだった。

「自身の魔力の爆発的な展開を試行・・・・・・・・失敗。意識の混雑を確認。不要な意識を排除」

その言葉が何を表しているのか、なのはにははっきりと分かってしまった。

ヴィヴィオの中にある聖王のプログラムはヴィヴィオの精神を消そうとしているのだ。

「削除まで15分。その間敵の魔導士に対して有効な防御壁を展開」

ヴィヴィオが手を前に出すと同時に透明の壁が出現した。

『少々失敗したようですが・・・・・・・・問題は無さそうですね。それでは頑張ってください』

人を苛々させる声を発しながらクアットロはモニターを切った。

そこに残るのは、なのはとヴィヴィオの二人だけ。

「ヴィヴィオ・・・・・・・・・・絶対に連れて帰るからね!!」

なのはの叫びに、ヴィヴィオは反応さえしなかった。

ルークside

白い空間に金属音が響き渡る。

まったく同じ性質の剣は、まるで鏡写しのように衝突を繰り返し、互いを殲滅しようと意気込んでいるように思えた。

だが、それを操る俺達は笑みを浮かべて剣を振るっている。まるで戦闘そのものを楽しんでいるかのように。

ハロルドの一言で目を覚ました俺は、完全に有利になった。

技も、力も、向こうの方が上だ。だが俺には信念がある。

揺るぎなき、なのはとヴィヴィオを護るという信念が。

そのたった一点だけで、俺はハロルドに勝っていた。

「これは……………。凄いわね。まさか私が押されるなんて、考えてもみなかったわ」

一旦距離をとったハロルドが心底嬉しそうに呟いた。

その目はまっすぐ俺を見据えている。

先程までは苛々していた視線だったが、今は何かを期待しているような目をしているように思えた。

「これなら、いいかもね。聞きなさいルーク！」

何かを呟いたハロルドは次の瞬間には俺の名を叫んだ。

「アンタの言うとおり私はハロルド・ベルセリオス。ソーディアン・ベルセリオスの管理人格よ。カーレルが言ってたでしょ？ルークは私の力を引き出せていないって」

「ああ、でもそれは本当に適合者じゃないからで……」

「御託はいいのー!!」

俺の言葉をハロルドは真っ向から否定した。

「いい？本来ソーディアンマスターを真のソーディアンマスターにするには私が作った機械が必要になるわ。でも、もう一つ方法があるの」

「方法？」

俺の言葉にハロルドはしっかりと頷いた。

「そう。それがソーディアンシンクロプログラム。ソーディアンの管理人格が精神世界を創造して、その中で仮のマスターが管理人格を屈服させることで成り立つ二つ目の方法。それがソーディアンシンクロプログラム」

ハロルドの言葉に俺は目を見開いた。ならこの状況は、つまり。目の前のハロルドが苦笑いをして首を横に振った。

「でもこの方法は普通は絶対に取りられない方法よ。なんでだか分かる？」

ハロルドの言葉に俺は首を傾げた。

彼女は一旦息を吐いて、告げた。

「その仮のマスターと生死を共にするからよ。屈服させるといってこ

とは、そのマスターに身も心も捧げるってこと。それをすれば、仮のマスターは全ての能力を使うことが可能になる。でも、これは言ってしまうと管理人格とマスターを融合させることに近い。これを行えば私はルーク以外をマスターには出来ないし、何よりもルークが死んだときにソーディアン・ベルセリオスそのものも消滅する」

その説明に俺は絶句した。それはすなわちハロルドの全てを預かるということだ。

そして俺が死んでしまえば、ハロルドは消滅する。

今まで利害を考えて動いていたハロルドから出るとは思えない提案だった。

「正直私は構わないわ。それをしなければ兄さんには勝てない。勿論それをしたところで絶対に勝てるって保証は無いわ。少しでも勝率を上げるっただけ。それでも私はこの世界に来た。そして今のルークなら、私は認めてもいい。後は、アンタ次第」

ハロルドはじつと強い目で俺を見ているだけだった。

そこに迷いは一切無い。ハロルドは本気だ。本気で兄を倒そうとしている。

全てを理解して、この提案をしてきている。

その中にはヴィヴィオやなのはのこと、それに俺のことも含まれているのだろう。

だから話したのだ。俺に、ソーディアンシンクロプログラムの事を。なら、俺もそれに応えなくちゃならない。

「……………分かった。受けよう。戦って、勝てばいいんだろ？」

俺の言葉にハロルドは何も言わなかった。ただ、しっかりと頷いた

だけだった。

剣を構え、俺達は相手の出方を伺う。この戦いは、負けられない。護ると誓ったヴィヴィオのために、なのはのために。そしてなによりもハロルドのために、負けられない。

「行くぞハロルド!!」

「来なさい!!」

俺達は殆ど同時に床を蹴った。一気に肉薄し、飛び上がる。

「岩斬滅碎陣!!」

振り下ろした刃は、ハロルドの持つ漆黒の剣に受け止められた。全体重をかけているのに、ハロルドは易々と剣を振るった。

「ネガティブゲイト!!」

弾かれたところで、漆黒の球体が飛来する。

それを剣で切り伏せながら着地した俺はすぐに防御を固めた。

俺の予測が正しければ、この後に来るはずだ。

「さらに!!イーヴィルスファイア!!」

「粹護陣!!」

俺を包み食い殺そうとする闇の攻撃を、俺は障壁を展開することでなんとか防いだ。

それが終わると同時に俺は床を蹴った。ハロルドは剣術を習っていない。

それは先程の斬りあいでも既に分かっていた。ハロルドが出来るのは防御と弾きのみ。

晶術は強力だが、近づけば問題は無い。後はどうやってハロルドの防御を抜くかが問題だった。

鉄壁のような防御に、防がれば弾かれて晶術の餌食、かなり詰んでいる状態だ。

一気に距離を詰めた俺は横に飛んだ。

攻めてくると思っていただであろうハロルドは目を見開いて驚いている。

ハロルドに剣術の腕が無いのなら、これも一つの手だろう。

「飛燕瞬連斬！！」

ハロルドを通り抜け、切り上げる。しかし一撃で俺の攻撃を見切ったハロルドは直ぐに後ろに下がった。

そのため俺の剣はハロルドを捉えることは出来ず、空を切った。

すぐに技をやめて距離を取る。ハロルドは動かずにじっと俺を見つめていた。

晶術以外でハロルドが自分から攻撃することは殆ど無いだろう。

彼女のスタイルは攻撃を受け流して晶術で反撃するものだ。

なら、既にハロルドに知られている技で彼女に勝つのは無理だ。

圧倒はしている。鋭い攻めに、ハロルドも余裕が無い。

だが、決定打にはならない。そもそも俺の技は全てハロルドに知れ渡っている。

そこまで考えてから俺はあることに気づいた。ある。一つだけ、ハロルドの知らない技が。

正確には二つだがこの疲労状態では放てるのは一つだけだろう。

勝機を見出した俺はニヤリと笑い、腰を落とした。

俺の意味深な笑みにハロルドは首を傾げる。だがそれでも剣を構え

ることを止めようとはしない。

剣を下段に構え、俺は床を蹴った。
おそらくこれが最後のチャンス。それを無駄にはしない。
俺は歩みを止めて拳を振り上げる。

「魔神拳!!」

拳から床を這うように衝撃波が発生し、ハロルドめがけて走る。
それを超えるスピードで、俺は再び走った。
衝撃波を追い越し、一気にハロルドに肉薄する。
予想外の行動に、ハロルドは一瞬だが行動が鈍った。
その一瞬で、十分すぎた。

「空破絶風撃!!」

風を纏った斬撃はハロルドの持つ剣に防がれた。

「雷神剣!!」

俺の言葉にハロルドは弾けるように後ろに飛んだ。
これで雷神剣の雷は避けれて魔神剣からも遠ざかれる。
ハロルドの判断は正しい。だが、次の瞬間にはその顔は驚愕に染ま
った。

技を放ったはずの俺が懷に潜り込んでいたからだ。

雷神剣は、**囧**。魔神拳も何もかも、この瞬間のための布石だった。

「行くぜハロルド!! うおおおおおおおおおおおお!!」

一気に体の中に眠る力を解放する。

超振動の波はハロルドの体を傷つけながら地面から噴き出す。技は、全てハロルドに使用した。だが、これならどうだ。

両手を掲げ、浮かび上がったハロルドに命中するように球体を創造する。

疲労しているため強力なものが創造できないが、十分だろう。

「これで・・・・・・・・・・・・・・・・終わりであああああああ！」

レディアント・ハウル。

俺が持つ技の中で二番目に高い威力を持つそれはハロルドを飲み込む。

それが弾けると同時にハロルドは床に落ちた。

勝敗は決した。そう思い俺は剣を鞘に込める。

倒れているハロルドを起こすと、彼女はゆっくりと目を開けた。

「負けちゃったわね。でも、これでいいわ。今のルークになら、いい」

ハロルドは俺を力なく押しのけて離れると膝をついた。

それと同時に足元に魔法陣が展開される。ふと目を遣るとハロルドの足元にも同じようなものが展開していた。

「ソーディアンシンクロプログラム発動。ソーディアン・ベルセリオスの管理人格、ハロルド・ベルセリオスはルーク・フォン・ファブレをマスターとして認識し、服従することを要求します。マスター、許可を」

これがソーディアンシンクロプログラムなのだろう。

俺は一旦息を吐いて、はっきりと告げた。

「許可するよ」

「よろしくお願いします。マスター」

その物言いに、俺は苦笑いした。

立って、と告げるとハロルドはすぐに立ち上がった。

ボロボロのその体を、俺はゆっくりと抱きしめた。

「今までどおりでいいよハロルド。主とかマスターとか、そんな関係じゃないだろ？でも……ありがとうな、ハロルド。本当に、ありがとう」

カーレルのことがあったとしても俺を認めてくれたハロルドに、俺は感謝した。

彼女が居なければ、俺は途中で死んでいただろう。

「そうね、正直あの口調は背中がむず痒くなったわ」

クスクスと笑いながら、ハロルドはそう告げた。

「でもいいのかしらね？こんなことしたってなのはに言ったら彼女怒るわよ？」

意地悪そうなその言葉を、俺は鼻で笑った。

ゆっくりと体を離し、ハロルドに微笑みかける。

「別に他意はないだろ？それに、なのはだって同じことをしたよ」

俺の言葉にハロルドは心底つまらなそうにため息を吐いた。

「美しい愛情なこと。．．．．．さて、出るわよ。もうここに居る意味は無いわ。アンタの傷も塞がったようだしね」

「ああ、行こう。すべてを終わらせに」

光が空間を包み込み、俺とハロルドと共に、消滅した。

初めて見たのは白い天井だった。

上半身を起こし、辺りを見回すとすぐにハロルドが目に入った。シャツターは開き、そこからコアが覗いている。

『ようやく目覚めたようね。気分はどう？』

「問題ないよ。強いて言うならさっきまで人間として話してた奴が剣になつてることに違和感を感じるだけかな」

『それはしょうがないわよ。私は結局あの世界じゃないと人の形を取れないんだから』

クスクスと笑いながらそう言うハロルドに俺は苦笑いした。左腕を持ち上げて、巻いてある包帯を外す。

そこには斬られた痕跡などまったく見られない俺の腕があった。一体何がどうなってるのかよく分からないが、傷は全て癒えたようだ。

ふと、何かが落ちる音が部屋に響いた。

顔をそちらに向けてみると、アイナさんが啞然とした表情で俺を見つめていた。

「ル、ルーク・・・・・・・・さん？」

「ああ、アイナさん。おはよう」

「お、おはようって・・・・・・・・・・・・・・・・」

気の抜けたように彼女は床に座り込んでしまった。俺は慌ててベッドから飛び降りて彼女に近づいた。膝を付いて彼女の肩に触れる。

「だ、大丈夫ですか？」

「は、はい。大丈夫です・・・・・・・・・・。ルークさんこそ大丈夫なんですか？」

「ああ、俺は大丈夫だよ。それよりなのは？」

俺の言葉に固唾を呑んだアイナさんはゆっくりと話し始めた。

ヴィヴィオが誘拐されたこと。それによって聖王のゆりかごという船が蘇ったこと。

それを止めるために機動六課は出動したこと。

その全てを聞いて俺は立ち上がった。

「アイナさん。行ってきます。ヴィヴィオを取り戻しに」

「で、でも！」

声を荒げたアイナさんを俺はじつと見つめた。

アイナさんの気持ちは尤もだ。先程まで寝ていた人間が直ぐに戦闘に赴くなんていいことじゃない。

でも、ここで俺が戦闘に参加しなかったら俺は一生後悔する。

だからこそ、俺ははっきりとアイナさんに告げた。

「行ってきます」

俺の言葉に、アイナさんは何かを言いかけたが、諦めて微笑んだ。

「行つてらっしゃい。私が言うことでもありませんが、ヴィヴィオちゃんをよろしくお願いします」

「はい！」

俺ははっきりとそう言つと壁に立てかけてあつたハロルドを腰にさして病室を飛び出した。

「にしても、こんなに傷が治ってるのはお前の仕業か？ハロルド」

病院の廊下を走りながら俺はハロルドに治っている傷について聞いた。

普通病院の廊下を走ることとは褒められたことではないが、今は緊急事態で見逃してほしい。

まあ出会う人出会う人が俺の姿を見るなり目を見開くので注意されることなどないのだが。

『そうよ。正確にはソーディアンシンクロプログラムのお陰ね。勿論私がかけたキュアやこの病院の設備のお陰もあるでしょうけど。まあ要するに今のアンタは私の分の力も持つてゐるわけ。言ってみれば回復力が二倍あるってことね。多分レンズの移動距離も伸ばせるわよ？』

「そうか」

俺は素っ気無く言ったが内心ではハロルドに感謝していた。それもこれもハロルドが俺に全ての力を貸してくれるからだ。

その結果、俺は新たな力を手に入れた。それがどこまでの力なのか、俺には分からない。

カーレルに対抗できるのかさえ、俺は知る由も無い。だが、一つだけ言える事がある。

負けられない。ハロルドがくれたこの力を振るう以上、俺は絶対に負けられない。

そのために、まずはヴィヴィオを取り戻す。

だがそこまで考えてからふとあることに気づいた。

どうやってゆりかごに行くかである。

距離的にはレンズの移動では絶対に届かないだろう。

ならヘリを出してもらうしかない。俺はモニターを開き、ヴァイスに通信を繋いだ。

もう彼も出ているだろうが、ヴァイスなら他にパイロットが出来る人間を知ってるかもしれない。

『ルークの兄貴！！大丈夫なんですか！？』

モニターに映し出されたヴァイスは目を丸くしている。

俺は微笑むと左腕を見せた。

「ああ、大丈夫だ。すぐに出来る。ところで他にヘリが出せる人間を知らないか？お前はもう出てるんだろ？」

『え？ああ、えっと……………確かアルトが出来たと思います。通信とってみてください。今はルキノが指令をやってるんです』

「分かった、ありがとう」

そう言ってモニターを切ろうとしたとき、俺はヴァイスが辛そうに俺を見つめていることに気づいた。

「どうした？」

『どうして……………』

俺の言葉にヴァイスは目を逸らしながら、小さく呟いた。

『どうしてそんなに強くあれるんですか？ボロボロになって、左腕まで切り落とされて、なのに、もう戦場に行けるって、おかしいですよ』

ヴァイスの言葉は尤もだった。普通に考えれば俺の行動はおかしいのだろう。

だがそれでも、俺にも譲れないものがある。

「関係ないだろ？」

『え？』

「ボロボロになるとか、左腕を切り落とされたとか、関係ないよ。ただ、俺は護るべき者のために戦うだけだ」

『なら……………』

ヴァイスはゆっくりと言葉を紡ぐ。

その顔は俯いていて表情を窺い知ることが出来ない。

『なら、その護る者を間違っただけで傷付けちゃったらどうすればいいん

すか？
』

「また護ればいいだけだろ」

ヴァイスは目を見開いた。

構わずに俺は言葉を紡ぎ続ける。

「自分のミスで護りたい人が傷ついたのなら、もう二度傷つかない
ように護ればいい。ミスしないぐらい強くなればいい。それだけだ。
もう切るぞ」

モニターを切って、俺は病院の廊下を駆け抜けた。

なのはside

「エクセリオン………バスター!!」

杖から桃色の砲撃が発射され、ヴィヴィオに迫る。
しかし閃光は透明な障壁に遮られ、消滅した。

「敵魔導士の魔力データを更新………現時点での有効な防御魔法は無し。戦闘態勢に移行します」

感情の籠っていない声でヴィヴィオはそう呟くと構えを取った。
はっとしてなのは杖を構える。

槍のような形状をしたレイジングハートの先端が、ヴィヴィオに向けられる。

刹那、轟音を立ててヴィヴィオはなのはに急接近した。

その途中で急に重心を落とし、僅かに左に移動する。

予想外のヴィヴィオの行動になのは反応が遅れた。

彼女に出来たのは高速で迫る拳を杖で弾く事のみ。

だがなのはの想像以上にヴィヴィオの拳は重く、弾いたにもかかわらず威力を殺しきれずに吹き飛ばされた。

痛みに顔をしかめながらも、なのはは視界の先にいるヴィヴィオの掌に魔力弾が形成されていくのが見えた。

咄嗟に防御を固めるが、ヴィヴィオが投げた魔力弾はなのはに当たると同時に爆発し彼女を更に天高く吹き飛ばした。

「対象への有効なダメージを確認、このまま撃墜まで同プロセスを実行します」

聞こえた言葉に、なのはは背筋が凍る思いをした。

それは、背後から聞こえた。気づいたときには背中に衝撃が走り、体全体を痛みが襲っていた。

先程の一瞬でヴィヴィオはなのはの背後に回りこみ、そして吹き飛ばしたのだ。

吹き飛ばされたなのははゆりかごの床に衝突し、転がった。

衝突した地面は陥没していて、それがヴィヴィオの拳の威力を物語っていた。

土煙が噴出す中からなのははなんとか起き上がり、視線をヴィヴィオに向ける。

強い。ルークに並ぶといっても過言ではない強さだ。

だが、拳の威力や動きといい、どこかごちないように思える。

事実こうしている間にもヴィヴィオは追撃をかけては来ない。

土煙が晴れたとき、目の前には立ち尽くすヴィヴィオが居た。

その目は虚ろだが、先程と違い、どこか人間味があった。

「マ………マ？」

「ヴィヴィオ!!」

かすめるような声で呟かれた言葉に、なのはは叫んだ。

ヴィヴィオはゆっくりとなのはに視線を向ける。

次第に目に光が戻っていき、完全に戻ったとき、ヴィヴィオは叫んだ。

「ママ!! 逃げて!!」

言葉とは裏腹にヴィヴィオは床を蹴り、なのはに接近する。

完全に油断していたなのはは懐への侵入を許し、腹部への打撃を受

けた。

床を転がりながら、壁に激突する。息をすると、口から血が溢れた。

「逃げてママ！！私が・・・・私が消える前に！！」

何かを堪えるように顔をしかめるヴィヴィオを見ながらなのは壁から身を離れた。

レイジングハートからヴィヴィオの意識が消滅するまで残り10分という旨を伝えられ、焦りが生まれる。

ヴィヴィオを安心させようと微笑みかけながら、なのはは彼女に話しかけた。

「大丈夫だよヴィヴィオ、すぐに、すぐなのはママが助けてあげるからね」

「違う！！なのはさんは私のママじゃない！！ルークさんだって違う！！」

「なに・・・・・・言ってるの？」

ヴィヴィオの言葉になのはは啞然としながら呟いた。

涙を流しながら、ヴィヴィオはゆっくりと、しかしはっきりと告げた。

「私・・・・・・分かったの。私はずっと昔の人のコピーなの・・・・・・お父さんとお母さんなんて初めから居ないんだよ！！」

「だったらなんなの！？」

なのはの叫びにヴィヴィオは目を見開いた。

「それがなんなの！？本当のお母さんとお父さんが居ないからなんなの！？ヴィヴィオは知らないかもしれないけど、ルークだってそうだよ！！ルークもヴィヴィオと同じ存在でお父さんもお母さんだつて居ない。だけど！！だけどルークだってヴィヴィオのことをとっても大切にしてるんだよ！？レプリカの俺がヴィヴィオの父親でいいのになって迷いながらも、ヴィヴィオのことを幸せにしてあげたいって、そう思ってるんだよ！！私は、お父さんとお母さんが居るからヴィヴィオの気持ちやルークの気持ちは分からない。でも、でも私だってヴィヴィオを幸せにしてあげたい！！ヴィヴィオと一緒に、ううん、ルークやハロルドさんやヴィヴィオと一緒に居たいんだよ！！」

「私だって・・・・・・・・・・私だって一緒に居たい！！なのはママやルークパパと一緒に居たい！！」

「なら、助けるよ。絶対に助ける。そして一緒にルークのところに帰ろう」

「うん・・・・・・・・・・うん！助けて、助けてママ！」

ヴィヴィオの言葉になのは目を瞑りしっかりとヴィヴィオを見つめた。

「ヴィヴィオ、絶対に助けるからね！！ブラスター2！！」

リミッターを解除し、なのはの魔力が格段に上昇する。

杖を構えながら、なのはは気持ちを落ち着けるように息を吐いた。床を蹴って先程よりも速くヴィヴィオに接近する。

聖王のゆりかご、玉座の間で母と娘は、幾度もぶつかり合った。

ルークside

「ルークさん！！これ以上は限界です！！」

操縦席に座るアルトが声を荒げる。

あの後、ルキノに連絡をつないだ俺はすぐにアルトに病院まで来てくれるように頼んだ。

今乗っているヘリは最新式でかなりの速度が出るらしい。

ヘリに飛び乗った俺は数分と待たないうちにゆりかごの近くまで来ていた。

しかしゆりかごから際限なく出現するガジェットの影響で、これ以上接近するのは無理そうだった。

だが、十分だ。これだけ近ければ、レンズの能力が使える。

「アルト、ありがとう。後は大丈夫だ。俺が移動したらすぐに離れてくれ、ここは危ない」

「分かりました。気をつけて」

アルトの言葉に俺ははつきりと頷き、レンズに触れた。

移動した先は広い空間だった。

クリスタルのようなものに入った太陽のようなものが辺りを照らしている。

そしてその前には、見覚えのある少女が倒れていた。

「ヴィータ!!」

名前を叫び、倒れているヴィータを抱き上げる。

赤い騎士服はボロボロでそこから覗く肌も血で真っ赤に染まっていた。

胸に刺された痕があり、そこからの出血もひどい。

「ルー………ク?」

「ああ、ヴィータ、しっかりしろ!!」

ヴィータは俺の姿を認識すると小さく呟いた。

「ごめん・・・・・・・・・・駆動炉・・・・・・・・・・壊せなかった・・・・・・・・」

「馬鹿野郎！！こんなになるまで頑張つて！！キュア！！」

ハロルドのコアが煌き、ヴィータを暖かい光が包む。
傷が塞がるのを眺めながら俺はモニターを展開した。

どうやらここは最深部のようだ。駆動炉ということはこれを壊せばゆりかごは止まるのだろう。

俺は状況を整理してヴィータに告げる。

「ヴィータ、お前を今から出口までレンズの力で移動させる。ルキノの情報だと何人か先遣隊が追つてきてるみたいだからそいつらと一緒に逃げる。ここは危険だ。俺は駆動炉を破壊してなのはとヴィオを連れて移動する。分かったか？」

俺の言葉にヴィータは慌てて首を横に振った。

「む、無理だ。あの駆動炉は凄く硬い。壊せねえ・・・・・・・・・・」

ヴィータの言葉に俺は大丈夫だと告げると有無を言わずにヴィータを転移させた。

立ち上がり、駆動炉に近づく。手に持つハロルドを床に突き刺して、俺は両手を構えた。

簡単なことだ。壊せないなら、消せばいい。俺は両手に意識を集中させて超振動を発動させた。

対象をクリスタルのような容器のみに定め、力を解放する。

超振動でクリスタルは消滅し、駆動炉は完全に活動を停止した。

ハロルドのお陰なのか、あまり疲れが溜まっていな。これなら行ける。

そう思つてハロルドを抜き取つたとき、モニターが不意に開いた。

『ルークさん！！駆動炉の機能が停止しました！！あとはヴィヴィオちゃんを止めるだけです！！』

ルキノの言葉にゆりかごの内部データを展開する。

中には、生体反応が四つ。最深部に居る俺、玉座の間に居るのはヴィヴィオとなのはだろう。

ならこの深部に居るのは管理者だろうか。

モニターを切つてレンズに触れる。管理者は無視だ。

俺の目的はあくまでヴィヴィオであるし、ヴィヴィオを止めればゆりかごは停止するだろう。

機械音が響き、扉の外から多数のガジェットが俺をめがけて近づいてくる。

それを見ながら俺は不敵に微笑み、跳んだ。

はやて side

地上本部。そこにはやては足を運んでいた。

殆どの局員が出ているのか、本部には人が疎らだ。その様子を見ながらはやては中に入った。

モニターを展開し、独自に調べ上げた本部の内部データを展開する。部屋の位置を確認し、はやては足早にそこに向かった。

向かった先は行き止まりだった。そこは普通に考えればただの行き止まり。

だがはやてはその壁を念入りに調べた。壁に魔力反応を感じ、魔力を灯した指で触れると、壁の一部が裏返し、小さな機器が出てきた。そこには数字を打ち込むパネルとカードを差し込む穴がある。

「ビンゴやな」

そう呟いたはやては騎士甲冑を展開し杖を構える。

場所の確信が得られた以上、無駄なことをする必要は無い。

暗証番号も、勿論カードも持つては居ないが、そんなことはやてには関係なかった。

ただ扉を破壊すればいいのだから。

「ほな。行こうか」

はやての正面に白の三角形の形をした魔法陣が展開する。

はやてが杖を振るうと目の前に展開した魔法陣から白の閃光が打ち出された。

それは正確に壁を破壊した。浮遊魔法を使いながら中に入ると、中は巨大な空間だった。

それと同時に腐敗した臭いが漂ってきてはやては顔をしかめた。

ふと視線をやると、先のほうに脳が飛び散っている。

「・・・・・・・・・・・・・・・・こんなんが最高評議会かいな」

はやては顔をしかめながら魔法を発動し、それを完全に消し去った。割れたガラス筒を見ながら、はやては考えを巡らせた。

ポットが壊されていたということはスカリエッティの仕業と見て間違いないだろう。

そこはまだ分かる。だがはやてはどこか釈然としない気分だった。

何かが引つかかっているような、そんなもどかしい感覚。

だがそれはポットの横に小さく取り付けられたモニターを見たときに解消された。

簡単すぎるのだ。最高評議会ともあろう者が、あまりにもあっけなく死んでいる。

そこがはやての引つかかるところだったのだ。

辺りを見回しながら、はやては集中した。考えが正しければ、あるはずだ。

周りを見回していたはやてはあるところで目を止めた。

見つけた。ポットのある部分よりも遥か下方。そこに砲撃を撃ち込む。

床となっていたはずの場所を打ち抜き、新たな入り口が姿を現した。羽を広げ、はやてはその中へと入っていく。

そこにあるのは巨大な機械だった。視界を覆うほどの、莫大な量のコンピューター。

それを見つけたとき、はやてはほくそ笑んだ。ついに見つけた。

『何者だ?』

響いたのは声だった。だがそれは声というよりも電子音に近かった。

所々にノイズが混じっているのがその証拠だろう。

「八神はやてです」

『む？ああ、機動六課の』

先程とは違う声が響く。

『ここを見つけたのか、素晴らしい洞察力だ。今後とも管理局のため
にその力を活かしてくれ』

「上でポッドが破壊されましたが、大丈夫でしたか？」

『ああ、問題ないよ。あれはダミーだ。壊れたところで何の問題も
無い。意識はこの機械に繋いであるからね』

「そうですか」

はやては感情の籠ってない目で呟く。

「ということはこの機械が壊されたらまずいのでは？」

『まあそういうことになる。だから早く出て行ってくれ。天井を修
復せねばなるまいからな』

機械音にはやてはニヤリと笑った。

その笑みは彼女が今まで浮かべたどの笑みよりも黒く、歪だった。

「なるほど、じゃあ私がこの機械をぶっ壊したら困るっちゅうこと
やな？」

『何を言ってる!?』

機械音は続きをいうことが出来なかった。

はやての放った魔力弾が機械に命中し、その一部の機能を停止させたからだ。

『しょ、正気か八神二等陸佐！君のやってることは立派な反逆行為だぞ!!』

「ゆりかごを自分の目的のために使おうとしたアンタに言われたくないなあ」

なおも攻撃の手を緩めず、はやては魔力弾を飛ばす。

それはじわじわと敵の体力を削っているようだった。

事実はやてはそうなるように態と魔力弾で攻撃していたのである。

最高評議会のせいで、ヴィヴィオが攫われた。

その結果ゆりかごは復活し、なのはは涙を流した。

その最高評議會を許しておくことなどはやてには到底出来なかったのである。

「ほらほら、もう少しで壊れてまうで？」

この時点で最高評議会の命は完全にはやての掌で遊ばれるものとなつてしまった。

魔力弾によって機械が破壊される。いつ来るか分からないが、すぐに訪れるであろう死。

それが最高評議会の三人の精神を追い詰めていく。

『や、やめろ、やめてくれ!!』

その声は震え、恐怖の色に染まっていた。

その声に、はやては笑った。笑みは驚くほど妖艶で、そして歪だった。

「ポッドの破壊状況を見たで？あれは一発で割ったんやな。ダメやなあ、あんなんじゃ。ちゃんとじわじわと恐怖を与えて殺さんと。ほらほら、壊れてしまうで？まあ私もいつこの機械が壊れるかなんて分からないんやけどな」

『た、頼む！！なんでもする！！なんでもするからやめてくれ！！』

「ほな死んでくださいな」

『何が欲しい！？金か！？荣誉か！？なんでもやる！！だ、だから・
・・・・』

「私が欲しいのはアンタらの命や。そのために死んでや」

『た、頼む！！命だけは取らないでくれ！！他なら、他なら何でも・
・・・・』

「ならこの機械を貰うわ。それを壊そうと私の勝手やろ？」

最高評議会は戦慄した。どうあっても目の前に立つ女は自分たちを殺すつもりだ。

いくら命乞いをして、許してはくれないだろう。

そして自分たちを果てしなく残酷な方法で抹殺したいのだ。

管理局に白い悪魔と呼ばれる魔導士がいる。

砲撃魔法使い、高町なのはのことだ。だが今の最高評議会からすれ

ばはやてのほうが悪魔だ。

闇の書事件に則って冥王とでも名づけるべきだろうか。
そこまで言ってから最高評議会の一人はあることに気づいた。

『わ、忘れたのか八神はやて！！闇の書事件がありながら君を管理局に入れたのは誰だと……』

「だったら私も私の騎士達も辞めさせればええ。少なくとも私はこれを壊す。何を言おうと無駄や。諦めるんやな」

それは残酷な死刑宣告だった。

最高評議會は悟った。もう無理だと。

「吹き飛ばしてやるで？リイン」

『はいなのです』

黙って見ていたリインははやてと融合する。

髪が白く染まり、魔力が格段に上昇する。

「最後やから最強魔法で終止符を打つ。覚悟しい。響け、終焉の笛」

白い巨大な球体が収束し、爆発する。

威力を格段に抑えた終わりを告げる砲撃は全てを飲み込み、食らい尽くした。

その空間に立っているのははやてだけだった。

目の前には残骸と化した機械が転がっている。

杖を振り、はやては踵を返した。もうここには用が無いと言わんばかりに。

「どうでもいいんや。私のことなんて。ただルーク君が笑っている居場所を壊した。それだけがアンタらの罪や」

今回のはやての行動基準は完全に私情である。

ルークを間接的にボロボロにした、最高評議会への、復讐。

それをはやては誰にも悟られること無く実行した。

ルークや親友のなのはには笑っていてほしい。

ならこういう汚れ役は自分が引き受けよう。

それが、ここに来る前にははやてが決心したことだった。

はやてが去った後には、何も、本当に何も残らなかった。

エリオ side

廃棄された都市。ボロボロの残骸の中でエリオとガリユーは死闘を繰り広げていた。

モニターから得た情報から、各地を六課メンバーが制圧しているのが伺える。

スバルは姉であるギンガとの戦闘に勝利し、ティアナもヴァイスの助けがあつて三人の戦闘機人を撃破した。

ルーテシアはキャロとの勝負に敗北し、残るはエリオだけとなった。主であるルーテシアが敗北した今でも、ガリユーは戦闘を止めようとはしない。

エリオが再戦を願っていたように、ガリユー自身もそれを望んでいたのだ。

二人は止まらない。どちらかが倒れるまで、彼らは戦い続ける。

実力は拮抗している。エリオも、ガリユーも、どちらが勝ってもおかしくは無い。

だがエリオには負けられない理由があつた。ガリユーとの再戦だけではない。

先程の報告でルークが目覚め駆動炉を破壊したからだ。

自身の師匠の活躍にエリオは胸が躍った。ルークへの尊敬の念が、高まっていく。

だからこそ、こんなところで負けるわけにはいかない。

ストラダの刃とガリユーの爪が激突する。

廃れた建物を舞台に、二人は幾度も衝突した。

衝撃は建物を揺らし、音は窓ガラスを割る。

それは戦いだつた。あまりにも激しすぎる、戦闘。

その中でエリオは流れを掴み始めていた。この前に描いた勝利の光景を、もう一度実現する。

そのためにエリオは幾度と無く槍を振るう。次第に攻撃は鋭くなり、計算された斬撃はガリューにダメージを与えていく。

確かな手ごたえを感じながら、エリオは槍をひたすら振るい続けた。

なのはside

拳と杖が幾度と無く激突する。

玉座の間を震撼させながら、それは幾度もぶつかりあった。

「頑張つて！！頑張つてママ！！」

「大丈夫！！絶対に連れて帰るからね！！」

拳を振るう本人は心底相手を心配していた。

それは杖を構えるなのと同じことである。だがなのはは内心で焦っていた。

どうすればいいのかわからないのである。いや、どうすればいいのかわかっている。

ヴィヴィオを拘束し、最大の魔法でレリックごと撃ち破ればいい。だが、その拘束する隙がヴィヴィオには存在しなかった。

レイジングハートの時間報告もなのは焦らせる原因になっている。ヴィヴィオの意識が消滅するまであと3分。

もしそれが出来なければヴィヴィオは消滅し、殺戮のための兵器となってしまう。

それは次第に鋭くなる攻撃からも明らかだった。

ヴィヴィオの意識が、消えかけている。あと3分。その間に何とかしなければならぬ。

焦れば焦るほど、勝機は遠のいていく。どれだけ冷静を保とうとしても、無駄だった。

手が震えるのが分かる。今ヴィヴィオを助けられるのは自分しか居ないのだ。

自分を叱り付けて杖を振るう、ヴィヴィオがそれに合わせて動き出すのと、何かが間に入り込むのは殆ど同時だった。

突然の割り込みに、ヴィヴィオとなのはは瞬時に後退した。

距離を取り、様子を伺う。顔を上げたところで、なのはは言葉を失った。

先程からなのはは彼を求めていた。この場に彼が居れば、どれだけ心強かっただろうと、何度もそう思った。

だが思うたびに、それは無理な話だと自分自身で理解していた。

なのに、いつものように、まるで何も無かったかのように、彼はそこに居た。

「ヴィ、ヴィヴィオ!？」

なのはが最も聞きたかったルークの驚いた声が、玉座の間に響き渡った。

ルークside

ヴィータを救出して駆動炉を破壊し、玉座の間に跳んだとき、俺は我が目を疑った。

見たことも無い美少女が目の前で立ち尽くしていたからだ。

だが俺はすぐにそれがヴィヴィオだと分かった。最愛の義娘の姿を間違えるわけは無い。

ただ、なのはを意識した髪型に、整った顔立ち、赤と緑のオッドアイがさらにその魅力を引き出し、女性らしい体のラインが強調されたバリアジャケットを見た俺は思わず聞いてしまった。

「ヴィ、ヴィヴィオ!？」

俺の素っ頓狂な声に、ヴィヴィオは肩を揺らした。

その目が揺れているのが分かる。ふと後ろに気配を感じて振り返ると、そこには啞然としていたのはが居た。

俺は確信した。目の前の少女はヴィヴィオだと。

それと同時に絶望した。ヴィヴィオの成長した姿を知ってしまった

からだ。

出来ることなら彼女の成長を見守りたかったのだが。

『……………一応言っとくけどあれ多分魔法だから。
成長するのも一時的な話よ?』

「マジか!?」

ハロルドのフォローに俺は目を輝かせた。
良かった。これでヴィヴィオの成長を見守れる。

『……………本当に親バカ……………』

「ルーク聞いて!!あと2分でヴィヴィオの精神が消えちゃうの!
!お願い、ヴィヴィオを助けて!!」

「なんだって!?」

なのはの言葉に俺は咄嗟にヴィヴィオを見た。
その目は助けてと訴えている。ヴィヴィオが消える?そんなの、許
すはず無いだろう。

「なのは!!ヴィヴィオの動きを止めてくれ!!レリックを破壊す
ればいいんだろ!?」

「うん!!そうだよ!!ヴィヴィオの拘束やってみるね!!」

なのはの声を聞いた俺は剣を下段に構える。
大丈夫だ、この状況なら、撃てる。撃つてみせる。

「ヴィヴィオ、すぐにパパが助けてやる。だから、待つてろよ」

「うん。大丈夫だよ。私はなのはママとルークパパの娘だから。だから、頑張れるよ」

ヴィヴィオの言葉に俺は微笑む。

それと同時に何重ものバインドがヴィヴィオに絡みついた。

ヴィヴィオが顔を歪める。それはバインドを解こうとしているからではなく、それに反抗しているからだろ。

全力を尽くしているのだ。なのはも、ヴィヴィオも。

なら俺も、全力で行かなければならない。失敗は許されない。

いや、失敗なんて絶対にしない。

一步を踏み出し、ベルセリオスを天井に掲げる。

体内から力が溢れる。超振動の波が体から噴き出し、全てを破壊する悪魔と化す。

俺は目を瞑り、意識を集中させる。消すのは、レリックだけだ。

ヴィヴィオは絶対に傷つけない。絶対に、守ってみせる。

荒々しい波が、次第に収まっていくのを俺は肌で感じた。

後ろでなのはが綺麗、と呟いた。

目を開き、ヴィヴィオをしっかりと見つめる。

光の向こうで、ヴィヴィオは俺のことをじっと見つめていた。

俺のことを信じてくれている。俺の娘を、居場所を、消すものか。

「ロスト・ファン・ドライブ」

俺はゆっくりと剣を振り下ろした。

剣に纏われた超振動の波はゆっくりと飛んでいき、ヴィヴィオを飲み込んだ。

それは、あまりにも静かな光景だった。飲み込まれているヴィヴィオの髪さえ、靡かなかった。

ただ光がヴィヴィオを通過して、それが完全に消えたときにヴィヴィオがゆつくりと地面に倒れただけだった。

体を光が包み、その姿が次第に小さくなっていく。

それが完全に消えたとき、俺の目の前にはボロボロの服に身を包んだヴィヴィオが倒れていた。

それを見たなのは慌てて駆け寄るのを、俺は見た。

「来ないで!!」

走り寄ろうとしたのはを、ヴィヴィオの大きな声が遮った。

ゆつくりと立ち上がる。その足は震えながらも、しっかりと体重を支えていた。

「一人で………立てるよ。私はなのはママと………
・ルークパパの娘だから。パパとママと一緒に居るために、頑張るから………偽者でも………頑張るから」

気づいたときには俺は駆け出していた。

それはなのも同じだった。すぐにヴィヴィオに駆け寄ったのははしっかりとヴィヴィオを抱きしめた。

消えないように、もう二度と離さないように、強く、強く抱きしめた。

「パパ………私は偽者だけど………こんな私でも、愛してくれる?」

「何言ってるんだよヴィヴィオ………お前はお前だろう。偽者なんかじゃない。ヴィヴィオだ。俺のたった一人の、娘だよ。この関係は、本物だ」

しゃがみこんで俺はゆつくりとヴィヴィオの頭を撫でた。
彼女はくすぐったそうに身をよじる。

しかしその顔は、笑顔だった。

俺達はようやく、ヴィヴィオを取り返すことが出来たんだ。

??? side

数分前のゆりかご最深部。そこでは誰も確認できない形で事件が起
こっていた。

光り輝く床を鮮血に染めながら最後の残ったナンバーズのクアット
口は死を迎えようとしていた。

漆黒の刀身に貫かれ、彼女は自身を死に追いやった人物が誰か判断
する前に床に倒れた。

誰も知らない。ルークが確認した生体反応よりも一つだけ多くの生
命がゆりかごに忍んでいたことを。

「戦闘に赴かず、自分は安全圏か。俺の一番嫌いなタイプだ。死ぬ

といい」

赤い血液を滴らせる漆黒の刀身を振るい、それを鞘に収める。

床に倒れたクアットロを虫か何かを見るような目で見つめ、彼はすぐに目を逸らした。

その目は、モニターに映るルークに向けられている。

画面のルークは駆動炉を破壊して、レンズに触れているところだった。

他のモニターにはクアットロが行おうとした数々の妨害の残骸が残されている。

それが発動されることは無い。それを操る人間はもうすぐこの世から消えるのだから。

「娘を使つたのは成功だったね。一応確認しに来ただけど、どうやら君は更なる高みへと届いたみたいだ。もはやレプリカという存在など関係の無い高みに。だが、まだだろう？ 君はまだまだ強くない。そして限界まで強くなった君こそ俺の軍にふさわしい。始めようルーク・フォン・ファブレ。君の足枷を一つ一つ壊してあげるよ」

男は不気味に笑いながらその場を後にした。

そして誰も居ない暗い空間で一つの命がその短い生涯に幕を下ろした。

ルーク side

ボロボロのヴィヴィオを抱き上げ、なのはを支えながら脱出を試みたとき、モニターが開いた。

『ルークさん！ゆりかごの内部から全ての魔導士は撤退させました。生体反応はルークさん、なのはさん、ヴィヴィオさんの三名だけです』

「うん？あ、ああ、分かった」

ルキノの報告に俺は曖昧な返事をするともニターを切った。

駆動炉に居るときに生体反応は4つあったはずだ。

最深部にこの船の管理者が居たはずだ。その人物はどうしたのだろうか？

脱出したのだろうか？そんなことをふと思いつながらも、時間が無いことに気づき、俺は慌ててレンズに触れた。

俺、なのは、ヴィヴィオ。三人を一気に転移するのは初めてだがハロルドと融合した今なら可能だろう。

疲労困憊は必死だが、仕方が無いことだ。

少なくともゆりかごから出ればなのはが飛行魔法で何とかしてくれる。

「じゃあなのは、頼むぜ」

「うん。任せて」

俺の言葉になのははつきりと頷いた。

意識を集中させ、俺達はそこから脱出した。

エリオ side

小さな体を最大限生かして、エリオは槍を振るう。

ガリューとの戦闘を始めてからかなりの時間が経っている。

二人とも肩で息をしているが、その目は相手を捉えて離さない。

「絶対に・・・・・・・・・・負けるもんか!!」

槍を横薙ぎに振るい、地面を強く踏みしめる。

持ち前のスピードで素早くガリユーに接近したエリオは全身全霊をかけて槍を振りぬいた。

咄嗟に爪で防いだガリユーは威力を抑えきれずに吹き飛ばされ、壁に激突する。

砂埃が舞うのを見ながら、エリオは間髪を入れずに飛び出した。それに呼応するように土煙の中からガリユーが飛び出す。

「うおおおおおおおおおおお！！」

槍と爪が、キリキリと音を立ててぶつかる。

その拮抗状態の中で、エリオは槍をずらした。全脚力を開放し、一気に高く飛び上がる。

「フォルムツヴァイ！！スピーアアングリフ！！」

ストラダが煌き、その姿を変える。

槍の穂から爆発的に魔力が飛び出す。

重力をも加えたエリオの渾身の一撃は、鋭くガリユーに襲い掛かった。

ガリユーは一瞬でその技の性質を理解し、後ろに後退した。

だが、それも含めてエリオの思惑通りだった。

エリオは地表すれすれで力任せにストラダの向きを変えた。

地面に向かっていた先端は、ガリユーに向けられる。

「紫電・・・・・・・・一閃！！」

雷を纏った刃は、ガリユーの爪を砕き、黒い甲冑に届いた。

電撃がガリユーの体を走る。それをしっかりと目に焼き付けながら、エリオは槍を押し出した。

ガリユーの体が浮き上がり、壁に激突する。

「うおおおおおおおおお！！」

脚力、腕力、いや、持てる全ての力を使う。

壁にひびが入り、次の瞬間には晴天の下で、エリオは槍を振りぬいていた。

ガリューの体が吹き飛び、目の前のビルに衝突する。

肩で息をしながら、砂埃が舞う光景をエリオはじっと見つめていた。そしてそれが晴れた場所に倒れているガリューが居ると分かったときに、エリオは蒼穹を見上げた。

勝った。ついにガリューに勝ったのだ。

頬が緩んでいくのがわかる。その顔に清しい笑みを浮かべながらエリオはしっかりと頷いた。

これで、またルークに一步近づいた。その考えが、さらに気持ちを高揚させる。

「勝利おめでとうと言ったところかな」

だがその笑みは凍ることになる。

後ろから聞こえた声に、パチパチパチという拍手の音。

だが何よりも急にあたりを支配した威圧感に、エリオは目を見開いた。

震える体を抑えながら、エリオはゆっくりと振り向いた。

情報は聞いていた。ルークをボロボロにしたのは、赤髪の男である。勿論名前は知らないし、どんな男なのかもエリオはまったく知らなかった。

だが、エリオは確信していた。こいつだ。こいつが、ルークを瀕死に追いやった張本人に違いない。

「さて、君を殺せば彼はもっと高みへと登り詰められるのかな？」

赤い長髪を揺らしながら清々しい笑みでカーレルはそう告げた。

ルークside

ミッド地上。静けさを取り戻したその町で、俺達は天を見上げていた。

正確には空に浮かぶゆりかごを眺めていた。ゆりかごの機能は完全に停止している。

ルキノからの報告では本局の艦隊がゆりかごを破壊するらしい。

時間が危うかったようだが、なんとかなったようだ。

ふと、握っている手に力が入れた。

そちらを見ると、ヴィヴィオが心配そうな目で俺を見つめていた。

俺の動きに気づいたなのは、ヴィヴィオを見つめている。

俺は何も言わずヴィヴィオに微笑みかけると、再び視線をゆりかごに向けた。

ヴィヴィオも、そしてなのはもゆっくりと視線をゆりかごに向けるのが分かった。

「ルーク君!!」

響いた声に振り返ると、そこには漆黒の羽を広げたはやてが居た。

近づいてきたはやてはバリアジアケットを解除すると、俺の横に並んだ。

「これで……………終わるんだよね？」

座り込みながらも視線をゆりかごから離さないヴィータがポツリと呟いた。

重体にも関わらず、彼女はゆりかごの最後を見届けるといってその

場を動かなかった。

「ああ、終わる」

俺はしっかりとそう呟いた。

はやてが、ヴィータが、なのはが、ヴィヴィオが息を呑むのが分かる。

次第に小さくなるゆりかごを、俺達はただじっと見つめていた。

エリオside

体が震える。それは寒さだとか武者震いだとかそんなものではない。ただの純粹な、恐怖。

カーレルを目の前にしてエリオは言葉を失っていた。なんだこれは。こんなものとルークは戦ったのか？

化け物ではないか。

肌で感じる圧倒的な強さ。

それを感じてエリオは笑った。

気が触れた訳ではない。

彼が、師匠であるルークを倒したのだ。

なら、自分が彼を倒せばどうなる？

自分はルークよりも強いということになる。

頭では分かっている。この場は逃げるのが普通だ。

だがそう思ってしまったエリオ才是最悪の選択をしてしまった。

それは目の前にいる人間と戦うこと。

すなわち、自滅行為である。

だが彼は幼すぎた。そして夢を持ちすぎた。

槍を構え、目の前のカーレルを見つめる。

地面を蹴り、一瞬で間合いを詰めた。

「はあああああああ！！」

それはエリオの全身全霊。全てをかけた攻撃と言っても過言ではなかった。

だがその一撃は、エリオの渾身の一撃は、いとも容易く受け止められた。

エリオの師匠とまったくおなじ漆黒の刀身で。

「っ！！」

悔しさに唇をかみ締めてエリオは何回も何回も槍を振るう。

だがどれだけ攻撃しても、どんな攻撃をしても結果は同じだった。

この間の数回の打ち合いでエリオは分かってしまった。

彼の実力が普通のものではないことを。そしてそれがエリオが今まで戦った誰よりも上であることが。

「幼いのによく頑張るね。でも、君程度は必要ないんだ」

地を這うような低い声と、向けられた殺気にエリオは戦慄した。

後退し、カーレルから距離をとる。肩で息をしながら、エリオはカーレルを見つめた。

手が震えるのが分かる。瞳が、恐怖に揺れる。

「この程度かい？この程度でルーク君に並ぼうとしたのか。笑わせる」

「っ！！黙れ！！」

カーレルの言葉にエリオは吠え、再び地面を蹴った。策も何も無い。ただの怒りの攻撃だった。それを容易く避けたカーレルはエリオを蹴り飛ばす。

地面を転がりながら、エリオは建物の壁に打ち付けられた。

カーレルが鼻で笑う声を、エリオは聞いた。

「本当に笑わせるよ。結局君はルーク君の好敵手でもなんでもないじゃないか。その程度の力で彼に並ぼうと思っていたのかい？傲慢だよ、エリオ・モンディアル」

カーレルの言葉を聞きながらエリオは立ち上がった。

槍を杖にして、ゆっくりと立ち上がった彼はカーレルを睨み付けた。

「傲慢だ。エリオ・モンディアル。君のその行動がルーク君の足枷になるとなぜ分からない？君に時間を割くことで彼の成長は止まっていく。なのにその彼を好敵手？傲慢すぎるよエリオ・モンディアル。この際だから言っというてあげるよ。君とルーク君ではそもそもの価値が違う。君じゃあ話にならない」

エリオは体が震えるのを感じた。それはずっと前からエリオが感じていたこと。

ルークを好敵手と思っているのは自分だけだ。ルークは違うだろう。エリオはカーレルの言葉に返す言葉が見つからなかった。

心のどこかでエリオは認めてしまっていたのだ。ルークには敵わな

いと。

「君だけじゃない。機動六課全員がルーク君の足枷だ。誰もルーク君の為にはならない」

「違う!!」

エリオは咄嗟に叫んだ。だが何が違うのか、その答えを彼は持ち合わせていなかった。

表情からそれを読み取ったのかカーレルは笑った。

心底エリオを馬鹿にする笑みで。

「違うさ。足枷だ。勝手にライバル意識を持って、勝手に超えようとする。そのためにルーク君の時間を奪い、技を盗む。盗んだところで君はルーク君に並べないのに。分かるかい？君がルーク君と一緒に居たって何もルーク君の為にはならないんだよ」

「っ!!はあああああああああ!!」

槍を硬く握り締め、突進してきたエリオにカーレルはため息をついた。

「君と一緒にいたらルーク君はダメになる。だから、壊すよ。君を」

全身の毛が逆立つ感覚をエリオは覚えた。

咄嗟に足を止めて、後退する。だが、エリオの速さを持ってしても、刃を避けることは叶わなかった。

胸を浅く斬られ、そこから鮮血が滲む。痛むそこを抑えながら、エリオはカーレルを睨み付けた。

「殺したと思っただが………浅かったようだね」

逃げるな。エリオは自分自身にそう言い聞かせた。

ここで逃げてもどうせ逃げ切れない。勝つしかない。

だがどれだけそう念じてもエリオの中には先程のカーレルの言葉が蘇っていた。

ルークの足枷。それはライバルを自負していたエリオのプライドを砕くのに十分すぎた。

違うと心の中で否定しても、どこかでそれが真実だと認めてしまっている。

轟音が、響いた。空を見上げると、ゆりかごが管理局の艦隊に消滅させられていた。

同じくそれを見ていたカーレルは舌打ちした。

「時間だ。悪いがこちらから行かせてもらっ」

左足を前に出し、カーレルは剣を構えた。

それはエリオが始めてみたカーレルの戦闘態勢。

威圧感がさらに鋭くなり、肌を刺激するのが分かる。

エリオは自分の足を叱責し、ストラダをカーレルに向けた。

ゆっくりと歩いてくるカーレルを見ながら、エリオは槍を強く握り締める。

全脚力を開放し、エリオはカーレルに特攻した。ストラダを電撃が包み、それは巨大な雷の刃となる。

「雷帝激昂!!」

エリオの声に呼応するように雷の刃は眩さを増していく。

それがカーレルに迫ったときに、彼はニヤリと笑った。

無造作に剣を振り上げる。まったく力の入っていないであろうその

剣はエリオの雷の刃を弾いた。

啞然とするエリオの体に、素早く刃が斬りこまれる。

鮮血を噴出しながら、エリオは地面にゆっくりと倒れた。

その手に握られたストラーダの雷刃が、消えていく。

「まだ不完全な力で俺に挑むか。完成していないのに、届くわけ無いだろ？」

倒れたエリオの頭を踏みつけ、カーレルは剣を天に掲げた。

炎のような刀身から零れ落ちた血が、大地を染める。

「壊れるといい……………っ！」

剣を振り下ろそうとしたカーレルは咄嗟にエリオから離れた。

エリオを中心にして白い魔法陣が急に展開したからだ。

だがカーレルは離れた後でしまったという顔をした。

カーレルはこれを攻撃用の魔法陣だと判断してその場を離れた。

正体不明の攻撃ほど怖いものは無い。だがそれが今回は仇になった。魔法陣は攻撃のためのものではない。対象を移動させるための、転移系。

気づいたときにはエリオは光に包まれてその場から完全に消えていた。

舌打ちをしながら、カーレルは傍に転がっていた残骸を剣で切り伏せた。

それは真っ二つに割れて地面に落ちた。砕けた欠片が足元に転がる。剣を振るって血を飛ばした後、カーレルは天を見上げた。ゆりかごの消滅。

ならカーレルの次の目的は、彼しか居ない。

「足枷を殺せなかったのは残念だが、まあいい。君は悔しがるだろ

う。教え子を守れなかった事を」

そう小さく呟きながら、カーレルはその場から“消えた”

ルークside

ミッドの市街地。そこでゆりかごの最期を見届けた俺たちはただ黙っていた。

ゆりかごがアルカンシエルの光に飲み込まれて消えた後もただ天を見上げていた。

『ルークさん!!』

不意にモニターが開き、キャロがそこに映し出された。その表情は真剣で、とても慌てているのがモニター越しでも分かった。

『エリオ君が、エリオ君が例の赤髪の男の人と戦って怪我を……
……ルークさん！！彼の次の狙いは――』

「やあルーク君。探したよ」

モニターのキャロの言葉は、突如空中に現れたカーレルの言葉によつてかき消された。

カーレルは先程までゆりかごがあった方向の空中で俺を見下ろしていた。

言葉を失っているキャロのモニターを切って、俺はカーレルを睨み付けた。

怒りでおかしくなりそうになるのを必死で堪えて、俺は静かにカーレルに質問した。

「答えるカーレル。なんでエリオを傷つけた」

「理由はひとつだ。彼は君にとって必要の無い存在だからだ。もはやレプリカという次元を超えた高みに居る君の何の利益にもならない」

カーレルの言葉に眉をひそめる。レプリカという単語が気になったが、どうせ調べたのだろう。

カーレルなら出来そうなことだ。

「それはお前の決めることじゃない。俺が決めることだ」

エリオが足枷になると誰が決めた。要らないと誰が決めた。

俺の怒りの視線にもカーレルは余裕の笑みを崩さない。

それがさらに俺の神経を逆撫でした。

「どうやら君はよほど機動六課にご執着らしい。だがそれは君のためにはならない。分かるだろう？そんなことは。だから、俺と来い」

「断る！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・そんなにその足枷共がいいのかい？俺にはさっぱり理解できないよ」

「理解できるわけ無いだろ。俺の気持ちは俺だけのものだ。お前なんか理解できるもんか」

「まったく、足枷のどこがいいのやら」

その視線がなのはに向けられたとき、俺は湧き上がる怒りを止められなかった。

「なのはが足枷だとしても、そう言うのか？」

「その通りだが？」

「っ！・・・・・・・・お前・・・・・・・・」

許せない。俺はベルセリオスを抜き放ち、構えた。

俺が侮辱されるのはいい。だがなのはを侮辱することだけは許さない。

「ふう。まあ元から説得は無理だろうと考えていたけど・・・・・・・・」

カーレルの言葉に、俺は鼻で笑った。当たり前だ。

カーレルのやっていることは提案ではない。命令だ。それも俺を怒らせるようなことしかしていない。コイツは、俺の気持ちなんて一切考えていない。

「君が俺の軍に欲しかったのは事実なんだけどね。邪魔をするなら、死んでもらうしかない」

カーレルの持つ漆黒の剣が、日光の下に晒される。

俺の持つベルセリオスとカーレルの持つベルセリオス。

剣は同じだ。なら差は、俺とカーレルでつくことになる。

剣をカーレルに向けて、俺は叫んだ。

「聞きたいことがある。ヴィヴィオをスカリエッティに渡したのはお前か？」

「ああ、そうだよ。あの子が君の成長に役立つと思ったからだ。結果として君は更なる力を手に入れた。まあ、敵になってしまった以上仕方の無いことだけどね。それでも、この世界は退屈だったんだ。それを解消してくれる相手になってくれたことには感謝だね。その点では、その子にも感謝だ。まあもう必要ないが」

手に持つハオルドを強く握り締める。爪が手のひらに食い込み、そこから血が流れようと関係なかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・せ」

「なに？」

俺の言葉が聞こえなかったのか、カーレルは顔をしかめた。顔を勢いよく上げて、俺はカーレルに向けて叫ぶ。

「取り消せって言ったんだよ！！ヴィヴィオもなのは俺に必要な存在だ！！」

俺の言葉に、なのはとヴィヴィオはじつと俺を見てくれた。

心底嬉しそうに、彼女達は微笑んでいる。

だがカーレルはその気持ちから分らないのか、冷やかな目で俺を見下ろしているだけだった。

『兄さん。答えて。兄さんは何がしたいの？』

不意に俺の手に握られたベルセリオスのコアが煌いた。

カーレルの目的。今まで一向に分からなかったその目的が、明らかにされようとしている。

カーレルは一旦目をつぶり、笑い始めた。

その笑みは突然のことだった。だがそんなことよりも、その行動が理解不能で俺は顔をしかめた。

「簡単だよハロルド。世界を自分のものにするんだ」

『なっ・・・・・・・・・・・・・・・・』

カーレルの言葉に、ハロルドは絶句した。ハロルドだけではない、俺も、なのは達も目を見開いている。

「何を驚いているんだルーク君。俺達には力がある。世界を自分のものにするぐらいの夢があってもおかしくないだろう？」

『信じらんない。よくもそんなミクトランみたいなことを・・・・・・・・』

ハロルドが怒りの声でカーレルに告げる。ミクトランという人物は始めて聞いたが、同じような人物だったのだろう。だがハロルドの怒りにさえカーレルは余裕の表情だった。

「何とでも言えればいいさ」

『はっきりと分かったわよ。もう私の大好きな兄さんはどこにも居ないって』

「そんなもの初めから居はしないさ。さあ始めようかルーク君。君を殺して俺は世界を手に入れる」

心底楽しそうに叫んだカーレルを俺は睨み付けた。

こいつだけは絶対に許せない。そう思い、俺は叫んだ。

「勝負だカーレル！！その馬鹿げた理想を砕いてやる！！」

「出来るものならやってみるといい！！」

何も無い青空の下。そこで二つの視線が絶えずぶつかり合っていた。

ルークside

向けられた剣を持つ腕に、暖かい何かが触れた。
視線をそちらに遣るとなのはが微笑んでいた。

「カーレルは飛べる。だから、ルークも飛べるように私の力を貸してあげるね。もう少ししかないけど」

暖かい何かが俺の体を包んでいく。心地よい感覚。
これがなのはの魔力なのだろう。力を使い果たしたなのはは地面に崩れ落ちた。

それを咄嗟に受け止める。肩で息をするくらいに疲労している。
なのはをヴィヴィオとはやてに任せて。俺は立ち上がった。

「気をつけてルーク・・・・・・・・・・飛べるのは・・・・・・・・1
5分くらいが限界だから・・・・・・・・」

「分かった。ありがとうなのは」

振り返ることなく、俺は地面を蹴った。

天に浮かび上がり、カーレルと高度を合わせる。

バランスを取る難しさに顔を顰めたが、なんとかなりそうだった。

大丈夫だ。負けるわけが無い。俺はなのはと一緒に戦っているんだ。
それに何より、なのはとヴィヴィオの前だ。絶対に負けない。

自分にそう言い聞かせて、俺は剣をカーレルに向けた。

「始めようぜカーレル。最後の戦いだ」

「そうだね。最後の戦いだ」

剣を構え、俺達は相手の出方を伺った。遙か下の地上でははやて達
が心配そうにこちらを見ているのが見て取れた。

先に動いたのはカーレルだった。大気を蹴り、彼は俺に肉薄した。
斜めに切り下ろされた刃を、咄嗟にハロルドで防ぐ。

その重さに俺は顔を顰めるが、内心では歓喜していた。
防げる。前回とは術も無く弾かれていた防御もしっかりと機能し
ている。

腕が痺れないのがその証拠だ。振りかかる凶刃をしっかりと防ぎな
がら、俺は確かな手ごたえを感じていた。

「素晴らしいね。素晴らしいよルーク君」

剣を振るうカーレルの顔が次第に笑顔になっていく。

その笑顔はとても歪で、嫌に気持ちが悪かった。

「でも……………」

その一言でカーレルは一旦俺から距離を取り、ニヤリと笑う。

「こっちはどうかな？」

刹那、カーレルは俺の目の前から姿を消した。

その姿を探すよりも早く、俺は振り返って剣を振り上げた。

それは体が戦いの中で覚えた動き。俺の脳よりも早く反応した体は、
カーレルの神速の一撃を防いだ。

「へえ……………やるじゃないか!!」

張り上げられたカーレルの声と共に彼はその速さを増していく。速い。もう目では確認できない速さだ。かろうじて体が反応している。

そんな圧倒的な速さ。俺は焦り始めた。今は体が反応できている。だが、それがいつまで続くかなど分からない。

体が反応できなくなったら終わりだし、なにより博打的な要素が伴う。

「これは……………まずいかもな……………」

カーレルの鋭い斬撃を防ぎながら俺は考えを巡らせた。

今のカーレルは速い。だが、もっと速く出来るのだらう。

対して俺は現時点ですらカーレルを目で追うことが出来ない。

目で……………追うことが……………

そこまで考えたときに俺の頭にある一つの考えが過ぎった。

なら、こうすればいいんじゃないか。俺はゆっくりと目を閉じた。

「ん？諦めたのかい？残念だよ！！」

聞こえる。カーレルの言葉が、剣が風を切る音が。

それに合わせて剣を添える。分かる。どのタイミングで来るのか。どこに来るのか。手に取るように分かる。

近くでカーレルが息を呑むのが分かった。それに伴い、攻撃が鋭くなる。

だが、その全てに、反応出来る。見えないのなら見なければいい。極論である俺の選択は、当たりだった。

「悪いなカーレル。もう速さじゃ俺を抜けねえよ」

悔しそうなカーレルの声が、俺の耳に届いた。

なのはside

「パパ、凄い・・・・・・・・・・」

隣でポツリと呟いたヴィヴィオの言葉に、なのはを初めとして誰もが賛成だった。

カーレルの斬撃の速さを目にしたとき、なのは達は目を疑った。それは、目視できないほどの速さだった。それを見てなのは達は納得した。

これならルークが負けたのも無理は無い。だが次の瞬間には、ルークはあらゆる斬撃を防いでいた。しかも目を瞑るという奇抜な方法で。

「私は前から思ってたんや。ひょっとしたらルーク君は天才なんじゃないかって。でも、今確信したわ。ルーク君は天才や」

はやての言葉に、誰も答えなかった。

いや、反論できなかったというほうが正しいだろうか。

答える答えない以前に彼らはルークとカーレルの戦いに見とれていたのだから。

「ママ・・・・・・・・・・・・・・・・パパ勝てるよね？」

不安げなヴィヴィオになのははっきりと頷いた。

そのヴィヴィオの頭を優しく撫でる。

「大丈夫だよ。パパは強いから。だから、信じてあげよう？パパが勝つって」

「・・・・・・・・・・・・・・・・うん!!」

笑顔で頷いたヴィヴィオになのはは微笑み、再び視線を空に向けた。そこではルークから距離を取ったカーレルが剣を掲げていた。

ルーク side

風が、やんだ。そのことを不思議に思いながら俺はゆっくりと目を開いた。

離れたところに居るカーレルは剣を掲げていた。

先程から攻撃は全て防がれているというのに、その表情は未だに余裕のままだ。

「凄いよルーク君。君は本当に凄い。だが、これはどうかな？レイ
！！」

カーレルの掲げた剣の切っ先に光が収束し、白い球体を作り出す。

それは次の瞬間には弾け、轟音を立てながら飛来した。

だがそれはどういうわけかどれも俺を狙ってはいない。

次の瞬間、カーレルが空を蹴った。光の球体はそのまま、彼は俺に接近してきた。

空中に浮かぶ白い球体は依然としてレイを発射している。

やられた。俺は早くもカーレルの思惑に気づいていた。

俺が目を瞑ることで斬撃を防いでいるなら、瞑らせなければいいということだろう。

「さあどうするルーク君！？この状況でも目を瞑るかい！？俺の攻撃と晶術、両方防ぐかい！？」

「っ！？無理に決まってるだろ！！」

「そうだろう！？諦めろ！！」

カーレルの言葉に俺は顔をしかめた。この状況を乗り切る手は一つしかない。
すなわち、目を開けたままでも完璧にカーレルの動きに反応することである。
だがそれは容易なことではない。風の流れを感じ、音を聞いても、迫る刃と晶術が俺の神経をすり減らしていく。
なら、こつちも同じ条件でやるしかない。
剣を天に掲げ、叫ぶ。

「レイ!!」

切っ先に光が集中し、爆発する。それは的確にカーレルの放つレイと衝突した。

「ハロルド!!そのまま維持してくれ!!」

『了解!!』

横薙ぎに剣を払い、俺は飛び出した。
まったく同じ漆黒の剣が鏡合わせのように衝突する。

「守護方陣!!」

体を翻し、剣で魔方陣を描く。そこから噴出す光が俺の気力を回復すると同時に、カーレルを傷つける。

一瞬で後退したカーレルを見て、俺は跳んだ。
次に目に入ってきたのは、漆黒の刃だった。それを咄嗟に剣で受ける。

だが威力を殺しきれずに弾き飛ばされ、空中を滑るように転がった。体勢を立て直し、追撃に備える。しかし、予想したはずの追撃はい

つまで経つても来なかった。

まただ、また見切られた。前回の戦いでレンズの移動は全てカーレルに読まれていた。

なぜ読まれていたのかは、今でも分からない。だが、何かあるはずだ。

『視線よ。ルーク』

不意にハロルドの声が響いた。その声が聞こえるカーレルは舌打ちをした。

『兄さんはルークが転移する際に見る視線から転移場所を推測しているのよ。転移するまでには時間がかかるわ。それも利用しているの』

「余計なことを……………」

『何を言ってるのかしら？私はルークと一緒に戦ってるのよ？助言するに決まってるじゃない』

ハロルドとカーレルのやり取りを聞き流しながら、俺は頭の中でイメージを描いていた。

視線で読まれる。なら、見なければいい。剣を握り締め、俺は跳べと念じた。

移動した場所は、カーレルの斜め下。見ずにやったため若干ずれているが、十分に圏内だった。

「そこだ！！」

「下か！！」

俺の叫びに、直ぐに場所を把握したカーレルは剣を振るった。後退する訳でもなく、ただ剣を“自分の周りに円を描くように”振るった。

俺の目に飛び込んできたのは、蒼い魔法陣。

「なっ!!」

俺は目を見開き、咄嗟にレンズの力を使用した。

先程まで俺が立っていた場所に一瞬で移動する。

だが、移動した後でも、カーレルの周りでは、蒼い魔法陣が展開していた。

「な・・・・・・・・・・・・・・・・・・ん・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

小さな声で、俺は呟いていた。

ありえない。それが使えるのはこの世界では俺だけはずだ。

なのになんでカーレルがこの技を使える？

「いやいや、別に俺が君と同じ剣の流派だからとかじゃないよ。見て覚えた。それだけだ」

簡単に言うが言ってる事はめちゃくちゃだ。

さっきカーレルが放った守護方陣はアルバート流でも奥義に入るんだぞ？

それを、見て覚えただと？

『落ち着きなさいルーク。このぐらい兄さんじゃ当たり前よ。兄さんは剣においては天才って言われてたんだから』

「一つ忠告だよ。君が今まで使った技は全て知っている。スカリエッティの所から盗ませてもらったからね」

「う、嘘だろ……………?」

「残念ながら……………」

言葉の途中でカーレルは飛び出した。突然の行動に俺は一瞬動きが遅れたが、すぐに対応した。

振り下ろされた斬撃を後ろに跳んで避ける。だが次にカーレルはさらに高く飛び上がった。

そして俺は気づいてしまった。カーレルが何をしたのか。

天高く飛び上がったカーレルの剣を電撃が包む。

ハロルドを用いて俺が出来たんだ、同じ剣を持つカーレルが出来ない訳は無い。

なら、この後退だけでは避けることは叶わない。

剣を前に突き出し、防御の構えを取る。バチバチという音の中でも聞こえるくらいはつきりとカーレルの声が響いた。

「襲爪雷斬」

カーレルの持つベルセリオスから生じた雷の球体から落雷が発生する。

剣を持ったまま空中で体を回したカーレルは勢い良くそれを俺の足元に打ち付けた。

それとほぼ同時に俺は跳び、足からの感電を避ける。

だが、発生した衝撃波は空中で防げるようなものではなく、俺は吹き飛ばされた。

まるで地面を削るような音を響かせて俺は弾き飛ばされる。

カーレルから十分な距離を取った段階で、俺の体はようやく停止し

た。

「へえ」

視界の先で、カーレルは満足げに微笑んでいた。

「今のを避けるかい。素晴らしいよルーク君。君はどこまで上り詰めるんだい？」

「どこまでもだ。どこまでも上り詰める」

それが、ハロルドに誓ったことだ。なのはを、ヴィヴィオを護るために、俺は負けられない。

はつきりと告げられた俺の言葉に、カーレルは満足そうに笑った。

「だが勝つのは俺だ。君の技までも自分のものにした俺が勝てない理由など無い」

「あるさ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なに？」

「あるって言ってるんだ。意志の強さだよ。お前には護るという意味が無い」

俺の言葉に、カーレルは声を張り上げて大笑いした。

「そんな脆弱なもの、必要ない！！教えてやるルーク君、何が必要なのか、何を持つものが強者なのか・・・・・・・・その身に刻んでやる！！剛招来！！」

その光景に、俺は目を見開いた。どうやらカーレルは本当にアルバート流を身につけたらしい。それでも、いや何があったとしても関係ない。勝つ。ただそれだけだ。

「剛招来！！」

叫びに呼応するように真紅の光が俺を包む。気持ちが高ぶり、剣が軽くなる。

全身の筋肉がリミッターを外したように踊り、血液の流れによって体温が高くなるのを感じた。

空気を踏みしめ、前に飛び出す。走りながらレンズの力を使い、一気に懐に入り込んだ。

後ろや上を警戒していたカーレルは突然の出現に言葉を失っていた。

「魔王絶炎煌！！」

「俺がその技を知らないとも思ってたか！！」

横薙ぎに振るおうとした拳をカーレルの腕が止める。

手が交差する形になった俺は、次の斬撃が打てなかった。

だが対照的に、カーレルの手は空いている。跳べ、跳べ。

そう念じ、俺は少し離れたところに移動した。間髪を要れず、再びカーレルに突撃する。

「魔王絶炎煌！！」

「何度も同じことを……………っ！？」

カーレルがはつきりと息を呑むのが分かった。魔王絶炎煌。

右手始動のその技は、今回は左手始動だった。変則的な攻撃が、カーレルを襲う。

それを見ながら、俺は思った。入ったと。先程のカーレルの反応から、彼はこの技を知らない。

当たり前だ。この変則的な魔王絶炎煌を使ったのはフェイトとの室内での模擬戦一回のみだ。

知っている筈が無い。

だが、俺が右手を左手に添えたところで、カーレルがニヤリと笑うのを確かに俺は見た。

黒の刃が素早く動き、俺の刃を背で受けた。

啞然としている俺に、刃が迫る。

「っ!？」

それを確認しながらも、動けなかった。俺に出来ることはただ一つ。跳べと念じることだけ。気づいたときにはカーレルから離れたところで俺は立っていた。

頬が切れているのがわかる。遅かったのだろう。だがそれはいい。なぜ、先程の攻撃が見切られた？

「やはり……………そうか」

目の前に立つカーレルが息を吐いた。

「危なかった。だが所詮は元々ある技の改良。読み取るのは容易いよ」

微笑んだカーレルに、俺は絶望した。

ダメだ。もう打つ手がない。変則的な攻撃が見切られた以上、俺の

技でカーレルに通る物は無いのだろう。

新しい技を考えるなんて、無理だ。万事休すか。そう思ったときに、俺の中である案が閃いた。

咄嗟に地面を蹴って、カーレルに肉薄する。

「もうどの技も読んでいると言って……」

余裕のカーレルは続きを言うことが出来なかった。

それは、初めての光景。カーレルが心底危ないという顔をした、初の場面だった。

「閃空剣!!」

黒の剣が日光で煌き、風の刃が牙をむいた。

10・2（前書き）

明日から大学が始まるので毎日更新ができなくなるかもしれません。

それでも完結に向けて頑張っていくので、楽しみにしてください！！

10万、及び20万pv記念小説は時系列が完結後という設定なので、完結後に投稿したいと思います。

それではどうぞ！！

ルークside

人は、危険状態になるほど頭が冴えるものだ。

そう言ったのは誰だっただろうか？俺はその状態をまさに今実感していた。

カーレルに全ての技を見切られ、打つ手が無くなった俺の頭を過ぎったのは、ある光景だった。

それは、元居た世界での最後の戦い。それは今まで俺が何回も見えてきたものだった。

だが、今回初めて、俺はこの光景を見てよかったと思えた。

この窮地を抜け出す方法が分かったからだ。俺の技は全て見切られている。

なら答えは簡単だ。俺じゃない人の技を使えばいい。

そして、俺は俺じゃない人の技を多数知っている。

その中で一番使いやすい技は、同じ流派のあの人の技しかなかった。

「閃空剣！！」

刃が空を切り、竜巻のように風が生じる。

俺の身を守るように巻き上がった風の螺旋は、カーレルを傷つけるには十分すぎた。

咄嗟に後退したカーレルは、しかし、その刃を受け止めきることは出来なかった。

少し離れた場所で着地した音が響く。カーレルは腕を押さえていた。押さえている手の指の間から鮮血が腕を伝わって、静かに落ちた。

「まさかこの俺が血を流すことになるとはね……………」

「やった。俺は内心で歓喜した。ようやくカーレルに攻撃が届いたのだ。」

今まで一度も届かなかった攻撃が、やっと。

だが俺は警戒を緩めることは無かった。確固たる意志を刃に変えて、それをさらに研ぎ澄ませる。

気を抜くわけにはいかない。一撃入れられただけで、まだカーレルの方が実力は上だ。それも、圧倒的な上位。

「ハロルド……………」

『分かってるわ。もう少しよ』

小声でハロルドと会話を交わす。

その後、俺は剣を両手で持った。

ふうー、と息を吐いてそれをゆっくりと引く。

足を振り上げ、叩きつけると同時に俺は腕を突き出した。

目を見開き、声の限りに叫ぶ。

「光龍槍！！」

漆黒の刀身から光が打ち出され、カーレルに向かう。

俺に遠距離攻撃をする手段が無いと読んでいたカーレルは突然の攻撃に目を見開いた。

咄嗟に剣を前に出して光撃を防ぐ。

だが、あの人が使っていた攻撃はそんなもので防げるほど弱くはない。

それは勝手に技を盗んだ俺のでも同じことだった。突き出された攻撃に、カーレルは威力を殺しきれずに吹き飛ばされた。

空中を転がりながら、彼はすぐに顔を上げた。

その瞳にはつきりと黒の刃が映るのを、俺は見た。

「閃光、墜刃牙!!」

斜めに振り上げた俺の剣がカーレルの剣を弾く。

何も無い状態のカーレルなら容易に見切れたであろうその攻撃を彼は見切れなかった。

それほど先程の閃空剣と光龍槍に動揺しているのだろう。

この隙を見逃すはずが無い。

普段は上に向けて突き出すはずの剣を、俺は正面に突き出した。

剣を弾かれ、防御を失ったカーレルの体に、刃が突き刺さる。

その光景がやけにスローモーションに見えた。

俺の剣に貫かれたカーレルは、剣に生じた風圧によって、吹き飛ばされた。

空中を転がりながら、カーレルは落ちていく。

その中で彼は体を翻し、ゆっくりと停止した。

遙か下方で、彼はしっかりと俺を見上げている。

胸から血が流れ、黒い服を赤く染める。その痛みすら無視するように、彼は飛び上がった。

俺と高度を同じに保ち、剣を構える。だが表面上は余裕そうに見えても、どこか焦りが感じられた。

間違いなく今のカーレルは追い詰められている。

だが、ここで気を緩めてはいけない。いや、むしろこの戦いが完全に終わるまで緩めてはならない。

意識を集中させ、俺はゆっくりと息を吐いた。

脱力し、相手の出方を伺う。

『ルーク、いいわよ』

ハロルドの言葉に、俺は目を見開いた。

どうやらハロルドの準備が完了したらしい。

ニヤリと笑い、俺は地面を蹴った。カーレルに肉薄し、剣を振るう。それをいくつか防がれてから、俺は瞬時に後退した。

意味不明な俺の行動に、カーレルは首を傾げた。

だが次の瞬間に俺の思惑が分かったのか、その目が見開かれた。

慌てて俺に接近しようとするが、遅い。

剣を天に掲げて、俺は声の限りに叫んだ。

「やれ！！ハロルド！！」

『了解！！兄さん・・・・・・・・・・私の手で引導を渡してあげるわ！！失われし数多の意思よ、我が元へ来たれ！！クレイジーコメント！！』

その瞬間、世界が蒼く染まる。蒼海のような宇宙に星が煌き、惑星がカーレル目掛けて飛来する。

避ける事も、防ぐこともできない巨大な惑星の軍団は次々と彼を押しつぶしていく。

それを見ながら、俺の耳にハロルドの言葉が届いた。

『ルーク・・・・・・・・・・力借りるわよ』

「ああ、好きなだけ持っていつてくれ」

ハロルドが小さく笑うのと同時に、脱力感に俺は襲われた。体中から力が抜けていくような、そんな感覚。

今まで、俺は殆ど俺の持つ技だけで戦っていた。
ハロルドに使わせたのもレイだけだ。それは全てこのための布石だった。

ハロルドの言う彼女の最強晶術。クレイジーコメット。
カーレルとの戦闘が始まるときに彼女は俺に小声で言ったのだ。
この戦いだけは自分で決着をつけたいと。なら、断る理由はない。
莫大な時間を費やして放ったハロルドの渾身の晶術は、予想以上に
規格外の威力だった。
だが、まだ終わりではない。ベルセリオスのコアが今までに無いほど
眩く輝く。

『更に、トウインクルスター!!』

宇宙を背景にしながら、光が収束する。

それは収束するにしたがってカーレルの体を切り刻んだ。
爆発に伴って球体は弾け、その光撃がカーレルの命を削っていく。

『更に、ミックスマスター!!』

ハロルドの晶術は留まるところを知らない。

先程のクレイジーコメットと同じように、しかしその惑星よりも遥かに大きな惑星がカーレルを押しつぶしていく。

奪われていく体力に、顔を歪めながら、俺は必死で脚に力を入れた。
ここで倒れるわけにはいかない。自身で決着をつけると決めたハロルドのためにも、負けられない。

『兄さん………さようなら』

それは、とても静かな声だった。

それなのにとっても澄んでいて、惑星が衝突する轟音の中でもはつき

りと聞こえた。

悲しげな、泣きそうな、そんなハロルドの言葉が俺の胸を締め付ける。

『・・・・・・・・・・・・・・・・終わりのよ！！プリンセス・オブ・マーマイド！！』

それは、俺が今まで見たどの晶術よりも強力だった。

蒼穹を海が覆い、俺は海中にいるような錯覚を覚えた。

海の中から見える太陽のような球体が、ゆっくりと落ちてくる。

衝撃は水面を靡かせ、終わりを告げる究極の晶術はカーレルの命を奪っていく。

そしてそれが完全に消えたとき、そこには多量の血を流しながら膝を付いたカーレルが居た。

肩で息をしているカーレルにはつきりと俺は叫んだ。

「俺の勝ちだ！！カーレル！！」

俺は声の限りに叫んだ。それでも勿論警戒は怠っていない。

最後まで、本当に最後まで気を抜くつもりは無い。

「ふふ・・・・・・・・ふふふ・・・・・・・・くはははははは！！」

帰ってきたのは狂ったような笑い声だった。

俺は目を見開いた。なんだ、コイツは？なんでこの状況下で笑ってられる？

俺にはさっぱり分からなかった。ハロルドの晶術が完全に決まったのだ。

いくらカーレルでも防ぎきれぬ訳が無い。だが、なんだこの威圧感？

なんだこの・・・・・・・・異様な感覚は。

「素晴らしい、素晴らしいよルーク君。私の体に傷をつけるだけでなく、ここまで追い込むとは・・・・・・・・その強さ・・・・・・・・驚嘆に値する！！」

俺は動揺していた。何だ？なんなんだコイツは？

どうして口調が変わった？どうしてあの傷で平然としてられる？

どうして笑ってられるんだ？

そして彼は全ての答えとなる一言を弾き出した。

「やはり君こそ天上王たる私の敵に相応しい!!」

『・・・・・・・・・・・・・・・・え?』

それは、ハロルドが発したとは思えないほど間の抜けた声だった。
次第にカーレルの体を闇が包む。

それを見ながら俺は必死に頭の中を整理していた。
だが俺の頭の整理が終わる前に闇は弾け、その中から一人の男が出てきた。

だがそれは最早カーレルではなかった。

白の法衣に赤いマントを翻らせ、金の髪が風に靡く。

先程までのカーレルと同じところは、彼が持っている漆黒の剣、ソーディアン・ベルセリオスだけだった。

『そんな・・・・・・・・・・なんで・・・・・・・・・・』

ハロルドの動揺した声を、俺ははっきりと聞いた。

『どうしてアンタがここに居るのよ、ミクトラン!!』

ミクトラン。それは一度だけハロルドから聞いた名前。

先程のカーレルと同じように世界を私物化しようとしていた者の名前。
前。

目の前に佇む彼はその端正な顔を笑みに変えた。

「始めまして。ルーク君。私はミクトラン。この姿で会うのは初めてだね」

「ハロルド、この男が・・・・・・・・・・」

『そうよ。ミクトラン。私の元居た世界で天上王として私達と戦った相手。ついでに言っちゃえば、ベルセリオスが扱える二人のうちの最後の一人。それがコイツ、ミクトランよ』

ミクトランの言葉を見殺し、俺はハロルドに彼のことについて聞いた。

返ってきた答えは俺が予想していたのと何ら変わらなかった。

『そういうことだったのね。兄さんがあんなこと言うはずが無い。でも、アンタが化けてたのなら話は別ね』

「そうだな。奴は弱く、そして儂いからな。素質があるくせにそれを活かそうとしない、屑だ」

『っ！アンタ・・・・・・・・・・』

ハロルドの声にしっかりと怒りが含まれるのを俺は感じた。かく言う俺も冷静ではない。ハロルドの兄を馬鹿にされているのだから心地よいものではない。だがミクトランはハロルドの神経を逆撫でするように話し続ける。

「事実だろうか？ソーディアンベルセリオスを操る力を持っておきながら、最後は私と引き分けたのがその証拠だ。いや、この世界に來れたのが私だけだったというのがその証拠かな？言い返せないだろうか？希代の天才である貴様に及ばなかったのだ。ただのゴミだ」

『黙れ！！』

「・・・・・・・・・・・・・・・・質問がある」

「うん？なんだい？君の質問なら答えよう」

激昂するハロルドを宥めるように、俺は話題を変えた。

このままではハロルドが怒りで我を見失ってしまうと思ったからだ。

「この世界に来てから俺に会うまでの目的は何だ」

「君に会う前は君が持っていたソーディアンベルセリオスの中に居る管理人格、ハロルド・ベルセリオスの破壊だよ」

どうやらカーレルに始めてあつた時に言われた言葉は真実だったらしい。

ミクトランは続けた。

「理由は簡単だ。元居た世界で煮え湯を飲まされたハロルド・ベルセリオスへの復讐。マスターである君ごと殺害することが目的だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・なら、俺と会った後は？」

「君を仲間に引き入れたかった。これは事実だ。だがどちらかというと君に強くなってほしかった。私は退屈していた。元の世界でも一人で私に並ぶ人間は居なかった。だが君にはその素質があつた。だからこそ全てを利用して君を強くさせることにした」

「・・・・・・・・・・・・・・・・だったら、今の目的はなんだ？」

俺の言葉に、ミクトランは笑った。

「さつきも言っただろう？世界を手に入れることだ。遥かなる高みに届いた君を倒す。そうすれば、私を止められるものなど居はしない」

悔しいがそれは事実だった。世界中に猛者は沢山居るだろう。

だが、ミクトランは何よりも異質だ。次元が違う。

『なら、私からも質問よ。どうやってここに來たの？』

「君達がこの世界に移動する際に消えたはずの私の意識がそれを感じ取った。ソーディアン・ベルセリオスが向かうのなら融合した私が行ってもおかしくはないだろう？まあ生憎とルーク君の手に渡った君は完成形のベルセリオスだったわけだ。私は人の形を取ること成功し、ベルセリオスと分裂した」

『世界に同じ存在は二つ存在できないってことね。私がソーディアン・ベルセリオスとしてここに居る以上アンタはソーディアン・ベルセリオスとしてこの世界に居る事は出来ない。だからこそアンタは人の形になった。ならそのソーディアンは管理人格が居ないか、機能が停止した、ソーディアンではなくただの剣、そういうことね』

「そのとおりだハロルド・ベルセリオス。君を仮にソーディアン・ベルセリオスとするならこの剣はソーディアンレプリカのようなものだ。機能を停止したソーディアンと普通のソーディアンは別物だからね。故に晶術もそこまで強力なものは使えない。だが、それでもそこらへんの剣よりは強い」

ミクトランの説明を理解しながら俺はゆっくりと彼に質問した。

「最後にひとつ聞きたい。何でカーレルの姿に化けた？」

「そのほうがハロルド・ベルセリオスに衝撃を与えられると思ったからだ。なかなかだったろう?」

その笑顔で、言葉で、言動で、俺ははつきりと理解した。コイツは殺してもいい。心の底から初めて俺はそう思った。ミクトランは人間じゃない。人の形をした化け物だ。

『ルーク、アンタに貸した貸しあったわよね?』

「え? ああ」

『それ全部返しなさい。ミクトランを倒すのを手伝う。それだけで借りは全部返したことにするわ。ううん、むしろこの戦いが終わったらなんでも協力する。だから、だからあのバカを殺して』

それは、ハロルドの切実な言葉だった。

全てをかけても、ハロルドはミクトランを倒したいのだ。そしてそれは俺も同じだ。

「分かった」

俺はしっかりとそう答えて剣を構えなおした。

10・3（前書き）

30万pv突破しました。

これで記念小説は10万、20万、30万の三つに………

大変です………

ルークside

剣を構え、俺はミクトランと対峙した。

先程のハロルドの強力晶術と、技の多用で疲労は限界まで溜まっている。

だがそれはミクトランも同じなはずだ。姿形は変わっても、肩で息をしている。

なら、まだ勝機はある。ハロルドも限界まで頑張ってくれるのだ。俺だって、全てをかけて戦わなければならない。

目の前に立つミクトランがゆっくりと剣を構えた。

これで、終わらせる。そう意気込んでいるのは俺もミクトランも同じだ。

なのはの飛行魔法が持つのもそう長くは無いだろう。だからこそ、短期決戦で決める。

「行くぞルーク君！！これが私の最後の技だ！！」

その瞬間に、視界を覆うほどの魔法陣が展開した。

それは衝撃波を轟かせながら収束し、天に打ち上がる。

同様の魔法陣が天上にも展開し、そこから光が降り注いでくる。

「ハロルド！！粹護陣！！」

『了解、キュア！！』

「消え去れ！！レインティプ・オリオン！！」

ミクトランの声が響くのと俺が防御を展開するのは殆ど同時だった。光の雨が着弾し、爆風が俺を包んだ。身を焦がすような痛みが体をかけ回る。

どうやらミクトランの言っていたように、最強の攻撃らしい。

俺の防御まで通り抜けて、体が傷ついていくのが分かる。

だが裏を返せばそれだけミクトランに余裕が無いということだ。

舞い上がる爆煙が晴れたとき、そこには目を見開いたミクトランが居た。

「今のを防いだというのか………素晴らしい」

ミクトランの声を聞きながら、俺は腕を押さえながら必死で足に力を込めた。

体中がボロボロなのが分かる。所々が裂け、血が流れている。

「だが、もう限界のようだな。それもそうか。たった一本のソーディアンで私に勝つなど、無理な話だったか」

『何言ってるのかしら？デймロス、アトワイト、クレメンテ、イクティノスの四人の働きなんか私一人で十分なのよ』

「そうだぜミクトラン。動けなくてもいいんだ。そんなの、関係ないんだよ」

俺の言葉に首を傾げたミクトランは、次の瞬間には後ろに飛んだ。先程までミクトランが居た場所に、水色の魔法陣が展開し、そこに巨大な氷柱が降り注ぐ。

『インブレイスエンドってね………具現せよ精霊の結晶、アクアリムス！！聖なる加護、我らに！！』

ハロルドの言葉に呼応するように槍を持った美しい女性が姿を現し、俺の体を蒼い光が包んだ。

傷と気力が回復していく。それを見ながらミクトランは首を傾げた。

「回復晶術だ?」

『正確……には……アクアリムス……はね……
……攻撃も出来るのよ……はあ、はあ……でも、
今回は回復に回したわ』

息も絶え絶えでハロルドが言葉を発した。

無理も無いだろう。クレイジーコメットのような強力な晶術に、先程の召喚のような晶術。

ハロルドの力は最早限界に近い。

『でもね……私は別にいいのよ……あとはルークがやってくれるわ』

ハロルドの声に答えずに俺は剣をミクトランに向けた。

回復状態の今ならまだ多少は動ける。大してミクトランは大技を放ったばかりだ。

仮に先程の強力な晶術を超える技を隠し持っていたとしても、必ず耐えてみせる。

「行くぞミクトラン、光龍槍!!」

剣に光が凝縮し、高速で打ち出される。

それをミクトランが剣で防ぐのを見ながら俺は彼に肉薄した。

どうやらミクトランは避ける気力も残っていないらしい。

剣を振るうが、いずれもミクトランの剣に防がれる。
だが防がれるたびにミクトランの表情が苦しそうに歪むのを俺は見
逃さなかった。

「まだだ、まだこんなところで……………」

「俺だって……………負けられない!!」

響く金属音が次第に大きくなる。その斬り合いの中で、ミクトラン
が不意に消えた。

「タービュランス!!」

上から降ってきたミクトランの剣をハロルドを水平にして受け止め
る。

全体重をかけた攻撃に、体がぐらついた。その隙を逃すことなくミ
クトランは剣を振るう。

「オニキスフレア!!」

「ディープミスト!!」

ミクトランの剣から生じた漆黒の炎を後ろに飛ぶことで避け、霧を
発生させることで追撃を防いだ。

「邪魔だ!! 閃空剣!!」

ミクトランの剣を風が纏い、竜巻となって打ち出される。

それは漆黒の霧を吹き飛ばした。

少し距離を開けて、俺たちは対峙し合う。

最早閃空剣がコピーされたことに驚きなど感じない。

ミクトランならやってくる。そう覚悟していたことだ。

そして距離が開いた今なら晶術以外で俺がやれることは一つだけ。

剣を両手で持ち、ゆっくりと引く。

まるでかがみ合わせのように、ミクトランも同じことをした。

そして、同時にまったく同じ剣を突き出した。

「「光龍槍!!」」

俺達の言葉が重なり、光の閃光が互いの剣から打ち出される。

それは相手の閃光と衝突し、お互いを殲滅せんと、相殺しあっている。

『負ける………もんですか………』

俺の体から力が抜けていくのが分かる。

今この閃光を発生させているのはハロルドだ。

つまり、俺の体力である。顔を顰めながらも、俺は力を注ぎ続けた。少しづつ、衝突点がミクトランの方に向かっていく。

「頑張ってパパ!!」

不意に、遙か下から愛する娘の声が響いた。

「ルーク!! 負けちゃダメ!! 頑張って!!」

「そつや!! そんな金髪優男に負けたら許さへんで!!」

「勝て!! ルーク!!」

なのはが、はやてが、ヴィータが、俺を応援してくれる。
疲れているはずなのに、声を最大限まで出して、応援してくれる。

「ルーク！！負けないで！！」

「ここで押し負けるな！！勝てルーク！！」

さっきまで居なかったはずのフェイトやシグナムも、俺のことを応援してくれる。

彼女たちだけではない。六課の様々な人が、様々な場所で俺を応援してくれているのははっきりと聞いた。

『人気者じゃない・・・・・・・・ルーク』

「軽口叩いてる暇なんかないぞ・・・・・・・・でも、暖かいな」

ゆつくりと目を閉じ、意識を指先に集中する。

「はああああああああああああああ！！」

それは、今迄で一番響いた声だった。

空気を振動させながら、俺は腕に力を込める。

「負けるかああああああああああ！！」

光の閃光が大きさを増し、じわりじわりとミクトランの方に接近していく。

光越しに彼の表情が驚愕に染まるのを俺ははっきりと見た。

次の瞬間には俺の閃光はミクトランの閃光を飲み込み、そのまま彼

に直撃した。

空中を転がるミクトランを見ながら、俺は叫んだ。

「ハロルド！！決める！！俺の持つてるもの全部持つてけええええええええええ！！」

「ルーク・・・・・・・・ミクトラン、これで止めよ！！古より伝わりし浄化の炎、消えろ！ エンシェントノヴァ！！」

天を赤い雲が包み、それがミクトランの上空で収束していく。そこから火球が落ち、ミクトランを焼き尽くした。

『私の全てをかける！！具現せよ精霊の結晶！！フランブレイブ！！灼熱と、業火の意思よ、焼き尽くせ！！』

何も無いところから炎の魔人が現れる。

それが両手を振るうごとに放たれる炎撃がまるで虫けらのようにミクトランを燃やし尽くす。

右手左手、二回の炎に焼かれたミクトランは最後に魔神が放った最大の炎でその命を焦がすことになった。

ミクトランが両膝を付き、倒れる。腕で必死に体を支えようと試みているが、そんな力も残っていないようだった。

「はあ・・・・・・・・はあ・・・・・・・・ルーク、私は・・・・・・・・ちよっと眠るわ・・・・・・・・あとは・・・・・・・・任せたわ・・・・・・・・・・・・・」

その言葉を最後にハロルドは意識を失った。

コアレンズは覗いているので、死んだわけではない。

文字通り、眠りについたのだろう。今はゆっくりと休んでくれ。

そう頭の中で念じて、俺はミクトランを見つめた。

地上では歓喜の声が聞こえてくる。だがそれでも俺はミクトランを見つめ続けた。

勿論剣をしまうことはしない。最後まで、気を抜かない。

顔だけをこちらに向けたミクトランは俺を見て笑った。

「この期に及んでも警戒を解かないか……大した大物だ……」

腕を押さえ、ミクトランがゆっくりと立ち上がる。

だがその足取りは覚束ない。

「まだだ、まだ私は完璧ではない。ここは引かせてもらおう」

「させると思っているのか？」

ここでミクトランを逃がすわけにはいかない。

確実にここで殺す。俺の瞳の中に意志の炎を見出してミクトランは悔しそうに唇を噛んだ。

「今の私なら君一人でおつりが来るレベルだろうな。だが、それでも逃げさせてもらう。これは戦略的撤退だ。ストップフロウ！」

巨大な時計が出現し、次第にその動きを止めていく。

それを見た瞬間に俺はその晶術の性質を理解した。

時を止める晶術なのだろう。なら、避ける方法だってあるはずだ。

俺はその時計の針をじっと見ていた。それが止まる瞬間が、勝負。

そしてそれが止まると同時に、俺はレンズの力を使用した。

移動した先は、ミクトランの後方。そして移動した瞬間に俺の考えが正しかったことを知った。

世界は、蒼く止まっていたからだ。

「見抜いたというのか……この術を!!」

ミクトランは叫び、振り向く。

後ろで剣を構える俺を見て、さらにその顔を歪ませた。
剣を天に掲げ、彼は叫んだ。

「消えろ！消えろ！セラフィックフェザー!!」

放たれた晶術の軌道を見ながら、俺は避けることに専念した。
だが、その軌道を見ているとき、俺は気づいてしまった。
その一つがどこに向かっているのか。

「っ！しまった！」

ミクトランが声を上げると、世界が動き出すのは同時だった。
止まっていた筈のものは達めがけて、閃光が飛んでいる。

そしてそれはそのまま進めばヴィヴィオとなのはに当たると想定するの
は容易であつた。

いつもののはなら避けられたかもしれない。だが彼女は今俺に全
ての力を渡して力が残っていない。

近くに居たはやてやシグナム、フェイトが気づくが、遅すぎる。

当然だ。今まで時間が止まっていて、気づいたら急に閃光が迫って
いたようなものなのだ。

そんなもの、防げるはずが無い。なのはがヴィヴィオをしっかりと
抱きしめるのが見えた。

この場でなんとか出来る人間は俺しか居ない。

本当にミスなのだろう。しまったという顔をしているミクトランを

尻目に、俺はレンズに触れた。

今ならまだ割り込んで剣で切り伏せられる。そう思ったときに、俺は落下する感覚を覚えた。

目を見開き、状況を理解する。なのはの飛行魔法が切れたのだろう。重力に逆らえずに、俺は落ちていく。そして、それは明らかにタイムロスだった。

状況を飲み込むのも、突然の出来事でレンズから再び手を離してしまったのも、もう一度レンズに触れるのも、全てが時間を進めてしまった。

もう、出来ることは一つしかない。

レンズに触れ、俺は遙か下方のなのはとヴィヴィオを見つめた。

絶対に護る。命に代えても。

視界が歪み、次に見えたのはなのはとヴィヴィオの顔だった。

襲い掛かる脱力感。そして次の瞬間に背中に衝撃が走った。

それは、俺の意識を刈り取るには十分すぎた。

最後に俺が見たのは啞然とするなのはとヴィヴィオだった。

なのはside

ミッド地上の市街地。そこでなのは目を見開いていた。なのはだけではない。そこに居る誰もが言葉を失っていた。

激戦。空で繰り広げられるそれを、愛する人が勝利すると信じ続けていたそれを見ていた。

そしたら目の前に光が迫っていて、ヴィヴィオを慌てて抱えて衝撃に備えて。

そしてなのはそこから先をはっきりと思い出した。

気づいたときにはルークが目の前に居たのだ。

ボロボロで、所々から血を流したルークは、安堵の笑みを浮かべながら、自分を見ていた。

そして次の瞬間にはルークの背中に黄色い閃光が当たり、彼は倒れたのだ。

他でもない、自分の目の前で。

「パ………パ？」

信じられないといった声を上げてヴィヴィオがなのはの手を離れた。ゆっくりとルークに近づき、その体を揺らす。

だがどれだけ体を揺らしても、ルークが目を開けることは無かった。

「パパ！！パパ！！」

涙をその瞳に溜めながら、ヴィヴィオは叫んだ。

その体でミクトランの攻撃を受けたのだ。威力は十分すぎた。

防御をしても突き抜ける威力なのだ。それを背中で受けたらどうなるか、なのはには手に取るように分かった。

瀕死の重傷を負うに決まっている。

「ルーク!!!ルーク!!!」

ルークに近寄ってなのは彼を抱き上げた。

その顔はとても穏やかだった。だがその表情がまるで死んでいるように見えて、なのはは全身の血が凍る思いをした。

なのはの大声に弾けるように全員が動く。

シグナムが近寄つて体から流れる血を衣類で止め、はやてはモニタ―を開いて直ぐにシャマルに連絡を取つた。

重症なはずのウィータも体を引きずりながらルークに近づき、フェイトはなのは達を護るように立っている。

その手にはザンパーフォームのバルディッシュが握られていて、空中で啞然としているミクトランを睨み付けていた。

「くそ……。まだ体が完成しては居なかったか」

ミクトランの言葉に、
なのははゆっくりと彼を見上げた。

ミクトランは何事も無かったかのようにルークを見下ろしている。

その表情が、態度が、いや全てがなのは怒りに触れた。

[illegible]

ルークから離れ、体を引きずりながらのはは飛び立とうとした。

だが何をしてもし彼女が飛び立つことは出来ない。

魔力は全てルークに渡ってしまった。今は空なのだから。

「なのは！！ダメだよ！！」

なのはが正気ではないことを悟ったフェイトは必死でなのはを止めるが、彼女は暴れ続けた。

「離して！！離してよフェイトちゃん！！絶対に許せない！！殺してやる！！」

なのはは最早正気ではなかった。本来のなのはならすぐに分かるはずだ。

ミクトランが自分よりも遥かに上であること、自分が今は飛べないこと。

だがどんな条件もなのはの頭には入ってこなかった。ただ彼女を動かしているのは、怒りのみ。

「くだらないな」

「な・・・・・・・・・・に？」

「まあいい。これで力を取り戻せる時間が出来たわけだ。ルーク君が目覚めたらここに来るように言え。ここで待っていると」

それは、完全に単なる報告だった。

その目になのはなど映っては居ない。どうでもいいのだ、なのはのことなど。

その態度がさらになのはの怒りに拍車をかける。

「よくも・・・・・・・・よくもそんなことが！！」

地面に落ちたメモリーを一瞥して、なのはは叫ぶ。

それでも、必死でフェイトが止めているため、その体はまったく動かない。

仮に動けたとしても、なのはは飛べないのだ。勝ち目は無い。

それが知っているのか定かではないが、ミクトランはルークを一瞥してその場から消えた。

なのはを見ることは結局一度も無かった。

誰も居なくなつた空を見上げて、なのははミクトランへの怒りが消えていくのが分かった。

暴れなくなつたなのはからフェイトがゆっくりと離れると、なのはは地面に膝を付いた。

駆け巡るのは、ふがない自分に対する怒り。

「あああああああああああああああああ！！」

なのはは狂つたように叫んだ。その様子を、六課のメンバーは悲痛な顔で見ているしか出来なかった。

「また………また私は護れなかった！！また………うあああああああああああ！！」

一度は護ると誓った。なのに、ルークは尚も傷ついている。

しかも今回は護ると誓った相手に、護られた。

その結果ルークは瀕死の重傷を負った。

自分のせいだ。全部、全部自分のせいだ。自分が弱いから、ふがないからこんなことになった。

蒼穹の下。そこで機動六課が得られたのはミクトランが残したデータだけだった。

だがそれと引き換えるにしては彼らが失うものは大きすぎた。

いや、なのはが失つたものはあまりにも大きすぎたのである。

なのはside

ゆりかご事件から三日。聖王教会所属の病院の一室でなのはとヴィオはベッドに寝ているルークをじっと見ていた。

ここ三日。彼女達は家に帰ることなくルークの側に離れずにずっと居た。

席を立たなければならぬ場合でも、二人の内どちらかは常にルークの側を離れなかった。

あのと、スカリエッティは逮捕され、捜査に協力的なナンバーズは保護観察処分となった。

捜査に非協力的なナンバーズとスカリエッティは刑務所で留置となった。

結果としてナンバーズは二人が死亡した。ナンバー2のドゥーエはゼストにより殺害。

ナンバー4のクアットロはゆりかごの中で何者かに殺されたということになっている。

だが、なのははそれをしたのがミクトランだと確信していた。六課メンバーは殆どが回復し、今は普通に仕事に戻っている。

なのはも仕事に戻らなければならないのだが、はやての恩恵で仕事を免除してもらっている。

フェイトとはやてが代わりに仕事をすることで解決したらしい。だがその中で、ルークだけは一向に目を覚まさなかった。

医療設備の整っている聖王教会所属の病院と、目を覚ましたハオルドの治療術のお陰で傷は回復した。

だが、力を使いすぎたらしい。剛招来による全身の筋肉の活性化。ハオルドに渡した過剰な気力に、レンズの移動と引き換えに消費し

た体力。

それら全てが、ルークが今回で全てを使い果たすつもりで使われていた。

安らかに眠っているように見えるが、非常に危ない状態らしい。

むしろ、生きていることそのものが奇跡なようだ。

疲労困憊状態でミクトランの強力な一撃を受けたのだ。無理は無いだろう。

『・・・・・・・・・・・・・・・・悔しいわね。もう少し晶術の威力が高ければ・・・・・・・・・・』

「・・・・・・・・・・・・・・・・ハロルドさんは悪くないよ」

不意にそう呟いたハロルドに、なのはは力の無い声でそう返した。

ハロルドは精一杯やった。自身の全てを使うほど晶術を連発し、ルークの勝利のために精一杯貢献した。

力を使い果たし、眠りについたハロルドが目覚めたのは昨日のことだった。

回復し、ゆつくりと意識を取り戻した彼女はなのはから戦いの結果を聞いて、黙り込んだ。

自分のせいだと思っているのだろうか？だがなのはからすれば何も出来なかったのは自分の方なのだ。

ハロルドのことを責めようなんて思うわけも無い。

『・・・・・・・・・・・・・・・・なのは、一回家に戻りなさい。寝たほうがいいわ』

「・・・・・・・・・・・・・・・・大丈夫だよ。疲れてないから」

昨日もなのははハロルドと同じような会話をした。

目覚めたハロルドにフェイトが彼女が眠っていた二日間のことを説明をし、その中でなのはがずっとこの病室にいることを知ったのだ。シャワーや食事などはともかく、ベッドがルークのベッド一つしかない部屋ではろくに寝ることも出来ない。

事実、なのはの目の下には隈が出来ていた。なのはだけではない。まだ幼いヴィヴィオも、うとうとしながらじっとルークを見つめていた。

「・・・・・・・・・・ママ」

『ヴィヴィオだって心配してるのよ』

ヴィヴィオの言葉に、ハロルドが続ける。

「・・・・・・・・・・分かってる・・・・・・・・・・けど・・・・・・・・・・
・・・・・・・・」

不意に目の前の椅子に座っていたヴィヴィオが飛び降りて、歯切れの悪いなのはに近づいてきた。

膝の上に登り、その細い体をヴィヴィオはしっかりと抱きしめた。

「ママ・・・・・・・・・・このままじゃママ倒れちゃうよ・・・・・・・・・・
・・・・・・・・」

「ヴィヴィオ・・・・・・・・・・」

『・・・・・・・・・・帰りなさいなのは。一回帰ってヴィヴィオと一緒に寝なさい。その後に来ても大丈夫よ。それに、目覚めたルークにそんな顔を見せるの?』

「・・・・・・・・・・そうだね」

なのはは頷き、ヴィヴィオを膝から下ろすと、ゆっくりとその手を握った。

立ち上がり、壁に立てかけてあるハロルドを見て、彼女は微笑んだ。

「じゃあハロルドさん。また後で来るね」

『しっかりと休むのよ』

ハロルドの言葉になのははしっかりと頷いて病室を後にした。

六課の隊舎。そこにあるルークとなのはの部屋はそのままだった。

部屋中にルークとの思い出が溢れている。零れそうになる涙を拭い、なのははキングサイズのベッドに足を運んだ。

真っ先にヴィヴィオが入り、なのはを見つめる。

彼女もあまり寝ていないのだ。眠いに決まっている。

なのはは内心でヴィヴィオに謝りながら、ベッドに入った。

その小さな体を抱きしめて、ゆっくりと瞼を閉じる。

本当なら、もう一つ、なのはをも包み込んでくれるぬくもりがある筈だった。

本当なら、今頃は三人でどこかに出かけていたかもしれない。

脳裏に朱髪の彼の笑顔を思い浮かべながら、なのははゆっくりと眠りに付いた。

その瞼から、一筋の涙が零れ落ちたのを知るのは、なのはだけであつた。

夢を見ていた。私は幼いころから一人だった。

いつも一人が嫌で、しょうがなかった。暖かい家庭に憧れを持った原因はそれだろう。

家族が戻ってきて、一人じゃなくなっても私は一人になるのが嫌だった。

魔法を手にして、一人の女の子に会った。彼女はいつも一人で、とても寂しげに見えた。

それが昔の自分と重なって、彼女を助けたいと思った。彼女と親友になって、様々な人と友達になった。

赤い騎士や、夜天の女の子。その子達と一緒に居る事で、寂しさを忘れられた。

でも、充実しているように見える毎日を送っていても、寂しくなることはあった。

自分が欲しいのは家族だから。とても暖かい家族だから。けれど彼女達と家族にはなれない。

成長して、皆は夢を持ち始めた。それに向かって皆生き生きとしているように見えた。

それでも、未だに私には目的が無かった。これといった夢が無かった。

なんのために管理局に居るのかも、よく分からなかった。ここに居ても私が本当に欲しいものは手に入らないのに。

私はただ怠惰に毎日を過ごしていただけだった。

どれだけ魔法の才能があっても、私が満たされることは無かった。そんなとき、彼に会った。今でもその光景を覚えている。

初めては扉を開けたらだった。扉を開けたら、彼はそこで壁に寄りかかっていた。

顔を上げて瞳を見たときに、彼の悲しさが私の中に入り込んできた。その笑みの後ろにある寂しさを、取り除いてあげたかった。

誰よりも、彼の力になりたかった。彼と一緒に居るうちに、私は安らぎを感じた。

寂しいと思うことなんて、それから一度も無かった。

最初は手のかかる子供みたいだった。右も左も分からない子供。

でも彼を子供から男としてみるようになったのはいつからだろうか？

気が付けば彼を目で追っていた。その強さに、優しさに、心惹かれている自分が居た。

だからこそ、告白されたときは心底驚いた。私を愛してくれるなんて、思ってもみなかったから。

それから初めての連続だった。デートに行ったのも、写真撮影をしたのも、全部初めてだった。

でも、全部がとても楽しかった。彼と居ると、どんなことでも楽しく思えた。

女の子を保護して、彼女は私の義理の娘になった。それでも、彼は嫌な顔一つせずに彼女を愛してくれた。

その娘に嫉妬したこともあったけど、私も娘のことが大好きだった。気が付けば、私が心から欲しいと願っていた温かい家庭がそこにはあった。

三人とも血の繋がりなんてない。でも、そんなのが無くても、私達は幸せだった。

だからこそ、彼が凶刃に倒れたときに私は絶望した。彼が居なくなってしまうようなそんな感覚を覚えたから。

一度は護ると約束した相手を、私は護れなかった。

一緒に居ると約束した相手を、私は手放してしまった。

だから、私は全てを取り戻そうとした。途中で彼が来てくれたとき、本当に嬉しかった。

娘を取り返した後も、私の力を必要としてくれて本当に嬉しかった。私を必要としてくれて、胸が暖かくなった。

でも、その彼はまた倒れた。他でもない私を庇って。

護ると誓ったのに、また護れなかった。私は彼をボロボロにした敵に何も出来なかった。

自分が憎い。何も出来なかった自分が、でもそれ以上に敵が憎かった。

どこまで彼を、ルークを追いつめればいいのか。

私の中で一つの決意が芽生えた。

ゆっくりとなのはは目を開いた。時間は夜。
かなり長い時間眠っていたみたいだ。腕の中ではヴィヴィオが静かな寝息を立てている。

彼女を起こさないようにゆっくりとベッドから抜け出したなのははなるべく音を立てないように着替え始めた。

六課の制服に身を包んだ彼女は、テーブルの上に置いたレイジングハートを首にかけて、振り返った。

ベッドで寝ているヴィヴィオに優しく口づけをして、なのはは部屋を後にした。

扉をゆっくりと開けて、中に入る。

面会時間は当に過ぎているが、ここ三日病院に泊まっていただけあって看護婦に見つかっても何も言われることはなかった。

部屋の中はいつものように薄暗かった。ベッドで眠るルークの表情はいつものように安らかで、死んでいるようだった。

後ろ手にゆっくりと扉を閉めて、なのははベッドの横に立った。

『・・・・・・・・・・・・・・・・なのは？』

不意に聞こえたハロルドの声も、なのはは、無視をした。

モニターを開き、そこにミクトランが落としたデータのコピーを映し出す。

そのデータは、事件終了後すぐにはやてが回収した。

念のためデータのコピーを隊長、副隊長に彼女は渡した。

彼女は悪くは無い。いくら聡明なはやてでも、人の心までは読みきれなかった。

ただそれだけのこと。ざっと表示された文字を確認してなのははモニターを切った。

『何を・・・・・・・・・・しているの？』

このとき、ハロルドはなのはが何をしているのか本当に分からなかった。

不思議そうなハロルドの言葉を無視してなのははベッドに眠るルークの頬に触れた。

愛おしそうにその頬を摩り、なのはは微笑んだ。

「ルーク。私はルークに会えて幸せだったよ」

彼が居たから、なのはは間違えずに済んだ。

彼が居たから、なのはは寂しくなかった。

彼が居たから、なのはは夢を叶えられた。

彼が居たから、なのはは幸せになれた。

思い返してみればいつも思い出の中のなのはの隣には彼が居た。

彼が、ルークが笑っていてくれるから、なのはも笑顔であれた。

目を瞑り、眠っているルークの唇に、なのははそっと口付けを落とした。

それが短い間だったのか、長い間だったのかは定かではない。

だが、なのははゆっくりと唇を離し、愛おしそうに眠るルークを見つめた。

「ルーク………大好きだよ」

小さな声で、しっかりとそう呟いたなのははゆっくりとルークから離れた。

首に掛けたレイジングハートを握り締め、その姿を白の魔導士へと変える。

この三日、様々なことがあった。頭の中を整理するのにかなりの時間を要した。

そして、最後まで残った決意はただ一つだった。

『私がミクトランを倒す』

それは無謀に思えた。彼の力がどのくらいのレベルなのか、なのはにははつきりと分かっている。

自殺行為だと、嘲り笑った。だがそれでもその決意を諦める事は出来なかった。

何もせずにただルークが傷ついていく様を見ているなんて耐えられなかった。

どうしてルークばかり傷つくのだろうか。ルークは何も悪いことなどしていないのに、不公平だ。

もしもそんなことを運命づけた神が居るのなら、その神をも殺してやる。

なのはは決意の炎を瞳に宿し、杖をしっかりと握り締めた。

どこまで出来るかなんて分からない。自分の命を全て燃やし尽くしても、勝てないかもしれない。

だが、なのはは選択した。管理局最強の魔導士としてではなく、ただ単にルークを最も愛する者として、ただの女として、なのはは選択した。

その結果がどうであれ、後悔するつもりなど無い。

『アンタ・・・・・・・・まさか・・・・・・・・』

ハロルドの息を呑む音がはつきりと聞こえてきた。

「行ってくるね。ハロルドさん」

『っ！ダメよ！分かるでしょ！？勝てないわ！！そんなの絶対にダメよ！！』

「それでも、私は行くよ。ルークに譲れない物があるように、私に

だつて譲れない物があるんだ」

ハロルドの言葉を見殺し、なのははゆつくりと扉へと近づいていく。

『なのは！！やめなさい！！無理よ！！』

「今までありがとう、ハロルドさん」

それは、死に別れのセリフに思えた。だからこそ、ハロルドは声を張り上げた。

だがどんな言葉もなのはの耳には届かなかった。

扉がゆつくりと閉まった後でも、ハロルドは叫び続けた。

『なのは！！行つてはダメよ！！なのは！！ルーク！！起きなさいルーク！！今起きなくてどうするのよ！！』

ハロルドはこのときほど自分で動けないことを呪つた事は無かつた。分かつていても、ハロルドにはなのはを止めることしか出来なかつた。

ただ声を荒げ続けることしか出来なかつた。それは、あまりにも残酷すぎた。

部屋に残つたのは、聞こえるはずの無いハロルドの悲鳴のような声だけだつた。

ミッド地上。人も決して近寄らないような洞窟の奥。そこにミクトランは居た。

階段に座り込み、ただじっと人を待っている。待ち望んでいる彼がいつ来るのかはミクトラン自身も分からない。

その空間は薄暗かった。天井に穴が開いているので日光は差し込む。だが、その穴のあまりの高さゆえに、決して明るいとはいえなかった。

その部屋の造りは簡単なものだった。

部屋の奥に巨大な窪みのような物があり、それを取り囲むように階段が出来ている。

その造りは、ミクトランがかつての世界でソーディアンメンバーと戦った舞台にそっくりだった。

だが、かつてはそこに存在していた巨大なレンズ――神の眼はそこにはなかった。

それでもミクトランはそこを決戦場を選んだ。

例え神の眼が無くても、負けはしない。そんな確固たる意志がミクトランの中にはあった。

ここから始まるのだ。かつての世界でミクトランが終わった場所から、全てを始めようとしている。

だからこそ、ミクトランがこの場所に足を踏み入れるのを許可したのは彼だけだった。

自身とたった一人で対等に戦い、傷をも負わせた男。

ルーク・フォン・ファブレ。そのたった一人を、ミクトランは待ち望んでいた。

それなのに。

轟音が響き、扉が音を立てて吹き飛ぶ。

爆風の中からゆっくりと姿を現したのは、ミクトランが待ち望んだ彼ではなかった。

階段に座るミクトランはゆっくりと顔を上げ、目の前の爆煙を睨み付けた。

「何のようだ？ここは神聖な場所だ。足を踏み入れていいのはルーク・フォン・ファブレただ一人。貴様のような足枷が来ていい場所ではないぞ」

その眼にははつきりと怒りが宿っていた。

だが土煙の中から歩み出た彼女――高町なのはの目に映る怒りの炎は尋常ではなかった。

彼女はレイジングハートを振るい、目の前の階段に座るミクトランを睨み付けた。

「ミクトラン・・・・・・・・・・今すぐ殺してあげる」

地を這うような低い声でなのは一言呟いた。

六課のメンバーが耳にすれば戦慄するような声もミクトランには何の影響も及ばさなかった。

逆にミクトランは高笑いをしながらなのはを見下ろした。

「貴様のような足枷が私を殺す？寝言は寝て言え」

「貴方を殺さないでルークは幸せにはなれない。だから殺す」

「無理だといってるのが分からないのか？足枷風情が」

途端にミクトランの纏う雰囲気が変わった。

圧倒的な威圧感と、尋常じゃない量の殺氣がなのはに突き刺さる。だがそんな状況の中でもなのはは顔色一つ変えなかった。

「ほう、この殺氣の中で平静としてられるか。力を付けたのか、それとも怒りで我を見失っているのか……」

心底楽しそうに笑いながらミクトランはそう呟いた。だが未だに彼は階段から立ち上がるうとはしない。それが益々なのはの怒りに拍車をかけた。

「座りながら相手をするつもり？」

「十分すぎると思うがね？」

なのはは杖を構えてミクトランに向ける。その様子を見てミクトランは苦笑いした。

「さすがに冗談……」

「エクセリオンバスター！！」

ミクトランは続きを言うことが出来なかった。

座っていた場所に桃色の砲撃が撃ち込まれ、轟音を立ててそこが陥没したからだ。

楽しく会話をしている暇なんてなのはにはない。何よりも会話など交わしたくは無かった。

だが聞こえてきた声は後ろからだった。

「やれやれ、神聖な場所を壊すとは」

聞こえた声になのははすぐに床を蹴った。

前に飛び出してすぐに振り返り、杖を向ける。

案の定そこにはミクトランが立っていた。その手には既に漆黒の剣が握られていた。

「名前も知らない足枷よ、一つ教えてやる。お前はルーク君の足枷だ。下らぬ愛情などというものを振りまき、ルーク君を弱くする。

その結果ルーク君は何回倒れた？何回傷ついた？」

「黙れ」

ミクトランの言葉をなのは一蹴した。

全て知っている。自分のせいでルークが傷ついたことも、倒れたことも。

だが、そんなことはどうでもいい。少なくともミクトランが言うことではないのだから。

「なんだ？まさかルーク君を傷つけた責任を自分が取るとでも言うのか？愛し愛されて、ルーク君に安らぎを与えるのが貴様の罪滅ぼしだとしても？傲慢だ足枷。貴様の命などルーク君の足元にも及ばない。しかもそれは愛などではない。貴様が愛しているのは恋をしている自分自身だ」

「責任だとか、罪滅ぼしだとか、そんなことはどうでもいい。ただルークの傷つく姿が見たくは無い、ただそれだけ。だから、ルークを傷つける貴方を死んでも殺す」

なのはの言葉にミクトランは高笑いをした。

「さっきの言葉は撤回しよう。お前は恋している自分を愛してるの

ではない。狂っている。ただそれだけだ」

ミクトランの言葉に応えずになのはは杖を握る手に力を込めた。

「デイベイン……」

刹那。ミクトランは瞬時になのははの懐に入り込んだ。

それはまるでルークがレンズの力を使用して転移したようだった。迫る黒刃を認識し、なのはは咄嗟に左手を動かした。

杖を回転させ、剣を弾く。そのまま床を蹴ってなのはは空中に飛び上がった。

先程の一撃を防いだ両腕が痺れているのが分かる。

重い。今まで相手をした誰よりも鋭く、そして重い攻撃だった。

「弱いな」

小さく呟いたミクトランをなのはは睨み付けた。

「弱い。ルーク君の足元にも及ばない。やはり君達はルーク君の足枷だ。なんの役にも立たない」

「確かにそうかもしれない。私達はルークの役に立たないかもしれない。でもルークがして欲しいと思うことのいくつかを叶えることは出来る。第一、貴方にルークの何が分かるの？」

「だったら貴様こそ何が分かるというのだ？ルークの全てを知っているというのか？」

「そんなの知らないよ」

なのはの言葉にミクトランは目を見開いた。

「全部なんて分かるわけない。ルークが元いた世界でどんな生活してたのかも、どんなことを思ったかも私は知らない。でも今のルークは私を必要としてくれた。だから私は戦う」

「つくづく理解出来ん。必要としていたから戦う？ 確実に殺されるのか？ それを愚かさ以外のなんと言うのだ？」

「貴方には分からないよ。人に愛されたことも、愛し方も知らない貴方にはね。それに……」

杖を下方に向け、なのはは叫んだ。

「確実に殺される相手だなんて評価、私は貴方にはしてない。ショートバスター……」

桃色の閃光が瞬時に打ち出され、床に着弾する。

すぐになのはは後ろに振り返り、シールドを展開した。

予想通りそこに黒の剣が叩きつけられる。

鎖が巻きつき、ミクトランの動きを止める。それを確認して、なのはは飛び上がった。

「うあっ！」

背中に痛みを感じ、なのはは苦痛に顔を歪めた。

「レイをプレゼントだ。そして、アンビバレンス……」

ミクトランの声を聞いてなのはは瞬時に飛び立とうとした。

だが先程の一撃が影響して、上手く飛び立てない。

気がつけば白の落雷が行く手を塞ぎ、黒の雷がなのはを貫いていた。声にならない悲鳴を上げてなのはは床に叩きつけられた。チェーンバインドを砕いたミクトランが剣を振り上げる。

「タービュランス!!」

土煙を剣圧でかき消し、その中にいるなのはに剣を振り下ろした。かろうじてなのははレイジングハートでそれを防いだが、全体重をかけた攻撃を防ぐにはなのはの細腕では余りにも力不足だった。弾かれ、がら空きになった体に、剣が叩きつけられる。

「オニクスフレア!!」

腕力で杖を引き戻したなのはは刃を受け止めることは出来たが、剣から生じた炎を防ぐまでには至らなかった。

業炎に体を燃やされながら、なのははミクトランに蹴り飛ばされた。壁に激突し、床に倒れこむ。

なんとか腕を使って起き上がると、なのはは右手を押さえた。

体中が痛い。だが、ルークの味わった痛みはこんなものではないはずだ。

自分にそう言い聞かせて、なのはは地面を踏みしめた。

魔力が量を増し、ミクトランの放つ殺気と衝突する。

ゆりかこの事件の後、六課の隊長陣に再びリミッターがかけられることは無かった。

それはミクトランとの戦いを予想してのことである。

敵であり、六課の切り札であるルークと対等のミクトランが生きている以上、リミッターをかけることは出来なかった。

もしリミッターが掛かってればミクトランとこのように対峙することも出来なかっただろう。

その点で、なのはは幸運だった。命を燃やし尽くすまで全力で戦うことが出来るのだから。

「まだ立ち上がるか。分かんない、貴様の考えていることが。どうして態々戦場に出てくる？私は愛というものを知らないが、貴様が殺されてルーク君が悲しむことを考えなかったのか？」

そんなこと、何回も考えた。自分が居なくなったらルークはきっと悲しむだろう。

だからこそ、本当はルークと共に戦うべきだったのかもしれない。だがどんな形でもルークが戦闘によって傷つくのを見たくなかった。だからこそ、終わらせたかった。自分の全てをかけても。なのははゆっくりと息を吸った。

「考えたからこそ私はここに居る。貴方を殺すために」

「それが無理だとして分からない？」

「無理じゃないからに決まってる」

なのははまっすぐとミクトランを見つめた。

勝てないなどなのはは微塵も考えていない。勿論相手のほうが上である事は百も承知だ。

それでも、負けるつもりなど毛頭無かった。

フラッシュムーブを発動し、驚異的な速度でミクトランに接近する。六課最速のフェイトほど速くは無いが、それでもかなりの速さである。

だがミクトランは顔色一つ変えることは無かった。

「フラッシュインパクト!!」

レイジングハートが紅く煌き、その身に魔力を宿す。全身全霊で振り下ろしたそれはミクトランの黒刃によってあっさりと防がれた。

舌打ちをし、なのははミクトランから瞬時に離れた。

なのはは元々中距離殲滅型である。戦いに備えて接近戦もこなせるが、彼女が最も得意とする間合いは少し離れた距離だった。地面を靴で削りながらその体を止め、杖を前に突き出す。

「アクセルシューター!!」

レイジングハートから多数の魔力弾が打ち出される。

32にも上る数々の魔力弾はそれぞれまったく見当違いの方向に向かっていたが、急に進行方向を変えてミクトランに殺到する。目をつぶったミクトランはその目を見開き、叫んだ。

「剛招来!!」

紅の光がミクトランの体を包み、その力を爆発的に引き出す。剛招来。それはルークが得意とする、いやルークしか使えないはずの技術だった。

アルバート流。ルークが苦勞して習得したその流派を簡単に身に着けたミクトランなのはは嫌いだった。

勿論威力は長年使っているルークの方が上だ。だがそれでも、思ってしまう。

ルークじゃない人がその技を使うなど。

お前なんかがその技を使うなど。

だがそう願ったのはが放った32もの魔力弾は全て漆黒の剣に叩

き落された。

悔しそうに唇をかみ締めるなのはの前から、急にミクトランが消えた。

次の瞬間にはミクトランの剣が届く十分な距離に彼は居た。

はっとして杖を構えたとき、ミクトランはもう一度“消えた”

首を傾げるなのはが動いたのはすぐの事だった。

それは戦闘訓練で培った勘。体を翻し、降り注ぐ凶刃を避ける。

だが、なのはは戦闘面においてはまだまだ未熟だった。

少なくとも短期間とはいえ殺し合いの戦場を駆け抜けたルークとは差があった。

だからこそルークなら避けられるその一撃を完全に避けきることは叶わなかった。

後退しながら左腕に痛みを覚え、なのはは右手で腕を押さえた。

視線を向けると、真っ白なバリアジャケットが赤く染まっていた。

バリアジャケットは防御服である。それを掠っただけで易々と切り裂いてなのはの肌を傷つけたのだ。

反応できなかったらと思うとぞっとした。傷を一瞥し、なのははミクトランに視線を向ける。

視線の先に悠々と立っているミクトランはニヤニヤと笑いながらなのはを見ていた。

その歪んだ笑みを、なのはは気味が悪いとしか思わなかった。

彼はなのはを狂っていると評価した。だがなのはからすればそれは狂っている笑みだった。

両手を広げ、ミクトランは天を仰ぐ。

「分かっただろう足枷！！今の一撃はルーク君なら避けられた！！だが貴様には無理だった！！それが貴様と彼の違いだ！！」

自信満々で言い放たれた一言を、なのはは鼻で笑った。

「だったら貴方はなんなの？ルークに今の技を見切られ、私には掠った程度………私が足枷なら貴方なんかゴミと変わらないよ」

なのはの言葉に、ミクトランは目を見開いた。

血眼でなのはを見つめる。その目には怒りの炎が宿っていた。

「調子に乗るなよ足枷風情があああああああああああ！」

放たれた声量と威圧感に、大気が震える。

その圧力を、なのはは真正面から受け止めた。

痛む左肩を押さえて、なのはは声の限りに叫んだ。

「絶対に負けない！！ブラスター3！！」

魔力を爆発させ、体中の力を増大させる。

溢れ出す魔力はミクトランの威圧感とぶつかり合って不協和音を生み出した。

荒れ狂う魔力と殺気の流れの中で、ミクトランとなのははお互いをじっと見つめていた。

10・6（前書き）

バイオレンスな描写があります。

苦手な方は回れ右をお願いします。

狂ったように噴き出す魔力をレイジングハートに乗せて、なのはは杖を突き出す。

「レイジングハート。力を貸して。ここで壊れてもいい。もう二度と空が飛べなくなってもいい。それでもいいから全部の力を貸して」

>> All right, my master <<

電子音が響き、何発ものカートリッジをロードする。

「チェーンバインド!!」

ミクトランの足元に魔法陣が展開し、そこから鋭く鎖が伸びる。だがミクトランは何事も無いように剣を振るった。

鎖は音を立てて砕け、光となって消滅する。それを見ながらなのはは声を張り上げた。

「このまま撃つよレイジングハート!!」

杖の正面に魔法陣が展開し、レイジングハートがカートリッジを大量に消費する。

使い切ったホルダーを排出し、代わりのホルダーを取り付けた。

自身の持つ魔力をこの術に使用できる最大量注入し、なのはは叫んだ。

「デイベイン………バスター!!」

それは、なのはが今まで放ったデイベインバスターの中で最も巨大なものだった。

それは轟音を立てながらミクトランに迫る。

剣を構え、ミクトランはそれを全力で振りぬいた。

「ホーリーランス!!」

剣から生じた光の槍が、なのはのデイベインバスターとぶつかる。

八つに上る光の槍は次々と桃色の砲撃に激突するが、それをかき消す事は叶わなかった。

ニヤリとミクトランは笑い、その場から“消えた”

「ルーク君の転移ほど早くは無いが、これも中々だろう?」

その声は、なのはの左から聞こえた。

咄嗟にデイベインバスターを解除し、なのはは左を向いたが、遅すぎた。

漆黒の刀身がなのはの体を捉え、切り裂く。

痛みを堪えながら、槍のような形状のレイジングハートをミクトランの体に突き刺した。

「ショートバスター!!」

桃色の閃光はミクトランの体を捉え、彼を吹き飛ばした。

床を染める血を見下ろしながら、なのはは傷口を押さえた。

入ったはずだ。だが……あの程度でミクトランがやられるとは思えなかった。

それとは対照的になのはの状態は非常にまずい。

左腕は斬られて動かすたびに痛みが走る。大きく斜めに切り裂かれ

た傷からの出血もかなりの量だ。

土煙がゆらりと揺れ、その中からゆっくりとミクトランが出てきた。衣服等にダメージは見受けられるが、なのはの傷に比べれば軽いものだろう。

「驚いたな。まさかあの一瞬で体を逃がして致命傷を避けるとは」

ミクトランが言うようになのはあの時咄嗟に体を刃から逃がした。そのお陰で浅く斬られただけで済んだのだ。もしもあの時体が反応してなかったらなのは床に倒れていただろう。

しかしそれでも傷ついたなのはの不利は圧倒的だった。

だが、そんな状況下においてもなのは勝利を諦めなかった。

その目に、ミクトランは顔をしかめた。

杖を振るい、なのはは空中に飛び上がる。

体中のダメージが大きい。これが出来るのは今しかないだろう。

どうせ全ての力を費やすつもりなのだ。ならここで撃つてもなんら問題は無い。

ピットを急展開し、ミクトランを囲うように設置する。

音も無く地下から飛び出した鎖がミクトランに絡みついた。

「姑息な・・・・・・・・・・こんなもの時間稼ぎにもならんぞ
！！」

ミクトランは体を振るい鎖を引きちぎるが、次から次へと鎖が絡みつく。

そして、眩い閃光にミクトランは気づいた。

全てのピットに光が収束され、光球を作り出している。

それを見てミクトランは高笑いした。鎖を一気に全て引きちぎり、両手を広げる。

「なるほど・・・・・・・・これが貴様の全力か・・・・・・・・」

「そうだよ。これが私の全力全開!!」

「ならば撃つて来い!! 全身全霊で教えてやる!! 貴様の全力などたかが知れているとな!!」

ミクトランの言葉になのはは杖を握る手に力を込めた。

倒す。絶対に倒す。自身にそう何回も言い聞かせ、なのはは叫んだ。

「この攻撃に全てをかける!! スターライト・・・・・・・・」

「感謝しろ足枷!! 貴様にとっておきを見せてやる!! サバイヴィング・ホリン!!」

次の瞬間、なのはは世界が暗黒に染まるのを見た。

視線を天に遣れば、巨大な裂け目から黒の閃光が弾け出たのが見えた。

咄嗟に感じた。この技はまずいと。すぐに視線をミクトランに向けて、なのはは叫んだ。

「ブレイカー!!」

桃色の閃光がミクトランに向かう。

全方向からの最強魔法はしかし、ミクトランに命中する前に降り注ぐ紅の雨と衝突した。

全ての床に着弾した雨は例外なくスターライトブレイカーにも直撃

した。

避け場の無い死の雨の中で、全身の痛みには耐えながらなのは見えてしまった。

桃色の閃光が紅の雨に消されていくのを。

爆発が部屋を包み、爆風でなのは吹き飛ばされた。

レイジングハートを杖にして体を支える。

じつと土煙の場所を見つめた。完璧だった。

完璧な一撃を放ったつもりだった。攻撃力も申し分ないだろう。

だがなのは結末を知っていた。

案の定土煙の中から姿を現したミクトランは余裕の笑みを浮かべていた。

スターライトブレイカー。それはなのはの持つ最強の魔法だった。

いや、管理局最強といっても過言ではないだろう。

その一撃が、ミクトランには効果が無かった。

ミクトランが放った「サバイビング・ホリン」という技の方が上だったのである。

なのはは追い詰められていた。先程の全力のスターライトブレイカーにミクトランのサバイビング・ホリン。

その二つにより、なのはにはもはや戦う気力は残っていなかった。立っているだけでもやっとである。

だが、それでも闘志の炎は消えていなかった。例え全力の魔法を防がれようが、どれだけダメージを受けようが関係なかった。

諦める。その概念がなのはの中には最早無かったのだから。

「不屈のエース」という称号が管理局には存在する。

高町なのはに付けられた称号の名前だ。それを初めて聞いたとき、なのはは微妙な気分だった。

自分はそんなに凄い人間ではないのだ。それなのにそんなことを言われても困る。

過度な期待が、なのはの肩に重く押し掛かっていた。

だが、今は違う。世界でたった二人のためなら、なのはは「不屈」

になれる。

「エース」でもなんでもない。ただの「母親」として、そして「恋人」として、なのはは挫けなかった。

そしてなのははそのことを誇りに思っている。脳裏に二人を思い浮かべるだけで、力が溢れてくる。

だからこそ、なのははどんな状況下でもじっとミクトランを睨み付けていた。

強い意志のこもった目で、彼を見続けた。

なのはは知らない。このとき最も動揺していたのはミクトランだということ。

ミクトラン side

舞い上がる爆炎の中。そこから出てきたミクトランは自分の目を疑っていた。

あのとき、目の前の足枷は先程の魔法が自分の全力だと叫んだ。そしてそれは放たれた魔法の威力を見ても明らかだった。

本当に彼女の全力だったのだろう。ミクトランの持つ最強の技である「サバイビング・ホリン」でやっと相殺できたのだから。

だからこそ、ミクトランは爆風が消えたときに彼女の顔が絶望に染まっていることを期待した。

自身の最強の技が防がれたのだ。打つ手が無いと、そう言った顔をするを期待していた。

だが、目の前で立つなのは依然として強い目でミクトランを見つめていた。

立っているのもやっとで、疲労困憊なはずなのに、彼女は依然として諦めてはいなかった。

それを見たときに、ミクトランの中で疑問が生じた。
なんだ？コイツは。

左腕を斬りつけた。動かすだけでも痛みが走るだろう。

浅かったとはいえ体を大きく切り裂いた。

そこから溢れた血は真っ白な服を赤く染めている。動くだけで激痛が走るだろう。

先程の攻撃は全力だったはずだ。力なんてもう残ってないだろう。

詰みだ。ミクトランはそう判断した。この状況で足枷が勝つことなど無理だ。

なのになぜコイツは未だにそんな目で私を見る？

ミクトランは混乱していた。

かつての世界で、彼は完璧だった。

貴族に生まれ、剣の腕も、科学の知識も身に付けた。

自分も他人も認める天才だった。女など力を見せ付ければ怯えた。

例え立ち向かってきても、完膚なきまで叩き潰せば惨めな姿を晒した。

ソーディアンマスターの一人であったアトワイトさえ、その目に恐怖を抱いていた。

ミクトランからすれば女とはそういう存在だった。

弱く、儚い存在。それが全てだったし、例外など存在しなかった。だからこそ、目の前の足枷が理解できない。どうしてこの状況下で毅然として敵を睨み付けていられる？

どうしてその顔を絶望に染めない？

ミクトランは混乱していた。分らない。何なんだこの足枷は。一体何なんだ。その目をやめろ。やめろ。

「やめろおおおおおおおおお！！」

激昂し、ミクトランは床を蹴った。

一気になのはに接近し、その細い首を鷲づかみにする。

疲労していたなのははその行動を見切ることができなかった。

ゆっくりと持ち上げ、ミクトランは血眼でなのはを睨み付けた。

苦しいのか、なのはは顔をゆがめる。それでも何とか目を開き、ミクトランを睨み付けた。

その目が、さらにミクトランの苛立ちに拍車をかけた。

「何なんだ！！何なんだお前は！！一体何なんだ！！」

声高に叫ぶミクトランを、なのはは鼻で笑った。

「どうして・・・・・・・・動揺してるのか・・・・・・・・分らないけど・・・・・・・・好都合・・・・・・・・だね・・・・・・・・」

ミクトランの腕を掴むなのはの手に魔法陣が現れる。

それを見ながら、ミクトランは手を引こうとしたが、なのははそれを離さなかった。

「いくら貴方でも・・・・・・・・ゼロ距離で攻撃を受ければ効くでしょう？・・・・・・・・クロスファイア・ゼロ！！」

そして、なのはの全てをかけた最後の魔法が発動した。

なのは side

クロスファイア・ゼロ。クロスファイアを掌から多数発射する技。掴んだ掌から使用するため勿論なのは自身もダメージを受ける。

これを使ったら両手は殆ど使えなくなると考えてもいい。それでも、なのははそれを初めから使うつもりだった。

スターライトブレイカーは確かに魔力をかなり消費するが、それでもリミット3状態では多少魔力が残る。

その残った僅かな魔力を全て使用した。

リンカーコアに限界まで負荷を掛け、両手から魔力弾を発射する。

この戦いが終われば、なのはは飛べなくなるだろう。

魔力を練る事そのものが困難になるかもしれない。

それでも構わなかった。元々全てをかけるつもりでここに来たのだから。

両の掌から撃ち出された魔力弾はミクトランにダメージを与えるには十分すぎた。

焼かれる両の掌の痛みを必死で堪え、なのはは撃ち続けた。

魔力が尽きるまで、この手を離すものか。必死にそう念じながら、感覚の無い掌に意識を集中し続けた。

そして、最後に巨大な一撃がなのはの掌から放たれ、爆発した。

爆風に吹き飛ばされ、なのはは地面を転がった。

なんとか立ち上がるうと腕を動かそうとするが、ピクリとも動かなかった。

視線を向けると、なのはの腕はボロボロだった。

掌は勿論、腕も黒く変色している。

これは……もう動かないかも。なのはは笑いながら内心でそう思った。

それでもいい。ここまで来たらどうなるうと同じことだ。

視線を爆風の方に向ける。そこから出てきたミクトランは息を吸い込むと、叫んだ。

「ふざけるな足枷風情があああああああああああ！！」

爆煙の中から出てきたミクトランには左腕が無かった。

なのはの渾身の魔法はミクトランの腕を破壊したのだ。

やった。そう微笑んだなのはの腹に衝撃が走った。

「ふざけるなよ足枷！！」

「ぐっ……うっ……」

一気に間合いをつめたミクトランは倒れているなのはの腹を何回も蹴った。

その威力になのはは口から血を吐き出す。ぐぐもった声を出しながらも、なのはは気丈としてミクトランを睨み付けた。

「その目をやめろと言ってるだろう！！」

「っ！！」

ミクトランの足がなのはの頭を捉える。

重さに顔を顰めながら、なのははそれに耐えた。

しばらく頭を押しつぶされた後、再びミクトランはなのはの腹を蹴り続けた。

「ぐ・・・・・・・・・・うぁ・・・・・・・・・・」

「貴様が・・・・・・・・・・貴様ごときが私の腕を持つてただと？許されることではないぞー！」

「ざまぁ・・・・・・・・・・みなさい・・・・・・・・・・」

「貴様・・・・・・・・・・その目をやめろー！」

「あああああああああー！」

ミクトランは剣をしまった。

ボロボロになったなのはの両手を掴み、ミクトランは彼女を持ち上げた。

なのはの両腕に尋常じゃない痛みが走り、なのはは悲鳴を上げた。痛い。痛い。それでもなのははミクトランを睨み付け続けた。

「貴様・・・・・・・・・・」

「ぐっ・・・・・・・・あああああああ！！」

握られている腕に力が加えられる。増大した痛みになのは声を抑えることが出来なかった。

その様子を見ていたミクトランがニヤリと笑った。

「そうか・・・・・・・・分かったぞ貴様のその目を止めさせる方法が」

怪しく笑いながら、ミクトランはなのはを階段上の窪みに投げた。まったく力の入らないなのは音を立ててそこに倒れた。

「そこで見ている・・・・・・・・ルーク君が私に殺される光景を・・・・・・・・」

ミクトランは狂っていた。そしてそれを今なのはは認識した。

頭の中に、予言の内容が蘇る。月と星と太陽。

太陽はルーク、星はなのは、なら月は。

「狂気・・・・・・・・lunacy・・・・・・・・luna・・・・・・・・貴方だね、ミクトラン」

そう呟いてなのは意識を失った。

天井に鎖を突き立てて、床まで垂らす。

気絶しているなのはの腕を無理やり持ち上げ、ミクトランはそのロボ口の腕を鎖で拘束した。

作業を終えた後、ミクトランは再び階段に座り込んだ。

やがて来るであろう彼を待ち続けるために。

予言の最後。そこにはこう書かれている。

「太陽は星を救い、月によって消えるだろう」
なら、結末は・・・・・・・・・・

薄暗い部屋の中。そこでは階段に座り込んだ一人の男と、両手を鎖で吊り上げられた女性が居るだけだった。

ルークside

眩しい。目を閉じてても光が入ってくる。朝だからだろうか？

ゆっくりと目を覚ますと白い天井が見えた。

俺は、どうしてベッドで眠っているんだ？

そう思っただけを見回したとき、壁に立てかけてある漆黒の剣のコアが煌いた気がした。

『起きるのが遅すぎるわよ馬鹿ルーク！！アンタは寝てる場合じゃないのよ！！』

ハロルドはとても焦っている様に思えた。放たれた言葉にも熱がこもっている。

『なのはが・・・・・・・・・・なのはが死んじゃうわよ！！』

その一言で俺は弾ける様にベッドから起き上がった。

背中が一瞬痛んだが、無視した。

「どういうことだよハロルド！！」

「パ・・・・・・・・・・パ？」

聞こえた声に俺はぱっと扉のほうを見た。

そこには、はやてに手を引かれたヴィヴィオが俺を心配そうに見つめていた。

「パパ!!」

ベッドによじ登り、ルークにしがみつく。
その後ろから、はやてがやってきてベッドの横に立った。

「もう大丈夫なんか？」

「ああ、体は痛むけどもう動けるよ」

『・・・・・・・・・・丁度いいわね、聞きなさい。はやても』

「・・・・・・・・・・なのはちゃんのことか？」

はやての言葉に、ルークは彼女を見上げた。

彼女は泣きそうな表情で俯いていた。

「私がいけないんや。なのはちゃんの行動を読みきれなかった。デ
ータのコピーを渡してしまった・・・・・・・・・・」

はやてが何を言っているのか俺には分からなかった。
どうしてはやては泣きそうな顔をしている？どうして悔しそうに拳
を握り締めている？

『ルーク、落ち着いて聞きなさい』

ハロルドの声がやけにはつきりと聞こえた。

『なのはがミクトランの元に一人で戦いに行ったわ』

全身の血が凍ったように冷たくなるのを俺ははつきりと感じていた。

ゆっくりと顔をハロルドの方に向けて、俺は黙り込んだ。

『行ったのは昨日の夜。それから今まで約8時間。連絡は無いわ』

ハロルドの言葉が頭の中で何回も繰り返される。

俺はなんとか口を動かし、声を発した。

「・・・・・・・・・・・・・・・・なんで？」

その声はあまりにも小さくて、自分の声ではないように思えた。
掠れて上手く声が出せない。どうして？なんでこんなことになった？

「なんでだよ！！」

次の瞬間には俺はベッドを殴りつけていた。
どうして一人で行った？どうして。

『アンタが傷つくのがもう耐えられなかったのよ。黙ってみている
ことが耐えられなかった。だから、なのは一人でミクトランの
ところに行ったの。アンタをもう傷つけないために。ミクトランを倒
しにね』

ハロルドの言葉に俺は毛布を押しつけてベッドから飛び降りようと
した。

しかし、叶わなかった。動こうとしたときには首に杖がつきつけれ
ていたからだ。

「はやてお姉ちゃん！！」

ヴィヴィオの悲痛な叫びが響いた。

杖を突きつけたのははやてだった。騎士甲冑は着けていないが、その眼光は鋭い。

「どいてくれはやて」

「・・・・・・・・・・・・・・・・アカン」

その言葉に、俺の中で何かが切れた。

「どけって言ってるんだよ!!」

「アカン!!」

はやての大声に、俺は言葉を失った。はやては涙を流していた。

「なのはちゃんは何で一人で行ったと思ってるんや。ルーク君がこれ以上傷つかない為や!! そんな傷だらけの体のままでルーク君を出すわけにはいかん!!」

「・・・・・・・・・・・・・・・・どいてくれ」

杖を掴み、俺ははやてを見つめた。

それでもはやては毅然として動かない。

「どいてくれ。ここで行かなかつたら俺は一生後悔する。はやての気持ちも、なのはの気持ちも分かる。でも、俺の大切なものはのはとヴィヴィオなんだ。その二人は俺の命より大事なんだよ!!」

「それはなのはちゃんだって同じ気持ちや!!」

「それでも俺は行く!!どけ!!」

俺の言葉に目を瞑ったはやては無言でデータを俺のベッドに落としました。

杖を引き、待機状態に戻す。それを見て、俺は分かってしまった。はやては元々俺を行かせるつもりだったのだ。先程のは俺を試したのだろう。

俺の決意を、さらに確固たる物に変えてくれたのだろう。

ベッドに落とされたデータを拾い上げ、それを開く。そこに示された場所を一瞥して、俺はそれを消した。

視界の隅で、ヴィヴィオがベッドに登るのが見えた。

彼女は泣きそうな目で俺を見つめている。

「パパ・・・・・・・・ママ、泣いてる・・・・・・・・だから、助けてあげて・・・・・・・・ヴィヴィオはパパとママを待ってるから・・・・・・・・ずっと・・・・・・・・」

770

それはかつての仲間の一人に言われたこととまったく同じだった。それを感じていると、頬に暖かい手が触れるのを感じた。次の瞬間には、俺はヴィヴィオに頬にキスされていた。

「だから・・・・・・・・行つてきて、パパ」

ヴィヴィオの言葉に俺はしっかりと頷き、ベッドから飛び降りた。腕を動かし、肩を回す。痛みが走るが、問題は無いだろう。

ハロルドを手に取り、腰に挿す。ヴィヴィオの手を引きながら、俺は部屋を後にした。

はやて side

病院の一室。そこではやては一人佇んでいた。

先程までルークが眠っていたベッドは空になっている。

天井を仰ぎながら、はやては静かに涙を流した。

ついさつき、はやてはルークに脅しをかけた。

ここに来る前はルークをなのは元に行かせようと思っていた。

だがボロボロなルークを見て、はやては決心が鈍った。

あのときはやての脅しは、本心だったのだ。はやては本当はルークに行つて欲しくなかったのだ。

だが、ルークは少しの迷いすら見せなかった。

その態度に、はやては後悔した。ルークの為に、なのはの為に行動しよう、そう決めたのに。

はやては結局二人の邪魔しかできなかったのだ。そのことが、はやての罪悪感を加速していく。

「ごめんなあ………それでも………それでもそんなボロボロの体で行つて欲しく無かったんよ………」

「

病院の一室。そこで、はやては大切な人が死地に赴こうとしているのを止めることすら出来なかったのである。

ルークside

ヴィヴィオと一緒に部屋を飛び出し、廊下を走る。

いつかと同じ展開に、文句を言う看護婦や医者は居なかった。

だが曲がり角を曲がったところで、俺達は思わぬ人に出くわした。

「フェイトお姉ちゃん!？」

俺の隣を走っていたヴィヴィオが声を上げた。

曲がり角の先に居たのは、半球の物体を持ったフェイトだった。

その目は俺たちを見た瞬間に驚愕に変わった。

「ルーク……ルーク?もう大丈夫なの?」

「ああ、少し痛むが大丈夫だ。今からなのは助けに行つて来る」

俺の言葉に、フェイトは何か言いたげな表情をしていたが、やがて手に持つ半球の物体を差し出してきた。

「使つて。ここに私達の魔力が入ってる。腕に巻けば、重症を負った時に回復してくれるから」

差し出された物を見て、俺は目を見開いた。

凄い。そんな装備が存在していたなんて。

さしずめ持ち運び式のファーストエイドと言ったところだろうか。俺の顔を見たフェイトは苦笑いし、手の中の半球を指差した。

「それはまだ試作段階だけど、私達皆の想いが詰まってる。だから、大丈夫。なのは連れ戻してきて」

「ああ、分かった。ありがとうフェイト」

しっかりとフェイトの目を見ながら俺は礼を告げた。

フェイトの横を通り抜け、俺とヴィヴィオは廊下を駆けだした。

フェイト side

病院の廊下。小さくなっていく二つの背中を見ながらフェイトは静かに涙を流した。

なのはが一人でミクトランの元に向かったのを知ったのはついさっきだった。

ここ三日で用意した試作の治療パッドを手に、フェイトは六課の隊舎を飛び出した。

はやてが既にルークの元に向かっていることは知っていた。

はやてと同じように、フェイトもルークが目覚めている気がしたの

だ。

案の定、ルークは目覚めていた。

万全ではないが、彼はなのはを助けに行くことを選んだ。最初ははやてもフェイトも、いや六課全員で行く予定だったのだ。だがミッド天空での戦いを見て、彼女達は気づいていた。

自分達が行ってもルークの足を引っ張るだけだと。

だからこそ自分達の魔力を治療パッドに注入した。

それでも、無力感は拭えなかった。

自分はルークにこんなことしか出来ないのだ。

隣に立って戦うことも、出来ない。

それを思うと涙が止まらなかった。

「勝てるわけ……………ないよ……………」

静かにフェイトは呟いていた。

なのははルークにこれ以上傷ついて欲しくないから一人でミクトラの元に行ったのだ。

明らかに格上のミクトランに挑むことがどれだけ無謀か、なのははよく分かってるだろう。

それが魔導士生命をかけることだって。

フェイトには出来なかった。

一人でミクトランに挑むなんて考えもしなかった。

勝てるわけがない。

なのはは自分の命よりもルークのことを想ってるのだ。

そんな相手に勝てるわけが無かったのだ。

病院の廊下。そこでフェイトは小さくなる二つの背中を見ていることしか出来なかった。

ルーク side

病院の廊下を駆け抜け、外に出る。

車の止まっていない駐車場には小さなヘリが一台待機していた。

「ルークの兄貴!!」

それに体を寄り掛かせていたヴァイスは体を離し、俺の元に走り寄ってきた。

「はやて部隊長に言われて来ました。すぐに発えます」

「ありがとう」

「パパ」

振り返ると、ヴィヴィオが俺をじっと見つめていた。しゃがみこみ、視線をヴィヴィオに合わせる。

「パパ頑張つて。パパは世界一強いから負けないよ。だからママと

一緒に帰ってきて。ヴィヴィオは大丈夫。はやてお姉ちゃん達と待ってるから」

「ヴィヴィオ・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヴィヴィオの言葉に、俺は目を見開いた。

泣くと思っていた。前に訓練に行ったときのようにな。

だが、ヴィヴィオはその瞳に涙を見せなかった。

それどころか、強い目で俺を見つめていた。

ゆりかごに囚われ、辛い思いをしたはずなのに、ヴィヴィオはなのはの事を案じているのだ。

なんて優しい子なんだろう。彼女の為にも、なのはを連れて帰らないといけない。

ヴィヴィオの頭を撫でて、俺は行ってくる、と呟いた。

行ったらっしやいパパ、という娘の言葉を聞いて、俺はヴァイスのヘリに乗り込んだ。

ヴィヴィオ side

聖王教会所属の病院の駐車場。小さくなっていくへりをヴィヴィオはただ見ていた。

「良かったのですか？何も言わなくて」

隣にいつの間にか来ていたシスターシャツハに視線を向けて、すぐにへりに戻す。

「信じてるから」

「え？」

ヴィヴィオの言葉にシャツハは彼女を見た。
依然としてヴィヴィオはへりを見つめていた。

「パパもママも誰よりも強いって。だから大丈夫。パパはママを連れて帰ってくる」

ヴィヴィオの言葉に、シャツハは何も言えなかった。

ただ一言、強い子だなと思った。当たり前なのかもしれない、彼女はなのはとルークの娘なのだから。

ヴィヴィオは何も言わなかった。ただ、信じているだけだった。

ルーク side

ヘリの中。そこで俺はフェイトから貰った治療パッドを腕に取り付けていた。

この中には、フェイトを初めとする六課の皆の想いが詰まっている。パッドを摩りながら、俺はゆっくりと目を瞑った。

俺が六課に来てから、かなり時間が経った。勿論それは一年にも満たない。

けれど、その間にいろいろなことがあった。その短い期間は俺にとつて一番長いもの思えた。

元居た世界で、俺は世界を救うために戦った。そこで時間を費やした。

でもそれは、目的の無い旅だった。強いて言うなら、世界を救うことが目的だろう。

生まれた意味を知るための旅だっただろう。

そして強いて言うなら目的は、世界のために死ぬことだった。

俺は、それが嫌だった。嫌で嫌でしようがなかった。

だったら、今の俺はどうだろうか？

元の世界での旅が、生まれた意味を知る旅なら、今の俺は生きる意味を知る旅をしている。

そして、その旅は終わりを告げただろう。見つけたのだから。

俺の生きる意味を。それは、なのはとヴィヴィオだった。

世界という不確定多数ではなく、たった二人の人間。

世界のために死ぬことは嫌だった。だが、二人の為に死ぬのなら、嫌ではない。

勿論俺の目的はなのはを取り返して三人で幸せに過ごすことだ。

それがもつとも理想とするゴールだ。

だが、それが出来なかったら？ だったら欠けるのは一人でいい。

なのはでも、ヴィヴィオでもない、俺でいい。

ハロルドなら、その選択を咎めるかも知れない。

それでも、俺はそうするだろう。ミクトランは強い。

だから、俺の命を犠牲にしても倒す。

へりの中、ひっそりと俺が自分の命を捨てる決心をしたことにヴァイスは勿論、傍に居たハロルドさえ気づかなかった。

11-2 (前書き)

バイオレンス表現あります。

苦手な方は撤退してください。

ルークside

ミッドの外れにある洞窟。詳しく調べなければ分からないような洞窟を、俺は進んでいた。

ミクトランのデータが正しければ、ここにアイツは居るはずだ。それに、なのはも。

腰に挿したハロルドを抜き放ち、辺りを警戒する。

何も無いだろうとは思っているが、用心するに越した事は無い。

ただでさえ暗くて視界が効きづらいのだ。もし何かあったら苦戦は必至だ。

ヴァイスには外で待っているように言っておいた。

ついでに言うなら、帰って来たらすぐに発ってくれとも言っている。彼は知らない。その中に、俺ではなくなのただけが来てもという意味が隠されていることを。

暗闇を、壁を辿りながら俺はひたすら進んだ。

そしてその先に、うつすらとだが光を見た。

進んでいくと、それが扉であったことがわかった。

光の先に扉が転がっていたからだ。扉ごと吹き飛ばされたのだろう。そしてその光の先に、俺の会いたかった人は居た。

「ようやく来たかルーク君。遅かったじゃないか」

階段に座ったミクトランが立ち上がり、一言そう告げた。

その声は嬉々としていたが、顔には狂気の色が映っていた。

何故だが分からないが左腕が無い。衣服の千切れ方を見る限り、吹

き飛ばされたようだった。

そして狂った笑いを向けるミクトランの向こう。
あえてそう作られたであろう階段上の窪みに、彼女は居た。

「なのは！！」

俺は咄嗟にそう叫んだ。窪みの中で両腕を鎖に吊るされた彼女は気絶していて俺の声に応えてはくれない。

体中がボロボロで、鮮血が白いバリアジャケットを赤く染めていた。何よりも酷いのは吊るされた両腕で、赤を通り越してどす黒く染まっていた。

『まずいわよルーク。なのはの出血と怪我の状況を考えたら、そんなに長くは持たないわ』

「ハロルド、キュアだ」

『了解』

光がなのはを包み、怪我を癒していく。それでも、ボロボロの両腕は治らなかった。

「ハロルド、あの鎖破壊できるか？」

『出来るわ。ネガティブ・ゲイト！』

小声の俺の言葉を聞き、ハロルドはネガティブゲイトを飛ばした。
漆黒の球が飛び、なのはの鎖めがけて走る。

だが、それが鎖に着弾する前に、ミクトランの剣が伸びてそれを破

壊した。

ニヤニヤ笑いながら、ミクトランは俺を見つめる。

「だめじゃないかルーク君。治療はともかく、彼女は観客だ。見て
いるだけだよ。鎖を破壊する必要は無い」

「お前・・・・・・・・・・・・・・・・」

唇をかみ締め、剣を握る腕に力を込める。

分かっているはずだ。あの状態の腕で吊り上げることがどれだけの
はにとつて負担か。

それでも、ミクトランはそれをしたのだ。そしてそのままなのはに
戦いを見せようとしている。

負担を強いた状態のまま。

「観客なんだよこの足枷は、だから起きろ」

「あう！」

ミクトランの剣から白い衝撃波が飛び、なのはの頬に命中した。

痛みに顔を顰めたなのはは目を覚ましたが、すぐに両腕の痛みに声
を漏らした。

「なのは！！ミクトラン・・・・・・・・お前なんてことをするん
だ！！」

「なんてこと？それは酷い言い分だな。この足枷が先に私に戦いを
挑んできたのだ。だから返り討ちにしただけのこと。敗者には敗者
の待遇があるに決まっている」

自信を持って放たれたミクトランの言葉を聴きながら俺は彼を睨み付けた。

「これが・・・・・・・・・・そうだったのか・・・・・・・・・・こんな拷問みたいなことが!!」

「そのとおりだルーク君、コイツは私に逆らった。なら、罰は必要だろう?」

一瞬でなのはの隣に移動し、ミクトランはその亜麻色の髪を掴んだ。髪を引っ張り、なのはの顔を無理やり上げさせる。

しっかりと目に入ったなのはの顔は苦しみに満ちていた。

だがそれでも目はしっかりと俺を見据えていた。

その目からなのはの考えを読み取った俺はゆっくりと首を横に振った。

なのはは、逃げてと言っている。そんなことが、出来るわけが無い。

「なのはから手を離せミクトラン。なのはは関係ないだろ!!」

「ふん」

俺の言葉に手を離し、ミクトランは再び俺の前に移動した。

その顔は心底つまらなさそうだった。ミクトランを観察しながら、俺は内心焦っていた。

ミッド空中で戦ったとき、彼は自身のことを完全ではないと言ったが、今は今までに無いほどの余裕を持って彼は俺の前に降臨している。

完全体になった。そういうことだろう。さっきの転移も、俺のレンズと同じくらい速かった。

だが――

ちらつと俺はミクトランの左腕を見た。おそらくのはがミクトランの左腕を破壊したのだろう。

自分の体をボロボロにすることを代償にして。

それを思うとミクトランへの怒りが収まらなかった。

どこまでコイツは俺の大切なものを傷つければ気が済むのだろうか。エリオの心を壊し、ヴィヴィオを誘拐し、その力を無理やり行使させた。

そして今、ミクトランは俺の最愛の人であるのはを瀕死に追い詰めている。

落ち着け。そう心の中で何度念じただろうか？

だがなのはのボロボロの姿を見るたびに、俺はミクトランに突っこみそうになった。

だが、その一方である疑問が俺の頭を過ぎった。

「どうしてなのはを殺さなかった？」

コイツのことだ。俺のことを考えて、なんてありえない。

むしろ俺の戦闘力を引き出すために殺害するほうが自然に思える。

勿論そうならなかったのは幸いだが。

俺の質問に、ミクトランは忌々しそうに階段の上にいるなのはを見た。

「あの足枷は心底苛々する目で私を見てきた。どれだけ髑つても、どれだけ絶望を与えても、その目から強い意志が消えることは無かった。そんな状態で殺しても私の気は収まらない。ルーク君、君を殺した後この足枷を殺す。そうすれば君達は目の前で最愛の人とやらが死ぬ瞬間を目にすることが出来る。素晴らしいだろう！？この考えは！！……………ああ、君が先に死ぬからこの足枷の死は見れないか。それだけが残念だよ。フハハハハハ！！」

狂ってる。俺は心底そう思った。

この部屋に入ってたのは見たとき、ミクトランがなのはの頬を撃ったとき、髪を引っ張ったとき、人間はここまで残酷になれるものなのかと俺は思った。

女性であるのはをここまでボロボロにして、拷問のようなことをし続ける。

これが理性を持つ人間のしていいことなのか、そう俺は思った。だが彼は狂ってるのだ。人間ですらないのだ。その目には狂気しか見えないのだから。

なら、逆に言えば化け物のミクトランを殺害しても何ら問題は無い。

「今はつきりと理解した。ミクトラン、お前は殺してもいい存在だつて」

「無理だよルーク君。完全となった私は六本のソーディアンを以ってしてやっとなめられたのだ。偽者とはいえこの剣を手に入れた私には到底勝てない。それともソーディアンを新たに作って君達の足枷に渡すか？どうやら三人ほど居るらしいが……無理だろう！？ハロルド・ベルセリオスはもはや剣の中だ。言葉だけで作れるほどソーディアンは簡単なものではない！！」

それが分かっているのだろう。ハロルドのくぐもった声が聞こえた。狂った笑いを浮かべながら、ミクトランは振り返った。

ボロボロの体のまま睨み付けるのはを見て、高笑いする。

「ああ、そういえばどうあってもソーディアンを作るなら二人になつてしまつね」

「ああ！！」

剣から漆黒の球体が飛び、なのはの体に命中する。
ボロボロの腕をも含む体の全てに命中した球体に、なのはは声を我慢できなかった。

その顔が歪み、堪える事の出来なかった涙が一筋流れた。

「ミクトラン！！」

それを見た瞬間に俺は駆け出していた。許せなかった。

なのはを傷つけるミクトランを、許せるはずは無かった。

一気に距離をつめた俺はハロルドを横なぎに振るう。

振り返ったミクトランは剣を縦に構え、それを防いだ。

一太刀入れた後に、俺は猛攻を開始した。それは最早攻撃ではなかった。
ただがむしゃらに振るわれる、剣。

「俺を殺した後になのはも殺す！？出来るもんならやってみろ！！」

『ルーク！！落ち着きなさいルーク！！』

ハロルドの言葉を見、俺は剣を振るい続けた。

その重さに、力強さに、ミクトランは押されていく。

だがそれも少しの間だけだった。怒りゆえに我を失った俺の刃は、簡単にミクトランに見破られ始めた。

ミクトランの顔に余裕が戻り、次第に俺が押され始める。

「期待外れだよルーク君。君があんな足枷ごときにここまで冷静さを失うとはね。怒りは抱いても制御しなければ意味が無い。それが分からないなら君には私に並ぶ価値は無い」

「くっ・・・・・・・・・・まだなのは足枷って言うのかお前は！！」

剣を振るう力をさらに増加させる。だが怒りに任せた太刀筋は、最早ミクトランを掠めもしなかった。

どれだけ剣を振るっても、どれだけ力を込めても、届かない。

そして、怒りに身を任せた俺の一太刀が、避けられた。

後に残るのは、がら空きの俺の体。そしてそれを見過ごすほどミクトランは甘くは無い。

迫る黒刃を見ながら、俺は舌打ちをすることしか出来なかった。

「ルーク！！」

響いた声に、迫る黒刃は止まった。

まだそんな気力があるのか。そう呟いて、目の前のミクトランがなのはを一瞥した。

その隙に、俺は剣を構えなおし、ミクトランに打ち込もうとする。勿論ミクトランもそれを防ごうとした。まったく同じ、二つの剣。

「ルーク！！聞いて！！」

しかし、それはぶつかることなく停止した。

階段の上に居るなのは俺を見つめていた。咎める様な目で、俺を見ていた。

どうして？なんでそんな目で俺を見る？俺は訳が分からなかった。次の瞬間に聞こえてきたのは本当に辛そうなのはの声だった。

「ダメ・・・・・・・・だよ・・・・・・・・怒りで・・・・・・・・自分を見失っちゃ・・・・・・・・私は・・・・・・・・大丈夫だから・・・・・・・・・・一人で勝手に抜け出して・・・・・・・・・・こんなに大怪我して・・

．．．．．今更と思うかもしれない．．．．．それでも．．．
．．．．．私は失敗したけど．．．．．でも．．．．．でもル
ークなら．．．．．ルークなら勝てるよ．．．．．大丈夫だ
から．．．．．だから．．．．．」

「うるさいぞ足枷」

俺は耳を疑った、目の前に立つミクトランはなのはを睨み付けていた。

その声を聞いたなのははミクトランを見た。心底哀れむ目で。

「貴方は．．．．．可哀想な人だね。力しか．．．．．
見えてないなんて．．．．．」

その目が気に入らなかったのか、それは定かではない。
だがはつきりしていることは目の前のミクトランが持つ剣の切っ
先に光が集中しているということだった。

白い球体が、その切っ先に創造される。光の晶術、レイ。
それをミクトランは撃とうとしている。それも瀕死状態で防ぐすべ
の無いなのはに。

もし命中すればどうなるかは明白だった。だがミクトランは声高に
叫んだ。

「目障りだ足枷．．．．．消えろ！！レイ！！」

光の球体から白い閃光が打ち出される。

それは全てが正確になのはを狙っていた。

視界の先にいるのはが目を瞑るのを、俺ははつきりと見た。

そうだ。なにを俺は怒っているんだ。なのはは信じてくれているん
だ。

俺がミクトランを倒してくれると。なら、それに応えないでどうする。

なのは s i d e

轟音が響き、爆煙がこみ上げる。

その煙の中で、なのはは目を瞑っていた。

だがいつまで経っても来ない衝撃に気づき、ゆっくりと目を開けた。そして、その目をはっきりと見開いた。そしてその光景に、目を疑った。

目の前には朱色の髪が広がっていたからだ。煙が晴れていき、その向こうにいるミクトランが驚いているのが分かる。

「なんだよミクトラン」

彼は不敵な笑みを浮かべてミクトランに告げる。

「大事な観客を傷つけたらダメだろ？」

そこに立つのは、先程とはまったく違うルークだった。

その笑みには余裕さが伺えた。彼はハロルドをミクトランに向けると、自身の右腕を一瞥した。

「これで対等だなミクトラン。左腕が使えなかったからなんて言い訳は通用しないぜ？」

ルークの右腕はボロボロだった。見ただけで使い物にならないことが分かる。

先程のレイを防いだのだろう。己の右腕一本で。また、また傷つけてしまった。自分のせいで。

心が沈んでいくことをなのははつきりと感じていた。

「なのはは悪くない」

俯いていた顔を上げ、朱髪の彼を見つめる。

ルークは視線をミクトランに向けたままだった。

「なのはは悪くない。これはなのはを護った代償だ。大切な人を護った勲章なんだ。だからその勲章を俺から奪わないでくれ。これからも、ずっと護り続ける。その度に傷つくかもしれない。だけど、

支えてくれ。悲しむんじゃないくて、ありがとって、そう言って欲しい。それだけで、俺は満たされるから」

ルークはなのはの事を見てはいなかった。

それでも、ルークの気持ちが伝わってきた。心が暖くなるのを、なのはは感じていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ありがとう」

戸惑いながら、それでも、なのははそう言った。

ルークが微笑んだのが、後ろからでも手に取るように分かった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・よし!!」

そう叫び、ルークはミクトランに叫んだ。

「ミクトラン、改めて言わせてもらおう!!俺を殺してなのはも殺す?・・・・・・・・・・笑わせるぜ!!出来るならやってみな!!」

それは、さっきまでとはまるで別人の言葉だった。

言っている事は同じでも、今のルークからは余裕を感じられた。

ルークは今自分の両腕に絡み付いている鎖を斬る事は無いだろう。

だがその理由もなのはには分かっていた。変な事をしてミクトランを刺激しないためだ。

残念だが、今の自分では本当にルークの足枷にしかない。

だからこそ、なのはが出来ることだけは一つだけだった。

「ルーク!!勝って!!待ってるから!!ルークが助けてくれるのを待ってるから!!」

なのはの言葉に、ルークはふっ、と笑ってハロルドを振るった。

「当たり前だ！…なのはの前では、絶対に負けない！…俺はそう決めたんだ！！」

ルークの魂の叫びが、部屋にこだました。

ルークside

剣を握り、俺はミクトランの出方を伺った。

冷静になって改めて対峙してから分かった。コイツはこの前とは別人だ。

少なくともミッド上空で戦ったときはこんなに強力な覇気を出してはいなかった。

それにいくら俺が自分の右手を潰したからといっても、アイツだって左腕が無いのだ。

それなのにあんなに余裕そうに悠々と立っているのが証拠だろう。とにかく、まずは戦って様子を見るしかない。

そう思い、俺は剣を手に、床を蹴った。

前に飛び出し、階段を飛び越える。

朱色の長い髪が風に遊ばれるのを感じながら、剣を振り上げる。そのまま全体重をかけて剣をミクトランめがけて振り下ろした。

「うおおおおおおおおおおお！！」

「速く、そして重い。しかも鋭い攻撃だ。だが………」
「それだけだ」

鋭く、重い攻撃だった。それは間違いないだろう。全力を振り絞ったのだから。

だが、ミクトランは小さく呟き、勢い良く剣を振り上げた。

まったく同じ漆黒の剣がぶつかり合い、キリキリと音を立てる。

響く金属音を聞きながら、俺は叫んだ。

「ハロルド!!」

『スプラッシュ!!』

俺の声を聞いてからのミクトランの動きは速かった。

ハロルドの声が聞こえるよりも速く、彼は俺の剣を弾き、瞬時に後退。

そしてすぐに剣を振るった。

「オニキスフレア!!」

『さらに!! クラッシュガスト!!』

ミクトラン目掛けて飛来した氷柱が漆黒の炎に焼かれてその姿を消す。

読まれていた。ハロルドの追撃が。だが、俺は気にしなかった。

間髪を入れずに俺は突進する。剣の届く範囲まで侵入し、ハロルドに風を纏わせた。

「ハロルド!!」

『分かってる!!』

ハロルドの声を聞きながら、俺は剣を振り下ろした。

風を纏い、その命中範囲を広めた俺の剣は、しかし届くことは無かった。

ミクトランは俺の剣から体を逃がしたからだ。

だが俺はそれさえ読んでいた。ミクトランならば、避けてくる。そんな確信めいたものがあつたからだ。

『ホーリーランス!!』

ミクトランの足元に白い魔法陣が展開し、墨から天井に四つの光が打ち出される。

それは空中で姿を変え、光り輝く槍となった。

その切っ先が、ミクトランに向けられる。

着地したばかりのミクトランには避けることは不可能に思えた。

だが、彼は自身を囲む光の槍を鼻で笑った。

「邪魔だ!! 閃空剣!!」

ミクトランの持つ漆黒の剣に風が乗り、竜巻となって弾き出される。彼を守るように展開した竜巻は、光の槍をいとも簡単にかき消した。余裕を与えず、俺はミクトランの懷に跳んだ。剣を構え、突き出す。忘れてはいけない。俺の使うアルバート流の殆どは二段構成であることを。

「空破絶風撃!!」

先程振り下ろした状態から続けるように、俺は剣を繰り出した。風を剣に宿し、突き出す。風が動き、槍と化し、ミクトランに迫る。

「甘い!!」

しかし、それは届かなかった。ミクトランは寸前で地面を蹴り、風の槍から逃れた。

そこで、俺はニヤリと笑った。かかった。

『ブラックホール!!』

「なに！？がああああああああああ！！！」

ミクトランの顔が驚愕に染まる。

そのときには空間に開いた穴から、幾つもの閃光が飛び出していた。それは完全に油断してたミクトランを貫き、髑り、蹂躪した。

ダメージを受けていたミクトランが一瞬消え、少しはなれた所に再びその姿を現した。

肩で息をしながら、ミクトランは俺を睨み付けている。

「読んでいたというのか……今の私の行動までも……」

悔しそくに唇を噛み締めたミクトランに、俺はニヤリと笑った。

「そうだ。どこまでも追い続けるつもりだった。お前を捉えるまで・
・・・・・」

俺はミクトランを過小評価などしていない。

むしろ剣が届くようになってから警戒心を増した。

油断など、存在しない。

それを理解したのか、ミクトランは悔しそうに唇をかみ締めた。

「反撃に移るタイミングが早すぎたということか．．．．．
やはり君は素晴らしいよルーク君．．．．．ふははははは
はは！！」

だが、彼の口から出てきたのは歓喜の言葉だった。

片手を広げ、高笑いしたミクトランに、俺はゆっくりと首を横に振った。

「俺は凄くなんか無い。ハロルドが居なければ晶術は使えないし、レンズが無ければお前の晶術をかわすことだって出来ない。剣の腕だってお前のほうが上だ。俺は凄くなんかないんだよ」

高笑いを止め、ミクトランはゆっくりと俺を見た。

その目には戸惑いが見て取れた。

「な、何を言っている？君は私をここまで追い詰めたのだ。君以上に素晴らしい人間など居る筈が――」

「居るさ。俺よりも強い奴なんて沢山居る」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ならなぜ君はそんなにも強い！？晶術も使えず、剣の腕も私に及ばない。なら何が君を私と同じ、いや私よりも上に押し上げているというんだ！？」

目を瞑り、俺はゆっくりと振り返った。

先程から俺の戦いを見ているなのはに微笑みかけ、俺は再びミクトランを見た。

「そんなの決まってるだろ」

『なのはの前では絶対に負けないっていう気持ちだ』

俺の言葉にミクトランは目を見開いた。

「俺はこの前のミッド空中での戦いでその誓いを破った。結果はどうあれ破ったんだ。でも・・・・・・・・・・もう負けない」

「私が・・・・・・・・・・そんな陳腐なものに負けたというのか？

この天上王たる私が？」

俺は剣を持ち上げ、その切っ先をミクトランに向ける。

これ以上話すことなど無い。なのはをこれ以上待たせるわけにはいかない。

「さあ始めようぜミクトラン」

『俺の未来を賭けた戦いを』

くぐもった声を上げながら、ミクトランは剣を横薙ぎに振るった。

目には血管が迸り、怒りを顕にしている。

咆哮し、ミクトランは俺に怒鳴りつけた。

「認めん！！認めんぞ！！ルーク・フォン・ファブレ！！貴様は私が殺す！！」

叫び、ミクトランは床を蹴った。

俺も同様に床を蹴り、ミクトランと激突する。

いける。斬り合いの中で俺は思った。

この前は速いと思ったミクトランの剣も、いいかげん目が慣れたのか、捉えられる。

思い出せ、全てを。シグナムとの模擬戦を、フェイトとの決闘を、エリオとの訓練を。

そしてその全てが俺を更に強くしたことを。

感じる、全てを。なのはの愛情を、ヴィヴィオの想いを、ハロルドの覇気を。

その全てを刃に乗せて研ぎ澄ませろ。

「バカな・・・・・・・・・・こんなことが・・・・・・・・・・」

斬り合いの中でミクトランは呟いた。

負けない。そう誓った。誰に？ハロルドに、ヴィヴィオに、そしてなにより、なのはに誓った。

ハロルドが力を貸してくれる。全てを捨ててまで俺に協力してくれる。

ヴィヴィオが信じてくれる。俺がなのはを連れて帰ってくることをなのはが見ている。俺が勝つことをただただ信じて。

それだけで十分だ。他に理由など要らない。これだけあれば、俺は負けない。

負けるわけが無い。俺は一人で戦ってるんじゃない。四人で戦ってるんだから。

「終わりにしようぜミクトラン。もう分かっただろ？俺はお前を越えた。力でも、技でも、強さでもない。想いつていうその一点だけでお前に勝ったんだ」

力はいらない。

なのは達を想うだけで力が溢れるから。

技もいらない。

想いがそれを越えるから。

強さだっていらない。

一番大切な物は、もうここにあるから。

剣が舞い、次第にミクトランの表情が恐怖に染まり始める。力を緩めるつもりはない。

ただ全力で、ミクトランを下すのみ。

「ふ……………ざけるなああああああ！！！」

咆哮。床が揺れ、壁が悲鳴を上げる。

ミクトランは瞬時に俺から離れ、剣を天井に掲げた。

「私は完全な存在となったのだ！！私は誰にも止められん！！それは貴様とて同じことだ！！見せてやろう！！終焉を！！」

怒りで完全に我を失ったミクトランが叫ぶ。

その声を聞きながら、ああと俺は冷静に思った。

初めてなのだろう。

自分の技が通用しないのも。

勝てないと思ってしまったことも。

その原因が分からないことも。

全てが初めてなのだ。

だからこそミクトランはあそこまで取り乱しているのだ。

「受けるルーク・フォン・ファブレ！！セレスティアル・アース！！」

ミクトランの声に応じて世界が闇に染まる。

その光景を目にしても俺の頭は冷静だった。

ミクトランがどんなに強大な技を使っても、どんなに強力な技でも、俺の中にある感情は一つだけだ。

可哀想に。

ハロルドを地面に突き刺して、俺は目を瞑った。

体の中に流れる力を、放出する。

朱色の光は紅の光と交わり、それはどういっわけか青色に変わった。世界が、蒼くなる。

第二超振動。

俺を中心に音素を打ち消す広大な空間を作り出す。
勿論セレスティアル・アースは魔術ではないだろう。

だが、関係ないのだ。

それがフィールド系晶術なら、打ち消せる。

空間は一つだけだから。

だから、後から放った俺の創造した空間がミクトランの術をかき消すのは必然だった。

以前の俺なら、こんなことは思い付かなかっただろう。

だが、今の俺は違う。

なのはの前では、負けられない。

その思いが、俺の思考を鋭くし、この考えを弾き出した。

驚愕するミクトランを見ながら俺は突進した。

レンズも何も使わずに、ただ走った。

そして、ミクトランはそれに反応できなかった。ただ俺が迫るのを、見ているしかなかった。

気づいた時には、完全に圏内に入っていた。

はっとしたミクトランが剣を振るうが、遅い。

ハロルドを振り上げ、その剣を弾く。

終わりだ。ミクトラン。

体の中にあるアイツの力を、もう一人の片割れの力を放出する。

俺の知っている技は全て使った。

師であるヴァンの技も借りた。

もう俺が使えるのはこの技しかない。一度した見たことはない。
使えるかなど分からない。それでも、やるしかない。息を吸い、俺はニヤリと笑った。

「見せてやるぜミクトラン。これが俺達の想いだ!!」

剣を天に掲げ、俺は叫んだ。

複雑な魔法陣が展開し、そこから巻き上がる閃光がミクトランを傷つけていく。

「絞牙鳴衝斬!!」

剣を床に刺すと同時に巻き上がる光の威力が強まる。

それはミクトランを喰らい、飲み込んだ。

間髪を要れずに俺はミクトランから離れた。

アッシュから盗んだ技を信賴してはいないわけではないが、相手はあのミクトランだ。

終わったと油断したところで、痛い目を見る可能性だってある。

だが、空中に浮かび上がったミクトランはそのまま落ちてきて地面に叩きつけられた。

数回バウンドし、地面に沈む。そこまで来てから、俺は始めて警戒を解いた。

勝った。

それは、誰の目から見ても明らかだった。

もうミクトランに立ち上がるだけの力は残っていなかった。

うめき声を上げながらもぞもぞと肢体を動かすのが精一杯のようだ。

終わった。最後にアイツの技を借りたのは怒られそうだが、今回はかりは勘弁して欲しい。

もしアッシュのあの技が無ければ勝つことは出来なかっただろう。

ほっと胸を撫で下ろしたとき、俺は音を聞いた。

深淵からなにかが這い出るような、そんな音。

気持ちが悪いと言いか言いようが無い、そんな音。

目を開き、俺は倒れているミクトランを見つめた。

そして、目を疑った。黒いオーラのようなものが、ミクトランを包んでいる。

それは聞こえてくる音と共に蠢き、ミクトランを完全に覆った。
なんだ？あれは。

しだいに闇は完全にミクトランを包み、空中に浮かび上がった。
どす黒く染まった球体は、中を確認することが出来ない。
なんだ？何が起こっている？

そして、俺の疑問に答えるかのように、漆黒の球体は弾けた。

「ルウウウウウウウウクウウウウウウウウー！！」

その中から現れたのは、もはや人間ではなかった。
青い岩石のような肌に、先端の黄色い六枚の細い羽。
そして後頭部に生えた水色の角のような物体。

それは、悪夢のようだった。それは、悪魔のようだった。

あれが、ミクトランなのか？

俺は自分自身に尋ねた。勿論答えが帰ってくることは無い。

聞こえる音も、姿も、何もかもが気持ち悪かった。

圧倒的な異質感とかそんなものではない。あれは、人間が取っていない姿ではない。

不意に現れた化け物となったミクトランを見つめながら、俺は剣を握り締めた。

ミッドの郊外。そこで歴史に残らない戦いが始まろうとしていた。

11-4 (前書き)

今回は私の『無限の妄想』アンリミテッドディリジョンが発動しました。

さあ！！妄想を抱いて溺死しろ！！ww

ルークside

「ヒヤハハハハハハ！」

狂ったような声を上げながら、ミクトランは背中の六枚の羽から閃光を飛ばした。

それを確認しながら、俺はいとも簡単にそれを避けた。

先程からミクトランは攻撃を繰り返してはいるが、俺に当たる事は無い。

どんな攻撃も、単純だからだ。ミクトランは、もはやただの化け物になってしまった。

戦闘する理性すら持たない。ただの化け物。力がどれだけあっても意味など無い。

攻撃は強力なだろう。だが、当たりはしない。

今までミクトランの猛攻を避けてきたのだ。当たる筈が無い。

それでも、ミクトランは攻撃手段を変えようとはしない。

それしかないのだ。攻撃する手段が。いや、理性が。

「ミクトラン・・・・・・・・・・なんて可哀想な奴なんだお前は・・・・・・・・」

俺は不意に呟いていた。

あれだけ強大な力を持ちながら、その力に溺れ、最終的には自らを破滅へと追い込んだ。

力を理解しなかったがために、ミクトランは化け物になった。

ただ意味の無い破壊を繰り返す、哀れな兵器へと変わってしまったのだ。

「悲しいな・・・・・・・・お前は・・・・・・・・」

ミクトランがなのはにしたことを忘れたわけではない。

そのことは今でも忘れられないし、ミクトランに対する怒りはこれから消えないだろう。

だが、哀れだなとは思った。あそこまで類稀な剣才を持っていながら、その末路がこれとは。

あまりにも報われないだろう。

迫る閃光を剣で薙ぎ払い、俺はミクトランに斬りつけた。

それをミクトランは腕で受けた。苦しそうに唸り、悲鳴を上げる。

それはもはや声ではなかった。音と言った方が正しかった。

とても不快な、人間には到底出せないような、そんな音。

「ぐっ！」

猛烈な異質感を覚えて俺はミクトランから離れた。

なんだ？ なにかが流れ込んでくる。これは・・・・・・・・ミクトランの記憶？

俺の頭を、映像が恐ろしいスピードで流れていく。

頭が壊れそうだ。なんだ・・・・・・・・これは？

貴族の屋敷で無邪気に笑うミクトラン。剣を初めて手にし、喜ぶミクトラン。

大会で優勝し、達成感に震えるミクトラン。そのどれもが、輝かしい歴史だった。

だが、途中からそれは変わる。それは、貴族としての宿命。

友はそれを当然だと思い、家族はさらに上を目指させた。

それは、ミクトランにとって苦痛でしかなかった。

過度の期待が、ミクトランを壊していく。

無邪気に笑っていた剣の稽古も、知識の獲得を喜びとしていた研究も、全てが無駄に思えた。

自分はそんなに凄くないのに、少しだけ優れているだけの人間なのに。

やがて、ミクトランの心は壊れ始めた。

自身を保つために、高圧的な態度を取り始めた。

自ら選ばれた人間だと思い込み、ひたすら力を求め続けた。

それは、最早彼自身ではなかった。

だが、ミクトランは一人の少女に出会った。

その少女は、ミクトランが強がっていることを一瞬で見抜いた。

初めは、自身の心に土足で踏み込んでくる彼女に苛立ちを感じた。

貴様に私の何が分かると怒鳴ったことだってあった。

それでも、彼女はミクトランに接し続けた。

どれだけ拒絶されても、どれだけ否定されても、傍を離れなかった。

やがて、ミクトランは折れた。彼女を認め、話しているうちに、彼

は次第に自分自身を取り戻していった。

気がつけば、彼女と共に居ることが最大の喜びになった。

剣術や研究の時間を減らし、彼女との時間を増やした。

ミクトランの成長は緩やかになった。それでも、普通に比べれば十

分優秀だった。

彼は自らの能力を強化する代わりに、心を取り戻した。

剣術や研究を疎かにしたわけではない。完全な両立だった。

むしろ彼女と接することでミクトランは元気が出た。

彼女と一緒にいることが、ミクトランの幸せだったのである。

だが、運命とは皮肉だ。出会いがあれば必ず別れがある。

それが恋愛なら死別や、自然消滅、様々なものがある。

そしてそのどれもがお互いの心に何かを残してくれるものだ。

ミクトランと彼女は恋仲だった。だが、迎えた結末は最悪のものだった。

彼女は貴族ではなかった。ただの平民の娘だった。

そんな彼女がミクトランと一緒に居ることが、彼の両親は耐えられなかった。

ミクトランの成長が緩やかになったのもその原因だった。

彼らは愚かだった。ただデータだけを見て彼女がミクトランに必要ないと判断したのだ。

本当は何よりも大切なものだったのに、誰よりも大切な人だったのに。

それを両親は奪った。

寒い雪の日、ミクトランは真っ白な雪を赤く染める冷たくなった彼女を見つけた。

それを見たとき、ミクトランは何がなんだか分からなかった。

まず頭に出たのは否定だった。傘を投げ捨て、ミクトランは彼女を抱き上げた。

その顔は、とても安らかだった。眠っているようにさえ見えた。

だが、その体はそれをあざ笑うように冷たかった。

彼女の首につけたお揃いのネックレスの鎖が千切れて雪の上に落ちた。

ミクトランの頭の中を覆い尽くしたのは怒りだった。

別れは、様々なものを与えてくれる。ミクトランは彼女と死別したが、彼女はなすすべなく死んだ。最後の言葉すらミクトランに聞いてもらえないことなく、死んだ。

痛かっただろう。冷たかっただろう。怖かっただろう。

彼女は、最後にどんなことを思ったのだろうか？それをミクトランが知る由など無い。

もう一度硬く彼女を抱きしめて、ミクトランはキスを落とした。

それはとても冷たくて、そしてとても悲しいキスだった。

嬉しい筈のキスがこんなにも辛いなんて、とミクトランは涙を流した。

目を瞑れば、彼女との思い出が蘇ってくる。思い出の中の彼女は、いつも笑っていた。

いまだって笑っている。冷たい体で、微笑み続けている。

消えていく、思い出が。それを止めることなどミクトランには出来ない。

気がつけば、頭の中は真っ赤だった。別れは、ミクトランに怒りを残した。

ただ一つ、尋常じゃないほどの怒りを。

そして、ミクトランの心は完全に壊れた。

それからは説明するまでも無い。ミクトランは今まで以上に剣術や研究に勤しんだ。

全ては、復讐の為。彼女を殺した両親と、こんなくだらない世界に復讐する為。

ただ、それだけだった。壊れてしまえばいい。彼女の居ないこんな世界など。

やがて怒りは狂気になり、それは彼女との思い出を封じ込めた。もう二度と思い出さないように、蓋をして開くことは無かった。

ミクトランは、最早狂うしか道が無かった。

もし、彼女のような人がまた現れていたならミクトランは道を違えなかったかもしれない。

だが、そんな人が現れることはもう二度と無かった。

やがてミクトランの中で女性は弱者の括りになった。

自身を一度は救ってくれた彼女のことさえ、ミクトランは忘れていた。

思い出さなくなかった。ミクトランは、逃げたのだ。

天上に上がる準備をする際に、彼は両親を殺害した。

どうして殺害したかなど彼には分からなかった。

ただ、そうしなければならぬように思えた。

天上に上がった人々を仲間と思うようになった。

何故かなどミクトランは知る由も無かった。

ここまでの記憶を見てきた俺なら分かる。全ては彼女が関わっているからだ。

両親の殺害は、彼女を殺したことに對する復讐。

天上の仲間は、彼女を求めるミクトランの気持ちから転じたものだろう。

そのくらい、ミクトランにとって彼女は大切な存在だったのだ。

だからあそこまで怒りを顕にしたのだ。自分が手に入れられなかったものを、俺が持っていたから。

「・・・・・・・・・・んな」

広い部屋。わずかな光が差し込むこの空間で、俺は呟いた。

「ふざけんな!!」

声を張り上げる。壁が振動し、空気が悲鳴を上げる。

「彼女が死んだから？殺されたから？だからなんだ!!」

俺の言葉に、ミクトランの動きが止まる。

「だから狂って地上を破壊しようとしたのか！？そこには彼女との思いもあるんじゃないのか!？」

彼女。その言葉にミクトランはピクリと反応した。

よく見る。俺は自分自身に告げた。

一歩間違えたら自分がこうなっていたかもしれないんだ。目に焼き付ける。

「彼女はそんなこと望んでいたのかよ!? 違うだろ!? アンタの記憶の中の彼女はいつだって笑ってた!!」

「ア・・・・・・・・・・アア・・・・・・・・・・」

ふらふらになりながら、ミクトランが声を上げる。
その声は苦しそうだった。

「アンタは生きるべきだった！！彼女の分まで清く正しく生きるべきだったんだよ！！天国に居る彼女が泣かないように・・・・・・・・・・
・・・・・・・・そうじゃないのか、ミクトラン！！」

「アアアアアアアアアアアアアアアア！！」

咆哮を上げ始めたミクトランに俺は叫び続ける。
顔が歪むのが分かる。なんて、なんて悲しい話なんだ。
残酷すぎる。それでも、俺は言わなくちゃいけない。

「彼女が殺されたから復讐して世界を壊す！？違うだろ！！アンタは彼女を殺されたんじゃない、守れなかったんだよ！！」

「アアアアアア！！・・・・・・・・・・ガアアアアアアア！！
！！！！！！あ・・・・・・・・・・ああ・・・・・・・・」

ミクトランを眩い光が包んでいく。

「アンタは逃げてるだけだ！！臆病なだけだ！！自分のことを棚にあげるな！！向き合えよ！！守れなかったんだ！！だったらせめて忘れるんじゃないか！！」

「・・・・・・・・・・私は・・・・・・・・・・そうか・・・・・・・・・・
・・・・・・・・」

声が枯れるほど叫んだ頃には、ミクトランは正気に戻っていた。

その表情は、とても安らかだった。

溶岩のような青い肌も、元に戻っていた。

背中には依然として六枚の羽があるが、それは逆に彼を天使のように見せていた。

「私は・・・・・・・・・・長い間・・・・・・・・・・忘れていたのだな・・・・・・・・・・あんなに大切だった人を・・・・・・・・・・」

その頬を涙が流れる。それはゆっくりと床に落ちた。

「すまない・・・・・・・・・・本当にすまない・・・・・・・・・・今更許されることではないかもしれない・・・・・・・・・・本当にすまなかった・・・・・・・・・・」

溢れんばかりの涙を流し、ミクトランは天国の彼女に謝った。

天を見上げていたミクトランは俺の方を向いた。

その目には既に敵意は無かった。

「君にも本当にすまない事をした。すまない、ルーク君・・・・・・・・・・」

ああ、本当に終わったんだな。

そう思い、俺は息を吐いた。

ミクトランへの怒りが消えたわけではない。

だが、ミクトランの記憶を見て、理解してしまった。

どうして狂ったのか、分かってしまった。

許しはしないだろう。だが・・・・・・・・・・罪を償って生きてほしい。心底そう思った。

「いまさら私がこんなことを言える立場ではないのは分かっている。
だが・・・・・・・・最後に・・・・・・・・一つだけ頼みがある。
・・・・・・・・」

「私が・・・・・・・・・・私でなくなる前に・・・・・・・・・・私を殺してくれ・・・・・・・・・・」

目を疑った。なんで？そう何度も自分に尋ねた。

ミクトランの目が赤く染まり、無機質なものになる。
手に握られたソーディアン・ベルセリオスから禍々しいオーラが噴き出している。

どうしてこうなった？なんでこうなった？

ミクトランの意識がゆっくりと消えていくのが、彼の瞳から読み取れた。

「殺せ・・・・・・・・・・私が私であるうちに！！」

苦しみながら、ミクトランは叫ぶ。

俺はどうすればいいか分からなかった。

生きて罪を償って欲しい。そう思った彼は、もはや戻れなかった。

「アアアアアアアアアアアアアア！！」

咆哮。その瞬間に俺は感じた。ミクトランが消えたことを。
轟音が響き、化け物と化したミクトランは前に飛び出した。
そして、気づいたときには俺の懷に居た。

「・・・・・・・・・・え？」

剣が振り上げられる。来る。どこから？分からない。速すぎて見え

ない。

『右よ！！』

ハロルドの言葉に俺は咄嗟に剣を回した。

それが出来たのは俺の体が反応していたからだろう。

結果から言うと、化け物の剣は俺の防御を破ることは無かった。

ただ力任せに俺を弾き飛ばしただけだった。それは圧倒的な破壊力。それを全身で感じながら俺は壁に激突した。土埃を巻き上げらせながら、俺は床に倒れる。

まずい。まずい。俺の頭の中で警報が鳴り響く。

こんなの、存在していい力ではない。腕が、痺れている。勝てるのか？こんな化け物相手に。

広い部屋。光の差し込まない部屋で、俺は圧倒的な力に気圧されていた。

ルークside

巻き上がった土煙の中。その中で、俺はミクトランの本気に啞然と
していた。

最早ミクトランではない、化け物。それも人の領域を完全に超越し
た化け物だった。

ハロルドを床に突き刺し、杖にしてなんとか起き上がる。

晴れてきた視界の先には、無表情で俺を見つめるミクトラン、いや
化け物が居た。

その目は虚ろで、ミクトランの意識が完全に消えてしまったことを
物語っている。

『っ！？左よルーク！！』

ハロルドの声に反応したのか、それとも俺の体が勝手に反応したの
かは定かではない。

ただ一つ分かってる事は、次の瞬間には左に構えた剣に恐ろしい
ほどの力が叩きつけられ、俺を吹き飛ばしたということだ。

横に弾き飛ばされ、俺は地面を転がった。咄嗟に起き上がり、相手
の出方を見る。

追撃をしてくる様子は無い。どうやら理性があるわけではないよう
だ。

だが、逆に性質が悪い。相手が振るってるのは技ではなく暴力だ。
それも人知を超えた、圧倒的な暴力。

『自分の体を代償にして力を引き出してる……………今の一
振りでミクトランの腕がいかれたわ……………でも、痛み

を感じていない………」

ハロルドの言葉を聴きながら俺は納得していた。

ミクトランの全身全霊。全てを犠牲にして手に入れた力。

ならこの馬鹿げた力も納得できる。だが、頭では理解していてもなんの意味も無かった。

その力が圧倒的過ぎて、勝つための手段など一切思いつかないのだから。

相手は化け物だ。圧倒的な速さで近づき、理不尽な力で蹂躪する。

ただそれだけ。だからこそ、対応策などあるはずもない。

真っ先に思いついたのは超振動だった。いくら化け物でも分解すれば消えるだろう。

だが、その案はすぐに無理だと判断した。当たらないだろう。

今の化け物の理性が無いことは分かる。だが、自分の身が危ないことぐらいは分かるだろう。

そしてあの化け物の速さなら、避けるだろう。それもいと簡単になら自滅を待つのはどうだろうか？

相手は自分の力をその身を犠牲に出している。

なら放置すれば消えるだろう。

だが、その案もダメだった。

相手には理性が無い。なら、その攻撃の矛先がなのはに向かう事だって考えられる。

そしてそうなったとき、俺はなのはを護ることは出来ない。

あの暴力をとめる手段など俺には無いのだから。

だったら、方法の一つ。俺の技か、ハロルドの晶術で殺すのみ。

だが、出来るのか？あんなに速く、あんなに馬鹿げた力を持っている化け物に、通用するのか？

目の前に立つ化け物が脱力した。

その剣には禍々しいオーラが宿っている。

それは、俺の持つ剣と同じはずだ。いや、むしろ劣化品のはずだ。なのに、なのにどうして俺の持つ剣が棒切れにしか見えないのだろうか。

こんな剣で防げるわけが無い。いや、仮にローレライの鍵があつても防げはしないだろう。

目の前に立つ化け物が床を蹴った。

蹴ったのだろう。定かではない。

気がついたときには咄嗟に剣を水平に構えていて、そこに剣が突き刺さったのだから。

それは、金属音ではなかった。剣と剣がぶつかる音ではなかった。むしろ車と車が高スピードで衝突するような、そんな音だった。

そして、そんな圧倒的な力を俺が防げるはずは無かった。

左手一本で止められる筈は無く、俺は吹き飛ばされた。

かなり離れたところにあつた壁に背中から激突し、床に落ちる。

息が詰まる。咳き込むと、血が溢れた。

受けた左腕が痺れている。

見えなかった。

体が反応しなければ、死んでいただろう。

ミクトランの高速剣すら見切った俺の目でも捉え切れない、そんな剣。

なんとか立ち上がり、俺は念じた。跳べと。

いつまでもやられているわけにはいかない。

なのはに矛先が向けられてしまう前に、なんとかしなければならぬ。

どうすればいい？どうすれば倒せる？

俺は混乱していた。思いつかない。どうすればいいのか。それでも、攻撃するしかない。懐に入り、剣を突き出す。

入ったはずだ。懐に。なのに、どうして化け物は遠くにいる？
確実に近くまで転移したはずなのに、どうして俺の剣は相手を捉えられない？

どうして落ちた雷の音しか響かない？

どうして目の前に化け物が居る？

意味が分からなかった。どうして先程まで遠くに居た化け物が目の前に居るのか。

だが、考えている暇は無かった。気がつけば、体が後退していた。突風が吹き、髪が揺れる。俺はすぐにそれが化け物が剣を振るったからだと気づいた。

あまりの速さに完璧にかわせず、浅く斬られたことにも気づいた。だが、返ってくる剣を確認することは出来なかった。

なにが起こったかわからない。気がつけば、俺は深く斬られていた。振り下ろした筈の化け物の剣が、なぜか振り上げられている。

目にも留まらぬ速さで化け物は「二回」剣を振り下ろしたのだ。

そして二撃目は俺を床に倒すには十分すぎた。

『ルーク！！インブレイスエンド！！』

ハロルドの声が響き、氷の柱が落ちてくる。

近くに居た化け物が消えるのを、はつきりと感じた。

それと同時に暖かい光が俺を包むのも。

なんとか立ち上がる。ベルセリオスのコアが煌いているのが見えた。

『エンシエント・ノヴァ！！ディバインセイバー！！』

炎が落ち、雷が化け物を喰らう。だが、効いていないようにしか思えなかった。

なぜならその化け物は焼き尽くすはずの炎と雷の中で剣を振るっただからだ。

それは氷の柱を捉え、破壊した。破壊したのだ。

ハロルドの最強晶術の一つ。インブレイスエンドの氷の柱を。まるで紙のように。

『具現せよ精霊の結晶！！ソル・ブライト！！至高の意思よ、我等に力を！！』

現れたのは、天使だった。だったはずだ。

そしてそれは化け物に強威力の攻撃をする筈だった。

筈だったのだ。なのに、化け物は炎と雷に焼かれながらも、剣を振るった。

そして天使を、殺した。

『そんな・・・・・・・・・・こんな・・・・・・・・・・にとって・・・・・・・・・・』

ハロルドが哑然としているのが分かる。

俺も同じ気持ちだった。ハロルドの具現結晶。それは最強の晶術だ。精霊が繰り出す攻撃は、あまりにも強力だった。

それをまさか、精霊ごと殺すなど、考えたことも無かった。

無理だ。俺は分かっていた。俺の剣は当たらない。

どれだけ速く移動しても、レンズの力を使っても、相手が離れるほうが速い。

そして、俺は化け物の攻撃を見切ることが出来ない。

ハロルドの晶術は効果は無く、精霊に関しては殺す末路だ。

こんなの、勝てるわけが無い。

目の前の化け物が剣を構える。

体中に電撃が走り、火傷している様子が見受けられるが、化け物が気にする様子は無い。

来る。俺は瞬時にそう感じた。だが、どうするというのだ？
防げるのか？今から化け物が出す攻撃を。

『来るわよ！！ルーク！！』

「っ！？粹護陣！！」

俺に出来たのは、身を固めることだけ。

そして化け物が剣を突き出すと同時に大きな閃光が、光龍槍よりも大きな閃光が俺に迫った。

『エクセキューション！！間に合え！！ルナシェイド！！』

直前に、ハロルドが何かを叫んだのを聞いた。
だが次の瞬間には俺は光に飲まれた。

体中が痛い。俺は、生きているのか？

ゆっくりと腕を動かし、俺はなんとか起き上がった。

そして、明るくなった視界に気づき、後ろを向いた。

そして、目を疑った。後ろには、巨大な空洞が出来ていた。

その奥には光が満ちていて、貫通していることが分かる。

先程化け物が放った攻撃は、この洞窟にもう一つの出口を作ったのだ。

ありえない。こんなことありえるわけがない。

不意に、暖かい光が俺を包んだ。ハロルドのキュアではない。

体中の痛みが引き、俺は立ち上がった。服はもうボロボロだ。

そして俺の左腕から、何かが落ちた。床に目を向ける。

それは、フェイトから貰った治療パットだった。

役目を終えたのか、半球の物体は割れていた。皆が、俺を護ってくれたのか。

そこまで考えたときに、俺は気づいてしまった。

依然として化け物は目の前に居る。自滅するのはまだまだ先だろう。もし、ここで俺が死んだら、次はなのはだ。そしたら、次に化け物は外に出るだろう。

元からある出口か、新しく出来た出口か、定かではない。

だが、確実に外に出るはずだ。そして、真っ先に外で待機しているヴァイスが殺されるだろう。

なら、次はどうなるか。決まっている。世界が滅ぶ。

こんな化け物を倒せる人間なんて居る訳が無い。

例え世界中が協力したとしても無理だ。コイツは、止められない。死ぬ。皆死ぬ。誰も助からない。俺も、なのはも、六課の皆も、ヴィイオも助からない。

護れない。

「・・・・・・・・・・るな」

消えるのか。皆。俺の大切な人が、俺の居場所が、皆消えてなくなる。

俺達だけじゃない。ミクトランの意識も何もかも、消えてなくなる。

「ふざけるなああああああー!!」

そんなこと、許される筈は無い。

皆消えるなんて、俺が許さない。絶対に止めてみせる。

護ってみせる。皆を、なのはを、ヴィイオを、護ってみせる。

恐れるなルーク・フォン・ファブレ!! お前はなのはの前では負けないんだろっ!?

自分自身を叱責し、俺は剣を構えた。

「ハロルド、状況は？」

『私に打つ手は無いわ。ルナシェイドすら効かなかった。完全に……詰みよ』

悔しそうなハロルドの声が響く。

俺はそれを鼻で笑った。

『ル、ルーク？』

「あるさ」

『え？』

「方法なら、ある」

前に出て、俺は化け物を見つめた。

『な、なに？何をするつもりなの？だ、ダメよ。自分の命と引き換えに何かするなんて絶対にダメよ！？』

ハロルドには俺が何をするのか分かっていない。だが、予感がするのだろう。俺が遠くに行ってしまう。そんな予感が。

化け物が突っ込んでくる。目では確認できない。体が反応する。だが、俺はそれを無理やり止めた。方法は一つだけある。当たらないのなら、当てればいい。その為には、これしか方法がない。

そして、俺は化け物の剣に貫かれた。

衝撃が俺の体を突き抜ける。

ハロルドを地面に落とし、血を吐き出しながら、俺は化け物の剣を握った。

刃を握ったので手のひらから血が流れるが、無視した。
動かないはずの右手に命令する。動け、動けと。

ここで、右手が動けば俺の勝ち、動かなければ負けだ。

化け物が剣を引き抜こうとするが、至近距離で剣を掴まれているため、動けなかった。

動け、動け。動いてくれ。ここで動かなきゃ意味が無いんだ。そうしなきゃ、皆を護れないんだ。大切なものを、護れないんだ。

そして、右手が動いた。

今まで動かなかったのが嘘のように、右手が動く。

そして俺は見た。俺の右手に誰かの手が触れていることを。

それは、かつての世界でのヴァンとの戦の最後と同じだった。

だが、俺は分かってしまった。この手が誰の手なのか。

化け物越しに、啞然としているのは俺は見つめた。

彼女にこんなことが出来るわけは無い。だが、間違えるわけは無い。

最愛の人の手の温もりを、間違えるわけは無いのだ。

それは、奇跡だった。どういう原理で動いてるのか定かではない。それでも、それは間違いなくなのは手だった。

どうして、そんなことは関係ない。俺がやるべきことは、ただ一つ。

「さようならだ……ミクトラン」

手の温もりが、俺に力をくれる。

枯れていたはずの力が、湧き水のように溢れる。

優しい、最愛の人の温かさに包まれて、俺は力を発動した。

化け物の胸に触れた手のひらから、全てを破壊する力が飛び出す。

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

俺の全てをかける。

右の掌から飛び出した蒼い閃光は化け物の胸に風穴を開け、その向こうに居たなのは縛る鎖を破壊した。

化け物が、輝く。超振動が、化け物を完全に分解し始めた。

「……………ありがとう」

それは、不意に聞こえた。

顔を上げれば、ミクトランが俺を見つめていた。

その目から涙が流れている。

「本当にありがとう。そしてすまなかった……………」
「これでやっと逝ける」

光が、ミクトランを包んでいく。

薄くなっていく。段々と存在が、消えていく。

穏やかな笑みを浮かべ、ミクトランは微笑んだ。

「今行くよ……………」

□

□

最後の言葉を聞き取ることは出来なかった。

だが、ミクトランは最後に最愛の人の名前を呼んで消滅した。

残ったのは、俺の体に突き刺さったソーディアン・ベルセリオスのレプリカだけだった。

彼は、彼女の元に行けただろうか？大丈夫だろう。

彼は、十分苦しんだのだ。彼女の元に行く事くらい、許される筈だ。

「これは……………俺が……………後を追う……………展開かな」

ふらつき、俺は倒れそうになるのを必死で堪えた。

体に刺さった剣を抜き、投げ捨てる。血が流れるが、無視した。

「は……………そっくりじゃねえか……………アツシュの死に方と……………」

エルドラントで、アツシュは剣で貫かれて死んだ。

血は争えないということか。

「ルーク!!」

声が響き、俺はなんとか顔を上げた。

鎖から開放されたのはが近づいてくる。

その両腕はあまりにも痛々しかった。

足から力が抜け、俺は膝をついた。
横に倒れた俺の体を、すぐになのはが起こしてくれる。

「ルーク！！しっかりしてよルーク！！」

なのはの声も、遠く聞こえる。

死ぬ。それを俺ははつきりと感じていた。無理だ。助からない。

「死んじゃダメだよルーク！！ルーク！！一緒に居てくれるんですよ！？三人でまた幸せに過ごすんでしょ！？だったら・・・・・・・・・・
だったらこんなところで死んじゃダメだよお・・・・・・・・・・」

涙が、俺の頬に落ちる。

俺の一番好きななのはの表情は笑顔なのに、また泣かせてしまった。

「ごめん・・・・・・・・・・なあ・・・・・・・・・・いつも・・・・・・・・・・泣かせてばかりで・・・・・・・・・・」

フルフルとなのはは首を横に振った。

「いいの、ルークが居れば、どれだけ泣いてもいい。だから・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・だからあ・・・・・・・・・・」

ぎゅっと、なのはは俺を抱きしめた。

「死んじゃダメだよ・・・・・・・・・・」

先程からハロルドが必死でキュアをかけている。

だが、助からない。助からないのだ。

ふと、小石が落ちてくるのを感じた。洞窟全体が、揺れている。

「な・・・・・・・・のは・・・・・・・・にげ・・・・・・・・ろ・・・・・・・・くず・・・・・・・・れる・・・・・・・・」

俺の言葉に、なのはは首を横に振った。

「嫌だ・・・・・・・・嫌だ！！ルークを置いていくなんて出来ない！
！私も一緒に死ぬ！！」

「ダメだ・・・・・・・・なのは・・・・・・・・」

「ルークは私の全てなの！！ルークが居ない世界なんて要らない！
！」

「頼むから・・・・・・・・」

「やだ・・・・・・・・いやだよ・・・・・・・・」

暖かい温もりが、俺を包む。

ああ、俺はなんて幸せなんだろう。死ぬ瞬間まで、好きな人と一緒に入れるのだから。

でも、俺はなののことを愛している。なのはに生きてほしい。
だから・・・・・・・・

「ごめん・・・・・・・・なのは」

「・・・・・・・・え？」

俺はなのはの肩に左手を伸ばし、レンズの力を使用した。
温もりが消え、俺の体が床に再び落ちる。

『・・・・・・・・・・私は最後まで一緒に居てあげるわよ』

「は・・・・・・・・・・ありが・・・・・・・・・・とうな・・・・・・・・・・」

何だろう。とても眠い。そして、とても寒い。

さっきまではとても暖かったのに、とても寒い。

ひよっとしたらこれが死ぬということなのかもしれない。

なのはともっと居たかった。ヴィヴィオともっと過ごしたかった。だが、それももう叶わない。それを考えると、涙が流れた。

「寂・・・・・・・・・・しい・・・・・・・・・・な・・・・・・・・・・」

崩れる天井を見ながら、俺はゆっくりと意識を手放した。

最後に瞼の裏に描いたのは、なのはとヴィヴィオの笑顔だった。

なのはside

不意に視点が切り替わったなのはは啞然としていた。

どうして自分は外にいるのだろうか？どうして先程まで腕の中に居たルークが居ないのだろうか。

目の前には先程まで居た筈の小さな洞窟がある。

響く轟音。崩れていく入り口。

それを見たときになのはは思い出した。

そうだ。あの中には最愛の人が居るのだ。

助けに行かなくては。足の力だけで立ち上がり、ふらふらになりながらなのはは前に出た。

だが、疲労困憊の状態では歩くことなど満足に出来なかった。

その場に崩れるように膝を付き、自らの体を咄嗟に両腕で支えた。

激痛が走るが、気にしている場合ではない。早くしなくては、彼が逝ってしまう。

「なのはさん！！」

不意に後ろから声が聞こえた。

首だけ向けると、ヴァイスが走ってきていた。

「なのはさんダメです！！崩れます！！」

ヴァイスがなのはの肩を握り、前に出ようとするのを必死に止める。捕まれた肩に痛みが走るが、無視した。目の前の洞窟は崩れかけている。

今行けば、なのはは戻れないだろう。そんなこと、分かっている。

だが、だからなんだというのだ。

「離してヴァイス君……………行かなきゃ……………行かなきゃダメなの!!」

必死でヴァイスを突き放そうとするが、ボロボロなのはにそれは叶わなかった。

「ダメですなのはさん!!」

「離して!! 離してよお!!」

早くしないと彼が死んでしまう。

なのはの生きる意味が、消えてしまう。何度も傷つけた。何度も護れなかった。だが、消えてしまうのはダメだ。絶対にダメだ。

ゆっくりと手を伸ばす。血が流れるのも、痛みが走るのも気にしなかった。

ただ伸ばし続けた。彼を求め続けた。

そして、なのはの目の前で洞窟は音もなく崩れ落ちた。

「あ……………ああ……………」

-
-
-
消えていく。

砂ぼこりが舞い、入り口が塞がれる。

――逝ってしまう、彼が

轟音を立てて、崩れ落ちていく。

そして、
 なのは目の前に残ったのはただの瓦礫の山だった。

――そして、消えた。私の世界が。

「いやあああああああああ！」

晴天の下で、白の魔導士の悲痛な声が響き渡った。

ルーク side

どこだ？ここは？

俺は自分自身にそう問いかけた。勿論答えは返ってこない。

気づいたときには俺は夜空の下で立っていた。

どうしてここに居るのか、俺には分からない。

何も思い出せない。何があつたのかも。

足元には綺麗な白い花が咲いている。

確かセレニアの花だった筈だ。

だが、何故覚えているのかは分からない。

ふと、自分の体を見た。

初めて見る服だ。その筈だ。

なのに何故かとても懐かしい感じがした。

腰の後ろに剣がささっているのに気付き、柄に触れる。

確か、ローレライの鍵という名前だった筈だ。

剣なのに鍵という名前なのだから、変だなと思う。

俺は、この剣を振るっていた筈だ。

だが、何故だか長い間この剣を目にしていないう気がした。

風が、吹いた。

ふと顔を上げて見ると、目の前の岩の前に、一人の女性が立っているのが見えた。

マロンペーストの髪の彼女は、口を押さえて目を見開いていた。

名前は……………確かティアだった筈だ。

ティア。その名前が頭を過った瞬間に俺は全てを思い出した。

そうだ。俺はティア達と旅をしていた。

それは、世界を救うための長い長い旅。

その旅の最後で、俺はヴァンを倒し、最愛のティアと再会を誓った。

- - - 違う

……………最愛？

なんだろう。なにか、なにか忘れている気がする。

とても大切な何かを。

だが、思い出せない。とても大切なことの筈なのに。

「どうして……………ここに？」

近づいてきた彼女の、鈴のような声を聞いて俺は咄嗟に答えた。

「ここなら、ホドが見渡せる」

ホド。別名エルドラント。

俺達がヴァンと、最後の戦いをした場所。

- - - 違う

俺の頭をある光景が過った。

金髪の男性と激戦を繰り広げる、俺の姿。

そんな戦い、俺は経験してない筈だ。

なのに、どうしてこんなに鮮明に光景が流れる？

「それに……………約束したからな」

不意に口から出た言葉で俺は思考を中断した。

そつだ、約束した筈だ。

必ず帰ってくる、そう誓った筈だ。

- - - 違う

目の前に立つティアの目から涙が零れる。

そつだ。何を今更考える必要がある？

俺は再び出会えたのだ。

会いたいと願っていたティアと。

それだけで十分ではないか。

- - - 違う!!

不意に、ティアが立ち止まった。

その瞳は、揺れている。
どうしたのだろうか？そう思い、話しかけようとしたとき、彼女は
ゆっくりと口を開いた。

「どうして・・・・・・・・・・・・・・・・泣いてるの？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

俺の口から飛び出したのは自分の声じゃないと思えるくらい間抜け
な声だった。

左手を上げ、頬に触れる。冷たい感触が、指に伝わった。

なぜ？なぜ泣く？ティアに逢えたんだ、泣くことなんて・・・・・・・・
・・・・・・・・

「・・・違う！！思い出せ！！」

次の瞬間、俺の頭の中を膨大な情報が駆け巡った。まるで光のように点滅し、俺の頭を覆っていく。

「ああああああああ！！」

頭を押さえ、俺は踞った。頭が、割れそうだ。

大量に、何かが流れ込んでくる。

異質な漆黒の剣を用いて戦う俺。

ボロボロになりながらも立ち上がる俺。

これは・・・・・・・・・・なんだ？

足音が聞こえる。仲間が駆け寄ってきたのだろう。

心配そうに叫んでいるが、答える余裕など無かった。

「どきなさい！！」

凜とした声が、響き渡った。肩に手が置かれる。

「ルーク！！ルーク！！私のことが分かりますか！？ルーク！！」

切羽詰まった叫び声に、俺はなんとか視線を彼に向けた。

見間違える筈はない。彼とは何度も死線を潜り抜けたのだから。

「ジェ・・・・・・・・・・イド・・・・・・・・・・」

「

俺の言葉に、ジェイドは安心したように息を吐いた。

「ルーク、どうしましたか？」

「わ、分から・・・・・・・・・・ない。急に・・・・・・・・・・頭
が・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・割れるほどの頭痛に、このタイミング・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・まさか・・・・・・・・・・」

ジェイドはしばらく何かを言っていたが、何か結論を出したのか、
ゆっくりと言葉を発した。

「ルーク、よく聞いてください。今日で貴方が消えてから二年にな
ります。これはあくまで私の憶測です。貴方はこの二年別の場所、
あるいは別の世界にいたのではないですか？」

別の世界。その言葉と共に俺は急速に頭痛が引いていくのを感じた。
目の前を絶えず展開していた光景が高速で消滅していく。
思い・・・・・・・・・・出した。

ゆっくりと顔を上げて、俺は楽な体勢に移行した。

ジェイドがガイを見て頷き、ガイも同様に頷く。

ジェイドが離れ、円を描くようにかつての仲間がセレニアの花畑に
座り込んだ。

頭痛が引いたため、ゆっくりと皆の顔を見る。

ジェイドは俺がローレライを解放してから二年の月日が流れたと言
っていた。

皆成長している。アニスやナタリア、ティアは大人っぽくなった。
ガイも貴族としての威厳がにじみ出ているし、ジェイドも成熟され
た雰囲気を出している。

「話してくださいますかルーク。この二年、貴方に何があったのか」

ナタリアの言葉で皆が一斉に俺を見た。

俺は息を吐き、ゆっくりと話し始めた。あの世界での出来事を。

結論から述べると俺は包み隠さず、あの世界で起こった全ての事を話した。

勿論なのはとの語るのが恥ずかしいような思い出等は省略したが、その他は一つ残らず話した。

俺が、ティアではなくなのは選んだということも。

その話をしたとき、ティアが悲しげに俯くのが見えた。

申し訳ない気持ちになった。それでも、自分の気持ちに嘘はつけない。

話し終わったら、謝ろう。しっかりと、謝ろう。

「・・・・・・・・・・なによ・・・・・・・・・・それ・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・ごめん」

謝ることしかできない。俺は、ティアの期待を裏切ったようなものなのだ。

二年も彼女を待たせ、そして、出会って別れを告げる。

どれだけ自分が残酷なことをしているのか、よく分かっている。

「二年の間別の世界でなのはって人と恋人になって子供まで貰った？ミクトラんとかいう化け物の戦いで瀕死になって気がついたらここに居た？そして私が居たから謝った？・・・・・・・・ふざけるの？」

「・・・・・・・・・・本当にごめん」

謝ることしかできない。俺は、何を言われても仕方が無いのだから。更なる罵倒を予感した。それを予期して目を瞑った。

だが、帰ってきたのは、笑い声だった。

「・・・・・・・・・・そんなことしてる暇があったら元の世界に戻

る方法を考えなさい」

ティアの声が、耳に響いた。ゆっくりと顔を上げる。彼女は微笑みながら俺を見つめていた。

「帰るんでしょう？なのはさんの所に。だったらしゃきつとしてさつさと帰りなさい。こんな世界で、油を売ってる暇なんて無いでしょう？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

俺は意味が分からなかった。俺が罵倒されたところまでは理解できる。

だが、その後が分からない。なぜティアは微笑んでいる？
どうして、俺を励ましてくれる？

『ルークよ。戻りたければ願うがいい。願えば、我の力によってお前は元の世界に帰れる』

気がつけば、金の鳥が俺の頭にとまっていた。他の皆も気づかなかったようで、目を見開いている。

俺はこの声を知っている。つまり、この金の鳥は。

『今のお前は私と同じ思念体だ。精神だけがこの世界に来ている。しかし、ここは私が管轄する世界だ。ここならお前は人の形を取ることができる。だが、向こうに戻れば私の力は及ばない。死ぬかもしれない』

その言葉に俺は咄嗟にティアを見た。
戻りたい。なのはの居る世界に。

だが、出来るのだろうか？それになによりティアとこのまま別れていいのだろうか。

「早く行きなさい」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ティア」

「貴方を待つてる人がいるのよ。その人は私よりもずっと貴方のことを強く望んでる。行つて」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ずっと謝りたかった。でも、もう謝れた。だから、俺は言うよ。ティア」

残酷な言葉を、告げよう。全てを終わらせるために。

「もう、俺のことを待たなくていいよ」

その言葉に、ティアの瞳が揺れるのが見えた。ごめん、本当にごめん、ティア。
視線を外し、皆をゆつくりと見回す。

「行つちまうんだな。もう」

「ああ、俺にはやることがあるから」

親友の言葉を、迷い無く返す。彼は満足そうに微笑んだ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ローレライ、頼む」

俺を、ゆつくりと光が包んでいく。

「ありがとう、ガイ。お前が居たから、俺は怖くなかった。どんなときでも、一緒に戦ってくれる親友が居たから」

俺を見つめたまま、ガイは静かに涙を流した。最後の瞬間まで、俺を見届けるつもりなのだろう。

「ありがとう、ナタリア。そしてごめん。俺は、アッシュを助けられなかった。本当にごめん。でも、ありがとうって、アイツも言うてる。俺だってお前に感謝してる。俺が消えたら、アッシュが戻ってくるはずだから、だから、幸せになっしてくれ」

とめどなく流れる涙を堪えながら、ナタリアはゆっくりと俯いた。涙が、セレニアの花の上に落ちた。

「ありがとう、アニス。お前は俺を責めてくれた。何が間違いかを教えてくれた。これからお前が間違えることもあるかもしれない。それでも、間違いは正せるんだ。それだけは忘れないでくれ」

じっと見つめながら、アニスの頬を伝って涙が落ちる。

「ありがとう、ジェイド。俺は父親を知らないけど、ジェイドは俺にとつて父親みたいな存在だった。ありがとう。俺を生んでくれて、本当にありがとう」

ジェイドは涙を流さなかった。ただ、辛そうな瞳で俺を見つめるだけだった。

そこがいかにもジェイドらしくて、俺は微笑んだ。前を向き、俺をじっと見つめているティアを見た。

「ありがとう、ティア。お前のお陰で、俺は世界を知ることが出来た。お前が居なかったら、生まれてきた意味も、生きる意味も分からなかった。本当に………ありがとう」

ティアは最後まで涙を流さなかった。

ただじっと、俺をみつめているだけだった。

『ずっと見てるわ。ずっと』

その言葉が、俺の中で蘇る。彼女はずっと俺の事を見ててくれた。だが、その役目もう終わりだ。これからは、幸せに生きて欲しい。かつての仲間に見守られながら、俺はゆっくりとその場から消えた。

ティア s i d e

天に昇っていく光を、五人はただ見つめていた。
残ったのは、金の鳥だけだった。そこに彼が居たことも嘘のように、

消えてしまった。

だが、彼は確かにここに居たのだ。それは、五人の心が証明している。

「・・・・・・・・・・・・・・・・よかったのか？行かせちゃって」

ガイの言葉に、ティアはゆっくりと頷いた。

「良かったわよ。あんなうじうじしたままでここに居るよりもずっと良いわ」

立ち上がり、踵を返す。

歩き出そうとしたところで、ティアは立ち止まった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・今から独り言を言うわね。聞き流して頂戴」

そして、ゆっくりとティアは語り始めた。

「ルークを見たとき、違和感があった。ひよっとしたら気づいていたのかもしれないわ。もう彼の心は私に向かっていないって。だって・・・・・・・・・・最後にあんな笑顔で笑ったのよ？私達と旅している時には見せなかった、そんな微笑で・・・・・・・・勝てるわけ・・・・・・・・無いじゃない」

涙を流しながら、ティアは歩き出す。

頬を伝った涙が、ゆっくりと地面に落ちた。

ルークを見たときに、気づいてしまったのだ。彼は自分を見ていないことを。

そしてなにより、彼の居場所はどこではないことを。

自分ではルークの生きる意味にはなれない。

生まれた意味を探す手助けは出来た。でも、生きる意味にはなれない。

ルークの生きる意味は、この世界にはないから。自分じゃないから。想った年数なら負けない。そう思ったりもした。だが、ルークの表情を見れば勝敗は明らかだった。

自分が入り込める隙など無い。いや、誰も二人の間には入れない。そしてそれを自覚してしまった時点で、ティアは諦めるしかなかった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・バカ」

仲間たちから離れ、ティアは小さくつぶやいた。

近くの木に身を預け、空を見上げる。遠くで声が聞こえる。アッシュが帰ってきたのだろう。

この二年、長かった。だが、それも無駄になってしまった。

仕方が無いことだ。自分よりもなのはと言う人のほうが思いが勝っていた。ただそれだけ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・でも・・・・・・・・・・幸せになつてね・・・・・・」

小さな森の中。一つの木下で、栗色の髪の少女の嗚咽が、夜空に響いた。

12-1 (前書き)

ティアの譜歌のところはなのはが替え歌として歌うはずだったので、歌詞規制により不可能そうなので、歌にこめた想いを書きました。

歌そのものはティアの大譜歌をなのはが英語で替え歌として歌っていると思うてください。

ティア s i d e

誰も居ない溪谷の木の下。

ひとしきり泣き終えた後でティアはポツリと呟いた。

「ローレライ。居るんでしょ？」

その声に呼応するように、金の鳥がティアの前に舞い降りた。

「何か用か？ユリアの血縁者よ」

「お願いがあるわ」

「申してみる。お前はルークと共に私を救ってくれた。出来ることならやるう」

ティアは微笑み、己のたった一つの願いを告げた。

「私をルークの居た世界へ連れてって」

金の鳥は翼を羽ばたかせ、光がティアを包んだ。
そして、世界は繋がる。

なのは s i d e

ミクトランとの激闘から二日後の六課の医務室。

そこでのなのは椅子に座っていた。

両手には痛々しい包帯が巻かれている。そしてベッドの上には、様々な機械に繋がれたルークが居た。

洞窟が崩れたあの日、ヴァイスの連絡により、すぐにはやて達が洞窟に到着した。

泣き喚くなのはを気絶させ、送り出したはやては瓦礫の散策を始めた。

はやてだけではない、六課全員が、ルークを探していた。

そして、ルークは発見された。

結論から述べると、ルークは死んではいなかった。

崩壊した瓦礫の山は、ハロルドが結界を展開することで防いでいた。だが、死んでいなかったただけである。その腹は貫かれ、体はボロボ

口だった。

助からないのは、誰の目にも明らかだった。

直ぐに六課に運ばれたルークはシャルルの手により治療に移る。

時間が無かったため、聖王教会から六課に沢山の医療器具を手配した。

そして治療後、シャルルは首を横に振った。

「無理です・・・・・・・・・・・・いくらルーク君でも、もう耐えられない。・・・・・・・・・・・・もう、長くないわ」

シャルルの言葉に、全員が俯いた。シグナムは壁を殴り、ヴィータは理不尽な運命に怒鳴った。

はやては黙って俯き、フェイトは声を押し殺して泣いた。

なのはが目覚めたのは比較的早かった。シャルルが気づいたときには、彼女はルークの傍に座っていた。

注意しようかと思ったが、その目があまりにも虚ろで、シャルルはそれをやめた。

なのはの怪我也酷い物だった。リンカーコアは大破し、一応回復はしたが、以前の魔力は到底引き出せない。

引き出せても怪我をする前の半分が限界だった。

何よりも酷いのは両腕だった。動かすことは出来る。

だが、スムーズに動かすことが出来ない。クロスファイア・ゼロ。

ミクトランの左腕を斬りおとしたその技は、なのはの腕を破壊するには十分すぎた。

これからは、腕を動かすだけで手一杯だろう。

魔法戦に復帰出来るかも危うかった。日常生活ではリハビリをすれば問題は無いだろう。

だが腕を激しく動かすことは、もう出来ないだろう。

「・・・・・・・・・・・・・ルーク」

小さく呟き、なのははルークを見つめた。

また、護れなかった。そして今、ルークの命は消えようとしている。どうしてこんなことになったのだろうか？どうして彼は死んでしまっただろうか？

もしも神がいるなら、なのはは頼みたいくらいだった。

私の命なんていくらでもあげるから、ルークを助けてくれと。

神でも悪魔でもなんでもいい。助けてくれるならなんでもする。

だからルークを助けて。六課の病室。そこでなのはは絶望に打ちひしがれていた。

歌が、聞こえる。

体を動かすと、柔らかい感触を覚えた。

ゆっくりと目を開けると、目の前に白い布団が目に入った。

いつの間にか眠ってしまっていたのか。そう思い、なのははゆっくりと体を起こした。

そして目を見開いた。ベッドの向こうに知らない人が居たからだ。

とても綺麗な人だった。マロンペーストの髪を揺らし、彼女は歌っていた。

歌声は透き通るように美しく、そして凛々しかった。

心に響いてくる。そんな歌声だった。なぜだか消えそうな半透明の姿が、彼女をさらに神秘的に見せていた。

歌い終わった彼女はゆっくりとなのはを見た。

その青い目に吸い込まれそうになるのを、なのはは感じた。

なんて綺麗な目なんだろうか。なんて綺麗な人なんだろうか。

見とれていると、彼女の小さな唇がゆっくりと動いた。

『ルークを・・・・・・・・助けたい？』

それは、ハロルドが使うような響くような声だった。

どうして彼女がそんな声で話すのか、なのはは知らない。

彼女そのものがこの世界に不安定に存在しているような錯覚を覚えたが、どうでもよかった。

今なのはの中では彼女が言った言葉が反復されているだけなのだから。

「助け・・・・・・・・られるの？・・・・・・・・ルークを・

「……………」

『出来るわ。でも私には無理。貴女にしか出来ない』

「やる……………やるよ！！私に出来ることならなんでもする！！」

なのはは叫び、立ち上がった。

『ユリアの譜歌を知ってるわね？』

なのははゆつくりと頷いた。ルークから聞いたことがある。確かそれを用いてティアとルークはヴァンに勝ったのだ。

『今からそれを歌うわ。それを、貴女の物にするの。譜歌には意味が込められている。それを、自分のものに変えるの。貴女だけの、譜歌に』

彼女はそう言うのとゆつくりと歌を口ずさみ始めた。とても綺麗な歌声だった。部屋全体まで響き渡るような、そんな声だった。

出来るだろうか？自分に。歌えるだろうか？

首を横に振り、なのはは最悪の考えをかき消した。

出来る出来ないじゃない、やるんだ。なにがあっても、ルークを助ける。

そのために、何でもすると決めたのだから。

やがて歌は消え、彼女はゆつくりとなのはを見つめた。

やるんだ。そう思い、なのはは意識を集中させた。

失敗は許されない。ここで歌わなければ、意味が無い。

歌は聴いた。後は、意味を込めるだけ。

『（私は暗い闇の中に居た。そこは誰も居ない暗い闇の底。そこで私は一人だった。そこで私は求めていた。温もりを。手に入れられなかった家族の優しさを。でも、どれだけ願っても手に入らなかった）』

歌い初めてからなのは驚いた。
歌詞が、すらすらと出てくるのだ。

『（そんなとき、貴方が現れた。貴方はとても暖かくて、闇の中にいる私を照らしてくれる太陽のようだった。貴方と居るだけで、心が温かくなった。触れ合うだけで、安心できた。やがて貴方は私の全てになった。ずっと欲しかった家族を与えてくれる存在になった）』

頭の中にルークとの思い出を描くだけで、言葉が出てくる。
それは、奇跡に近かった。
もう二度とこんなことは出来ない、と、確信できる。

『（でも、幸せは長くは続かなかった。貴方は戦いの中で何度も倒れた。何度も傷つき、何度も生死の境を彷徨った。どうして貴方だけが、そう何度も思った。何度も敵を憎んだ。でもそれ以上に何も出来なかった自分を呪った。そして今、貴方は死のうとしている。命を燃やし尽くそうとしている。私のせいで）』

歌は二番に入った。
合わせるように目の前の彼女が歌ってくれる。
彼女の旋律が、彼女の歌声が、なのはの旋律や歌声と交ざる。

『（私は弱いから、これからも貴方を縛り付けるかもしれない。こ

れからも貴方の足枷かもしれない。それでも、私は貴方と一緒に居たい。貴方が私を必要としてくれたように、私も貴方を必要としてる。貴方は私の全てだから。私の世界だから。だから、消えないで戻ってきて。また一緒に笑い合おう。幸せになろう。そういえば、この言葉はあんまり言わなかったね。貴方が戻ってきたら言うから、その前にこの歌に乗せて、言うね。貴方に届くように」

そして、歌は終わりを迎えようとする。

二人は心を込めて、しかし力強く歌い続けた。
ルークが助かるように、帰ってくるように。

その歌は、綺麗だった。

異なる旋律、異なる歌詞。

だがそれは融合し、透明感を増した。

部屋に響き渡った。

『（ルーク、ずっと、ずっと、愛してる）』

そして、歌は終わりを迎えた。

ゆっくりと歌い終えたなのは目の前の彼女を見た。

彼女は譜歌を歌った。

それも完璧な譜歌を。

そして、ルークが言ったことが本当ならそれが出来る人は一人しか居ない。

「……………ありがとうございます。ティアさん」

なのはの言葉に、彼女……ティア・グランツは微笑んだ。

『……………ルークと……………幸せにね……………』

・・・
』

そう一言言い残し、ティアはゆっくりと光になって消えた。後には、何も残らなかった。

まるでそこには誰も居なかったように。

だが、ティアは確実に居た。

それはなのはの心が覚えている。

ふとなのはは自分の体が蒼く光ってるのを感じた。
なのはだけではない。

彼女の目の前に居るルークも、蒼く輝いている。

そして次の瞬間、なのはは信じられないものを見た。

ルークが負った痛々しい傷が、消えていく。

苦しそうに歪んでいた顔は安らかになった。

なのはは訳が分からなかった。

だが、一つだけ分かっていることがある。

奇跡が起きて、ルークは消えない。

「あ……………あ……………」

ポロポロと涙を流しながらなのははルークの頬を撫でた。

とても、暖かい。

それは、生きている証。

そして、なのはの願いが叶った証だった。

扉が、音を立てて開く。

慌てたようにはやて達が中に入ってきた。

「なのはちゃん！！さっきの歌声はなのはちゃんのか！？部屋の中

に入れなかつたんや・・・・・・・・けど・・・・・・・・」

早口で捲し立てたはやてはなのはとルークを見て絶句した。
ルークの傷が回復しているのだ。
いや、最早傷一つ見受けられない。

「ど、どいてください!!」

はやて達の後ろで見ていたシャルマルが声を張り上げた。
ルークの医療器具を外し、その体を調べる。
やがてシャルマルは目を見開いた。

「そんな・・・・・・・・ありえない・・・・・・・・完治な
んてものじゃないわ・・・・・・・・怪我したことそのものが嘘みた
い・・・・・・・・」

「一体何をしたのなのは？歌が聞こえてただけど・・・・・・・・」
「」

フェイトが不思議そうな顔をしながらなのはを見た。
他のメンバーも同じようになのはを見つめている。
溢れる涙を拭い、なのはは微笑んだ。

そしてこのときの笑顔は、フェイト達が今まで見た中で一番綺麗な
微笑みだった。

『
想いが、
奇跡を起こしたんだよ
』

六課の隊舎、そこで異端の焰は、奇跡的な生還を果たしたのである。

ルークside

眩しい。そう思いながら、俺はゆっくりと目を開けた。
目の前に広がったのは、真っ白な天井だった。

俺はこの光景を何度も見ている。聖王教会の病院だろう。そのままぼーっとしていると、歌が聞こえた。

聞いたことのある旋律。だが、歌詞も、歌声も、違った。そして、その歌を誰が歌っているのかは、明らかだった。

首を動かし、その姿を探す。彼女は、少し離れたところで窓を開けて歌を歌っていた。

どうして彼女がこの歌を知っているのか、それは分からない。

だが、そんなことはどうでもいい。もう一度、彼女に出会えたのだから。

彼女が、ゆっくりとこっちを見た。ベッドから起き上がっている俺を見て、なのははゆっくりと微笑んだ。

旧い結晶と無限の欲望が集い交わる地

死せる王の下、聖地より彼の翼が蘇る

死者達は踊り、中つ大地の法の塔は虚しく焼け落ち

それを先駆けに数多の海を守る法の船は碎け落ちる

星と月は激突し、星は月の手に落ちる

太陽は星を救い、月『と共に』消えるだろう

『星は太陽を願い、涙は風に乗る』

『かくして世界は繋がり、歌により、太陽は舞い戻るだろう』

後にJS事件と呼ばれるこの事件はこうして幕を下ろした。

だが、後の時代。この事件は一部の者の間で別の形で例えられることにもなる。

『星と太陽の帰還』と。

「ルークの兄貴！！準備終わりましたか？長いですよ。．．．．．
 ．．．あ、それともルークの旦那って呼んだほうがいいですかね？」

大きな音を立てて扉を開けたヴァイスは、その向こうにいる朱色の
 髪 of 男性に向かって親しげに話しかける。

白いタキシードに身を包んだ男性はここが教会ということもあり、
 新郎であることが容易に想像できた。

その本人であるルークは、自身の服装を微妙な表情で見つめながら
 振り返った。

「いや．．．．．絶対に似合わないって．．．．．
 ．．．．．あと旦那はダメだ」

「いやいや、似合ってますよ！！あ、あれですか？旦那と呼んでい
 いのは一人だけだみたいなの？」

ヴァイスの言葉に、ルークは息を吐きながら頭を抑えた。

「．．．．．もう何も言わないよ」

その仕草のかっこよさに、ヴァイスが若干嫉妬したのを彼は知らない。
 い。

(似合いすぎなんですよ……………)

袖をしつこく気にするルークをジト目で見ながら、ヴァイスは内心で悪態をついた。

ルーク自身は自分の格好に自信が無いようだが、ヴァイスからすれば似合っていることこの上ない。

むしろ彼が似合わなかったら世界中の男……ヴァイスも含む……は似合わなくなってしまう。

町の女性100人に聞いたら100人が似合うと言いそうなのに、当の本人はさつきからこの調子である。

正直、苛々することこの上ない。

まあ彼の場合はたった二人に似合っていると云って貰えばいいので気持ちは分かる。

だが、理解はしていても受け入れることは到底出来なかった。

(いいですね幸せで。少しぐらい分けて欲しいもんですよ……………)

ため息を吐いて、依然として袖を気にしているルークの腕を掴む。

「ほらルークの兄貴、行きますよ!!!新婦見なきゃダメじゃないっすか!!!」

「お、おい待てよヴァイス!!!」

「もう十分待ちました!!!」

くだらない口論を繰り返しながら、二人は新郎の待合室から外に出た。

ルークを引きずりながら出たところで、ヴァイスの目の前に一人の少年が現れた。

黒い服を着て、蝶ネクタイを結んでいる。その目は凛々しく、先日
の戦いで少し成長したようだった。

「あ、ルークさん！！探しましたよ！！」

「エリオじゃないか。どうしたんだ？」

「どうしたじゃないですよ。あまりにも来るのが遅いので呼びに来
たんです」

いつもの調子で聞いてきたルークにエリオは呆れた様に答えた。

彼はここが教会だという事が分かつてるのだろうか？

それにしてもいつもの様に軽い調子な気がする。だが、そうしたエ
リオの疑問はすぐに解決された。

「ごめんなエリオ。ルークの兄貴が恥ずかしいから出たくないって
言ってるさ」

「なっ！？恥ずかしいなんて言っていないだろ！！俺はただ似合っ
てるかどうか不安だっただけで・・・」

「はいはい。じゃあそういうことにしますね」

「聞けよ！！」

目の前で繰り広げられたルークとヴァイスのやり取りを聞いて、エ
リオは目を丸くした。

確かに、よく見てみるとルークの表情が硬いように見える。

どうやらしつかりと緊張しているようだ。それにヴァイスの話から、身なりを気にしていたことも伺えた。

それは、結婚前の、本当に普通の人のように思えた。

カーレル――正確にはミクトランだが――と戦った後、エリオはルークの捉え方を変えた。

勿論、彼がエリオにとって超えたい相手であることは変わらない。

ただ、エリオはルークを超人とは見なさなくなった。

彼も人間だ。泣き、笑い、怪我をする。自分と変わらない、人間だ。好敵手ではない。弟子として、ルークから様々なことを教わっている。

それが、エリオが選んだ道だった。少なくともルークに着いていけば間違えは無い。

彼は同じ人間なのに、誰よりも強いからだから。

それはルークやなのはがよく口にする『想い』の力なのだろう。いつか自分にも見つかるだろうか。『想い』を力に変えられるような、そんな相手が。

そんなことを思いながら、エリオはルークと共に歩き始めた。

「ルークさん!!」

新婦の部屋に向かう途中で、ルークは後ろから声をかけられた。

三人が殆ど同時に振り返ると、そこにはドレスに身を包んだスバルとティアナが駆け寄ってきていた。

「ルークさん、おめでとうございます!! ついに結婚なんですね!!」

ルークの目の前で立ち止まったティアナが微笑みながらそう言った。ありがとぅと一言返すとルークはティアナの隣に立つスバルを見つめた。

テンションが上がっているのが、はたから見ても分かった。

「ああ!! この時を待っていました!! ついに結婚ですね!! すごく羨ましいです!!」

「スバル、うるさい」

「痛い!!」

早口で興奮気味に捲くし立てたスバルはティアナにチョップを食らい、頭を抑えた。

彼女の口から出たオーバーなリアクションに、その場の全員は笑いあった。

こんな時間を迎えられることを、ルークは幸せに思った。

「じゃあ行きましょう!!」

ティアナの声で、五人は歩き始めた。

前を談話しながら歩く三人を見ながら、ティアナとスバルは何も言わずについていった。

ルークから、様々なことを教わった。勿論通常の訓練ではルークはエリオの教官だ。

だが、彼らがルークから教わったものは強さとか、そんなものではない。

それは、人が持てる無限の可能性だった。そこには凡人も天才も、戦闘機人もクローンも関係ない。

それを、ルークは身を呈してティアナとスバルに教えたのだ。

例え凡人でも、天才を超えられると、例え戦闘機人でも誰よりも幸せになれると。

そして、それに必要なものを彼らは知っている。

だが、それを手に入れられるかどうかは自分達次第だ。

そんなことを思いながら、二人は前の三人、正確にはその真ん中を歩くルークをじっと見つめた。

不意に二人はお互いに目を合わせ、そして微笑んだ。

新婦控え室。そこで新婦の手伝いをしていたキャラはその美しさに言葉を失っていた。
勿論、普段から彼女は綺麗だ。凛々しく、その目から強い意志が消えることはない。

「完璧やな!!」

キャロと同じように準備を手伝っていたはやてが声を張り上げる。
その横に立つフェイトも満足そうに頷いた。

扉がノックされる。

フェイトは扉の方を向くと、どうぞと言った。

音を立てて扉が開き、白のタキシードに身を包んだルークが中に入ってきた。

格好良い……………

キャロはただそう思った。

勿論新婦と同じでルークも普段から格好いいのだが、やはり今日は輝いて見える。

当のルークは、新婦を見ると、微笑んだ。

本当に大切な物を見るように、その目はとても暖かい。

「凄く綺麗だよ……………なのは」

最愛の人からの最大級の誉め言葉に新婦――なのはは顔を綻ばせる。

見ているこっちが幸せになれそうな笑顔だ。

「ありがとう」

二人は微笑み合っていた。それを見て、キャロは胸が苦しくなった。
気づいてしまったのはいつの頃だろうか？

ルークへの愛情を、彼女は意識してしまった。

一度は敬慕として無理矢理封印した感情が、時が経つことで解放されてしまった。

そして、その時には全てが遅すぎた。

ルークの隣にはなのはが居た。

そして二人は深く愛し合っていた。

数々の窮地は、彼らの結び付きを固いものにした。

割り込む隙など無いくらい、それ自体が嫌悪されるくらい、固かった。

キャラは明言出来る。

彼らは離れることはない。

誰も、どんな物も、その絆を壊せない。

キャラの初恋は、自覚したときには既に終わっていたのだ。

「・・・・・・・・・・幸せに・・・・・・・・・・なつてく
ださいね・・・・・・・・・・」

小さく呟かれた言葉を聞いた者は居なかった。

だが、キャラの視線はまっすぐとなのはに向かっていた。

眩しいほど綺麗な新婦へと。

いつか自分も彼女みたいに綺麗になれるだろうか？

輝かせてくれる相手が現れるだろうか？

予想もつかない未来に期待を寄せて、キャラは微笑んだ。

それは自分次第だ。

木漏れ日が射し込む部屋。その中でキャラの新たなスタートを切ろうとしていた。

教会の外には花が咲いている。

とても綺麗な花が、憎らしいくらいに。

それをなんとなく眺めていると、誰かが隣に来た。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ついに、この日が来たな」

顔だけをそちらに向け、再び花に視線を向ける。

「・・・・・・・・・・・・・・・・そうだな。なのはとルークにとって、一番幸せな日だ」

ここに来る前に、ヴィータはなのはの部屋に挨拶をしに行った。
純白のドレスに身を包んだ彼女は、とても綺麗だった。

「実を言つとな、私は危惧していたんだ。主達は幸せになれるのかと」

不意に、シグナムが呟いた。

彼女もなのはの姿を見て、言葉を失っていた。

ヴィータと同じように、思うところがあつたのだろう。

「主はやてやテストロッサ、勿論高町も女性としてはかなり高いレベルだ。容姿も性格もな。だが、彼女達は仕事に生きていた。そんな彼女達が幸せになれるのか、心配だった。だが・・・・・・・・・・」

シグナムが言ったことはヴィータも思っていたことだったが、その不安はこの短期間で解決されたのだ。少なくとも、一人は。

「高町は幸せになった。仕事に生きながらも、アイツは大切な者を見つけた。全てを擲つても守りたい者達を。驚いたよ。あんなに輝いて見えるものなのだ・・・・・・・・・・」

「そうだな。アタシ達は軽く見たのかもしれない。『想い』の力を。でも、今回のことで六課の皆は変わった。はやてやフェイトが結婚すんのも案外すぐかもしれないぞ」

勿論彼女達の中ではルークへの恋慕は消えていないだろう。だが、きっかけは生まれた筈だ。幸せになつてほしい。そう思う。

それに、それは彼女達だけに言えたことではない。

「スバルやティアナやキャラ、それにアタシ達だって幸せになれるんだ」

この短期間で随分と護るものが増えた。幸せにしたいと願う相手が増えた。だが、自分も幸せになつていいのではないか。

そんな想いが、ヴィータの中に生まれた。

「私達は騎士だぞ？そんなこと……」

「関係ねえよ」

思った通りのシグナムの言葉を、ヴィータはぱつぱりと切った。
彼女は花に目を遣ったまま、不敵に笑った。

「魔法生命体だからとか、そんなことは関係ねえ。現になのは達は証明したじゃねえか。レプリカだろうが、クローンだろうが、人と同じくらい幸せになれるんだってな。だったら、戦闘機人だろうが、魔法生命体だろうが、幸せになれる筈だぜ」

「……………そうだな」

ヴィータの言葉にシグナムは一旦目を瞑り、そして微笑んだ。

彼女達は、人間になりたかった。

怪我をしたらすぐには治らない、そんな有限な人間に憧れていた。
だが、ルーク達はそれを土台から破壊したのだ。

ゆっくりと、だが確実に、二人の騎士の人生は変化し始めた。

扉が開き、その向こうから新婦が入ってくる。

その腕は父親である高町士郎と組まれていた。

なのはは入ってきたときから部屋の奥だけを見つめていた。

そこには、白いタキシードに身を包んだルークが居た。

彼はなのはもなのはをじっと見つめている。

優しく微笑みながら。

名残惜しそうにしながら、士郎はなのはと離れた。

だがその目には優しさがこもっている。

分かっていたのだろう。いつかこんな日が来ると。

よく結婚を許したな、とフエイトとはやては思った。

ルークは両親が居ない。しかもクローン体である。

勿論二人の中でルークはそんなこと関係ないくらい立派な人間である。

だが、なのはの家族はそのことを知らない筈だ。

なのはから聞いた限りではルークと剣術の試合をして負けたのが認

めた理由らしい。

高町家に行つてすぐに連れてかれたルークは、剣術の試合で恭也に圧勝したらしい。

その後道場に割り込んできた士郎もなんとか撃退したようだ。

親友がのろけ話同然でそのときのルークの活躍を述べるのだから真実なのだろう。

だが、フェイトとはやては納得いかなかった。

二人はなのはと幼い頃からの知り合いだ。

勿論恭也のことと士郎のことも知っている。

だからこそ納得できなかった。

あそこまでののはを溺愛していた二人が一度負けただけで認めただ。

二人は知らない。恭也と士郎が試合の結果に納得がいかに夜にルークが寝ているところを奇襲したことを。

抵抗したルークと戦闘をしている内に音に驚いてなのはが駆けつけたことを。

そして状況を見たなのはがミクトランに向けた殺気以上の殺気をもつて二人を殲滅したことを。

家が半壊し、修羅となった桃子が君臨し、原因が士郎と恭也にあることを知ったことを。

そして高町家の女性陣によって結婚が決まったということも。

ちなみにそのときの状況をルークは明確に記憶しており、なのはを絶対に怒らせないようにしようと心に誓ったらしい。

かくして結婚騒動は二人の魔王降臨により終結したのだが、その事をフェイトとはやては知る由もなかったのである。

気がつけば、なのはとルークは並び立ち、神父の声に耳を傾けていた。

しばらく神父が何かを言ってから、二人は向き合い、ルークはなの

はのヴェールを外した。

露になったなのは、とても綺麗だった。輝いているようだった。ついにここまで来たのだ。どれだけこの時間を待ちわびたことか。二人はそう思い、お互いに笑みを溢した。これからも二人を困難が襲うだろう。

だが、彼らなら大丈夫だ。彼らの絆はとても強い。それに、頼れる友人が居るのだから。

自分で思っ若干恥ずかしくなったフェイトは視線をなのはから外した。

本当に、綺麗だった。

それが二人の抱いた感想だった。

いつか自分も彼女みたいに輝けるだろうか？

ルーク以上に良い人を見つけて、あのウェディングドレスを着れるだろうか？

そんなことを思いながら、二人は式の進行を見つめていた。

二人の中で、何かが変わり始めていた。

ルークside

結婚式そのものは何の問題も無くスムーズに終了した。

最後になのはの投げたブーケを手にしたのはフェイトでもはやてでも、ましては六課メンバーではなく、まさかのヴィヴィオであった。六課メンバーは絶望したような顔をしていたが、所詮は迷信だ。

信憑性など皆無である。だから気にすることなど無いのだ。

気にすることは無い。所詮迷信だ。だからヴィヴィオがああ若さで嫁に行くなど絶対に無い。

あつてたまるものか。言い寄る虫は全部俺がハロルドで切り裂いてやる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・ヴィヴィオに本当に好きな人が出来たら、認めてあげてよ？」

そのような俺の心情を分かっていたのか、式の後に言われたのは言葉に、俺は返事できなかった。

確かにヴィヴィオに本当に大切な人、うぬぼれかもしれないが、なのはにとつての俺みたいな人が現れたら、認めようと思う。

でもそれは今すぐじゃない。もつとヴィヴィオが大人になってからだ。

それまでは、俺やなのはがヴィヴィオを守ってみせる。

でも・・・・・・・・・・・・・・・・嫁に行つてほしくないなあ・・・・・・・・・・

しみじみとそんなことを思いながら、俺は六課の皆とのパーティに出席していた。

俺は純白のタキシードから黒のスーツに着替えている。出来ればあ

れは二度と着たくない。

似合わないからだ。そんな俺の隣には幸せそうに笑顔を浮かべるのはが居る。

綺麗なウエディングドレスではなく普通のドレスを着ているが、それでもその美しさが損なわれるわけではない。

向かいに立つヴィヴィオもジュースを片手に微笑んでいる。

またこの三人で幸せに過ごせるときが来るなんて、思いもしなかった。

あの戦いからもう半年が経つ。

ミクランとの戦いの後、俺は瓦礫の中からはやて率いる六課に救出されたらしい。

当時の俺は怪我が酷く、聖王教会所属の病院に行く余裕も無いほどで、六課の医務室で治療をしたらしい。

そのときの六課の医務室には病院から取り寄せた多くの医療器具が鎮座していたそうだ。

だが、そのときの俺の傷は胸を大きく二回斬られ、体中はボロボロ、しかも腹には風穴が開いていてどう頑張っても助かる見込みが無かつたらしい。

聖王教会所属の病院が持つ医療器具を以ってしても、それは変わらなかった。

それでも俺は二日間、生死の境をさまようことが出来た。

それは一回も休むことなく治療術をかけてくれたハロルドと、正体不明の光のお陰らしい。

治療を担当したシャルマルが言うには、正体不明の光が二日間俺を生きさせたらしい。

そして二日後、なのはによる俺の蘇生に伴って光はまるで元から存在しなかったように消えたという。

だが俺は確信している。その光が何なのか。

あそこに居たのは三人だけだった。俺となのはと、そしてもう一人。

そして、なのはは両腕が使えなかった。なら、出来るのはもう一人しか居ない。

「・・・・・・・・・・・・・・・・最後の最後で助けられるとは思わなかったよ、ミクトラン」

「え？」

小さく呟いた俺に、なのはは不思議そうな顔で聞いてきた。

なんでもないと一言軽く告げ、俺は再び半年前に記憶を戻した。

まあとにかく、なにはともあれ彼のお陰で俺は死なずに済んだ。

それが、彼が出来た唯一の贖罪なのだろう。俺は彼のことを許すことはできない。

だが、覚えていることは出来る。たった一人の女性を想い続けた一人の男が居たことを。

そしてそいつは今、天国でその女性と一緒に俺達を見守っていることを。

幻想かもしれない。死後の事など、生きている俺たちには分からないのだから。

それでも、俺はそう信じたい。

そして、気になることはもう一つ。

結局、最後の最後で俺の手を持ち上げた蒼い手を、なのはは見なかったらしい。

なのはの話では不意に俺の腕が上がり、ミクトランを捉えたそうだがその前に、強く願ったそうだ。助けてと。その想いが届いたのだろうか？

それは分からない。だが、そんなことがあってもいいのではないかな？少なくとも俺はなのはが助けてくれたと信じている。

俺が『想い』の力でミクトランに勝ったように、なのはもまた『想い』の力で俺を助けてくれたのだと、信じている。

そして二日後、なのはが言うにはそのときに彼女はティアに会ったらしい。

会った「らしい」というのは、なのは自身もティアに会ったかどうかはつきりしないからだそうだ。

目の前に現れたティアは半透明で、あまり記憶に残っていないらしい。

だが、俺もなのはもそれがティアだったと思っている。

そうじゃなければ、なのはが大譜歌を歌えるはずが無いのだから。

こうして俺はティアとなのはの力によって再びこの世に戻ってくる事が出来たのである。

後遺症も無く、これから普通に生活が出来るらしい。

だが、なのははそういうわけにはいかなかった。

ミクトランに放ったクロスファイア・ゼロは、なのはから両腕の自由を奪った。

俺が完全に回復したのとは裏腹に、彼女は俺が動けるようになってからは両腕をまったく動かせなかった。

日常生活においても動かすことは出来たが、それはとても鈍い物で、なのはは困ったなあと苦笑いをしていた。

その笑みがあまりにも痛々しくて、俺は彼女を抱きしめた。

なのはが手を動かせないなら俺がなのはの手の代わりになる。だから笑ってくれ。

その日、なのはは泣いた。泣いて、全てを訴えた。

もう魔法が使えないこと。飛ぶことが出来ないこと、両腕が動かないこと。

それに対する自分の苦しみを、吐き出した。

それでも、彼女は俺を責めはしなかった。誰よりも俺のことが憎いはずなのに、彼女は笑ったのだ。

『色々なものを失った。でも大切なものだけは護れた』

その瞬間に、俺は決意をさらに堅いものにした。護ろう。どんなこ

とからも、なのはを護ろう。

たとえ世界が敵に回ったとしても、俺はなのはを護ってみせる。

それから、リハビリの毎日だった。

魔力が半分以下になったことと、両腕が満足に動かせないということからなのはは管理局を辞めた。

そのため時間はたっぷりあった。ヴィヴィオも、手伝ってくれた。リハビリの間。なのはは弱音一つ吐かなかった。二回目だねと笑っていた。

俺は、片時もなのはのそばから離れなかった。

結果半年という短い期間で、なのはは日常生活レベルなら両腕を動かせることが出来るようになった。

まだ動きはぎこちないが、それでも料理をしたり、モニターを弄ることも出来る。

とてもいいことだが、当の本人はもつと俺に料理を食べさせて欲しかったと残念そうにしていた。

飛び上がりそうなほど嬉しかったのは俺だけの秘密である。

俺はなのはが管理局を辞職した後、はやての推薦で入れ替わるように管理局に入った。

ミッド上空でのミクトランとの戦いを全世界が映像で見えていたらしく、是非とも欲しい人材だったらしい。

JS事件のゆりかごを破壊した功績者であることも幸いして、俺は管理局に入ることが出来た。

ただ俺がこの世界知識をまったく知らないこと、魔力がEランクであること、それにも関わらずかなりの実力を持つことから当時はどこに配属するかで意見が分かれたらしい。

どこかの隊に隊員として入隊させることも考えたらしいが、この時点で俺は市民にとって英雄のような存在であり、そのような配偶はいかなものかという意見も出たそうだ。

結局俺は時空管理局特務部隊長というアッシュとほとんど同じ役職に幸か不幸かなくなってしまった。

ちなみに部隊といっても構成員そのものは出来たばかりで俺だけであり、出勤条件もJS事件のような大きな事件が起きたときだけらしい。

まあ言ってしまうはかなり適当に片付けられたわけだが、それでも俺にとっては幸いだった。

JS事件のような大きな事件はまったく起きないし、普段は仕事をしつかりやれば定時には帰れる。

休日は普通に休みがもらえるので、家族と過ごせる時間が増える。

何よりも、一人しか居ない特務部隊なのに給料がシグナム達レベルらしい。

そのことをはやてに聞いてみると

「おそらく上はルーク君をどうしても離したくないんよ。敵に回ったら誰も止められんなあ………まあ態度は問題ないし、好青年やし、結構妥当な扱いやと思うで？」

と言われた。敵に回したくないって、化け物が俺は。

少なくとも歩くロストログアと呼ばれるはやてに言われるのだから相当だ。

まあこのように、俺は家族を余裕で養える給料を貰って日々を幸せに生きている。

なのはには専業主婦をやって貰っていて、家を守ってくれている。ヴィヴィオは学校に行かせることにした。聖王教会所属の学校で、友達も多く出来たようだ。

前々から計画していたので俺は剣術を、なのはは魔法を教えている。流石子供は成長が早いだけあって、ヴィヴィオはぐんぐん成長していった。

これは将来が楽しみだ。美人でとても強い、そして凜々しい女性に

なるに違いない。

父親としても鼻が高い。まあ反抗期という不安があるが、まあ大丈夫だろう。大丈夫だと信じたい。

ちなみに俺が前々から見ていた六課メンバーの過去に関する夢だが、それもハロルドが解明してくれた。

元居た世界から戻ってきたのはローレイの力である。だったら向かったのは何の力か？

それは俺の首から掛かっているこのレンズに違いなかった。

ハロルドが言うには、俺が寝ている間に、肉体ごと転移できないレンズは精神のみを過去に飛ばし、そして起きる前に俺の体に戻したのではないかということだった。

過去は同じ世界なのでレンズの力が働けたが、別の世界では送り出しても帰ってこれなかったのだろう。

ハロルドの推測はあくまで推測だ。だが、完璧なように思えた。

ありがとうな、とレンズに触れると、一瞬だが光を放った気がした。

「さて、それではここでルークさんとなのはさんから私達に贈り物があるそうです。ステージに上がってもらいましょう」

パーティの進行具合を見たグリフィスはマイクスタンドの前に立ち、声高に宣言した。

計画を聞いていないので驚いているはやて達を尻目に、俺達はステージに続く階段に足をかけた。

振り返ると、ヴィヴィオがニコニコと微笑んでいる。

同じように俺も彼女に笑いかけ、ステージの上にあがった。

男の局員さんが大きなピアノとマイクスタンドを持ってきた。

マイクスタンドを中央に、ピアノを少し奥に配置する。

俺となのはは目を合わせると、ゆっくりと頷いた。

俺がピアノに座り、なのはがスタンドの前に立つ。鍵盤を幾つか押

し、音を確認した後、俺はこちらに視線を向けていたのはに頷いた。

振り返り、なのは大きく息を吸う。

「皆さん。今日は私達の結婚式に参加してくださってありがとうございます。ございました！それに六課の皆さんでこんなに盛大なパーティーも開いていただいて、とても嬉しいです！」

「気にすることあらへんよー！！」

出された酒が既に回ってるのか、顔を赤くしながらはやては叫び、手をブンブンと振った。

完全に酔っている。それをなのはも分かっているのか、手を振って小声でありがとうと告げた。

「皆さんにはこの一年間お世話になりました。機動六課そのものはもうすぐ終了ですが、私はここでの生活を忘れません。だから、皆さんに感謝の気持ちをこめて、私達から贈り物をしたいと思います！聞いてください！」

聞いてくださいという言葉ではやて達は目を輝かせた。

約二ヶ月。なのはの腕が動くようになってから俺達は練習を重ねた。まさかこんなところで元の世界での経験が活かせるなど思っていなかった。

部屋の照明が落ち、ホール全体が静寂に染まる。

そしてゆっくりと、なのはは歌い始めた。

『（それは、短い期間だった。その短い期間でも、私にとっては忘れられない時間だった。ありがとうフェイトちゃん。私は知ってるよ。フェイトちゃんが私を応援してくれたこと、なんとか力になる

うと頑張ってくれた事、それでも力になれなくて自らの無力を嘆いたこと。でも、私はフェイトちゃんが無力だなんて思わない。フェイトちゃんは、居てくれるだけで私に幸せをくれるんだ。だからこれから、親友として一緒に過ごしていこうね」

なのははフェイトをじっと見つめていた。

それは、まったく同じ旋律だった。歌詞も同じだった。

だが、そこに込められた意味はまったく違うものだった。

少なくともなのはが俺のためだけに歌ってくれた歌とは違うように思えた。

「（ありがとうはやてちゃん。実を言うと私は知ってたんだ。はやてちゃんが色々と裏でいけないことをしてるって。そしてそれが私やルークの為だって。ううん、気づいてた、の方が正しいかな。そしてその度にはやてちゃんは全ての罪を受け入れてた。人知れず苦しんでいた。ありがとうはやてちゃん。はやてちゃんのお陰で私は幸せになれた。だから、はやてちゃんはもう私達の為に苦しまなくていいんだよ。もう幸せになっていいんだよ。そのためなら私も協力するから……だから……ありがとうはやてちゃん。私達は最高の上司を持てて幸せでした）」

そしてゆつくりとなのはの視線ははやてへと移った。

その目には感謝の気持ちが生かんでいる。

なのはの歌声が、部屋中に響き渡る。

恥ずかしいからと言う理由であまり多く聞いたことは無いが、はっきりと言える。

なのはの歌声は綺麗だ。透き通るように心に響いてくる。

「（エリオ、キャラ、スバル、ティアナ、皆強くなったね。本当は色々なことを教えたかった。でも、それももう叶わないね。ごめん

ね、こんなにダメな教官で。でも、でも言葉で皆に伝えることは出来る。今までどおりの訓練じゃないけど、それでも皆の成長に少しでも貢献していこうと思う。だから、皆は私みたいにならないように、一人前の魔導士になるんだよ。大丈夫。貴方達は強い。私が胸を張ってそう言えよ。」

フォワード四人に向けられた視線はとてもすまなそうなものだったが四人は首を横に振って微笑んだ。四人とも分かっているのだろう。なのはが歌に込めた思いを。

そして、歌は二番に入る。

それと同時に俺のピアノの演奏が始まり、歌に旋律が吹き込まれる。俺のピアノとなのはの歌声、それらが混ざり合っているようだった。そして最後になのはが見たのは、娘のヴィヴィオだった。

「（ヴィヴィオ、ごめんね。ヴィヴィオを一人にしないって約束したのに、何度も破っちゃったね。悪いママだね。でも……それでも私はヴィヴィオが好きだよ。血の繋がりだとか、クローンだとか関係ない。ヴィヴィオはヴィヴィオだもん。私とルークのたった一人の大切な、とても大切な娘だもん。だからこれからは胸を張って生きていいんだよ。聖王のクローンとか、そんなの関係ない。ヴィヴィオはヴィヴィオとして生きて。これからはヴィヴィオの時代だから。だから、これから幸せに生きていこう。一人も欠けることなく、一緒に）」

そして歌は終わりを迎える。

綺麗な声で、消えていくように、終わる。

なのはが歌え終えた後、誰も話すものはいなかった。

誰も、視線を動かすことは無かった。理由は考えるまでも無い。

たった一つの照明に照らされたなのはあまりにも綺麗だった。

そこだけ時が止まってしまったような、そんな刹那的な美だった。

そこから目をそらす事など、その場の誰も出来なかった。

もしも女神が居るのなら、その女神さえも彼女に嫉妬するだろう。
そんな圧倒的な、美。

やがて拍手が鳴り響き、それは波のように広がり、大きくなった。

それは、絶えることが無かった。いつまでも、いつまでも響いていた。

12・4（前書き）

さて、この回で「異端の焰達」は最終回になります。

今までありがとうございました！！

この後は10万、20万、30万pv記念小説を書くのでそちらもお楽しみに！！

3年後

「行ってきます!!」

早朝。元気な声で一人の少女が金の髪を揺らしながら家を飛び出した。

閑静な住宅街に立つ、広い家の庭を駆け抜け、門で待つ二人の少女に彼女は笑いかけた。

「リオ!! コロナ!!」

聞こえた声に話していた二人は微笑み、手を振った。
金髪の少女もそれに呼応するように手を振る。

「ごめんね遅くなって」

「大丈夫だよ!! 行こう!!」

「うん!!」

三人は微笑み合い、他愛ない話をしながら、通学路を歩き始めた。
そんな三人を遠くから見つめながら、窓のガラス越しに、亜麻色の髪的女性は優しく微笑んだ。

「そついえば今日はどうするの？帰りにどっか寄つてく？」

リオと呼ばれた黒髪の少女の質問に、ヴィヴィオは指を顎に当てて考えるそぶりをした。

仕草の何から何まで母親にそっくりである。

「うーん。今日はあんまり遅くまで遊べないかな。ルークパパと鍛練する約束だから」

「ああ、そつか。いいなあ、私も見て貰おうかな？」

両手を頭の後ろに回し、心底羨ましそうに言ったりリオにコロナは苦笑いした。

「リオは剣使わないからダメじゃないかな？」

「でも戦い方だけでも見てもらいたいかなって」

「今度ルークパパに聞いてみるね」

「あ、じゃあ私はなのはさんをお願いしようかな」

「なのはママなら喜んで受けってくれると思うよ」

通学路に三人の笑い声がこだまする。

それは、いつも通りの日常。

朱の英雄が守った、平和な毎日の一ページだった。

日が赤く染まつた夕暮れ。

学校帰りに遊び終えた三人はとある岡の上に居た。

三人の先頭に立つヴィヴィオの前には、一つの墓があった。その下には誰も眠っていない、墓が。

ヴィヴィオは摘んできた花を一輪、墓の前に置いた。

紙で包装された花束が、同じように置かれている。

置かれてからあまり時間は経っていないようだ。

優しいな目で墓を見つめていたヴィヴィオはゆっくりと立ち上がった。

「たまにここに来るけど、これって誰のお墓なの？」

「ヴィヴィオの両親はなのはさんとルークさんだから．．．．．」

リオとコロナの言葉にヴィヴィオはゆっくりと振り返った。
その顔には優しい笑みが浮かんでいる。

「恩人．．．．．かな？パパと戦って、でも死ぬ直前にパパを助けてくれて、私達の幸せを護ってくれた人」

ヴィヴィオの言葉に二人は何も言えなかった。
ルークと対等に渡り合う人間が居たことに対する驚きもそうだが、
なにより深く追及すべきではないと思ったから。

「．．．．．それじゃあ帰ろうか」

ヴィヴィオの言葉に二人は頷き、踵を返した。

二人に着いていく途中でヴィヴィオは立ち止まり、振り返った。

墓の前に、幸せそうに笑う金髪の男性と、その隣で寄り添う綺麗な女性を見た気がした。

それは、幻だったのだろう。

次の瞬間には消えてしまったのだから。
だが、ヴィヴィオは信じている。

天国で彼らが同じように笑っていると。

日もすっかり暮れた夜。とある民家の広い庭では魔法戦が繰り広げられていた。

白い閃光が煌めき、轟音を立てる。

複数の閃光はそれぞれバラバラの方向に飛来し、ターゲットに命中した。

「うん！凄くいい感じだよヴィヴィオ！」

それをヴィヴィオの少し後ろで見ていた亜麻色の髪の女性――なのははニコニコしながらそう言った。

「ホント！？」

なのはの言葉にヴィヴィオは目を輝かせる。その右手には、なのはの持つレイジングハートとは違う形の杖が握られていた。

「うん！訓練用のデバイスでここまで出来れば十分だよ！」

そこまで言うてから、でもとなのはは続けた。

「まだ決めないの？剣にするか、砲撃にするか」

ヴィヴィオは現在二つの武器を使役できる。

母親であるのはから教わっている魔法、それも砲撃の魔法。

そして父親であるルークから教わっている剣術。

彼女自身はどちらを極めようか迷ってるらしいが、なのはは剣術の方を薦めた。

ヴィヴィオは元々学者タイプである。

少ないという訳ではないが、魔力の値が昔のなののようにずば抜けている訳ではない。

勿論中衛の砲撃魔法使いとしてもやっていけるとは思えるが、どちらかというと魔力を必要としない剣術の方が得策だった。

だがヴィヴィオはその二つを選んだ。理由は一つだけである。

「うん。もう少し頑張りたんだ。なのはママが教えてくれた魔法と、ルークパパが教えてくれた剣術、両方頑張りたから。二人の娘として。少しワガママな気もするけどね」

苦笑いしたヴィヴィオになのははゆっくりと首を横に振った。

ワガママなものか。たった二人の両親から技を受け継ぐ。

それが悪い事である筈が無いのだ。教えよう。この娘に、全てを。

なのはは再び決心を顯にした。ヴィヴィオはまだ幼い。

失敗することも、落ち込むこともあるかもしれない。それでも、見守っていいところ。

ヴィヴィオが十分に強くなるまで、育て上げよう。

「お、終わっちまったか？」

低い声が、響いた。

目を輝かせながらヴィヴィオとなのはは振り返った。

そして視線の先、家の中からいつもの戦闘服に着替えたルークを見つめ、微笑んだ。

「うん。魔法訓練はここまで。次はルークの番だよ」

「よろしくお願いします。パパ」

「ああ、任せとけ」

なのはは一旦ヴィヴィオから離れ、少し離れたところにある長椅子に腰掛けた。

レイジングハートを取り出し、浮かび上がらせる。

「レイジングハート。結界を強めて」

>>All right<<

電子音が響き、先程まで庭を覆っていた白い結界に、新たに青い結界が覆いかぶさる。

高町家の庭は広い。スペースだけなら訓練するには十分だ。

それもこれもルークとなのは、二人で貯めたお金で購入したものである。

勿論周りにも住宅が多数存在する。先程も音や衝撃を吸収する結界を張っていたが、これからは強化する必要がある。

二人の訓練は指導ではなく模擬戦、云わば強大な力のぶつかり合いなのだから。

広がった結界を満足そうに見つめ、家の中にある時計を見る。離れたところにある時計は文字までは見えないが、その形からだいたい時間は把握できた。

「二人とも！！もうすぐ夕飯だからあんまり無茶しちゃダメだよ！！」

『はあーい！！』

なのはの言葉に、二人はまったく同じように答えた。まるで二人の子供がいるみたいで、なのははクスクスと笑った。背もたれに寄りかかり、対峙する二人を見つめる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・幸せだなあ・・・・・・・・・・・・・・・・」

その光景を見ながら、なのははポツリと呟いた。その声はあまりにも小さくて誰にも聞こえなかった。

「それじゃあいつも通り行くぞヴィヴィオ！！」

腰に付けた鞘から剣を抜き放ち、ルークは叫んだ。月光に下に晒されるは、異形の刀身、漆黒の刃、ソーディアン・ベルセリオス。

ルークの愛剣にして三年もの月日を共に過ごしてきた、云わば家族のようなものである。

『覚悟しなさいヴィヴィオ、厳しく行くわよ？』

限られた人にしか聞こえない声を聞き、ヴィヴィオは表情を改めた。真剣な表情になり、その目には闘志の炎が燃え上がる。

右手を広げ、目を瞑る。既に訓練用の杖は足元に置かれている。これから彼女が使うのは杖ではない。

掌から魔法陣が展開する。それはかつてなのはがルークのために覚えた魔法だった。

ルークは魔法が使えない。だからこそなのはが代わりをしていたのだが、ヴィヴィオは違う。

その魔法を会得することができる。

魔法陣から細長い何かが飛び出し、ヴィヴィオの手に収まる。

それを見ながら、ルークは不敵に笑った。油断など無い。

ヴィヴィオはまだ幼い。だが、底知れぬ強さを持っている。それはルークが一番良く分かっていた。

「行くよパパ!!」

余談だがヴィヴィオは学者タイプだ。

その身に莫大な量の魔力は残念ながら有さない。

だが、剣術を学ぶなら関係が無い。魔力を使うことが無いからだ。仮に使用したとしても身体能力の強化ぐらいだろう。その答えが、ここにある。

『覚悟するのはアンタのほうよ、ハロルド』

『言っじゃないベル』

まったく同じ声が二つ、闇夜にこだました。

だがそのどちらも、まったく違ふところから発せられたものだった。

一つはルークの持つソーディアン・ベルセリオスから。

そしてもう一つはヴィヴィオの手に握られた漆黒の剣、ルークの持つ剣と姿も形もまったく同じ剣から発せられていた。

ベルと呼ばれた剣を下段に構え、ヴィヴィオはルークの出方を伺った。

その眼光は鋭く、ルークをじっと見つめている。

三年前のあの日。はやて達が見つけたのはルークだけではなかった。ルークを護っていたハロルドの横にもう一本、血に塗られた剣が存在した。

その剣に注目が集まるのはルークが目覚めた後である。

ルークの持つハロルドとまったく同じ剣を手に入れたということで管理局はその剣を欲しがった。

だが、誰が持つてみてもそれは普通の剣と変わらなかった。

それは素質があるはずなのは達も、ハロルドのマスターであるルークも同じだった。

だが一人だけ例外が居た。それが、ヴィヴィオだった。

ただの剣としてルークが保護することになり、家に置かれた剣を持つてみたのが全ての始まりだった。

その瞬間に瞳のようなシャッターが開き、第二のハロルドが目を見ました。

そしてヴィヴィオは力を手に入れた。大好きな父と同じ、力を。

このときのヴィヴィオの喜びようを想像するのは容易い。

飛び上がったくらいなのだから。かくしてヴィヴィオは剣を手にした。

父親とまったく同じ剣を。そしてその日から、ヴィヴィオはルークに訓練を頼んだ。

全ては、強くなるために。父と母が安心出来るくらい強くなるために。

そして今、ヴィヴィオはここに居る。ハロルドとまったく同じ規制人格を持つ剣、通称『ベル』を手にして。

二人は同時に地面を蹴った。

一気に肉薄し、剣を振るう。

まったく同じ剣が鏡合わせのように激突し、音を立てる。

心底楽しそうに戦う二人を遠くから眺めながら、なのははその様子を見つめていた。

月明かりの下、幸せな家族の日常が、そこにはあった。

忘れてはいけない。この世界に何が起きているのかを。
ミクトランは人の形を取った。それはこの世界に同じ存在が共に存在することが出来ないからである。

だが、ミクトランの死後、例外が現れた。

ルークの持つ『ハロルド』とヴィヴィオの持つ『ベル』

名前こそ違えど、存在はまったく同じ、ハロルド・ベルセリオスである。

世界は乱れ始めている。原因も分からぬまま、変わり始めている。それに気づいているのは、今のところは二人だけ。

だが彼らもその変化の全てを知るわけではない。彼らが思っているよりも、世界の変化は激しいのだから。

そしてもう一つ忘れてはいけない。歴史は繰り返すということを。かつて朱の英雄はこの世界に降臨し、世界を救った。

世界を繋げるほどの力を持って、一度消えた彼は蘇った。そして幸せになった。

歴史は繰り返す。“朱の剣士がこの世界に来たように”

「・・・・・・・・・・・・ここは・・・・・・・・・・どこだ？」

岩で出来た広い空間。そこに少年は居た。

何故彼がここにいいのか、彼自身は知る由も無い。

彼は自分の意志でこの場所に来たわけではないのだから。

「僕は確かに消えた筈・・・・・・・・・・どうして」

自らの掌を見つめ、少年は呟く。

だが、そんなことをしても答えが帰ってくるわけは無かった。

『目覚めたか』

声が響き、少年の目の前に、巨大な何かが降臨した。

それは、人ではなかった。大きすぎる体に、異形の姿。

それは見方によっては魔物にも、機械にも、悪魔にも、そして神に

も見えた。

「お前は・・・・・・・・誰だ。どうして僕は生きている」

少年の問いにその者は答えなかった。

ただじつと少年を見つめていた。やがてその者は微笑むと、ゆっくりと告げた。

『私の名はマグナディウス。ジューダス、いやリオン・マグナスよ。もう一度だけ人生をやり直してみないか？世界の為ではなく、他ならぬお前自身の為に』

“そして黒の剣士もまた、この世界に降臨する”

12・4（後書き）

さて、これにて完結になります。

最後のは予告です。いつ書くか分かりませんが、

「魔法少女リリカルなのはvivid〜異端の黒い剣士〜」

に繋がります。まあ続編的なものがあるよということです。

次回作は既に決定しています。

ルシフェルさんその他多数の方の要望により活動報告で連載していた「電器少女リリカルパソ娘」（仮）を小説化していきたいとおもいます。

こちらはこちらで完全オリジナル作品となっていますので、見てくださると光栄です。

それでは次回作でまたお会いしましょう!!

番外編1：はやて「ルーク君を寝取りたいんやー！」 フェイト「やめたほうがいい

この番外編は、本編の真剣な雰囲気に関わりかかったような壊れ具合になっています。

形式はSS式なので地の文は殆どありません。

また時系列は未定でパラレルワールド的なものであること、最早ネタでしかないことをご了承ください。

それではどうぞ。

番外編1：はやて「ルーク君を寝取りたいんや!!」

フェイト「やめたほうがいい」

はやて「なんとかしてルーク君を寝取りたいんや!!」

フェイト「・・・・・・・・・・・・・・・・え?」

はやて「え?やない!!寝取るんや!!」

フェイト「ええ!?!だ、だって二人を見守るって・・・・・・・・・・
・・・・・・・・」

はやて「本編の私は綺麗過ぎるんや!!でもこの私は違う!!私は欲望に従順に生きるんや!!」

フェイト「それを世間では迷惑と言います。でもどうしてそんなことしようと思ったの?」

はやて「考えてみい!!毎日毎日イチャイチャイチャ、こんなの耐えられるかいな!!(バンバン)」

フェイト「はやて、うるさいから机を叩かないでよ・・・・・・・・
まあ、分からなくはないけど・・・・・・・・」

はやて「そやる!?!この前なんて三人一緒にお風呂入ったって惚気

られたんやで！？そんなの許せんやんか！？」

フェイト「お、お風呂って・・・・・・・・・・／／」

はやて「そやー！許せんやろ！？お風呂やで！？ひよつとしたら私達が一緒にルーク君と入れたかもしれないやー！だから寝取る！はい論破ー！反論は受け付けませんー！」

フェイト「いや、でもだからって寝取るのは・・・・・・・・・・」

はやて「部隊長命令です」

フェイト「まさかの職権乱用」

はやて「ここでは私がルールや」

フェイト「世間ではそれを自己中といいます」

はやて「ならフェイトちゃんは耐えられるんかいな！？あの砂糖地獄にー！」

フェイト「むむ・・・・・・・・・・た、確かに辛いかも・・・・・・・・・・」

はやて「別になのはちゃんを悲しませるわけやない。少し自重してもらっただけや」

フェイト「そ、それなら」

はやて「まあ寝取るけどな（ボソ）」

フェイト「はやて!?!どっちかって言うとそのちがメインだよね!」

はやて「聞いてたんかい(チツ)」

フェイト「わお、まさかの舌打ち」

はやて「まあとりあえずやってみるだけや。やってみるだけや」

フェイト「大事なことなので二回言いました、だね」

はやて「寝取るんや。寝取るんや」

フェイト「大事なこと以前に最低な発言だね」

はやて「ほな決定やな!!それじゃ行くで!!まずは仲間集めや!!(ダツシュ)」

フェイト「勝手に参加が決定した!?!」

フェイト「あ、ちょっとはやて!?!.....もう居ないし.....」

フェイト「.....あれ?これってなのはにはやてと一緒にO H A N A S H Iされるフラグじゃあ.....」

はやて「見つけたで！！シグナム！！」

シグナム「主？それにテストロツサも．．．．．ど
うかしましたか？」

フェイト「はやて、やっぱりやめようよ．．．．．」

はやて「ルーク君と一緒に風呂入りたくないか！？」

シグナム「．．．．．は？」

フェイト「話聞いてない．．．．．（ぐすん）」

はやて「だからルーク君と一緒に風呂入りたくないかって聞いと

るんや!~!」

シグナム「あ、主はやて、落ち着いて……」

はやて「『はい』か『いいえ』で答えんかい!!（クワツ）」

シグナム「ええ!~?」

シグナム（ま、まずい。ここで『はい』なんて言ったら間違いなく高町に殺される。だが騎士として主はやてに逆らうことは出来ない・
……）

フェイト「正直今のはやては主と思わなくていいと思うよ」

はやて「ちなみにフェイトちゃんは参加決定済みや」

フェイト「いつの間に!~?」

シグナム（ならここは乗っておくか? いやどうせ皆高町にやられるんだ。だったら参加しないほうが……）

はやて「タイムアップや!! 『はい』で決定しました!~!」

シグナム「ま、待ってください!~!」

はやて「遅いのが悪んや!~!」

シグナム「そんな横暴な……」

はやて「なら『はい』と言わんかい!~!」

シグナム「選択肢が二個あるようで一個しかない!？」

はやて「よし、次や!!（スタスタ）」

フェイト「・・・・・・・・・・・・・・・・シグナム・・・・・・・・・・
御愁傷様・・・・・・・・・・」

シグナム「・・・・・・・・・・桃色の閃光が目には浮かぶ・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・」

はやて「あとはヴィータでええか」

フェイト「そんな軽くていいんだ・・・・・・・・・・・・・・・・」

はやて「人が多いと情報が漏れるかもしれんからな」

シグナム「心底六課を信用してませんね・・・・・・・・・・・・・・・・」

はやて「綺麗な私は『せやけどこれはただの夢や』になったんや」

フェイト「長いね・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグナム「私達の命は残り短いかな・・・・・・・・・・・・・・・・」

フェイト「誰が上手く言えと」

シグナム「事実だ」

フェイト「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はやて「さてと、見つけたでヴィータ!!」

ヴィータ「はやて？」

はやて「さあ!!『はい』か『いいえ』で答えんかい!!」

ヴィータ「何が!？」

フエイト、シグナム「過程全部すつ飛ばした!？」

はやて「キーワードは『お風呂』や」

ヴィータ「え?風呂がどうかしたのか？」

はやて「お風呂やボケ!！」お』を付けんかい!！」

ヴィータ「ええ!？」

フエイト「理不尽だね……………」

はやて「さあ答えんかい!！」『はい』か『はい』どっちゃ!！」

シグナム「主はやて!！それでは両方肯定です!！」

はやて「さあどっちゃ!！」

フエイト「相変わらず話聞いてない」

ヴィータ「『はい』なんて言わねえぞ!！だいたいなんでそんな脅迫してみた……」

はやて「はい言った!！もう取り消し不可やで!！じゃあ行くで!！
(ダッシュ)」

フエイト、シグナム、ヴィータ「」

フエイト「しょ、小学生じゃないんだから……………」
……………」

ヴィータ「アタシ真剣にはやての騎士で後悔してる……」

シグナム「これで高町、ルークを除く隊長陣は全滅確定か。六課は滅んだな……ははっ……」

部隊長室

はやて「さて、作戦会議や。まずはどうやってなのはちゃんにバレずにルーク君とお風呂に入るかや」

フェイト「っていつかいつの間にか寝取るから一緒にお風呂に入るに変わってるね。まあそっちの方がいいけど」

はやて「フェイトちゃん!!お風呂や言ってるやる!!」

フェイト「私もちゃんと言ってるよね!?!」

はやて「まったく、これだからフェイトちゃんはダメなんや。ダメダメや。だから独身なんや」

フェイト「・・・・・・・・・・・・・・・・なんか無性にプラズマザンバー撃ちたいなあ・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグナム「お、落ち着けテストロッサ!」

はやて「ほらシグナム、早く意見出さんかい!!ホントに使えんなあ・・・・・・・・・・・・・・・・」

シグナム「(イラッ)レヴァンティン・・・・・・・・」

ヴィータ「落ち着けて二人とも・・・・・・・・」

はやて「ヴィータも何かないんか?胸がないから脳が発達してると思ったけど何も無かったんやね。はっ!!」

ヴィータ「(ピキピキ)アイゼン!!」

フェイト「さあてはやて?」

シグナム「覚悟は」

ヴィータ「いいよなあ？」

なのは「はやてちゃん、用事ってなに？」

シグナム、フェイト、ヴィータ「」

なのは「・・・・・・・・・・・・・・・・皆、何してるの？」

フェイト「バ、バババ、バルディシュの調子確かめてて・・・・・・・・
・・（あたふた）」

シグナム「わ、私も同じだ。なあヴィータ？（あせあせ）」

ヴィータ「そ、そうなんだよ！！（こくこく）」

なのは「ふーん？」

はやて「あ、なのはちゃんごめんな。この書類お願い出来るかな？」

なのは「あ、うん。全然大丈夫だよ」

はやて「ところでなのはちゃん、今日の夜の予定は？」

なのは「今日は早めに仕事片付けてルークとヴィヴィオと一緒に街に行くかな。どうして？」

はやて「いや、なんでもないんや。楽しんできてな」

なのは「うん。ありがと。じゃあね」

はやて「またなあ」

はやて「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はやて「さて、今の心境を聞こか」

シグナム、フェイト、ヴィータ「「羨ましい!!」」

はやて「ちなみになのはちゃんは今日の夜は三人で寝るんや。ルーク君に『抱きしめられながら』・・・・・・・・『抱きしめられながら』!!寝るんや!!大事な事なので二回言いました!!」

シグナム、フェイト、ヴィータ「「羨ましい!!大事なことなので二回・・・・・・・・」

はやて「じゃかしいわボケえ!!」

シグナム、フェイト、ヴィータ「「理不尽!!」」

はやて「ということで作戦や!!まず第一になのはちゃんを遠ざける!!そしてルーク君を私が極秘で作らせた温泉に一人で入れる!!」

フェイト「まさかの無駄遣い!!」

はやて「そして入ってるところに突入や!!」

フェイト「最早寝取るでもなんでもないよ!!目的が分からないよ

「!!」

はやて「そしてなのはちゃんの引き止め役はフェイトちゃん!!ルーク君を一人で温泉に入れるのは私の仕事や!!」

フェイト「チェンジを要求します!!」

はやて「だが断わる!!」

フェイト「」

はやて「シグナムとヴィータは待機や!!」

フェイト「チエ『却下!!』」

フェイト「私死んじやうよ!!」

はやて「これは聖戦や!!ジハードや!!」

フェイト「ただの神風特攻隊だよ!!しかも意味のない特攻だよ!!」

はやて「決行は今日の夜、三人が帰ってきてからや!!」

フェイト「お願いだから話を聞いて!!」

はやて「O H A N A S H I?」

フェイト「それは今から私がされるものだよ!!」

はやて「ほな解散!!」

フェイト「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フェイト「・・・・・・・・・・・・・・・・もうはやてとの
縁切ろう」

次回に続く!!

番外編1：はやて「ルーク君を寝取りたいんや!!」 ヴィヴィオ「ニコニ

はやて「さて、三人が待ちに出ている今が最後の作戦確認時間や。ちゃんとやることを確認するんやで?」

フェイト「私の場合は死刑内容の確認だけど……………」
「」

はやて「フェイトちゃん……………犠牲があるから世界が成り立つんや」

フェイト「少なくとも今言うことじゃないよね!？」

はやて「安心しい、骨は拾ったるわ」

フェイト「元々の原因ははやてだから!!」

はやて「めんどくさいけど拾うんや。感謝しい」

フェイト「これはあれだよね? やっちまっていいんだよね?」

はやて「さてさてそれではフェイトちゃんにはルーク君のお宝写真を……………」

フェイト「やります!-!」

シグナム、ヴィータ「変わり身早!？」
「」

はやて「気をつけるんや！！それを持って魔王とエンカウトすると殺されるで！！」

シグナム、ヴィータ「あながち嘘にも思えない！！」

フェイト「感想では狂ってるって言われてたからね。大丈夫！！見つからないようにする！！」

シグナム、ヴィータ「否定できないって辛い！！」

はやて「さて、それじゃあ作戦や。まずはルーク君を一人でお風呂に入れる。そしてシグナムとヴィータが先に入って捕まえておき、フェイトちゃんのはちゃんに殺されるんや」

フェイト「さ・い・ごー！！おかしいよねえ！？」

はやて「ちなみに私は後から入る。それでミッションコンプリートや！！」

フェイト「私は入れないの！？なにそのハイリスクノーリターン！！笑えないよ！！」

はやて「至ってまじめや」

フェイト「そこはふざけてほしかった！！」

はやて「いつだって私はまじめや！！（キラッ）」

フェイト「似合わない！！その年じゃ似合わないよはやて！！」

はやて「さて、フェイトちゃんからバルディッシュを回収……
……」

フェイト「すみませんでした！！バルディッシュが無かったら死んでしまいます！！」

はやて「どうせ死ぬんや」

フェイト「堪忍して！！」

はやて「さて、『冗談はこころ辺にして」

フェイト「冗談……（ホッ）」

はやて「まあ半分冗談なんやけど……」

フェイト「半分！？どこまでが半分！？」

はやて「バルディッシュの前までや」

フェイト「え？じゃ、じゃあなのは抑止役変えてくれるの？（キラキラ）」

はやて「そこまでが本気や」

フェイト「そんなこつたろうと思ってましたよ！！っていうかそれ私にとって最悪なパターンだよね！？」

はやて「人の不幸は蜜の味がするんや」

フェイト「ふざけないでよおおおおおおお!!」

はやて「真面目や!!」

フェイト「異議あり!!」

はやて「お、帰ってきたみたいやな。それじゃあ実行や!!」

フェイト「話を聞いてよ!!」

フェイト「……………今日が命日かあ……………」

フェイト「な、なのは……………」

なのは「ん？どうかしたフェイトちゃん？」

フェイト「ちょっと話があるんだけどいいかな？」

なのは「話？いいよ。じゃあ私の部屋に……………」

フェイト「で、出来れば食堂がいいかな……………」

なのは「そう？分かった。じゃあ行こうか」

食堂

なのは「それで……………話って何？」

フェイト「あのね……………実は……………」

ルーク「うわ！！シグナム！？ヴィータ！？なんでお前たち急に！？」

なのは「……………」

フェイト「……………」

フェイト「え、えつとね……………」

なのは「フェイトちゃん。早くしてくれないかな（黒笑）」

フェイト「ひい！-！」

フェイト（ま、まずいよ私のバカ！！はやてが作った温泉と食堂が意外に近かったなんて！！そして怖いよなのは！！）

フェイト「え、えつとねえ……………」

シグナム「おとなしく私達と一緒に風呂に入るのだ！！」

ヴィータ「そうだ！！もうこっちはヤケクソなんだよ！！」

ルーク「意味が分からん！！」

なのは「サテ……………ドウシテクレヨウカ……………」

フェイト「な、なのは落ち着いて！！」

なのは「オチツク？ナニソレオイシイノ？」

フェイト「た、食べれないけど落ち着いて！！」

なのは「フェイトちゃん……………」

フェイト「な、なのは？」

フェイト（な、なんだろう。元に戻ったけど体の全細胞が警告を発してる……………）

なのは「なるほど、フェイトちゃんもグルなんだね」

フェイト「こんなに早くバレた！？・・・・・・・・・・あつ」

なのは「O H A N A S H Iしようか」

フェイト「死刑宣告」

なのは「大丈夫。ちょっと痛いだけだから」

フェイト「ちよつとじゃなくて即死レベル」

なのは「フェイトちゃんに、滅びの光を。星よ集え、全てを撃ち抜く光となれ。貫け！閃光！」

フェイト「最早私が咎人扱い」

なのは「スターライト・・・・・・・・・・ブレイカー！！」

フェイト「こうなったら・・・・・・・・・・バルディッシュ！！」

>> s o r r y <<

フェイト「えっ！？」

バーン↑食堂半壊

フェイト「まさかバルディッシュにまで見放されるなんて・・・・・・・・・・」

なのは「さあてシグナムさんにヴィータちゃん。死刑（O H A N A S H I）の時間だよ・・・・・・・・・・」

フエイト「それ、心の声と本物の声が入れ替わってる……………
(ガクッ)」

シグナム「た、高町！？なぜここに！？」

ヴィータ「フエイトが足止めしてるんじゃないのか！？」

なのは「さあ二人とも……………イノリハオワッタ？」

シグナム「ま、まで高町！！これは私ではなく主……………(プスリ)」

ヴィータ「シグナアアアアアアム！！くそ！！吹き矢だと！！
汚ねえぞ狸いいいいいい！！」

なのは「じゃあ二人仲良く……………ね？」

ヴィータ「ね？じゃねえ！！私達は誘われただけで……」

なのは「でも誘いには乗ったんだよね？」

ヴィータ「うん」

ヴィータ「……………あ」

なのは「（ニコ）」

ヴィータ「あ、あは……………」

なのは「スターライトブレイカー！！」

ヴィータ「しょうがねえだろこっちは命握られてるようなもんだ……………ぎゃあああああああ！！」

シゲナム、ヴィータ「……………（プスプス）」

なのは「まったく、何を考えてるのやら。さて、ルーク、私も一緒に……………その……………入ってもいいかな／＼」

ルーク「え？あ、ああ……………いいぞ……………／＼／＼」

なのは「えへへ／＼／＼」

はやて「くそ、今回は失敗かいな。しくじった。やっぱりポンコツ
フェイトちゃんをなのはちゃんの抑止役にするのは無理だったかい
な・・・・・・・・でも次こそは・・・・・・・・」

はやて「・・・・・・・・（チヨンチヨン）」

はやて「なんや、今は忙しいんや」

はやて「・・・・・・・・（チヨンチヨン）」

はやて「だからしつこいねん！！一体なんなん・・・・・・・・や・

「……………」

ヴィヴィオ「（ニコリ）」

はやて「ヴィ、ヴィヴィオ!?（あたふた）」

ヴィヴィオ「（ニコニコ）」

はやて「こ、これは違うんや!! 私やないんや!!」

ヴィヴィオ「うん。そうだね。はやてお姉ちゃんは悪くないよね。計画を立てただけだもんね」

はやて「そ、そうなんや。実行したわけじゃないんや。ただ提案しただけで……………」

ヴィヴィオ「（カチッ）」

はやて『ちなみに私は後から入る。それでミッションコンプリートや!!』（再生）

はやて「ボイスレコーダーやと!?!どこにそんなことする隙が……………しまったあ!?!」

ヴィヴィオ「ねえはやてお姉ちゃん。最近ベルが人を斬りたがってるんだ。正確にはフェイトお姉ちゃん、シグナムお姉ちゃん、ヴィータお姉ちゃん、はやてお姉ちゃんの四人なんだけど……………」

はやて「超ピンポイントで狙われてる!!」

ヴィヴィオ「覚悟は・・・・・・・・いいよね？」

はやて「くつ、こうなったら実力行使で！！・・・・・・・・あれ？」

ヴィヴィオ「（ニヤニヤ）」

はやて「な、なんで発動しないんや！！！」

ヴィヴィオ「はやてお姉ちゃん。『想い』の力は偉大なんだよ」

はやて「こんなところに本編のキーワード使うんかいな！？」

ヴィヴィオ「じゃあはやてお姉ちゃん、バイバイ。ベル、インブレイスエンド」

ベル『了解』

はやて「そんな晶術使えるん！？」

ヴィヴィオ「『想い』の力って便利だね」

はやて「なんでもかんでも『想い』の力にするんやない！！それはドラエ。ンとちゃうんや！！」

はやて「あ・・・・・・・・まずい・・・・・・・・凍ってきた・・・・・・・・」

ヴィヴィオ「はやてお姉ちゃん。助けて欲しい？」

はやて「助けて欲しい（真顔）」

ヴィヴィオ「本当に？」

はやて「本当に（真顔）」

ヴィヴィオ「心からそう願ってる？」

はやて「そう願ってる（真顔）」

ヴィヴィオ「んー・・・・・・・・・・なんかめんどくさいからいいや」

はやて「今の問答の意味は！？そして私の命はめんどくさいの一言で消えるんか！？」

ヴィヴィオ「じゃあ溶かしてあげるよ」

ベル『フランブレイブ！！』

はやて「精霊のオンパレードやあ！！」

ヴィヴィオ「そのまま殺戮のオンパレードやあ、に繋げて」

はやて「ちょ、そんな暇あらへん。これ、本当に死んでまう」

ヴィヴィオ「大丈夫、『想い』の力で生き返れるよ」

はやて「私には主人公補正なんかついてないんやあああああああ
あああああ！！」

はやて「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ヴィヴィオ「（ちよんちよん）」

ヴィヴィオ「ルークパパと一緒に風呂入っているのは私となのはママだけなんだよはやお姉ちゃん（高町家直伝黒い笑み）」

一カ月後

はやて「こ、今度こそルーク君を寝取るんや！！（ボロボロ）」

シグナム、フェイト、ヴィータ「」「本日づけで六課をやめさせて

頂きます!!」「」

おしまい。

番外編2：ヴィヴィ日記（前書き）

今回は番外編の二つ目です。20万pv記念に当たります。

今回は前回とは違って若干真面目です。

時系列はvividが始まる一年前です。

なんか。。。がなくないか？と思うかもしれませんが、気にしないでください。

それではどうぞ。

番外編2：ヴィヴィ日記

4月20日、晴れ

今日から、日記をつけていきます。名づけてヴィヴィ日記。
上手いかどうかは置いてこれからゆっくりと書いていこうと思います。

4月21日、曇り

最近は学校で出来た友達であるリオやコロナと帰るのが日課になりました。

二人ともとっても可愛くてとっても優しい女の子です。

そうパパに説明したら『ヴィヴィオも負けないくらい可愛いさ』と言ってくれました。

嬉しくてニコニコが止まらないです。

4月25日、晴れ

今日は学校帰りにミクトランさんのお墓に行きました。

リオとコロナには誰のお墓と聞かれましたが、大切な人のお墓と答えました。

二人が天国で笑っているように願っています。

5月12日、雨

少し日付が空いてしまいました。日記って難しいです。

ついこの前ルークパパがエクストラとしてD S A Aで戦いました。

所謂エキシビジョンマッチと言われる物です。

ルークパパに挑戦できるのはその年のD S A A世界チャンピオンの男女二名だけです。

英雄と言われているルークパパは強くて今年も勝利しました。

これで二年連続勝利です。いつか私もあの舞台に立ってルークパパと本気で戦いたいです。

5月30日、曇り

なのはママが新作料理を作ってくれました。家で勉強したみたいで
す。

とっても美味しかったです。私もママみたいに綺麗で家庭的なお母
さんになりたいな。

6月10日、晴れ

試験がありました。ちゃんと勉強して良い成績を取ったらルークパ
パが頭を撫でてくれました。

次回も頑張ります。ルークパパ大好き。

6月23日、晴れ

今日は学校が早く終わったので、帰ってみるとなのはママがソファ
ーに座って本を読んでいました。

遠くから見て、なのはママがとても綺麗に見えました。

その日はママの隣に座って一緒に本を読みました。

私にはちよつと難しかったけど、とても楽しかったです。

なのはママ大好き。

7月1日、雨

リオと喧嘩しちゃいました。原因はすごく単純なこと。謝ろうと思うけど、許してくれるかな？

パパとママに相談したところ、大丈夫だと言ってくれました。明日は頑張らなきゃ。

7月2日、晴れ

コロナに相談したら、笑われました。

後で分かったことですが、どうやらリオも同じことをコロナに相談していたようです。

謝ったら、こっちもごめんねとリオに言われました。前よりもっと仲良くなれた気がします。

7月18日、晴れ

明日から夏休み。宿題もいっぱい出来たけど、遊びも宿題も両方頑張ります。

7月23日、晴れ

今日は旅行帰り。19日から三人で旅行に行きました。様々な場所に行つてとっても楽しかったです。

8月の初めのほうには皆で海に行くことになりました。明日水着を買ってきます。

7月24日、曇り

なのはママと一緒に水着を買いに行きました。試着しましたが、なのはママはとっても綺麗です。

いつか私もママみたいになれるかな。
ちなみにママはこの水着でルークパパを悩殺すると言っていました。
いつまでたってもバカップルです。

8月3日、晴れ

今日は絶好の海日和です。でも集まったメンバーは六課の皆。
女の人だらけです。この中に何人ルークパパのことを狙ってる人が
居るのでしょうか。
なんだかもやもやしてきました。

8月15日、曇り

お盆ということで、ママの故郷の地球に帰省しました。
ママのお姉ちゃんやお母さんはとっても若くてビックリしました。
出会ったときからママがまったく変わってない理由が分かった気がします。

ちなみにパパは恭也さんや土郎さんと戦ってました。
でも勝っちゃうパパ凄い。カッコいい。
そのあと何かを見た気がします、覚えてません。
思い出しちゃ行けない気がして……あ、また頭が痛い。

8月29日、曇り

そろそろ夏休みも終わり。ルークパパに宿題は大丈夫かと言われま
したが、終わらせている私に死角はありません。
ご褒美に三人でまた街に出かけました。
またぬいぐるみをパパに取ってもらいました。
いくつ貰っても嬉しいです。部屋のベッドに置いときます。
帰り際にまたパパがああ青いぬいぐるみを気にしてました。

来る度に見てるけど何かあったのかな？

9月15日、晴れ

今日はなのはママが歌を歌ってくれました。

歌ってくれたのは大譜歌と呼ばれるもので、ルークパパの為に作った歌だそうです。

とっても綺麗な歌声でした。また聞きたいです。

9月30日、曇り

帰り道で誘拐されそうになりました。

急に車が目の前に止まって中から怖いおじさん達が出てきました。

コロナが怖がっていたので、前に出てベルを取り出しました。

それを見たおじさん達が、英雄の娘だ！といいながら逃げていきました。

相変わらずパパの力は凄いです。

帰った後にニユースでどこかの工場が爆発したと言っていました。

死人は居なかったらしいですが、中に居た人達が急に自首したそうです。

見てみると、帰りに会ったおじさん達でした。

帰ってきたルークパパはなぜか上機嫌でした。ベルも、ハロルドさんも上機嫌です。

なにかあったのかな？

10月4日、曇り

今日でルークパパとの修行も百回目らしいです。ベルが数えてくれてました。

時間が無いのに訓練する時間を作ってくれるルークパパが大好きで

す。

ルークパパはやっぱり強いです。いつか追いつける日が来るのかな。

10月21日、晴れ

帰りにDSA世界チャンピオンのジークリンデさんに会いました。ジークリンデさんは去年にチャンピオンになって、ルークパパと戦いました。

実力は申し分ないのに、決まった場所に住めるだけのお金が無いと言うことで、ルークパパがお金を出しています。

初めはジークリンデさんも渋っていたけど、条件として『毎年インターミドル世界代表戦で優勝して俺の前に来い』という条件を与えられ、引き受けたそうです。

ジークリンデさんも負けたことが悔しいようで、毎日特訓してるみたいです。

でも実はジークリンデさんはルークパパだけでなく私もライバル視してるみたいです。

それもこれもパパが最後に『俺の娘に負けるまでは、俺の前に来い』という条件を付けたからなんです。

お陰でハードルを上げられた気分です。

ですがジークリンデさんとはとても優しい人です。

色々お話をして、最後に戦いましたが、負けてしまいました。

やっぱり強いなあ。ジークリンデさんとの距離を、そしてルークパパとの距離を改めて感じました。

11月4日、曇り

今度は帰りにヴィクターさんに会いました。ヴィクターさんは古代ベルカの雷帝の血を少しだけ引いてるようです。

最初に会ったときは陰悪だった、というよりもヴィクターさんが急

に攻撃してきたのでびっくりしましたが、今では仲良しです。

最初に会った次の日には学校に来てわざわざ謝ってくれました。

でも私がベルをだすと青ざめて試合どころじゃなくなります。どうしたんだろう？

ということでヴィクターさんとの戦いの時は私は基本的に魔法を使います。

まあヴィクターさんの方が私よりも何倍も強いんですけど……

戦い終わった後に休日に一緒に遊びに行かないかという誘いを受けました。

ジークリンデさんも来るようです。パパとママに聞いてみることにします。

二人ならいいよと言いそうですが、一応確認はしなきゃダメです。ちなみにルークパパと言ったときにヴィクターさんが震えていました。

本当に何があっただろう？

11月11日、晴れ

今日は休日と言うことで前々から予定してたヴィクターさん、ジークリンデさんと街に買い物に行きました。

ヴィクターさんはお嬢様なはずなのに、様々な分野に精通しているようで、常に先陣を切っていました。

というかいつもの執事さんとかは居なくていいのかな？

そんなことを思ったので聞いてみたところ、問題ないといわれました。

考えてみればジークリンデさんにヴィクターさんが居るんだから怖いものなどありませんね。

そう言ったら二人に苦笑いされました。

一番怖いのはヴィヴィオちゃんのお父さんとお母さんなんよ、とジ

ークリンデさんが呟いていました。
ルークパパとなのはママがどうしたんでしょう？

帰りにジークリンデという名前が長いと言うことでジークさんと呼ぶことになりました。
益々二人と距離が縮まった気がします。今ではリオやコロナと同じくらい仲良しです。

11月30日、曇り

11月ももう終わり。外も本格的に寒くなってきました。
最近なのはママが編んでくれたマフラーに、パパが買ってくれた耳あてを着けるのが習慣です。

とっても暖かくて、二人が見守ってくれてる感じがします。
なのはママはまだ両腕が自在に動かせるわけではないみたいで、このマフラーを編むのにも時間が掛かっていました。

完成したマフラーを見て、ちょっと変な形になっちゃったね、ごめんね、と苦笑いしていましたが、私にとっては一番の宝物です。
ありがとうなのはママ。

そんななのはママになにか出来ることがないかなとルークパパに相談してみたところ、料理という案が出ました。

なのはママは料理をしますが、両腕が少し不自由なため、準備が結構大変みたいです。

そのためよくパパも料理をします。なのはママの料理もルークパパの料理も同じくらい好きです。

今日から一週間くらいは料理の勉強です。頑張ります。

12月10日、雪

ちょっと時間が掛かったけど、今日は料理の披露日です。

なのはママにはまだ何を作るか言っていないので、ニコニコしながらテーブルで待ってます。

そして、ちよっと多いくらいの夕飯を作ってテーブルに並べました。それを私、ルークパパ、なのはママの三人で一緒に食べました。

ママが疲れたときは、私が料理するからね。

私の言葉に、なのはママは涙を流しました。訳が分からずルークパパを見ると、パパは微笑んで私の頭を撫でました。

どうやらママは嬉しくて泣いているようです。

気づいたら私はママにぎゅっと抱きしめられていました。

部屋の中は寒いくらいなのに、なぜだかなのはママがとっても暖かいように思えました。

来年もまた三人でこんな幸せな時間を過ごしたいです。

12月17日、曇り

今日は事件がありました。なのはママと二人で買い物に行ったのですが、その帰りにひったくりにあってしまいました。

後ろから猛スピードで来た自転車にママの持つバッグが取られてしまいました。

慌てて追いかけようとしたが、ひったくり犯はもの凄いスピードで遠ざかっていきます。

まずい、逃がす。そう思ったとき、地面に膝をついていたママが右手をゆつくりと自転車に向きました。

そしてそれに呼応するように掌から桃色の閃光が飛び出しました。

そしてそれは自転車に命中し、何故だか分かりませんが、壁や空から沢山の桃色の閃光がひったくり犯を襲いました。

こうしてバッグは取り返しました。ですが私は疑問に思ったことがあります。

なのはママは本当に前より弱くなってるのかなあ？

12月24日、雪

クリスマスイヴの今日は雪が降っています。明日も降るそうなのでホワイトクリスマスになりそうです。

庭一面が真っ白に染まってとても神秘的でした。

今日はお家でクリスマス会です。パパとママからはプレゼントを貰いました。

クリスマスにはサンタクロースという人がプレゼントを届けに来るそうです。

それは元々ママの世界での行事らしいですが、我が高町家は地球行事を参考に行っているの、毎年サンタクロースがやってきます。

実を言うと私はサンタさんの正体を知ってますが、今日も寝た振りをすると思います。

眠るのはサンタさんがプレゼントを置いて頬にキスしてくれた後です。

大好きだよ、ルークパパ、なのはママ。

12月27日、晴れ

なんということでしょう。ついにこの日記がルークパパとなのはママにばれてしまいました。

私の赤裸々な過去が明かされてしまいました。恥ずかしさで死にそうです・・・・・・・・・・

ですが日記を見ているうちに二人は幸せそうな顔になりました。

恥ずかしいので日記は今年で終わりにします。

二人は残念そうにしましたが、そう決めました。

でもちょっとなら書いてもいいかも・・・・・・・・・・（消された跡がある）

12月31日、曇り

今年も残すところ僅かとなりました。

思い返せば今年は様々なことがありました。

変わったこともあれば、変わらなかったこともある。

でもパパとママのラブラブさは何年経っても変わりません。

むしろ加速している気がします。偶に抑えて欲しいなあと思います
が、二人が仲良しだと私も嬉しい気持ちになります。

来年からD S A Aに参加できるようにします。

頑張っていい成績を残したいです。出来ればルークパパと戦いたい
です。

でも時間はまだまだあります。ルークパパはいつまでも待つてると
言ってくれたので、ゆっくりと、そして確実に強くなっていきたい
です。

0時まで起きているのは中々ないことなので、もう眠いです。

二人は今はソファーに座ってテレビを見ています。その姿はまるで
新婚のように微笑ましいです。

願わくば、この幸せがいつまでも続きますように。おやすみ、パパ、
ママ。

p / s

夜中、時折ルークパパとなのはママの部屋から大きな声やベッドが
軋む音が聞こえます。
なんなんだろう？

この日記を見たなのはが真っ赤になったことを想像するのは容易い
だろう。

番外編3：はやて「人気者になりたいんや!」

なのは「生まれ変わるしかた

さてさて、これが番外編ラストになります。

これを見る際の約束です。この話は三話構成ですが、これを見る間は常識を捨ててください。

この三話では非常識が常識です。

批判等は一切受け付けませんので見る方は自己責任でお願いします
ねww

相変わらずSS形式です。それではどうぞ。

番外編3：はやて「人気者になりたいんや!!」

なのは「生まれ変わるしかた

はやて「人気者になりたいんや!!」

なのは「いや、六課の食堂に連れてこられて急にそんなこと言われ
ても……………」

はやて「考えてみい!!なのはちゃんは魔力を失い、魔導士生命が
断たれた今でもなのはさんなのはさんって尊敬されてるやないか!
!フェイトちゃんもエリオとキヤロからしたら実のお母さんや!!
尊敬されるに決まっとるやろ!!」

なのは「まあ、そうだろうね。魔力が半分しか使えないのに私の言
葉に耳を傾けてくれる皆は本当にいい子達だよ」

はやて「うんうん。そりゃそうや、皆良い子や。って違う!!私!
!私はなんやねん!!」

なのは「部隊長?」

はやて「そや!!所詮私は部隊長、つまり上司の括りなんや!!全
然フォワードに尊敬されてないやんか!!」

なのは「そんなことないと思うけど……………」

はやて「うるさい!!私がある言ったらあるんや!!」

なのは「めんどくさいなあ……だからはやてちゃんは
今頃読者の方々に『またはやてが問題を起こしたのか』って思われ
ちゃうんだよ」

はやて「ちょー！それどういうことやー！」

なのは「まあそんな話は置いて」

はやて「ええ！？めっちゃ気になるんやけどー！」

なのは「うるさいよはやてちゃん。公害で訴えるよ」

はやて「扱いが酷いんちゃう！？」

なのは「ちゃうちゃうww」

はやて「うざー！めっちゃうざー！」

なのは「あはは、はやてちゃんマジ紙ww右に出る者多数だわww」

はやて「極端やなー！そしてけなしてるやんー！」

なのは「さて、無駄な時間はこら辺にして本題に入るつか」

はやて「私が馬鹿にされた時間は無駄な時間なんやね……………」
「……………」

なのは「うん、やっぱりあれだよ。生まれ変わるしかない」

はやて「いきなり放棄!？」

なのは「放棄じゃないよ。ちゃんと解決策出してるじゃない」

はやて「めっちゃ難易度高いけどな!！」

なのは「案出したからこのスイーツーつね」

はやて「あんな簡単な案で金取るん!？」

なのは「世の中はそんなに甘くないんだよ、はやてちゃん」

なのは「いや、でもさ、ぶっちゃけ生まれ変わるしかないと思うんだ（モグモグ）」

はやて「それ奢って貰った本人の前でスイーツ類張りながら言うことじゃないと思うんやけど……………」

なのは「だってもう私にはそれしか案が……………」

はやて「引き出し少ないな！！で、でもあれやん。生まれ変わるとか言って死んだら私やったら本当に死んだまま生き返らんやんww」

なのは「あははwwそれ言えてるねww」

はやて「ちょー！！冗談やから！！否定してなあ！！」

なのは「え？冗談？」

はやて「なんやその意外そうな顔は！！」

なのは「ご、ごめんねはやてちゃん、冗談に突っ込めなくて」

はやて「謝らんとして、その謝罪が今は凄く痛い！！」

なのは「でもしょうがないよ。はやてちゃん訓練に参加してないもん」

はやて「急に真面目になったな・・・・・・・・まあ教えられるのはキャラぐらいやしな・・・・・・・・」

なのは「それにはやてちゃんにも居るじゃない。シグナムさん達が」

はやて「あんな大きな子供がいてたまるかいな！！むしろ頼られたくないわ！！」

なのは「うわー、めんどくさいなあ・・・・・・・・・・」

はやて「なあなのはちゃん！？私ら親友やよね！？私何回もなのは

ちゃんの危機救ったよね!？」

なのは「まあぶっちゃけ作者さん方に感想で『ルークって地味にはやてのこと嫌ってるよね』って言われてるけどね」

はやて「ああ痛い!!痛いなあ!!めっちゃ痛い!!」

なのは「大丈夫、葬式には出てあげるよ」

はやて「なあそれはボケなん!?マジで言ってるん!?どつちなん!？」

なのは「保険金はちゃんと受け取ってヴィヴィオの教育費に当てるね。あ、でも自殺は保険金下りないんだっけ。じゃあ事故で……
………(チラ)」

はやて「なんなんその視線!?どれだけ扱いが酷いんや!!」

なのは「まあルークが私達の為に働いて稼いでくれたお金があるから要らないけどね」

はやて「命のお金まで蔑ろにされる私可哀想!!」

なのは「かわいそ　かわいそ　なのです!!」

はやて「うざっ!!」

なのは「驚きのうざさ!？」

はやて「うざっ!」や!!間違えたらアカン!!」

なのは「はいはい、めんどくさい」

はやて「軽く流された!？」

なのは「えー、てゆーか、マジめんどくさいしいーww」

はやて「いや、その年でその口調はどうなん？」

なのは「大丈夫。はやてちゃんよりは若いって自覚してるから♪」

はやて「同じ歳なんやけど!？」

なのは「やだなあ、はやてちゃん冗談が上手いね」

はやて「大真面目やあ!！」

なのは「さてと、人気者になる方法ねえ……………」

なのは「……………小学生か(プププ)」

はやて「今めっちゃなのはちゃんをクビにしたい……………」
「……………」

なのは「次の目標は『友達100人作る』でちゆかあ？」

はやて「今までこれほどまで腹が立ったことがあっただろうか、いや無い(反語)」

なのは「無駄な知識の疲労乙ww」

はやて「・・・・・・・・・・なあ真面目に考えてくれへん？」

なのは「もっとフォワードの皆と接する時間を増やせばいいんじゃないかな？」

はやて「なるほど（メモメモ）」

なのは「いや、メモするほどのことでもない気がするんだけど・・・・・・・・」

はやて「一円に泣くものは一円に笑うんや」

なのは「いやなんで今それ使ったの？そして間違ってるからね」

はやて「せやけどこれはただの夢や」

なのは「なんでもそれで許されると思わないことだね。脳内ワンダ
ー女」

はやて「わお、酷い言い方やあ。でもそれじゃあ仲良くなれるだけ
や。」

なのは「それじゃダメなの？」

はやて「ダメダメや。私はその先に行きたいんや。挑戦することす
ら馬鹿馬鹿しく思えるそんな無敵の領域に」

なのは「一方通。乙ww」

はやて「正確には小学校のクラスの人気者になりたいんや。皆から尊敬されるそんな人になりたいんや」

なのは「皆から尊敬されるのはいいけどその前で台無しだね」

はやて「どうすればいいんや!？」

なのは「小学校だけとは言わないけど、やっぱり皆の中心にいる人がそういう位置だよな」

はやて「皆の中心」

なのは「そしてそういう子って性格が良くて、勉強ができて、運動も出来る、そして気配りが出来るよね」

はやて「なるほど」

なのは「まあはやてちゃんはそもそも人間じゃないから無理だね」

はやて「どういうことやあ!?!」

なのは「ロストログアは人間の範囲に入りません」

はやて「言い返せない自分が辛い!?!」

なのは「ということではやてちゃんが一番にやるべきは生まれ変わることだね」

はやて「全てはそこに直結してる!?!」

なのは「はやてちゃん・・・・・・・・貴女の事は忘れない
!!!!」

はやて「なんでそんなニヤニヤしてるんや!？」

なのは「これはこれは失礼しますたww」

はやて「アカン、話が進まん・・・・・・・・誰か居ないんか？
他に良い案を出してくれそうな人は・・・・・・・・」

なのは「あ、それなら一人いるよ。呼ぼうか？」

はやて「・・・・・・・・なのはちゃんの紹介なのが
怪しいけど、まあええわ。頼むで」

なのは「了解」

ハロルド「で、私をこんなところに呼んで何の用なのかしら？」

なのは「呼んだ」

はやて「」

はやて「な、なんでハロルドさんが人の形をしてるんやあああああ
あああああああ！！」

次回へ続く!!

はやて「人気者になりたいんや!!」　ハロルド「生まれ変わるしかないわね」

はやて「な、ななな、なんでハロルドさんがここに居るん!?　しかも人の形で!!」

ハロルド「女の勘はカオス理論さえ超えるのよ」

はやて「関係ないよねえ!？」

なのは「あはは、はやてちゃん存在と同じくらいどうでもいいね」

はやて「ちょ、どういうこと!?!　詳しく説明してくれへん!？」

なのは「ヴィヴィオ、ルーク、ハロルドさん>>>越えられない壁>>>六課メンバー>>>越えられない壁>>>消しゴム>>>越えられない壁>>>ガジェット>>>越えられない壁>>>スカリエッティ、はやてちゃんだよ」

はやて「めっちゃ下!!　ガジェットよりも下!!　しかもあの変態博士と同列!!」

ハロルド「妥当なラインね。はなまるあげちゃうわ」

はやて「小学生か!!」

なのは「わーい!!」

はやて「小学生か!!」

ハロルド「うるさいわよ。だから狸とか言われるのよ」

はやて「関係ないよねえ!」

なのは「ダメだよハロルドさん。どれだけ頑張ってもはやてちゃんは狸なんだから」

はやて「なあ!!アンタら私の相談に乗る気ある!」

なのは、ハロルド「ないないww」

はやて「やっぱりなのはちゃんにメンバー連れてくるの頼むんじゃない!」

ハロルド「さて、それじゃあはやての相談に乗りましょうか」

はやて「クソ、いいところで真面目になるのは反則や!!」

ハロルド「……人気者になりたいとかいう小学生みたいな相談ね(プププ)」

はやて「まったく同じ反応かいな」

ハロルド「うーん。やっぱり生まれ変わるのが先決ね」

はやて「そこまで同じかいな!!」

なのは「だってそうしないと」

ハロルド「次の案が出せないもの」

はやて「私って一体なんなん!? ねえ、なんなん!?」

なのは、ハロルド「はやて（笑）」

はやて「なんなんやあああああああああ!」

ハロルド「さてと、じゃあ真剣に考えますか。ってかアンタ聡明キヤラなんだからその路線を貫きなさいよ」

はやて「いや、そんなん何の役にもたたんやろ」

ハロルド「黒キャラとして確立するとか」

はやて「それ恐れられるだけやよね」

なのは「そしてはやてちゃんは今自分が作った機動六課にやられるんだね。強く………なったなんて言って」

はやて「結局私が死ぬフラグ!」

ハロルド「やったじゃない。これで生まれ変わりも出来るわ」

はやて「どんだけ私を殺したいんや!」

ハロルド「ハンバーガー三つ分くらい」

はやて「基準が分からん！！」

ハロルド「でも面倒見がいいのは大事よね。ルークも面倒見がいいからあそこまで人気があるわけだし」

なのは「その点ははやてちゃんは接点がそもそも無いし、しかもティアナ殴ってるからね」

ハロルド「あ、もう無理ねww生まれ変わるしかないわww」

はやて「なんでアンタらはすぐにそこに持ってくんやあ！！」

ハロルド「じゃあちよつと行ってきなさいよ。ティアナと触れ合って来なさいよ」

はやて「・・・・・・・・・・行ってくる」

はやて「ティアナあゝ！」

ティアナ「はやて部隊長？どうかしましたか？」

はやて「いや、訓練の後暇かな思ってな」

ティアナ「暇ですけど」

はやて「それなら街に遊びに行こうか」

ティアナ「いえ、お断りします」

はやて「なんでやあああああああああああああ！！」

はやて「なんでや！！何が悪いんや！！」

なのは「正直殴ったティアナに急に街に行こうなんていったら遠慮するよね」

ハロルド「多分街に言ったら奢らされるとでも思ったのね。可哀想に」

はやて「私そんなキャラやないと思うのに……………」

なのは「キャロとエリオは誘ったらフェイトちゃんに殺されるね。子供を護る親の力で」

はやて「私是不審者かいな!!」

ハロルド「猥褻物陳列罪で捕まるわよ」

はやて「捕まらんわ!!」

なのは、ハロルド「「え?」」

はやて「なんやその視線は!!意外そうで悪かったな!!」

なのは、ハロルド「「被害妄想乙ww」」

はやて「ムキイイイイイイイイイ!!」

なのは「なんか居るよね。そういう風にハンカチをかみ締める人ww」

ハロルド「劇とかに出てくる見苦しいお嬢様とかそんな感じよね」

はやて「部隊長権限で二人をくびにしたい!!」

なのは「そうするとフェイトちゃん、ルークが抜けるね」

ハロルド「大打撃ね」

はやて「無理ってことは分かってるけど言いたかったんや……」

「……」

なのは「ねえはやてちゃん、見にくい。モニター見えない」

はやて「え？ああ、ごめんな」

ハロルド「はやて、邪魔よ。見にくいわ」

はやて「……いや、そこからモニター見えるやろ？」

なのは、ハロルド「はやて（ちゃん）、醜い（わ）」

はやて「今明らかに文字が変わった！！変わったよ！！」

なのは「ならuglyのほう良かった？」

はやて「もうそれ確実に『醜い』やん！！」

ハロルド「あらあらあ、そんな頭があつたんでちゆねえー」

はやて「ウザっ！！」

なのは「さて、それじゃアティアナが駄目だったから……」

ハロルド「スバル？」

はやて「よし、ほな行つて……」

なのは、ハロルド「待った!!」

はやて「ちょ、く、苦しい……………首掴まんといて……………」

なのは「このままスバルのところに行っても無駄だよ」

ハロルド「そうよ。不審者で捕まるだけね」

はやて「ちょ、どういうことやあ!!」

なのは「はやてちゃん落ち着いて、まずは素数を数えるんだよ」

はやて「1……………あれ?1つて素数やつけ?」

なのは「さて、それじゃあはやてちゃんを改造しようか」

はやて「私は機械やないんやけど!?!」

ハロルド「うーん、何か模範となる人物が必要よね」

はやて「皆に慕われてる人物って言うと、フェイトちゃんやルーク君かな?」

なのは「ルークはダメだよ」

はやて「なんやなのはちゃん、嫉妬かいな?可愛いな」

なのは「旦那を護るのも妻の役目」

はやて「ま、護る？」

なのは「ルークを犯罪者の仲間入りさせるわけにはいかないの」

はやて「ちょ、だから私は犯罪者じゃないって!!」

なのは「え？」

ハロルド「え？」

はやて「なんなんその意外そうな顔は!？」

なのは「やだなあはやてちゃん。冗談は頭のとっぺんから足の爪先までにしてよ」

はやて「それ全身が冗談!!」

ハロルド「そう、はやては全身冗談だったのね」

はやて「ちょ、なんかあらぬ誤解が広がってる!？」

ハロルド「自身が偽物だと知ったはやては旅に出たのね、本当の自分を知らするために」

ハロルド「でもその途中ではやては本物に会ってしまった。そしてボロボロにされたのよ」

ハロルド「そして彼女は決心したわ。人気者になってやるって」

はやて「そうだいなストーリーなのに最後の決心軽!!」

なのは「うう、はやてちゃん悲しすぎるよ……………」
「……………」

はやて「え？なんで今の話でなのはちゃんは泣いてるん！？」

なのは「道端で蟻に押し潰されて死ぬなんて……………」
「……………」

はやて「もう完全にカオス！！しかもなんか私死んでるし！！」

なのは「はやてちゃん……………貴女のことは……………」
「……………忘れない！！」

ハロルド「次の日には部隊長が変わって高笑いするなのはの姿が」
なのは「ケラケラケラｗｗ新しい部隊長マジ神ｗｗはやてちゃんの
300倍マシだわｗｗ」

はやて「余りにも報われない私！！」

ハロルド「ってことでフェイトに聞きに行きなさい」

はやて「急に話題が変わって怒るタイミングを逃した私！！」

はやて「なあなあフェイトちゃん」

フェイト「ん？はやてどうしたの？」

はやて「相談があるんや。聞いてくれへんか？」

フェイト「相談？いいよ」

はやて説明中

フェイト「なるほど、確かにはやてはフォワードと接する時間が無いからあんまり頼りにされないよね。それに部隊長だから遠慮されちゃうと思うし。でもなのは言うことには一理あるかな。私とル

ーク、模範となる人として挙げられた人がどんな人か分かる？」

はやて「え？うーん、急に言われてもなあ。優しいところとかかなあ？」

フェイト「まあそれはそれで嬉しいことだけど、優しいだけじゃ人は着いていかないよ。ルークを考えてみて。ルークは最高の頭脳を持つハロルドを持ってる」

はやて「今はなんでか分からんけど人の形を取ってるけどな」

フェイト「それに何よりルークは強い。戦闘になれば負けないし、大切な者、悔しいけど、なのはやヴィヴィオの為に強くあれる。そんなルークを目標にするのは当たり前だよ。自分で言うのも何だけど、私にもそういうところがあるんじゃないかな？」

はやて「なるほど……………」

フェイト「はやては頭がいいから、強さと精神を兼ね備えれば良いと思うよ」

はやて「なるほど。ありがとう」

フェイト「ううん、大丈夫だよ」

フェイト「……………」

フェイト「本当は別の答えがあるんだけど、それは自分で見付けてね」

はやて「ということで強くなりたいんや!」

なのは「なんか急に熱血になったなあ……」

ハロルド「めんどくさいわね。で、どんな強さが欲しいのよ?」

はやて「私魔法は強いじゃん?だから動きながら魔法撃てるみたいに

なりたいねん。だからなのはちゃん、ルーク君に頼んでくれへん？」

なのは「却下」

はやて「な、なんでやー!」

なのは「ルークはダメ。代わりに他の人を呼んであげるよ」

はやて「なのはちゃんが呼ぶ人ってまったく期待出来ないんやけど・
・・・・・」

なのは「まあまあ、取り敢えず呼ぶね」

ミクトラン「至高の天上王たる私に相談とはなんだ？足枷よ」

なのは「呼んだ」

ハロルド「また濃い奴が来たわね」

はやて「」

次回へ続く！！

はやて「人気者になりたいんや!」 ミクトラン「生まれ変わるしかないな」

ミクトラン「という訳で態々私が来てやったのだ。感謝しろ足枷」

はやて「な・・・・・・・・・・・・・・・・え?ええ!?なんでミクトランがここに居るんやあ!?!」

なのは「呼んだ」

はやて「そんな簡単に本編のラスボス呼んでええんか!?!」

ハロルド「久しぶりねミクトラン」

ミクトラン「ふむ、一週間ぶりくらいか」

はやて「ってかめっちゃ親しいし!?しかも一週間って数字が妙にリアル!」

ミクトラン「本編が完結する前に戦ったのが最後か」

はやて「メタ発言は自重しい!!ってかよく来たなミクトラン!?!」

ミクトラン「協力しなかったらこの足か・・・・げふんげふん、高町なのはの旦那に何されるか分かったものではないからな」

はやて「ラスボス弱！！本編最強なのに弱すぎる！！つかげふんげふんとかそんなキャラやないやろ！？」

ミクトラン「仕方ないであろう。なんだ分解とは。卑怯ではないか。どうやって倒せというのだ！！」

なのは「さてさて、それでミクトランさん、はやてちゃんを強くしたいって話なんだけど……………」

ミクトラン「高町なのはよ、それをするにはこの足枷がなくてはならないことがある」

はやて「物凄く嫌な予感が……………」

ミクトラン「生まれ変わるしかない」

はやて「ほらねえ！！やつぱり来ましたよ生まれ変わり！！やつぱアンタもかい！！」

ミクトラン「正直この足枷を成長させる気が起きない。せめて天上人に相応しくなってからだ。お前はと思う？ハロルド・ベルセリオスよ」

ハロルド「え？はやてが地上軍？バルバトス以上に要らないわねw」

はやて「バルバトスって人を知らんけどハロルドさんの反応を見る限りろくな人じゃないよね！？」

ハロルド「地上軍を裏切った奴よ」

はやて「裏切って敵対した奴よりダメなん!？」

なのは「デフォルト、デフォルトww」

はやて「何がデフォルトやあ!？」

ミクトラン「だから生まれ変わるしかない（キリ）」

はやて「私の中のミクトランのイメージが物凄い勢いで崩壊していきくんやけど!?!? つかなんやそのどや顔!?!」

ミクトラン「> (、´) < エヘン」

はやて「めっさ腹立つ!?!」

ミクトラン「なら貴様ごときに出来るのか? 移動しながら晶術を使う? はっ!?!」

なのは、ハロルド「はっ!?!」

はやて「皆して鼻で笑いおった!?!」

ミクトラン「第一貴様なんぞ接近戦に持ち込めば瞬殺だろう? 私やルーク・フォン・ファブレからしたら雑魚でしかない。テラワロスww」

はやて「だからなんなん!?! その急に話し方が変わるの!?!」

ハロルド「それがミクトランクオリティ」

なのは「略してルーク大好き」

はやて「最早何も略してない！！それなのはちゃんと言いたいだけ！！」

なのは「この世界はルークへの愛で満ちている」

はやて「それはなのはちゃんだけの世界です。本当にありがとうございまして！！」

ハロルド「この世界はヴィヴィオとなのはへの愛で満ちてるわ」

はやて「それはルーク君と、ある意味では作者やろ！？なんなん番外編1のフェイトちゃん苛めに、この話の私苛め！？」

ミクトラン「世界はこの足枷への殺気で満ちている」

はやて「そんな世界嫌や！！」

なのは「やだなあミクトランさん。そんなの周知の事実だよ」

はやて「周知の事実！？」

ハロルド「常識ね」

はやて「そんな馬鹿な！！」

ミクトラン「あはは、そうだね、メンゴメンゴww」

はやて「最早キャラ崩壊!!」

なのは「ふふ、本当ミクトランさんったら冗談が上手いんだから」

ハロルド「ミクトランギャグ炸裂ね。全米が笑うわ」

ミクトラン「だろ？ww」

はやて「カオス過ぎる!!」

なのは「そしていつの間にかミクトランさんの銅像がミッド中に」

はやて「嫌過ぎる!!」

ハロルド「そしてミクトランは人々の心に刻まれるのよ。二日間に渡ってね」

はやて「二日間!?そんなに短いんか!？」

ミクトラン「俺様人気者キタww」

はやて「いやいや、全然人気者ちゃうから!!」

ミクトラン「なん………だど!？」

はやて「今のやり取りの中で人気者だと思ってたんか!?アホやろお前!？」

ミクトラン「な、ななな、何のことやら」

はやて「どんだけもってんねんお前」

ミクトラン「貴様、至高の天上王（笑）に向かってなんということ
を！！」

はやて「自分で天上王（笑）と言っちゃうん！？それはアカンや
ろ！！」

ミクトラン「正直良い年こいて何言ってるだと思っている」

なのは「あのネーミングセンスはないよ」

ハロルド「ないない」

なのは、ハロルド「「ネーww」」

はやて「ウザー！！こいつらめっちゃ仲いいけどその代わりめっちゃ
ウザー！！」

なのは「いやだなあ、はやてちゃんには負けるよ」

ハロルド「そうそう、うざさではやての右に出る奴なんか居ないわ
よ」

はやて「どういうことかしっかりと説明してくれへんかな！？」

なのは、ハロルド「「だが断る！！」」

はやて「うがああああああああああああ！！」

なのは「野生のはやてが現れた!!」

ハロルド「はやては仲間になりたそうに此方を見つめている!!」

ミクトラン「仲間にしますか？」

なのは、ハロルド、ミクトラン「「いいえ!!」」「」

はやて「あんたらわああああああああ!!」

ミクトラン「無理だろう。もう無理だ。無理すぎる」

はやて「何が!？」

ミクトラン「はっきりと告げてやろう。貴様はこの六課で人気者に
などなれない」

はやて「・・・・・・・・・・・・・・・・またはっきりと言いおつた
な・・・・・・・・」

なのは「ダメだよミクトランさん!!本当のこと言ったら!!」

ハロルド「そうよ!!可哀想だわ!!」

はやて「どういふことかちよつと説明してもらおうか!？」

ミクトラン「え?そうだよ。いやー、僕ちんまたミスっちゃった
よww」

はやて「キャラ崩壊が激しすぎる!!」

なのは「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ、はやてちゃんって案外馬鹿なんだね」

はやて「ええ！？」

ハロルド「ここまで言ってるのに分からないなんて」

はやて「え？な、なんで皆急にため息なんてつくん！？」

ミクトラン「やはり機動六課で私の敵となれたのはルーク・フォン・ファブレと高町なのはだけだったか。部隊長というからどれ程のものかと思っただが、くだらん」

はやて「ええ・・・・・・・・・・なんなんこの私が悪い雰囲気・・・・・・・・・・」

なのは「はやてちゃん。ルークに聞きにいきなよ」

はやて「え？」

なのは「ルークなら教えてくれるかもよ」

はやて「で、でもいいん？」

なのは「いいから早く行って。その顔が醜すぎて見るに耐えない」

はやて「そっちが本音か！！言われんでも出て行くわ！！」（スタスタ）

ミクトラン」・・・・・・・・・・・・・・・・よかつたのか高町なのは。あんな言い方をして」

ハロルド「そうよ。いくらなんでも酷すぎるわよ?」

なのは「・・・・・・・・・・・・・・・・しょうがないよ。はやてちゃんはずいいてないんだから」

はやて「まったく。あそこまで言わなくてもいいやないか。あ、居た居たルーク君!」

ルーク「ん?どうしたんだはやて?」

はやて「ちよつと教えて欲しいことがあつてな」

(はやて説明中)

はやて「つてことなんや。いくらなんでも酷くないか?」

ルーク「・・・・・・・・・・・・・・・・」

はやて「ルーク君」

ルーク「はやてには悪いけど、俺もそう思つよ」

はやて「な!」

ルーク「だってそうだろ?これ以上皆からの人気を集める手段がないのに、人気になれるわけなんて無い。人気者が人気者になるために努力する必要なんてないだろ?」

はやて「な、なにを言つてるんや?」

ルーク「はやては人気者になりたいって言った。そのために強くなりたいって言った。でもはやては十分強いじゃないか。確かに俺やミクトランとの相性は最悪だ。だけど、はやてには強力な魔法がある。その魔法で今までも、そしてこれから六課の皆を助けに行くんじゃないのか?」

はやて「・・・・・・・・・・・・・・・・」

ルーク「はやて、確かに俺は強い。ミクトランだって強い。でも一人じゃ何も出来ない。そのことを忘れて、しかも今のはやてのすべを否定して強くなる必要なんて無いんじゃないかな？それに、そんなことしなくても俺も、なのは達も、フォワード達だってはやてのことを信頼しているよ。はやてが気に病むことなんて無いんだ」

はやて「それじゃああの三人があそこまで生まれ変わるしかないって言ったのは・・・・・・・・・・」

ルーク「そんなことをする必要なんかないからだ。まあ多少言いすぎな気もするけどな」

はやて「なるほど」

ルーク「でもちよつとはやてをからかい過ぎだな。やり過ぎだって言うておくよ」

はやて「いや、いいんよ。私が悪いんや。そんなことにも気づかなかった私が」

ルーク「はやて・・・・・・・・・・・・・・・・」

はやて「私は・・・・・・・・・・愚か者やな・・・・・・・・・・」

ルーク「そんなことないさ。それに例え愚かでも、それに気づかせてくれた人が居る。それでいいじゃないか」

はやて「・・・・・・・・・・そうやな。」「めんな、時間とらせて」

ルーク「気にするな。それじゃあ俺は行くな（スタスタ）」

はやて「・・・・・・・・・・」

はやて「・・・・・・・・・・でも、それ以上に幸せものやな・・・・・・・・・・」

F i n

はやて「人気者になりたいんやー!」 ミクトラン「生まれ変わるしかないな」

以上で「魔法少女リリカルなのはStrikers」異端の焰達」
は完結となります。

ここまで、見てくださってありがとうございました!!

次回作はルシフェルさん、ムーギネーターさんなど様々な作者様方の要望により私の活動報告で連載していた一次創作である「電器少女リリカルパソ娘」を小説化していきたいと思えます。

名前は「電子が満ちる白氷の世界で」というタイトルになる筈です。

大体の方が間違えそうなので言っておきますが次回作はなのはとはまったく関係の無い話です。

それでも見てくださると幸いです。

それでは次回作でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3890v/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS～異端の焰達～

2011年11月5日12時20分発行